
坂 戸 市

木 曾 免 遺 跡

一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う川越坂戸地区
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 8

国土交通省 関東地方整備局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 調査区全景



1 調査区遠景（南東から）



2 調査区遠景（東から）



1 遺跡東側に望む荒川低地



2 遺物包含層中央トレンチ土層断面



3 遺物包含層中央トレンチ土層断面（第42号溝跡付近）



4 遺物包含層中央トレンチ土層断面（東側）



1 第42号溝跡（弥生環濠）全景



2 第42号溝跡（弥生環濠）溝内



1 第42号溝跡出土土器



2 第42号溝跡遺物出土状況



3 第42号溝跡遺物出土状況



4 第42号溝跡遺物出土状況



5 第42号溝跡遺物出土状況



1 第4号方形周溝墓全景



2 第4号方形周溝墓遺物出土狀況



1 第4号方形周溝墓出土遺物



2 第12号住居跡出土遺物

木曾免遺跡の紹介

木曾免遺跡は、東西に長い坂戸市の東端にあり、東武東上線北坂戸駅の東約4.6kmのところに位置しています。そこは、入間台地の東端にも当たり、眼下に広がる荒川低地を東側に望むことができます。

木曾免遺跡の発掘調査で、旧石器時代から中・近世の時代まで断続的にヒトが暮らしていたことがわかりました。その中でも、弥生時代中期（約2000年前）の「ムラ」では、竪穴住居跡11軒をはじめとして、有力者が葬られた方形周溝墓や子供が埋葬された土器棺墓などが発見されました。また、「環濠」と呼ばれる「ムラ」を囲む深い堀も見つかっています。「環濠」からは、捨てられた壺や甕などの生活用具が数多く出土しています。今回の調査では、環濠集落のほぼ全域を把握できました。弥生時代の生活を考えるうえで、貴重な発見となりました。

序

埼玉県は、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念とし、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策を進めております。

国土交通省による一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の新設事業もその施策の一つとして位置づけられています。首都圏を放射状に貫く各高速自動車道だけでなく、各中核都市を横に連絡することにより渋滞を解消し、高度化する産業活動の円滑化を図り、均衡ある発展につなげるための事業です。

川越・坂戸両市にかかる圏央道の路線内には、旧石器時代から始まる先人の生活跡が数箇所に残されていました。これら埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず記録保存の処置を講じることとなりました。

発掘調査は、国土交通省関東地方整備局の委託を受けて当事業団が実施いたしました。本報告書はこれらの遺跡のうち、平成17年度に調査した坂戸市木曾免遺跡の報告であります。

調査では、旧石器時代から中・近世に至る各時期の遺構が検出され、多数の遺物が発見されました。特に、弥生時代中期後半には集落のまわりを深い堀で囲んだ「環濠集落」をつくったことがわかりました。また、環濠からは弥生土器が数多く出土し、地域の歴史を語るうえでも貴重な発見となりました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、坂戸市教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 刈部 博

例言

1. 本書は、埼玉県坂戸市に所在する木曾免遺跡第5次調査の発掘調査報告書である。

木曾免遺跡の成果については、すでにいくつかの誌上で一部が公表されている（宅間2006、黒坂・宅間2007）が、本書が正式報告となる。

2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

木曾免遺跡（略号：KSMN）

（第5次）

埼玉県坂戸市大字小沼1367-3番地他

平成17年4月20日付け 教生文第2-5号

3. 発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う川越坂戸地区埋蔵文化財の記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 本事業は、第I章第3節の組織により実施した。本事業の発掘調査については、平成17年4月8日から平成18年1月31日まで実施し、黒坂禎二・上野真由美・宅間清公が担当し、青木沙由理の補助を得た。

また、整理報告書作成事業は平成19年4月9日から平成20年3月24日まで篠田泰輔が担当して実施し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集として印刷・刊行した。

5. 遺跡の基準点測量及び航空写真撮影は、株式

会社東京航業研究所に委託した。また、巻頭図版の遺物集合写真および展開写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

6. 掲載した遺構写真は調査担当者と青木が、遺物写真は篠田が撮影した。

7. 出土品の整理・図版の作成は、主として篠田が行ない、磯崎一・富田和夫・宮井英一・赤熊浩一・鈴木孝之・西井幸雄・黒坂禎二の協力を得、兵ゆり子・山北美穂の補助を受けた。

8. 本書の執筆は、第I章第1節を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、第IV・V章の石器類・第VI章第1節を西井、第IV・V章の縄文土器類・第VI章第2節を黒坂、第IV・V章の奈良・平安時代の土師・須恵器類・第VI章第5節を富田が、他を篠田が行なった。

9. 本書の編集は、篠田が行なった。

10. 本書に掲載した資料は、平成20年度以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

11. 発掘調査から整理・報告書の刊行に至るまで、下記の方々より御教示、御協力を賜りました。記して感謝いたします（敬称略）。

坂戸市教育委員会 坂戸市立歴史民俗資料館

石川日出志 植木雅博 上田寛 小倉均 柿沼幹夫 加藤恭朗 上条朝宏 菊地有希子 倉持雅史 小出輝雄 鈴木正博 富元久美子 禰宜田佳男 馬場伸一郎 比田井民子 宮瀧交二 柳楽理

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第IX系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示している。

H-6 グリッド北西杭の座標は、X=-3190.000m、Y=-34800.000m。北緯35°58′14″、東経139°26′50″である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づいて設置し、10m×10m方眼を基本（1グリッド）としている。

3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から順にA・B・C…、東西方向は西から1・2・3…としている。

4. 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

S J 竪穴住居跡	S R 方形周溝墓
S D 溝跡	S L 土器棺墓
S T 火葬跡	S E 井戸跡
S K 土壌	S B 掘立柱建物跡

5. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。ただし、一部例外もある。

遺構図

石器集中・竪穴住居跡・土壌類・掘立柱建物跡

1 : 60 1 : 80

方形周溝墓 1 : 120 1 : 150

溝跡 1 : 250

遺構拡大図 1 : 30

遺物実測図

土器 1 : 4 土器拓影図 1 : 3

大形石器 1 : 3 1 : 4 小形石器 4 : 5 2 : 3

ミニチュア土器・土製品・鉄製品 1 : 2

石製品 1 : 2

6. 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにし、彩色土器については彩色範囲を網かけ（赤彩15%）で示した。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・口径・器高・底径の計測値は、cmを単位とする。

・（ ）内の数値は復元推定値、[]内の数値は残存値である。

・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。

A : 石英 B : 長石 C : 砂粒子 D : 雲母

E : 角閃石 F : 赤色粒子 G : 白色粒子

H : 黒色粒子 I : 白色針状物質 J : 片岩

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。

・色調は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）を基とし、通用表記とした。

・残存率は、図示した器形の部分に対する割合（%）を示した。

9. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000、坂戸市発行の都市計画図1/2,500を使用した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	6. 掘立柱建物跡とピット群	158
1. 発掘調査に至る経過	1	(1)掘立柱建物跡	158
2. 発掘調査、報告書作成の経過	2	(2)ピット群	166
(1)発掘調査	2	7. 遺構外・グリッド・表採遺物	168
(2)整理報告書作成	2	V 低地部の遺構と遺物	181
3. 発掘調査、報告書作成の組織	3	1. 環濠	181
II 遺跡の立地と環境	4	2. 遺物包含層	210
1. 地理的環境	4	3. 水田跡	233
2. 歴史的環境	5	(1)中世の水田跡	233
III 遺跡の概要	9	(2)古代の水田跡と土壌	233
IV 台地上の遺構と遺物	19	VI 調査のまとめ	237
1. 石器集中・礫群	19	1. 旧石器時代	237
2. 竪穴住居跡	25	2. 縄文時代	237
3. 方形周溝墓	62	3. 弥生時代	239
4. 環濠と溝跡	75	4. 古墳時代	255
(1)環濠(第13号溝跡)	75	5. 古代	257
(2)溝跡	83	引用参考文献	
5. 土器棺墓・火葬跡・井戸跡・土壌	95	写真図版	
(1)土器棺墓	95	抄録	
(2)火葬跡	95		
(3)井戸跡	97		
(4)土壌	102		

挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県の地形	4	第 36 図	第 7 号住居跡出土遺物 (1)	47
第 2 図	周辺の遺跡	6	第 37 図	第 7 号住居跡出土遺物 (2)	48
第 3 図	遺跡の範囲と周辺の地形	10	第 38 図	第 7 号住居跡出土遺物 (3)	49
第 4 図	遺跡全体図区割り図	11	第 39 図	第 8 号住居跡	51
第 5 図	木曾免遺跡全体図	12	第 40 図	第 8 号住居跡出土遺物	51
第 6 図	遺跡全体図 (1)	13	第 41 図	第 9 号住居跡・出土遺物	52
第 7 図	遺跡全体図 (2)	14	第 42 図	第 10 号住居跡・出土遺物	53
第 8 図	遺跡全体図 (3)	15	第 43 図	第 11 号住居跡 (1)	54
第 9 図	遺跡全体図 (4)	16	第 44 図	第 11 号住居跡 (2)	55
第 10 図	遺跡全体図 (5)	17	第 45 図	第 11 号住居跡出土遺物	57
第 11 図	遺跡全体図 (6)	18	第 46 図	第 12 号住居跡	59
第 12 図	旧石器調査配置図	19	第 47 図	第 12 号住居跡出土遺物	59
第 13 図	基本層序	20	第 48 図	第 13 号住居跡	60
第 14 図	第 1 号石器集中	21	第 49 図	第 14 号住居跡・出土遺物	61
第 15 図	第 2 号石器集中・炭化物集中	21	第 50 図	第 1 号方形周溝墓・出土遺物	62
第 16 図	第 1 号礫群	22	第 51 図	第 2 号方形周溝墓	63
第 17 図	第 1・2 号石器集中出土石器	23	第 52 図	第 3 号方形周溝墓	64
第 18 図	グリッド出土石器	24	第 53 図	第 3 号方形周溝墓遺物出土状況	65
第 19 図	第 1 号住居跡	25	第 54 図	第 3 号方形周溝墓出土遺物	65
第 20 図	第 1 号住居跡出土遺物 (1)	27	第 55 図	第 4 号方形周溝墓 (1)	66
第 21 図	第 1 号住居跡出土遺物 (2)	28	第 56 図	第 4 号方形周溝墓 (2)	67
第 22 図	第 2 号住居跡	30	第 57 図	第 4 号方形周溝墓遺物出土状況 (西)	68
第 23 図	第 2 号住居跡カマド	31	第 58 図	第 4 号方形周溝墓遺物出土状況 (北)	69
第 24 図	第 2 号住居跡出土遺物 (1)	32	第 59 図	第 4 号方形周溝墓遺物出土状況 (東・南)	70
第 25 図	第 2 号住居跡出土遺物 (2)	33	第 60 図	第 4 号方形周溝墓出土遺物 (1)	71
第 26 図	第 3 号住居跡	35	第 61 図	第 4 号方形周溝墓出土遺物 (2)	72
第 27 図	第 4・5 号住居跡 (1)	36	第 62 図	第 5 号方形周溝墓	74
第 28 図	第 4・5 号住居跡 (2)	37	第 63 図	第 13 号溝跡 (環濠)	76
第 29 図	第 4 号住居跡出土遺物	38	第 64 図	第 13 号溝跡出土遺物 (1)	77
第 30 図	第 5 号住居跡出土遺物 (1)	39	第 65 図	第 13 号溝跡出土遺物 (2)	78
第 31 図	第 5 号住居跡出土遺物 (2)	40	第 66 図	溝跡 (1)	80
第 32 図	第 6 号住居跡	42	第 67 図	溝跡 (2)	81
第 33 図	第 6 号住居跡カマド	43	第 68 図	溝跡 (3)	82
第 34 図	第 6 号住居跡出土遺物	44	第 69 図	溝跡 (4)	83
第 35 図	第 7 号住居跡	46			

第70回	溝跡 (5)	86	第107回	土壙 (21)	151
第71回	溝跡 (6)	88	第108回	土壙 (22)	153
第72回	溝跡 (7)	90	第109回	土壙 (23)	155
第73回	溝跡 (8)	91	第110回	土壙 (24)	157
第74回	溝跡 (9)	92	第111回	第1号掘立柱建物跡	159
第75回	溝跡出土遺物	94	第112回	第2号掘立柱建物跡・出土遺物	160
第76回	第1号土器棺墓	95	第113回	第3号掘立柱建物跡	161
第77回	第1号土器棺墓出土遺物	96	第114回	第4号掘立柱建物跡	162
第78回	第1～3号火葬跡	97	第115回	第5号掘立柱建物跡	163
第79回	第1号井戸跡	98	第116回	第6号掘立柱建物跡	164
第80回	第2～5号井戸跡	100	第117回	第7号掘立柱建物跡	165
第81回	井戸跡出土遺物	101	第118回	第8号掘立柱建物跡・出土遺物	166
第82回	土壙 (1)	103	第119回	第9号掘立柱建物跡・出土遺物	167
第83回	土壙 (2)	106	第120回	遺構外・グリッド・表採遺物 (1)	169
第84回	土壙 (3)	108	第121回	遺構外・グリッド・表採遺物 (2)	171
第85回	土壙 (4)	110	第122回	遺構外・グリッド・表採遺物 (3)	173
第86回	土壙 (5)	112	第123回	遺構外・グリッド・表採遺物 (4)	175
第87回	土壙 (6)	114	第124回	遺構外・グリッド・表採遺物 (5)	176
第88回	土壙 (7)	117	第125回	遺構外・グリッド・表採遺物 (6)	177
第89回	土壙 (8)	119	第126回	遺構外・グリッド・表採遺物 (7)	178
第90回	第100・110号土壙	120	第127回	第42号溝跡	182
第91回	土壙 (9)	122	第128回	第42号溝跡遺物出土状況 (1)	184
第92回	土壙 (10)	124	第129回	第42号溝跡遺物出土状況 (2)	185
第93回	土壙 (11)	126	第130回	第42号溝跡遺物出土状況 (3)	186
第94回	土壙 (12)	128	第131回	第42号溝跡遺物出土状況 (4)	187
第95回	土壙 (13)	130	第132回	第42号溝跡遺物出土状況 (5)	188
第96回	土壙 (14)	132	第133回	第42号溝跡遺物出土状況 (6)	189
第97回	土壙 (15)	134	第134回	第42号溝跡出土遺物 (1)	191
第98回	土壙 (16)	137	第135回	第42号溝跡出土遺物 (2)	193
第99回	土壙 (17)	139	第136回	第42号溝跡出土遺物 (3)	194
第100回	第209号土壙・出土遺物	140	第137回	第42号溝跡出土遺物 (4)	196
第101回	土壙 (18)	142	第138回	第42号溝跡出土遺物 (5)	197
第102回	第217号土壙	143	第139回	第42号溝跡出土遺物 (6)	198
第103回	第217～219号土壙出土遺物	144	第140回	第42号溝跡出土遺物 (7)	199
第104回	土壙 (19)	146	第141回	第42号溝跡出土遺物 (8)	200
第105回	土壙出土遺物	147	第142回	第42号溝跡出土遺物 (9)	201
第106回	土壙 (20)	149	第143回	第42号溝跡出土遺物 (10)	202

第144図	第42号溝跡出土遺物 (11)	………204	第160図	包含層Y層出土遺物 (5)	………230
第145図	第42号溝跡出土遺物 (12)	………205	第161図	古代、中世の水田跡・土層断面	…234
第146図	第42号溝跡出土遺物 (13)	………206	第162図	第226号土壌	………235
第147図	遺物包含層中央トレンチ土層断面	…211	第163図	第226号土壌出土遺物	………236
第148図	包含層J層出土遺物 (1)	………213	第164図	周辺地形と坂戸市調査区	………240
第149図	包含層J層出土遺物 (2)	………214	第165図	弥生時代の遺構	………241
第150図	包含層J層出土遺物 (3)	………215	第166図	住居跡の構造	………242
第151図	包含層J層出土遺物 (4)	………217	第167図	土器分類	………244
第152図	包含層J層出土遺物 (5)	………218	第168図	土器構成比	………246
第153図	包含層J層出土遺物 (6)	………220	第169図	中部高地系甕の施文方法	………250
第154図	包含層J層出土遺物 (7)	………221	第170図	近隣遺跡の参考資料	………253
第155図	包含層J層出土遺物 (8)	………222	第171図	第4号方形周溝墓の土器配置	………256
第156図	包含層Y層出土遺物 (1)	………224	第172図	古代の出土土器と参考資料	………258
第157図	包含層Y層出土遺物 (2)	………225	第173図	須恵器の法量分布図	………260
第158図	包含層Y層出土遺物 (3)	………227	第174図	古代の遺構	………261
第159図	包含層Y層出土遺物 (4)	………229	第175図	階段付き井戸跡の類例	………264

表 目 次

第1表	出土石器一覧表	………22	第19表	溝跡出土遺物観察表	………94
第2表	L・M-9グリッド出土礫一覧表	…22	第20表	第1号土器棺墓出土遺物観察表	………96
第3表	第1号住居跡出土遺物観察表	………29	第21表	井戸跡出土遺物観察表	………101
第4表	第2号住居跡出土遺物観察表	………34	第22表	第209号土壌出土遺物観察表	………140
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表	………41	第23表	第217～219号土壌出土遺物観察表	………144
第6表	第5号住居跡出土遺物観察表	………41	第24表	土壌出土遺物観察表	………147
第7表	第6号住居跡出土遺物観察表	………44	第25表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	………167
第8表	第7号住居跡出土遺物観察表	………50	第26表	第8号掘立柱建物跡出土遺物観察表	………167
第9表	第8号住居跡出土遺物観察表	………51	第27表	第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表	………167
第10表	第9号住居跡出土遺物観察表	………52	第28表	遺構外・グリッド・表採遺物観察表	………179・180
第11表	第10号住居跡出土遺物観察表	………53	第29表	第42号溝跡出土遺物観察表	…206～209
第12表	第11号住居跡出土遺物観察表	………58	第30表	包含層Y層出土遺物観察表	…231・232
第13表	第12号住居跡出土遺物観察表	………59	第31表	第226号土壌出土遺物観察表	………236
第14表	第14号住居跡出土遺物観察表	………61			
第15表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	…62			
第16表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表	…65			
第17表	第4号方形周溝墓出土遺物観察表	…73			
第18表	第13号溝跡出土遺物観察表	………79			

写真図版目次

- 巻頭図版 1 調査区全景
- 巻頭図版 2 調査区遠景 (南東から)
調査区遠景 (東から)
- 巻頭図版 3 遺跡東側に望む荒川低地
遺物包含層中央トレンチ土層断面
遺物包含層中央トレンチ土層断面
(第42号溝跡付近)
遺物包含層中央トレンチ土層断面
(東側)
- 巻頭図版 4 第42号溝跡 (弥生環濠) 全景
第42号溝跡 (弥生環濠) 溝内
- 巻頭図版 5 第42号溝跡出土土器
第42号溝跡遺物出土状況
- 巻頭図版 6 第4号方形周溝墓全景
第4号方形周溝墓遺物出土状況
- 巻頭図版 7 第4号方形周溝墓出土遺物
第12号住居跡出土遺物
- 図版 1 坂戸台地先端部と荒川低地 (北から)
調査区遠景 (南東から)
- 図版 2 調査区北側 (西から)
調査区南側 (南西から)
- 図版 3 台地上の弥生住居群 (南東から)
L-9グリッド 礫群と炭化物集中
- 図版 4 第1号住居跡
第1号住居跡遺物出土状況
第1号住居跡 炉跡
第1号住居跡 炉跡土層断面
- 図版 5 第2号住居跡
第2号住居跡 カマド
第2号住居跡遺物出土状況
第3号住居跡
- 図版 6 第5号住居跡〔及び第4号住居跡〕
第4号住居跡〔及び第5号住居跡〕
第4号住居跡 貯蔵穴遺物出土状況
第5号住居跡 炉跡
- 第5号住居跡遺物出土状況
- 図版 7 第6号住居跡
第6号住居跡 掘り方
第6号住居跡 カマド
第6号住居跡 カマド遺物出土状況
第7号住居跡
- 図版 8 第7号住居跡 炉跡
第7号住居跡遺物出土状況
第8号住居跡
第9号住居跡
第10号住居跡
第13号住居跡〔及び第5号井戸跡〕
第14号住居跡
- 図版 9 第11号住居跡〔及び第12号住居跡〕
第11号住居跡遺物出土状況
第12号住居跡
第12号住居跡遺物出土状況
- 図版 10 第1～3号方形周溝墓群 (南西から)
第4・5号方形周溝墓 (南西から)
- 図版 11 第1号方形周溝墓
第2号方形周溝墓
- 図版 12 第3号方形周溝墓
第3号方形周溝墓遺物出土状況
- 図版 13 第4号方形周溝墓
第4号方形周溝墓 西溝遺物出土状況
第4号方形周溝墓 北溝遺物出土状況
- 図版 14 第4号方形周溝墓 北溝遺物出土状況
第4号方形周溝墓 北溝 溝内土壌
第4号方形周溝墓 東溝遺物出土状況
第4号方形周溝墓 南溝遺物出土状況
第5号方形周溝墓
- 図版 15 第13号溝跡 L-7・8・9グリッド (北東から)
第13号溝跡 L-6・7グリッド (西から)

- 第13号溝跡（溝内）
 第13号溝跡遺物出土状況（第64図4・5）
 第13号溝跡遺物出土状況（第64図1）
 第1号溝跡
 第2号溝跡
 第4・9号溝跡
 図版 16 第8・11・14号溝跡、第20号土壇
 第12・24号溝跡
 第22・28号溝跡
 第23号溝跡
 第1号土器棺墓確認状況
 第1号土器棺墓と第13号溝跡（南東から）
 第1号土器棺墓（南から）
 第1号土器棺墓（北西から）
 図版 17 第1号火葬跡
 第2号火葬跡
 第3号火葬跡
 第1号井戸跡
 第2号井戸跡
 第5号井戸跡
 第1・2・39号土壇
 図版 18 第3・8号土壇
 第6・7号土壇
 第9・23号土壇
 第10号土壇
 第11～13・15～19・22・23・25号土壇、
 第23号溝跡北側
 第14・21号土壇、第23号溝跡南側、第26
 号溝跡
 第27・29・30号土壇
 第31・38・50号土壇
 図版 19 第33・34・53・68号土壇
 第36・37・41～45号土壇
 J・K-9グリッド土壇群
 第72・73・76～78号土壇
 第80・81号土壇
 第82～84号土壇
 第87・88号土壇
 第90号土壇
 図版 20 第91～94号土壇
 第97・98・111・112号土壇
 I-8・9グリッド土壇群
 第99・100号土壇
 第110号土壇
 第148号土壇
 第209号土壇
 図版 21 台地先端部に立地する第217号土壇
 第217号土壇
 図版 22 掘立柱建物跡群（南東から、一番手前は
 第3号掘立柱建物跡）
 第1号掘立柱建物跡（南西から）
 図版 23 第1号掘立柱建物跡（北西から）
 第2号掘立柱建物跡（西から）
 第3号掘立柱建物跡（南西から）
 第4号掘立柱建物跡（南東から）
 第13号住居跡、第5号井戸跡、第5～9
 号掘立柱建物跡（西から）
 図版 24 第5～9掘立柱建物跡と区画溝〔第18
 号溝跡〕（東から）
 第5号掘立柱建物跡（南東から）
 第5号掘立柱建物跡（南西から）
 第6号掘立柱建物跡（南東から）
 第7号掘立柱建物跡（南東から）
 第8号掘立柱建物跡（南東から）
 第9号掘立柱建物跡（南東から）
 J・K-7グリッドピット群
 図版 25 第42号溝跡（北から）
 第42号溝跡遺物出土状況（北から）
 第42号溝跡遺物出土状況
 図版 26 第42号溝跡遺物出土状況
 低地部水田跡土層断面
 第226号土壇
 図版 27 旧石器時代の遺物

- 第100・110・212号土壇、遺構外・グリッド・表採縄文土器
- 図版 28 遺構外・グリッド・表採縄文土器
- 図版 29 遺構外・グリッド・表採縄文土器
第42号溝跡出土縄文土器
- 図版 30 第42号溝跡出土縄文土器
- 図版 31 包含層J層出土縄文土器
- 図版 32 包含層J層出土縄文土器
- 図版 33 包含層J層出土縄文土器
- 図版 34 包含層J層出土縄文土器
- 図版 35 包含層J層出土縄文土器
- 図版 36 包含層J層出土縄文土器
- 図版 37 包含層J層出土縄文土器
- 図版 38 包含層J層出土縄文土器
- 図版 39 包含層Y層出土縄文土器
- 図版 40 包含層Y層出土縄文土器
- 図版 41 第1号住居跡出土土器
- 図版 42 第1号住居跡出土土器
第4号住居跡出土土器
- 図版 43 第4号住居跡出土土器
第5号住居跡出土土器
第6号住居跡出土土器
- 図版 44 第7号住居跡出土土器
- 図版 45 第7号住居跡出土土器
- 図版 46 第7号住居跡出土土器
第7号住居跡出土石器
第11号住居跡出土土器
- 図版 47 第11号住居跡出土土器
第14号住居跡出土土器
第13号溝跡出土土器
第3号方形周溝墓出土土器
- 図版 48 第13号溝跡出土土器
遺構外・グリッド・表採弥生土器
- 図版 49 第1号土器棺墓出土土器
第209号土壇出土土器
第219号土壇出土土器
- 図版 50 第1号住居跡出土土器
- 図版 51 第1号住居跡出土土器
第4号住居跡出土土器
- 図版 52 第5号住居跡出土土器
- 図版 53 第7号住居跡出土土器
- 図版 54 第7号住居跡出土土器
第8・10号住居跡出土土器
- 図版 55 第11号住居跡出土土器
- 図版 56 第14号住居跡出土土器
第13号溝跡出土土器
- 図版 57 第13号溝跡出土土器
遺構外・グリッド・表採弥生土器
- 図版 58 遺構外・グリッド・表採弥生土器
弥生住居跡・包含層Y層出土小形石器
- 図版 59 住居跡出土大形石器
- 図版 60 遺構外・グリッド・表採小形石器
遺構外・グリッド・表採大形石器
- 図版 61 遺構外・グリッド・表採大形石器
- 図版 62 遺構外・グリッド・表採大形石器
遺構外・グリッド・表採、井戸跡、土壇
出土大形石器
- 図版 63 第209・217号土壇出土石器
第13号溝跡出土土製品、第5・7号住居
跡出土ミニチュア土器
第11号住居跡、遺構外・グリッド・表採、
包含層Y層出土土・石製品
- 図版 64 第42号溝跡出土土器
- 図版 65 第42号溝跡出土土器
- 図版 66 第42号溝跡出土土器
- 図版 67 第42号溝跡出土土器
- 図版 68 第42号溝跡出土土器
- 図版 69 第42号溝跡出土土器
- 図版 70 第42号溝跡出土土器
- 図版 71 第42号溝跡出土土器
- 図版 72 第42号溝跡出土土器
- 図版 73 第42号溝跡出土土器
- 図版 74 第42号溝跡出土土器
- 図版 75 第42号溝跡出土土器

- 図版 76 第42号溝跡出土土器
- 図版 77 第42号溝跡出土土器
- 図版 78 第42号溝跡出土土器
包含層Y層出土土器
- 図版 79 第42号溝跡出土土器
第42号溝跡出土土器展開写真
- 図版 80 第42号溝跡出土土器
- 図版 81 第42号溝跡出土土器
- 図版 82 第42号溝跡出土土器
- 図版 83 第42号溝跡出土土器
- 図版 84 第42号溝跡出土土器
- 図版 85 第42号溝跡出土土器
- 図版 86 包含層Y層出土土器
- 図版 87 包含層Y層出土土器
第13号溝跡、第42号溝跡、包含層Y層出
土石器
- 図版 88 第42号溝跡、包含層J・Y層出土石器
第12号住居跡出土土器
- 図版 89 第12号住居跡出土土器
第4号方形周溝墓出土土器
- 図版 90 第4号方形周溝墓出土土器
- 図版 91 第4号方形周溝墓出土土器
- 図版 92 第4号方形周溝墓出土土器
- 図版 93 第4号方形周溝墓出土土器
第1・4号方形周溝墓出土土器
- 図版 94 第2号住居跡出土土器
- 図版 95 第2号住居跡出土土器
第6号住居跡出土土器
- 図版 96 第2号住居跡出土土器
- 図版 97 第2号住居跡出土石器
- 図版 98 第2号住居跡、第91号土壙出土鉄製品
第6号住居跡出土土器
- 図版 99 第226号土壙出土土器
- 図版100 第9号掘立柱建物跡出土土器
第15号溝跡出土土器
第27号溝跡出土土器
第140号土壙出土土器
第216号土壙出土土器
遺構外・グリッド・表採土器
- 図版101 井戸跡、掘立柱建物跡出土土器
溝跡出土、遺構外・グリッド・表採土器

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、平成19年度からの新5か年計画『ゆとりとチャンスの埼玉プラン』に「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」という基本目標を掲げている。こうした中で、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が待望されている。

埼玉県教育委員会では、首都圏中央連絡自動車道建設に係る埋蔵文化財の保護について、昭和62年度の入間・狭山・日高地区を皮切りに現在まで国土交通省などの関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

さて、本書で報告される木曾免遺跡(No.27-039)は平成12年11月30日付大国調二第66号により「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会がなされた。これに対し、県教育委員会では平成16年度に試掘調査を実施し、記録保存のための発掘調査が必要であることを回答した。(平成17年3月1日付け 教文第1920号)

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、文化財保護課(当時)の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

なお、発掘調査は次のとおり実施した。

平成17年4月8日～平成18年1月31日

文化財保護法第57条の3(当時)の規定による埋蔵文化財発掘通知が国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長から平成17年3月30日付け大国工第185号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は平成17年3月31日付け教文第3-1060号で行った。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成17年4月20日付け教生文第2-5号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査、報告書作成の経過

(1) 発掘調査

木曾免遺跡第5次調査は、平成17年4月8日から平成18年1月31日まで行なった。調査面積は9,240㎡である。

4月、現場事務所、囲柵などを設置後、重機による表土掘削を行なった。5月に入り、表土掘削と併行して、遺構確認を開始した。5月下旬、基準点測量を実施し、遺構の調査に着手した。低地部の調査は渇水期を待って行なうことにし、まずは台地部分の調査から開始した。調査区南端から掘削を開始し、順次北側へ移り、調査を進めた。

7月下旬には、調査区南部の調査と併行して、調査区北西部の掘削作業に移った。8月、調査区中央部から北側まで、改めて遺構確認の後、各遺構の掘削を開始した。各遺構の掘り下げ後、順次、土層断面図作成、遺物の出土状況図作成、写真撮影、平面図作成を順調に進めた。

台地上において、竪穴住居跡14軒、方形周溝墓5基、環濠1条、溝跡46条、掘立柱建物跡9棟、井戸跡5基、土壇288基を検出した。

9月中旬に台地上の掘削作業を終え、遺跡見学会開催、第1回航空写真撮影のために、調査区台地部分をすべて清掃した。

10月1日(土)、遺跡見学会を開催し、県内外から395人の方々が見学に訪れた。

10月6日、二度の中止を経て、第1回航空写真撮影を行なった。

10月初旬～11月中旬まで、調査区台地部の旧石器の確認調査を行なった。その結果、南部で石器と炭化物が集中して出土し、中央部でもわずかに石器が出土した。順次、遺構の土層断面図作成、遺物・炭化物のドット図作成、写真撮影、平面図作成を行い、台地部の調査をすべて完了させた。

11月上旬、調査区西側の斜面部から低地にかけて弥生時代の遺物包含層があり、その掘削作業に着手した。ある程度掘り下げていくと、低地部か

ら完形に近い弥生土器が列状に出土し、台地上から続く環濠が存在することが判明した。しかし、黒色土中に環濠が埋まっているために、その形を判断することは困難を極めた。そこで、低地部中央にトレンチを入れ、深いところで1.60m程度を掘り下げた。土層断面で、環濠の立ち上がり・遺物包含層の堆積状況を確認することができた。その状況を踏まえて、遺物包含層、環濠全面の掘削作業を進めた。これらの写真撮影、遺構・遺物図化作業を行い、12月下旬に弥生時代の遺物包含層、環濠の調査を完了した。

12月26日、2回目の航空写真撮影を実施した。前回の航空写真と合成して、遺跡全体の垂直写真を完成させた。

1月に入り、斜面部の縄文時代遺物包含層の調査に着手した。これらの掘削作業、写真撮影、遺構・遺物図化作業を行い、1月中旬には、すべての発掘調査を終了した。

1月下旬、埋戻し作業や遺物・図面の整理、器材の整備を行い、それらを搬出して、器材の撤収、現場事務所の撤去を行い、調査を完了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書作成作業は平成19年4月9日から平成20年3月24日まで実施した。

4月、遺物の水洗・注記を行なった後、接合・復元作業に着手した。接合が終了した遺構から、順次、実測遺物・土器破片を抽出した。7月初旬には接合・復元作業を終了した。接合・復元作業に併行して、環濠や方形周溝墓出土の完形に近い土器の実測も開始した。壺や甕など器面に複雑な文様や細かい調整が施されているものが多く、機械実測(3スペース)を利用し素図を作成した。その素図を修正しながら実測図を完成させた。

遺構図の作成は、遺物の作業と併行して行なった。遺構図と遺構断面図を照合・修正し、これを

基に遺構図の第二原図を作成した。また土層説明の入力、全体図の作成、周辺遺跡図、遺跡位置図等の作成を行なった。

第二次原図はスキャナーを使用し、画像データに変換して、パソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いて遺構図のトレース・挿図作成を行なった。遺構図はパソコン内で諸記号・数字・スケール・土層説明等の貼り込みを行い完成させた。遺物出土状況図に関しては、遺物の実測・トレース完了した後に、遺物をスキャナーで読み込んで、画像データとして、パソコンを用いて遺構図と組み合わせて作成した。

土器破片に関して、6月下旬から断面実測を開始した。併行して、土器破片の拓本作業に取りかかった。断面実測が完了した遺物から順次、トレースに入った。拓本・トレース作業が終わった後に、拓影のコピーをとり、貼り込み作業に移った。

実測遺物については、8月初旬から、実測が終了したものから順次トレース作業に着手した。

10月半ばからは、遺物のトレースが完了した遺構ごとに仮版組作業を開始した。10月末に遺物の実測を終えて、12月半ばまでにトレース作業を完了した。実測完了とともに、原稿執筆、遺物・遺構図面の割付に着手した。

11月初旬には仮版組作業を完了させるとともに、遺構写真を選択し焼付をした。11月下旬に遺物の写真撮影を行なった。

12月初旬、編集作業、写真図版の割付作業、トリミングに着手した。

12月下旬に原稿執筆を終えて、編集作業を行なう。1月下旬に印刷業者を選定して入稿した。3回の校正を経て、平成20年3月24日に報告書を刊行した。最後に、図面・写真・遺物などを整理、分類し、収納作業を行なった。

3. 発掘調査、報告書作成の組織

平成17年度（発掘調査）

理事長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調査部長	今 泉 泰 之
管理部		調査部副部長	坂 野 和 信
管理部副部長	村 田 健 二	主席調査員(調査第一担当)	昼 間 孝 志
管理部主席	高 橋 義 和	統括調査員	黒 坂 禎 二
		統括調査員	上 野 真由美
		調査員	宅 間 清 公

平成19年度（報告書作成）

理事長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調査部長	村 田 健 二
総務部		調査部副部長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整理第一課長	宮 井 英 一
総務課長	松 盛 孝	主 事	篠 田 泰 輔

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

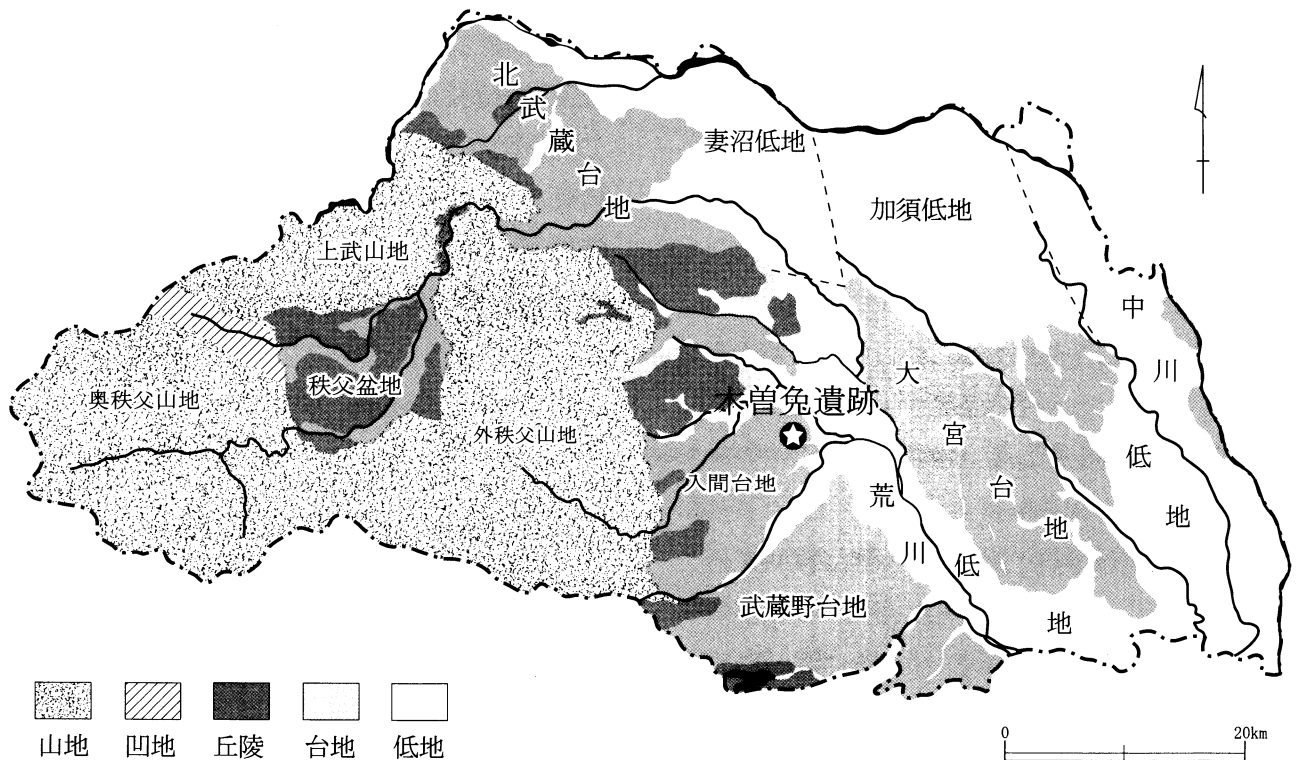
木曾免遺跡は、埼玉県中央部よりやや南にある坂戸市大字小沼に所在する。東武東上線若葉駅から東方約4.3kmの位置にある。

入間台地は、北を岩殿丘陵に、南を武蔵野台地に、東を荒川低地に限られている。入間台地は、高麗川・越辺川・入間川によって形成された扇状地性の台地である。その三つの河川によって開析された谷を境にして、入間台地は分けられている。高麗川を境として、北側を毛呂山台地、南側を坂戸台地、越辺川の支流である小畔川と入間川の間を飯能台地と呼んでいる。入間川の南側は、武蔵野台地となる。

木曾免遺跡の立地する坂戸台地は、標高約100mの高麗本郷を扇頂として、北東方向に向かって緩やかに低くなっていき、遺跡が位置する北東端で標高約17mとなっている。そして、緩傾斜をもって標高約13mの荒川低地へ移っていく。台地表面

は、比較的平坦で起伏が少ない。しかし、台地内の湧水点から発する中小河川によって刻まれ、小支谷を作り出しており、若干の高低差を生む地形となっている。それら飯盛川・谷内川・二階川・大谷川は、それぞれ蛇行しながら北東方向に進み、越辺川、入間川に流れ込んでいる。その大・中小河川に面した台地上に、旧石器時代から古墳時代までの遺跡が点在することになる。

また、北側にある毛呂山台地の先端部は、坂戸市西側に位置している。西は外秩父山地と毛呂山丘陵に始まり、北東方向に延びて、越辺川の低地に面している。そこは、越辺川が何度となく流路の変更をしているところで、広大な氾濫原を作り出している。その低台地と台地先端部には、古墳時代から生活の痕跡が数多くうかがえる土地である。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

本節では、坂戸台地北東部について、各時代を概観する。なお、木曾免遺跡で中心となる、弥生時代については、視野を広げて近隣の地域を含めてまとめていきたい。

旧石器時代・縄文時代

旧石器時代は、過去の発掘調査例が少ない。石器を採集した地点については、幾つか確認されている。大谷川と小畦川に挟まれた台地上にある中小坂遺跡群が挙げられる。その群内から、尖頭器をはじめとする石器を数多く発見している。また、飯盛川流域でも数箇所では採集されている。

その中で、最近、当事業団の圏央道関連の発掘調査によって、旧石器時代の遺物を検出している。西から在家遺跡(8)、御新田遺跡(5)、番匠・下道遺跡(4)、そして、木曾免遺跡(1)でも石器集中や礫群などを確認している。今後の発掘調査次第で、旧石器時代の遺跡が増加していく蓋然性は高い。

縄文時代になると、撚糸文・条痕文系期では、それ以前の時期に比して、遺跡数が多くなり、内陸部に立地する傾向にある。御新田遺跡や番匠・下道遺跡、木曾免遺跡において、遺構や遺物を発見している。一方、前期では、台地の先端部や縁辺に立地する附島遺跡や木曾免遺跡、景台遺跡(15)で、関山式期の住居跡が発見されている。今回の調査区では、住居跡は確認されなかったが、関山式期の土壌と斜面包含層を検出している。

中期の遺跡は、大谷川流域の台地縁辺で、景台遺跡、金山遺跡(13)が対面して立地している。また、台地奥に位置する牛原遺跡(6)では、中期中葉の環状遺構群が盛行している。近くの御新田遺跡でも少数ながらも住居跡と土壌が見ついている。また、牛原遺跡では、中期末の敷石住居跡を検出しており、内陸部で発見されるのは珍しい。それ以後、塚越渡戸遺跡(28)において、後期の住居跡を確認できるだけである。

この地域において、後・晩期から弥生時代中期までは、低調な活動の痕跡しか見られない。

弥生時代

弥生時代中期後半になると、低地に面した坂戸台地の縁辺などに、遺跡が点在し始める。

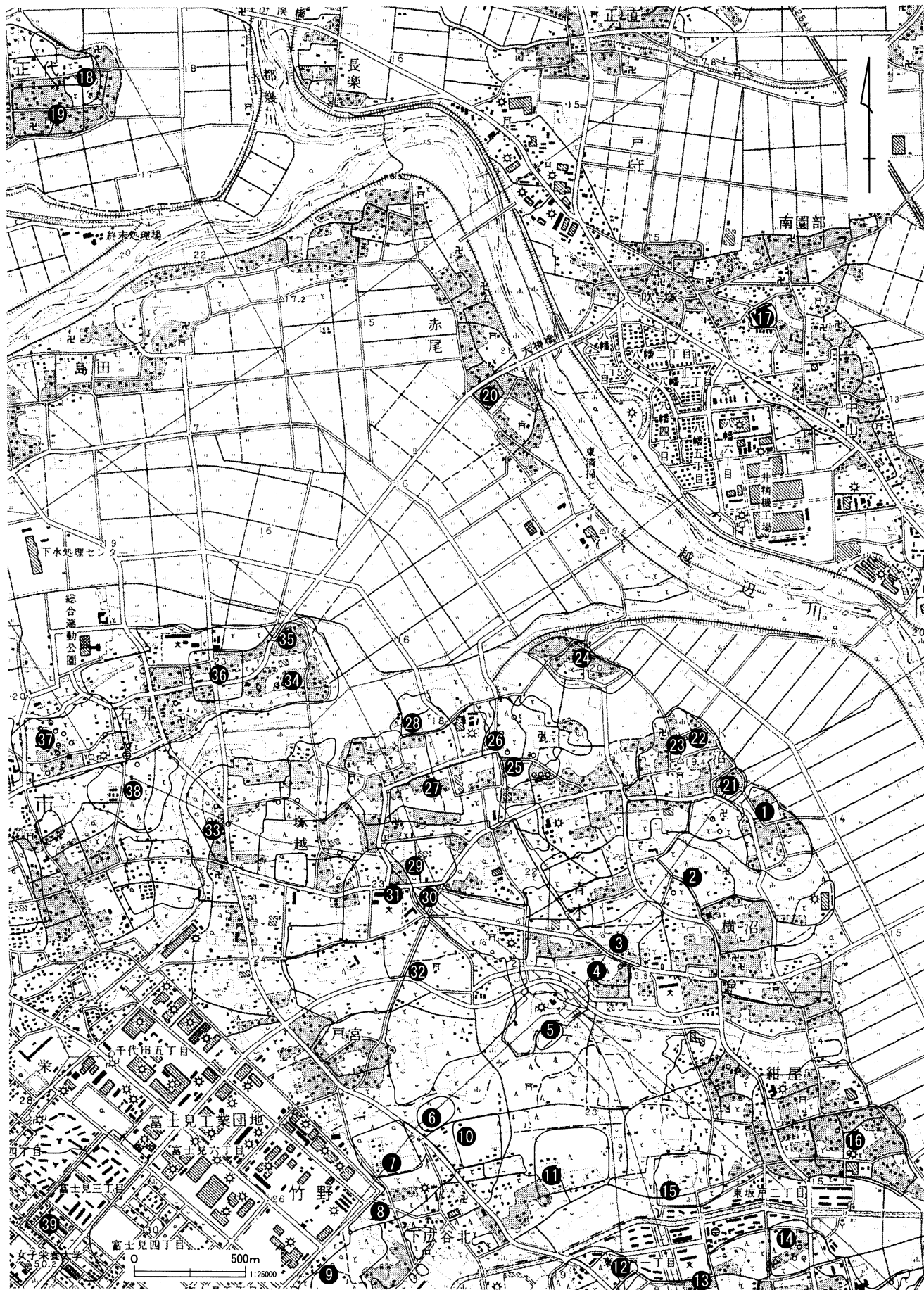
木曾免遺跡北側の小谷を挟んだ台地には、小沼堀之内遺跡(21)がある。そこでは、壺棺墓1基のみを発見している。北側に台地縁辺に沿って平坦地が広がっているが、そこが集落の中心地として考えられる。

さらに、北西約600mと至近距離にある、低地で囲まれた島状の台地に附島遺跡(24)が立地している。木曾免遺跡と同様の地理的環境下で、附島遺跡では、中期後半の住居跡6軒、溝跡3条を検出している。わずかに中部高地系土器を出土しているが、大半は宮ノ台式土器で占められている。道路幅のみの発掘調査で、集落の全容は知りえないが、集落が島状の平坦地に広がっていることが想像される。

附島遺跡より西にある塚越渡戸遺跡(28)では、住居跡3軒を調査しており、いずれも中部高地系土器を出土しているが、そのうちの1軒から中部高地系櫛描文の良好な甕を検出している。また、東にある別所遺跡(26)でも、中期後半の土器が採集されている。

谷内川で画された対岸には、柵遺跡(38)と新町遺跡(37)が存在する。両者ともに、中期末の土器が出土している。柵遺跡では、壺棺墓2基を発見しているが、周りでは後期の住居跡、方形周溝墓などを検出している。また、新町遺跡では、新町古墳群を内包する遺跡であり、新町9号墳の発掘調査時に、頸部に縄文帯をもつ壺を発見している。加えて、別地点の調査では、住居跡1軒と溝跡1条を確認している。

南に目を向けると、大谷川と小畦川に挟まれた台地上には、登戸遺跡が所在し、宮ノ台式の住居



第2図 周辺の遺跡

1 木曾免遺跡	2 北谷遺跡	3 横沼新田遺跡	4 番匠・下道遺跡	5 御新田遺跡
6 牛原遺跡	7 戸宮前館跡	8 在家遺跡	9 宮廻館跡	10 大堀山館跡
11 宮前遺跡	12 大穴館跡	13 上谷遺跡	14 天王山古墳群	15 景台遺跡
16 高窪遺跡	17 中山陣屋跡	18 東形遺跡	19 小代氏館跡	20 林氏館
21 小沼堀之内遺跡	22 牛塚山古墳群	23 五反田遺跡	24 附島遺跡	25 雷電塚古墳群
26 別所遺跡	27 明泉遺跡	28 塚越渡戸遺跡	29 青木堀ノ内遺跡	30 宮町遺跡
31 住吉中学校遺跡	32 精進場遺跡	33 塚越古墳群	34 勝呂古墳群	35 勝呂遺跡
36 勝呂廃寺跡	37 新町古墳群	38 柵遺跡	39 若葉台遺跡	

跡を確認しており、小畦川右岸の飯能台地では、霞ヶ関遺跡があり、宮ノ台式の住居跡と方形周溝墓を調査している。

続いて、北側の越辺川を挟んだ対岸を概観する。高坂台地では、東形遺跡(18)に隣接する代正寺遺跡がある。当該期の住居跡、方形周溝墓を発見している。なお、東形遺跡にも採集資料がある。さらに、南西に位置する大西遺跡では、後期主体の集落ではあるが、住居跡1軒を検出している。

西側に広がる荒川低地において、川島町圏内にある自然堤防上では、現在までのところ、中期の遺跡は確認されていない。

後期になっても、分布域にさほどの変化は見られず、中期の遺跡と重複することが多いが、若干遺跡数は増加する傾向にある。

まず、岩鼻式土器を出土する遺跡について述べる。谷内川の右岸には、柵遺跡(38)、その南ある石井前原遺跡があり、飯盛川に通ずる比高差があまりない低地に面して、勇福寺遺跡、相撲場遺跡がある。坂戸台地北端に集中して見られる。

柵遺跡は、谷内川が形成する浅い谷に面したところに立地し、四隅が切れる方形周溝墓4基が検出されている。2号墓は、20m級の大型方形周溝墓で、その周溝から、完形に近い甕が出土している。その北側では、住居跡2軒を発見しており、集落域はそこになるであろう。他に壺棺墓が3基確認されている。相撲場遺跡では、竪穴住居跡を3軒検出している。

また、大谷川右岸の台地上にある中小坂遺跡群

前林遺跡でも、住居跡が検出されている。

次は、吉ヶ谷式土器を出土する遺跡である。

木曾免遺跡において、今回の調査区では後期の破片を少量確認したに過ぎないが、坂戸市教育委員会が遺跡南側を調査した際に、溝跡から吉ヶ谷式土器を発見している。また、附島遺跡でも、吉ヶ谷式土器が出土する住居跡2軒を調査している。他に坂戸台地先端部の勝呂遺跡が存在する。また、飯盛川流域の内陸部には、一天狗遺跡、鶴ヶ丘遺跡が点在する。そして、高麗川を望む台地上には、吉ヶ谷式土器が出土する方形周溝墓を検出している花影遺跡がある。

加えて、南方の飯能台地では、霞ヶ関遺跡、女堀遺跡、上組遺跡がある。

古墳時代

古墳時代前期では、集落跡より方形周溝墓をより多く発見している。木曾免遺跡では、今回の調査区で20mを越える方形周溝墓を検出している。坂戸市教委が調査した遺跡南側で住居跡を13軒発見している。附島遺跡でも、古墳時代前期の方形周溝墓2基が検出され、その北東には、同時期の住居跡が6軒確認されている。木曾免遺跡と小谷を挟んだ西側の台地上にある北谷遺跡(2)では、約20mの方形周溝墓を調査している。

大谷川流域の景台遺跡でも方形周溝墓1基が確認される。また、勇福寺遺跡では、5基の方形周溝墓が発見されており、台地の北縁辺に立地している。北側に3基、南側に2基が列をなして構築されている。3号墳の供献土器は、南西隅に多く

確認されている。いずれの方形周溝墓も台地の突端や縁辺に立地していることがわかる。

前期の集落跡は、大谷川左岸の台地東端に位置する高窪遺跡(16)があり、そこで住居跡8軒を検出する。また、石井前原遺跡で住居跡5軒を確認している。高麗川右岸の宮裏遺跡では、住居跡とともに、方形周溝墓が検出され、周溝墓は台地先端にまとまり、その東側に集落域が広がることがわかっている。

同じ坂戸市域内では、木曾免遺跡の東方に、高麗川・葛川を挟み北側にある毛呂山台地先端部に広がる自然堤防上に、前期の遺跡が多く確認されている入西地区がある。方形周溝墓は広面遺跡および桑原B遺跡で22基、中耕遺跡68基、稻荷前遺跡35基が確認されて、住居跡はそれに伴い数多く検出されている。

一方で、前・中期の前方後方墳や前方後円墳は、坂戸台地北東部では発見されていない。また、中期の集落遺跡に関しても希薄で、大谷川右岸の台地上にある中小坂遺跡群中に住居跡3軒が見られる程度である。

後期になると、古墳の築造が増えて数多く見られるようになる。

木曾免遺跡でも、後期の円筒埴輪片が出土しており、未知の古墳が近隣に存在することを予想させる。北側に4基の円墳群である牛塚山古墳群(22)があるが、木曾免遺跡西200mにも、牛塚山1・2・9号墳が位置しており、木曾免遺跡の近くに湮滅古墳があった可能性も考えられる。

また、前方後円墳を有する古墳群も出現している。雷電塚古墳群(25)は、現存4基の古墳群である。1号墳は、全長約47mの前方後円墳で、埴輪を出土している。さらに、新町古墳群(37)の中には、坂戸市内最大の前方後円墳がある。それは、残存長約63mの胴山古墳(新町1号墳)である。その周りには、9基の円墳が構築されて、古墳群を形成している。

勝呂廃寺がある台地先端部には、勝呂古墳群(34)が立地している。1号墳は、坂戸市内で最大の径50~55mの円墳である。その南の台地に位置する塚越古墳群(33)は、現状3基の円墳群である。

また、大谷川右岸の台地上には、円墳5基の天王山古墳群(14)、その南西に下小坂古墳群がある。下小坂古墳群は、川越市を跨いで広範囲に続く大規模な古墳群となっている。

それらに伴う後期の集落は、台地縁辺に点在するものの、調査範囲が狭く住居跡が数軒確認されているだけである。小沼堀之内遺跡、附島遺跡、明泉遺跡(27)、塚渡戸遺跡などで確認されている。その中で、中小坂遺跡群にある上谷遺跡(13)では、数多くの住居跡が発見されている。また、勝呂遺跡(35)においても、大型住居跡を含む28軒の住居跡を確認している。

古代・中世

勝呂遺跡の大集落は、古墳群を形成して古代まで存続したと考えられ、それを背景に勝呂廃寺跡(36)が建立されたと考えられている。

古代においては、内陸部にも遺跡が増えてくる。台地の縁辺から少し奥まったところには、精進場遺跡(32)があり、その北側の住吉中学校遺跡(31)では、住居跡とともに、方形の掘り方をもつ掘立柱建物跡が多く発見されている。

若葉台遺跡(39)では、数多くの住居跡とともに掘立柱建物跡を検出しており、豪族の居館跡や郡家などではないかと想定されている。加えて、その南東約1kmにある山田遺跡では、若葉台遺跡と同時期に盛行した集落で、奈良三彩をはじめ、住居跡60軒が確認されている。

中世には、宮廻館跡(9)、戸宮前館跡(7)、大堀山館跡(10)、宮前遺跡(11)、大穴館跡(12)が林立する館跡群が、木曾免遺跡から約1.5km南東に位置している。

III 遺跡の概要

木曾免遺跡は、坂戸台地の東端に立地し、北・東側には沖積低地が広がっている。南側は、東から浅い谷が北西方向に入り込み、周りの台地とは隔たりがある。また、北西側には小さい谷をもって、小沼堀之内遺跡と画されている。このように遺跡が立地する台地は、周りを低地と小支谷によって囲まれて、南東方向に突き出る半島状を呈している。

今回の調査区は、遺跡の最も北側の地点で、100×90mほどの長方形の区画である。調査面積は9240㎡である。その区内は、越辺川に面した斜面から低地部の部分と、法音寺脇の湧水点に向かう西側の緩斜地、そして、その間に挟まれたローム台地部に分かれる。

台地の基本土層は、台地全体が更新世に越辺川の氾濫によって荒らされており、通常の黄褐色ロームと対比するのは困難であった。また、その影響で、西側の緩斜地は、その氾濫土である小礫混じりの茶褐色土で覆われていた（第12図網掛け）。加えて、巻頭図版1の航空写真をご覧くださいと、一目瞭然である。その土は、いわゆる真土で、水分を含むと粘性を帯び、乾燥すると硬くなる水つきの土である。各遺構の土層注記について、いわゆる真土を覆土とするものは、「茶褐色ローム」と表すこととした。なお、木曾免遺跡の基本土層断面図は、関連する次章第1節の石器集中・礫群の頁に掲載しており（第12・13図）、また土層の説明もそちらに譲ることにして、台地の状態について説明を加える。

東側斜面は若干の傾斜をもって、現水田面に至るが、斜面部の標高が高い所からは、基盤粘土層が露出していた。また削平や攪乱が著しい。これは、ローム台地部も同様で、台地最高所は削平や攪乱が多く、弥生時代の住居跡も、炉跡がかろうじて残存しているものが斜面への移行部で検出さ

れている。馬の背状台地の中央は、より削平されていたと考えられ、かなり平坦になっている。ソフト状のロームは、斜面への移行部でわずかに確認できたのみで、本来、より丸味がある馬の背状台地であったと考えられる。

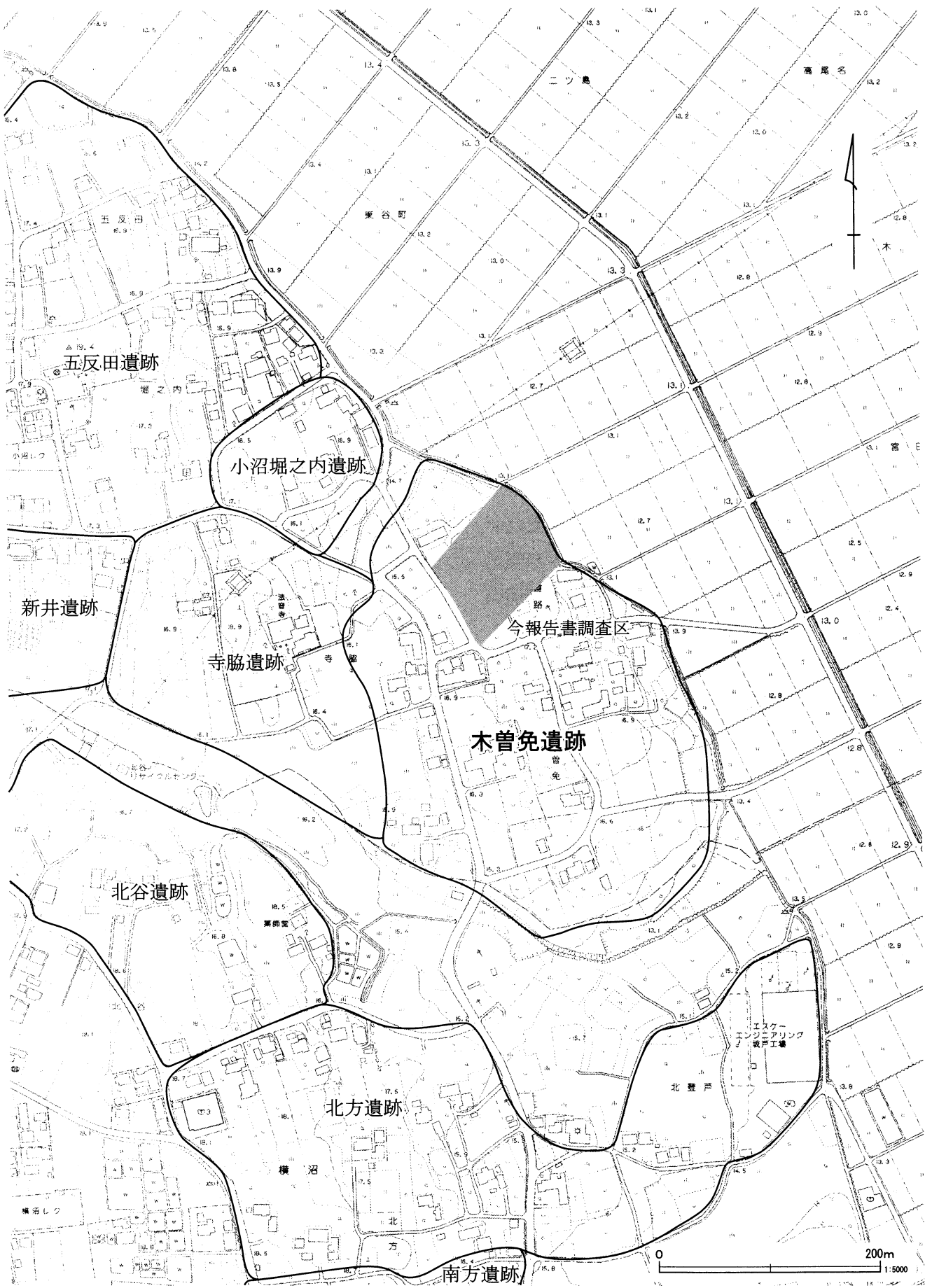
一方、西側の緩斜地は、攪乱も少なく、安定している。前述の通り、この緩斜地の基盤土は、小礫を多く含んでおり、単に地下水の影響で変質しただけでなく、越辺川の氾濫によっても形成されたことがわかる。ローム台地部と緩斜地の境は、極めて直線的であり、調査区南部では直角のように屈曲する。その原因は不明である。

それでは、木曾免遺跡における過去の調査を掲げて、本調査の概要を述べることにしたい。

まず、昭和58年に、坂戸市教育委員会による分布調査が行われ、表採遺物である縄文時代前期、弥生時代中・後期の土器片を紹介している（坂戸市教委1983）。その際に、木曾免遺跡の北に位置する附島遺跡に次ぐ集落跡になる可能性を示唆している。

次に、発掘調査については、坂戸市教育委員会が数次実施している。昭和59年・昭和60年・昭和63年の3回にわたり、道路改良工事に伴う事前調査で発掘調査を行なっている（坂戸市教委1992）。調査範囲は、本調査区の南側にある南北に延びる道路で、西に曲がった辺りまでである。また、途中で東へ曲がる道路も、低地部手前まで調査範囲である。検出した遺構は、竪穴住居跡が縄文時代前期（関山式期）8軒、弥生時代中期後半（宮ノ台式期）2軒、古墳時代前期（五領式期）13軒、奈良・平安時代1軒、加えて、弥生時代中期後半の方形周溝墓1基、溝跡が弥生時代2条、中近世5条である。

2001（平成13）年には、個人住宅建設（4区）と農業用倉庫建設（5区）に伴う調査、2002（平



第3図 遺跡の範囲と周辺の地形

成14)年には、4区の続きの部分の調査を行なっている。4区では、弥生時代中期の方形周溝墓1基を検出している。南溝と東溝の一部を確認しており、西溝から完形の壺が出土している。翌年度の調査で、残りの部分を確認し、時期不明の掘立柱建物跡1棟を検出している。5区では、古墳時代前期の住居跡2軒と縄文時代前期の土壌1基を検出している。そのうち1軒は、1辺7.5mの大形住居で、壺・埴・甕などが出土している。両調査区ともに、本調査区よりも南側に位置している。

続いて、今回の調査で検出した遺構は、石器集中2ヶ所、礫群1基、炭化物集中1ヶ所、竪穴住居跡14軒、方形周溝墓5基、環濠2条、溝跡48条、土器棺墓1基、火葬跡3基、井戸跡5基、土壌284基、掘立柱建物跡9棟、水田跡1ヶ所、遺物包含層である。出土遺物の総量は、コンテナ62箱である。さまざまな年代のものを含んでいるため、年代順にまとめていく。

旧石器時代の遺構は、石器集中2ヶ所、礫群1基、炭化物集中1ヶ所である。ローム層が比較的安定していた台地部中央の北側と南側に形成されていた。北側には、製品を伴わない第1号石器集中があり、南側には石器集中と炭化物集中、さらに礫群が重なって検出されている。近世以降の攪乱によって部分的に壊されていた。

縄文時代の遺構は、土壌4基と遺物包含層である。住居跡などの遺構を検出できなかったが、前期関山式期の良好な遺物包含層を発見している。

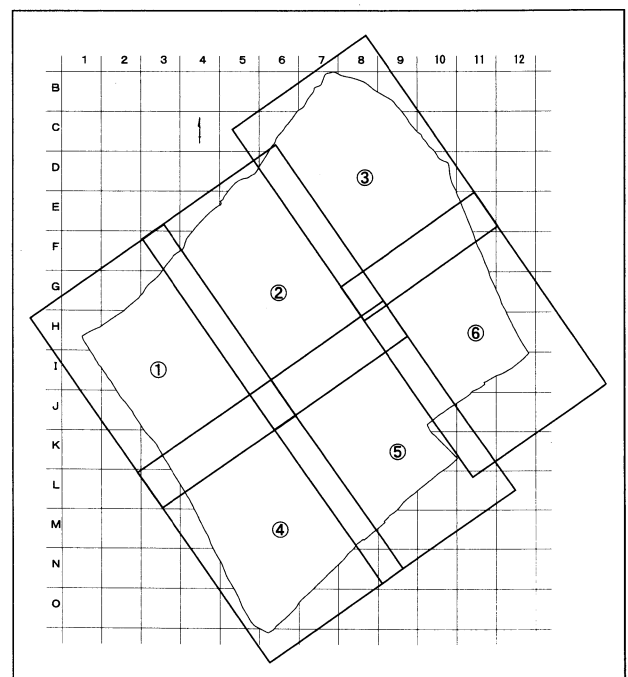
弥生時代の遺構は、竪穴住居跡13軒、方形周溝墓3基、環濠2条、土器棺墓1基、土壌7基、遺物包含層1ヶ所である。木曾免遺跡での主体となる時代である。環濠2条は、台地部と低地部で1条ずつ発見し、途中で攪乱によって破壊されているが、1つの環濠になると推定した。低地部の環濠からは、台地上から廃棄したと思われる弥生土器を数多く発見した。その環濠の内側には、住居跡12軒が南北に規模を変えて、東西の台地縁辺に

沿って構築されている。また、環濠外側の南西には、四隅が切れる方形周溝墓3基を確認している。北側は台地際であるために、それ以北に住居跡は存在しないと判断されて、環濠集落のほぼ全容と墓域を把握できたと思われる。

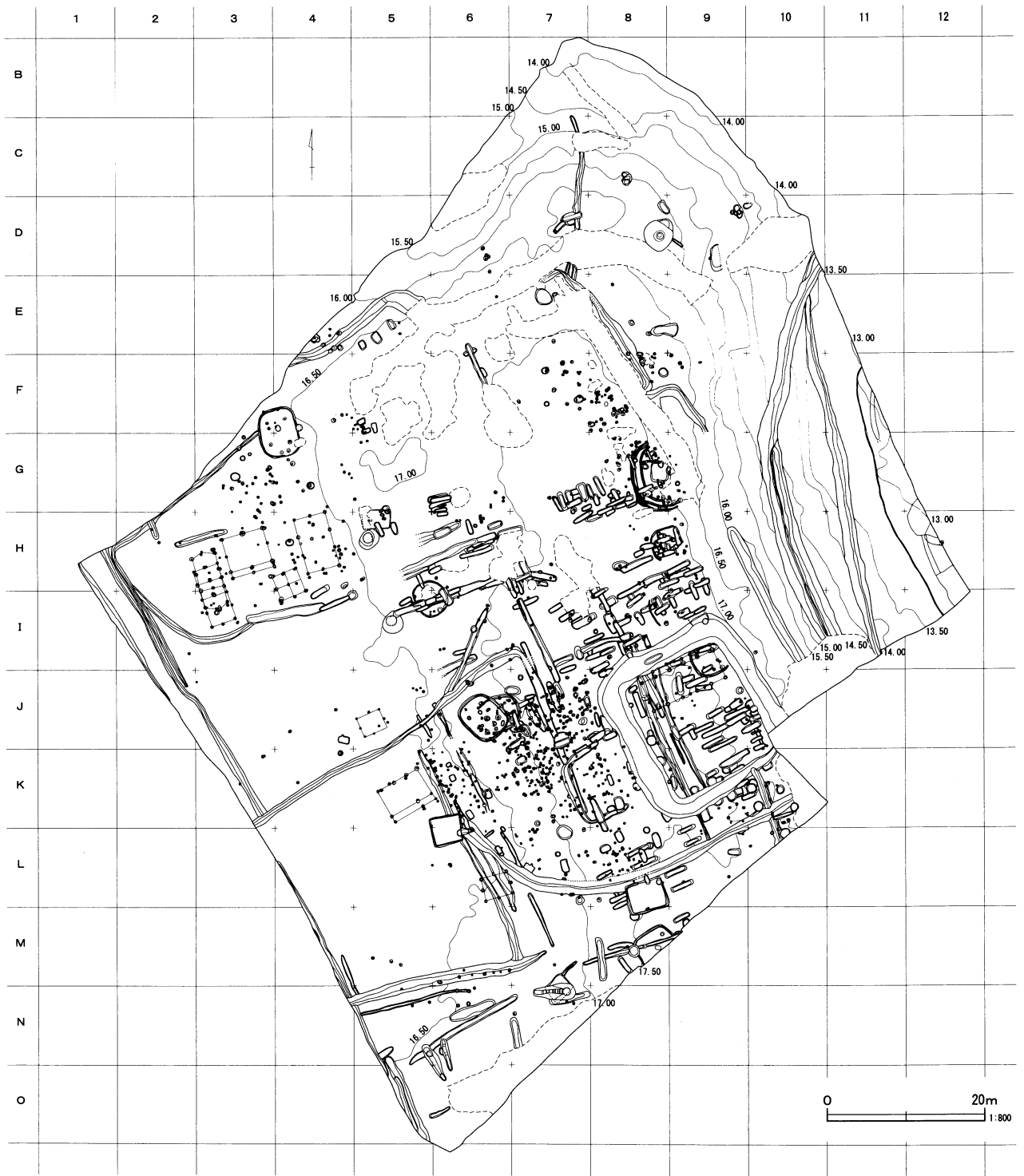
古墳時代の遺構は、方形周溝墓2基、竪穴住居跡（竪穴状遺構）1軒、である。第4号方形周溝墓は、一辺20m強の規模をもち、周辺遺跡と比べると群を抜いている。また、各溝からは、底部穿孔壺などの多くの供献土器を検出している。

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、井戸跡1基、土壌1基、掘立柱建物跡1棟、水田跡1ヶ所である。井戸跡は、県内でも希有な階段付きの井戸跡である。また、田面造成時に伴う地鎮祭祀の土壌を発見している。その第226号土壌から、墨書土器2点を含む5点の須恵器坏が出土している。

中近世の遺構は、竪穴住居跡（竪穴状遺構）1軒、掘立柱建物跡8棟、井戸跡4基、溝跡48条、火葬跡3基、土壌273基である。西側に位置する掘立柱建物跡5棟、井戸跡、竪穴状遺構が計画的に配置されている。台地南東部では、農作業に利用されたと考えられる長方形土壌が密集している。



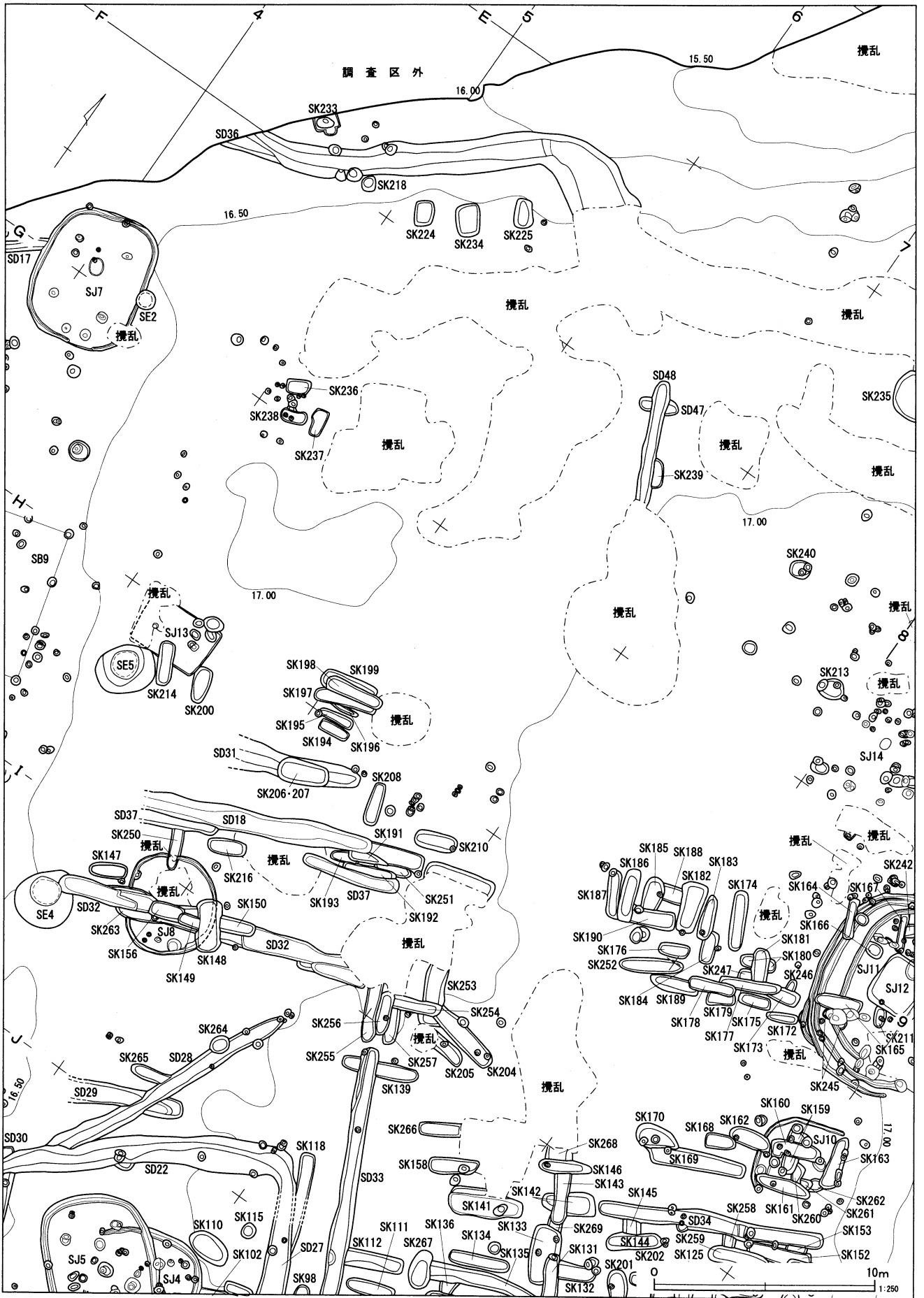
第4図 遺跡全体図区割り図



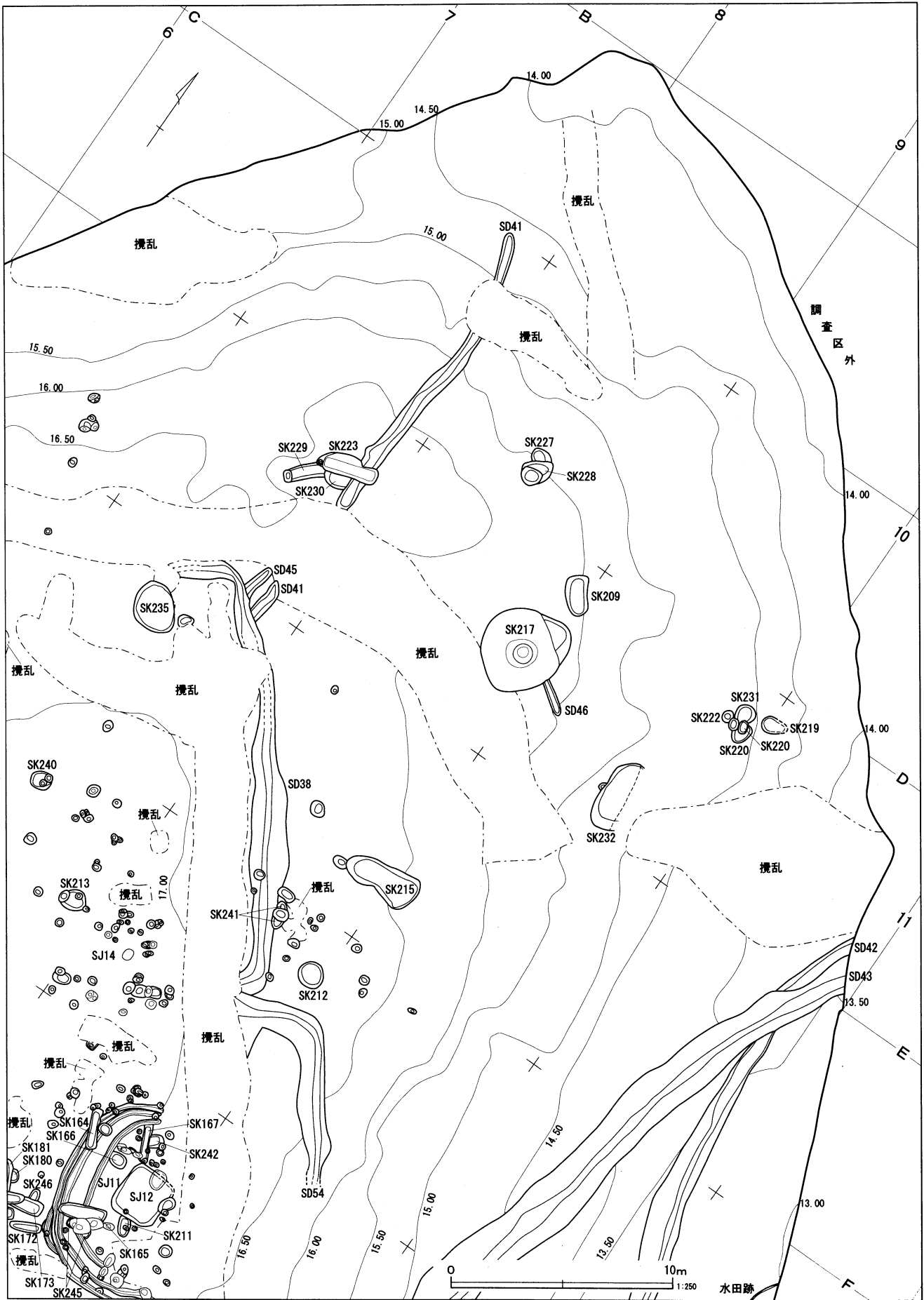
第5図 木曾免遺跡全体図



第6図 遺跡全体図(1)



第7図 遺跡全体図(2)



第8図 遺跡全体図(3)



第9図 遺跡全体図(4)



第10図 遺跡全体図 (5)

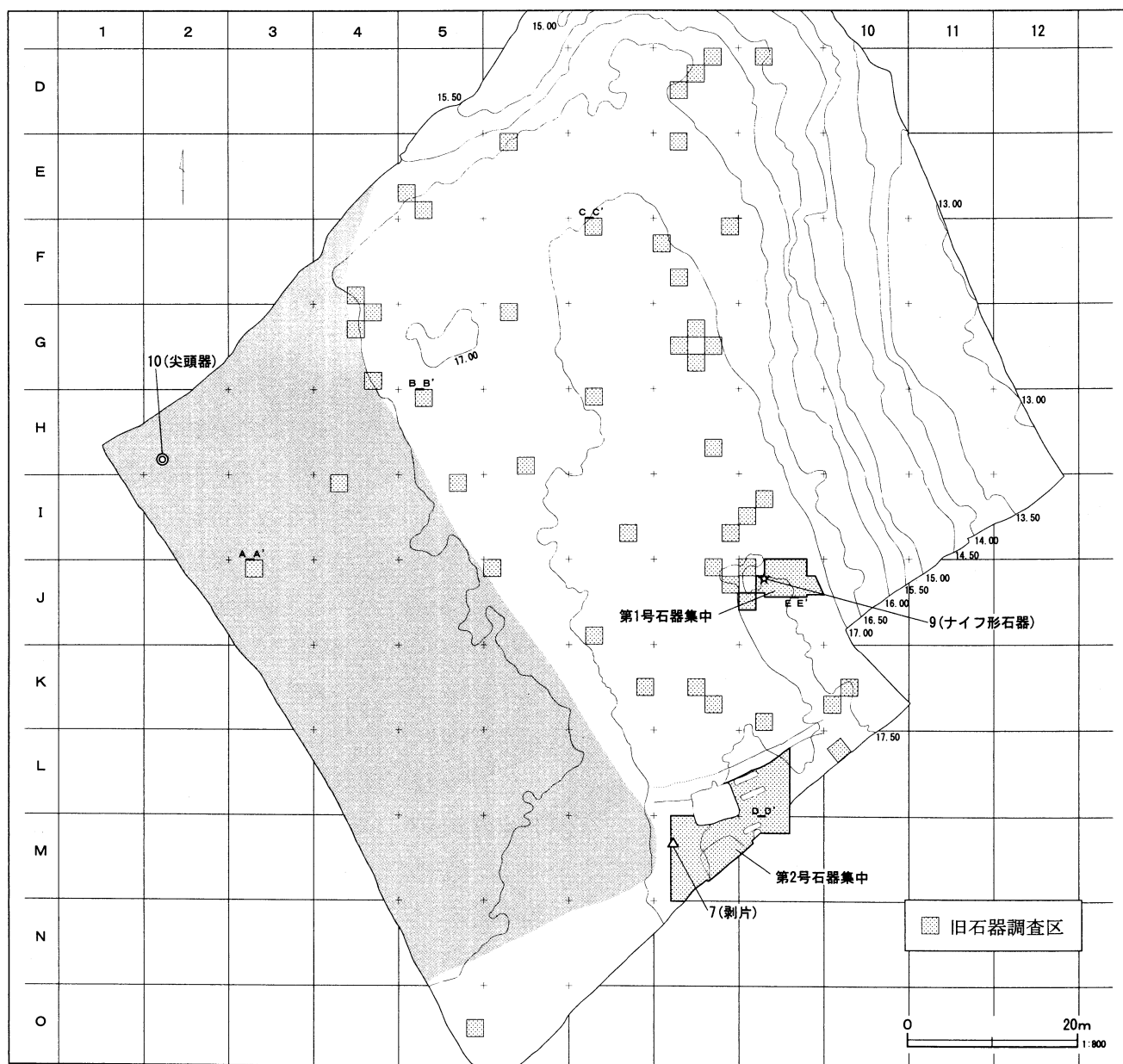
IV 台地上の遺構と遺物

1. 石器集中・礫群

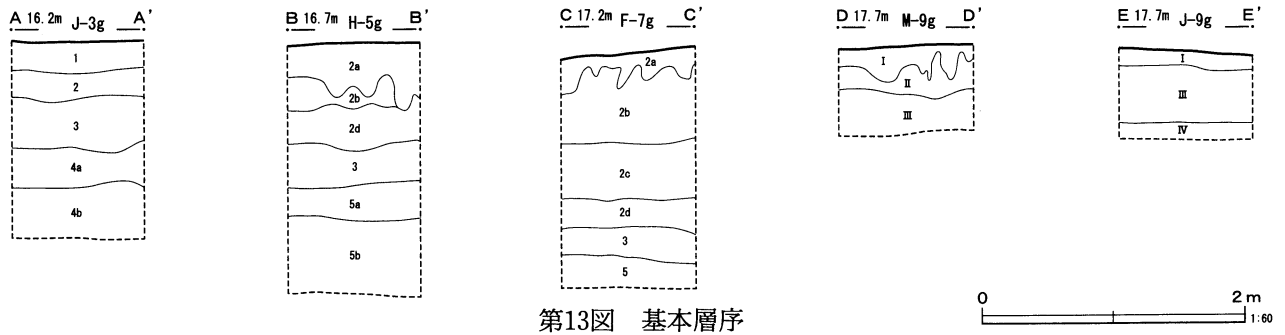
旧石器時代の調査は、鞍状に伸びた標高の高い部分及び北側を中心に一辺2mの調査区を設定した。その結果、石器集中2ヶ所と礫群1基が調査区南側の標高の高い地点から検出された(第12図)。

層位は、西部から北部にかけて遺構確認面が茶褐色にみえる範囲(第12図網かけ)は、ロームの堆積が通常とは異なり、越辺川の氾濫と地下水の

影響により各断面の層位対比が困難であった。その中で比較的安定した断面(第13図)をみると、第1層はいわゆる真土で、ローリングによって磨耗した土器片を含んでいる。第2層は立川ロームに対比される一群と思われ、暗黄褐色である。2a層はソフト化している。2b層は赤色スコリア、白色粒子を含む。2c層は赤色・黒色スコリアを含む。2d層は赤色スコリアと思われる粒子を多



第12図 旧石器調査配置図



第13図 基本層序

く含む。第3層は明褐色で径1cm程度の小礫を含む。第4層は明黄褐色で径1～5cmの鉄分の付着した小礫を非常に多く含む。4b層は4a層と比べ礫径が大きくなる。第5層、5a層は砂が多く含まれる。5b層は砂と小礫を含む、いずれも鉄分の付着がみられる。

遺物が検出された調査区南側の層位は、第I層はソフトローム。第II層は暗黄褐色で白色粒子を含む。第III層は色調の変化は少ないが、赤色スコリアと少量含む、武蔵野台地の第2暗色帯に相当すると思われる。第IV層は暗色帯より下層と思われる。

第1号石器集中 (第14図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。石器は9点で分布は散漫である。

第1号石器集中出土石器 (第17図)

1は上半部を欠損する。主要剥離面及び正面の剥離面の状況から、両側縁の整った縦長剥片と思われる。端部に使用痕と考えられる微細剥離が観察される。2は打面部分が破損したやや不定形な剥片である。右側縁に使用痕と思われる微細剥離が観察される。3は打面を破損する。正面は左側縁に自然面を帯状に残し、主要剥離面と90°異なる方向からの剥離がみられる。4は端部を欠損する。打面は幅広で単剥離面である。

第2号石器集中 (第15図)

調査区南側のL・M-8・9グリッドに位置する。石器は2点と少なく、礫群を囲むように散漫に分布する。

第2号石器集中出土石器 (第17図)

5は厚手の縦長剥片である。自然面を打面とす

る。正面の剥離面は多方向からで、石核から連続して縦長剥片を作出されたとは思えない。6は打面を欠損する。正面左側に自然面を大きく残しており、横断面は正三角形に近い。7は黒耀石の角礫から剥がされた、初期段階の剥片と想定される。

第1号礫群 (第16図)

調査区南側L・M-9グリッドに位置する。礫は拳大のものを中心に径2.5mの範囲にまとまり、炭化物集中が重なる。その周辺に散漫に分布する。

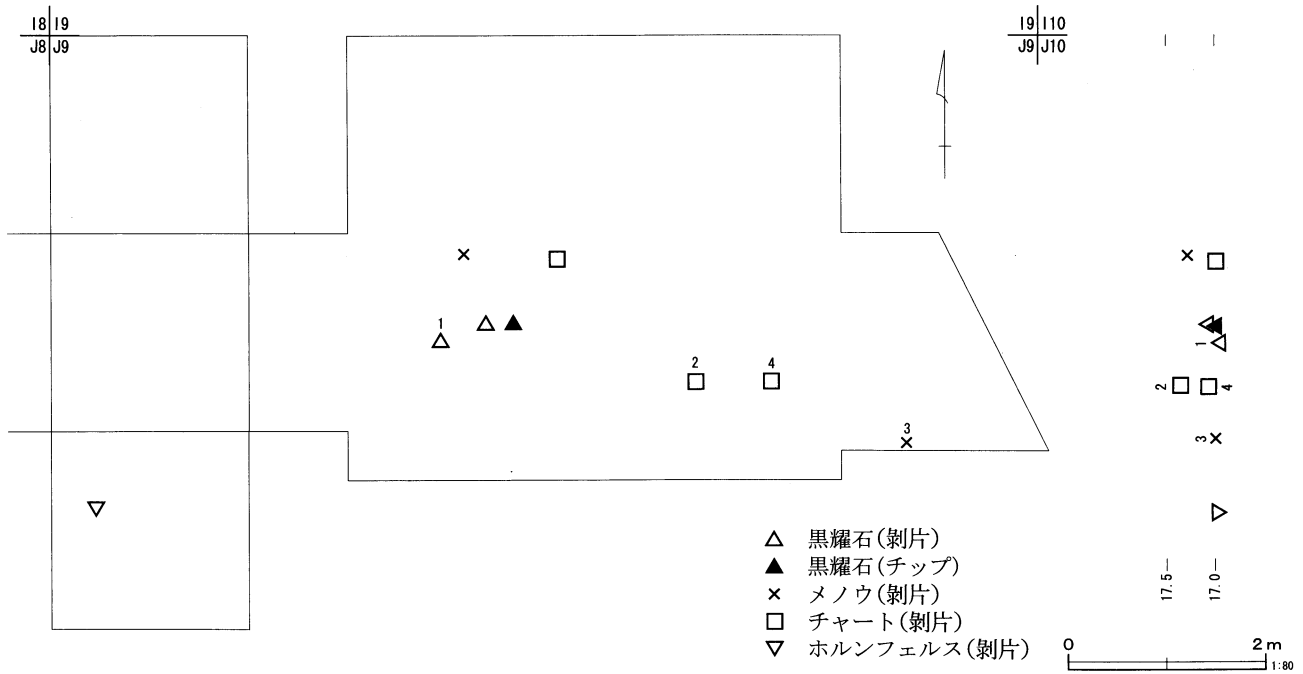
グリッド出土石器 (第18図)

グリッド及び他時期の遺構覆土中から検出された石器である。

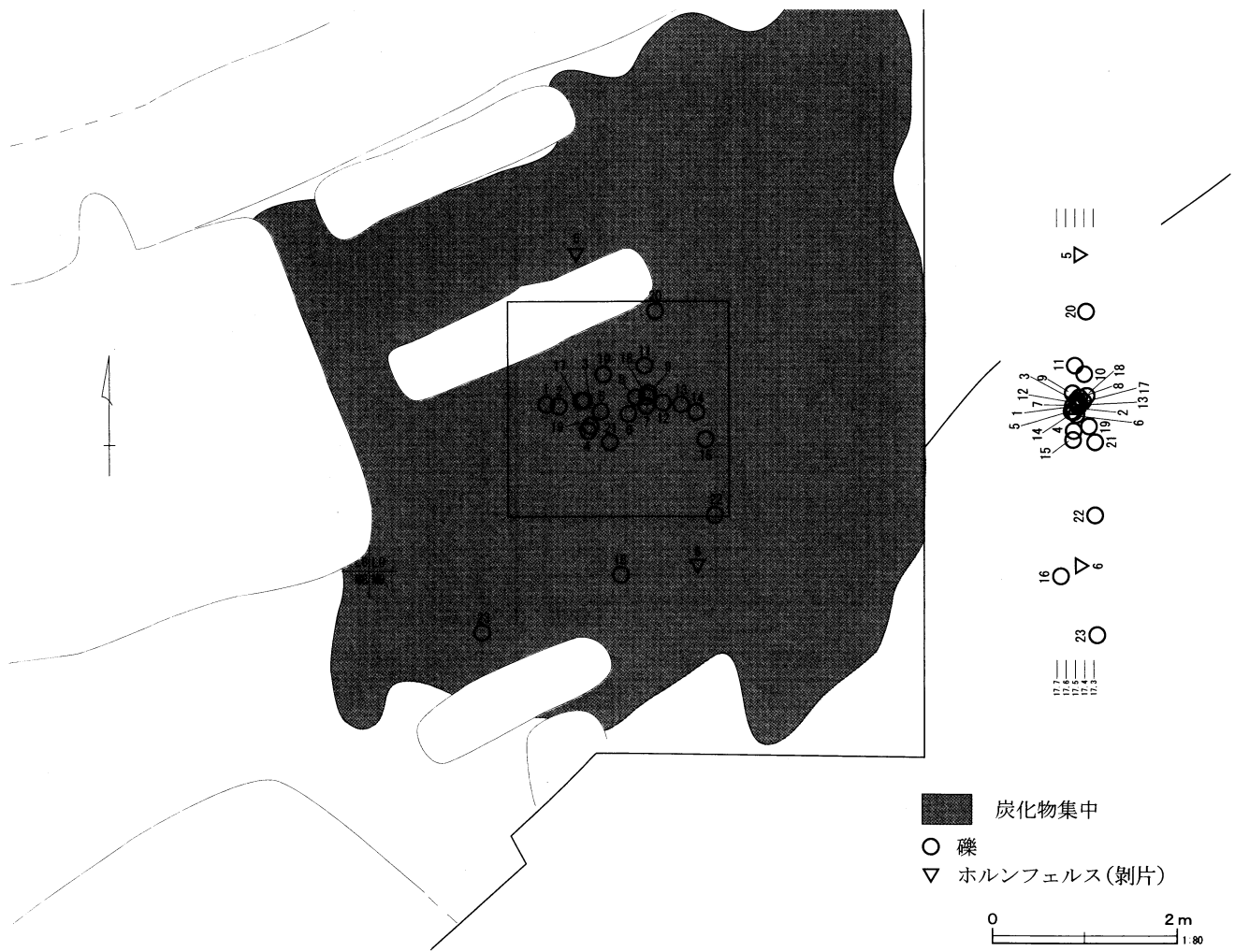
8・9はナイフ形石器である。8は幅広の縦長剥片を用いており、打面は単剥離面である。外形はペン先状を呈しており、基部中央の調整加工と刃縁の交点が最大幅となっている。調整加工は左側縁に入念に施されており、素材剥片の打面左側を大きく切断している。基端部に細かい剥離が施されている。9は横断面が三角形を呈する縦長剥片を用いている。調整加工は左側縁に急角度の規格的剥離が、右側縁に微細剥離が施されている。

10～15は槍先形尖頭器及びその未製品である。10は細身厚手の両面加工である。11は両端を欠損する。両面加工で最大幅が基部中央に位置する。横断面はレンズ状を呈する。12・13は平坦剥離の調整加工が部分的に施されている。14・15は先端を尖らせるように整形しており、いずれも槍先形尖頭器の未製品の可能性が高い。

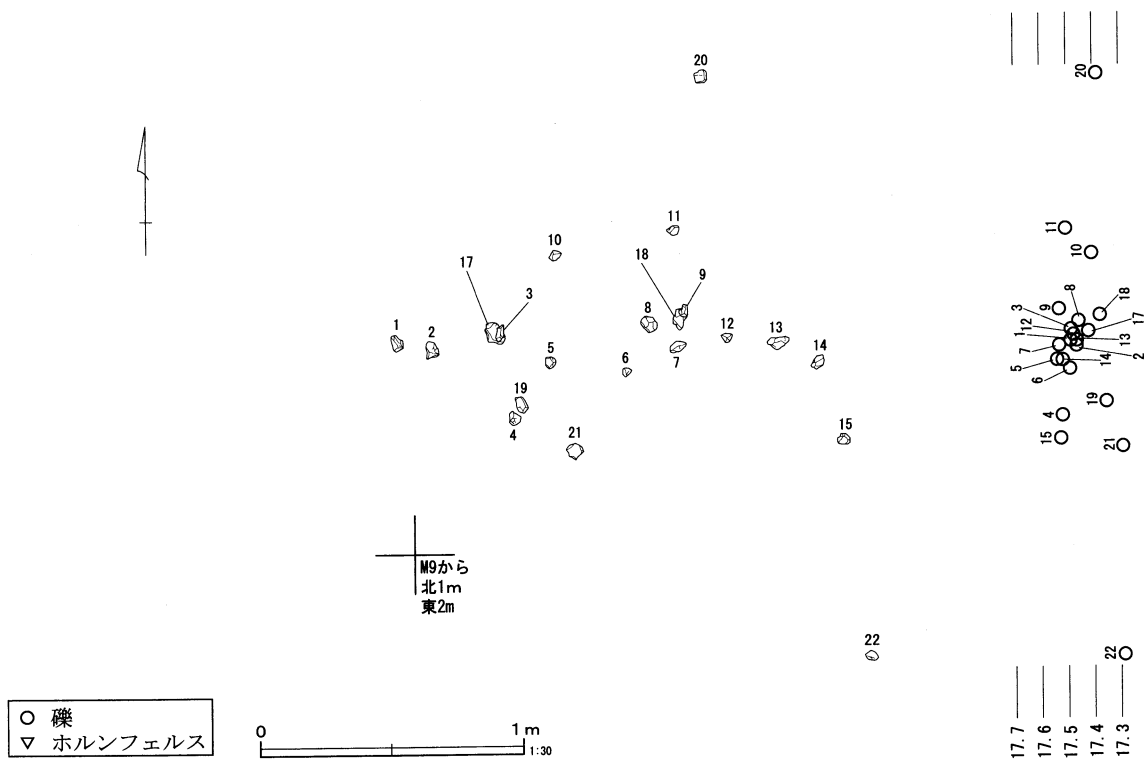
16・17は縦長剥片である。



第14図 第1号石器集中



第15図 第2号石器集中・炭化物集中



第16図 第1号礫群

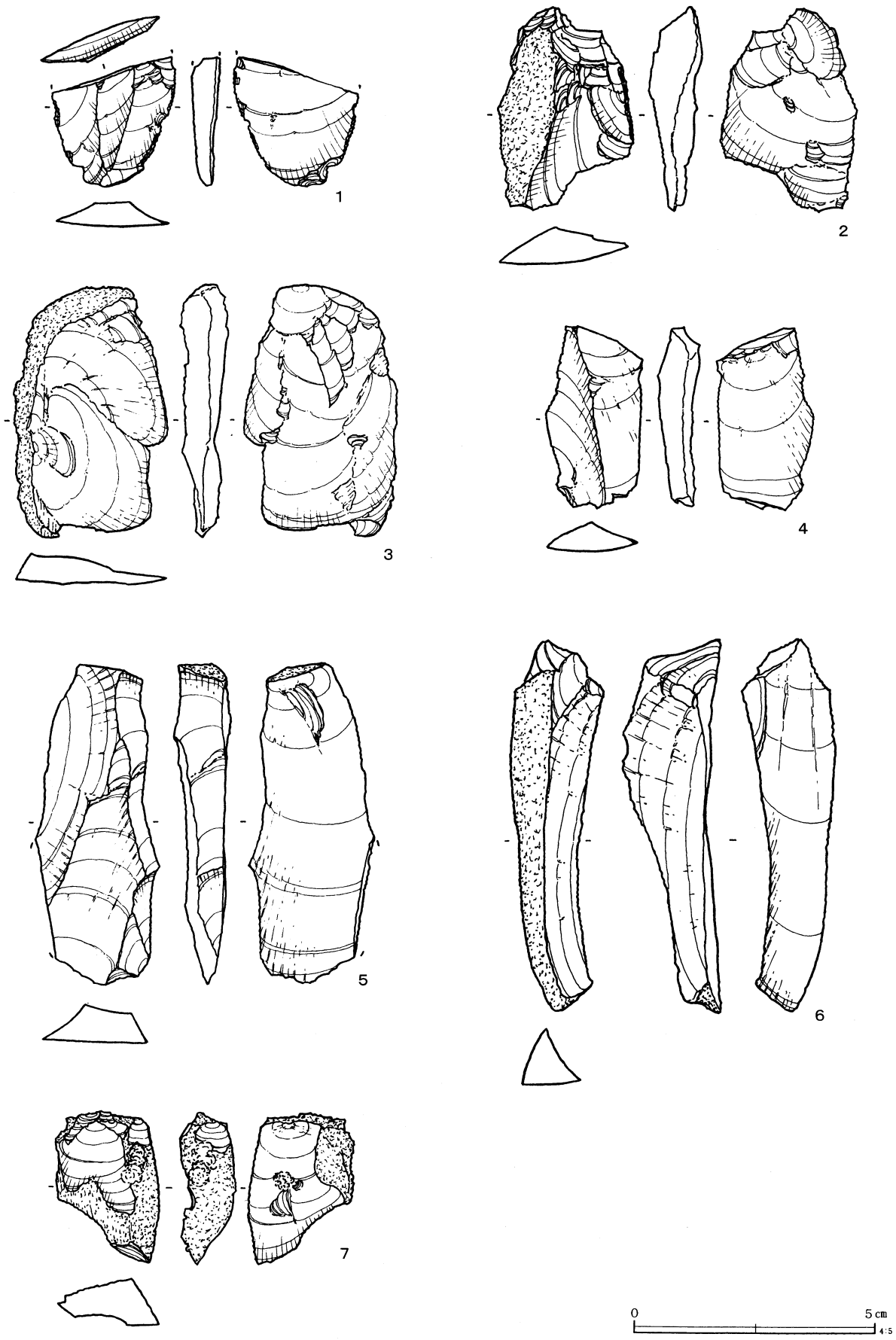
第1表 出土石器一覧表(第12・14・15・17・18図) ※原点:第1号石器集中(J-9g杭)、第2号石器集中(M-9g杭より北4mの点)

No.	遺構	取上No.	器種	北-南(m)	西-東(m)	標高(m)	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	挿図番号	備考
1	第1号石器集中	No.3	縦長剥片	3.05	4.79	16.965	[2.7]	2.6	0.5	3.4	黒耀石	第17図1	分析3
2	第1号石器集中	No.4	剥片	3.50	6.47	17.361	4.3	2.9	0.8	9.5	チャート	第17図2	
3	第1号石器集中	No.8	剥片	4.05	8.59	17.012	5.3	3.3	0.7	13.9	瑪瑙	第17図3	
4	第1号石器集中	No.5	剥片	3.48	7.33	17.084	4.1	2.1	0.7	5.3	チャート	第17図4	
5	第1号石器集中	No.1	碎片	2.88	4.80	17.004	0.5	0.3	0.2	—	黒耀石		分析1
6	第1号石器集中	No.2	剥片	2.88	4.41	17.700	2.3	0.6	0.5	1.1	黒耀石		分析2
7	第2号石器集中	No.1	剥片	0.56	2.21	17.460	6.8	2.7	0.8	19.4	ホルンフェルス	第17図5	
8	第2号石器集中	No.2	剥片	3.88	3.50	17.452	7.8	2.0	1.1	19.9	ホルンフェルス	第17図6	
9	第2号石器集中	No.6	剥片	3.11	2.22	17.091	3.2	2.2	1.0	6.6	黒耀石	第17図7	分析4
10	J-9g		ナイフ形石器				4.8	2.6	0.7	9.4	チャート	第18図8	
11	J-9g		ナイフ形石器				3.0	1.3	0.5	1.9	黒耀石	第18図9	分析5
12	H-2g		尖頭器				3.9	1.4	0.5	2.9	黒耀石	第18図10	分析6
13	G-11g(包含層Y層)		尖頭器				[4.4]	2.6	1.0	8.7	黒耀石	第18図11	分析7
14	F-11g(包含層Y層)		ナイフ形石器				[1.9]	1.2	0.4	0.7	チャート	第18図12	
15	I・J-6g(SD28)		尖頭器				[3.3]	2.2	0.7	7.0	チャート	第18図13	
16	D-8・9g(SK217)		尖頭器未製品				6.0	3.6	1.1	23.1	チャート	第18図14	
17	G・H-8、G-9g(SJ11)		尖頭器未製品				4.3	2.4	1.1	12.0	チャート	第18図15	
18	J-9g(SK36)		縦長剥片				[4.2]	2.9	0.5	7.2	黒耀石	第18図16	
19	J-8g(SK50)		縦長剥片				[5.6]	2.6	0.6	11.5	珪質頁岩	第18図17	

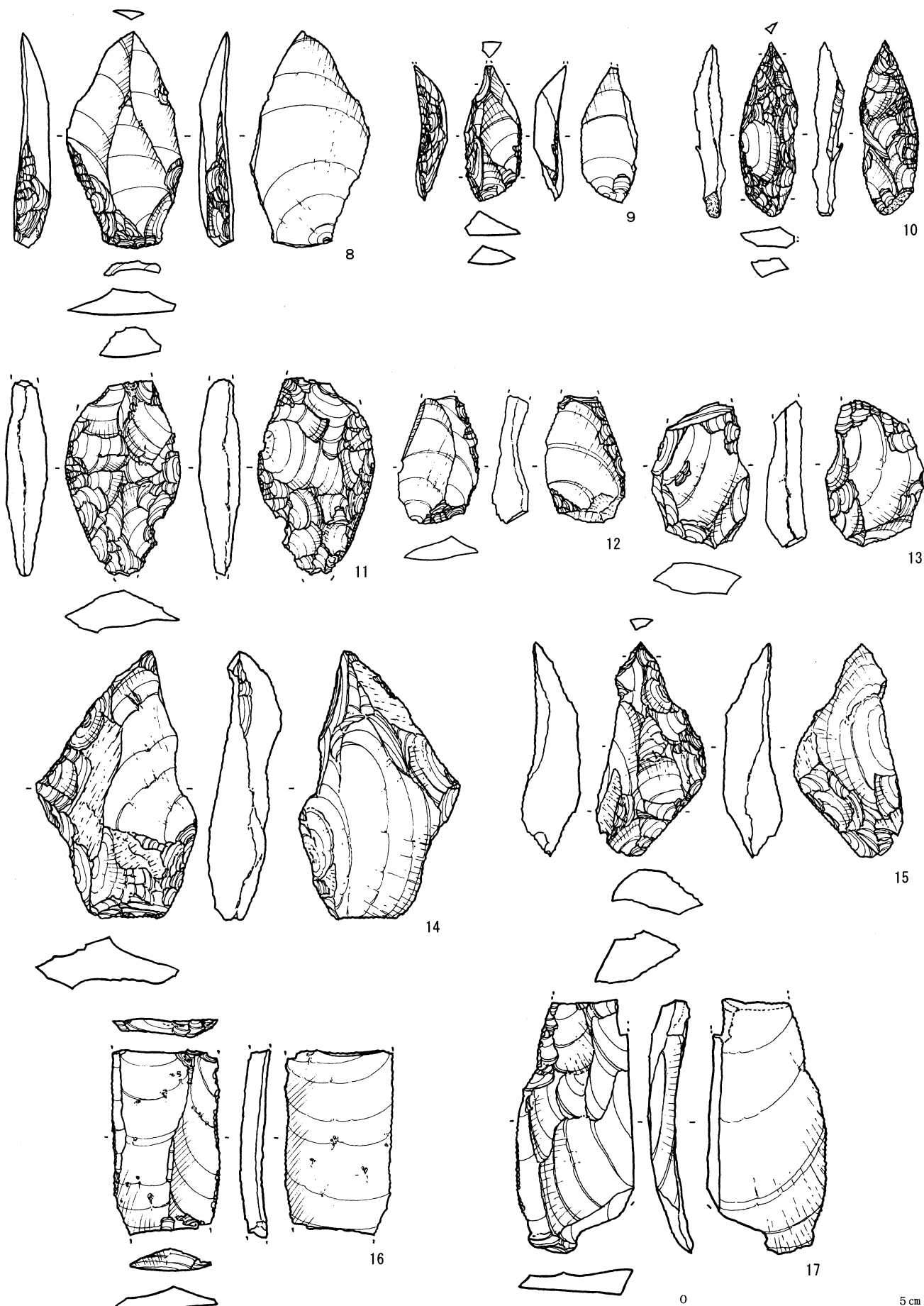
[分析:蛍光X線分析による産地推定。詳細は別稿を予定。]

第2表 L・M-9グリッド出土礫一覧表(第16図) ※原点:M-9g杭より北4mの点

番号	北-南(m)	西-東(m)	標高(m)	重さ(g)	石材	備考	番号	北-南(m)	西-東(m)	標高(m)	重さ(g)	石材	備考
1	2.21	1.91	17.395	46.9	チャート		13	2.21	3.33	17.465	90.9	チャート	
2	2.23	2.03	17.465	53.0	チャート		14	2.28	3.48	17.519	51.4	チャート	
3	2.17	2.29	17.484	42.6	チャート		15	2.58	3.58	17.525	62.9	チャート	
4	2.49	2.34	17.519	97.3	チャート		16	4.02	2.68	17.658	14.6	砂岩	
5	2.28	2.48	17.533	34.6	チャート		17	2.17	4.77	17.420	157.2	チャート	
6	2.31	2.76	17.490	95.5	チャート		18	2.12	5.48	17.480	117.4	チャート	
7	2.22	2.95	17.530	67.8	チャート		19	2.43	2.36	17.350	83.6	チャート	
8	2.14	2.85	17.455	139.8	チャート		20	1.20	3.05	17.383	57.5	チャート	
9	2.09	2.98	17.529	77.2	チャート		21	2.61	2.57	17.290	55.4	チャート	
10	1.88	2.50	17.404	45.2	チャート		22	3.34	3.68	17.284	20.0	チャート	
11	1.79	2.95	17.503	94.8	チャート		23	4.66	1.20	17.263	19.1	チャート	
12	2.19	3.14	17.479	57.5	チャート								



第17图 第1·2号石器集中出土石器



第18図 グリッド出土石器

0 5 cm 4:5

2. 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第19図)

調査区南東端のM-8・9グリッドに位置する。本調査では、第13号溝跡(環濠)の外側に唯一存在する住居跡である。住居の南半分は調査区外にあり、第18号溝跡が斜めに走り、東隅を第20号土壇に切られている。

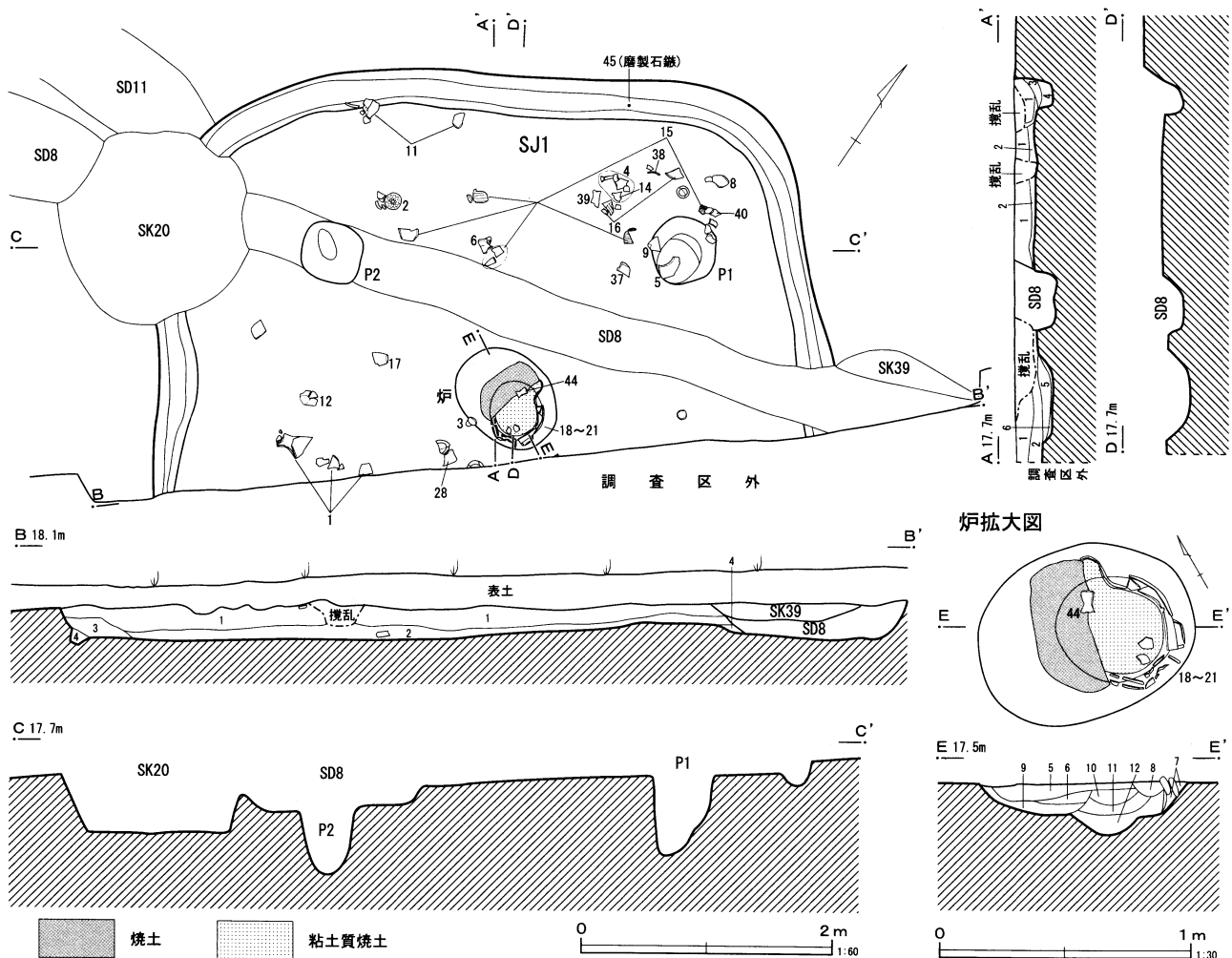
住居の全形は確認できないが、平面形は隅丸長方形であろう。規模は主軸長3.05m以上、幅5.30m、確認面からの深さは0.10~0.27mである。主軸方向はN-34°-Wを指す。床面は概ね平坦である。

炉跡は南西壁と北東壁のほぼ中央に位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は長軸0.85m、短軸0.66mである。南東方には甕(第21図18~22)が割られて埋め込まれており、その中には粘土で作った炉床が形成されていた。さらに北西方には、重ねて地床炉の炉床が延びていた。両者の新旧関係は粘土の炉床を地床炉が切って作られていることから、地床炉の方が新しい。

ピットは2本検出された。P1・2とも支柱穴で0.62、0.67mと深く、径0.50m程で掘り方は大きい。

壁溝は、検出された壁すべてに廻っており、北西側の方が幅広で深い。幅は0.16~0.32mで、深



第1号住居跡

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量・焼土粒子微量・炭化物少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(2~3cm大)少量
炭化物少量・焼土粒子微量
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量・ソフトロームブロック少量
- 4 黒褐色土 ソフトローム多量・ロームブロック(2~5cm大)多量

炉

- 5 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量
- 6 黒褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(1cm大)多量・焼土ブロック少量
- 7 黄褐色土 ロームブロック
- 8 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・焼土粒子(1~2mm大)少量
- 9 赤褐色土 焼土ブロック(1~4cm大)多量
- 10 赤褐色土 焼土粒子(1~3mm大)微量
- 11 赤褐色土 焼土粒子(1mm大)多量・焼土ブロック(1cm大)微量・粘土質焼土ブロック(1~2cm大)少量
- 12 黄褐色土 焼土粒子(1mm大)微量・焼土ブロック(1~3cm大)多量

第19図 第1号住居跡

さは0.15～0.30mである。

遺物は、弥生土器が232点出土している。ほとんどの遺物を覆土中層～下層より発見している。なお、44は、炉の覆土上層から出土し、45は、壁溝の底面直上から出土している。

第1号住居跡出土遺物（第20・21図）

1・2は、口唇部に原体LR単節縄文を施す。1は外面ハケ調整後、ミガキを加えている可能性もあるが、摩滅のため口唇の縄文ともに不明瞭である。2は、頸部に平行沈線文2条を施す。胴部には、平行沈線文3条を施した間に、1本描沈線による山形文を描く。なお、◀のヶ所に横位の刺突を3点確認できる。口縁内面には、無作為にナデ消したLR単節縄文を地に、波状沈線文を2段描いている。すべて施文方向は時計回りである。

4は、原体RL単節縄文を施文し、2条の平行沈線文を引いた上位に、波状文を施している。

5は、下方をなでて突出させた頸部の帯に、太さの異なる原体Rを擦り合わせたLR単節縄文を施文する。その上に短斜線文4条を交互に施している。内外面には刷毛目が残るミガキ調整を施す。

6は、口縁部に1本描沈線3条による連弧文を施文する。頸部には、原体LR単節縄文を横位施文後、ナデで磨り消す。その上に、5条の平行沈線を巡らし、その間に交互に施す短斜線文3条と、波状沈線文を施している。順序はすべて時計回りである。30～33も同様の文様を有する破片である。

8は、胴部下半に1本描沈線で重三角文を施す。三角文の施文順序は、中央の三角形から左辺→右辺→底辺である。全体は反時計回りに施文する。復元した文様では、三角文の各辺が共有しているが、推測の域を出ない。外面調整はヨコハケ後にミガキを軽く加えている。34も重三角文の下端が認められる破片である。胎土・色調から、6・8・30～34は同一個体の可能性がある。

9・10は、地文に原体LR単節縄文を施文後、2本描沈線による山形文を施す。その上位に同様の

工具で、多段の平行線文を加える。38も同一工具で山形文3条を施す破片である。

13は、口唇部に反時計回りに原体LR単節縄文を施文する。頸部には、現状6本一単位の櫛描波状文が確認できる。

14～16は同一個体で、復元実測を行なった。口唇部は指頭押捺を加える。胴部には、7～8本一単位の櫛歯状工具によって、横羽状文を施している。

17の口唇部には、原体LR単節縄文が認められる。胴部には、6本一単位の櫛歯状工具による横羽状文を施す。施文後、胴下半にタテミガキを加えている。内面も丁寧なミガキ調整である。

18～22は同一個体で、復元実測を行なった。口唇部に指頭押捺を加える。外面ハケ調整後、胴部に6本一単位の櫛歯状工具で、縦羽状文を施文する。その後、底部から胴下半にはタテミガキを加えている。内面は刷毛目が残るミガキを施す。なお、14～22の文様の施文順序はVI章で詳述する。

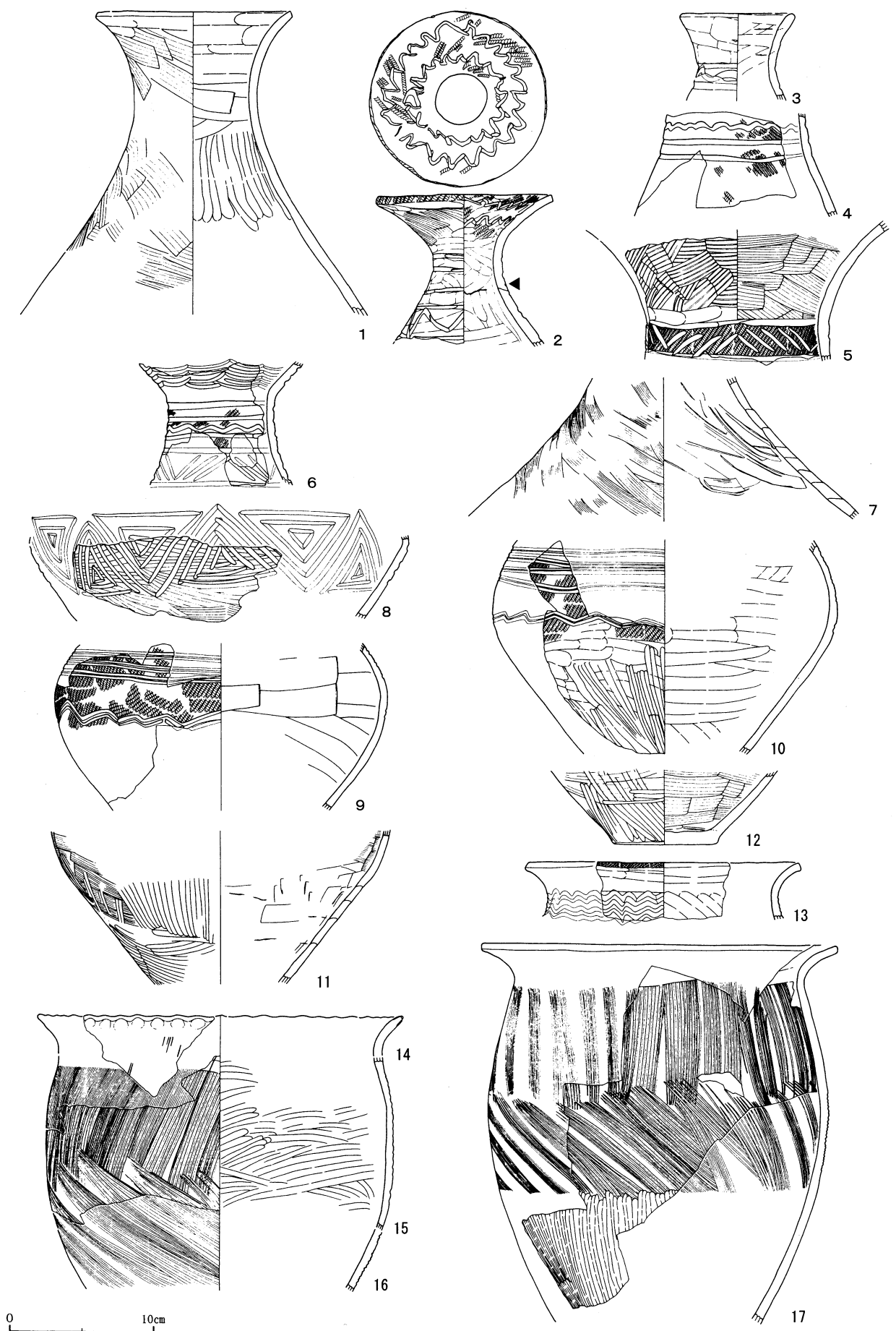
23～40は壺で、23・24は口唇部に、23は原体RL、24はLR単節縄文を施し、外面にも加える。

25～27・29は頸部で、25は平行沈線文を引き、その間に列点文を充填し、下位に3本一単位の櫛描文を加える。26は、貼付突帯上に原体LR単節縄文を施文し、5本一単位の櫛描文を垂下させる。27は、3本一単位の櫛描波状文と波状沈線文と櫛描直線文を垂下させている。29は4本一単位の櫛描文の下に、同一工具の櫛描斜線文を施している。

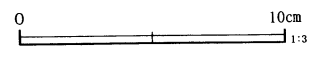
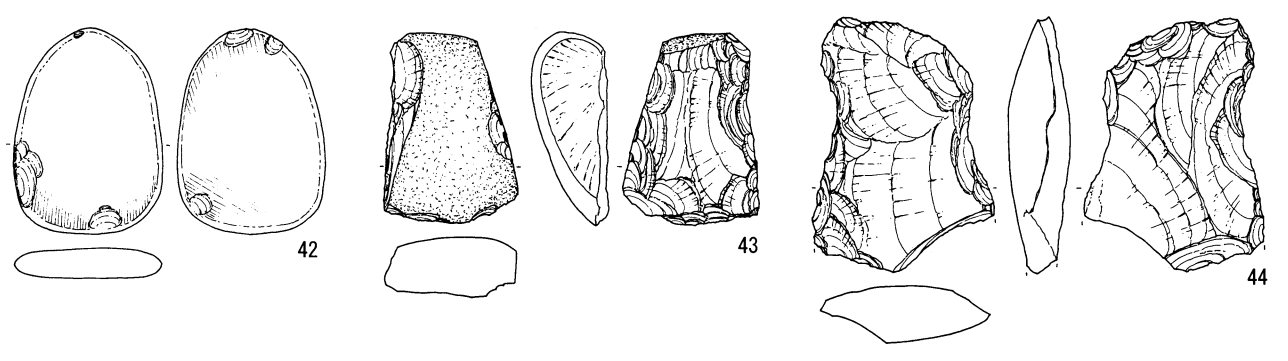
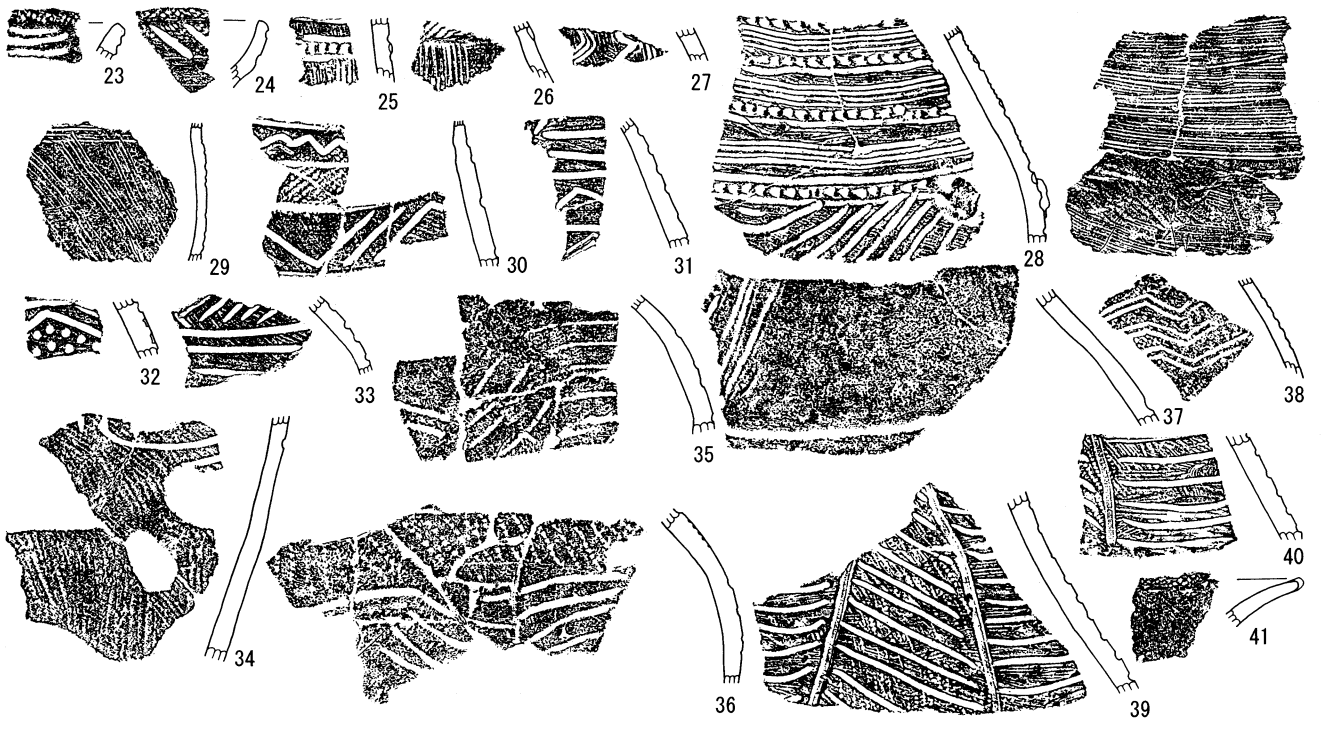
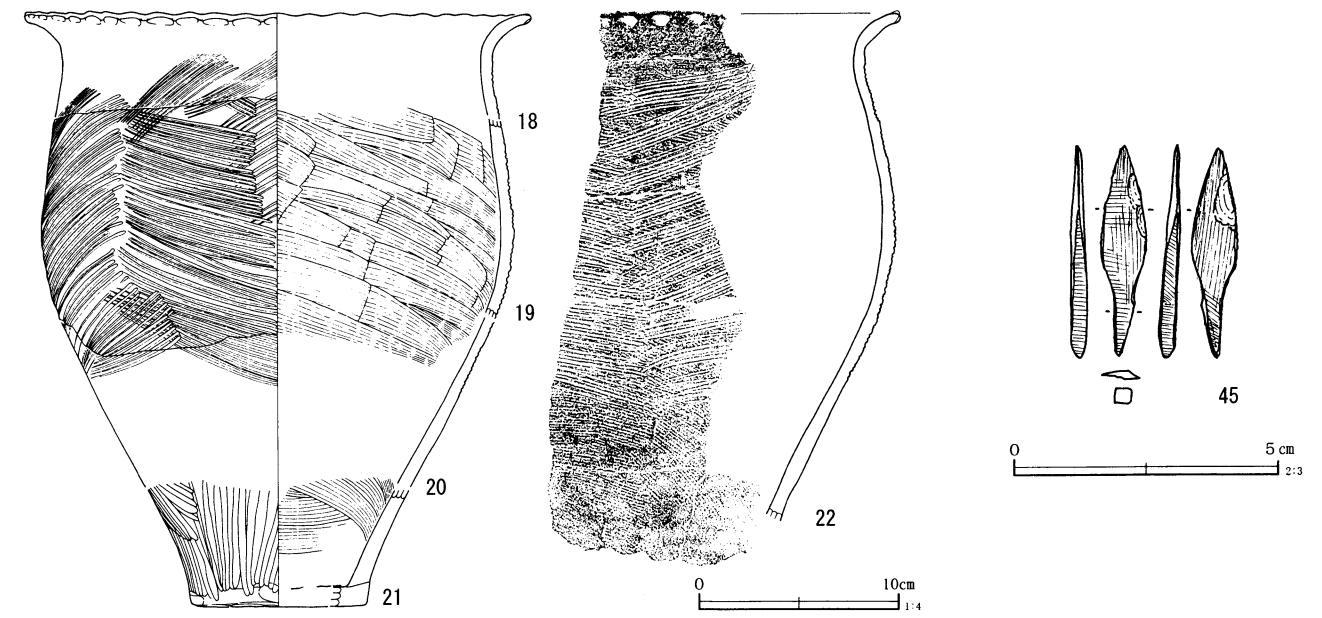
以下は胴部片で、28は押引き列点文、横位沈線、4本一単位の櫛描文を多段に施し、胴下半には連弧文を施す。35・36は波状沈線文の上位に、押引き列点文を短斜線状に施す。39は縦位直線文で区画後、破片中央区画のみ縄文を施文する。その区画内を多条の沈線で充填している。

45は有茎の磨製石鏃で、全面丁寧に研磨を加えて、刃先を薄くし、茎部も作り出している。

遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。



第20图 第1号住居跡出土遺物(1)



第21图 第1号住居跡出土遺物(2)

第3表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺	13.5	[21.2]		A B C	普通	橙	70	
2	弥生土器	壺	12.1	[10.6]		A B F	良好	橙	75	
3	弥生土器	壺	(7.6)	[6.1]		A B C E F	普通	橙	70	平行沈線より上位に、外面赤彩の痕跡残存
4	弥生土器	壺		[7.3]		A B C	普通	明黄褐	45	
5	弥生土器	壺		[9.2]		A B E F I	良好	明赤褐	50	
6	弥生土器	壺		[8.7]		B F I	普通	にぶい褐	60	8・30~34と同一個体か
7	弥生土器	壺		[10.0]		B C I	普通	橙	25	
8	弥生土器	壺		[5.9]		A B I	普通	にぶい褐	20	砂粒をほとんど含まない
9	弥生土器	壺		[11.7]		A B E F	不良	浅黄	20	
10	弥生土器	壺		[14.9]		B E F	普通	淡黄	20	砂粒をほとんど含まない
11	弥生土器	壺		[10.7]		A B C E H	普通	橙	30	
12	弥生土器	不明		[5.2]	7.2	A C F	普通	にぶい赤褐	40	底部
13	弥生土器	甕	(19.0)	[4.0]		B I	良好	にぶい褐	20	櫛歯6本一単位
14 ~16	弥生土器	甕	(25.6)	[12.1]		A B C	普通	黄橙	20	横羽状文 櫛歯7~8本一単位
17	弥生土器	甕	(24.9)	[26.4]		B E F	普通	橙	15	横羽状文 櫛歯6本一単位
18 ~21	弥生土器	甕	(25.5)	[30.1]	(8.9)	B	良好	甕	25	22と同一個体 縦羽状文 櫛歯6本一単位 砂粒をほとんど含まない
22	弥生土器	甕	口縁部~胴下半			B	良好		破片	
23	弥生土器	壺	口縁部			B C G I	普通	明褐	破片	
24	弥生土器	壺	口縁部			B C I	普通	橙	破片	
25	弥生土器	壺	頸部			A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯3本一単位
26	弥生土器	壺	頸部			A B C	普通	橙	破片	櫛歯5本一単位
27	弥生土器	壺	頸部			B G I	普通	灰褐	破片	櫛歯3本一単位
28	弥生土器	壺	胴部			A B C G I	普通	黒褐	破片	櫛歯4本一単位
29	弥生土器	壺	頸部			A B C	普通	にぶい黄褐	破片	櫛歯4本一単位
30	弥生土器	壺	頸部			A B C I	普通	にぶい褐	破片	
31	弥生土器	壺	頸部			A B C I	普通	にぶい褐	破片	
32	弥生土器	壺	頸部			A B C I	普通	にぶい褐	破片	
33	弥生土器	壺	頸部			A B C I	普通	にぶい橙	破片	
34	弥生土器	壺	頸部			A B C I	普通	にぶい褐	破片	
35	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	黄褐	破片	36と同一個体 砂粒多い
36	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	黄褐	破片	35と同一個体 砂粒多い
37	弥生土器	壺	胴部			A B C E	普通	橙	破片	砂粒多い
38	弥生土器	壺	胴部			A B C I	普通	浅黄橙	破片	9・10と色調・胎土類似
39	弥生土器	壺	胴部			A B C I	普通	橙	破片	40と同一個体
40	弥生土器	壺	胴部			A B C I	普通	橙	破片	39と同一個体
41	弥生土器	高坏	口縁部			A B C	普通	にぶい赤褐	破片	口唇にLR単節縄文 突起付く
42	石器	敲石	長さ[7.8]cm 幅[5.7]cm 厚さ1.2cm 重さ72.9g							砂岩
43	石器	打製石斧	長さ[7.3]cm 幅[5.2]cm 厚さ2.3cm 重さ145.1g							粘板岩
44	石器	打製石斧	長さ[9.7]cm 幅[6.8]cm 厚さ2.1cm 重さ143.7g							ホルンフェルス 炉出土
45	石器	磨製石鏃	長さ4.0cm 幅0.9cm 厚さ0.3cm 重さ1.3g							緑泥片岩 銅鏃の模倣

第2号住居跡 (第22・23図)

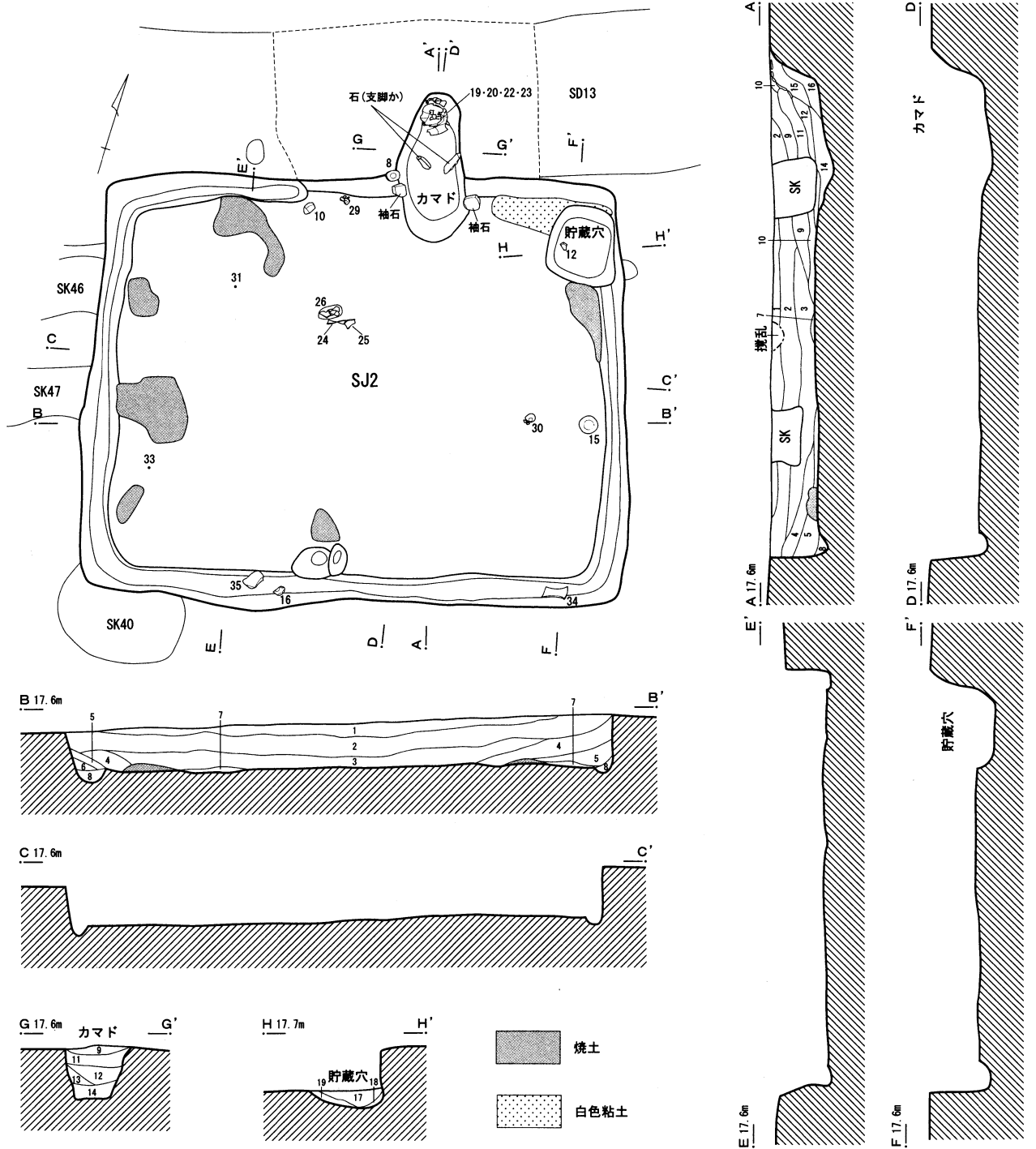
調査区南側のM・L-8グリッドに位置する。
第13号溝跡 (環濠) を壊して構築されている。

平面形は若干横長の長方形で、規模は主軸長4.08m、幅5.15mで、確認面からの深さは0.33~0.49mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。

床面は北側が少し高いが、概ね平坦である。覆土中に焼土を多く含んでいたが、床面との間に僅かな間層を挟んでおり、壁溝の覆土上には分布していない。そのことから、土止めが残存していた住居廃絶直後に投棄されたものと考えられる。ま

た北東の隅、壁から床面にかけて、白色粘土が貼られていた。貯蔵穴の平面形を妨げていなかったことから、居住時に貯蓄していたと想定できる。

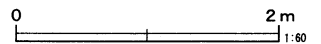
カマドは北壁にあり、第13号溝跡の覆土中に設けられていた。全長1.39mで、煙道が短く、幅は0.63mである。右袖の基部にはチャート、左袖には凝灰質砂岩の角柱状の石が据えられていた。また、砂岩製の棒状の石2本が、斜めに立った状態で出土した。出土位置から支脚の可能性があり、横二連のカマドであったと考えられる。カマド上層では、破壊された天井部の粘土がこびりついた



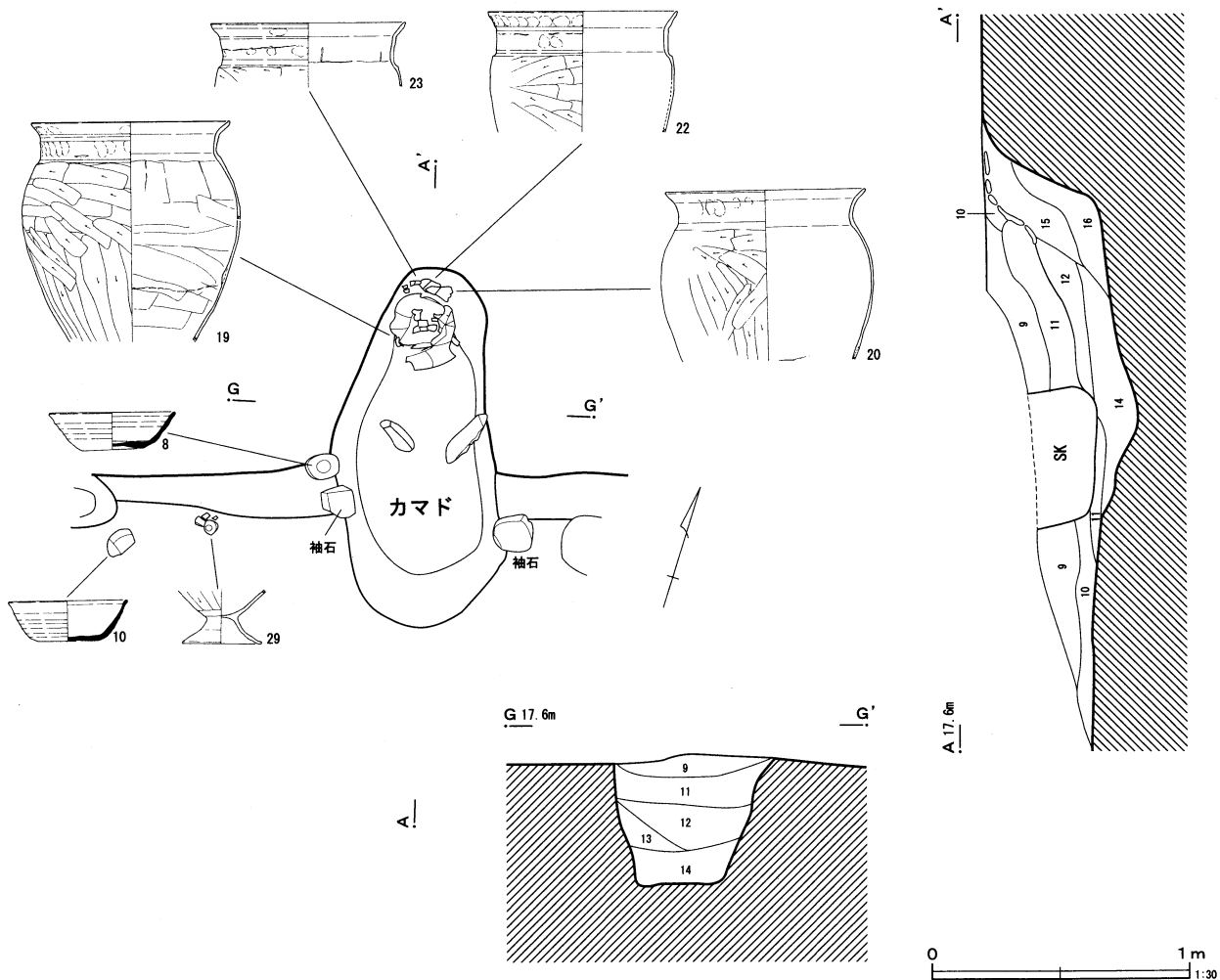
第2号住居跡

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量・焼土粒子微量・炭化物微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量・炭化物少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量・炭化物少量・ロームブロック (1~10cm大)少量
- 4 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量・炭化物少量・ロームブロック (2~3cm大)少量
- 5 黒褐色土 ローム粒子多量・ソフトローム少量
- 6 黒褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック (3~5cm大)多量
- 7 黒褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック (2~3cm大)多量
- 8 黄褐色土 ソフトローム多量・ロームブロック (2~3cm大)多量
- 9 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量・白色粘土ブロック (1~3cm大)多量
- 10 灰白色土 白色粘土ブロック [天井崩落層]

- 11 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量・白色粘土ブロック (1~3cm大)少量
- 12 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子多量・焼土ブロック (1cm大)少量
- 13 黒褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック (1~3cm大)少量・焼土粒子多量・焼土ブロック (1cm大)多量
- 14 赤褐色土 焼土粒子多量・焼土ブロック多量 [灰層]
- 15 黒褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック多量 (2~3cm大)・白色粘土ブロック (2~3cm大)多量・焼土粒子多量
- 16 黒褐色土 貯蔵穴 ローム粒子多量・焼土粒子少量 [掘り方]
- 17 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子多量・炭化物微量
- 18 黒褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック (1~3cm大)多量
- 19 黄褐色土 ソフトローム多量



第22図 第2号住居跡



第23図 第2号住居跡カマド

状態で甕 (第24図19) が出土し、左袖直上では転落したような状態で坏の完形品 (第24図8) が出土した。カマド奥の土師器甕は、煙出しとして使用されていたと思われる。

支柱穴は検出されなかった。しかし、南壁下に入口部のピットが検出された。そのやや西寄りでは、段状にロームブロックが投棄されていたが、その性格は不明である。

貯蔵穴は北東隅に検出された。東側が張り出す方形で、規模は長軸0.72m、短軸0.69m、深さ0.21mである。

壁溝は北壁の一部分以外、検出された壁に廻っている。幅0.17~0.39mで、深さ0.15~0.89mである。

遺物は、概ね覆土下層より出土している。

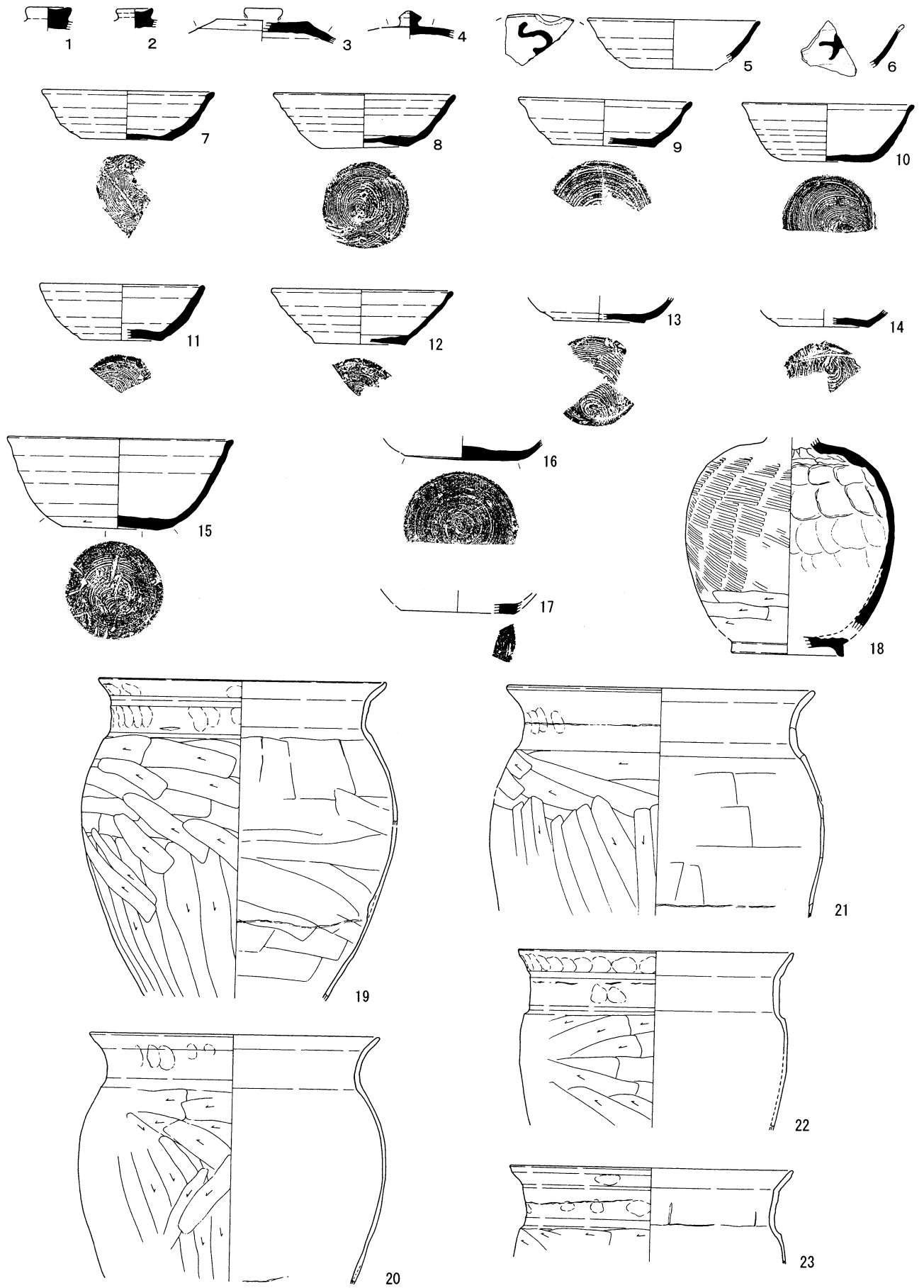
第2号住居跡出土遺物 (第24・25図)

出土遺物は須恵器坏・蓋・無台埴・長頸瓶、土

師器甕・小型台付甕、鉄製品、砥石がある (第24・25図)。第24図1~4は須恵器蓋である。1~3は胎土から南比企産、無台埴蓋と考えられる。4は小さな宝珠つまみが付く。白色微細砂粒が目立つが白色針状物質はなく、産地は不明。混入の可能性が高い。内面は摩滅している。5~14・16・17は須恵器坏。5は南比企産で底部を欠く。体部外面に墨書。字形は「郷」にも見えるが不明とした方がよかろう。6も墨書土器で字は判読できない。

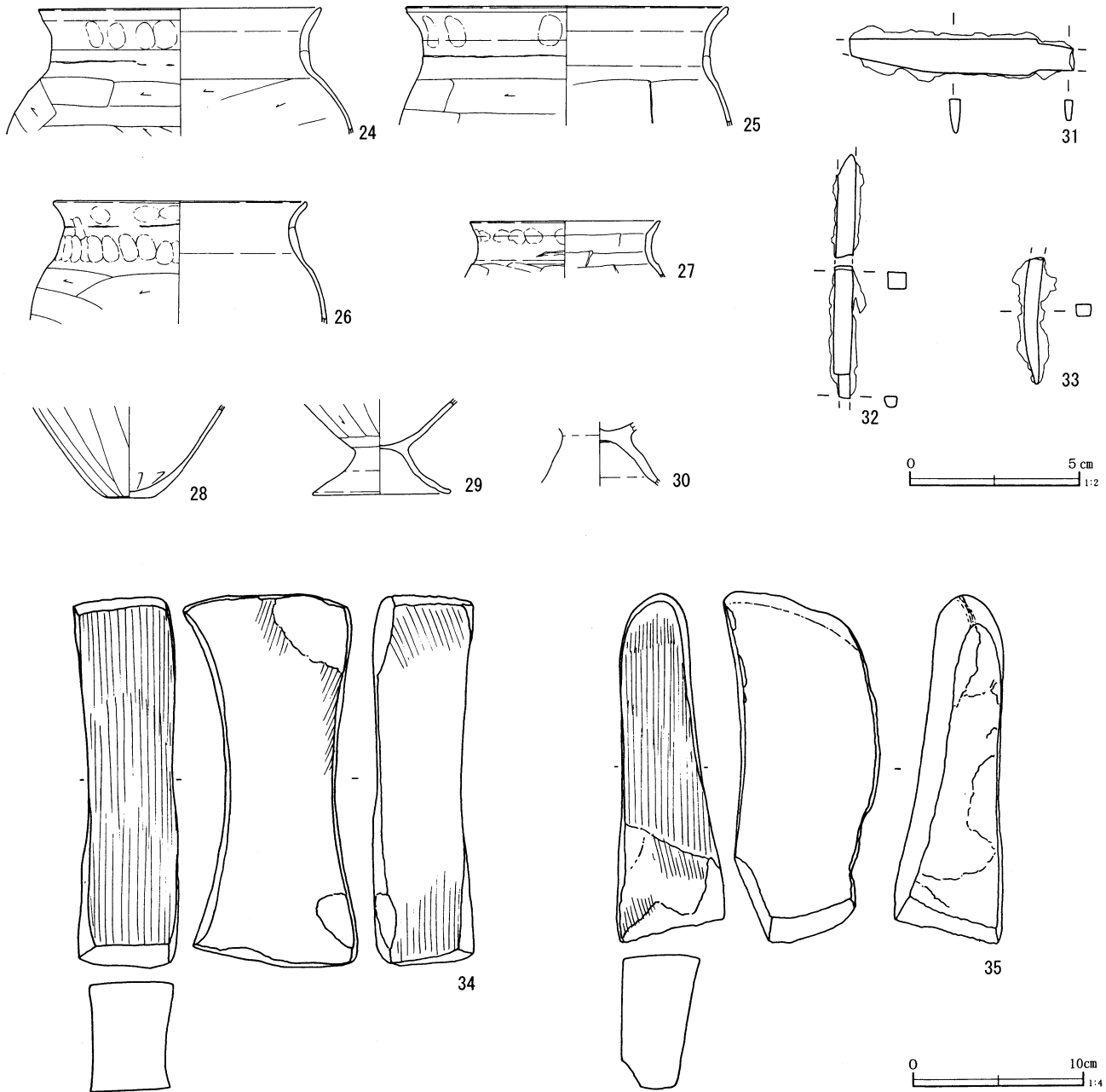
7~9はやや浅身の器形で底部は回転糸切り後無調整。7・8は南比企産、9は東金子産である。10~12は深身の器形で、底部は回転糸切離し後無調整。底径は口径の1/2前後と底径の小型化は進行していない。

13・14は底部破片。回転糸切り後無調整で南比



第24图 第2号住居跡出土遺物(1)

0 10cm
1:4



第25図 第2号住居跡出土遺物(2)

企産。

16は底部全面回転ヘラケズリ調整の大型坏。8世紀前半に遡る混入品と考えられる。17も底部回転ヘラケズリ調整。内面は非常に平滑に摩滅し、転用硯かもしれない。東金子産か。混入であろう。

15は須恵器無台塼。底部回転ヘラケズリ後、周辺及び体部下端を回転ヘラケズリ調整している。ヘラケズリ調整は残すものの底径は小型化し、同種の中では新しい様相がうかがえ、伴う資料と見てよい。

18は須恵器長頸瓶。胴部平行叩き、下位はヘラケズリ調整される。肩部には自然釉が厚く掛かる。細頸であることから水瓶となる可能性があろう。南比企産である。

19～26・28は土師器甕。いわゆる「コ」の字状口縁甕である。頸部が直立またはやや外傾気味であり、同種の型式変化の中では古い段階に位置づけられる。胴部上半は横方向、中位以下は縦方向のヘラケズリ調整。器壁は薄い。27・29・30は土師器小型台付甕。

31は鉄製刀子。切先と基部の大半を欠く。背関はしっかりしているが、刃関は鈍角でやや不明瞭である。32は角棒状鉄製品。図上下端に関が見えることから鉄鏃の基部の可能性はある。33はやはり角棒状鉄製品の先端部破片である。鉄鏃または鉄釘であろうか。

34・35は大型の砥石。長さは約20cmを超える。34は四面とも良く使用され、特に表裏面は滑らかに磨り減っている。35は三面が使用されて、裏面と下部は欠損している。

須恵器坏類は相対的に浅身の器形を遺し、底部の小型化がさほど進んでいない点、無台碗の特徴などから渡辺編年（渡辺1990）HVII期相当、土師

器「コ」の字状口縁甕の形態も該期として違和感はない。本住居跡は9世紀前半から中頃にかけての時期と考えられる。

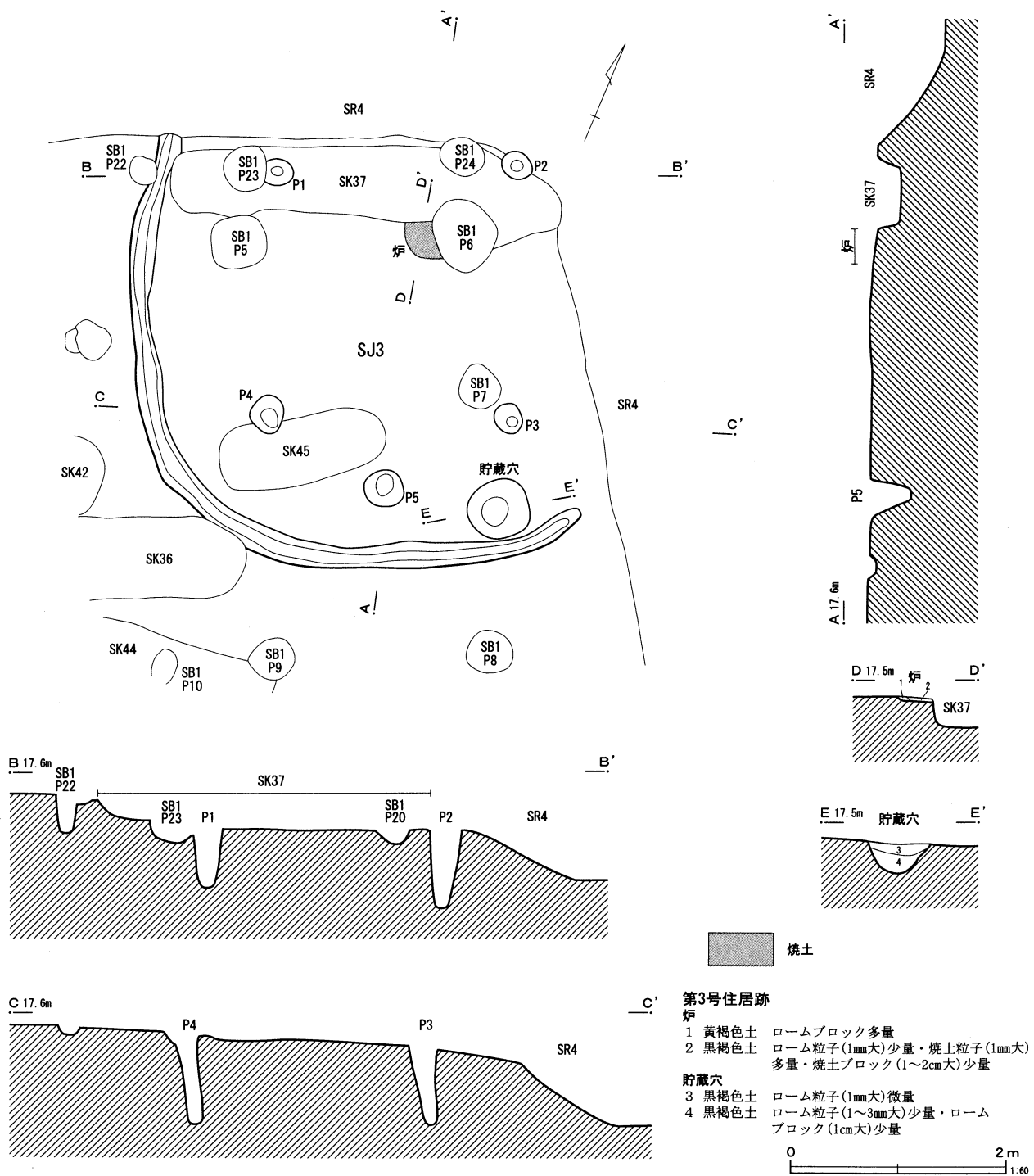
第3号住居跡（第26図）

調査区中央東側のI・J-9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓に北・東側を削平されて、第36・45号土壇に壊されている。また、第1号掘立柱建物跡、第37号土壇に炉跡の大半を削平されている。精査当初、炉跡以外の施設は確認できなかったため、現状で床面は残存していない。

平面形は壁溝のみで推定すると、円形を呈する。規模は、主軸長4.16m以上、幅は3.99m以上である。主軸方位はN-21°-Wを指す。

第4表 第2号住居跡出土遺物観察表（第24・25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	蓋		[1.5]		G I	普通	黄灰白	90	南比企産 つまみ最大径3.3cm
2	須恵器	蓋		[1.4]		G I	普通	明灰	90	南比企産 つまみ最大径2.6cm
3	須恵器	蓋		[1.6]		G I	良好	灰	40	南比企産 つまみ欠
4	須恵器	蓋		[1.9]		C G	良好	灰	80	産地不明 宝珠つまみ 混入か 内面摩滅
5	須恵器	坏	(13.0)	2.9		G I	普通	青灰	10	南比企産 外面墨書「郷」?
6	須恵器	坏				B G I	普通	暗灰	破片	外面墨書
7	須恵器	坏	(12.2)	4.0	6.6	A G I	普通	灰	15	南比企産 「一」状のヘラ記号
8	須恵器	坏	12.7	[4.0]	6.2	A G I	普通	黄灰白	100	南比企産
9	須恵器	坏	(12.0)	[3.5]	(7.8)	A G	普通	青灰	25	
10	須恵器	坏	(12.0)	[4.2]	6.2	G I	普通	青灰	60	南比企産
11	須恵器	坏	(11.5)	4.0	(5.7)	A G I	普通	明灰	25	南比企産 器壁厚い 外面火瘃痕有り
12	須恵器	坏	(12.7)	3.9	(6.5)	B G	普通	灰白	20	南比企産
13	須恵器	坏		1.9	6.4	C I	普通	明灰	60	南比企産 煤状物質付着
14	須恵器	坏		[1.2]	6.3	G I	普通	灰	40	南比企産
15	須恵器	無台碗	15.5	[6.5]	6.7	A G I	普通	青灰	100	南比企産 底部回転糸切り後、周辺+体部下端回転ヘラケズリ（ロクロ時計回り）
16	須恵器	坏		[1.7]	8.0	C G I	良好	灰	60	南比企産 内面著しく摩滅 転用硯か
17	須恵器	坏		[0.9]	(8.0)	G	良好	青灰	5	東金子産か 内面平滑 転用硯か
18	須恵器	長頸瓶		[15.4]	7.8	H I	良好	灰	40	南比企産 水瓶か 外面自然釉 胴部平行叩き 下端手持ちケズリ
19	土師器	甕	20.4	[22.7]		B E F G	普通	明褐	60	胴部下半ノッキング痕
20	土師器	甕	(20.4)	[17.5]		B E F G	普通	褐	10	
21	土師器	甕	(21.6)	[6.1]		D E F G	普通	橙褐	20	
22	土師器	甕	(19.5)	[2.4]		B E F G	普通	黄褐	15	23と同一個体の可能性有り
23	土師器	甕	20.0	[6.6]		B E F G	普通	黄褐	15	22と同一個体の可能性有り
24	土師器	甕	(16.8)	[7.5]		D E G	普通	橙褐	20	
25	土師器	甕	(19.1)	[7.1]		D E F G	良好	橙褐	20	
26	土師器	台付甕	(14.8)	[7.2]		D E G	普通	暗褐	20	
27	土師器	小型台付甕	11.1	[3.3]		B E F G	普通	褐	60	
28	土師器	甕		[5.4]	(3.0)	D E F G	普通	橙褐	40	底部
29	土師器	小型台付甕			8.0	C D E G I	普通	茶褐	80	
30	土師器	小型台付甕				D E G I	普通	茶褐	80	
31	鉄製品	刀子	長さ[6.6]cm 刃幅0.7~1.1cm 背幅0.3cm							
32	鉄製品	棒状品	長さ[6.9]cm 幅0.5cm 厚さ0.5cm							
33	鉄製品	棒状品	長さ[3.7]cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm							先端部釘か
34	石製品	砥石	長さ22.0cm 幅10.0cm 厚さ6.4cm 重さ1880g							
35	石製品	砥石	長さ20.0cm 幅9.4cm 厚さ[8.0]cm 重さ1385g							



第26図 第3号住居跡

炉跡は住居中央よりやや北東側に寄っている。地床炉で、浅い掘り方が掘られている。推定規模は直径約0.53mである。

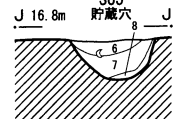
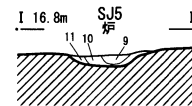
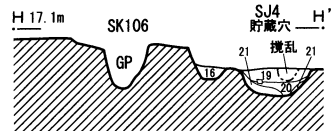
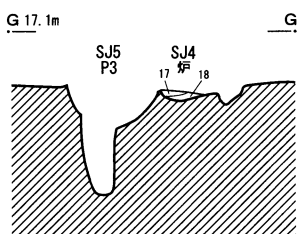
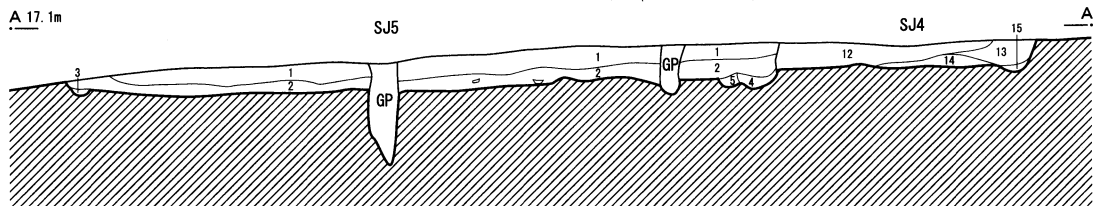
ピットは5本検出され、支柱穴と入口部のピットである。P1~3は径0.25m前後、P4・5は径0.35mで、平面形はすべて円形である。深さはP1・5が0.58、0.37mと浅く、P2~4は0.70~0.91mと深い。

貯蔵穴はP3とP5間の南側に確認された。平面形は径0.55mの円形で、深さ0.29mである。

壁溝は、西・南側に廻っている。幅は0.23~0.26mで、深さは0.07~0.12mである。

遺物は、弥生土器小片7点が出土しているが、図示可能なものはなかった。

遺構の時期は、各施設の組み合わせと平面形態から弥生時代の所産と思われる。



第4号住居跡

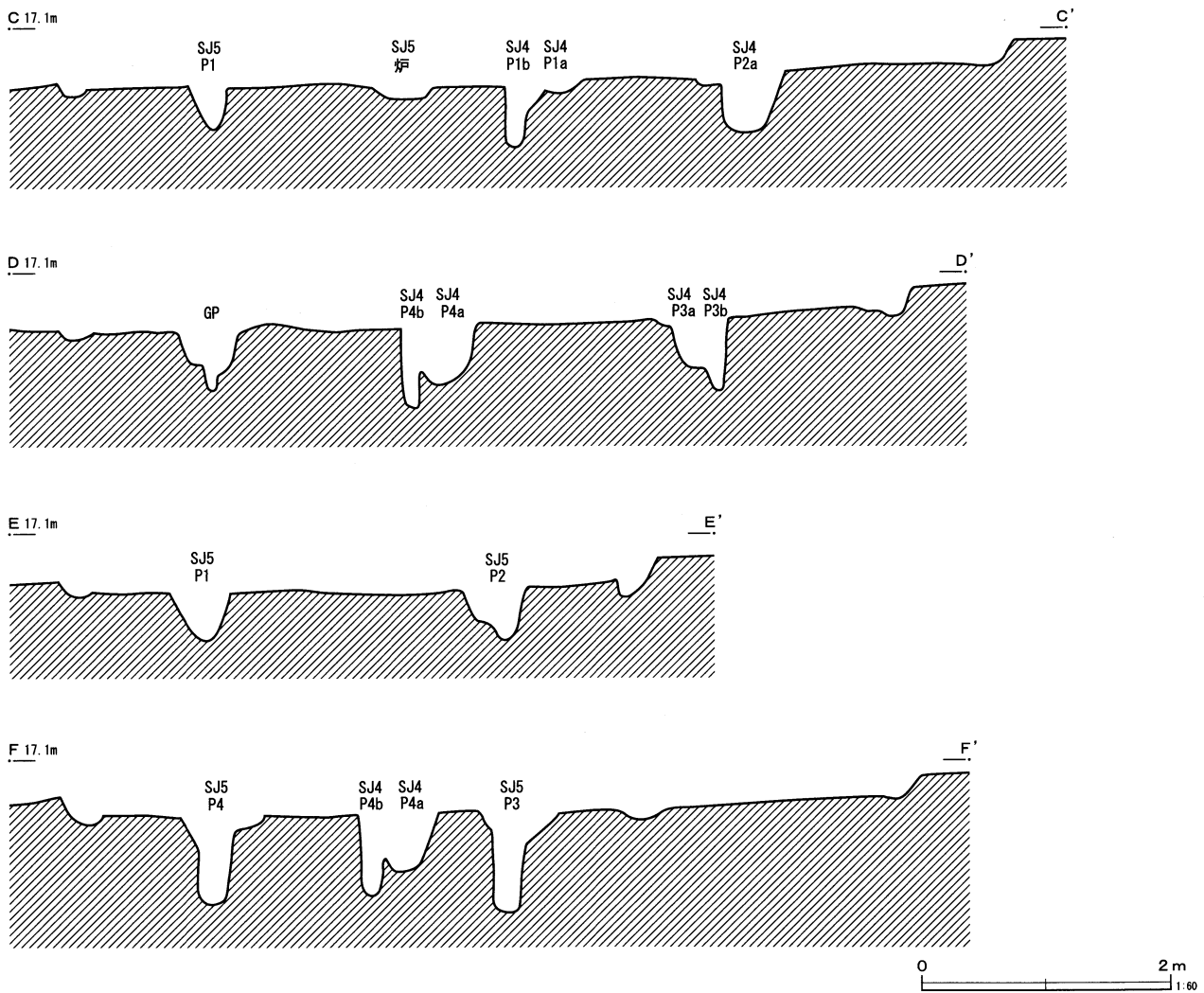
- 12 黒褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量
 - 13 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)多量
 - 14 暗褐色土 ローム粒子(1~3mm大)少量・ロームブロック(3~5cm大)少量
 - 15 黄褐色土 ロームブロック(2~4cm大)多量
 - 16 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・ロームブロック(1cm大)少量
- 炉**
- 17 黒褐色土 ロームブロック(1cm大)少量・焼土粒子(1~3mm大)多量
 - 18 黒褐色土 ロームブロック(1~3cm大)多量・焼土粒子(1mm大)微量
- 貯蔵穴**
- 19 暗褐色土 ローム粒子(1~3mm大)少量
 - 20 暗褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量
 - 21 暗褐色土 ソフトロームブロック(1cm大)多量

第5号住居跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・ソフトロームブロック(3cm大)微量・灰褐色土ブロック(1~4cm大)少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子(1~2mm大)微量・ソフトロームブロック(3~4cm大)少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)微量
 - 4 暗褐色土 ソフトロームブロック(3cm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)多量
- 貯蔵穴**
- 6 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・ソフトロームブロック(2~3cm大)少量
 - 7 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)微量
 - 8 暗褐色土 ロームブロック(1cm大)少量
 - 9 暗褐色土
 - 10 黒褐色土 ローム粒子(1mm大)微量・ソフトロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1~4mm大)多量
 - 11 褐色土 ソフトロームブロック(2cm大)多量
 - 12 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量



第27図 第4・5号住居跡(1)



第28図 第4・5号住居跡(2)

第4号住居跡 (第27図)

調査区中央のJ-6・7グリッドに位置する。第5号住居跡と重複し、同住居跡に壊されており、壁溝も全周せず、全体の規模は不明である。

主軸方向は、炉跡の位置・長軸方向と貯蔵穴の位置より、主軸方位はN-25°-Wを指すと考えた。唯一、棟と直交して出入口が付く。

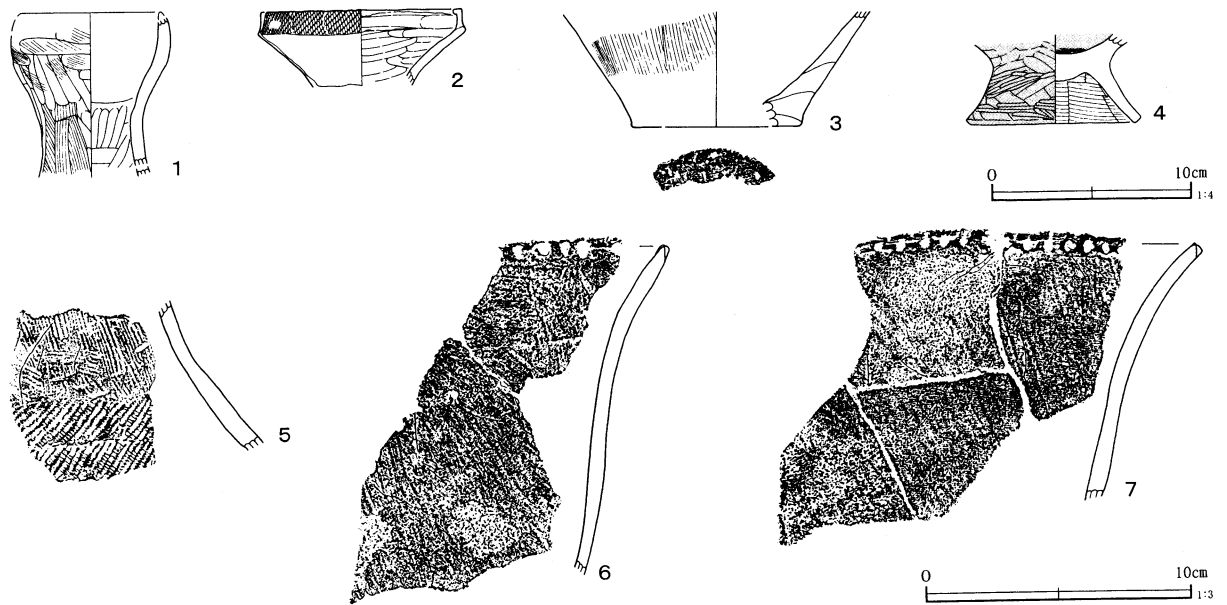
壁溝から推定すると、平面形は隅丸長方形で、幅は5.25mになる。主軸長は4.50mで、確認面からの深さは0.15~0.22mを測る。

炉跡は、住居中央よりやや西側、第5号住居跡の部分に残骸が発見された。平面形は楕円形で、規模は長軸0.47m、短軸0.33m、深さ0.09mと浅い掘り込みであった。

ピットは主柱穴4本が検出され、それぞれの主

柱穴近くにさらに1本ずつ発見した。おそらく一度、建て替えが行なわれたと考えられる。柱穴aの方は平面形が大きく、建て替え時に柱を抜き取るため、周りを掘削したと思われ、柱穴aが古いと考えられる。P1は第2次の柱穴と重なっているため、平面形も径0.34mと小さい。深さは0.20と浅いことから、P1a・bは、建て替え時にも同じ場所を使用したと思われる。P2~4aは楕円形で、0.48~0.57mと大きく、深さも0.50m前後でbより浅い。一方、新しいP1~4bは、径0.30m以下で小さく、深さは0.65mと深い。P1bのみ、深さ0.51mとaと同じで、このことから考えても、P1の位置を変更しなかったと言える。

貯蔵穴は、P4のすぐ南側に位置し、平面形は楕円形で、規模は長軸0.62m、短軸0.53m、深さ



第29図 第4号住居跡出土遺物

0.19mである。

壁溝は、北側から東側、南側とすべて廻っているが、西側は第5号住居跡に壊されて検出されなかった。幅0.30mで、深さは0.03~0.08mと浅い。

遺物は、覆土中から総数127点出土した。そのうち、弥生土器125点、石器2点である。弥生土器の約7割は、無文の胴部小片であった。石器は大きく欠損しており、図示できなかったが、敲石と磨石と思われる。また、貯蔵穴の覆土中層から壺口縁部(第29図1)が、周溝底面直上から高環脚部(第29図4)が出土した。その他の遺物は、覆土中層より発見している。

第4号住居跡出土遺物(第29図)

1・2は壺の口縁部である。1は袋状口縁で、口唇部はわずかに欠損している。外面はハケ調整後、ナデを施す。2は受口状口縁で、口唇内面がわずかに突出する。外面には、原体単節LR縄文を施した後、口唇上にも同様の原体で施文する。

4は高環の脚部で、外面調整はハケ後、ミガキを施している。内外面ともに赤彩している。

5は頸部下の胴部上半部に、原体単節LRの帯縄文を下位から2段施文している。

6・7は、棒状工具によって刻みを施す甕の口

縁部である。色調は異なるが、調整・胎土・キザミの施し方が類似し、同一個体の可能性がある。

遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

第5号住居跡(第27図)

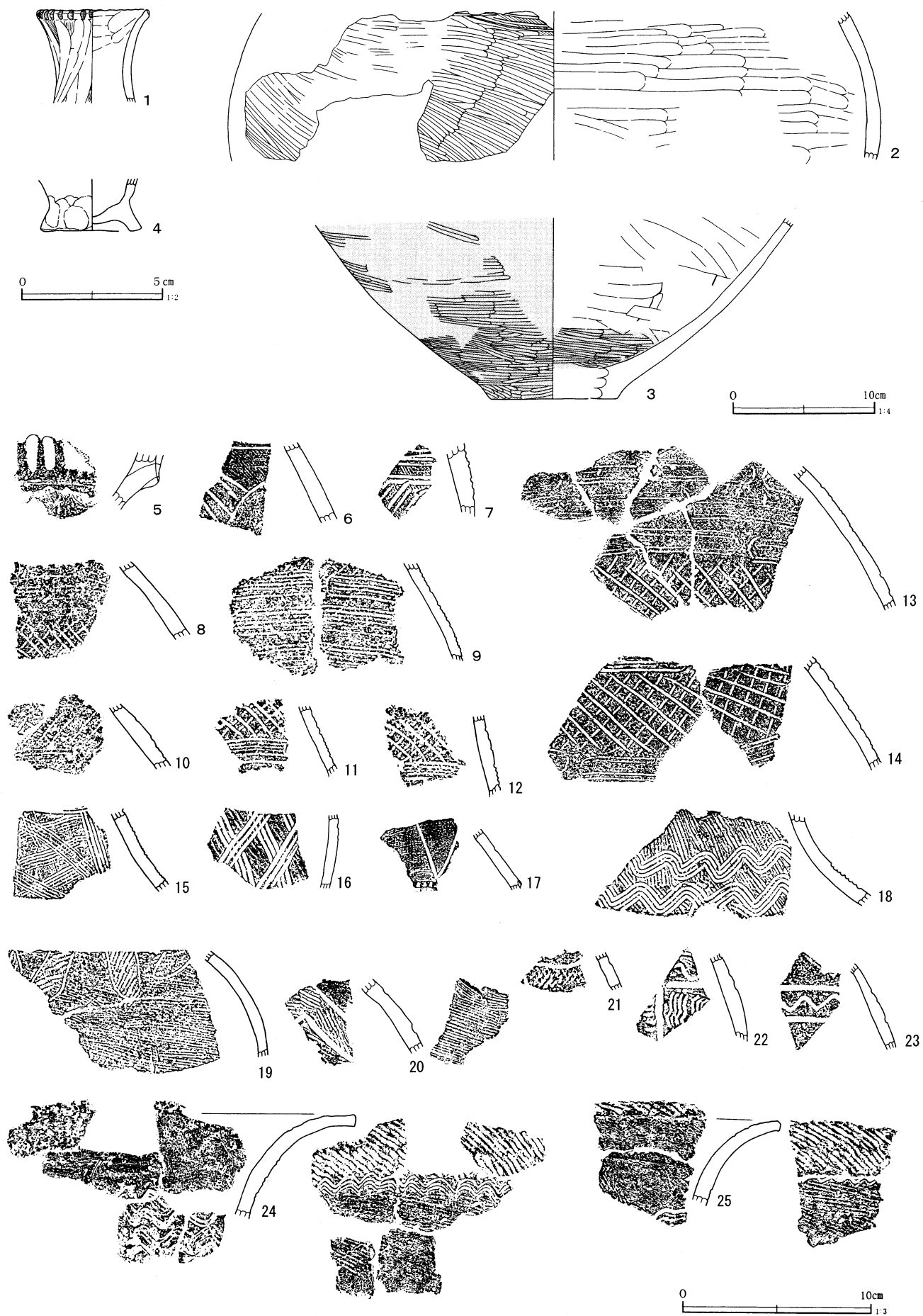
調査区中央のJ-6グリッドに位置する。先述の通り、第4号住居跡と重複しており、同住居跡を壊して建てられている。

平面形は隅丸長方形で、規模は主軸長6.09mで、幅5.03mである。確認面からの深さは、0.03~0.17mで北西側が浅い。主軸方位はN-45°-Wを指す。

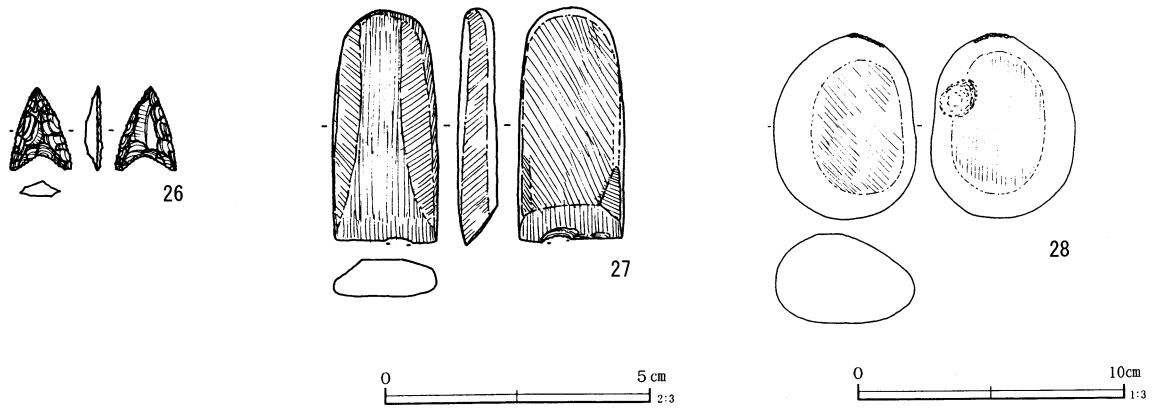
床面は概ね平坦である。北東部の2箇所の床面直上には、粘土の散布が確認されたが、貯蔵していたものか、投棄したものかなど、その性格については不明である。

炉跡は、住居跡の中央よりやや北西側に位置し、地床炉である。南東方に壺形土器の胴部片(第30図2)を埋め込んでいる。平面形は楕円形で、規模は長軸0.60m、短軸0.51m、深さ0.09mと掘り込みは浅い。

ピットは5本検出され、4本の支柱穴と入り口のピットである。P1・2は径0.53mの円形で、



第30图 第5号住居跡出土遺物(1)



第31図 第5号住居跡出土遺物(2)

深さ0.39、0.27mと掘り込みが浅かった。P 3・4の平面形は円形、楕円形で、断面形は漏斗状を呈している。P 3は径0.72m、P 4は長軸0.65m、短軸0.53mと上端は大きい、両者ともに深さ約0.12mのところすぼまって、径0.20~0.40mとなる。深さは0.83、0.69mと掘り込みは深い。P 5は径0.50mの円形で、深さ0.48mである。

貯蔵穴は、南東隅のP 3とP 5の間に位置している。平面形は南北方向に延びる長楕円形である。規模は長軸0.75m、短軸0.42m、深さ0.48mである。

壁溝は全周し、北東側が他より幅広である。幅は概ね0.30mで、深さは0.04~0.09mである。

遺物は総点数572点のうち、弥生土器が568点、石器が4点である。弥生土器の6割強は無文の胴部片で、石器は大きく欠損した磨石のみ図示しなかった。ほとんどの遺物は、床面から少し浮いた高さから検出された。第30図1は貯蔵穴の覆土中層より出土した。

第5号住居跡出土遺物(第30図)

1~3は壺である。1は、口唇部にハケ状工具によって刻み目を入れる。2は胴部片で、上位に4本一単位の櫛描文が弧状に描かれている。外面はハケ調整後、ミガキを施している。3は底部から胴部下半で、外面全面と内面底部にミガキを施し、赤彩する。底面には、器面が剥がれた部分に木葉痕を確認できるが、ミガキ調整を加えて消し

ている。

5~23は壺の破片である。5は有段口縁で、外面に貼り付けた粘土帯に、棒状工具によって2条の沈線を加え、棒状浮文を模倣したと考えられる。

6~16・18は櫛描文を施した胴部片である。6・7は、櫛描横線文下に弧状の櫛描文を施す。

8~14は擬似流水文を施文した破片で、その下に沈線による斜格子文を加えるものもある。すべて5本一単位の櫛歯状工具による。13・14は同一個体と思われ、3とも非常に色調・胎土が類似しており、同一個体の可能性がある。

15・16は斜格子文で、15は5本一単位の櫛歯状工具で、上位を横方向、左右を縦方向に区画した中に斜格子文を施しているようである。

17は破片端の突帯上に刺突を加え、上位に1本描沈線による上向きの鋸歯文を施す。逆三角形内を赤彩している。

19~20は、結紐文を施す破片である。沈線区画内において、19は原体RL単節縄文、20は原体無節Rを施文する。

21は楕円文で、オオバコ系擬縄文を施している。

22は1本描沈線で区画された中に、4本一単位の櫛描文を縦位に施し、その脇に刺突を加えている。上位には波状文を描く。23は1本描沈線2条間に山形文を施す。24・25は同一個体であり、甕の口縁部と思われる。頸部外面に、4本一単位の櫛描波状文2条を施している。口縁部内面には、

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺	(7.0)	[8.0]		A B C	普通	にぶい褐	90	
2	弥生土器	壺	(10.2)	[3.8]		A B C F	普通	橙	25	
3	弥生土器	不明		[5.8]	(8.6)	A B C F	普通	橙	25	底部
4	弥生土器	高坏		[4.5]	8.2	A F I	良好	にぶい褐	95	脚部 内外面赤彩
5	弥生土器	壺	頸部			A B C	普通	灰黄褐	破片	
6	弥生土器	甕	口縁部			A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	胴部煤付着
7	弥生土器	甕	口縁部			A B C	普通	にぶい黄	破片	

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第30・31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺	7.5	[6.6]		A B C F	普通	橙	95	
2	弥生土器	壺		[10.7]		A B C F	普通	橙	20	櫛歯4本一単位
3	弥生土器	壺		[12.9]	9.1	A B C E	普通	赤褐	15	色調:赤彩部分 木葉痕
4	弥生土器	ミニチュア土器		[1.8]	3.6	A B	普通	にぶい橙	70	脚部
5	弥生土器	壺	口縁部			A B C F	普通	にぶい橙	破片	
6	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	橙	破片	櫛歯4本一単位
7	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	橙	破片	櫛歯6本一単位
8	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	橙	破片	外面赤彩 櫛歯5本一単位
9	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	にぶい黄橙	破片	外面赤彩 櫛歯5本一単位
10	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	橙	破片	外面赤彩 櫛歯5本一単位
11	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	橙	破片	外面赤彩 櫛歯5本一単位
12	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	にぶい黄橙	破片	外面赤彩 櫛歯5本一単位
13	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	赤褐	破片	外面赤彩 14と同一個体 櫛歯5本一単位
14	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	赤褐	破片	外面赤彩 櫛歯5本一単位
15	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	にぶい橙	破片	櫛歯5本一単位
16	弥生土器	壺	胴部			A C F I	普通	灰黄褐	破片	櫛歯3本一単位
17	弥生土器	壺	胴部			B C I	普通	にぶい黄橙	破片	外面逆三角形赤彩
18	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	褐灰	破片	櫛歯4本一単位
19	弥生土器	壺	胴部			A B C G F	普通	黄橙	破片	P3出土
20	弥生土器	壺	胴部			A B C F	普通	褐灰	破片	
21	弥生土器	壺	胴部			A C F I	普通	にぶい黄橙	破片	オオバコ系擬縄文
22	弥生土器	壺	胴部			A B	普通	にぶい黄橙	破片	粒子細かい 櫛歯4本一単位
23	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	黄灰	破片	
24	弥生土器	甕	口縁部			A B C	普通	橙	破片	櫛歯4本一単位
25	弥生土器	甕	口縁部			A B C	普通	橙	破片	櫛歯4本一単位
26	石器	石鏃	長さ1.6cm 幅1.2cm 厚さ0.3cm 重さ0.4g							チャート
27	石器	小型磨製石斧	長さ4.5cm 幅2.0cm 厚さ0.7cm 重さ14.0g							砂岩
28	石器	磨石	長さ7.1cm 幅5.4cm 厚さ3.4cm 重さ158.4g							安山岩

原体無節Rを施文後、外面と同一工具により、櫛描波状文1条を加えている。口唇部にも同様の縄文原体で施文する。

26～28は石器で、26は石鏃で、基部の挟りが浅い。27は小型の磨製石斧で、全面丁寧に磨かれており、刃先は裏面から鋭角に研磨し作出する。表面の縁辺は、面取りしている。

遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

第6号住居跡 (第32図)

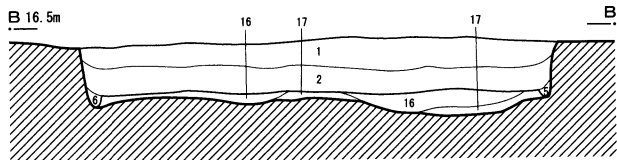
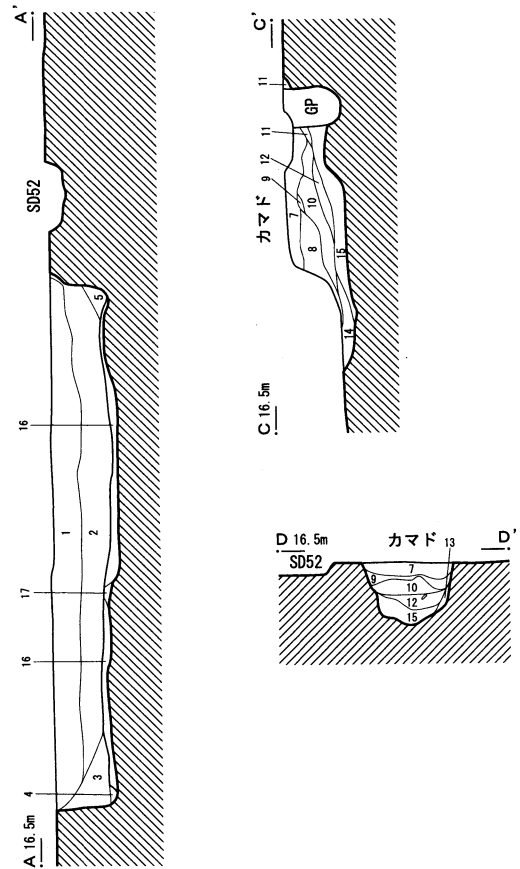
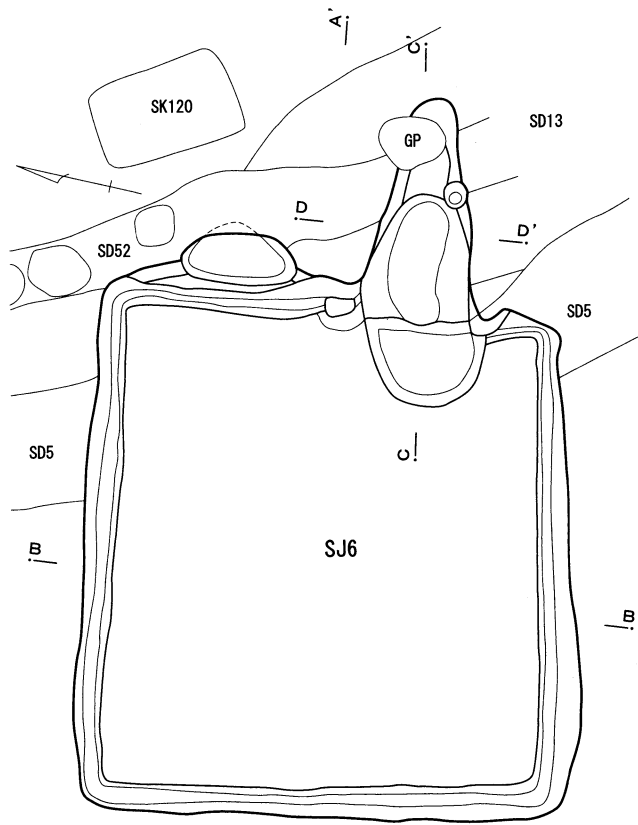
調査区中央南側のK・L-6グリッドに位置する。第2号住居跡と同様に、第13号溝跡 (弥生環

濠) を壊して構築されている。また、住居跡の東側では浅い第5号溝跡、第52号溝跡と重複しているが、僅かに表面を削られているだけである。

平面形は比較的整った方形で、規模は長軸長4.06m、短軸長3.72mで、確認面からの深さは0.31～0.50mである。主軸方位はN-81°-Eを指す。

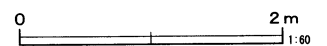
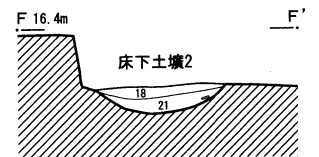
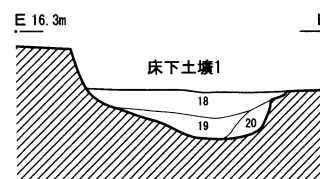
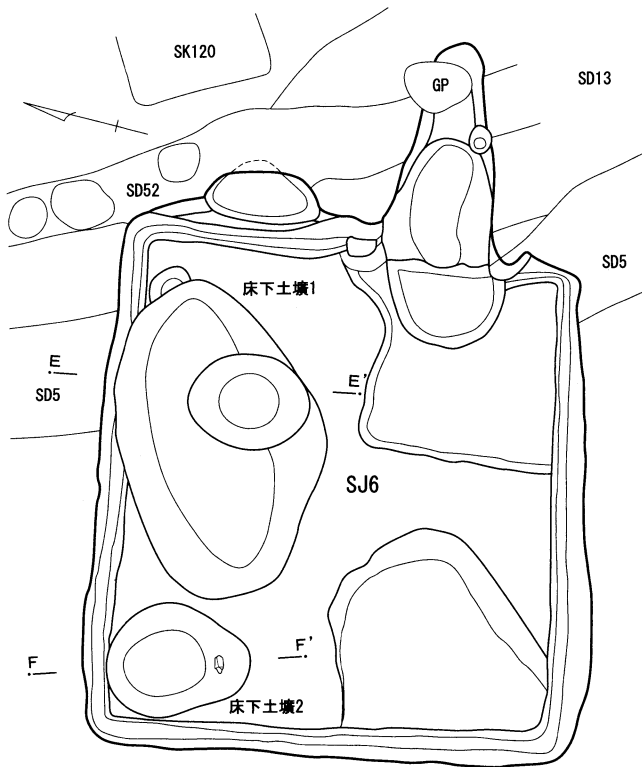
床面はほぼ平坦である。覆土には焼土がやや多く含まれているが、自然堆積と思われる。

カマドは、東壁の南端に位置し、第2号住居跡同様に、第13号溝跡 (弥生環濠) の覆土中に構築されている。全長は2.30mと長く、長大な煙道と、

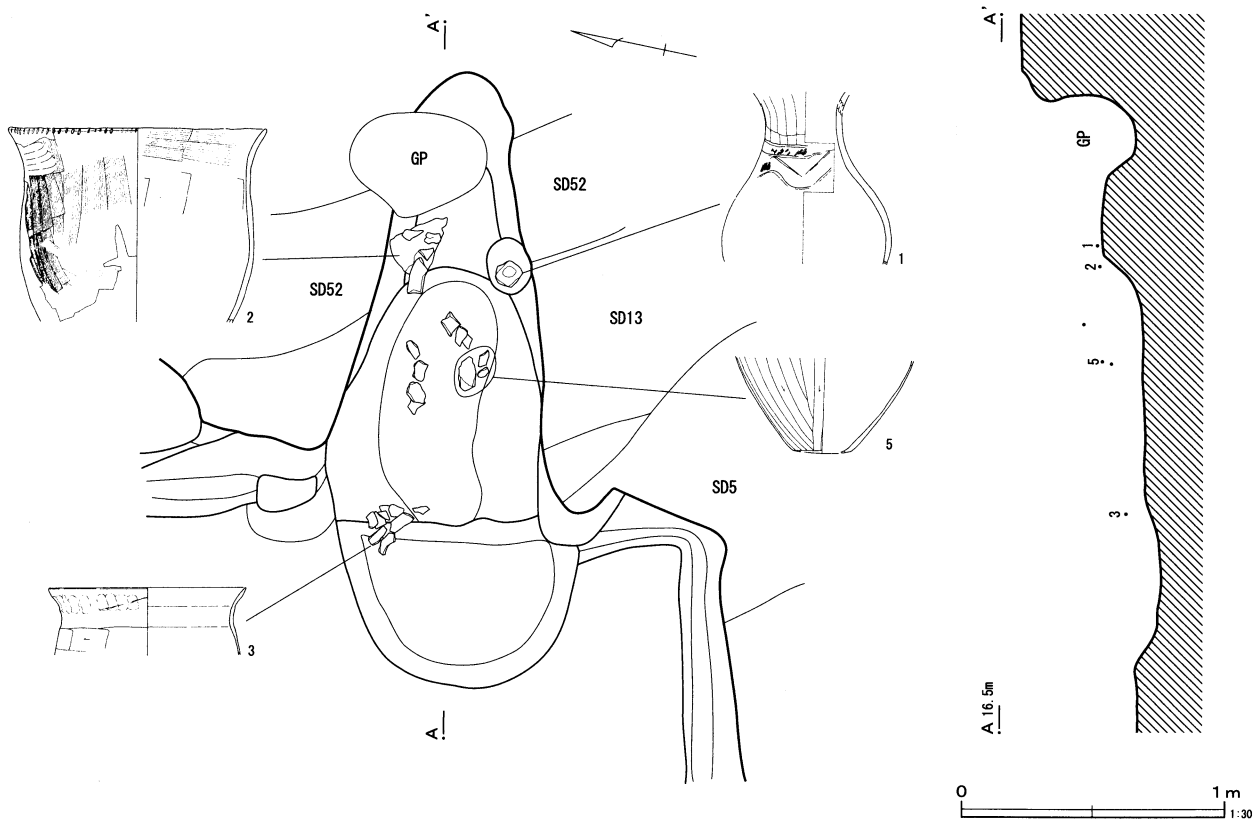


第6号住居跡

- 1 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)少量・焼土粒子(1~2mm大)少量・灰褐色土ブロック(1cm大)少量
- 2 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1~3mm大)多量・茶褐色ロームブロック(1~2cm大)少量・焼土粒子(1mm大)多量・焼土ブロック(1~2cm大)少量・灰褐色土ブロック(1cm大)微量
- 3 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)少量・茶褐色ロームブロック(1cm)微量
- 4 暗褐色土 茶褐色ロームブロック(1cm大)少量
- 5 褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)微量・茶褐色ロームブロック(1~3cm大)多量
- 6 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)多量・茶褐色ロームブロック(1cm大)少量
カマド
- 7 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1~3mm大)多量・茶褐色ロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1~2mm大)微量・灰褐色土ブロック(1cm大)少量
- 8 暗褐色土 茶褐色ロームブロック(1cm大)微量・灰褐色土ブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1mm大)少量・焼土ブロック(1cm大)微量
- 9 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)微量・茶褐色ロームブロック(1cm大)微量・焼土ブロック(1cm大)微量
- 10 橙色土 焼土粒子(1~2mm大)・焼土ブロック(1~2cm大)多量・橙色土ブロック(2~4cm)多量〔天井上部崩落層〕
- 11 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)・焼土粒子(1mm大)微量
- 12 暗褐色土 焼土粒子(1mm大)多量・焼土ブロック(1cm大)・橙色土ブロック(1~2cm)微量
- 13 褐色土 茶褐色ロームブロック(1~3cm大)多量
- 14 暗褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)少量・茶褐色ロームブロック(1cm大)多量・焼土粒子(1mm大)少量・焼土ブロック(1cm大)少量
- 15 暗褐色土 焼土粒子(1~3mm大)多量・焼土ブロック(1cm大)多量〔灰層〕
掘り方
- 16 黒褐色土 茶褐色ローム粒子多量・茶褐色ロームブロック微量・焼土粒子微量・炭化物少量
- 17 黒褐色土 ローム粒子多量・茶褐色ローム粒子多量・茶褐色ロームブロック(1cm大)少量・焼土粒子少量
- 床下土壌1・2
- 18 黒褐色土 16層〔掘り方〕と同じ
- 19 黒褐色土 ローム粒子(2mm)多量・茶褐色ローム粒子多量・茶褐色ロームブロック(1~5cm)多量・焼土ブロック(1~3cm)多量
- 20 暗褐色土 茶褐色ロームブロック
- 21 黒褐色土 17層〔掘り方〕と同じ



第32図 第6号住居跡



第33図 第6号住居跡カマド

よく焼けた燃焼部が検出された。袖部は短く、壁面の地山をわずかに掘り残したものである。煙道部分では、いくつか遺物が出土したが、東端の2点は弥生土器であった。

当初、第13号溝跡（弥生環濠）部分まで掘り過ぎたと思われたが、北側の甕形土器（第34図1）の下に焼土が確認できたことから、カマド構築中に出土した弥生土器をカマド構築材として転用したものと考えた。第2号住居跡と同様に考えると、それらは煙出しの部分に使用されていた可能性が高い。

カマドの北側には、住居の壁から張り出す長楕円形の土壌が検出された。重複遺構とも考えられたが、住居の軸に沿った掘り込みと、壁を袋状に掘り込んでいることから、本住居跡に伴う土壌と判断した。長軸長0.86m、上端での短軸長0.38mである。東側の下端は上端から10cm奥に入る。深さは確認面から0.36mである。

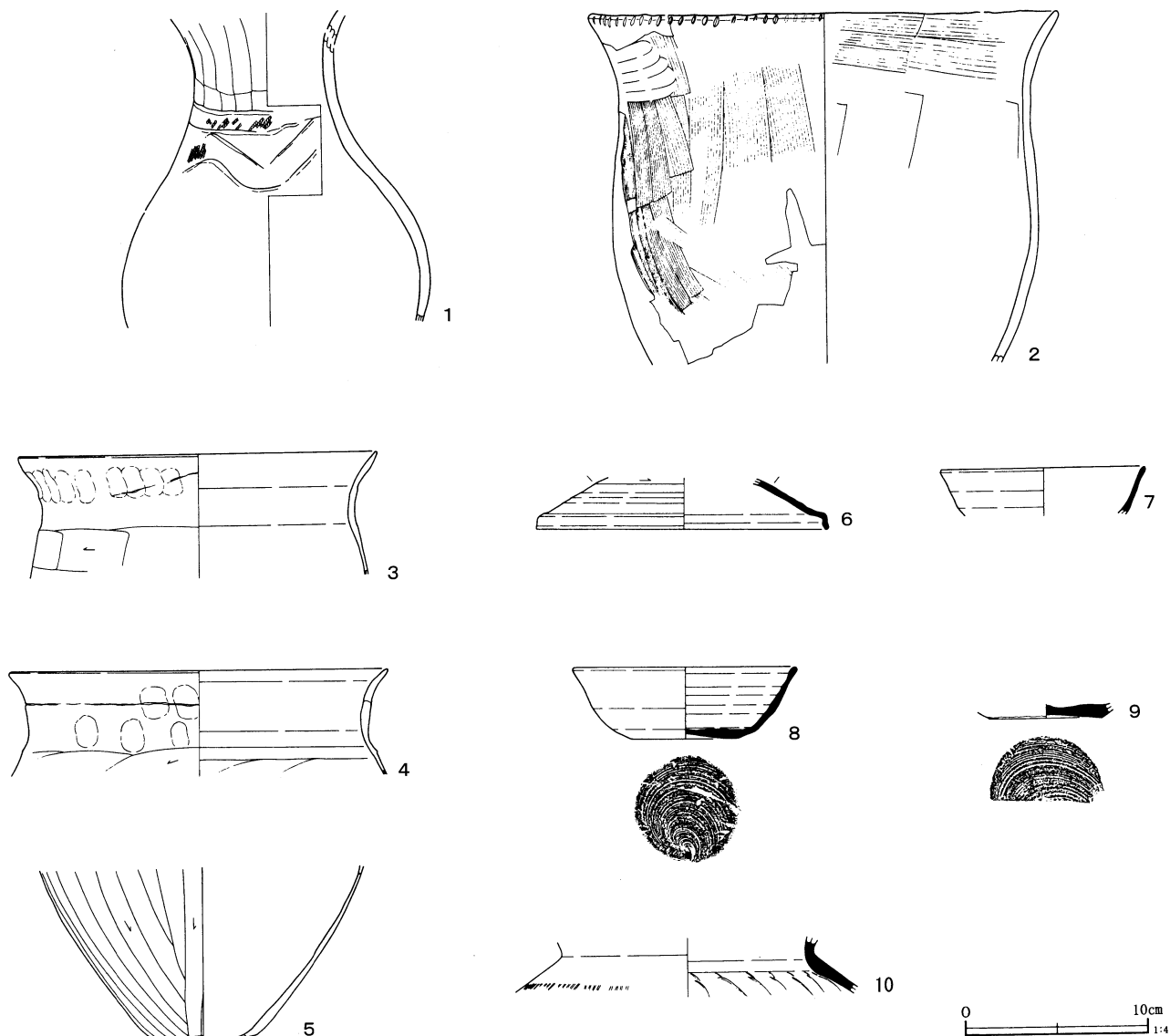
ピットは検出されなかった。

壁溝は検出された壁すべてに廻っている。幅0.36~0.38m、深さは0.24mである。

掘り方は、住居跡全面で確認でき、住居の中央部分は高く、住居の南側は一段低い部分が検出された。また、北側半分の床下には、床下土壌が2基確認された。東側の床下土壌1は、平面形は楕円形を呈し、長軸長5.05m、短軸長1.54mで、深さは0.09~0.40mである。西側の床下土壌2は、平面形はやや南側が張り出す不整形で、規模は長軸長1.06m、短軸長0.82m、深さ0.19mである。床下土壌2の南西側から、坏の破片が発見された。

第6号住居跡出土遺物（第34図）

1・2は、第13号溝跡に属する弥生土器である。1は壺で、頸部から胴部上半に、原体LR単節縄文を施文して、頸部は1本描沈線2条による平行線文、胴部上半は1本描沈線2条による波状文で区画する。内外面ともに被熱により風化が激しい。2は甕で、口唇部にヘラ状工具による刻みを施す。



第34図 第6号住居跡出土遺物

第7表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺		[17.5]		A B C F	不良	灰黄褐	60	SD13に帰属 カマド構築材に転用
2	弥生土器	甕	(25.8)	[19.6]		A B C F	普通	にぶい黄橙	30	SD13に帰属 カマド構築材に転用
3	土師器	甕	(20.0)	[6.8]		D E F	普通	橙	40	
4	土師器	甕	(21.0)	[5.9]		D E G	普通	橙褐	10	
5	土師器	甕		[9.5]	(5.9)	D E G	普通	橙褐	20	底部
6	須恵器	蓋	(16.0)	[2.8]		G I	普通	茶灰	20	
7	須恵器	坏	(11.4)	[2.7]		G I	普通	灰	20	
8	須恵器	坏	12.2	4.0	5.7	G I	普通	灰	80	南比企産
9	須恵器	坏		[0.8]	(6.4)	G I	普通	灰白	50	
10	須恵器	甕		[3.3]		G I	良好	灰	30	

3～5は土師器甕。口唇部の屈曲はやや弱い、いわゆる「コ」の字状口縁甕である。胴部上端は横方向のヘラケズリを施す。胴部下位は縦方向のヘラケズリ。5はもう少し、底径が小さくなるかもしれない。6は須恵器蓋である。おそらく無台

塊に組み合うものであろう。南比企産。7～9は須恵器坏。遺存度の高い8は底部回転糸切り後無調整、底径は口径の1/2を切り、やや深身の器形である。9は糸切り底で内底径がやや大きい。10は須恵器甕の肩部片、須恵器はいずれも南比企産

である。時期に関しては須恵器が渡辺編年HVII期～HVIII期、土師器はやや古そうな印象を受けるが、HVII期に伴うのであれば齟齬はなさそうである。

第7号住居跡 (第35図)

調査区北東側のF・G-3・4グリッドに位置する。南東隅は攪乱によって壊されており、第18号溝跡と第2号井戸跡と重複している。両者ともに第7号住居跡より新しく、第2号井戸跡は東壁を壊しているが、第18号溝跡は浅く、覆土上面をわずかに削っている程度である。

平面形は隅丸長方形で、規模は主軸長6.33m、幅5.08mで、確認面からの深さは0.16～0.56mである。主軸方位はN-9°-Wを指す。

床面は概ね平坦であるが、支柱穴より外側が壁に向かって若干高くなり、住居の中央付近は浅く摺鉢状を呈する。覆土は概ね自然堆積を示す。

炉跡は、住居中央よりやや北側に位置し、平面形は楕円形で、規模は長軸0.81m、短軸0.66m、深さ約0.05mと浅い掘り込みである。

ピットは5本検出されて、支柱穴4本と入口部のピットである。P1・4・5は径約0.41mの円形、P2は長軸0.48mの楕円形を呈するが、深さは0.40m程度にまとまる。P3は径0.50mの円形と大きく、深さも0.60mで他と比べて深い。

貯蔵穴はP3とP5の間に位置し、平面形は円形で、規模は径0.53m、深さ0.08mである。

壁溝は検出された壁をほぼ廻り、貯蔵穴南側の部分で1ヶ所途切れている。また攪乱、第2号井戸跡と2本のグリッドピットに壊される以外は、検出された壁に廻っている。幅は0.16～0.30mで、深さ0.02～0.05mで東側の壁溝が若干浅い。

出土遺物は、総数1581点のうち、弥生土器は1568点、石器13点である。弥生土器片の8割弱は、無文の胴部片である。他の弥生時代の住居跡に比べれば、より多くの遺物が出土した。床面直上で出土した遺物はなく、投棄か流れ込みと考えられる。2・5・14・15・17・21・57の遺物について

は、覆土最下層より出土している。

第7号住居跡出土遺物 (第36～38図)

1～14は壺である。5は受口状の口縁で、内面に稜をもって直立して口唇部に達する。7は非常に径が小さい頸部片で、4本一単位の櫛描波状文を巡らせる。

8・9は頸部から胴部上半である。8は胴部上位に3本一単位と思われる櫛描文を横位に施す。摩滅が著しく不鮮明である。9は頸部下端に3本描沈線による平行線文を施し、その下位に同一工具による波状文を2条施文する。さらに、2本描沈線2条による波状文を加えた後、同一工具で反時計回りに擬似簾状文を巡らせている。

10～13は胴下半の無文部である。10～12の外面調整は、ハケ後ミガキを施している。13は摩滅や風化が激しく、調整は不明瞭である。

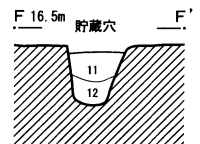
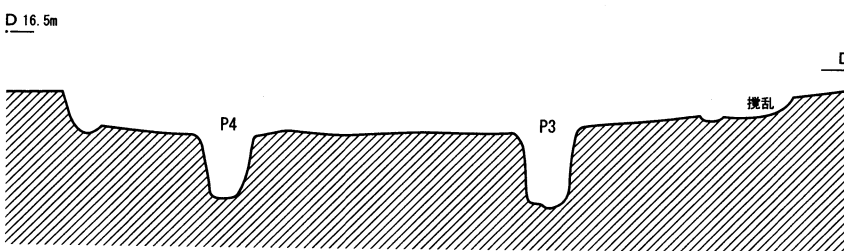
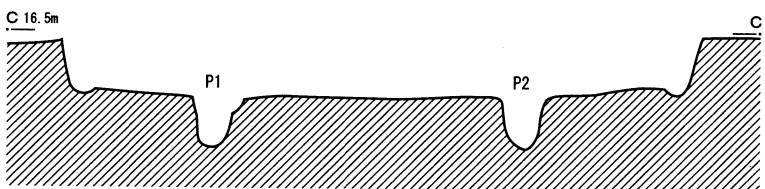
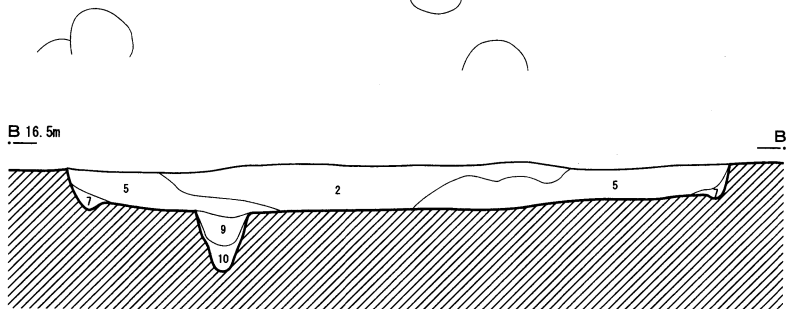
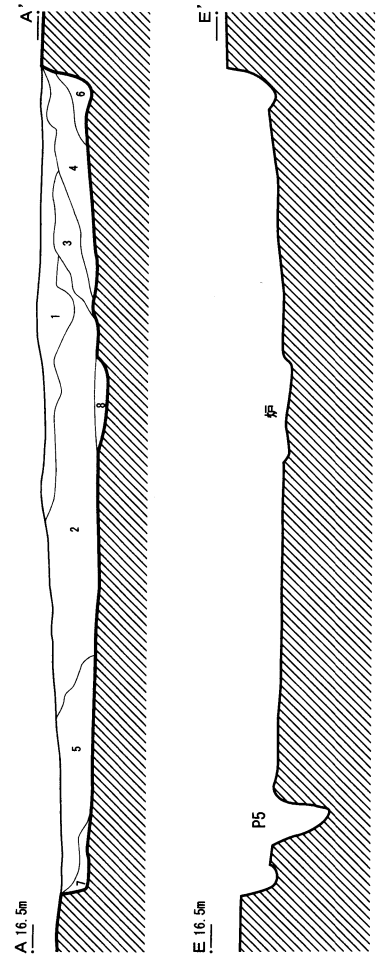
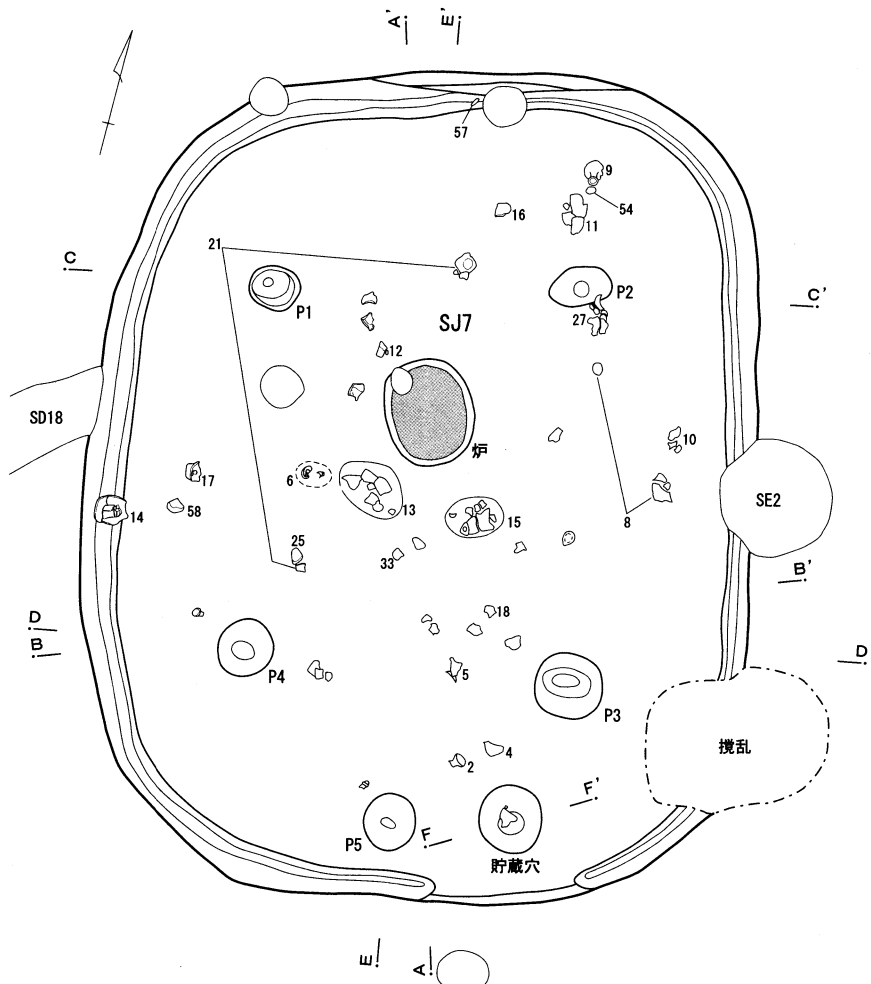
14は胴中盤から底部にかけての破片で、内外面ともに赤彩している。

15・16は甕である。15は、口唇部にヘラ状工具によって刻み目を施す。16は、口唇部を指頭によって、ひねらずに押さえている。

17～26は底部で、22の底面には網代痕が付いている。27は高坏の脚部で、外面に赤彩を施す。

28～39は壺である。28は受口状口縁で、棒状浮文を2本貼付ける。31は、1本描沈線2条の平行線文を挟んで、対称の文様を描く。波状沈線文内に斜線文を施している。32は、原体LR単節縄文帯の下に斜格子文を施す。34は、竹管状工具による刺突文を巡らせる。35～37は結紐文で、オオバコ系擬縄文を充填している。なお、35の中央の沈線状に見える線は、破片のつなぎ目である。38は原体LR単節縄文を地文とし、1本描沈線で山形文を施す。39は、4本一単位の縦位櫛描文を施文し、その左側に横走する櫛描文を加える。

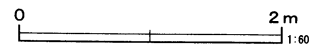
40～45は甕の破片である。40は、口唇部直上からヘラ状工具によって刻み目を施している。41は、棒状工具の角を口唇部に押し当てて、指押捺風に



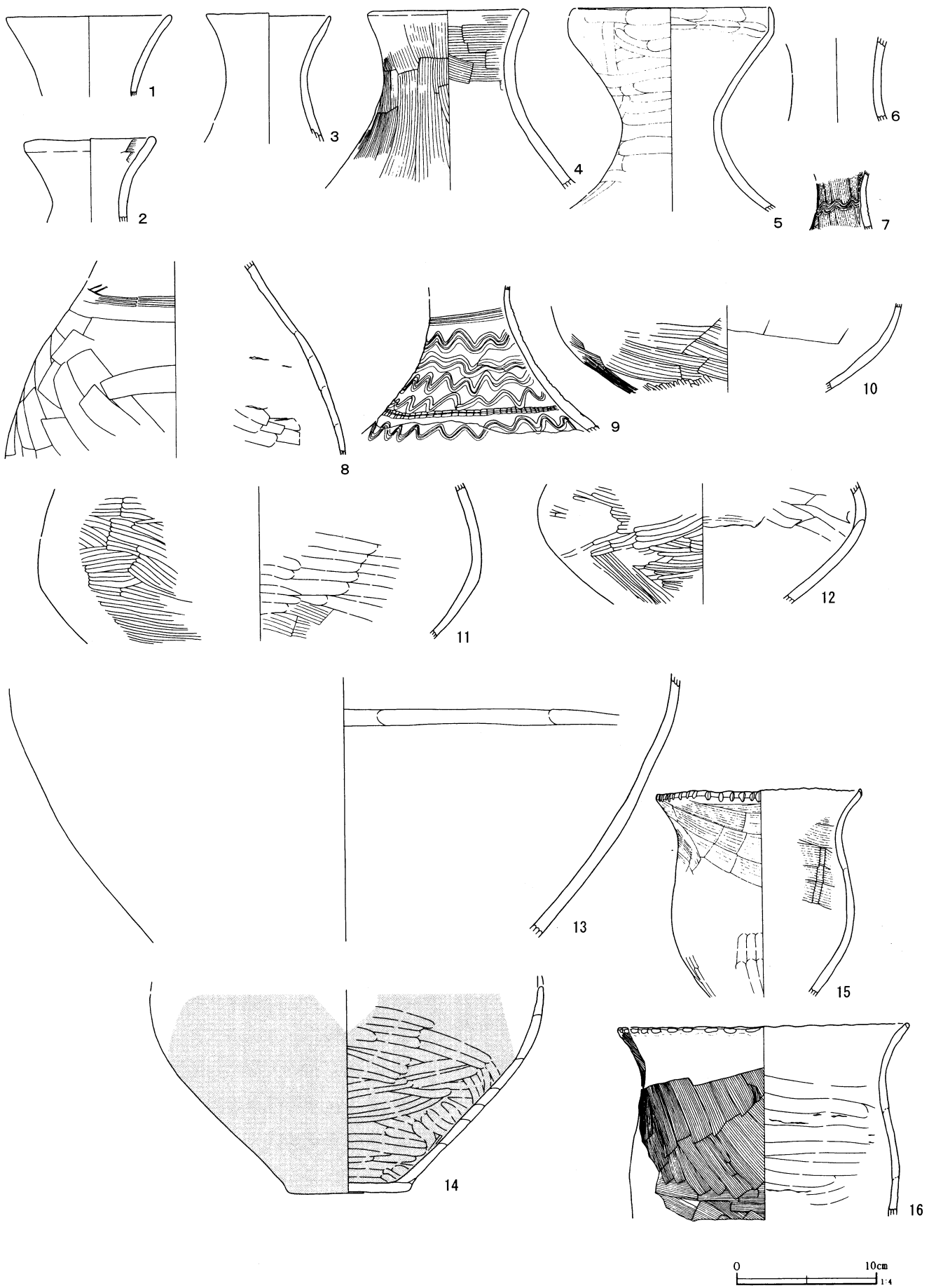
■ 焼土

第7号住居跡

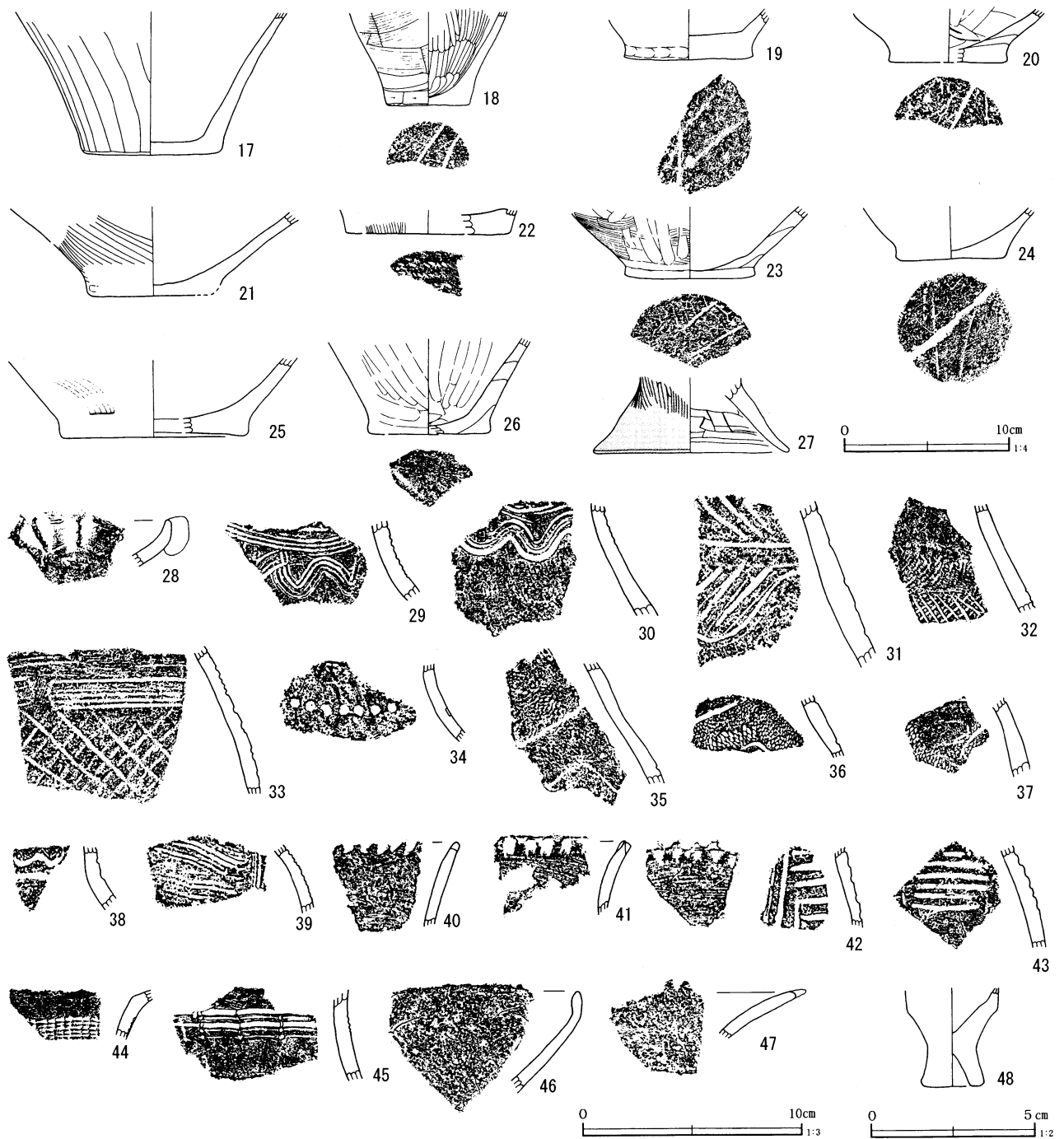
- 1 褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量・焼土粒子(1mm大)微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(1~3cm大)少量・焼土粒子(1~3mm大)少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1mm大)微量
- 4 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・ロームブロック(1cm大)少量
- 5 暗褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・灰褐色粘土ブロック(1cm大)微量
- 6 茶褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・ロームブロック(1~3cm大)少量
- 7 茶褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1cm大)多量
- 8 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)微量・焼土粒子(1~2mm大)多量・焼土ブロック(1cm大)微量
- 9 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・ロームブロック(1cm大) [P4]
- 10 茶褐色土 ロームブロック多量 [P4]
- 貯蔵穴
- 11 暗褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・焼土粒子(1mm大)少量
- 12 暗褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量



第35図 第7号住居跡



第36图 第7号住居跡出土遺物(1)



第37図 第7号住居跡出土遺物(2)

している。42は、コの字重ね文である。43は、壺の胴部片の可能性もあり、1本描沈線を6条重ねる。44・45は、頸部に5本一単位の櫛歯状工具によって、44には櫛刺突文を、45には簾状文を施す。

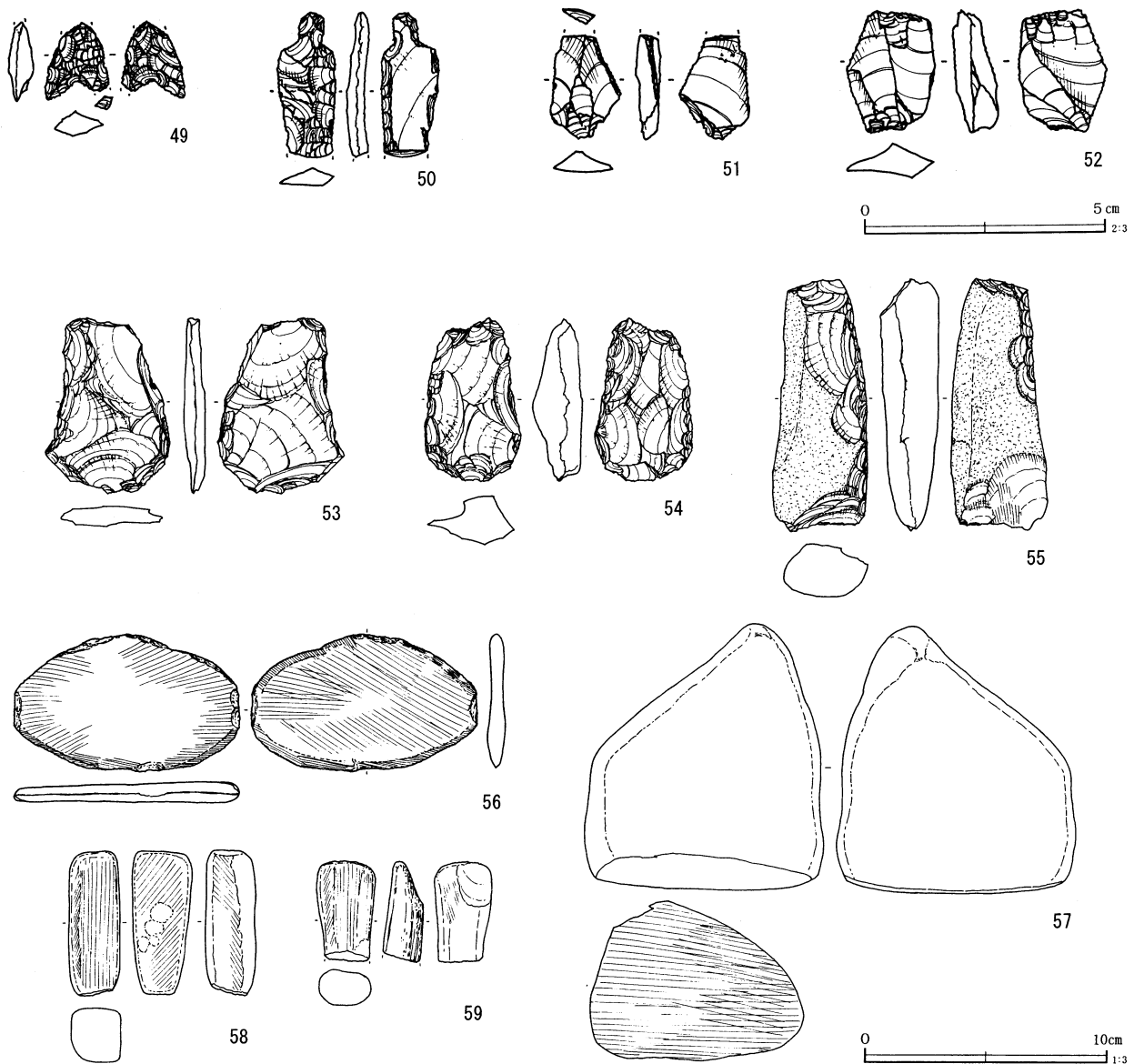
46・47は高杯の口縁部で、47は口唇に二股の突起が付く。

49は凹基無茎石鏃である。先端及び右脚部を欠損する。混入と思われる。

50は上端に摘みと思われる突起があり、石匙と考えられる。下半部を欠損する。調整加工は右側縁の正面に基部中央まで達する規格的剝離、裏面は正面方向からの急角度の剝離が施されている。

51は剝片の一部に微細な剝離が観察され、削器と考えられる。

52は両端部の稜が潰れており、楔形石器として用いられたと思われる。



第38図 第7号住居跡出土遺物(3)

53~55は打製石斧である。55は基部の加工は部分的であるが刃部に研磨が施されている。

56は扁平の緑泥片岩を素材に、全面の研磨が施されており石包丁と考えられる。刃縁はわずかに円刃を呈し両凸刃である。

57は幼児の頭大の亜角礫を用いており、底面は光沢が出るまで使い込まれている。

58・59は小形の砥石である。

遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

第8号住居跡(第39図)

調査区中央西側のH・I-5・6グリッドに位

置する。確認当初より床面の一部が露出しており、多くの土壌・溝跡が、住居の真ん中を横断し壊している。また、住居の北半分は攪乱により削平され、北東壁は第250号土壌に切られている。そのため、覆土はほとんど確認できない状態であり、土層断面図は作成していない。

平面形は、南西壁が少し直線的になるほぼ円形である。規模は主軸長4.55m、幅は4.01mで、確認面からの深さは最大で0.06mを測る。主軸方位はN-25°-Wを指す。

入口部のピットと貯蔵穴は検出されたが、支柱穴と炉跡は確認されなかった。住居の中央が、後

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第36~38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺	(11.4)	[5.8]		BC	良好	橙	20	
2	弥生土器	壺	9.3	[6.1]		ABC FGI	普通	橙	95	
3	弥生土器	壺	9.0	[9.1]		BC	良好	にぶい橙	60	
4	弥生土器	壺	(10.8)	[13.0]		DEF	普通	にぶい黄橙	25	他と胎土が異なる
5	弥生土器	壺	(14.2)	[14.2]		ABC	普通	明黄褐	60	
6	弥生土器	壺		[6.1]		ABC	良好	明赤褐	80	
7	弥生土器	壺		[4.3]		ABF	普通	橙	95	櫛歯4本一単位
8	弥生土器	壺		[14.2]		ABCEFH	普通	橙	40	櫛歯3本一単位
9	弥生土器	壺		[10.7]		ABCEF	普通	にぶい橙	90	
10	弥生土器	壺		[6.3]		ABF	普通	橙	35	
11	弥生土器	壺		[11.2]		ABC	普通	橙	45	
12	弥生土器	壺		[8.7]		ABEF	普通	褐灰	20	
13	弥生土器	壺		[19.0]		ACF	普通	橙	20	
14	弥生土器	壺		14.7	(8.6)	ACEFI	普通	橙	40	内外面赤彩 赤彩面：赤褐
15	弥生土器	甕	14.7	[15.0]		ABCF	普通	橙	75	
16	弥生土器	甕	(20.8)	[13.8]		ABCE	普通	黒褐	25	
17	弥生土器	不明		[8.8]	8.6	ABC	普通	橙	85	底部
18	弥生土器	不明		[5.2]	5.2	ABCF	普通	褐	45	底部 木葉痕
19	弥生土器	不明		[3.1]	(7.8)	ABC	普通	にぶい黄橙	45	底部 木葉痕
20	弥生土器	不明		[3.3]	(7.2)	ABCF	普通	灰黄褐	25	底部 木葉痕
21	弥生土器	不明		[5.5]	8.2	ABCF	普通	灰黄褐	80	底部
22	弥生土器	不明		[1.5]	(10.0)	ABCF	普通	橙	15	底部 網代痕
23	弥生土器	不明		[4.4]	(8.0)	ABF	普通	橙	30	底部 木葉痕
24	弥生土器	不明		[3.3]	6.8	ABC	普通	橙	80	底部 木葉痕
25	弥生土器	不明		[4.8]	(11.4)	ABCD	普通	灰黄褐	40	
26	弥生土器	不明		[5.9]	(7.4)	ABCF	普通	橙	20	底部 木葉痕
27	弥生土器	高坏		[4.6]	(12.0)	ABC	普通	にぶい橙	40	脚部 外面赤彩
28	弥生土器	壺	口縁部			ABCF	普通	橙	破片	
29	弥生土器	壺	頸部			ABC	普通	橙	破片	櫛歯5本一単位
30	弥生土器	壺	頸部			ABC F I	普通	橙	破片	櫛歯4本一単位
31	弥生土器	壺	胴部			ABCF	普通	明赤褐	破片	砂粒多い
32	弥生土器	壺	胴部			ABCE	普通	にぶい褐	破片	
33	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	橙	破片	外面赤彩 櫛歯5本一単位
34	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい黄橙	破片	刺突径0.3cm
35	弥生土器	壺	胴部			ABCDFI	普通	にぶい褐	破片	オオバコ系擬縄文 36・37と同一個体
36	弥生土器	壺	胴部			BEFGI	普通	褐灰	破片	
37	弥生土器	壺	胴部			BEFGI	普通	褐灰	破片	
38	弥生土器	壺	胴部			ABC F I	普通	灰黄褐	破片	
39	弥生土器	壺	胴部			ABCDE	普通	灰黄褐	破片	櫛歯5本一単位
40	弥生土器	甕	口縁部			ABCDI	普通	にぶい褐	破片	
41	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	褐灰	破片	
42	弥生土器	甕	胴部			BCDI	普通	灰褐	破片	
43	弥生土器	甕	胴部			ABC F I	普通	にぶい褐	破片	
44	弥生土器	甕	頸部			ABCF	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯5本一単位
45	弥生土器	甕	頸部			ABCE F	普通	にぶい橙	破片	櫛歯5本一単位
46	弥生土器	高坏	口縁部			ABCF	普通	浅黄橙	破片	内外面赤彩
47	弥生土器	高坏	口縁部			ABCF	不良	橙	破片	
48	弥生土器	ミニチュア土器		[3.0]	(2.0)	ABI	普通	にぶい黄橙	20	脚部
49	石器	石鏃	長さ[1.7]cm 幅1.3cm 厚さ0.5cm 重さ0.7g							黒耀石
50	石器	石匙	長さ[3.0]cm 幅1.2cm 厚さ0.4cm 重さ1.7g							蛋白石か
51	石器	削器	長さ[2.2]cm 幅1.5cm 厚さ0.5cm 重さ1.2g							黒耀石
52	石器	楔形石器	長さ2.5cm 幅1.9cm 厚さ0.8cm 重さ3.9g							チャート
53	石器	打製石斧	長さ7.3cm 幅5.2cm 厚さ0.9cm 重さ41.4g							片岩
54	石器	打製石斧	長さ6.8cm 幅4.1cm 厚さ2.1cm 重さ58.3g							頁岩
55	石器	局部磨製石斧	長さ10.5cm 幅4.0cm 厚さ2.4cm 重さ138.1g							砂岩
56	石器	石包丁	長さ5.7cm 幅9.4cm 厚さ0.9cm 重さ66.9g							緑泥片岩
57	石器	こんざり石	長さ11.1cm 幅10.0cm 厚さ7.1cm 重さ966.5g							砂岩
58	石器	砥石	長さ6.0cm 幅2.1cm 厚さ2.9cm 重さ49.1g							凝灰岩
59	石器	砥石	長さ4.1cm 幅2.5cm 厚さ1.7cm 重さ21.0g							砂岩

世の攪乱によって壊されていたが、柱穴は元々存在していなかった可能性もある。炉跡は攪乱によって破壊されたと思われる。

入口部のピットは長軸0.30mの楕円形で、深さは0.32mである。

貯蔵穴は南東隅の壁溝と接している。平面形は径0.63mの円形で、深さは0.28mである。

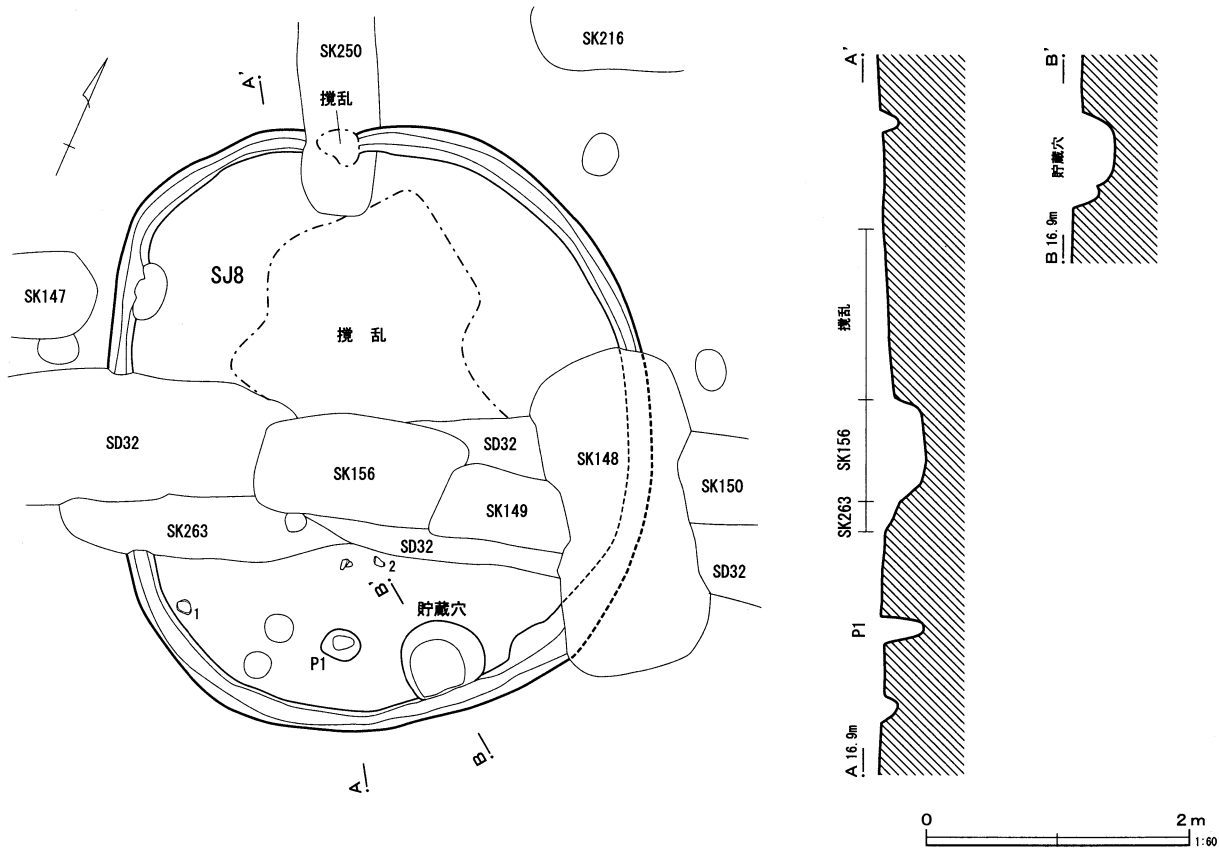
壁溝は検出された壁をすべて廻っている。幅0.

20m、深さは0.12~0.16mである。

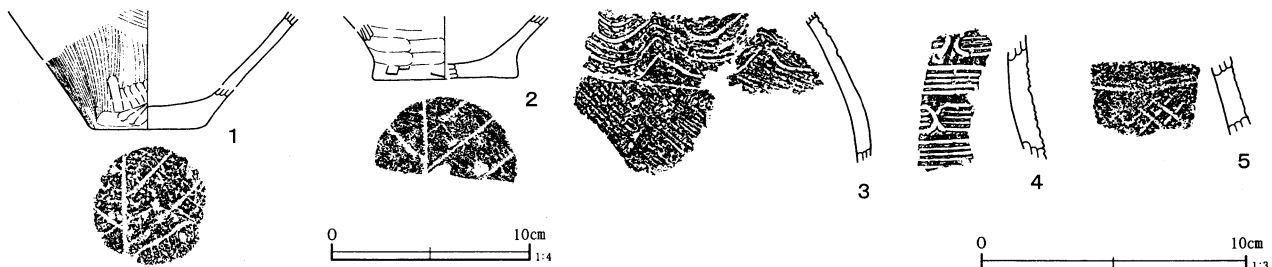
遺物は弥生土器67点と少なく、床面から少し浮いた状態で出土していた。

第8号住居跡出土遺物 (第40図)

1・2は底部で、底面に木葉痕が付く。3~5は、壺の胴部片である。3は破片上方に4本一単位の櫛歯状工具で波状文を施している。4・5は擬似流水文を施す破片である。4には5本一単位



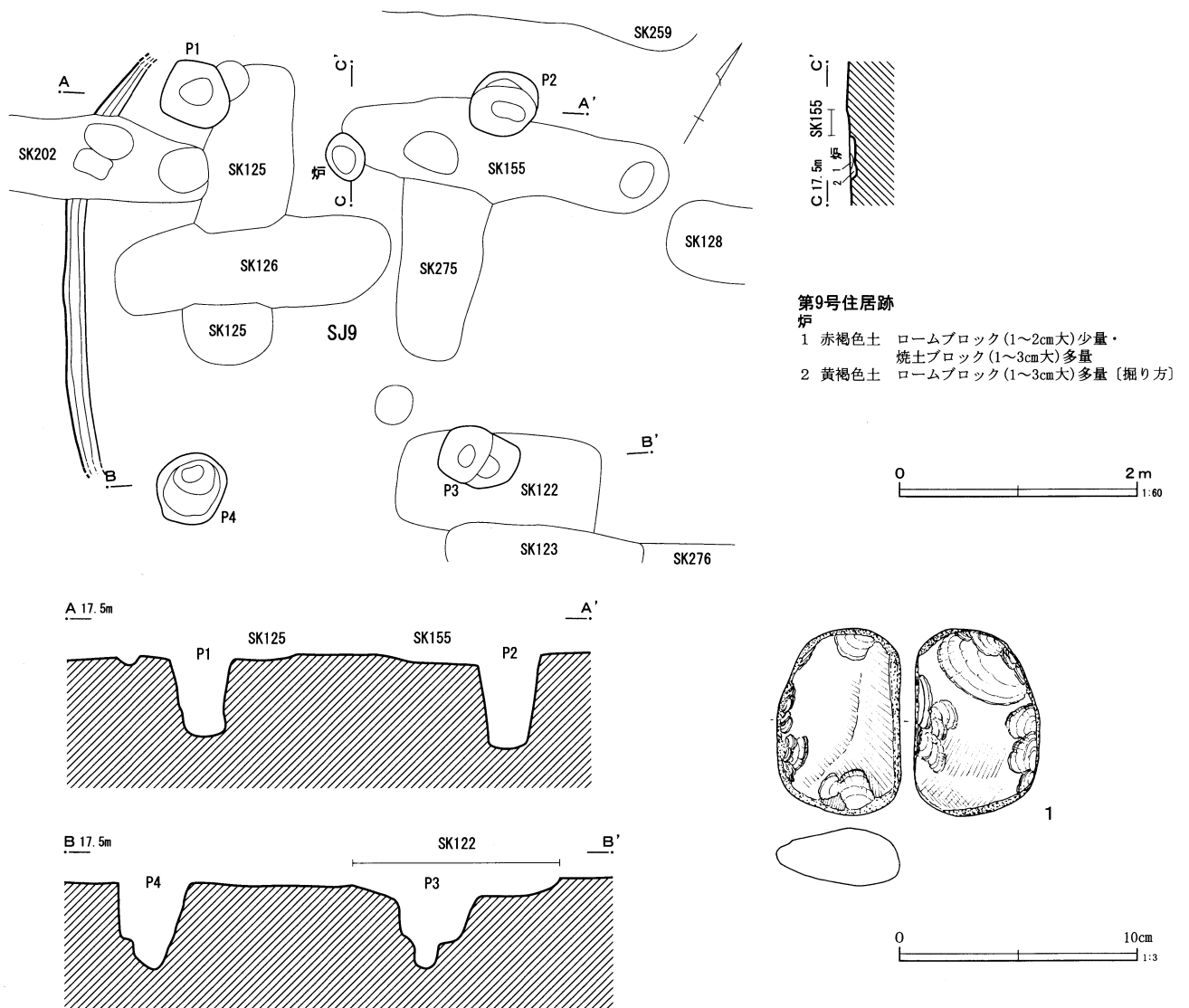
第39図 第8号住居跡



第40図 第8号住居跡出土遺物

第9表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	不明		[3.2]	7.4	A B C	良好	にぶい黄褐	45	底部 木葉痕
2	弥生土器	不明		[6.0]	6.0	A B C	良好	にぶい黄橙	60	底部 木葉痕
3	弥生土器	壺		胴部		A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 4本一単位
4	弥生土器	壺		頸部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 5本一単位
5	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	櫛歯 4本一単位



第41図 第9号住居跡・出土遺物

第10表 第9号住居跡出土遺物観察表(第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	石器	敲石	長さ[8.0]cm	幅[5.3]cm	厚さ2.5cm	重さ188.1g				安山岩

の、5には4本一単位の櫛歯状工具で施し、その下位に1本描沈線によって斜格子文を加えている。

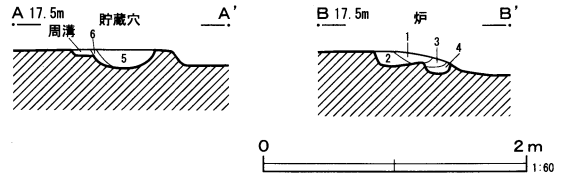
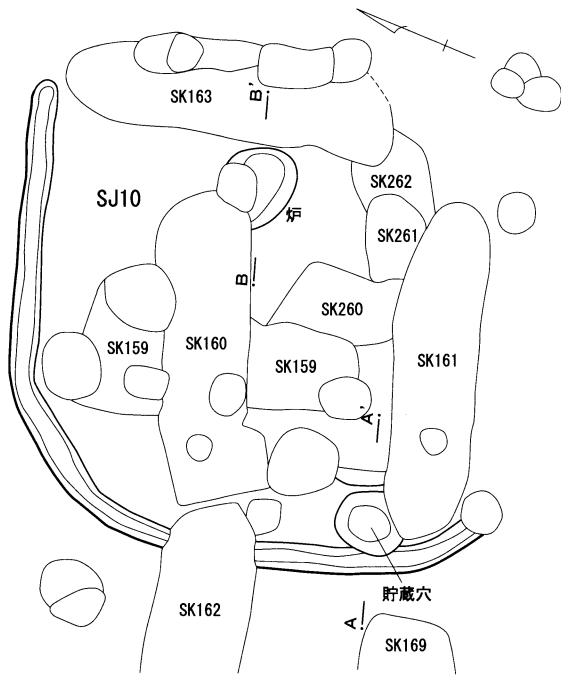
遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

第9号住居跡(第41図)

調査区中央東側のI-8・9グリッドに位置し、台地の縁に構築されている。III章でも述べた通り、馬の背状になる台地中央部があまりにも平坦な面を呈しているとともに、ソフトロームの堆積状況から考えると、台地全体が大きな削平を受けていると思われる。また、この付近には土壌が数多く

密集し、それらと重複している。そのため、住居跡の残りが非常に悪く、ほとんど削られていた。確認当初から床面は露出しており、南西側の壁溝、炉跡および4本の支柱穴しか認められなかった。

平面形は不明であるが、壁溝や支柱穴の配置などから考えると、一般的な小判形になると思われる。規模は、主軸長4.05m以上、幅4.00m以上になると考えられる。主軸方位はN-28°-Wを指す。なお、主軸方位は、炉跡の中心よりP3・4を結んだ線の midpoint に向かって引いた線を用いて示した。



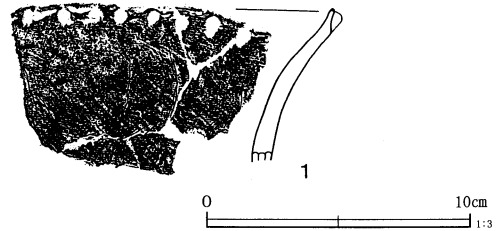
第10号住居跡

炉

- 1 黒褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・ソフトロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1mm大)微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ソフトロームブロック(1cm大)少量・焼土粒子(1~3mm大)少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・焼土粒子(1mm大)微量
- 4 黒褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ソフトロームブロック(2~3cm大)多量

貯蔵穴

- 5 暗褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ソフトロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1mm大)少量・炭粒(1~2mm大)微量
- 6 暗褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ソフトロームブロック(1~4cm大)多量



第42図 第10号住居跡・出土遺物

第11表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	甕			口縁部	A B C G	良好	におい褐	破片	周溝出土

炉跡は住居中央よりやや北西側で、P 1・2側に寄って位置している。平面形は楕円形で、規模は長軸0.40m、短軸0.30mで、深さは0.07mと浅いが上面は削られているであろう。

ピットは4本検出されて、すべて支柱穴である。P 1・2は径0.54~0.56mの円形である。P 3・4は楕円形で、長軸0.63m、短軸はそれぞれ0.48、0.56mである。深さは0.65~0.73mである。

壁溝は、南西側のみ検出された。幅は0.12~0.17mで、深さは0.03m程度しか残存していない。

遺物は、P 4から出土した石器1点のみである。

第9号住居跡出土遺物 (第41図)

1は敲石で、右側面がわずかに直線的になる楕円形を呈する。正面右縁と裏面下部を研磨している。明確な敲打面は認められない。

遺構の時期は、各施設の組み合わせと平面形態から弥生時代の所産と思われる。

第10号住居跡 (第42図)

調査区中央東側のH-8・9グリッドに位置す

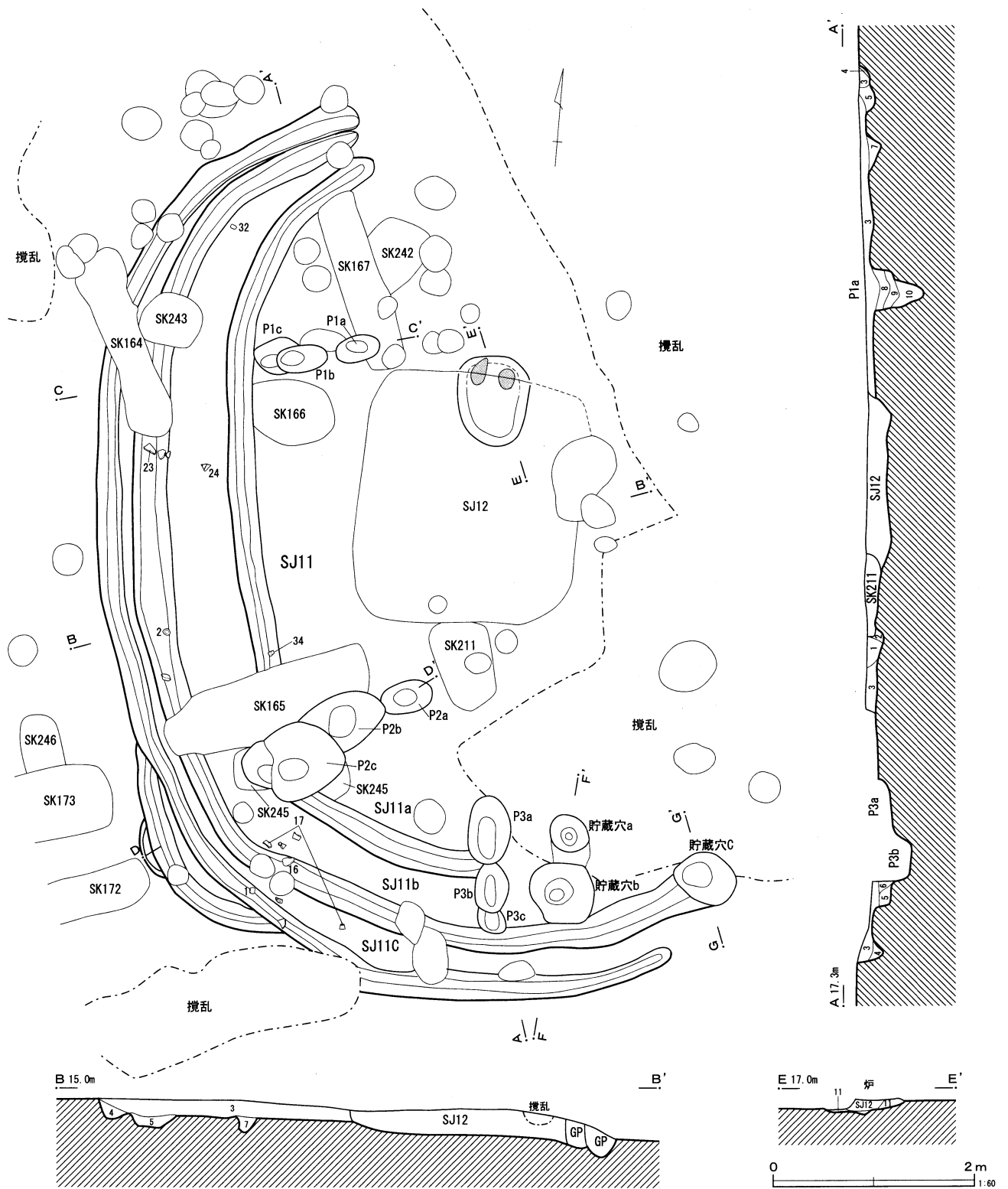
る。第9号住居跡より北側に検出されたが、第9号住居跡と同様な立地条件であり、残存状況は非常に悪い。また、多くの土壌とも重複し壊されている。確認当初から床面は露出しており、炉跡と貯蔵穴と壁溝のみを確認した。

平面形は残存している壁溝から類推すると、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は主軸長3.57m以上、幅は3.15m以上になる。主軸方位はN-71°-Eを指す。

炉跡は住居中央よりやや東側に位置している。グリッドピットと第160号土壌に3分の1くらい壊されているが、平面形は楕円形であろう。規模は長軸0.62m以上、短軸0.53m、深さは0.09mである。

貯蔵穴は南隅に検出され、壁溝と重複する。平面形は径0.48mの円形で、深さは0.08mである。

壁溝は北側と西側で検出され、両者とも中央付近は直線的になる。幅は0.18~0.22mで、深さは0.02~0.07mである。



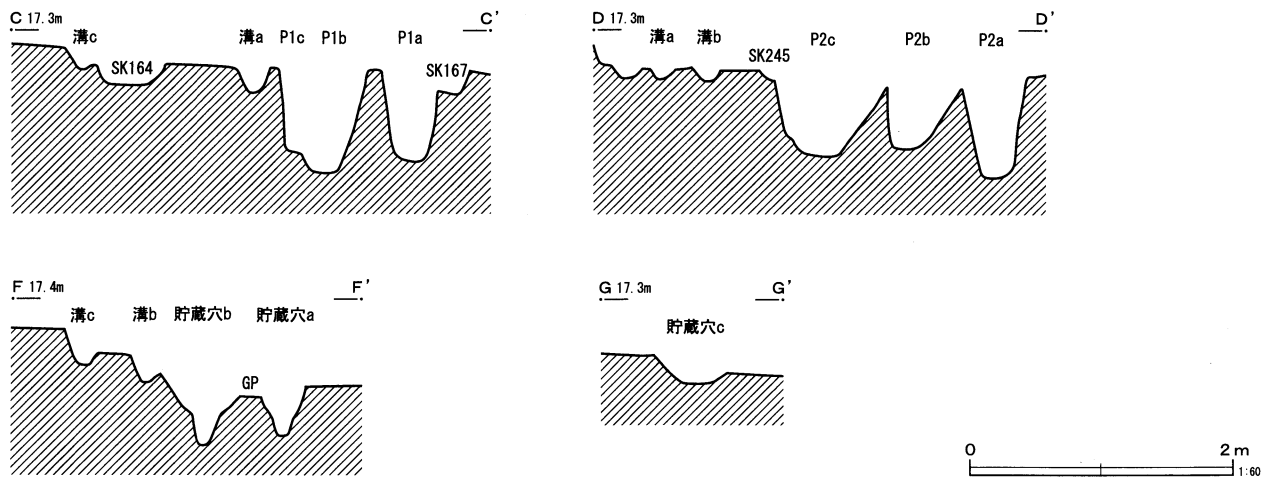
第11号住居跡

- | | |
|---------|---|
| 1 褐色土 | ローム粒子(1~3mm大)微量・ロームブロック(1cm大)微量 |
| 2 褐色土 | ローム粒子(1~3mm大)微量・ロームブロック(1~1.5mm大)微量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子(1~3mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1~2mm大)微量〔覆土c〕 |
| 4 黄褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)微量・ロームブロック(1cm大)微量〔壁溝c〕 |
| 5 黄褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量〔壁溝b〕 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子(1~5mm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量〔P3b〕 |
| 7 黄褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)微量・ロームブロック(1~1.5cm大)・焼土粒子(1~2mm大)微量・炭化物(1~3mm大)微量〔壁溝a〕 |
| 8 黄褐色土 | ローム粒子(1~5mm大)微量・ロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1~2mm大)微量・炭化物(2~3mm大)微量〔P1a〕 |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)少量・焼土粒子(1~2mm大)微量・炭化物(1~2mm大)微量〔P1a〕 |
| 10 黄褐色土 | ローム粒子(1~5mm大)少量・ロームブロック(1~1.5cm大)微量・焼土粒子(1~2mm大)微量・炭化物(1~2mm大)微量〔P1a〕 |
| 11 黄褐色土 | ローム粒子(1~8mm大)少量・ロームブロック(1~2mm大)少量・焼土粒子(1~5mm大)少量・焼土ブロック(1~1.5cm大)微量 |

焼土

1次 ---- a
2次 ---- b
3次 ---- c

第43図 第11号住居跡(1)



第44図 第11号住居跡（2）

遺物は弥生土器片7点が周溝・炉・柱穴から出土しているが、図化可能なものは1点のみである。
第10号住居跡出土遺物（第42図）

1は甕の口縁部で、口唇部に棒状工具で刻みを施す。外面調整はナナメヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキである。

遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

第11号住居跡（第43・44図）

調査区中央東側のH・G-8、G-9グリッドに位置する。後世の造成によって東側半分が切られており、多くの土壌とも重複して部分的に壊されていた。そのために確認当初は住居跡2軒が重複しているものと考えた。しかし、精査直前の確認では、大型住居跡も考慮に入れて調査を開始した。ひときわ黒く、四角い土が本住居跡本来の覆土だと考えていたが、最終的には第12号住居跡の覆土そのものであった。結果的だが弥生中期と古墳前期の先後関係が平面的にも識別が可能であったことになる。後世の造成によって上層が破壊されており、本住居跡の覆土はわずかに残すのみとなっていた。

西側半分のみ調査であったが、貯蔵穴・支柱穴・入口部のピット・壁溝など基本構造はおおよそ確認された。壁溝は3重に巡っており、2回の拡張（b・c）が行なわれたことがわかる。4本

の支柱穴の西側2ヶ所と入口部のピットは、それぞれ3次分（a・b・c）の本数が設けられている。貯蔵穴も入口部のピットの東にあり、それぞれ3次分について、壁溝との距離関係から特定が可能である。炉跡は、住居中央に構築された第12号住居跡によって大半が破壊されており、残骸がわずかに残っているだけである。

平面形は1次はやや縦長だが、すべて共通して、小判形を呈し、主軸方位はN-5°-Wを指す。主軸長と幅を計測する際に、およそ住居跡の半分しか検出していないために、入口部のピットと炉跡を直線で結んだ主軸線を用いる。なお、主軸長は北側の壁溝を主軸線まで延ばして測り、幅は主軸線までの距離とカッコ内で2倍した値を示す。

1次の規模は、主軸長7.18m、幅2.56m（5.12m）で、確認面からの深さは0.09~0.19mである。2次の規模は、主軸長8.23m、幅3.52m（7.04m）で、確認面からの深さは0.07~0.25mである。3次の規模は、主軸長8.86m、幅3.85m（7.70m）で、確認面からの深さは0.07~0.17mである。

床面は良好な状態では残存していないが、炉に向かって少し低くなっている。

炉跡は住居中央よりやや北側に位置する。南側の上層は第12号住居跡に壊されるが、かろうじて掘り方は残存している。平面形は楕円形で、規模は長軸0.97m、短軸0.70m、深さ0.13mである。

ピットは9本検出された。前述の通り1～3次の支柱穴2本と入口部のピットである。1次のP1a～3aの平面形は長楕円形である。P1・2aは長軸0.45m前後、短軸0.30m前後で、深さは0.70m前後である。P3aは長軸0.67m以上、短軸0.42mと大きく、深さは0.41mである。2次のP1b～3bは長楕円形である。P1・3bは長軸0.50m前後、短軸0.30m前後で、深さはP1bが0.74mと深く、P3bは0.38mと浅い。P2bは長軸0.60m以上、短軸0.56mで、深さは0.56mである。3次のP1・3cの平面形は長楕円形で、長軸は0.25m以上である。短軸はP1cが0.35m、P3cが0.24mとなる。P2cは西側に段差をもつ。長軸は0.96m以上、短軸は0.74mである。深さはP1・2cが0.62m前後、P3cは0.19mと浅い。

貯蔵穴は3基検出された。貯蔵穴aはP3aの東側に位置し、平面形は楕円形で、長軸0.42m、短軸0.34mである。深さは0.44mである。貯蔵穴bは、P3bの東側に位置し、平面形は不整形である。規模は長軸0.69m、短軸0.60m、深さ0.64mである。貯蔵穴cは壁溝bの東端に位置し、平面形は楕円形である。規模は長軸0.63m、短軸0.53mで、深さ0.18mである。

壁溝は3次ともに検出された住居内ですべて廻っている。壁溝aは幅0.24～0.27m、深さ0.02～0.13mである。壁溝bは幅0.29～0.39m、深さ0.10～0.15mである。壁溝cは幅0.15～0.27m、深さ0.02～0.12mである。なお、壁溝cの南西隅には、さらに外側に隅丸方形になる壁溝が追加されているが、その目的はわからない。

遺物は総数360点のうち、弥生土器が354点、石器が6点である。床面より少し浮いた状態で出土したものがほとんどで、出土状況図に示した周溝上にある遺物も、同様である。ただし、第45図32の石器は床面直上から、34は周溝覆土上層から出土している。

第11号住居跡出土遺物（第45図）

1は壺の単口縁で、外面はハケ調整である。2は赤彩など施されないが、高坏の脚部と思われる。

3～14は壺の胴部片である。3～6は、擬似流水文を施す破片である。3は櫛描文が途切れるところに、弧状の沈線が確認できる。6は、櫛描文の下位に1本描沈線の斜格子文を施している。

7は、破片上部に鋸歯文が認められ、外面はミガキ調整である。

8は原体LR単節縄文を1本描沈線で区画する。

9～11は、円形浮文を貼り付ける胴部片で、10・11は同一個体と思われる。9は1本描沈線による平行線文2条を施し、斜めにも施して逆三角形を作る。その上にヘラ状工具の先で、沈線区画内に刺突を多数加えている。逆三角形の部分には赤彩を施し、沈線の交差点に円形浮文を貼り付ける。

10・11は、原体RL単節縄文を施文後、3本一単位の櫛歯状工具による直線文で区画し、円形浮文を貼り付ける。11の縄文上には、1本描沈線による山形文を加えている。外面調整はミガキである。

12は1本描沈線の上位に、竹管状工具によって円形刺突を2段施す。外面調整はミガキである。

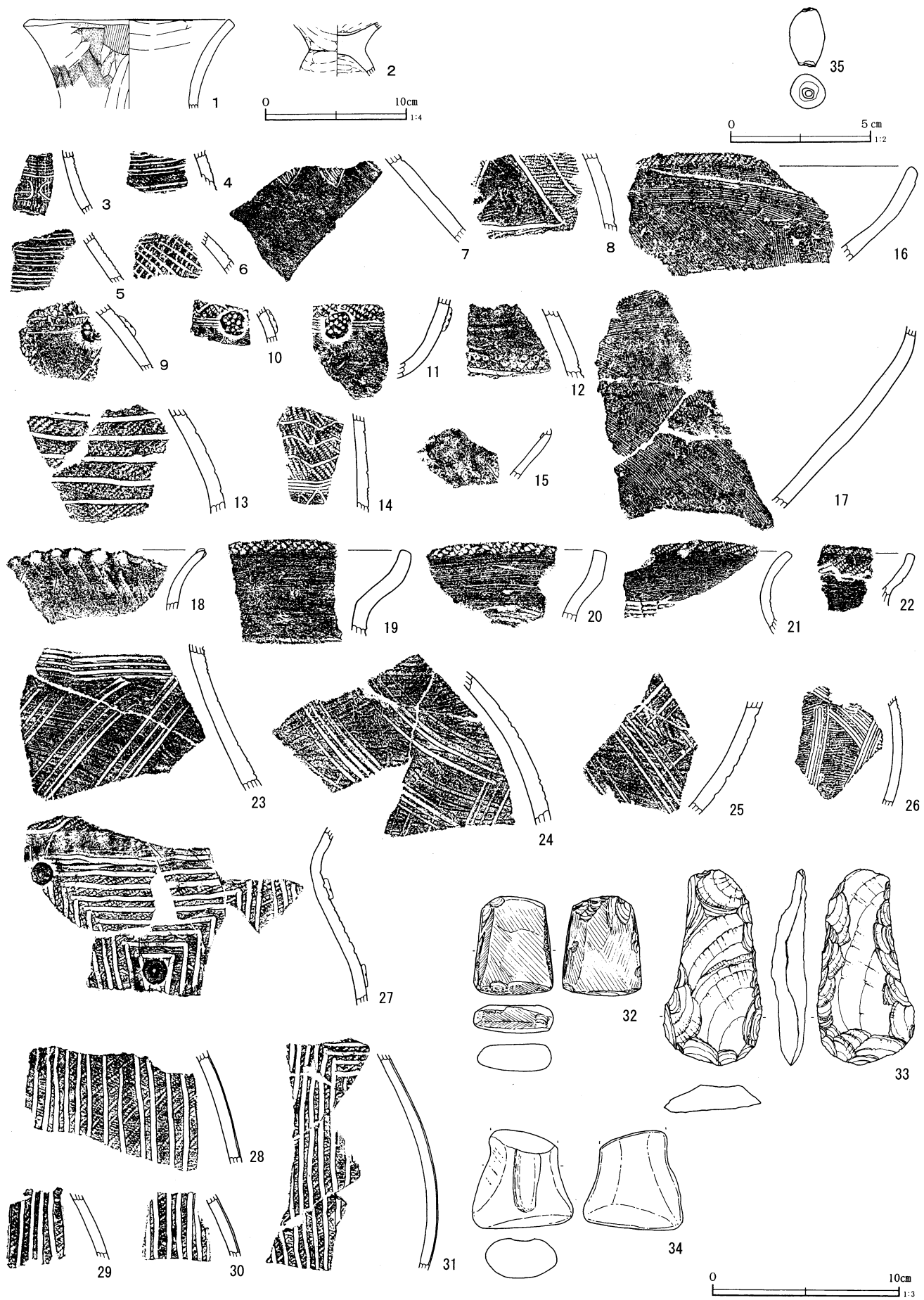
13は、原体LR単節縄文地に1本描沈線5条を施している。

14は頸部片と思われ、原体RL単節縄文を4本一単位の櫛描直線文で区画し、縄文地に1本描沈線3条による波状文を施している。

15は、ミニチュア土器と思われる。内面を赤彩しているため、高坏になる可能性がある。外面はミガキ調整で、かすかに赤彩の痕跡が見える。

16・17は同一個体で、16は口縁部、17は上位が口縁部付近で、下位が底部付近と考えられ、鉢になると思われる。16の口唇部には原体LR単節縄文を施文する。その直下に沈線状のものが確認できるが、ハケ状工具の角が強く当たって偶然付いたものである。内面はヘラナデ調整である。

18～31は甕である。18は口唇部に指頭押捺を加



第45图 第11号住居跡出土遺物

えており、凹部に爪が当たった痕跡が残る。

19・20は受口状の口縁部で、口唇上面に原体LR単節縄文を施す。19は頸部に1条の沈線がわずかに確認できるが、20の頸部にはハケ調整が残る。

21は口唇に原体LR単節縄文を施文し、頸部に5本一単位の簾状文を時計回りに施している。

22は、口唇と口縁部外面に原体LR単節縄文を施文後、外面に1本描沈線による波状文を加えている。

23～26が櫛描文による横羽状文を施した胴部片である。23～25は胎土・色調ともに類似し、同一個体と思われたが、5本一単位の櫛歯状工具が異なる。23は頸部に1条の櫛描文を時計回りに施した後、胴部に右に跳ね上げる斜線文を加えている。24・25は、23とは逆方向の横羽状文となる。

27～31は同一個体で、コの字重ね文を施している。地文に原体LR単節縄文を施し、横位沈線と右側の縦位沈線を一筆書きで描いた後、左側の縦位沈線を加えてコの字重ね文を描いている。そして、文様の中央と角に、円形浮文を貼り付けている。

口縁部外面には、1本描沈線の波状文を施す。

32は全面に研磨が施されており、定角式磨製石斧の基部の再利用である。底面及び側面に敲打痕が見られる。

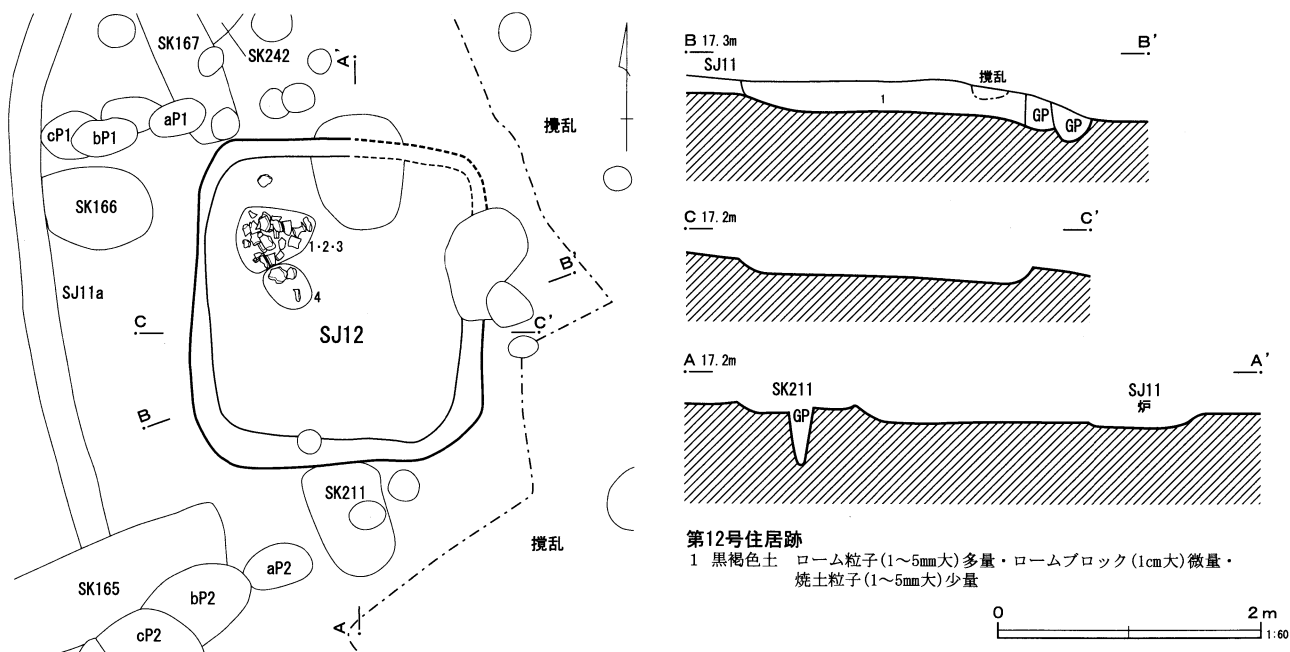
33は短冊形を呈する打製石斧である。

34は正面に凹線がある有溝砥石である。

遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

第12表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺	(14.3)	[6.4]		A B C E F I	普通	橙	40	
2	弥生土器	不明		[3.6]		A B C	普通	橙	80	脚部
3	弥生土器	壺			頸部	A B C	普通	橙	破片	外面赤彩 櫛歯 6本一単位
4	弥生土器	壺			頸部	A B C F	普通	橙	破片	P3b出土 外面赤彩 櫛歯 5本一単位
5	弥生土器	壺			胴部	A B C F	普通	橙	破片	外面赤彩 櫛歯 5本一単位
6	弥生土器	壺			胴部	A B C	普通	橙	破片	外面赤彩
7	弥生土器	壺			胴部	A B C	普通	にぶい橙	破片	外面赤彩
8	弥生土器	壺			胴部	A B C F	普通	にぶい橙	破片	外面赤彩
9	弥生土器	壺			胴部	A B C	普通	褐灰	破片	外面一部赤彩
10	弥生土器	壺			胴部	A B C I	普通	褐灰	破片	外面一部赤彩 櫛歯 3本一単位
11	弥生土器	壺			胴部	A B C F	普通	黒	破片	櫛歯 3本一単位
12	弥生土器	壺			胴部	A B C	普通	褐灰	破片	
13	弥生土器	壺			胴部	A B C F I	普通	にぶい褐	破片	
14	弥生土器	壺			胴部	A B C F	普通	黒褐	破片	P1b出土 櫛歯 5本一単位
15	弥生土器	ミニチュア土器			不明	A B C F	普通	灰黄褐	破片	内面赤彩
16	弥生土器	鉢か			口縁部	A B C F	普通	橙	破片	
17	弥生土器	鉢か			胴部	A B C F	普通	橙	破片	
18	弥生土器	甕			口縁部	A B C	普通	灰褐	破片	貯穴 b 出土 砂粒多い
19	弥生土器	甕			口縁部	A B C I	普通	橙	破片	
20	弥生土器	甕			口縁部	A B C E I	普通	にぶい橙	破片	
21	弥生土器	甕			口縁部	A B	普通	灰褐	破片	P1b出土
22	弥生土器	甕			口縁部	A B G	普通	灰褐	破片	
23	弥生土器	甕			胴部	A B C I	普通	橙	破片	櫛歯 5本一単位
24	弥生土器	甕			胴部	A B C F I	普通	にぶい褐	破片	櫛歯 5本一単位
25	弥生土器	甕			胴部	A B C I	普通	にぶい橙	破片	櫛歯 5～6本一単位
26	弥生土器	甕			胴部	A B C	普通	橙	破片	P1b出土 櫛歯 5本一単位
27	弥生土器	甕			胴部	A C F	普通	橙	破片	貼付浮文 上:径1.2cm 下:1.1cm
28	弥生土器	甕			胴部	A C F	普通	橙	破片	27～31は同一個体
29	弥生土器	甕			胴部	A C F	普通	橙	破片	
30	弥生土器	甕			胴部	A C F	普通	橙	破片	
31	弥生土器	甕			胴部	A C F	普通	橙	破片	
32	石器	敲石	長さ[5.4]cm 幅[4.3]cm 厚さ1.5cm 重さ61.7g							砂岩 磨製石斧を転用
33	石器	打製石斧	長さ[10.6]cm 幅[5.3]cm 厚さ1.5cm 重さ90.6g							ホルンフェルス
34	石器	砥石	長さ[5.4]cm 幅[5.4]cm 厚さ2.1cm 重さ86.0g							有溝
35	土製品	土錘	長さ2.2cm 径1.3cm 孔径0.5cm 重さ2.5g							周溝 b 出土



第46図 第12号住居跡



第47図 第12号住居跡出土遺物

第13表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器	台付甕	12.0	18.1	7.7	A B F	良好	にぶい橙	95	外面口縁~胴上半に煤附着
2	土師器	台付甕	12.6	(20.3)	(7.8)	A B F	良好	暗赤褐	90	外面口縁~胴上半に煤附着
3	土師器	鉢	16.7	6.8	6.1	A B C F	良好	にぶい赤褐	80	
4	土師器	鉢	13.7	8.5	5.4	A B F	良好	にぶい橙	80	

第12号住居跡 (第46図)

調査区中央東側のG-8グリッドに位置する。第11号住居跡中央にあり、同住居の炉跡三分之一を壊している。北西隅の壁は、後世の攪乱によって壊されたと思われる。

平面精査時、第11号住居跡の覆土が純粹に残っていると考えていた黒い土が、第12号住居跡の覆土であった。

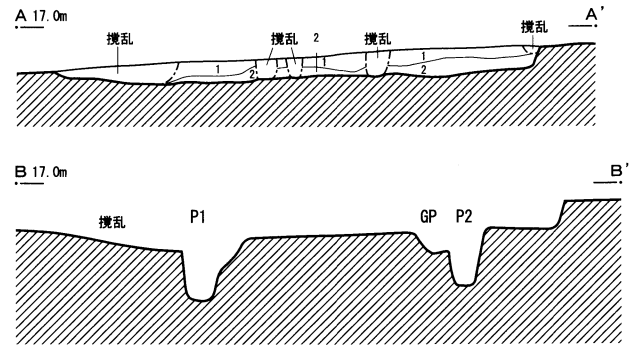
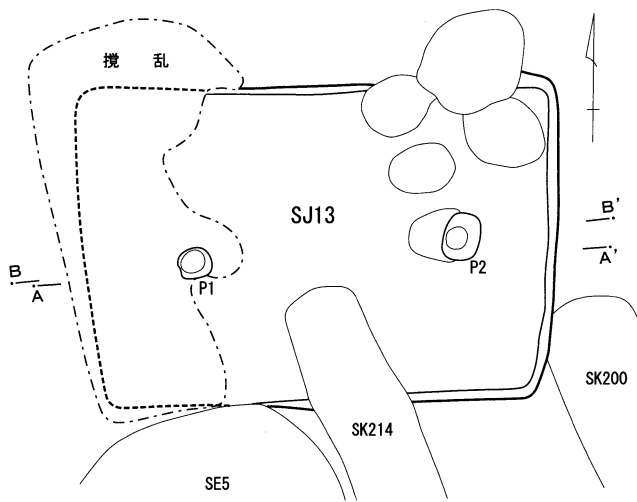
平面形は方形で、主軸長2.49m、幅2.20mで、確認面からの深さは0.07~0.17mである。

床面は、東側斜面に向かって少し傾斜している。炉跡・ピット・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、土師器甕2点と同鉢2点である。床面より少し浮いており、まとめて潰れた状態で出土した。また、混入と思われる弥生土器片が出土している。

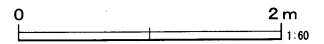
第12号住居跡出土遺物 (第47図)

1・2は台付甕で、外面調整はヨコナデ後、ヨコミガキを施す。しかし、丁寧にヨコミガキを施してはいない。脚部はナデ調整のみである。内面



第13号住居跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子(1~4mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量・
灰褐色粘土ブロック(1cm大)少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子(1~5mm大)多量・ロームブロック(1~3cm大)多量



第48図 第13号住居跡

はヘラナデ調整で、口縁部から頸部にかけてはミガキ調整が見られる。

3・4は鉢である。3は内外面ともに、砂粒が動くほど強くヘラナデを施している。4は内外面ともに、条線を残す板ナデを施す。

遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

第13号住居跡 (第48図)

調査区中央西側のG・H-5グリッドに位置する。第200・214号土壌、グリッドピット、攪乱によって壊されている。また、第5号井戸跡とは隣接している。

後世の造成によって上面が削平されており、確認面は西側に向かって低くなっている。西側では攪乱がさらに深く入り、ほぼ床面の深さまで達している。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.56m(推定)、短軸長2.42mで、確認面からの深さは0.14~0.27mである。長軸方位はN-88°-Wを指す。

ピット以外の施設は検出されなかった。竪穴の規模から考えて、もともと他の施設はなかったと想定できる。

ピットは2本検出された。短軸の中央で、東西壁寄りに位置している。P1は径0.25mの円形で、深さは0.45mである。P2は台形を呈し、長

軸0.36m、短軸0.29mで、深さは0.42mである。

遺物は中近世の土器片が13点出土したが、図示可能なものはなかった。また、混入と思われる弥生土器小片が25点出土した。

遺構の時期は、第5号井戸跡や掘立柱建物跡群の位置関係から、同井戸跡・同掘立柱建物跡と同時期と推定でき、竪穴状遺構と思われる。

第14号住居跡 (第49図)

調査区中央北東側のF-8グリッドに位置する。台地の突端部で最も高いところに位置し、後世の造成によって竪穴部分が削平されている。

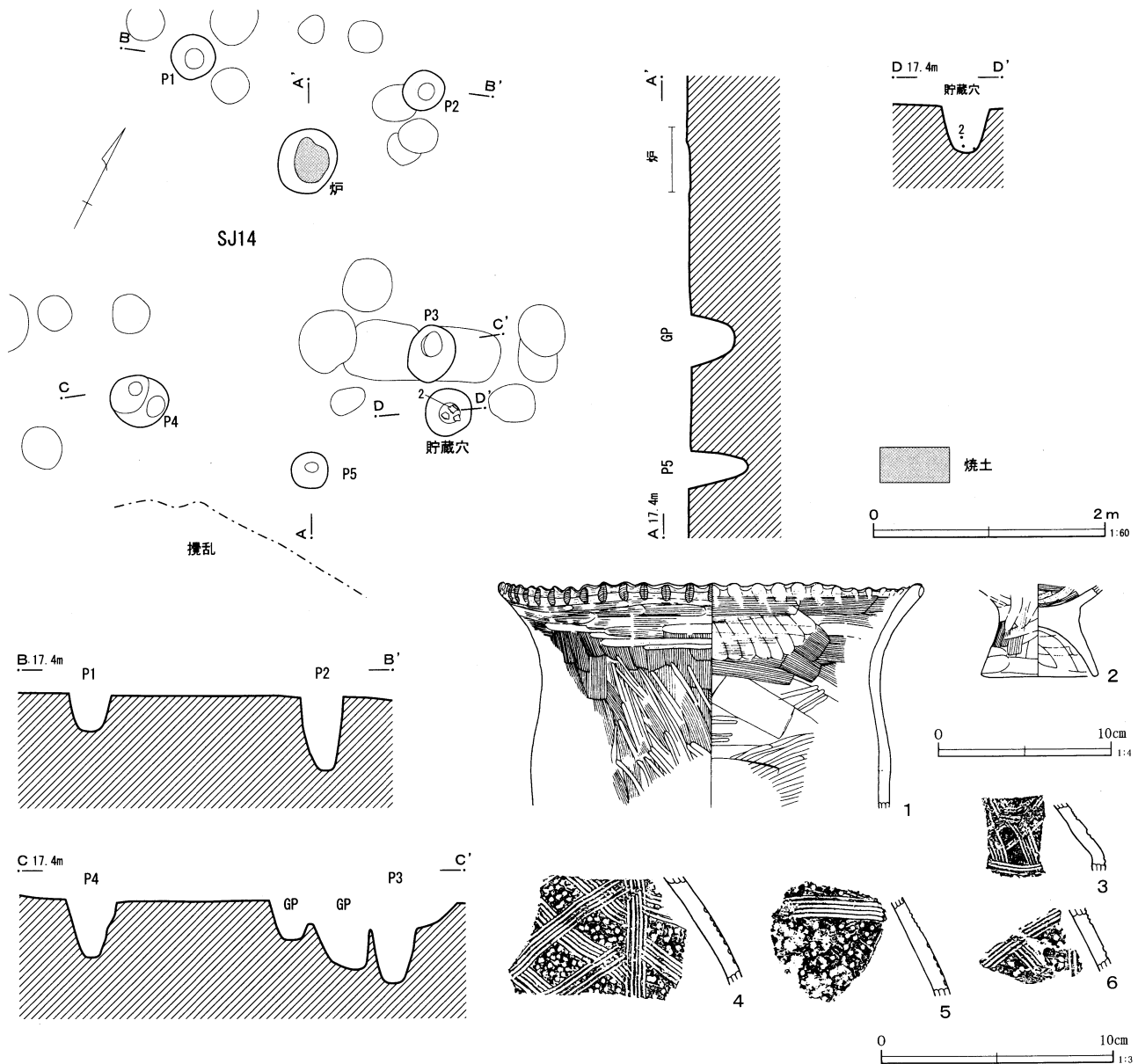
掘り込みと壁溝は確認できずに、炉跡、ピット、貯蔵穴を検出した。主軸方位は、N-29°-Wを指す。

炉跡は、P1とP2の間でやや南西に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.20mである。

ピットは、支柱穴4本と入口部のピットを検出した。P1・2・4・5は径0.33~0.50mの円形である。P3は楕円形で、長軸0.47m、短軸0.39mである。深さはP1が0.39mと浅く、P4・5が0.50mで、P2・3が0.63、0.69mと深い。

貯蔵穴はP3の南西側に近接し、平面形は径0.42mの円形で、深さ0.33mである。

遺物は柱穴と貯蔵穴から12点出土した。



第49図 第14号住居跡・出土遺物

第14表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	甕	(24.5)	[13.0]		A B F	普通	暗赤灰	15	
2	弥生土器	台付甕		[5.3]	6.7	A B F	普通	にぶい褐	85	脚部
3	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	にぶい褐	破片	P3出土 櫛歯5本一単位
4	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	黒褐	破片	貯穴出土 櫛歯5本一単位
5	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	4と同一個体
6	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	黒褐	破片	4と同一個体

第14号住居跡出土遺物 (第49図)

1は甕で、口唇部にハケ状工具で刻みを付け、刷毛目を残す。外面はハケ後、胴部にヘラミガキを施す。

2は台付甕の脚部で、外面はハケ後、ナデ調整である。内面は、条線を残すヘラナデを施す。

3～6は壺の胴部片である。3は破片下位に5

本一単位の櫛描文を施し、その上部に波状文を施す。4～6は同一個体である。縦位に5本一単位の櫛描文を施した後、両側に同一工具で斜格子文を加える。その斜格子の中に、竹管状工具で刺突を14～20点加える。内面はヘラナデ調整である。

遺構の時期は、各施設の組み合わせと出土遺物より、弥生時代の所産と思われる。

3. 方形周溝墓

調査区南端に四隅が切れるタイプの方形周溝墓3基を検出し、南西端には全周するタイプの大型方形周溝墓と、それに付随する方形周溝墓2基を検出した。平面形態と出土遺物などから、四隅が切れるタイプは弥生時代、大型とそれに付随するタイプは古墳時代の所産だと考えられる。

四隅が切れる方形周溝墓は、弥生環濠（第13号溝跡）の外側に位置しており、集落域と墓域との関係性がうかがえる。

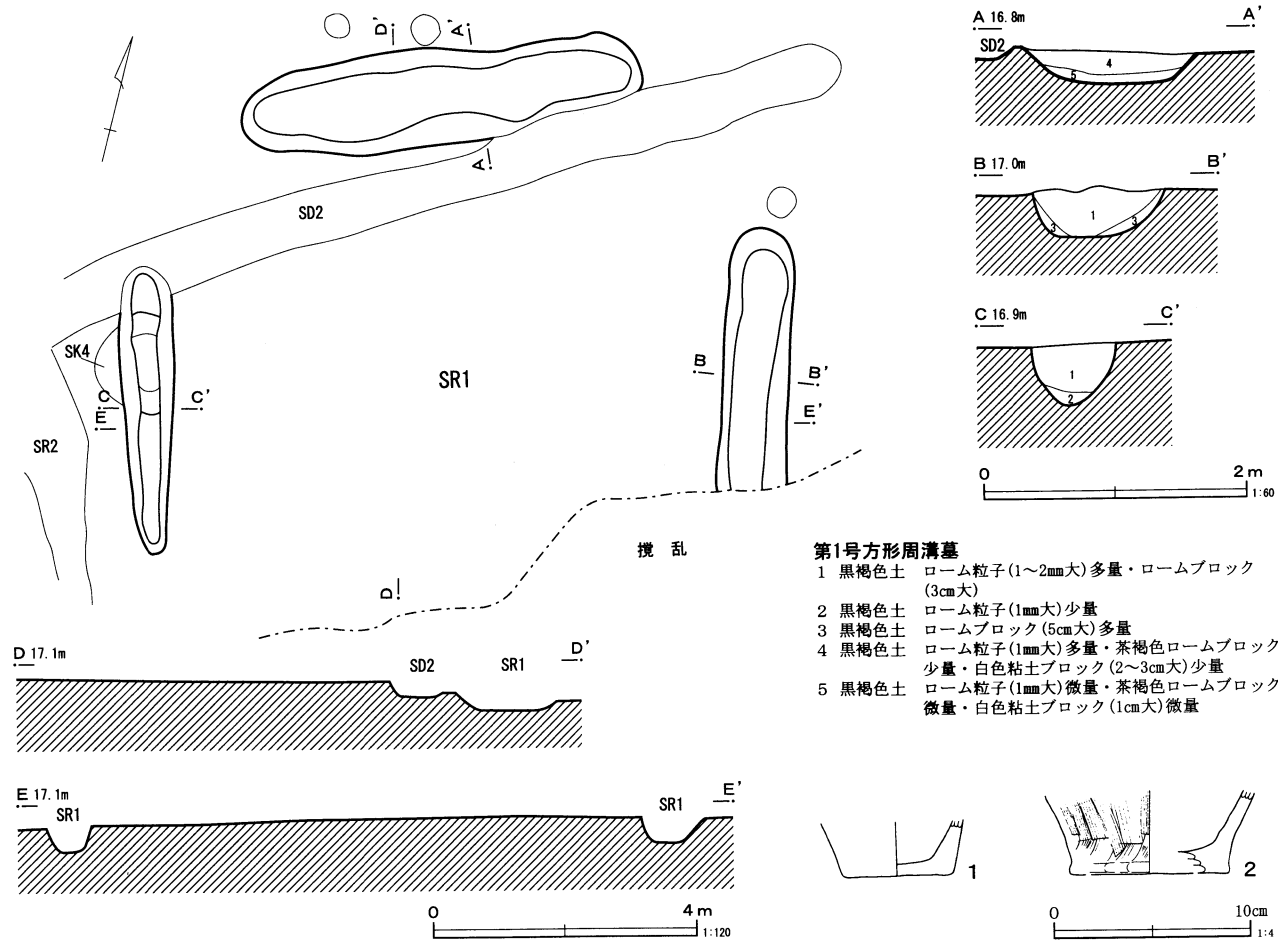
第1号方形周溝墓（第50図）

調査区南側のN-6・7、O-6グリッドに位置する。北溝西端が最も低く、北溝に向かって低くなる緩斜地に作られている。北・西溝は第2号

溝跡・第4号土壌に壊され、南溝全体が完全に攪乱によって削平されている。第2号方形周溝墓の東溝とは約0.6mの至近距離で隣接しているが、主軸方位は若干異なる。

覆土は黒褐色土で、自然堆積を示す。方台部や周溝壁の崩落土と考えられるローム粒子・ブロック混じりの土が溝底に堆積している。東溝の底面は北から南端へ低くなり、北・西溝は中央付近に向かって低くなっている。なお、西溝には北側に深さ0.20mほど浅く掘り込まれている部分があった。

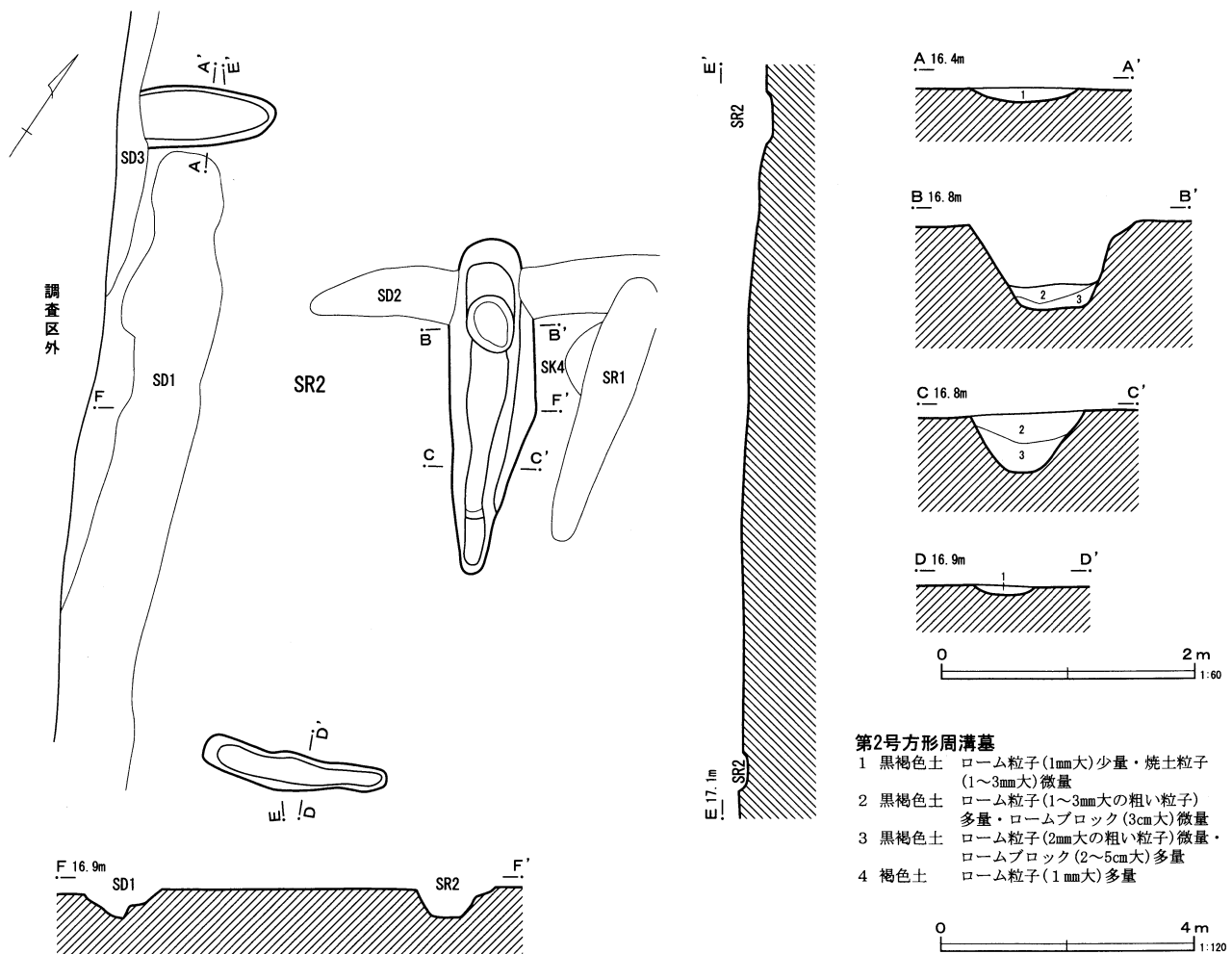
全体の規模は南北6.90m以上、東西10.60mである。北溝を反転復元して考えると、方台部はほ



第50図 第1号方形周溝墓・出土遺物

第15表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表（第50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	不明		[2.8]	5.7	C F	普通	橙	95	底部
2	弥生土器	不明		[4.2]	8.0	A C E	普通	灰褐	15	底部



第51図 第2号方形周溝墓

ほぼ正方形となる。方台部は東西8.29m、南北3.86m(7.72m)である。主軸方位はN-22°-Wを指す。北溝は長さ6.06m、幅1.74mで、確認面からの深さは0.17~0.24mである。東溝は長さ3.90m、幅1.02mで、確認面からの深さは0.19~0.34mである。西溝は長さ4.32m、幅0.84mで、確認面からの深さは、掘り込み部分以外で0.26~0.42mである。

遺物は、弥生土器片が17点出土しているが、図示しえたのは2点のみである。1・2ともに北溝から出土している。

第1号方形周溝墓出土遺物(第50図)

1・2ともに、弥生土器の底部である。1は、内外面ともに摩滅・風化が著しく調整は不明瞭である。2の外表面調整は、タテハケである。

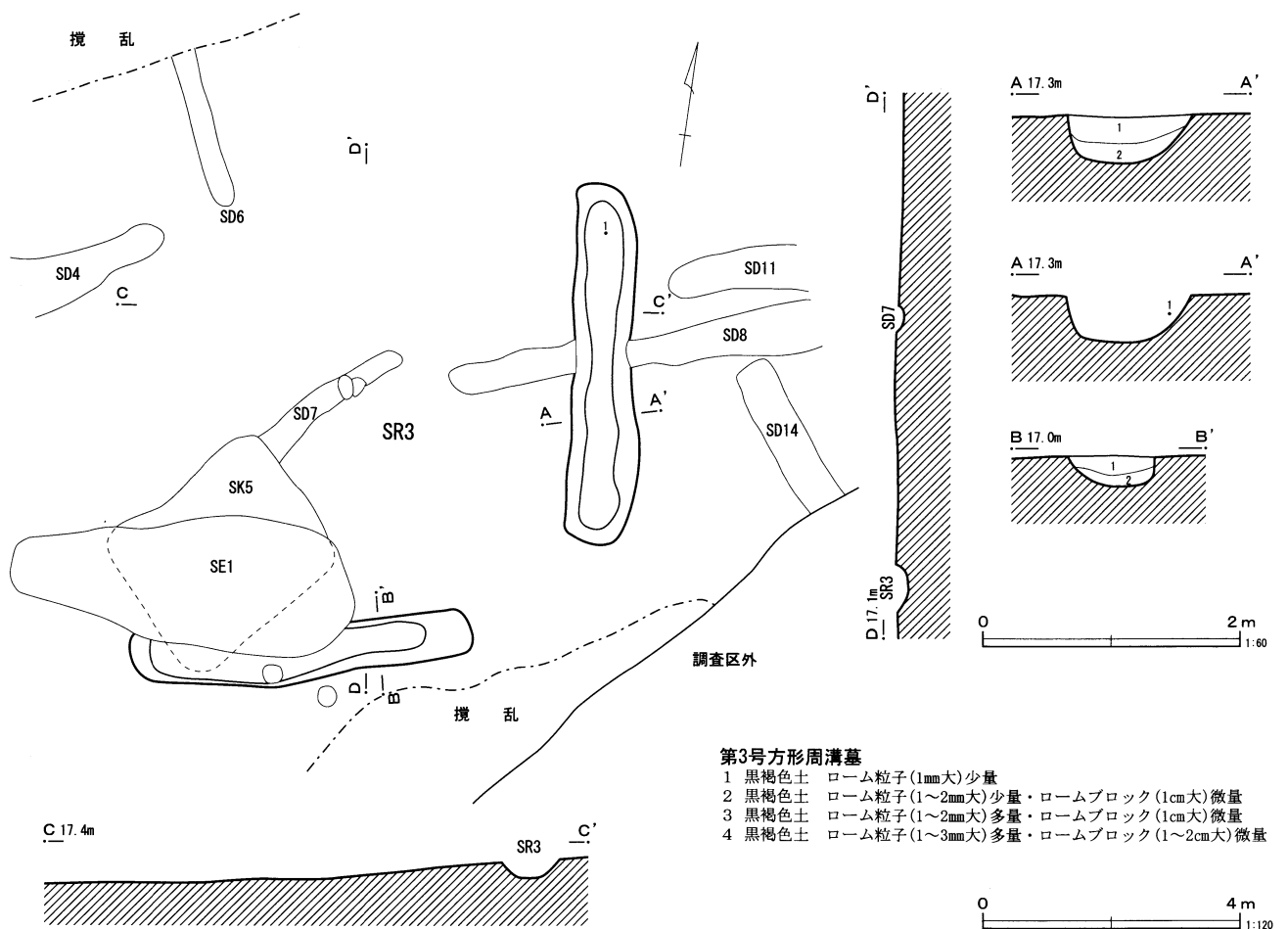
遺構の時期は、第3号方形周溝墓の掘削方法と

類似していることや出土遺物から、弥生時代中期後半と思われる。

第2号方形周溝墓(第51図)

調査区南側のN・O-5・6グリッドに位置する。第1号方形周溝墓と同様に、北溝が最も低く、北溝に向かって低くなる緩斜地に作られている。およそ全体の半分が調査区外へと延びており、西溝は検出されていない。また、東溝の上層が、第2号溝跡によって削られている。前述通り、第1号方形周溝墓と隣接している。

覆土は黒褐色土で、自然堆積を示す。東溝3層には、ロームブロックが混入しており、方台部や周溝壁の崩落土と考えられる。北溝は黒褐色土が染み状に残存している程度で、南溝はわずかな幅と長さであり、両者ともほとんど深さがなかった。一方、東溝はしっかりとした掘り込みをもち、断



第52図 第3号方形周溝墓

面は逆台形である。また北側に溝内土壌を検出した。北・南溝の底面は中央付近に向かって低くなり、西溝は、南端から溝内土壌へ低くなっている。

全体の規模は南北10.86m、東西7.11m以上である。方台部の規模は東西5.59m、南北9.50mである。主軸方位はN-36°-Wを指す。北溝は長さ2.09m、幅0.95mで、確認面からの深さは0.04~0.12mである。東溝は長さ5.22m、幅1.99mで、確認面からの深さは0.21~0.52mである。溝内土壌の深さは0.23mである。南溝は長さ2.90m、幅0.59mで、確認面からの深さは0.08~0.13mである。

遺物は、弥生土器片が11点出土したが、図示可能なものはなかった。

遺構の時期は、第3号方形周溝墓の掘削方法と類似していることや出土遺物から、弥生時代中期後半と思われる。

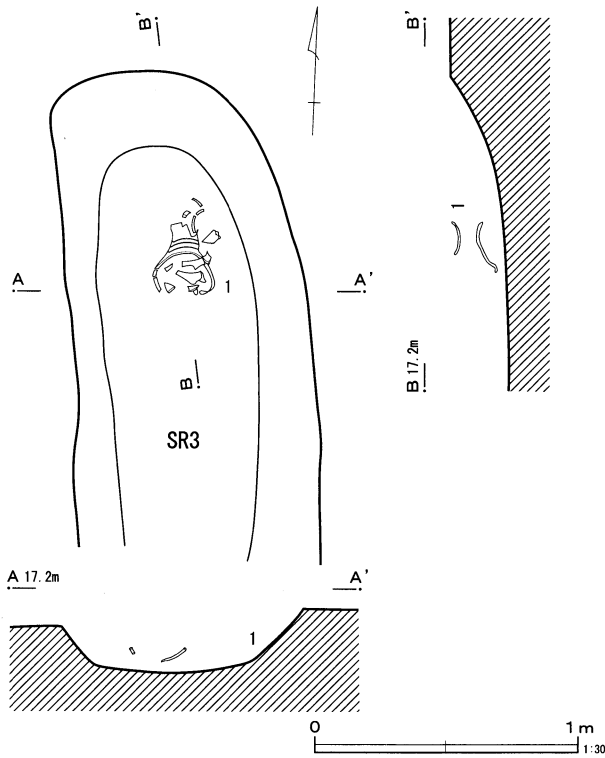
第3号方形周溝墓 (第52図)

調査区南側のM-8、N-7・8グリッドに位置する。東から西に低くなる緩斜地に作られている。北・西溝は元々掘削されていないのか、検出されなかった。第8号溝跡、第5号土壌、第1号井戸跡によって壊されている。

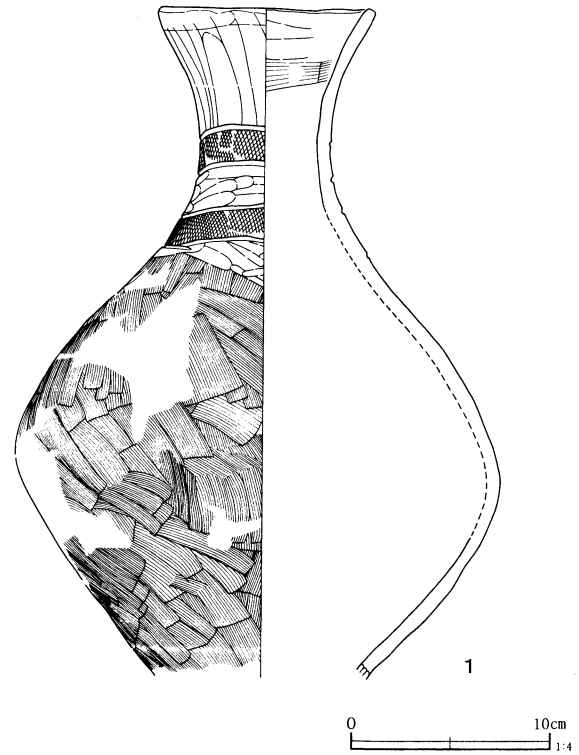
覆土はローム粒子を含む黒褐色土で、自然堆積を示す。東溝の底面は北から南端へ低くなり、南溝は東から西へ低くなっている。

全体の規模は、南溝南辺~東溝北端が7.61m、東溝東辺~南溝西端が7.90mである。方台部の規模は東西6.94m、南北6.70mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。東溝は長さ5.52m、幅1.06mで、確認面からの深さは0.15~0.38mである。南溝は長さ5.28m、幅0.86mで、確認面からの深さは0.10~0.25mである。

遺物は、弥生土器が72点出土した。そのうち、



第53図 第3号方形周溝墓遺物出土状況



第54図 第3号方形周溝墓出土遺物

第16表 第3号方形周溝墓出土遺物観察表 (第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺	10.5	[33.9]		A B C	普通	明黄褐	70	オオバコ系擬縄文

図示可能なものは、東溝北端で検出した弥生土器の壺(第54図1)のみである。1は、口縁部から胴部下半まで残存しているが、東溝上面が削平されているために、胴下半の半分は失われていた。

第3号方形周溝墓出土遺物 (第54図)

1は頸部から胴部上半にかけて、オオバコ系擬縄文を施文する。その後、反時計回りの1本描平行沈線により上下2ヶ所を区画して、その間と沈線区画から出ている擬縄文をナデ消している。外面調整はハケで、内面は剝落が著しく不明である。

遺構の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

第4号方形周溝墓 (第55~59図)

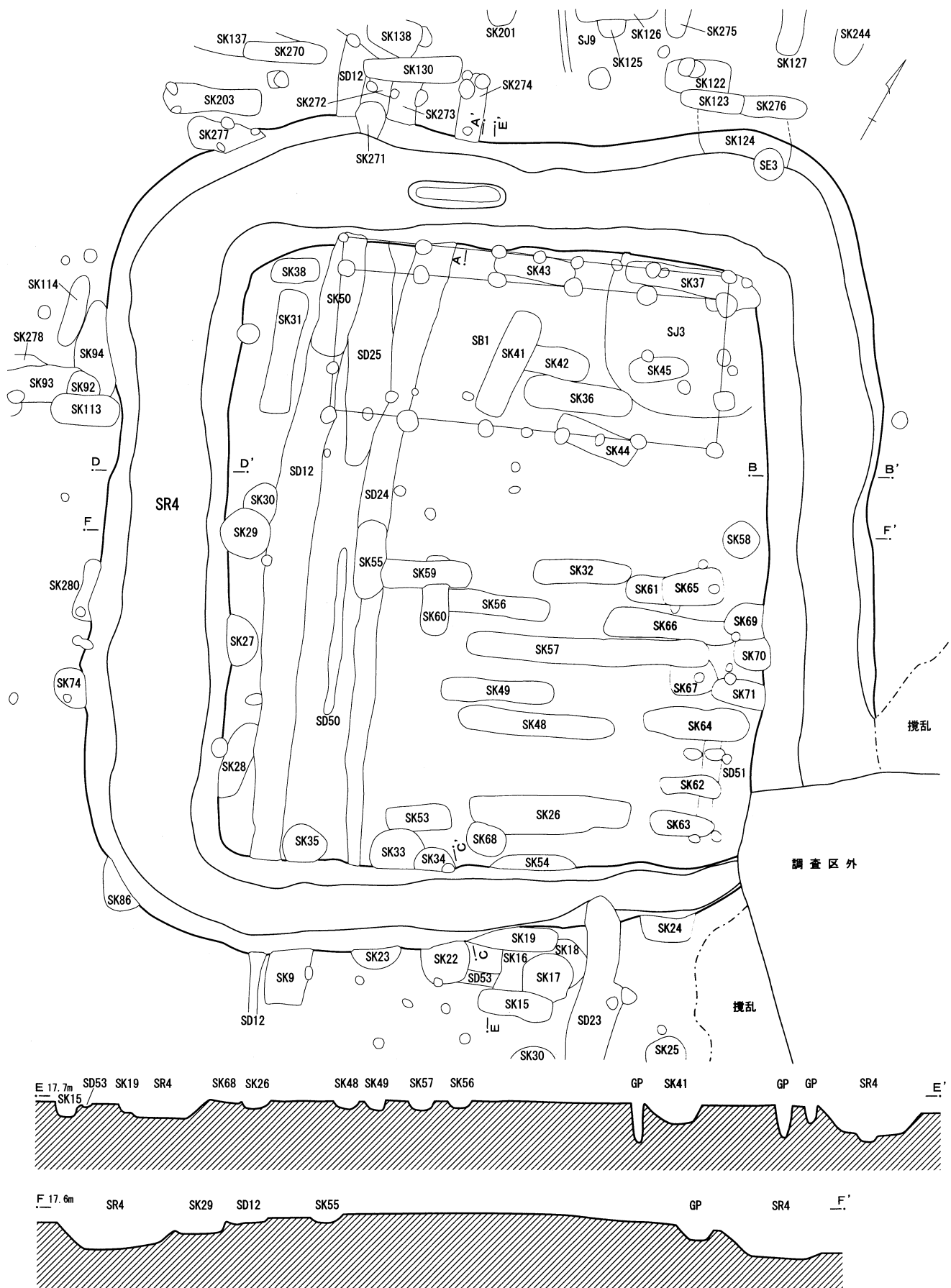
調査区南西側のI~K-8~10グリッドに位置する。南東隅は調査区外となっているが、攪乱が周りに及んでおり残存していないと考えられ

る。本周溝墓は、馬の背状の台地における最も高い場所に立地し、東溝は台地の縁辺と接している。方形周溝墓の方台部の中を17.500mの等高線が回り、方台部のほぼ中心に本周溝墓の最高点がある。南北はほぼ同一の高さで推移しているが、東西には緩やかに傾斜しており、東溝の手前で、より低くなっている。

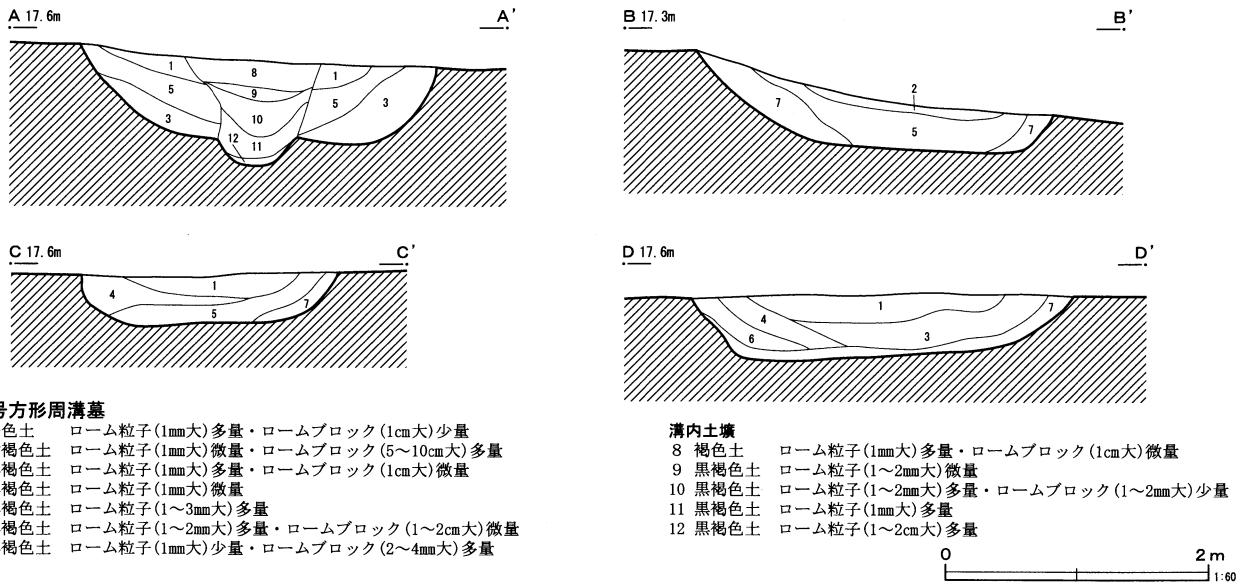
本周溝墓の主軸は、西側斜面の等高線に平行している。確認面における西溝と東溝の比高差は、およそ0.70m程度である。

表土掘削時から膨大な排土量が想定され、時代順に遺構の精査を行なった場合、排土搬出経路を確保できないことから、周辺の土壌に先んじて本周溝墓の掘削を行なった。幸いにも、周溝を完掘することで消滅してしまう土壌はなかった。

覆土は黒褐色土を基調とし、自然堆積を示して



第55図 第4号方形周溝墓(1)



第56図 第4号方形周溝墓(2)

おり、7層はブロックを多く含み、方台部および周溝壁の崩落土と考えられる。その初期崩落土や5層中から完形遺物が多く出土しているが、覆土中から出土する遺物、特に周辺遺構からの混入遺物が少ない。逆に考えると、方台部を盛土する際、溝の掘削土以外、周辺の土を使用しなかったか、あるいは周溝が短期間に埋没した傍証になるかもしれない。なお、その埋没過程において、意図的に埋め戻した可能性は、東溝北部のわずかな範囲にロームの集中が認められただけで考えられない。

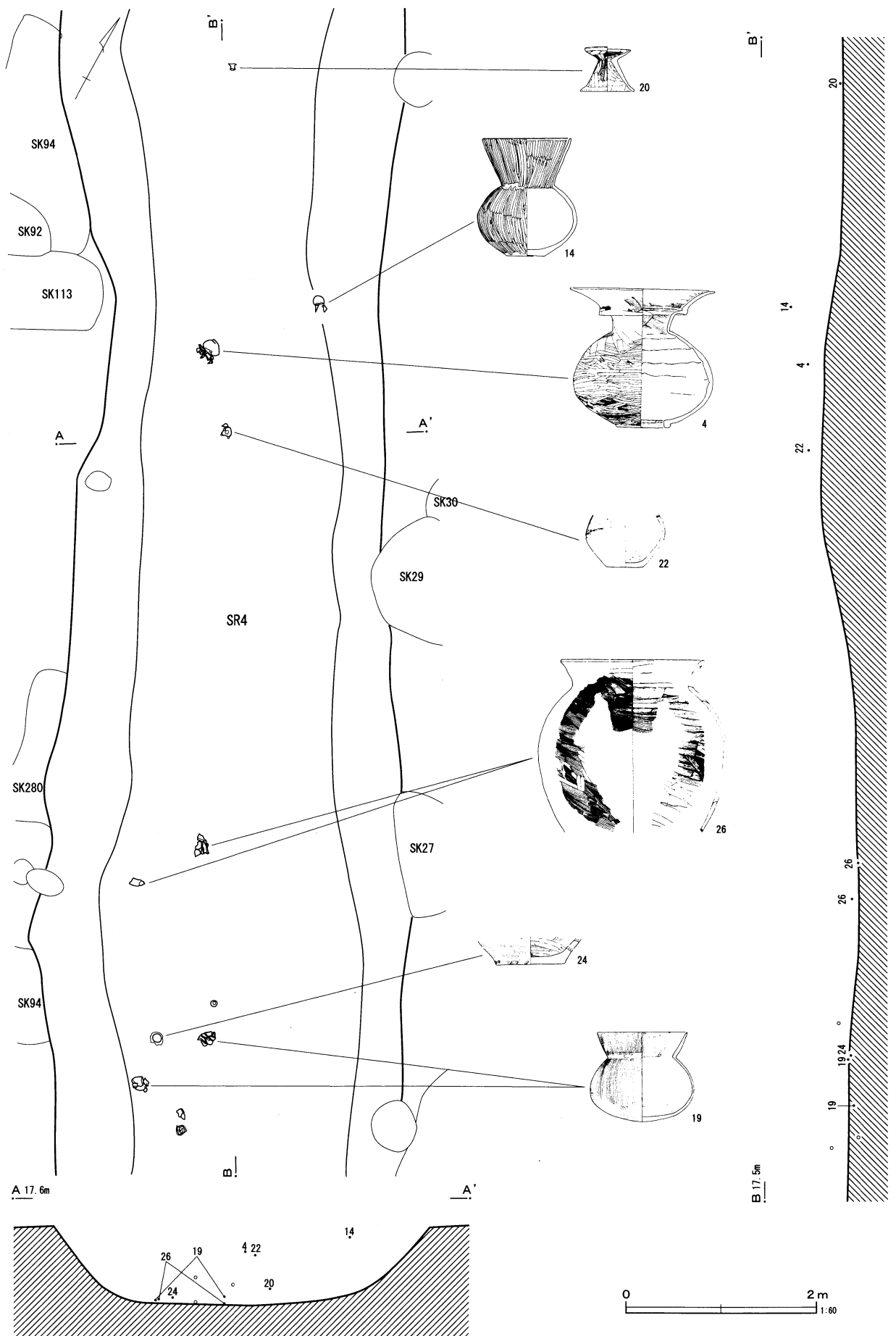
溝幅は、南溝のみ狭い傾向があり、西から東にかけて徐々に狭くなっている。東溝に関しては、台地の縁辺に構築されているために上端幅が狭く見えてしまう。

周溝の底面について、西溝は、南側から徐々に0.80mまで深くなり、D-D'付近で0.49mと浅くなって再び0.72mまで深くなる(第57図)。南西・北西隅は、0.60m前後で概ね平坦である。北溝は、東に向かって0.58~0.67mと若干低くなっている。東溝は、中央よりやや北側で0.80mと最も深くなり、また徐々に南側に向かって0.50m前後まで浅くなっている。東溝の確認面東側からの深さは0.09~0.36mである。南溝西側では、深さ0.60mで、東に向かってなだらかに傾斜し、東端で0.

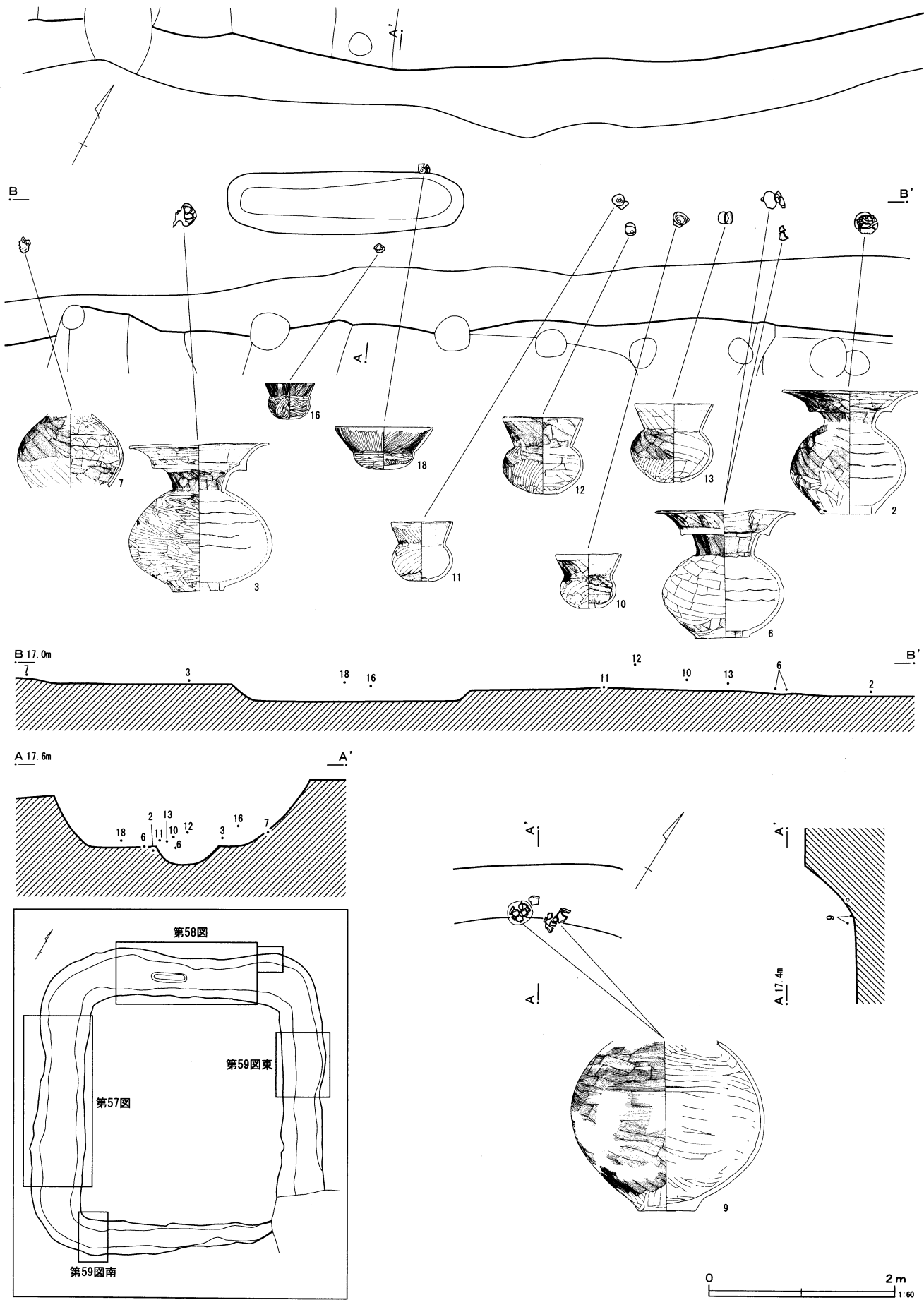
04mと非常に浅くなる。南溝東端と東溝南端の掘削深度からすれば、南東隅に開口部があった可能性もあるが、その部分が攪乱で壊されているために確定できない。

全体の規模は、主軸21.79m、幅20.78mである。方台部の規模は、主軸16.38m、幅14.18mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。溝幅は、北・西溝が概ね3.00~3.60mで、東溝は概ね2.70~3.00mである。南溝は、西側2.55mから東側0.78mへと徐々にすぼまっている。最大幅は西溝の4.00mである。深さは全体的な傾向として0.50~0.65mくらいである。

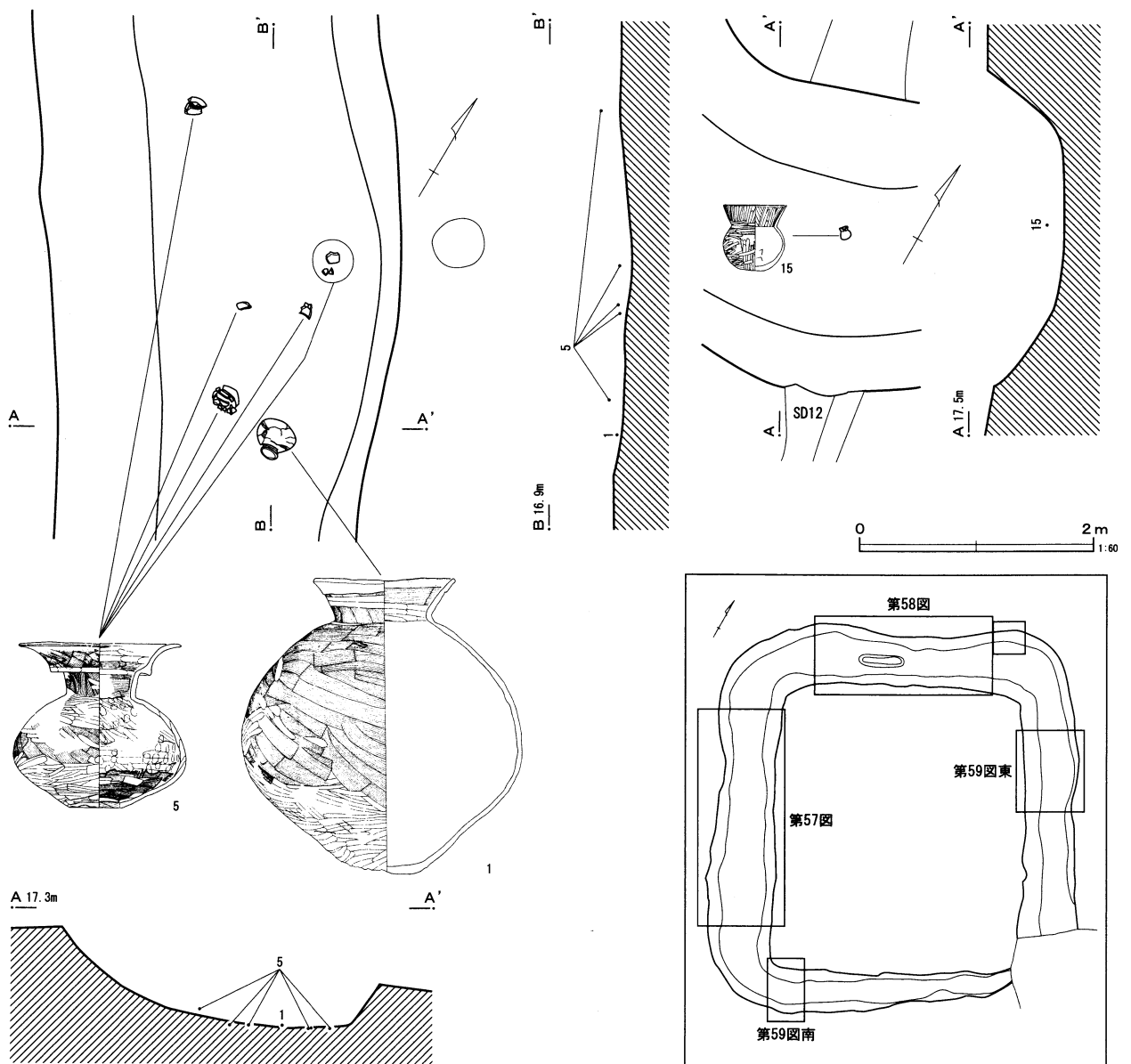
溝内土壌が、北溝中央より西側で検出されている。確認当初は近世の土壌のように思えた。しかし、他の近世の長方形土壌に比べると極めて深く、平面形が隅丸長方形になる。また、覆土も黒褐色を基調としており、古墳時代のものと考えてよい。第1層から掘り込まれているが、前述の通り、短期間に周溝が埋没した可能性があることから、齟齬は生じないと考えられる。なお、土層観察時において、5層上面より掘り込まれているという可能性も考えた。さらに、溝内土壌より土師器が1点出土しているが、周溝内出土の埴(第61図18)と接合している。第58図上および写真図版14-1



第57图 第4号方形周溝墓遺物出土狀況(西)



第58图 第4号方形周溝墓遺物出土狀況(北)



第59図 第4号方形周溝墓遺物出土状況(東・南)

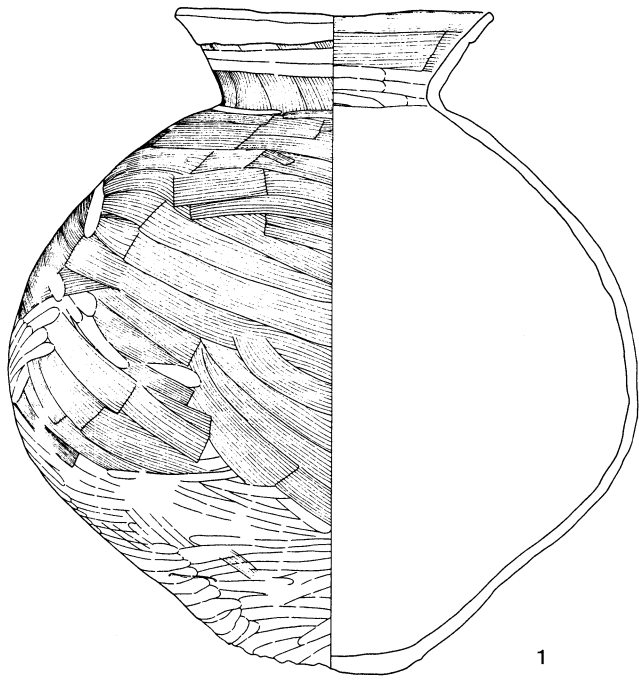
を参照すると、18は溝内土壌のすぐ脇から出土しており、溝内土壌によって18の南側(口縁部付近)が切られている。その破片が溝内土壌から出土しており、18と接合している。つまり、土壌掘削時に、18の破片ごと排土として持ち上げ、おそらく早い段階で、その破片が入った排土で土壌を埋め戻したと考えられる。その他の遺物は、溝内土壌から出土していない。

溝内土壌の規模は、底面に掘り込まれている部分の平面形で計測を行なう。長軸2.52m、短軸0.52m、周溝底面からの深さ0.13~0.23mである。

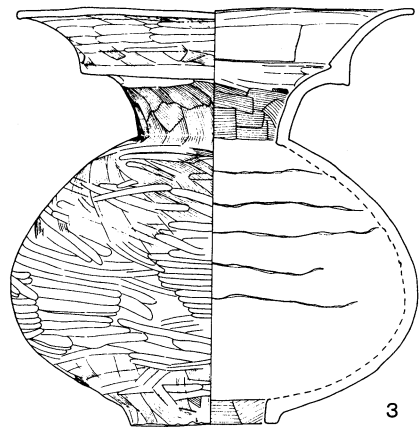
遺物は、完形または、それに準ずる遺物が16点

出土している。また、土師器片11点、壺形埴輪片124点がある。その他に、混入と思われる弥生土器片が702点出土している。

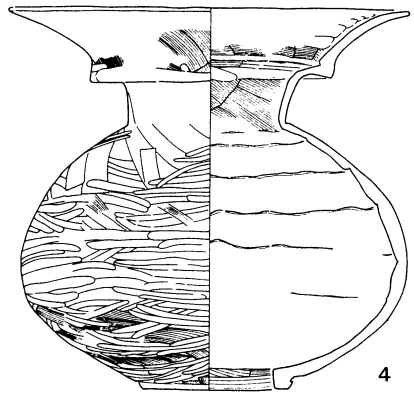
ほとんどの完形遺物が、そのままの形で出土し、特に、北溝の遺物は方台部側に寄っている。出土層位は、溝底よりわずかに間層を挟んだ位置で、初期崩落土層中か、溝底覆土の最下層中である。また、3・6は横向きに、2・11・12は口縁部を下向きにして、検出しており、先の出土層位とともに、方台部から転落した可能性が高いことを示している。



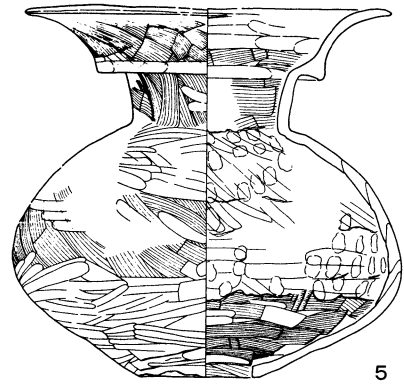
1



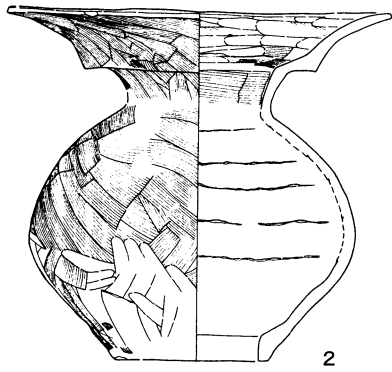
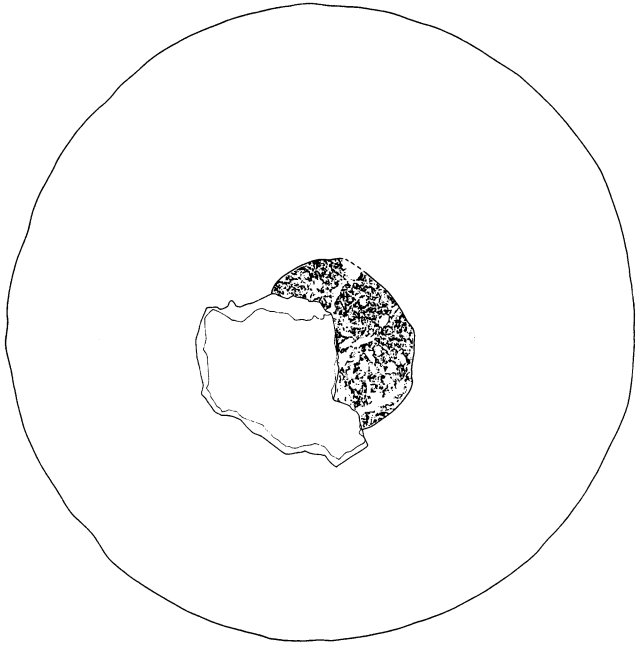
3



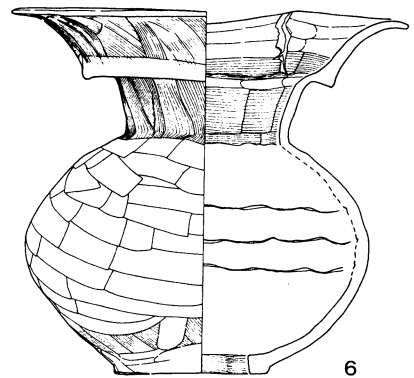
4



5

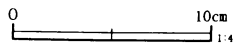


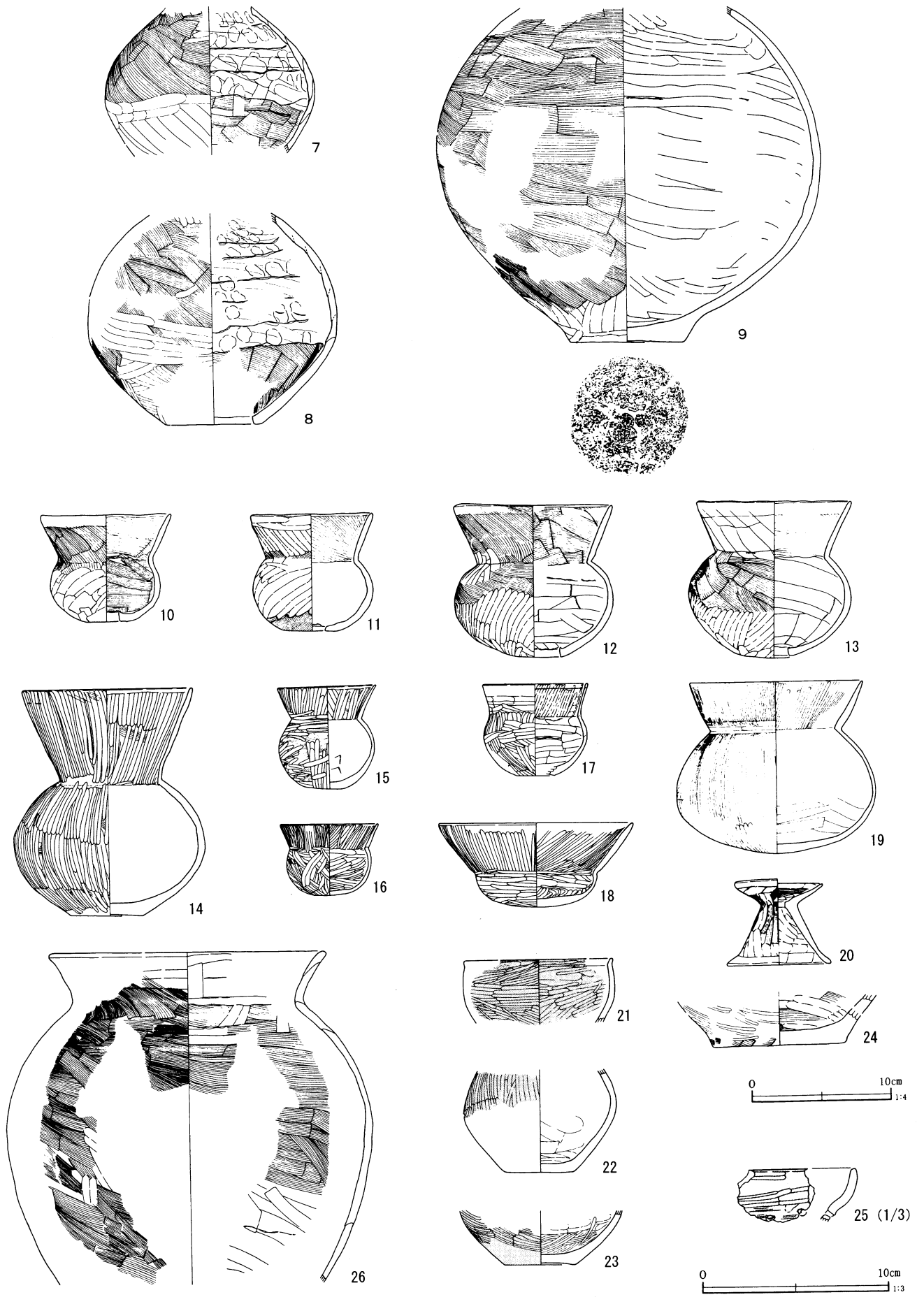
2



6

第60图 第4号方形周沟墓出土遗物(1)





第61图 第4号方形周沟墓出土遗物(2)

第17表 第4号方形周溝墓出土遺物観察表 (第60・61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器	壺	15.8	33.5	(9.0)	A C	普通	にぶい赤褐	90	焼成後底部穿孔
2	土師器	壺	19.5	17.7	(7.8)	B C	普通	暗褐	80	焼成前底部穿孔 孔径長軸(6.8)cm短軸5.4cm
3	土師器	壺	20.1	21.0	7.6	A B	普通	にぶい赤褐	90	焼成前底部穿孔 孔径6.3cm
4	土師器	壺	(20.1)	19.2	7.4	A B	普通	赤褐	90	焼成前底部穿孔 孔径6.3cm
5	土師器	壺	(18.6)	[18.6]	6.0	A B C	普通	にぶい赤褐	70	焼成前底部穿孔 孔径6.4cm
6	土師器	壺	20.4	18.2	7.8	A B C	普通	にぶい赤褐	95	焼成前底部穿孔 孔径6.0cm 焼きゆがみ
7	土師器	壺		[10.7]		A B	普通	明赤褐	30	
8	土師器	壺		[15.3]	(7.0)	A B	普通	明赤褐	25	焼成前底部穿孔 孔径6.1cm
9	土師器	壺		[24.3]	8.4	A C	普通	明赤褐	60	
10	土師器	埴	9.3	7.7	3.0	A B C	普通	明赤褐	100	焼成前底部穿孔 孔径1.8cm
11	土師器	埴	8.7	8.4	3.8	A B C	普通	にぶい赤褐	100	焼成前底部穿孔 孔径2.1cm
12	土師器	埴	11.3	11.1	2.8	A B C	普通	明赤褐	90	焼成前底部穿孔 孔径2.8cm
13	土師器	埴	11.2	11.3	2.9	A B C	普通	にぶい褐	100	焼成前底部穿孔 孔径2.9cm
14	土師器	埴	12.1	16.4	5.3	A B F I	良好	橙	95	丁寧な作り
15	土師器	埴	7.0	7.4	3.2	A B F I	良好	橙	95	胎土緻密 所々にハケ調整が残る
16	土師器	埴	7.2	5.2	2.3	A B I	良好	明赤褐	90	胎土緻密 丁寧な作り
17	土師器	埴	(7.4)	6.6	(2.7)	C	良好	褐	45	西溝出土 砂粒大粒を僅かに含む
18	土師器	埴	13.9	6.1		A B C F	普通	にぶい橙	70	北溝・北溝内土壌出土 胎土粗い
19	土師器	埴	12.4	12.4		A B	普通	橙	85	
20	土師器	器台	6.4	6.2	7.5	A B C F	良好	明赤褐	85	
21	土師器	鉢	(10.5)	[4.6]		A F	良好	暗赤褐	15	南溝出土 内外面赤彩 胎土精選
22	土師器	小型壺		[7.3]	5.0	B C E	普通	橙	70	外面赤彩 胎土粗い
23	土師器	小型壺		[4.9]	(5.0)	A B	普通	にぶい赤褐	30	西溝出土 外面赤彩 底面と高さ1.5cmまで煤付着
24	土師器	不明		[2.4]	9.7	A B C	良好	橙	90	底部
25	土師器	有孔鉢		[2.8]		C	良好	にぶい赤褐	破片	西溝出土 内外面赤彩
26	土師器	甕	(19.5)	[24.1]		A C F	普通	にぶい赤褐	15	

第4号方形周溝墓出土遺物 (第60・61図)

1は大型壺で、折り返し口縁である。底部付近には、焼成後、底部穿孔を行なっている。外面はハケ調整で、胴下半にはハケ後ナデ調整を施す。内面はハケ調整である。

2～8は、底部穿孔壺である。成形方法は、すべてほぼ同じである。高さ1.0～1.2cmの粘土紐を輪状に置いて、開放状態の底部を作る(①)。その上から輪積みによって、第60図5の最も下位の輪積み線まで粘土を積み上げていく。その時点で、内外面にハケ調整を行なう(③)。そして、多少の乾燥時間をもって(④)次の輪積み成形を開始したと考えられる。胴部上半は、指頭圧痕と輪積み痕を明瞭に残して成形している。頸部下端まで積み上がると、胴部上半内面を軽くなでている(⑤)。あとは頸部、1次口縁、2次口縁とそれぞれ間に調整を行ない完成となる。最終的な外面調整はヘラナデを施す。

開放部の整形は、現状で内面底部の開放部から粘土が盛り上がっていることから、③以降に刀子

状工具などで大きさを微調整したと考えられる。整形後、ハケ状工具による調整を加えている。

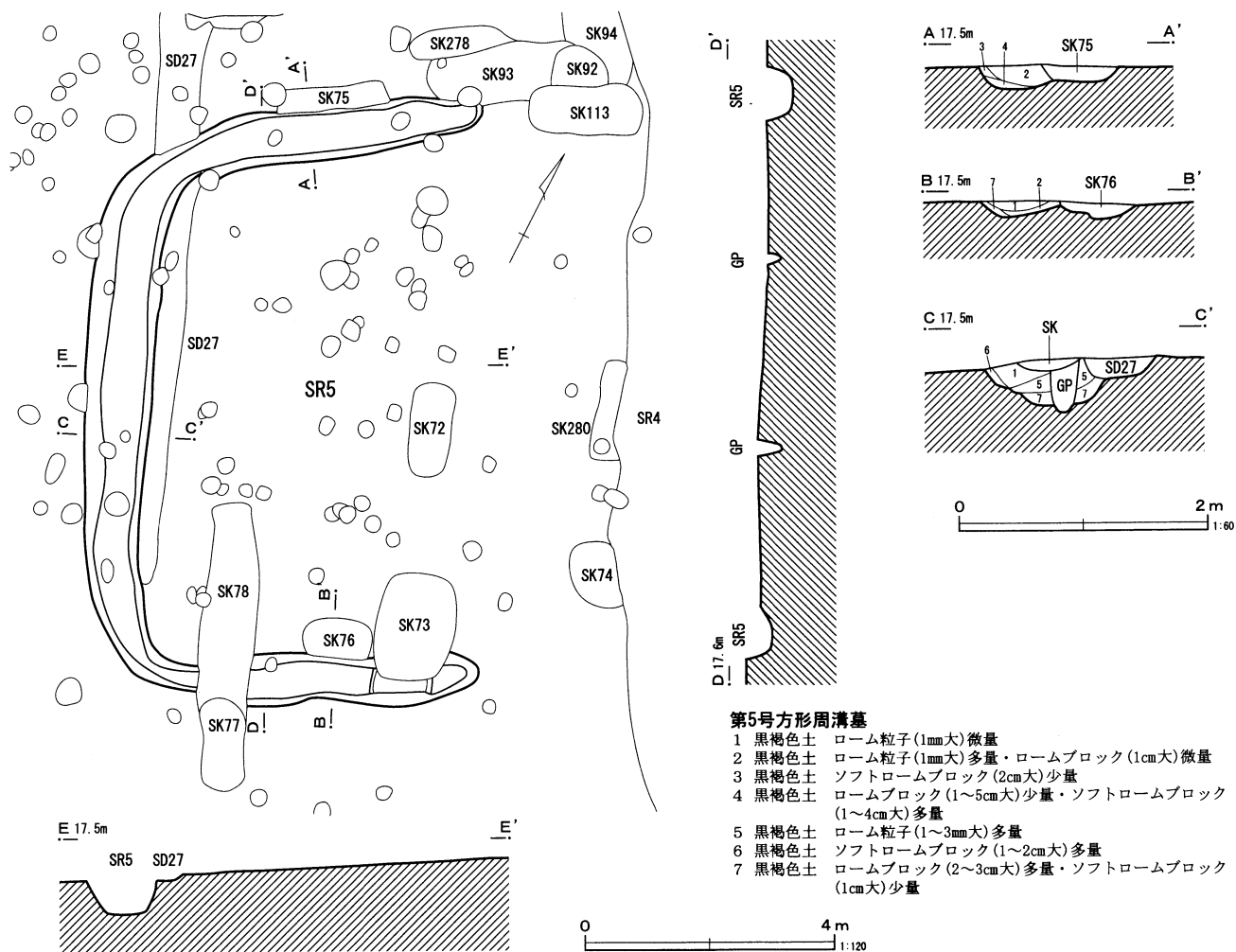
9は壺で、口縁部を欠失する。底部に植物の繊維状の圧痕が付く。内面はヘラナデ調整である。

10～19は埴である。10～13は、焼成前底部穿孔の埴である。底部穿孔壺と胎土・色調・調整が非常に類似しており、同時期に製作されたことがわかる。底部穿孔の方法は、実際に底部を製作した後、刀子状工具で穿孔している。調整を行なう前に、底部穿孔を行ない、穿孔部に軽くナデを施すが、内面には粘土がはみ出している。穿孔部は、多少歪な円形で、10は楕円形を呈する。外面調整はハケ後、個体によって施す部位が異なるが、ヘラナデを加える。

14～19は、全面ミガキ調整を施す個体で、10～13とは全く見た目が異なる。

20は器台で、10～13と同様の胎土・色調をしている。内外面ともに、ハケ後ヘラナデ調整である。

21～23・25は小型の鉢・壺で、赤彩を施している。22の下半は摩滅のため、赤彩は確認できない



第62図 第5号方形周溝墓

が、全面施していたと考えられる。25は、頸部に2カ所に穿孔を施す。

遺構の時期は、出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

第5号方形周溝墓 (第62図)

調査区中央南側のJ・K-7・8グリッドに位置する。本周溝墓が立地する地形は、方台部内中央で南北方向に高まり、西溝に向かって緩やかに低くなっていくところである。第73・76・78号土壇、第27号溝跡に壊されている。また、検出されなかった東溝は、第4号方形周溝墓と近接しているため、元々掘削されていないと考えられる。

覆土は黒褐色を基調として、自然堆積を示す。

周溝の底面は、北溝東側が0.07mと浅く、東に向かって緩やかに深くなり、北西隅で0.27mである。東溝は北側で0.34mと最も深く、そのまま0.

30m前後で中央付近まで概ね平坦である。中央南側から緩やかに浅くなっていき、南西隅で0.05mと最も浅くなる。南溝は概ね平坦であるが、0.10m前後で浅い。また東端では、0.12mと深くなる部分がある。

全体の規模は、南北9.61m、東西6.31mである。方台部の規模は、南北7.79m、東西5.26mである。溝幅は、概ね0.80m前後である。最大幅は西溝1.12m、最小幅は南溝西側0.41mである。確認面からの深さは0.15~0.38mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は土師器小片が38点出土したが、図示可能なものはなかった。

時期を確定できる遺物はないが、第4号方形周溝墓との主軸方向の一致、配置関係、覆土から、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

4. 環濠と溝跡

(1) 環濠 (第13号溝跡) (第63図)

調査区中央南側のK-5・8・9、L-5～9グリッドに位置する。第13号溝跡は台地上に位置する弥生時代の環濠である。台地南部を横断するように、北東から南西方向に走り、北方に広がる弧を描きながら延びている。第2・6号住居跡や多くの遺構と重複しており、本環濠の方がいずれの遺構よりも古い。

精査当初、覆土上層で古墳時代前期と思われる土器片が散乱していたことから、同時期の第4号方形周溝墓を意識して、台地上の集落域と墓域を画した溝と考えていた。しかし、中層から台付甕の脚部が出土したために、弥生時代の環濠という認識に至った。

覆土は黒褐色を基調として、下層に多くの地山ブロックを含んでおり、溝壁の崩落土と考えられ、概ね自然堆積を示している。

環濠 (第13号溝跡) の東側は、台地の高い場所であり、西側は緩斜地に立地している。東側は攪乱で削平されていたが、後述の低地部において第42号溝跡を検出しており、両者が同一の環濠であることは確実である。理由としては、同溝跡が地形に逆らい台地上へ上がる気配があること、西側のように曲線を描くと両者が連結可能であることなどが挙げられる。

本環濠の底面は、東端から第12号溝跡の東側付近まで、深さ0.53～0.66mで平坦となっている。その付近で溝幅が最も狭くなり、さらに深さも0.36mと最も浅くなる。そこからは、西へ向かって徐々に深くなっていく。第2号住居跡の西角付近で、最も深くなり深さ0.86mにも及ぶ。そして、土層断面D-D'付近までは緩やかに浅くなっていき、その先は深さ0.50m前後で平坦となる。第6号住居跡の東壁にぶつかる辺りで、深さ0.09mと急激に立ち上がる。開口部になると考えたが、これ以北に同類の溝跡を発見できなかった。

規模は長さ37.39mで、幅0.80～1.82mである。

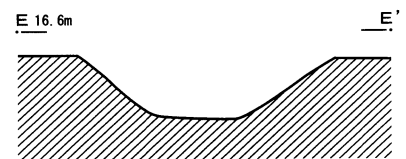
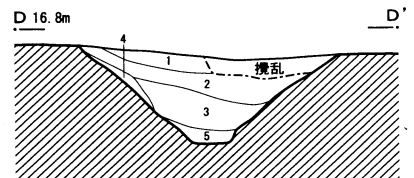
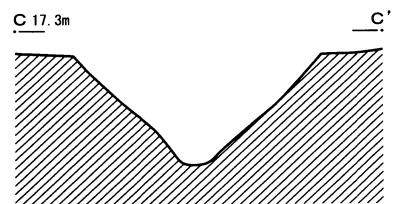
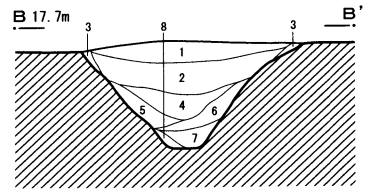
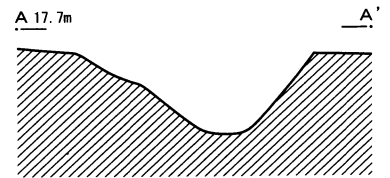
出土遺物は、総点数863点のうち、弥生土器856点、土製品2点、石器5点である。ほとんどの遺物は、中層から出土している。同様に、出土位置がわかる1・4・5・24・32も中層から検出した。ちなみに、24・32の周りには、多く土器片が散々しており、同一Noで取り上げたが、同一個体ではなかった。また、第63図の★の地点でも、多くの土器片が密集しており、同一Noで取り上げた。こちらは、136点の小片で摩滅・風化が著しく、接合できなかったが、同一個体と思われる。

第13号溝跡出土遺物 (第64・65図)

1～3は、壺の口縁部である。1は胴部上半に、1本描沈線3条下に1条の波状文を、2単位施文している。その下位にも2条平行沈線が確認できる。施文方向は、反時計周りである。内外面とも摩滅が著しい。3は、口唇部に原体LR単節縄文を反時計回りに施文している。外面調整はナナメハケ後、ナデを施す。

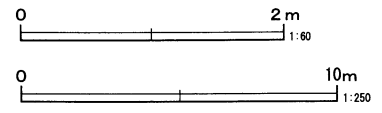
4・5は底部で、両者ともに底面に圧痕はない。4は、内外面ともにハケ調整を施す。5は、内外面ともにヘラナデ調整で、内面の底はヘラを回転させて調整している。

6・7は脚部である。6は台付甕、高坏の脚部であるとしたら、低すぎると思われ、鉢の可能性もある。外面の括れ部分を、指でしっかりと押さえて作り出して、胴部部分にはミガキ調整が確認できる。内面調整は、ハケ後ミガキである。7は台付甕の脚部と考えられ、外面と脚内面に煤が付着している。成形方法は、脚部の底に穴を開けておき、ホゾを取り付けた胴部をはめ込んでいる。粘土が多くはみ出しているため、その穴は、元々ホゾよりも小さい穴であったと思われる。また、ホゾ部分は整った形状をしていることから、かなり乾燥が進んだ段階で、脚部へ差し込んだと考えられる。外面はヘラナデ調整である。

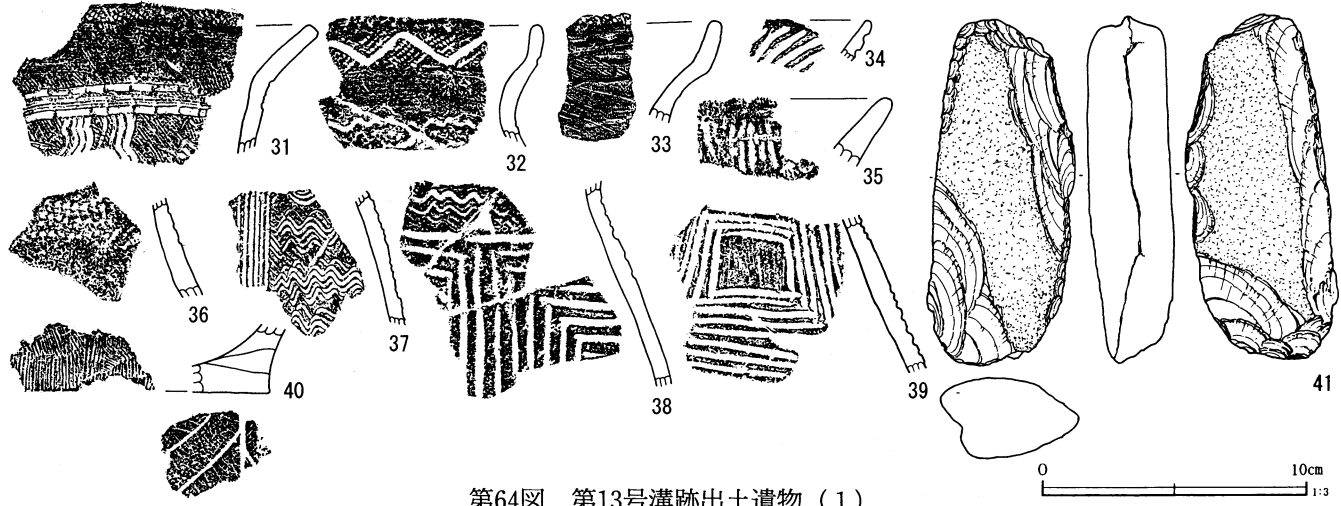
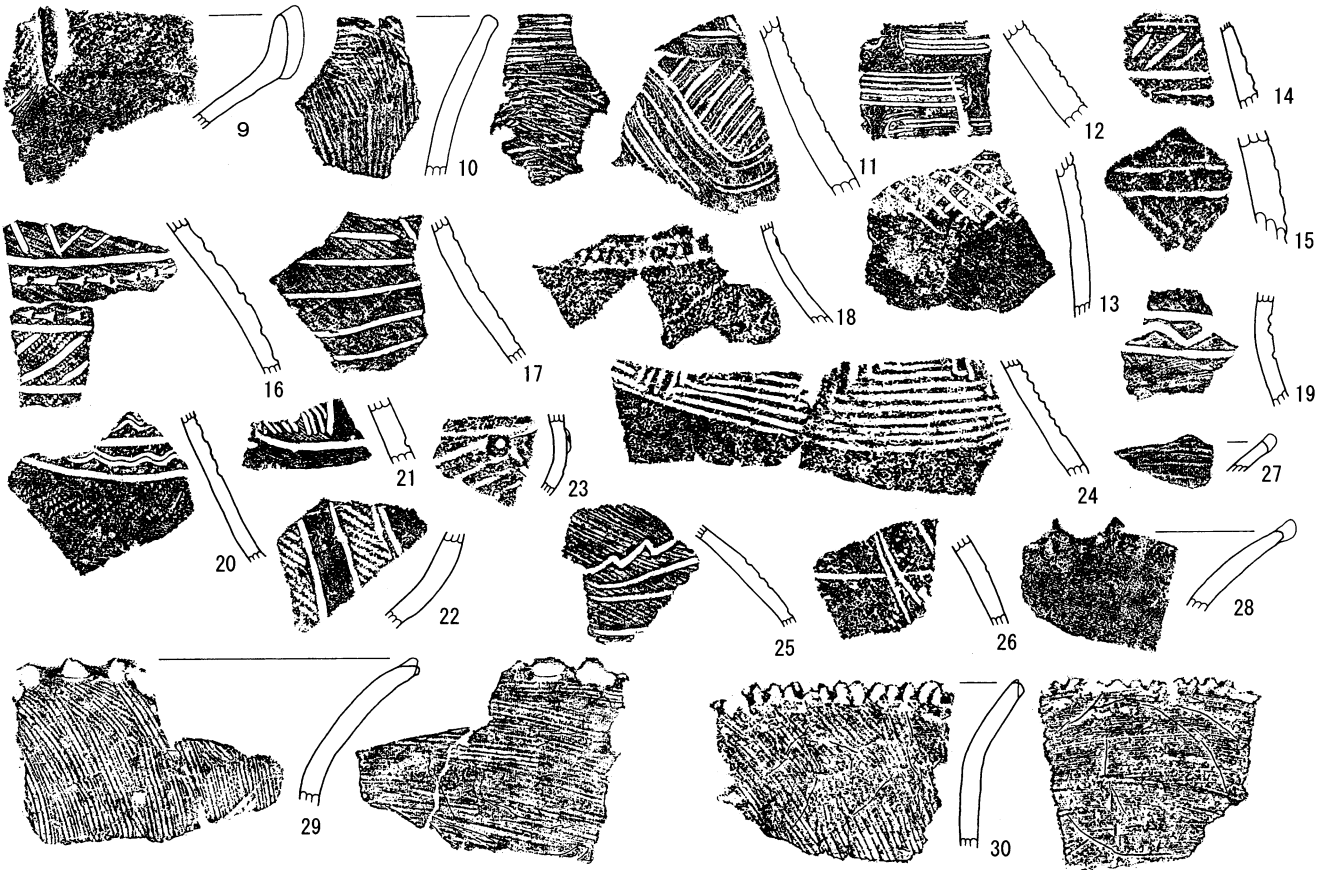
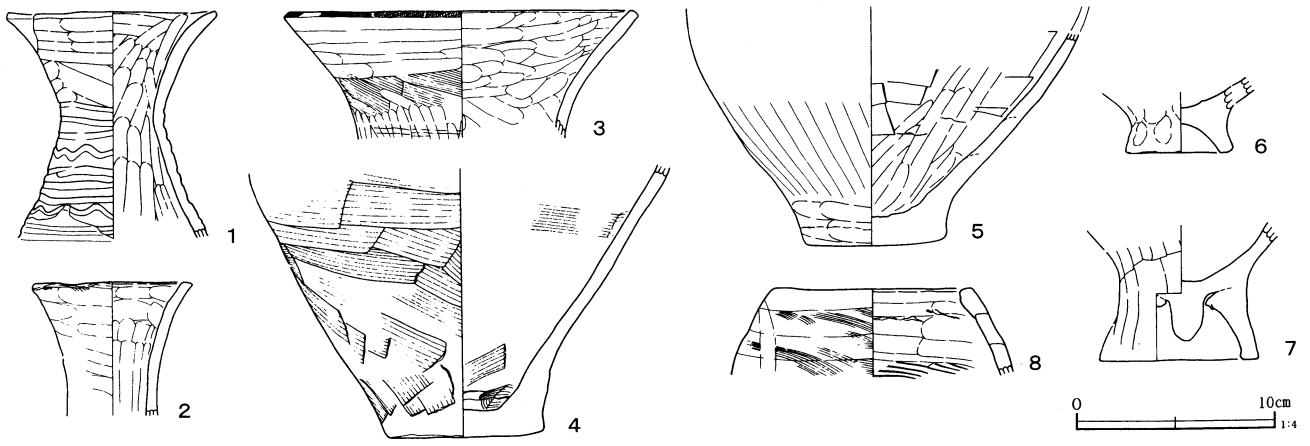


第13号溝跡 (B-B')

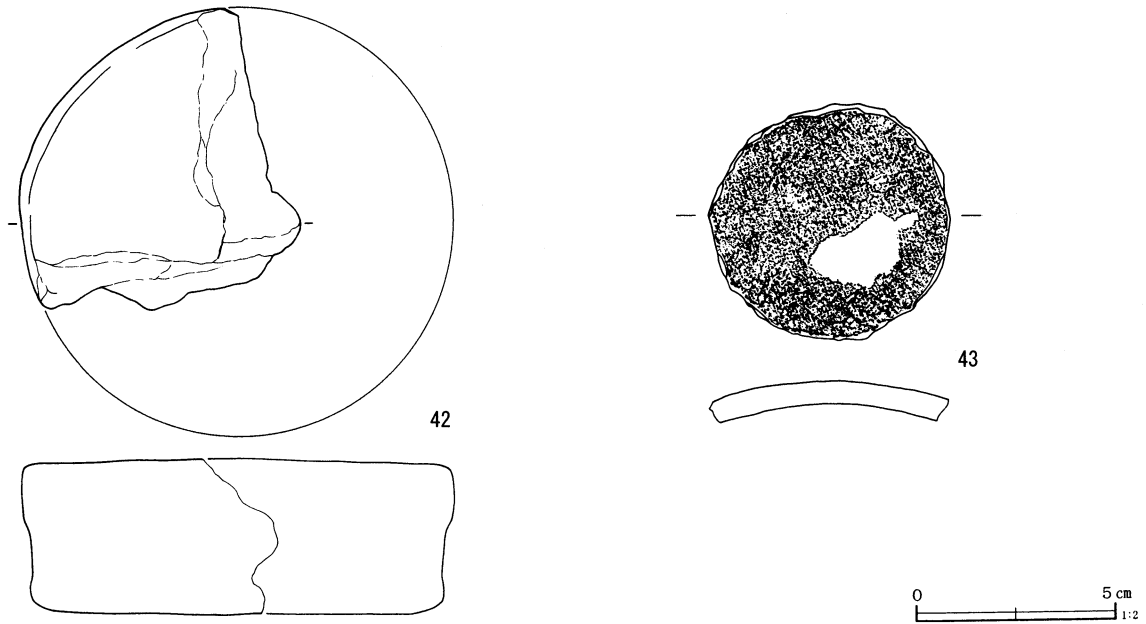
- | | |
|--------|--|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)多量・炭化物微量 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)多量・ソフトローム多量に混入 |
| 4 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1~3cm大)微量 |
| 5 黄褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)多量・ソフトローム多量に混入 |
| 6 黄褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)多量・ソフトローム多量・黒色土ブロック(2~3cm大) |
| 7 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)多量 |
| 8 黒褐色土 | ロームブロック(2~3cm大)多量 |
- (D-D')**
- | | |
|--------|--|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子多量・炭化物少量・褐色土ブロック(3~5cm大)少量 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子少量・炭化物少量・焼土粒子少量 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子少量・茶褐色ローム粒子(1mm大)少量 |
| 4 黒褐色土 | 茶褐色ローム粒子少量・茶褐色ロームブロック(1~3cm大)多量・焼土粒子少量 |
| 5 黒褐色土 | 茶褐色ローム粒子多量・茶褐色ロームブロック(1cm大)多量 |



第63図 第13号溝跡(環濠)



第64图 第13号沟迹出土遗物(1)



第65図 第13号溝跡出土遺物（2）

8は口縁部にするか、底部にするか判断しかねる土器である。今回は、口縁部として図示し無頸壺の口縁部として報告する。外面はナナメハケ調整後、ヨコナデを施す。内面は、破片下位に認められる粗いハケを施した後、強くなでられている。口唇部もナデを施しているが、若干波打っているため、底部とするには苦しいと思われる。なお、少し離れたところに、奈良・平安時代の第2号住居跡があるが、混入した甑の可能性もある。しかし、胎土は弥生土器に類似している。

また、東海地方の内傾口縁土器の可能性も考えた。しかし、現状では、内傾口縁土器は、弥生時代前期の水神平式に比定されている（永井2004）。あまりにも時期がかけ離れているため、指摘するのに留めておく。

9～26は壺で、9・10は口縁部、11～26は頸部と胴部である。

9は受口状口縁で、口縁部外面に原体LR単節縄文を施文し、棒状浮文を貼り付ける。

10は、内外面ハケ調整の単口縁である。

11は、櫛先が整っていない4本一単位の櫛歯状工具で、波状文2条を施した後、斜線文3条を充填する。その上位に櫛描横線文を加えている。

12・13は、擬似流水文を施す胴部片である。12は、5本一単位の櫛歯状工具で3段の擬似流水文を施文する。櫛描文の途切れる先端に、弧状の沈線を加えている。13は、胴部最大径付近で、無文部が認められる。文様は、擬似流水文の下位にある1本描沈線の斜格子文である。12・13ともに、外面は赤彩される。

14・15は、1本描沈線2条の間に、短斜線文を施している。おそらく短斜線文は、16のように途中でV字状になるところがあると思われる。

16は破片下位に原体LR単節縄文を施文した後、1本描沈線3条を施している。沈線間にそれぞれ、互い違いの短斜線文、棒状工具による刺突文2条、再び短斜線文を施す。内外面ともにハケ調整である。

17は、1本描沈線5条を施しており、破片右上に斜めの沈線が1条認められる。外面調整はハケで、内面はナデである。

18は、頸部下端に1本描沈線2条を施し、その間に刺突文を施文している。器面の摩滅が著しい。

19は頸部片で、1本描沈線2条の間に、同一工具で波状文を施している。外面はハケ後、ミガキ調整を加えている。

第18表 第13号溝跡出土遺物観察表 (第64・65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺	(10.5)	[11.4]		ABC	普通	橙	65	
2	弥生土器	壺	7.1	[6.7]		ACFG	普通	橙	50	
3	弥生土器	壺	(17.2)	[6.5]		CFG	普通	にぶい褐	25	K-10g
4	弥生土器	不明		[13.5]	7.8	ABF	普通	橙	70	底部
5	弥生土器	不明		[12.1]	7.0	ABF	普通	橙	70	底部
6	弥生土器	不明		[3.7]	5.4	ABEF I	普通	橙	90	脚部
7	弥生土器	台付甕		[6.8]	(8.1)	ABC	普通	にぶい黄橙	80	脚部
8	弥生土器	無頸壺	(10.2)	[4.5]		ABCD	普通	橙	25	K-10g
9	弥生土器	壺	口縁部			ABCF	普通	橙	破片	L-6g
10	弥生土器	壺	口縁部			ABCF	普通	橙	破片	L-9g
11	弥生土器	壺	胴部			ABCFG	普通	橙	破片	L-7g 櫛歯4本一単位
12	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい橙	破片	K-10g 外面赤彩 櫛歯5本一単位
13	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい黄橙	破片	L-8g 外面赤彩
14	弥生土器	壺	頸部			ABCE	普通	にぶい黄橙	破片	L-6g
15	弥生土器	壺	頸部			ABCE	普通	橙	破片	L-7g
16	弥生土器	壺	胴部			ABCD I	普通	にぶい橙	破片	K-10g
17	弥生土器	壺	胴部			ABCD I	普通	にぶい橙	破片	K-10g
18	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	橙	破片	L-6g
19	弥生土器	壺	頸部			ABC	普通	にぶい橙	破片	L-9g
20	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい褐	破片	L-7g
21	弥生土器	壺	胴部			AB	普通	にぶい橙	破片	L-9g 櫛歯4本一単位
22	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	橙	破片	L-9g
23	弥生土器	壺	胴部			ABCF	普通	橙	破片	L-6g
24	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	橙	破片	L-7g 39と同一個体か
25	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい黄橙	破片	L-9g
26	弥生土器	壺	胴部			ABCE	普通	灰黄褐	破片	L-9g
27	弥生土器	高坏	口縁部			ABC	普通	橙	破片	K-10g 内外面赤彩
28	弥生土器	高坏	口縁部			ABC	普通	橙	破片	内外面赤彩
29	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	にぶい黄橙	破片	K-10g
30	弥生土器	甕	口縁部			ABC I	普通	にぶい黄褐	破片	
31	弥生土器	甕	口縁部			ABCE F	普通	灰黄褐	破片	K-10g 櫛歯4本一単位
32	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	にぶい黄褐	破片	L-7g 櫛歯5本一単位 38と同一個体
33	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	にぶい褐	破片	K-10g
34	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	にぶい橙	破片	L-8g
35	弥生土器	甕	口縁部			ABCE F	普通	橙	破片	L-9g
36	弥生土器	甕	頸部			ABCF	普通	橙	破片	L-6g 櫛歯5本一単位
37	弥生土器	甕	胴部			ABCE	普通	褐灰	破片	L-8g 櫛歯6本一単位
38	弥生土器	甕	頸部~胴部			ABC	普通	にぶい褐	破片	L-7g 櫛歯5本一単位
39	弥生土器	甕	胴部			ABC	普通	橙	破片	L-9g
40	弥生土器	不明	底部			ABCF	普通	橙	破片	K-10g 木葉痕
41	石器	打製石斧	長さ(13.1)cm 幅[5.7]cm 厚さ3.1cm 重さ338.4g							L-7g
42	土製品	台盤状土製品	径[10.4]cm 厚3.9cm 重さ214.2g			ABC	普通	明赤褐	20	L-6g 被熱による全面赤化
43	土製品	土製円盤	幅6.1 厚0.6 重30.6			ABC	普通	橙	100	L-8g

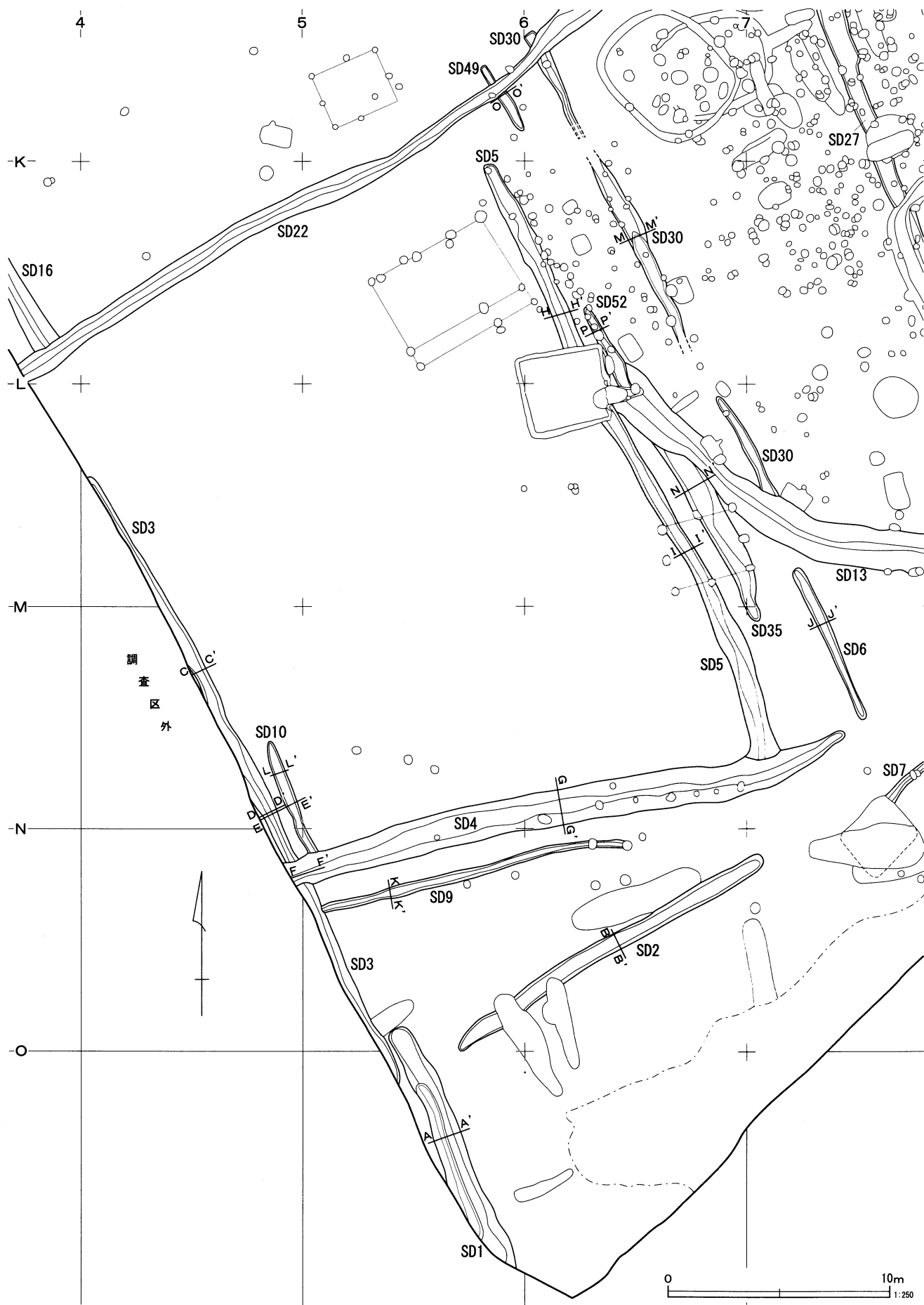
20は、頸部下端に原体LR単節縄文を施文する。1本描沈線2条が認められて、その間に半截竹管状工具による波状文を施している。外面調整はミガキである。

21は、1本描沈線の上に4本一単位の櫛描文を縦位に施している。それを縦位の沈線によって区画している。外面調整はハケ後ミガキで、内面はミガキである。

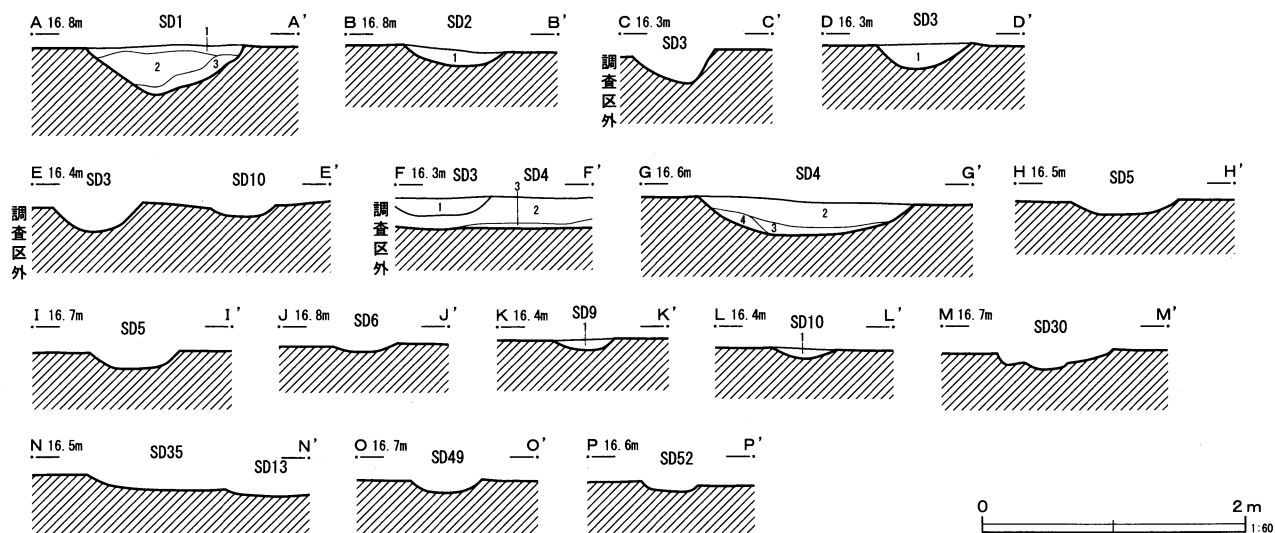
22は、原体LR単節縄文を施文後、周りをミガキ調整で磨り消す。縄文帯を1本描沈線2条で区画している。

23は、1条の平行沈線文下に、鋸歯沈線文を施す。鋸歯文の頂点には円形浮文を貼り付けている。

24は、1本描沈線によって、重四角文を施しており、3単位確認できる。器面の摩滅が著しく、判断が難しい。



第66図 溝跡 (1)



第1号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(1cm大)微量
- 2 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(5~10cm大)少量
- 3 褐色土 ローム粒子(1~2mm大の粗粒子)

第2号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子多量・茶褐色ロームブロック(1~2cm大)少量

第3号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・茶褐色ロームブロック(1~2cm大)少量

第3・4号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・茶褐色ロームブロック(1~2cm大)少量 [SD3]
- 2 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・茶褐色ロームブロック(1~3cm大)少量 [SD4]
- 3 褐色土 ローム粒子(1mm大)微量・茶褐色ロームブロック(1cm大)微量 [SD4]
- 4 褐色土 ローム粒子(1mm大の粗粒子)多量・茶褐色ロームブロック(1~3cm大)多量 [SD4]

第9号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子(2~5mm大)少量・焼土粒子(1mm大)微量・茶褐色ローム粒子(2~5mm大)多量

第10号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・焼土粒子(1mm大)

第67図 溝跡(2)

25は1本描沈線1条による山形文下に、わずかに弧状を描く1本描沈線3条が認められる。外面調整はハケで、内面はハケ後ミガキを加えている。

26は、1本描沈線1条を施した後、斜めに3条沈線を加える。内外面ともにミガキ調整である。

27・28は、高環の口縁部である。27は1つの突起をもつ。内外面ともにミガキ調整で、赤彩を施す。18は2つで1単位の突起を有し、内外面は、27と同様、ミガキ調整で全面赤彩である。

29~38は甕で、29~35は口縁部で、36~38は頸部から胴部にかけての破片である。

29は、口唇部に指頭押捺を加えている。

30は、ヘラ状工具によって、口唇部上斜めに刻み目を施している。

31はくの字状を呈し、口唇部には原体LR単節縄文を施文する。頸部から胴部にかけて、4本一単位の櫛歯状工具によって、縦位に櫛描文を施す。その後、頸部に同一工具による簾状文を反時計回りに施している。外面はハケ調整、内面はハケ調整後ミガキを加えている。

32と38は同一個体と思われる。32は、受口状を

呈し、口縁部外面には原体LR単節縄文を施文後、1本描沈線1条による山形文を加えている。頸部には櫛描文による波状文が、少しうかがえる。38では頸部に、5本一単位の櫛歯状工具による波状文が認められ、32の頸部の文様も同様であろう。胴部には1本描沈線によるコの字重ね文を施している。内外面ともに摩滅が著しいが、内面はヘラナデ調整である。

33も受口状の口縁部で、口唇部には原体LR単節縄文を施文する。他に文様は認められず、内外面ともに、ハケ調整後ミガキを施している。

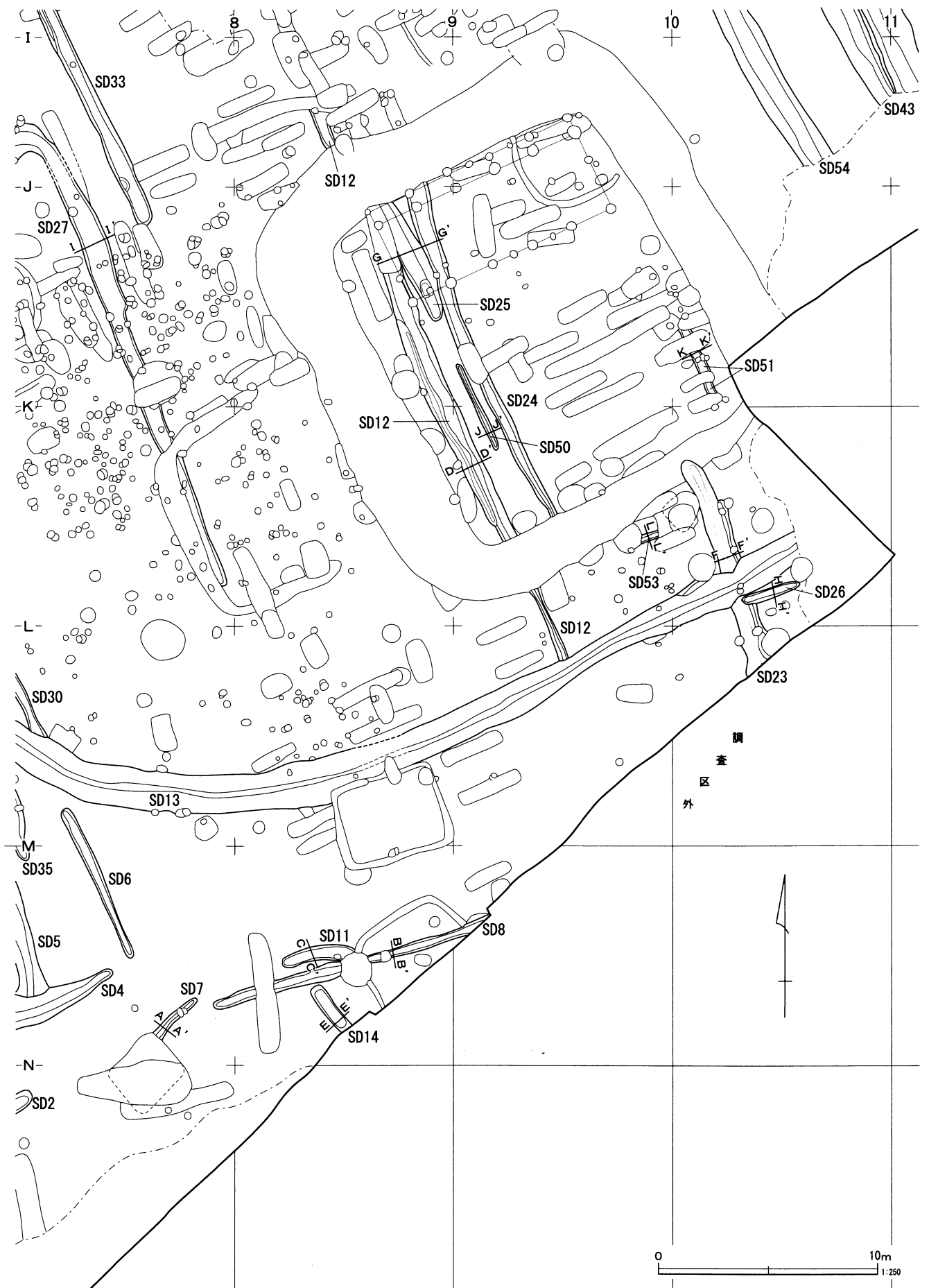
34・35は口縁部の小破片で、34は外面に弧状を描く5条の1本描沈線を施している。35は粗いタテハケ調整が見える。

36は頸部片で、5本一単位の櫛歯状工具による櫛刺突文を施している。

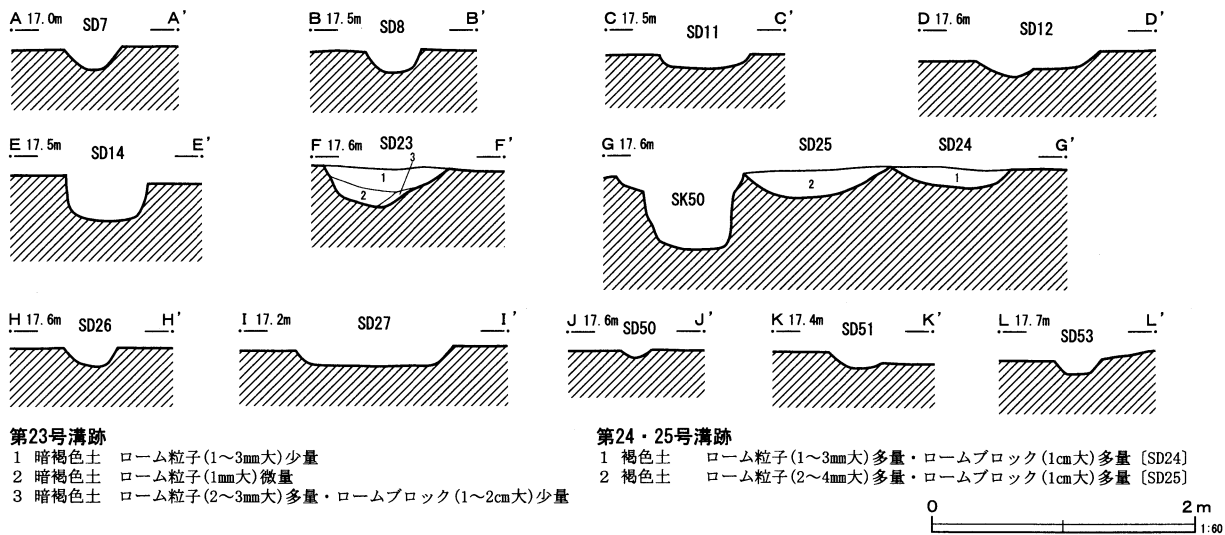
37は胴部片で、6本一単位の櫛歯状工具によって、5条の波状文が確認できる。その波状文を施文後、縦位に同一工具で櫛描文を施している。

39は、1本描沈線による重四角文を施文する。

40は底部片で、底面に木葉痕が付く。



第68図 溝跡 (3)



第69図 溝跡(4)

41は緑泥片岩の打製石斧で、両面に大きく礫面を残している。

42・43は土製品である。42は台盤状土製品で、復元径は10.4cmとなる。上下面ともに、きれいな平らな面をもち、側面はわずかに窪んでいる。器面とともに土製品内部まで、被熱によって赤化している。43は土製円盤で、丁寧に加工されているが、他に加工の痕跡はない。

(2) 溝跡

第1号溝跡(第66・67図)

調査区南側のN・O-5グリッドに位置する。調査区南西端に沿うように、南東から北西方向へ直線的に延びて、第2号方形周溝墓の手前で終わる。南東側は幅が広がって調査区外へ延びている。

規模は長さ12.28m、幅0.93~1.77m、深さ0.10~0.25mである。

出土遺物は中近世の陶磁器片がある。また、混入と思われる弥生土器小片、奈良・平安時代の須恵器小片が出土した。

第2号溝跡(第66・67図)

調査区南側N-5~7、O-5グリッドに位置する。第1・2方形周溝墓を壊して、南西から北東方向に直線的に延びる。地山がロームからいわゆる真土に変化する肩をなぞるように掘削されて

いる。地山の傾斜で分断してしまっただが、第8号溝跡と本来、同一の溝跡と考えられる。

覆土は近世期のものより黒味が強く、中世期の掘削と判断した。

規模は長さ16.24m、幅0.65~0.93m、深さ0.12~0.26mである。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第3号溝跡(第66・67図)

調査区南側L~N-4、N・O-5グリッドに位置する。調査区南西端に沿って、南東から北西方向に延びている。溝幅の半分ほど調査区外に出ている。第4・9号溝跡と重複し、第4号溝跡の方が古く、第9号溝跡とは新旧関係は不明である。

規模は長さ31.20m、幅0.53~0.89m、深さ0.14~0.16mである。

遺物は、近世以降の土器小片が出土した。

第4号溝跡(第66・67・75図)

調査区南側M-5~7、N-4~6グリッドに位置する。第9号溝跡と平行して東西方向に延びて、西側は調査区外へと続く。本溝跡東側の終わる手前で、第5号溝跡が直角に延びていく。新旧関係は不明だが、本溝跡と関連する可能性も考えられる。また第3・10号溝跡と重複し、第3号溝跡より古く、第10号溝跡より新しい。

規模は長さ26.20m、幅0.45~1.73mである。深

さは0.07～0.53mで、東に向かい浅くなる。

出土遺物は中近世の土器小片がある。また、混入と思われる弥生土器小片、古墳時代後期の円筒埴輪、奈良・平安時代の須恵器片（第75図1）が出土した。

第4号溝跡出土遺物（第75図1）

1は壺の底部で、高台の剝離痕が残っている。混入である。

第5号溝跡（第66・67図）

調査区南側K-5・6、L-6、M-6・7グリッドに位置する。第4号溝跡の北辺から始まり、南東から北西方向に延びている。第2号掘立柱建物跡・第6号住居跡・第13号溝跡を壊している。

規模は長さ26.28m、幅0.62～1.20m、深さ0.15～0.28mである。

出土遺物は中近世の土器小片がある。また混入と思われる縄文土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

第6号溝跡（第66・67図）

調査区南側L・M-7グリッドに位置する。南東から北西方向に延びるが、第13号溝跡を挟んで第30号溝跡と一直線上にあり、連続する溝跡である可能性がある。

規模は長さ7.47m、幅0.36～0.54m、深さ0.04～0.07mである。

遺物は出土しなかった。

第7号溝跡（第68・69図）

調査区南側のM-7グリッドに位置する。北東から南西方向に延びる。第5号土壇と重複し、本溝跡の方が古い。

規模は長さ2.49m、幅0.35～0.42m、深さ0.12～0.15mである。

遺物は出土しなかった。

第8号溝跡（第68・69図）

調査区南側のM-7～9グリッドに位置する。東西方向に走り、北東側は調査区外へ延びている。第1号住居跡を斜めに横断して壊している。また

第3号方形周溝墓西溝を壊している。第20・39号土壇と重複し、本溝跡の方が古い。前述の通り、第2号溝跡とは同一の溝跡である。

規模は長さ13.29m、幅0.39～0.78mである。深さは0.13～0.34mで、西側が浅くなる。

遺物は、混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第9号溝跡（第66・67図）

調査区南側のN-5・6グリッドに位置する。第4号溝跡と平行して東西方向に延びる。西端が第3号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ14.19m、幅0.23～0.33m、深さ0.04～0.07mである。

遺物は出土しなかった。

第10号溝跡（第66・67図）

調査区南側のM-4、N-4・5グリッドに位置する。第3号溝跡と平行して南東から北西方向へ延びる。南東端が第4号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ5.64m、幅0.03～0.49m、深さ0.02～0.08mである。

遺物は出土しなかった。

第11号溝跡（第68・69図）

調査区南側のM-8グリッドに位置する。東方向に延びて南に弧を描いたところで、第20号土壇と重複する。両者の新旧関係は不明である。

規模は長さ3.33m、幅0.56～0.72m、深さ0.08～0.10mである。

遺物は出土しなかった。

第12号溝跡（第68・69図）

調査区中央南西側のI～K-8、K・L-9グリッドに位置する。第13号溝跡の北辺から北西方向に延びている。途中で西側に段が付いて深くなる部分が約10m続く。第4号方形周溝墓の上面を削っている。第1号掘立柱建物跡や多くの土壇と重複しているが、第50号土壇の方が新しく、他の

遺構との新旧関係は不明である。

規模は長さ27.91m、幅0.03～1.11m、深さ0.03～0.19mである。

出土遺物は中近世の焙烙片・土器小片がある。また、混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第14号溝跡 (第68・69図)

調査区南側のM-8グリッドに位置する。南東方向へ調査区外に延びている。

規模は長さ2.46m、幅0.62m、深さ0.34～0.38mである。断面が箱形で深いことから、近世土壌の可能性も考えられる。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第15号溝跡 (第70図)

調査区西側のH・I-1、I・J-2グリッドに位置する。調査区南西端に沿って南東から北西方向に走り、溝幅の約三分の一と両端が調査区外に延びている。第16・17号溝跡と平行している。

規模は長さ21.19m、幅0.51～0.99m、深さ0.30～0.34mである。

遺物は、近世の陶器(第75図2)が出土した。

第15号溝跡出土遺物 (第75図2)

2は、瀬戸美濃の折縁皿である。ロクロで成形しており、削り出しで高台を作出している。高台以外の内外面に灰釉を施す。内外面ともに、貫入が多く入る。時期は17世紀中頃である。

第16号溝跡 (第70図)

調査区西側のH-1、H～J-2、J・K-3グリッドに位置する。第22号溝跡の北辺から始まり、途中で第17号溝跡を避けるように曲がって、近接して北西方向に延びている。北西端は調査区外へ続く。第22号溝跡と直行し、第17号溝跡と平行するため、本溝跡と関連する可能性がある。

規模は長さ39.65m、幅0.41～1.13mである。深さは0.03～0.52mで、屈曲部が最も浅くなる。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる弥生土器が出土した。

第17号溝跡 (第70図)

調査区西側のH-1、G～J-2、F・G-3グリッドに位置する。まず南東から北西方向へ延びて、途中で第18号溝跡と合流する。調査区北西端で直角に曲がり北東方向に進む。北東端は第7号住居跡内にあると思われる。第18号溝跡との新旧関係は不明である。近くの掘立柱建物跡群とは少し軸が異なり、関連する可能性は低い。

規模は南西辺24.89m、北東辺20.48m、幅0.35～0.93mである。深さ0.05～0.47mで、北東辺の東側が浅くなっている。

遺物は出土しなかった。

第18号溝跡 (第70・71図)

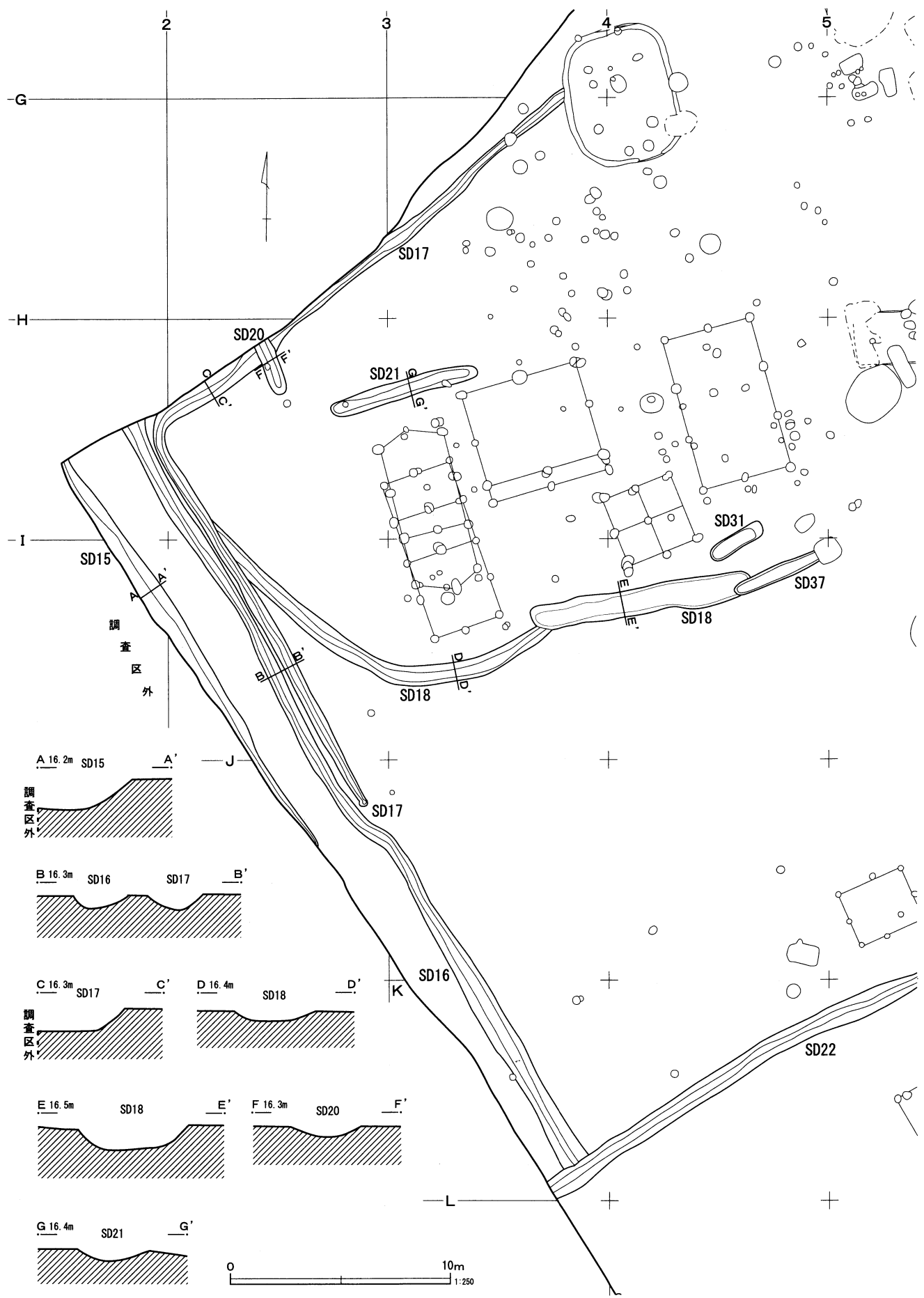
調査区西側～中央のH-2・5～7、I-2～4グリッドに位置する。調査区中央から北西方向に途切れながら走って、第13号住居跡の南側で10mほど大きく開ける。第8号掘立柱建物跡の南側から再び始まり、掘立柱建物跡群が終わったところで本溝跡は北東方向に曲がり、第17号溝跡と重複して第16・17号溝跡内に延びていたと思われる。掘立柱建物跡群と近接して、掘立柱建物跡の軸とほぼ直行して延びていることから考えて、同時期の所産と考えられる。大きく途切れた部分は元々開口部として設けられていた可能性が高い。東側で第37号溝跡・第191号土壌と重複し、第191号土壌の方が新しい。第37号溝跡とは新旧関係は不明であるが、本溝跡と併走することから、関連する可能性が高い。

規模は東から長さ16.13、9.20、18.90m、幅0.57～1.41m、深さ0.08～0.18mである。

出土遺物は中世の土器片(第75図3・4)がある。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第18号溝跡出土遺物 (第75図3・4)

3は、瀬戸美濃の瓶である。輪積で成形されて、外面には鉄釉、内面には灰釉を施している。4は焙烙で、内耳は底面に付かず、内壁に取り付いている。外面には煤が付着している。時期は16世紀



第70図 溝跡 (5)

代であろうか。

第19号溝跡 欠番

第20号溝跡 (第70図)

調査区西側のH-2グリッドに位置する。南東から北西方向に延びて調査区外へ続く。第18号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ2.52m、幅0.75m、深さ0.02~0.09mである。

遺物は出土しなかった。

第21号溝跡 (第70図)

調査区西側のH-2・3グリッドに位置する。掘立柱建物跡群の北側で、南西から北東方向に第18号溝跡と平行して延びている。

規模は長さ6.75m、幅0.69~0.83m、深さ0.07~0.09mである。

遺物は、混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第22・27号溝跡 (第68・69・71・75図)

調査区西側~中央のK-3~5、J-5・6、I-6、I~K-7グリッドに位置する。第22号溝跡は南西から北東方向に延びて、J-7グリッド杭の南側で直角に曲がる。そこから第27号溝跡に遺構名が変わるが同一の溝跡である。第27号溝跡は北西から南東方向に延びている。第28号溝跡、第100号土壇、第5号方形周溝墓と重複し、本溝跡の方が新しい。また第16・30・49号溝跡、第99・118号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は東西辺40.38m、南北辺22.95m、幅0.48~1.77m、深さ0.11~0.34mである。

出土遺物は、近世の陶器(第75図6)である。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片(第75図5)が出土した。

第22号溝跡出土遺物 (第75図5)

5は、混入した須恵器杯の底部である。底面は回転糸切で無調整である。6は備前の(船)徳利と思われる。時期は17世紀代であろうか。

第23号溝跡 (第68・69図)

調査区中央東側のK・L-10グリッドに位置する。北西から南東方向に延びている。南東側は調査区外へ続いている。第4号方形周溝墓、第13・26号溝跡と重複し、第4号方形周溝墓、第13号溝跡の方が古く、第26号溝跡との新旧関係は不明である。

覆土は黒褐色土を基調として、中世期まで遡る可能性がある。

規模は長さ10.36m、幅0.81~1.37m、深さ0.21~0.29mである。

遺物は、混入と思われる弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

第24号溝跡 (第68・69図)

調査区中央東側のJ-8・9、K-9グリッドに位置する。第12号溝跡と平行して南東から北西方向へ延びる。北側で第25号溝跡と一部接している。第4号方形周溝墓と重複し、同溝跡の方が新しい。また第1号掘立柱建物跡、第55・59号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ16.51m、幅0.29~1.02m、深さ0.05~0.14mである。

遺物は出土しなかった。

第25号溝跡 (第68・69図)

調査区中央東側のJ-8グリッドに位置する。南端で第24号溝跡と接して北西方向に延びている。第4号方形周溝墓と重複し、同溝跡の方が新しい。また第1号掘立柱建物跡、第50号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。

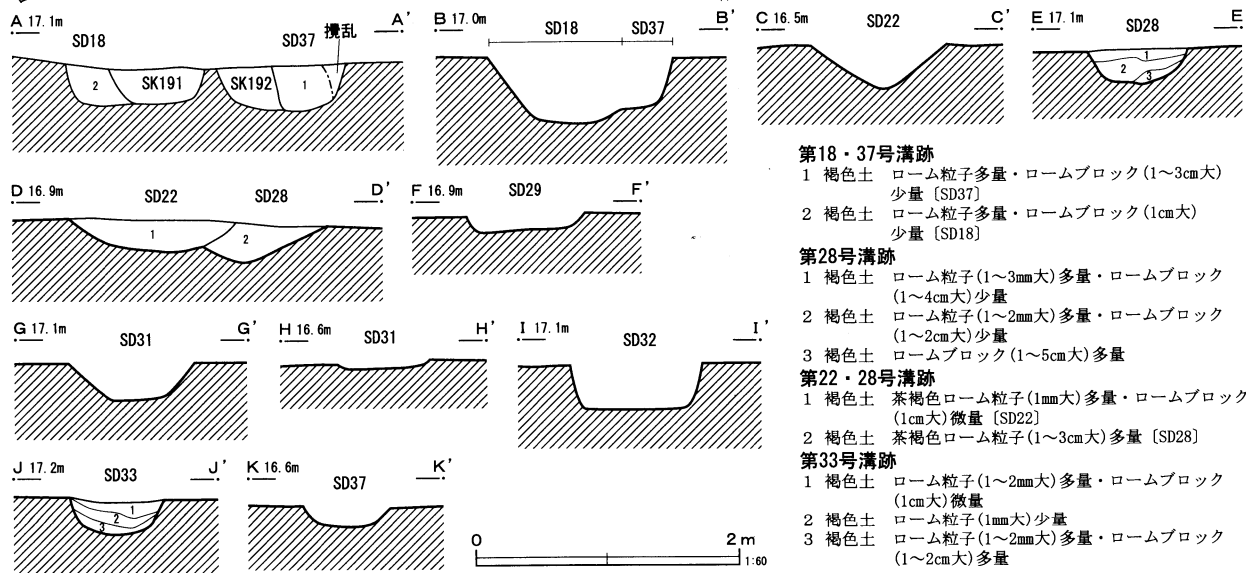
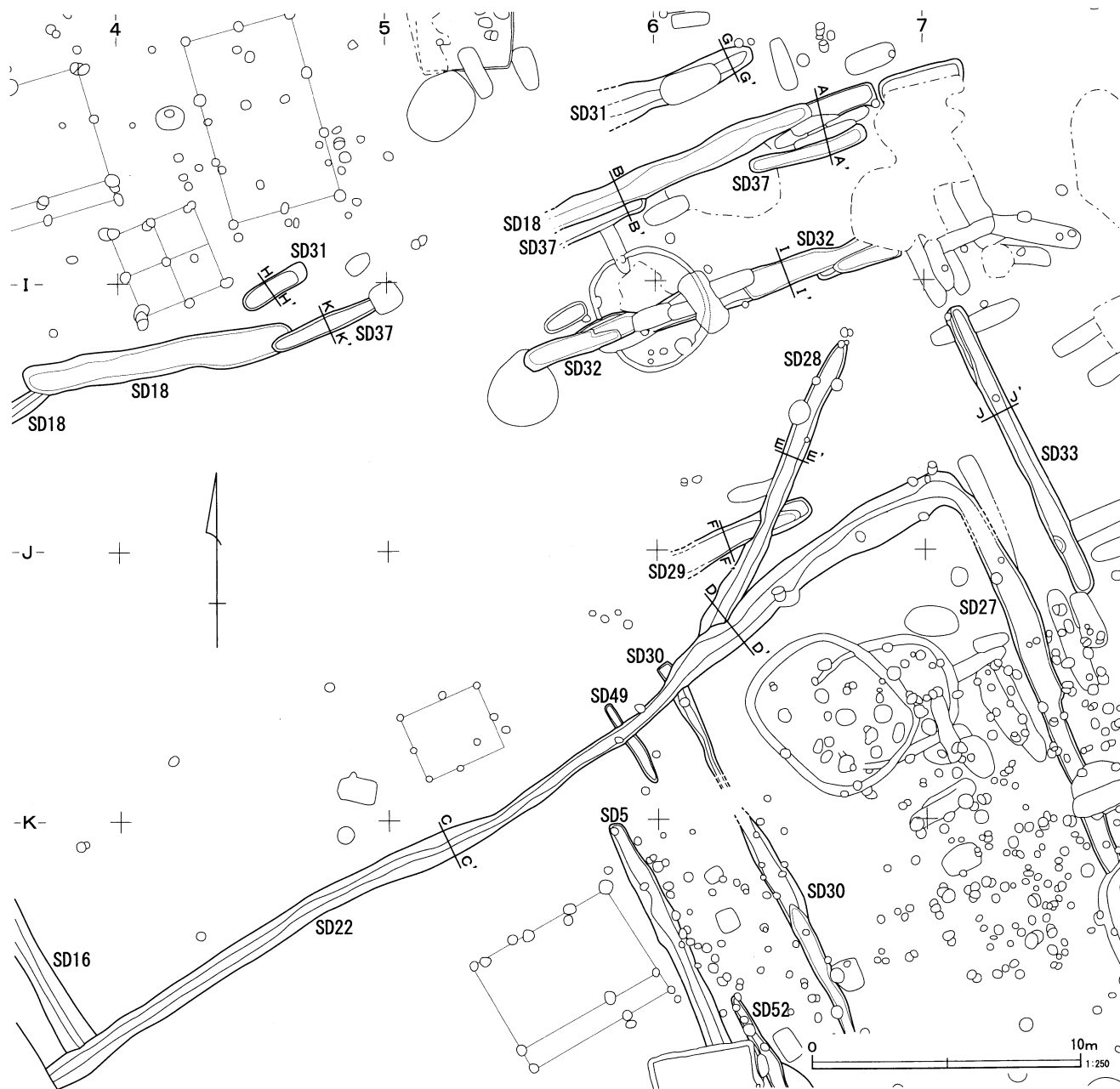
規模は長さ5.98m、幅0.62~1.14m、深さ0.04~0.19mである。

遺物は出土しなかった。

第26号溝跡 (第68・69図)

調査区南東端のK-10グリッドに位置し、東西方向に延びている。第23号溝跡と重複し、本溝跡の方が新しい。

規模は長さ2.80m、幅0.35~0.42m、深さ0.



第18・37号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(1~3cm大)少量 [SD37]
- 2 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(1cm大)少量 [SD18]

第28号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ロームブロック(1~4cm大)少量
- 2 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量
- 3 褐色土 ロームブロック(1~5cm大)多量

第22・28号溝跡

- 1 褐色土 茶褐色ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量 [SD22]
- 2 褐色土 茶褐色ローム粒子(1~3cm大)多量 [SD28]

第33号溝跡

- 1 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量
- 2 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量
- 3 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)多量

第71図 溝跡(6)

03～0.16mである。

遺物は混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第28号溝跡 (第71図)

調査区中央のI・J-6グリッドに位置する。第22号溝跡に南西端を壊される形で、北東方向に延びる。第29号溝跡と重複しているが、第29号溝跡と新旧関係は不明である。

規模は長さ12.39m、幅0.83m、深さ0.03～0.25mである。

遺物は混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第29号溝跡 (第71図)

調査区中央のI・J-6グリッドに位置する。北東から南西方向に延びている。第28号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ4.95m、幅0.98m、深さ0.14～0.27mである。

遺物は出土しなかった。

第30号溝跡 (第66・67図)

調査区南側J・K-6、L-6・7グリッドに位置する。北端の手前で第22号溝跡と直角に交わっているが、新旧関係は不明である。途中で二度途切れながら、第5号溝跡と平行して北東方向に延びている。前述の通り、南東にある第6号溝跡と連続する可能性がある。

規模は長さ24.25m、幅0.21～0.96m、深さ0.01～0.09mである。

遺物は混入と思われる縄文土器小片、弥生土器小片、奈良・平安時代の須恵器小片が出土した。

第31号溝跡 (第71図)

調査区中央のH-4～6、I-4グリッドに位置する。第206・207号土壙と重複し、本溝跡の方が古い。第37号溝跡と平行して北東から南西方向に延びているが、同溝跡と同様に途中で切れて第9号掘立柱建物跡の南側でわずかに同溝跡の残骸が検出された。

規模は長さ2.70m、幅0.75m、深さ0.05mである。

出土遺物は中近世の焙烙小片がある。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第32号溝跡 (第71図)

調査区中央のH-6、I-5・6グリッドに位置する。東西方向に延びている。第148号土壙、第8号住居跡と重複し、本溝跡の方が新しい。また第4号井戸跡、第149・150・263号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ13.65m、幅0.93m、深さ0.33～0.45mである。

出土遺物は中近世の焙烙小片・土器小片・泥面子片がある。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器小片が出土した。

第33号溝跡 (第71図)

調査区中央のI・J-7グリッドに位置する。第27号溝跡と平行して南東から北西方向に延びる。第97・112・139号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ11.76m、幅0.63～0.90mである。深さは0.16～0.44mで、中央が最も深い。

出土遺物は、中近世の土器小片がある。

第34号溝跡 (第72・73図)

調査区中央東側のH-8・9、I-8グリッドに位置する。東西方向に延びており、東端から約3.80m付近で浅い段差がある。第145・153号土壙と重複し、本溝跡の方が新しい。また、第258号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ10.26m、幅0.69～0.90mである。深さは0.09～0.24mで、東に向かって浅くなる。

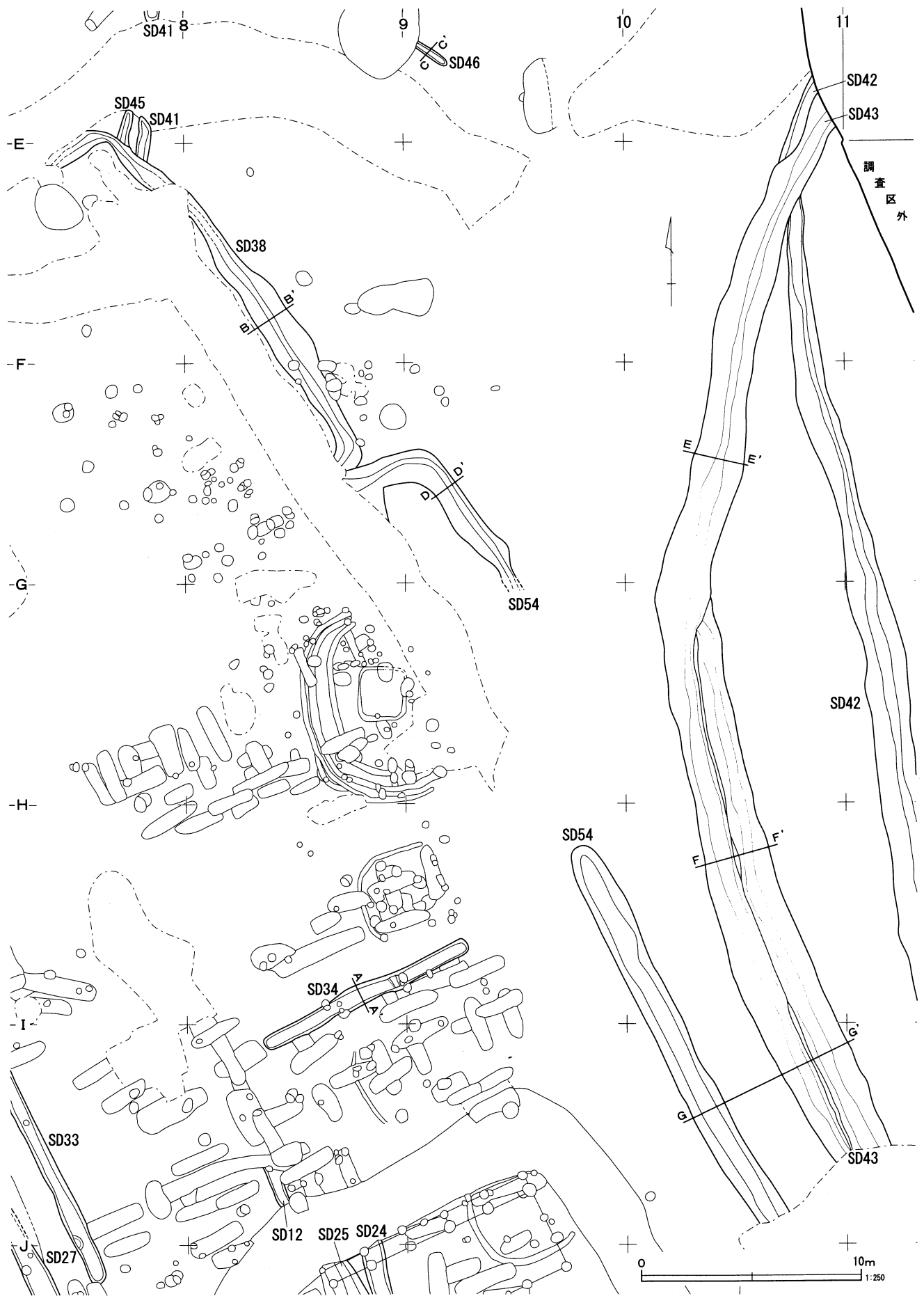
遺物は混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第35号溝跡 (第66・67図)

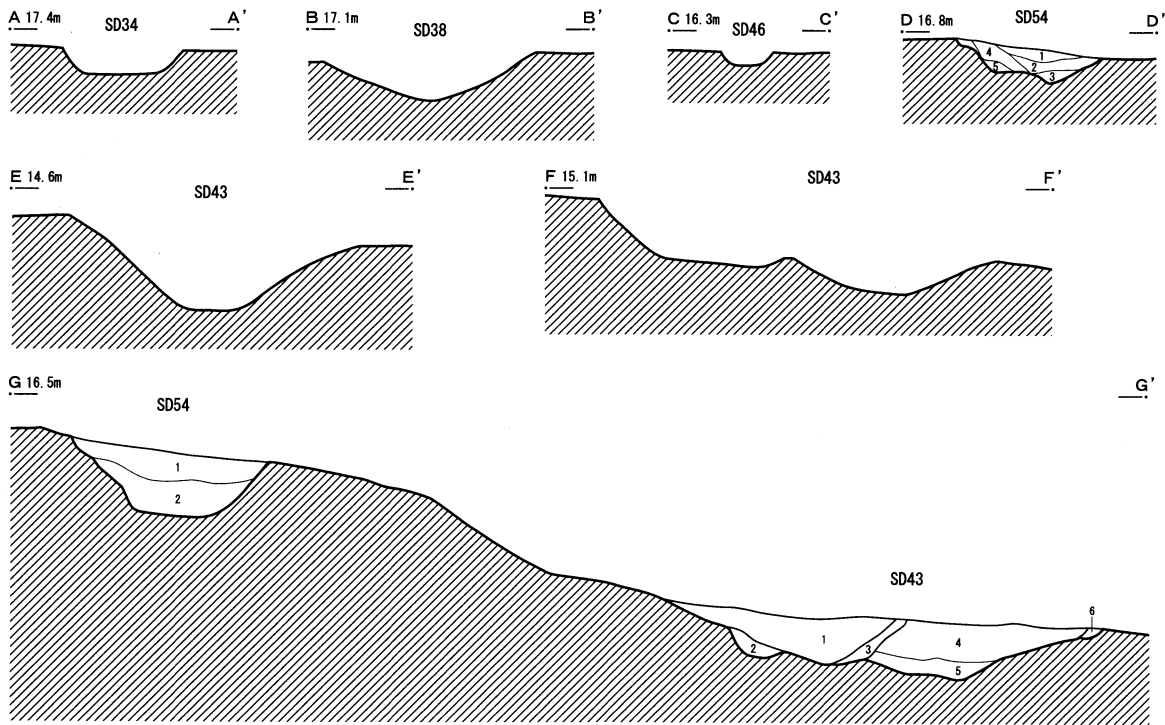
調査区中央南西側のL・M-6・7グリッドに位置する。南東から北西方向へ延びている。第13号溝跡と重複し、本溝跡の方が新しい。

規模は長さ9.54m、幅0.48～1.29m、深さ0.13～0.22mである。

遺物は出土しなかった。



第72図 溝跡 (7)



第54号溝跡 (D-D')

- 1 黒色土 ローム粒子(1mm大)少量
- 2 黒色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1~4cm大)多量
- 3 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量
- 4 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1cm大)少量
- 5 褐色土 ローム粒子(1~2cm大)多量

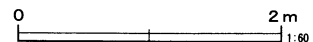
第54号溝跡 (G-G')

- 1 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック多量
- 2 褐色土 ロームブロックなし・やや暗い

第43号溝跡

- 1 暗褐色土 粘土質明黄褐色粒子含む・粘土質明黄褐色ブロック含む
- 2 暗褐色土 粘土質明黄褐色粒子大量・粘土質明黄褐色ブロック(1~2mm)多量
- 3 暗褐色土 粘土質明黄褐色粒子大量・粘土質明黄褐色ブロック(1~2mm)多量
- 4 褐色土 粘土質明黄褐色粒子含む・粘土質明黄褐色ブロック(1~2mm)多量
- 5 褐色土 粘土質明黄褐色粒子少量・粘土質明黄褐色ブロック(1~2mm)少量・4層より暗い
- 6 褐色土 粘土質明黄褐色粒子多量・粘土質明黄褐色ブロック(1~2mm)多量

第73図 溝跡 (8)



第36号溝跡 (第74図)

調査区北西端のE-4・5、F-4グリッドに位置する。南西から北東方向に延びており、南西側は調査区外へ続く。北東側は直角に曲がって攪乱に切られている。

規模は長さ17.81m、幅1.32~3.12mである。深さは0.35~0.76mで、東側が深くなる。

遺物は、中世の土器片(第75図7~10)が出土している。

第36号溝跡出土遺物 (第75図7~10)

7・8は焙烙で、両方とも輪積成形をしていると思われる。7には、補修孔が1ヶ所確認でき、外面に煤が付着している。8は内耳一つが残存しており、それは口縁部に近く、底面からかなり高い位置に付いている。底面は残存していないが、ある程度深さをもった焙烙と思われる。外面に煤が付着している。9は、塊と思われる底部片で、ロクロで成形している。底面は、回転糸切痕が残っ

ている。10は、土器の口縁部片である。内面に卸目と思われる櫛目が数条確認でき、摺鉢の可能性はある。

第37号溝跡 (第71図)

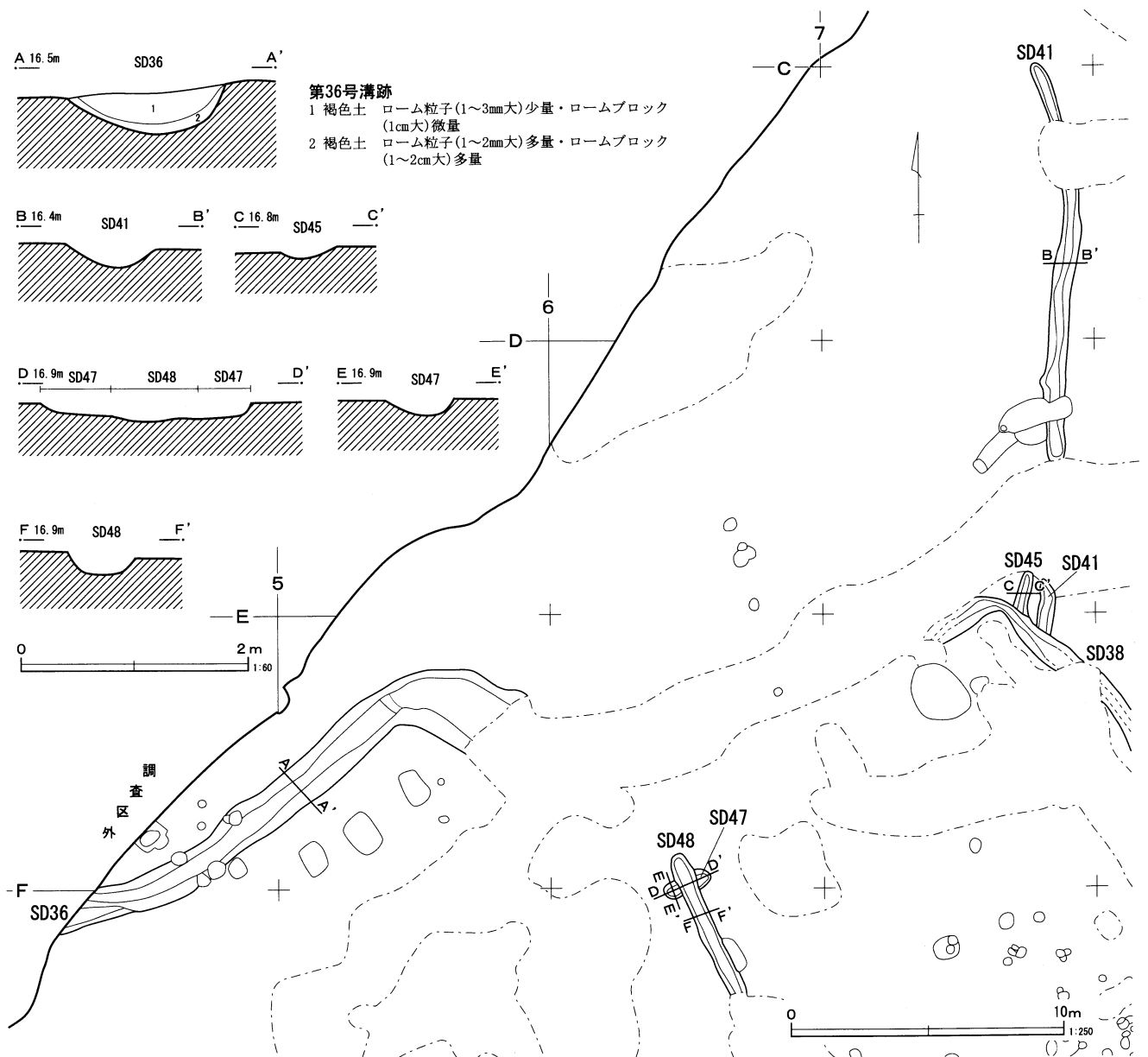
調査区中央のH-5・6、I-4グリッドに位置する。調査区中央付近から始まって南東方向へ途切れながら延びており、第18号溝跡と平行し、一部分重複している。再び第9号掘立柱建物跡の南側で現れて第18号溝跡の東端と重なる。同溝跡との新旧関係は不明であり、第250号土壌とも同様である。また、第192号土壌と重複し、本溝跡の方が新しい。

規模は、東から長さ4.38、3.27、4.04mで、幅が0.65m前後である。深さは、東側2条は0.30~0.46mで、西側は0.16m前後と浅い。

遺物は出土しなかった。

第38号溝跡 (第72・73図)

調査区北側のD・E-7、E・F-8グリッド



第74図 溝跡(9)

に位置する。台地の縁辺を南西から北東方向に延びており、台地突端で直角に曲がって攪乱の中で終息する。南西側も第54号溝跡と一部重複しながら直角に曲がって攪乱に切られている。第41・45号溝跡、第241号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ22.25m、幅0.81~2.04m、深さ0.12~0.37mである。

遺物は出土しなかった。

第39号溝跡 欠番

第40号溝跡 欠番

第41号溝跡(第74図)

調査区北側のC~E-7グリッドに位置する。台地からの斜面部を等高線に直交して南北方向へ延びている。北側では東にわずかに振れて、一部攪乱によって途切れている。南端は第38号溝跡と重複して終わる。同溝跡との新旧関係は不明である。また第223・230号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ12.38m、幅0.44~0.75mである。深さは、概ね0.30m前後である。

遺物は混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第43号溝跡 (第72・73図)

調査区東側のD～I-10、I-11グリッドに位置する。本溝跡は台地上から約2.0m下がったところで掘削されている。調査区南西端から北方向へ弧を描いて走り、第42号溝跡(弥生環濠)を切つて、低地部の調査区外へと続く。土層観察の結果、少なくとも5回の掘削が層位順に行われていた。南側では2条の溝跡が確認できるが、東側は古い段階に、一方、西側は新しい段階に3度掘削されている。G-10グリッド杭付近で1条に収束しているが、古い溝跡が、新しい溝跡と同一経路を辿るかどうかは確認できなかった。

規模は、古い溝跡が長さ26.01m、幅0.82～1.68m、深さ0.05～0.29mである。新しい溝跡は、長さ49.84m、幅1.20m～1.98m、深さ0.39～0.74mである。

遺物は出土しなかった。

第44号溝跡 欠番

第45号溝跡 (第74図)

調査区北側のD・E-7グリッドに位置する。南北方向に延びており、第41号溝跡の一部分と平行する短い溝跡である。南側は第38号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ1.95m、幅0.38～0.50m、深さ0.09～0.10mである。

遺物は出土しなかった。

第46号溝跡 (第72・73図)

調査区北側のD-9グリッドに位置する。南東から北西方向に延びる。北東側は攪乱によって切られる。

規模は長さ1.60m、幅0.36m、深さ0.06～0.10mである。

遺物は出土しなかった。

第47号溝跡 (第74図)

調査区中央北側のE・F-6グリッドに位置する。南西から北東方向に延びる。第48号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ1.63m、幅0.60m、深さ0.10～0.13mである。

遺物は出土しなかった。

第48号溝跡 (第74図)

調査区中央北側のE・F-6グリッドに位置する。南東から北西方向に延びる。第47号溝跡・第239号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。南側は攪乱によって切られている。

規模は長さ5.44m、幅0.59～0.66m、深さ0.14～0.25mである。

遺物は出土しなかった。

第49号溝跡 (第66・67図)

調査区中央のJ-5グリッドに位置する。南東から北西方向へ延びる。第22号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ3.49m、幅0.28～0.48m、深さ0.04～0.07mである。

遺物は出土しなかった。

第50号溝跡 (第68・69図)

調査区南側J・K-9グリッドに位置する。第12・24溝跡の間を平行するように、南東から北西方向へ延びる。

規模は長さ4.40m、幅0.17～0.38m、深さ0.01～0.08mである。

遺物は出土しなかった。

第51号溝跡 (第68・69図)

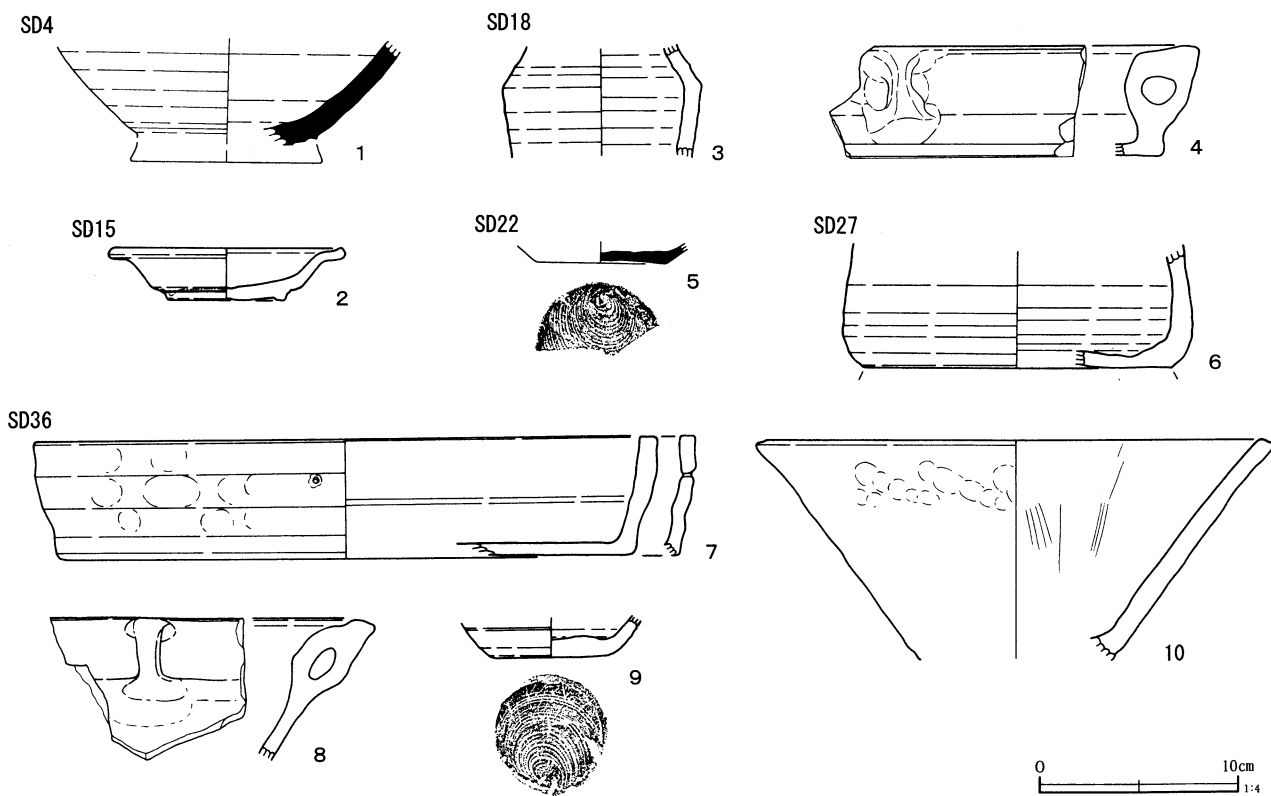
調査区東側のJ-10グリッドに位置する。南東から北西方向に延びる。多くの土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は長さ3.43m、幅0.48m、深さ0.01～0.08mである。

遺物は出土しなかった。

第52号溝跡 (第66・67図)

調査区中央南側のK・L-6グリッドに位置する。第6号住居跡のカマド、第13号溝跡北端を壊して北西方向へ延びる。グリッドピットが列状に重複しているが、新旧関係は不明である。



第75図 溝跡出土遺物

第19表 溝跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	壺		[5.3]		A G	普通	灰	15	SD4 M-7g 東金子産
2	灰釉陶器	折縁皿	(11.5)	2.6	(6.0)	H	良好	黄灰	20	SD15 I-2g 瀬戸美濃 17C中頃
3	陶器	瓶		[5.5]			良好	黒褐	20	SD18 瀬戸美濃 胎土緻密 時期不明
4	土器	焙烙		[5.6]		C G	普通	黒褐	10	SD18 外面煤付着
5	須恵器	坏		[1.1]	(6.4)	G I	普通	灰	20	SD22 南比企産
6	妬器	(船)德利か		[5.5]	(15.6)	C F	良好	暗赤	20	SD27 備前 17C代か
7	土器	焙烙	(31.6)	6.0	(28.4)	G	普通	黒褐	10	SD36 外面煤付着 径0.2cmの補修孔有り
8	土器	焙烙		[7.2]		C D F	普通	黒褐	5	SD36 外面煤付着
9	土器	塀か		[2.0]	(5.8)	G I	普通	にぶい黄褐	20	SD36 胎土緻密 底部回転糸切
10	土器	播鉢か	(24.8)	[11.0]		E F G	不良	にぶい褐	20	SD36

規模は長さ4.20m、幅0.26~0.48m、深さ0.08mである。

遺物は出土しなかった。

第53号溝跡 (第68・69図)

調査区南側のK-9グリッドに位置する。第16・22号土壌と重複しているために、わずかに確認できるだけであるが東西方向に延びる。両者とは新旧関係は不明である。

規模は長さ1.03m、幅0.34m、深さ0.11mである。

遺物は出土しなかった。

第54号溝跡 (第72・73図)

調査区中央東側のF-8、F~H-9、H・I-10グリッドに位置する。台地の縁辺を南東から北西方向に延びている。G-9グリッド間はほとんど途切れて、北側は第38号溝跡と一部重複しながら直角に曲がって攪乱に切られている。

規模は、南側の長さ19.38m、北側の長さが10.00mである。幅は0.60~1.68mである。深さは南側が0.60m前後で深く、北側は0.40m前後である。

出土遺物は、中近世の土器小片がある。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

5. 土器棺墓・火葬跡・井戸跡・土壌

(1) 土器棺墓

第1号土器棺墓 (第76図)

調査区中央南側のL-6グリッドに位置する。第2号火葬跡を調査中に偶然発見した。同火葬跡に北西の一部を壊され、第13号溝跡(弥生環濠)と少し重なる形で構築されている。土層観察の結果、同溝跡が埋没した段階で作られており、本土器棺墓の方が新しい。

後世の造成や試掘トレンチによって上面が一部削られており、残存部分は埋設された壺形土器の胴部上半から底部の側面だけである。東側は二重に破片を置いており、西側は土壌の壁に沿うような形で直角に曲げて置いている。このことから、一個体をそのまま埋設したのではなく、大型の壺を壊して袋状の下半と大破片の上半で箱型を作って埋めたとも考えられる。

掘り方はゆるい播鉢状で、壺形土器がほぼ納まる大きさしか掘り込まれていない。平面形は楕円形で、長軸0.56m、短軸0.44mで、確認面からの深さは0.21mである。

遺物は埋設された壺形土器1点のみで、副葬品などは出土しなかった。

第1号土器棺墓出土遺物 (第77図)

1は胴部上半から底部にかけて残る壺形土器である。底部付近は一周残るが、それより上位は半周しか残っていない。外面に文様はなく、ハケ調整を施している。内面には輪積み痕が認められる。

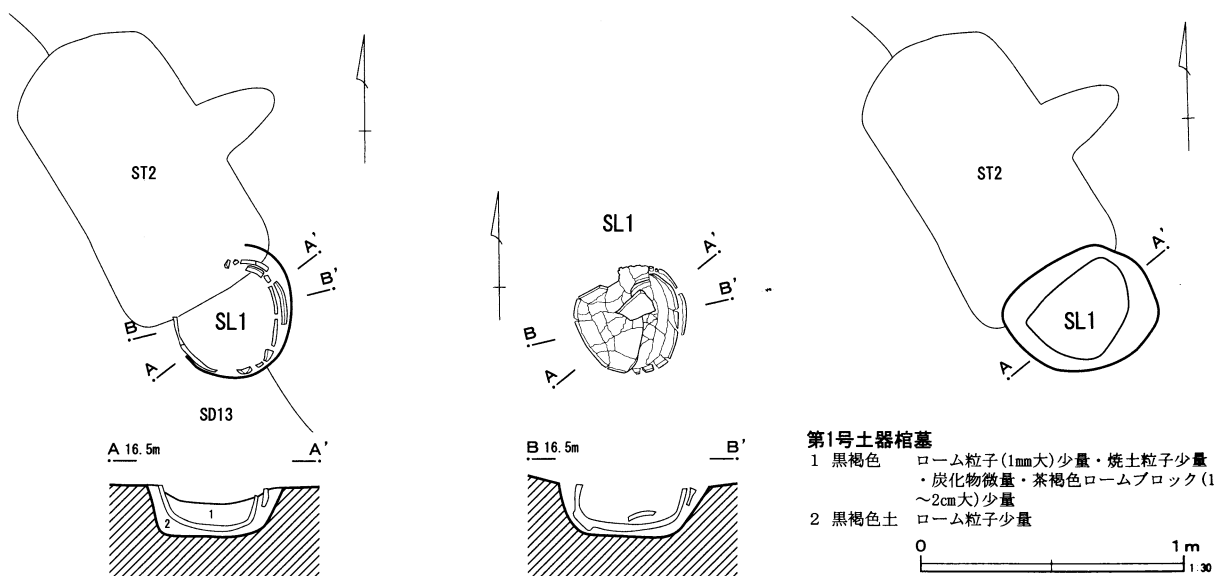
(2) 火葬跡

第1号火葬跡 (第78図)

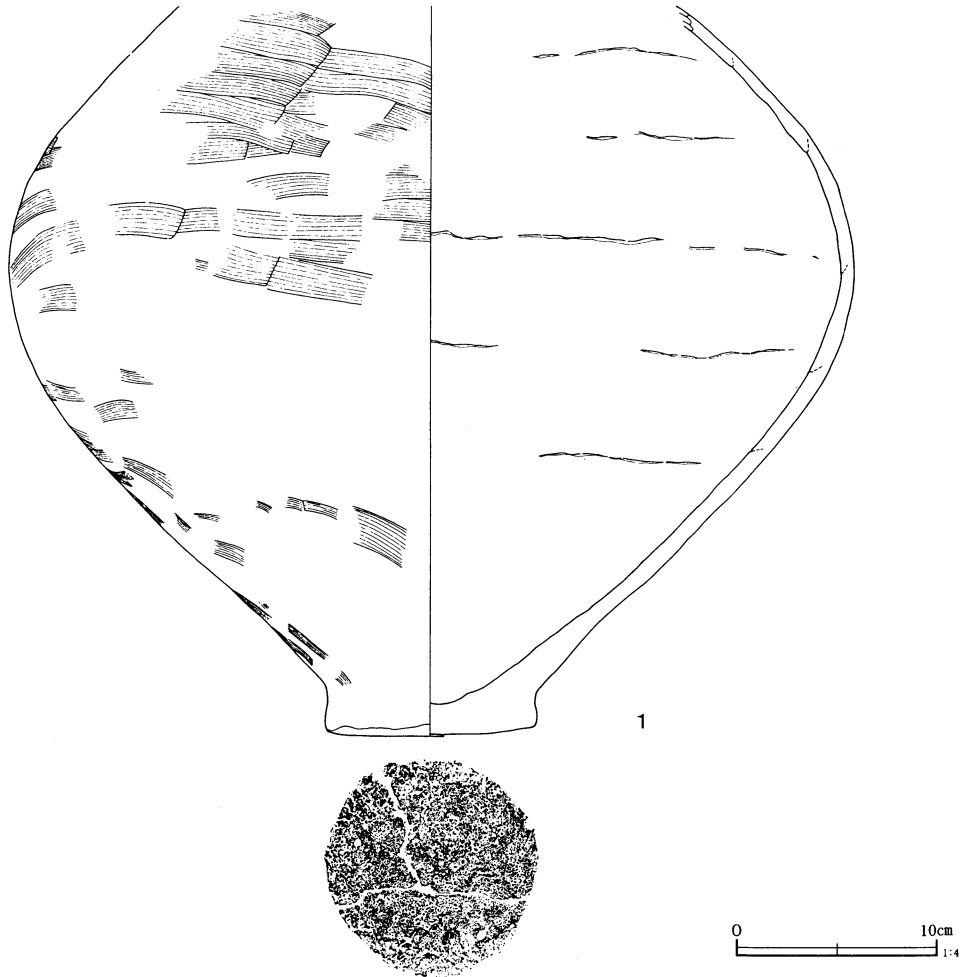
調査区中央西側のJ-4グリッドに位置し、第4号掘立柱建物跡の東側にある。

精査当初はピットと判断し掘削に着手したが、少し掘り進んだ時点で疑念を抱き、確認をやり直して中世の火葬跡であることを把握した。そのため、燃焼部の北壁は掘りすぎてしまった部分もあるが、下層から立ち上げて補正した。北壁の西側寄りに送風口を設けている。

覆土は1層に多量の焼土粒子・炭化物を含み、弥生土器片を多く含んでいた。2層は、掘り方の埋土と考えられる。3層は焼土粒子が少なく、地山のブロックが多く含まれており、壁の崩落土と思われる。4層は送風口の覆土である。下層から



第76図 第1号土器棺墓



第77図 第1号土器棺墓出土遺物

第20表 第1号土器棺墓出土遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺		[37.0]	10.7	A C	普通	にぶい黄橙	35	

弥生土器片を多く出土したことから、中世の火葬跡ではないと考えたが、平面形や焼土粒子・炭化物の大量出土など、火葬墓の条件を満たしている。

弥生土器は1層の下位から出土しており、おそらく薪組みの台として使用したと思われる。

平面形は長方形で、長軸1.45m、短軸0.92mで、確認面からの深さは0.14mである。長軸方位はN-80°-Wを指す。

出土遺物は、前述の弥生土器片のみである。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

第2号火葬跡 (第78図)

調査区中央南側のL-6グリッドに位置する。第13号溝跡 (弥生環濠) と第1号土器棺墓を壊し

ている。

確認当初から送風口の赤化した壁が見えており、火葬跡と判断できた。送風口は北東壁に設けられている。

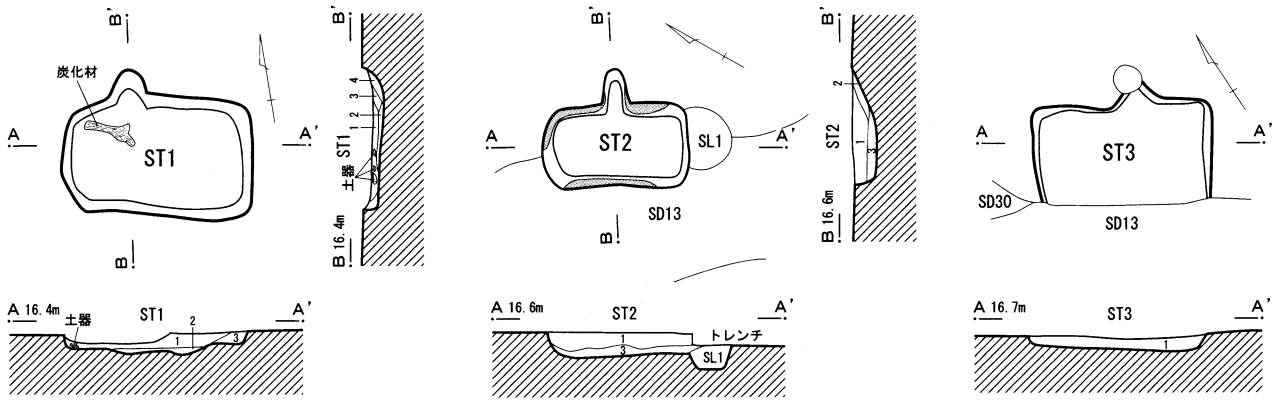
覆土に燃焼材の炭が多く含まれ、壁面は赤く焼きしまっているなど、良好な状態で遺存していた。

平面形は長方形で、長軸1.11m、短軸0.62mで、確認面からの深さは0.19mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は混入と思われる弥生土器小片が出土した。

第3号火葬跡 (第78図)

調査区中央南側のL-7グリッドに位置する。第13号溝跡を壊している。第13号溝跡精査後、



第1号火葬跡

- 1 黒褐色土 茶褐色ローム粒子多量・焼土粒子多量・焼土ブロック(0.5~1cm大)少量・炭化物多量
- 2 黒褐色土 茶褐色ローム粒子多量・茶褐色ロームブロック(2~3cm大)少量・焼土粒子多量
- 3 黒褐色土 茶褐色ローム粒子多量・茶褐色ロームブロック(2~3cm大)多量・焼土粒子微量
- 4 黒褐色土 茶褐色ローム粒子少量

第2号火葬跡

- 1 黒褐色土 茶褐色ローム粒子多量・焼土粒子少量・茶褐色ロームブロック(2~5cm大)多量・炭化物少量
- 2 黒褐色土 茶褐色ローム粒子多量・焼土粒子多量・炭化物少量
- 3 黒褐色土 炭化物多量・焼土ブロック(1cm大)多量・茶褐色ローム粒子多量

第3号火葬跡

- 1 暗褐色土 茶褐色ローム粒子少量・茶褐色ロームブロック(1~2cm大)微量・焼土粒子(1mm大)微量

第78図 第1～3号火葬跡

ピットの掘削中に偶然発見したため、南西壁は記録できなかった。

覆土は、いわゆる真土である地山と見分けづらく、焼土粒子の散布を目安に形態を整えた。送風口は北東に設けられている。

平面形は長方形で、長軸1.35m、短軸0.76m以上で、確認面からの深さは0.12mである。長軸方位はN-57°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

(3) 井戸跡

第1号井戸跡 (第79図)

調査区南側のM・N-7グリッドに位置する。第3号方形周溝墓南溝を壊しているが、第5号土壇には上面を削られている。

平面形は西側に入口部である階段が取り付けられているため、長楕円形となる。長軸長は5.31m、短軸長は2.07mである。筒部は漏斗状となっている。階段は、その漏斗状の屈曲部分より下に設けられている。階段に硬化面は認められなかった。段数は8段で、高さ0.04m~0.19mの段差をもつ。筒部に取り付く段差は0.55mと高い。

覆土は粘土及び小石が多く含む黒褐色系土が主体となり、近世以降に掘削されたとは考えられない。壁面崩落の危険性があるため、人力による掘削は確認面からの深さ1.75mの時点で終了した。その後、底面を確認する目的で重機による掘削を行なった。ローム下層の黄褐色礫層を貫き、さらに下位の橙褐色礫層まで掘削した。その橙褐色礫層に到達直後、水が湧き出てきた。礫層脇の覆土は8・9層の続きの暗褐色土であった。また下部は幅1.20mくらいまで崩落していた。最下層の覆土は再び黒褐色に変化していた。その結果、底面は確認面から約3.50mの深さで検出した。

出土遺物は、奈良・平安時代の須恵器が4点あり、甕胴部片を除く3点を掲載した(第81図1~3)。3のみ下層出土である。また、混入した縄文・弥生土器片が少量出土している。

第1号井戸跡出土遺物 (第81図1~3)

1・2は須恵器坏の口縁部で、3は無台堦の底部である。2は、褐色を呈する東金子産である。3は、口径がやや大きく、厚みもあるため、無台堦と考えておく。底面は、回転糸切りで無調整である。時期は9世紀中頃~後半と思われる。

遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代の所産と考えられる。

第2号井戸跡 (第80図)

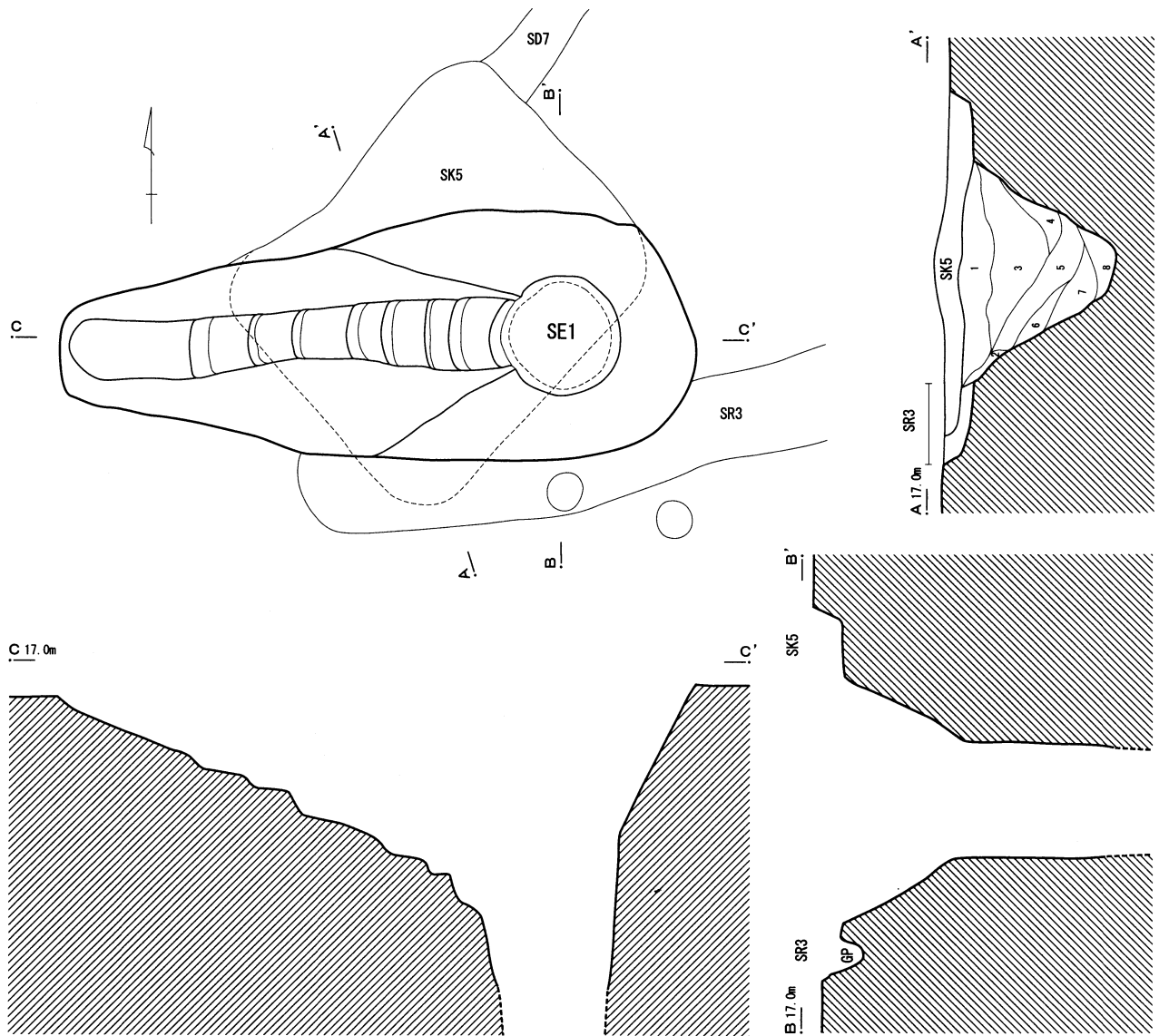
調査区北東側のF-4グリッドに位置する。第7号住居跡と重複するが、確認時点で同井戸跡の平面形は見分けられた。

平面形は直径0.87mの円形である。筒部はほぼ直立した壁面をもつ円筒形である。

覆土上層は黒褐色系土が主体である。壁面崩落の危険性があるため、人力による掘削は確認面か

らの深さ約1.5m付近で終了した。その後、底面を確認する目的で重機によって、ローム下層の暗黄褐色礫層まで掘削を行なった。下層の覆土は暗褐色に変化していた。2.00m程度で礫層に達したが、壁面の崩落はなく筒の形態を維持していた。底面は確認面から深さ約3.6mで検出し、礫層に変化はないものの底面で湧水点に到達していた。

出土遺物は、かわらけ・焙烙・陶磁器・播鉢片の10点がある。また、混入と思われる弥生土器片が少量出土している。



第1号井戸跡

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|-----------------------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)微量・灰褐色粘土(1~3cm大)少量 | 5 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)微量・ロームブロック(2~4cm大)少量 |
| 2 褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(2~4cm大)多量 | 6 黒褐色土 | ローム粒子(1~3mm大)少量・ロームブロック(2~3cm大)少量 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)微量・灰褐色粘土(1~3cm大)微量 | 7 暗褐色土 | ローム粒子(2~3mm大)少量・ロームブロック(3~5cm大)多量 |
| 4 黒褐色土 | ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(3~5cm大)多量 | 8 暗褐色土 | ローム粒子(2~3mm大)少量・ロームブロック(2~3cm大)少量 |

第79図 第1号井戸跡

第2号井戸跡出土遺物（第81図4～8・13）

4～6・13は、瀬戸美濃の陶器である。4は、天目茶碗の口縁部である。ロクロ成形で内外面に鉄釉を施す。17世紀のものと思われる。5は、皿の口縁部である。ロクロ成形で内外面に灰釉を施し、貫入が多く認められる。18世紀代のものと思われる。6は播鉢の口縁部、13は胴部で、内外面に鉄釉を施す。13の内面に9本以上1単位の櫛歯状工具を用いて、左回転で卸目を施している。6は17世紀中頃と思われるが、13の詳細な時期は不明である。

第3号井戸跡（第80図）

調査区中央東側のI-9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓北溝と重複し、同方形周溝墓を掘削するまで確認できなかった。

平面形は直径0.78mの円形である。筒部は直立する壁面をもつ円筒形である。

壁面崩落の危険性があるため、人力による掘削は確認面北東側からの深さ1.59mで終了した。その後、底面を確認する目的で重機によって、ローム下層の暗白色粘土層から黄褐色礫層まで掘削を行なった。覆土は上・下層ともに黒褐色のままである。底面は橙褐色礫層を貫いて検出し、確認面北東側から深さ約4.1mである。湧水点には橙褐色礫層の上面から約0.2m下で到達した。

遺物は、下層より染付碗1点が出土している（第81図9）。また、混入と思われる弥生土器小片が出土している。

第3号井戸跡出土遺物（第81図9）

9は、朝鮮半島から輸入された陶器の染付碗である。外面にはくすんだ青色で染付を施す。口縁部には2条の細線を引き、胴部中央に花文を描く。ロクロ成形で内外面に灰釉を施す。貫入は外面に多く認められるが、内面にはあまり見られない。

第4号井戸跡（第80図）

調査区中央西側のI-5グリッドに位置する。第32号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は楕円形で、長軸2.80m、短軸2.46mである。井筒は北側に偏っており、南側は緩斜面の広がりをもつ。南側は0.60m付近で直立した壁面に移行するが、他は始めからほぼ直立した壁面をもつ。南側が入口部になるかどうかは不明である。

覆土は褐色系土が主体である。壁面崩落の危険性があるため、人力による掘削は確認面からの深さ約1.00m付近で終了した。その後、底面を確認する目的で重機によって、ローム下層の乳白色粘土層まで掘削を行なった。筒部は下層に行くに従って、徐々にすぼまるが礫層に入り、壁面の崩落が広がっていた。ローム約2.9m下の橙褐色礫層を貫き、約3.5m下の乳白色粘土層に掘り込まれて底面を検出した。底面直下が青灰色に変化していたが、周囲の地山は変化していなかった。重機による掘削も安全管理上、これ以上の掘削は危険と判断し調査を終了した。この青灰色粘土が最終の覆土であるか、帯水の加減で生じた変質なのかは見極めることはできなかった。

最下層から拳二つ大のチャートを主体とする礫が50点ほど出土したが、底面に敷設したというよりは、使用中に投げ入れたという状況であった。

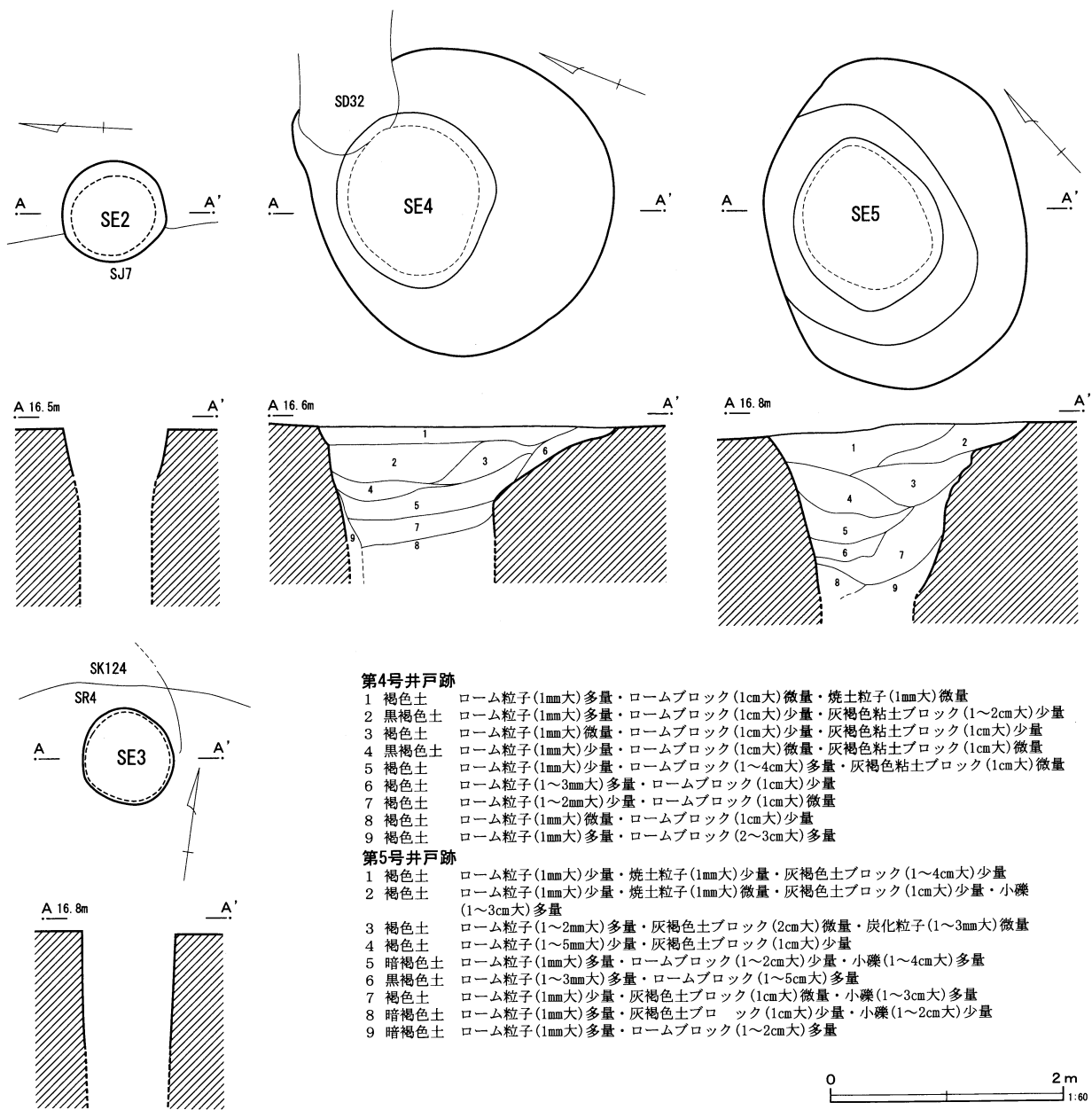
出土遺物は、中近世の土器片4点と瓦1点がある。また、混入と思われる縄文土器片・弥生土器片が出土している。

第4号井戸跡出土遺物（第81図10・15～17）

10は鉢で、胎土に小礫を多量に含んでいる。15は、平瓦片で東金子産である。凸面には細かい縄叩きを施し、凹面に布目圧痕を残す。16・17は砥石である。16は、凝灰岩で上部が欠損している。右側面に加工痕がある。17は、安山岩で下・左側が欠損している。表面には鋭利な刃を研いだ痕が残り、裏面は研ぎやすくするためか、研ぎ面を斜めになるように、平らに加工している。

第5号井戸跡（第80図）

調査区中央西側のH-5グリッドに位置する。第13号住居跡の南側に隣接して作られている。



第80図 第2～5号井戸跡

平面形は楕円形で、長軸2.76m、短軸2.19mである。筒部は漏斗状になる。

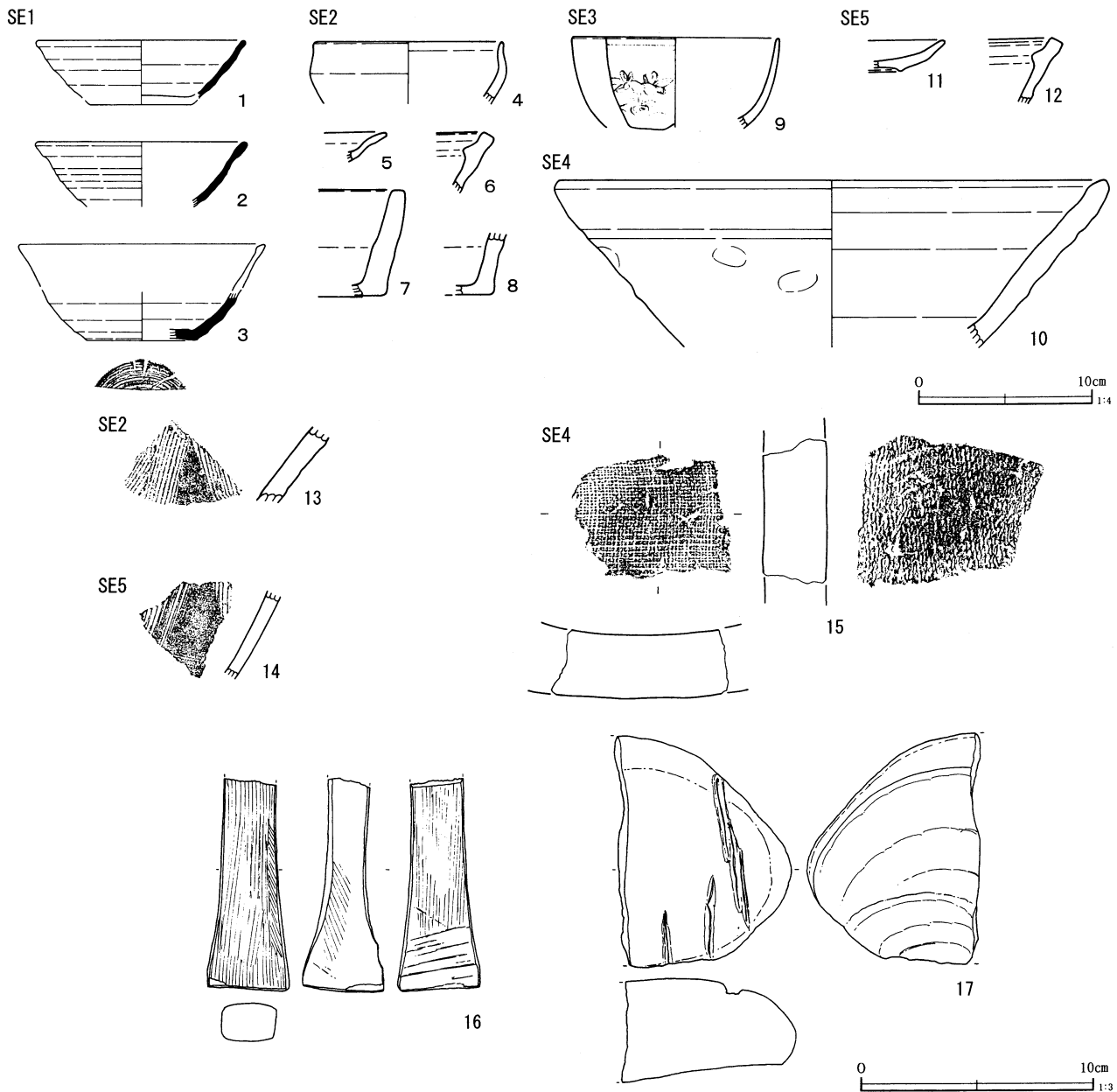
覆土は上層が褐色系土で、中層は暗褐色～黒褐色系土が主体となる。1・5・7・8層には小礫を多く含んでいる。壁面崩落の危険性があるため、人力による掘削は確認面からの深さ1.76mで終了した。その後、底面を確認する目的で重機によって、ローム下層の白色粘土混じりの砂礫層まで掘削を行なった。筒部は徐々にすぼまるが、礫層になると崩落して広がっていた。覆土は下層まで黒褐色で、第4号井戸跡で見られた底面直下の青灰

色は認められなかった。底面は東側確認面から約3.6mである。

出土遺物は焙烙・播鉢・陶器・かわらけ片の13点がある。また、混入と思われる縄文土器片、奈良・平安時代の須恵器甕片が出土している。

第5号井戸跡出土遺物 (第81図11・12・14)

11・12は瀬戸美濃の陶器で、11は削り出し高台の志野皿、12は播鉢である。11は、ロクロ成形で畳付き以外に長石釉と思われる釉を施す。貫入が多く、二次被熱を受けている。時期は17世紀前半である。14は、内面に6本1単位の卸目を施す。



第81図 井戸跡出土遺物

第21表 井戸跡出土遺物観察表 (第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	坏	(11.9)	[3.4]		G	良好	灰	15	SE1 東金子産
2	須恵器	坏	(12.0)	[3.0]		ADG	普通	褐	15	SE1 産地不明
3	須恵器	無台		[1.7]	(6.5)	GI	普通	オリーブ灰	25	SE1下層 南比企産
4	陶器	天目茶碗	(10.8)	[3.6]		CG	良好	灰白	15	SE2 瀬戸美濃 鉄釉 17C
5	灰釉陶器	皿		[1.7]		CG	良好	浅黄	破片	SE2 瀬戸美濃 18C代か
6	陶器	播鉢		[3.5]		FGH	普通	褐	破片	SE2下層 瀬戸美濃 鉄釉 17C中頃
7	土器	焙烙		6.1		EFGH	普通	褐	破片	SE2 外面煤付着
8	土器	焙烙		[3.5]		EFG	普通	褐	破片	SE2
9	灰釉陶器	染付碗	(11.8)	[5.2]		H	普通	灰白	15	SE3下層 輸入品(朝鮮) 胎土緻密 17C代か
10	土器	鉢	(31.4)	[9.8]		ACEFG	普通	橙	15	SE4下層
11	陶器	志野皿		[1.8]		F	普通	灰白	破片	SE5 瀬戸美濃 長石釉か 17C前半
12	陶器	播鉢		[3.8]		FGH	普通	褐	破片	SE5下層 瀬戸美濃 鉄釉 17C中頃
13	陶器	播鉢				AFH	普通	暗褐	破片	SE2 瀬戸美濃 鉄釉 時期不明
14	陶器	播鉢				GH	普通	褐	破片	SE5 錆釉か
15	瓦	平瓦	長[5.5]幅[7.0]厚2.6			AG	普通	灰	破片	SE4下層 東金子産 断面中央は茶灰色
16	石器	砥石	長さ[9.0]cm 幅3.6cm 厚さ2.6cm 重さ112.5g							SE4 凝灰岩
17	石器	砥石	長さ[10.0]cm 幅[7.6]cm 厚さ4.5cm 重さ386.4g							SE4下層 安山岩

(4) 土壙

本遺跡で検出された土壙は284基で、その大多数が近世の土壙である。以前の土地所有者が台地の最高所を通り道として使用し、その両脇を畑にしていたということである。その農作業に利用されたのが、多くの長方形土壙と考えられる。その土壙の覆土は褐色土を基調としており、多寡はあるがロームブロックを含んでいる。このような長方形の土壙は近世以降の所産と考えられ、時期について個別に記述をしない。また、遺構に伴う遺物はほとんど出土していない。混入遺物が大勢を占めており、遺物量は個別に記述しない限り、少量出土しているだけである。また、E-5グリッドに位置する三連の土壙からは、六道銭と思われる銭貨が出土し、墓壙の可能性が高い。なお、近代の土壙も少し検出されており、覆土はオリーブ褐色土になる。

その中で、縄文時代の土壙4基、弥生時代の土壙7基を検出している。なお、縄文時代の遺構は、これらの土壙以外に検出されていない。

第1号土壙 (第82図)

調査区南東端のM-9グリッドに位置する。遺構の半分は調査区外に延びる。第2号土壙と接している。平面形は隅丸方形で、規模は長軸0.75m以上、短軸0.65m以上、深さ0.19mである。長軸方位はN-5°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第2号土壙 (第82図)

調査区南東端のM-9グリッドに位置する。第1号土壙と接している。平面形は長方形で、規模は長軸2.34m、短軸0.67m、深さ0.29mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

第3号土壙 (第82図)

調査区南側のL-9グリッドに位置する。第8号土壙と近接し平行している。平面形は長方形で、

規模は長軸2.92m、短軸0.64m、深さ0.50mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。

出土遺物は中近世の土器片がある。また、混入と思われる弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

第4号土壙 (第82図)

調査区南側のN-6グリッドに位置する。第1号方形周溝墓と重複し、本土壙の方が新しい。調査は同方形周溝墓を優先したため、三分の一程度を記録した。平面形は円形と推定されて、規模は長軸1.09m、短軸0.36mが残存する。深さは0.14mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第5号土壙 (第82図)

調査区南側のM・N-7グリッドに位置する。第1号井戸跡、第3号方形周溝墓、第7号溝跡と重複し、土層観察の結果、本土壙の方が三者より新しい。第1号井戸跡・第3号方形周溝墓を優先して調査したため、北隅を記録するに留まった。覆土は褐色土を基調としているが、近世土壙の覆土とは異なっており、中世まで遡る可能性がある。平面形は隅丸方形と推定され、規模は長軸2.28m以上、短軸0.75m以上、深さ0.28mである。長軸方位はN-46°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第6号土壙 (第82図)

調査区南側のL-9グリッドに位置する。第7号土壙と近接し平行している。平面形は長方形で、規模は長軸2.31m、短軸0.54m、深さ0.59mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

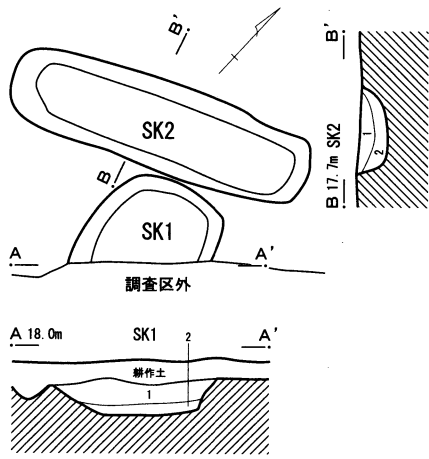
遺物は出土しなかった。

第7号土壙 (第82図)

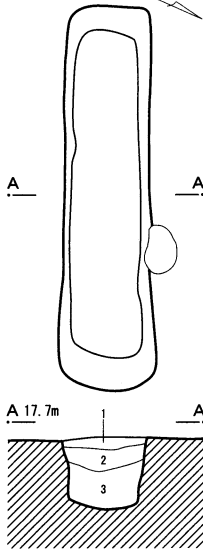
調査区南側のK・L-9グリッドに位置する。第6号土壙と近接し平行している。平面形は長方形で、規模は長軸2.48m、短軸0.58m、深さ0.43mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

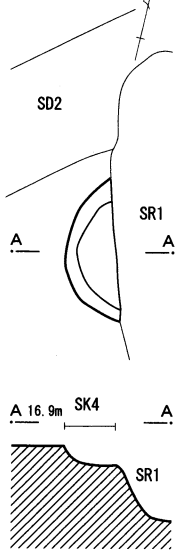
第1・2号土壌



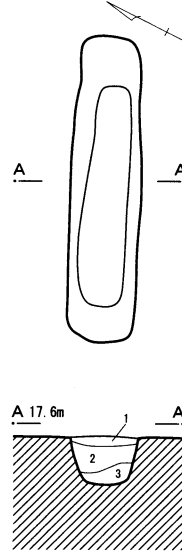
第3号土壌



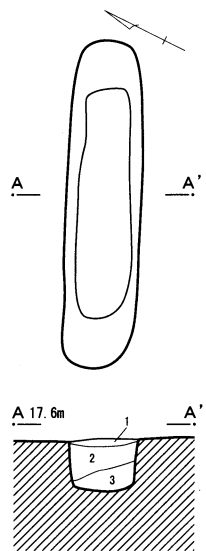
第4号土壌



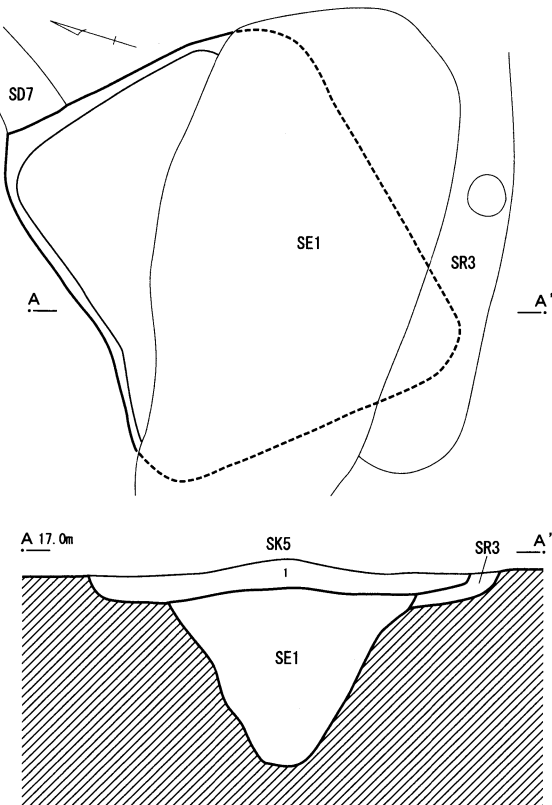
第6号土壌



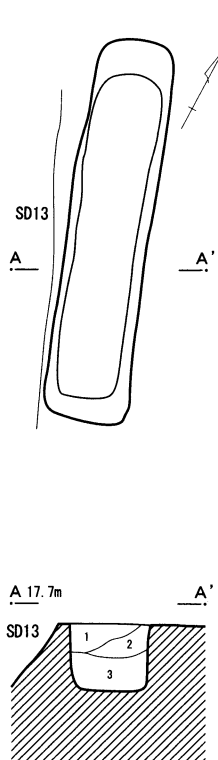
第7号土壌



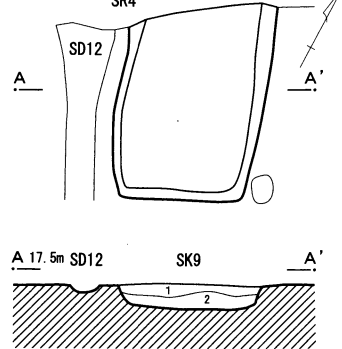
第5号土壌



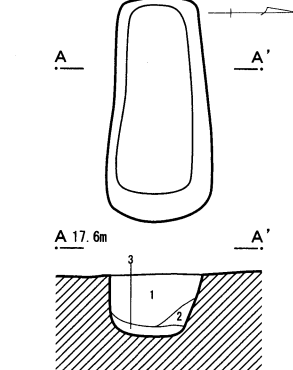
第8号土壌



第9号土壌



第10号土壌



第1号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量・焼土粒子(1mm大)少量
- 2 褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量

第2号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量
- 2 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック少量

第3号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量・ロームブロック(2cm大)微量
- 2 褐色土 ローム粒子(1~4mm大)多量・ロームブロック(2~3cm大)多量
- 3 褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量

第5号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)微量・灰褐色粘土ブロック(3~4cm大)多量

第6号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック微量
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 褐色土 ロームブロック少量

第7号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック微量
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 褐色土 ロームブロック少量

第8号土壌

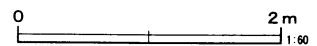
- 1 褐色土 ロームブロック多量
- 2 褐色土 ロームブロック少量
- 3 褐色土 ロームブロック多量

第9号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック微量
- 2 褐色土 ロームブロック少量

第10号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック少量 炭化物微量
- 2 褐色土 ロームブロック多量 炭化物微量
- 3 褐色土 ロームブロック微量 炭化物微量



第82図 土壌 (1)

第8号土壙 (第82図)

調査区南側のL-8・9グリッドに位置する。第3号土壙と近接し平行している。平面形は長方形で、規模は長軸2.92m、短軸0.64m、深さ0.52mである。長軸方位はN-65°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。

第9号土壙 (第82図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南半分のみを記録した。平面形は長方形で、規模は長軸1.45m以上、短軸1.10m、深さ0.16mである。長軸方位はN-27°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第10号土壙 (第82図)

調査区南側のL-9グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.69m、短軸0.66m、深さ0.53mである。長軸方位はN-90°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第11号土壙 欠番

第12号土壙 欠番

第13号土壙 (第83図)

調査区南東側のK-10グリッドに位置する。第13号溝跡(弥生環濠)を切っている。平面形は径1.27mの円形、深さ0.25mである。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第14号土壙 (第83図)

調査区南東側のK-10グリッドに位置する。東側は攪乱によって若干削られている。平面形は不整円形で、規模は長軸1.12m、短軸0.98m、深さ0.30mである。長軸方位はN-2°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第15号土壙 (第83図)

調査区南東側のK-9・10グリッドに位置する。第16・17号土壙と重複しており、土層観察から第16号土壙よりは新しい。第17号土壙と新旧関係は

不明である。平面形は長方形であるが、真ん中付近で若干括れている。規模は長軸1.95m、短軸0.67m、深さ0.46mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第16号土壙 (第83図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。多くの土壙と重複しており、平面形は不明である。規模は長軸1.12m、短軸0.58mが残存する。深さは0.15mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第17号土壙 (第83図)

調査区南東側のK-9・10グリッドに位置する。多くの土壙と重複しているが、いずれの土壙とも新旧関係は不明である。平面形は径1.40m前後の円形と推定され、東側が少し波打つ。深さは0.34mである。

遺物は、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第18号土壙 (第83図)

調査区南東側のK-10グリッドに位置する。多くの土壙と重複するが、土層観察の結果、第16・19号土壙よりも古い。第18号土壙は浅いこともあり、北側の三分の一が残存するのみである。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸0.49m以上、短軸1.27m以上、深さ0.12mである。長軸方位はN-47°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第19号土壙 (第83図)

調査区南東側のK-9・10グリッドに位置する。第4号方形周溝墓と第18号土壙と重複し、両者より新しい。調査は同方形周溝墓を優先したため、北西隅は記録できなかった。平面形は長方形と推定され、規模は長軸2.43m以上、短軸0.70m以上、深さ0.38mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第20号土壌 (第83図)

調査区南側のM-8グリッドに位置する。第1号住居跡の西隅を壊している。第8・11号溝跡と重複し、第8号溝跡を切っているが、第11号溝跡と新旧関係は不明である。平面形は径1.51mの円形、深さ0.47mである。

出土遺物は、第1号住居跡から混入したと考えられる弥生土器片がある。

第21号土壌 (第83図)

調査区南側のL-10グリッドに位置する。南東部分が調査区外に若干延びる。第13号溝跡と重複し、本土壌の方が新しい。平面形は径1.29mの円形、深さ0.42mである。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第22号土壌 (第83図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南西側のみを記録した。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸1.12m以上、短軸1.30m、深さ0.24mである。長軸方位はN-35°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第23号土壌 (第83図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南東側のみを記録した。平面形は円形と推定され、残存規模は東西1.34m、南北0.61m、深さ0.27mである。

遺物は出土しなかった。

第24号土壌 (第83図)

調査区南東側のK-10グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南東側のみを記録した。平面形は方形と推定され、規模は長軸1.41m、短軸0.61m以上、深さ0.15mである。長軸方位はN

-30°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第25号土壌 (第83図)

調査区南東側のK-10グリッドに位置する。平面形は径1.08mの円形、深さ0.33mである。

遺物は出土しなかった。

第26号土壌 (第83図)

調査区南東側のK-9・10グリッドに位置する。第68号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸4.18m、短軸1.03m、深さ0.25mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第27号土壌 (第83図)

調査区南側のK-8グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、東側のみを記録した。平面形は径1.35mの円形と推定され、深さは0.19mである。

遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第28号土壌 (第84図)

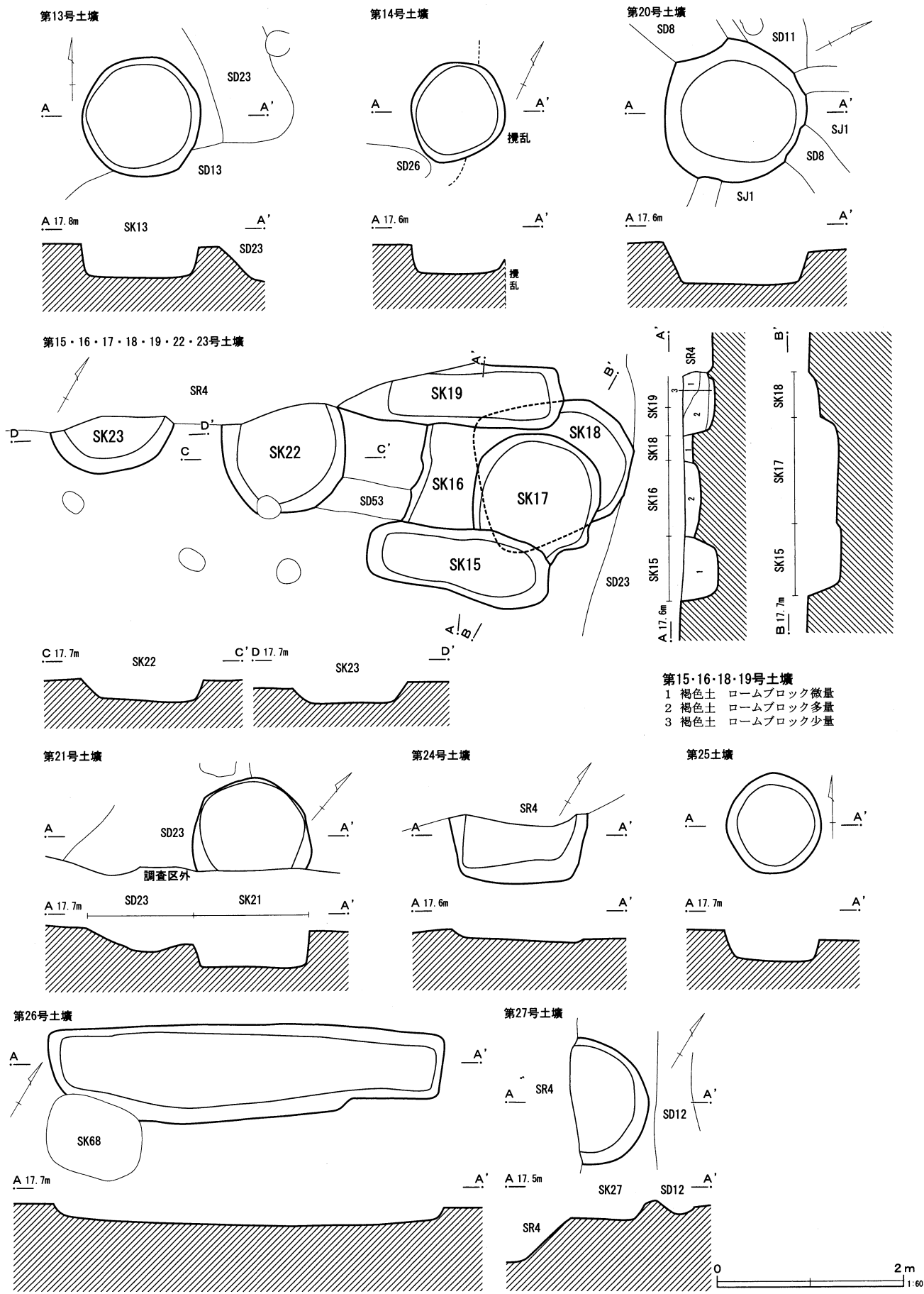
調査区南西側のK-9グリッドに位置する。第12号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。また、第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、わずかに南隅を記録できなかった。平面形は長楕円形で、規模は長軸2.19m、短軸0.68m、深さ0.40mである。長軸方位はN-3°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第29号土壌 (第84図)

調査区中央のJ-8グリッドに位置する。第30号土壌と重複し、本土壌の方が古い。平面形は楕円形で、規模は長軸1.32m、短軸1.23m、深さ0.33mである。長軸方位はN-90°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。



第83図 土坑（2）

第30号土壙 (第84図)

調査区中央のJ-8グリッドに位置する。第29号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸0.91m、短軸0.78m以上、深さ0.40mである。長軸方位はN-90°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第31号土壙 (第84図)

調査区中央のJ-8グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸3.30m、短軸0.66m、深さ0.34mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第32号土壙 (第84図)

調査区中央東側のJ-9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.58m、短軸0.63m、深さ0.37mである。長軸方位はN-57°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第33号土壙 (第84図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第34・53号土壙と重複し、第34号土壙の方が新しい。第53号土壙とは新旧関係不明である。また、第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、一部南東隅を記録できなかった。平面形は楕円形で、残存規模は長軸1.26m以上、短軸0.97m以上、深さ0.16mである。長軸方位はN-90°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第34号土壙 (第84図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第33号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。また、第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南東半分程度を記録できなかった。平面形は楕円形で、残存規模は長軸0.81m、短軸0.66m、深さ0.20mである。長軸方位

はN-90°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第35号土壙 (第84図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、一部南東隅を記録できなかった。平面形は不整円形で、規模は長軸1.17m、短軸0.97m以上、深さ0.09mと浅い。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第36号土壙 (第84図)

調査区中央東側のJ-9グリッドに位置する。第42・44号土壙と隣接している。また第3号住居跡の壁周溝を切っている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.89m、短軸0.75m、深さ0.26mである。長軸方位はN-69°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第37号土壙 (第84図)

調査区中央東側のI-9グリッドに位置する。第3号住居跡、第1号掘立柱建物跡と重複し、本土壙が両者よりも新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.63m、短軸0.69m、深さ0.36mである。長軸方位はN-79°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

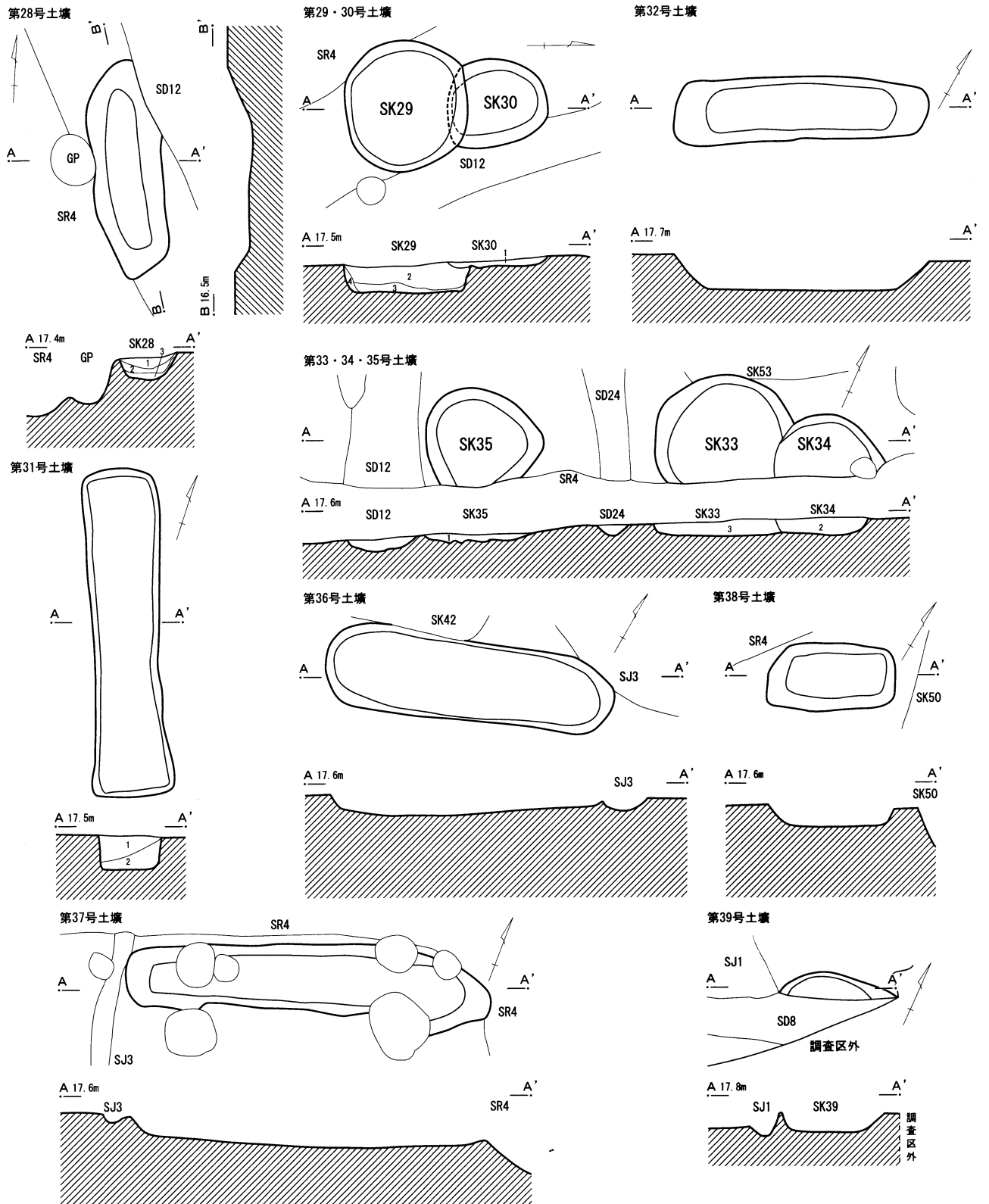
第38号土壙 (第84図)

調査区中央のJ-8グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.26m、短軸0.64m、深さ0.25mである。長軸方位はN-59°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第39号土壙 (第84図)

調査区南側のM-9グリッドに位置する。第1号住居跡と隣接し、第8号溝跡と本土壙の半分以上重複し、本土壙が第8号溝跡を壊しているが、同溝跡の方が深いために残存率が低い。平面形は楕円形と推定されて、残存規模は長軸1.17m、短軸0.25m、深さ0.19mである。長軸方位はN-67°



第28号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック微量
- 2 褐色土 ロームブロック少量・灰白色粘土ブロック(2~3cm)微量
- 3 褐色土 ロームブロック少量・灰白色粘土ブロック(2~3cm)多量

第29・30号土壌

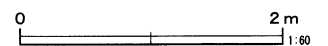
- 1 褐色土 ロームブロック少量
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 褐色土 ロームブロック微量
- 4 褐色土 ソフトロームブロック多量

第31号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック少量
- 2 褐色土 ロームブロック多量

第33・34・35号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック少量 [SK35]
- 2 褐色土 ロームブロック少量 [SK34]
- 3 褐色土 ロームブロック少量・ソフトロームブロック(10cm大) [SK33]



第84図 土壌(3)

—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第40号土壙 (第85図)

調査区南側のM—8グリッドに位置する。第2住居跡の南西角と重複し、本土壙の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸1.21m、短軸0.67m以上、深さ0.20mである。長軸方位はN—90°—Eを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第41号土壙 (第85図)

調査区南東側のJ—9グリッドに位置する。第42号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.98m、短軸0.84m、深さ0.52mである。長軸方位はN—7°—Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第42号土壙 (第85図)

調査区南東側のJ—9グリッドに位置する。第41号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.53m以上、短軸0.73m、深さ0.12mである。長軸方位はN—70°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第43号土壙 (第85図)

調査区中央東側のI—8・9グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、本土壙が後出する可能性が高い。平面形は隅丸方形で、規模は長軸2.07m、短軸0.67m、深さ0.30mである。長軸方位はN—69°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第44号土壙 (第85図)

調査区南東側のJ—9グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、本土壙が後出する可能性が高い。平面形は長方形で、規模は長軸2.20m、短軸0.72m、深さ0.36mである。長軸方位はN—82°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第45号土壙 (第85図)

調査区中央東側のI・J—9グリッドに位置する。第3号住居跡を壊している。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.57m、短軸0.64m、深さ0.12mである。長軸方位はN—53°—Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第46号土壙 (第85図)

調査区中央南側のL—8グリッドに位置する。第47号土壙と近接し平行している。第2号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、西端を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.16m以上、短軸0.52m、深さ0.22mである。長軸方位はN—65°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第47号土壙 (第85図)

調査区中央南側のL・M—8グリッドに位置する。第48号土壙と近接し平行している。第2号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、西端を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.18m以上、短軸0.52m、深さ0.16mである。長軸方位はN—65°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第48号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ・K—9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸4.06m、短軸0.58m、深さ0.19mである。長軸方位はN—65°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

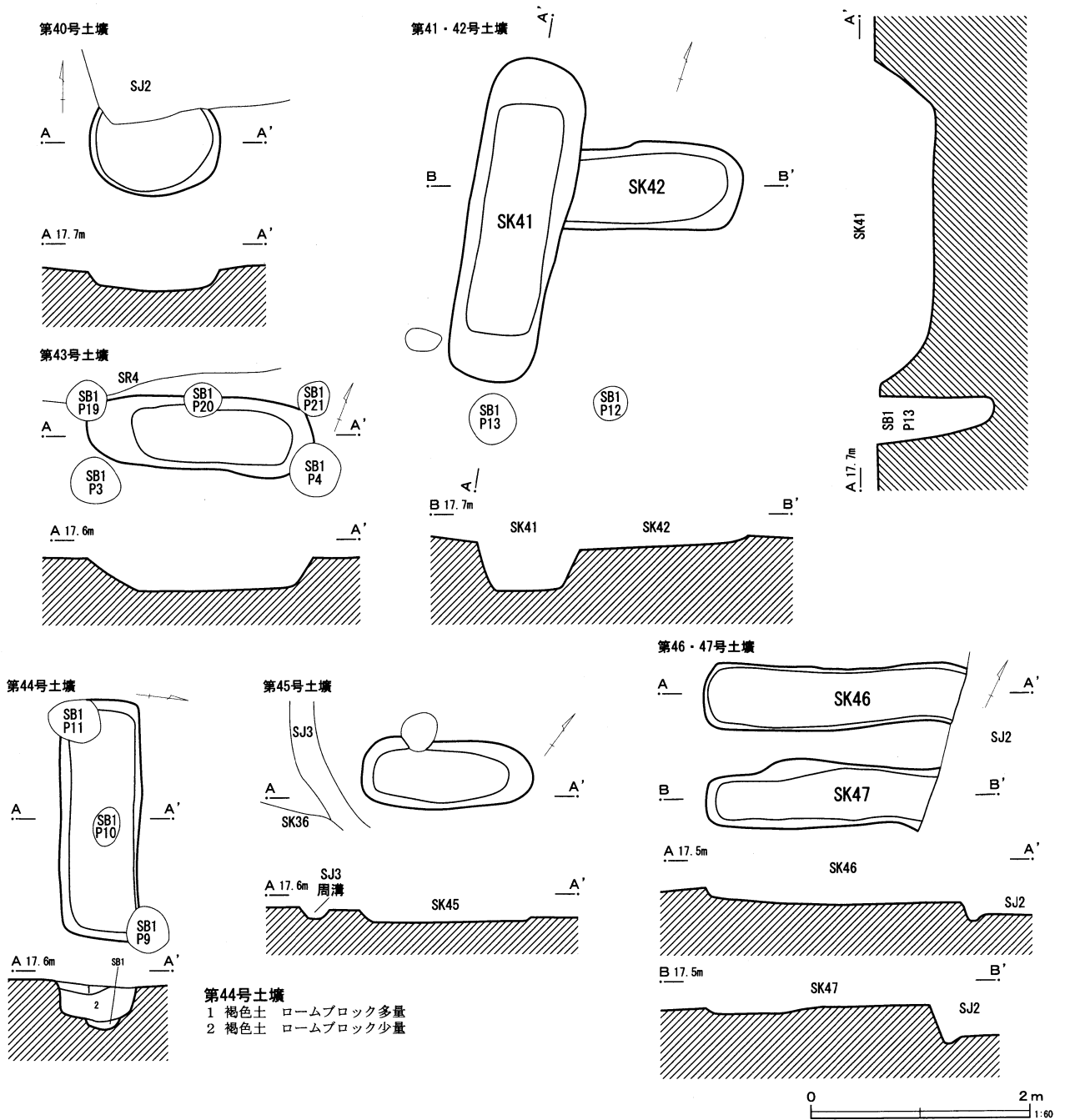
第49号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ・K—9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.92m、短軸0.54m、深さ0.28mである。長軸方位はN—62°—Eを指す。

出土遺物は中近世の土器片がある。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第50号土壙 (第86図)

調査区中央南東側のJ—8グリッドに位置す



第85図 土壌（4）

る。第25号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。また、第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、北西端を記録できなかった。北から2.84mのところ、一段高くなり、2基の土壌が重複しているとも考えられる。平面形は長方形で、規模は長軸3.30m以上、短軸1.01m、深さ北側0.55m、南側0.20mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。

第51号土壌 欠番

第52号土壌 欠番

第53号土壌（第86図）

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第33号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸1.72m、短軸0.63m、深さ0.24mである。長軸方位はN-56°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第54号土壙 (第86図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南半分を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.40m、短軸0.33m以上、深さ0.07mである。長軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第55号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。第24号溝跡、第59号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.07m、短軸0.78m、深さ0.26mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第56号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。第60号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.68m以上、短軸0.57m、深さ0.17mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第57号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。第66・67号土壙と重複し、本土壙の方が両者よりも古い(第87図)。東から2.92mのところ、一段高くなり、2基の土壙が重複しているとも考えられる。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸6.39m、短軸0.63m、深さ西側0.25m、東側0.45mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

遺物は混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第58号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。平面形は径0.95mの円形で、深さは0.40mである。

遺物は出土しなかった

第59号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。第55・60号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.40m以上、短軸0.76m、深さ0.32mである。長軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第60号土壙 (第86図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。第56・59号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.14m、短軸0.66m、深さ0.23mである。長軸方位はN-27°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第61号土壙 (第87図)

調査区中央南東側のJ-9グリッドに位置する。第65号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.96m以上、短軸0.70m、深さ0.28mである。長軸方位はN-58°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第62号土壙 (第87図)

調査区南東側のJ-10グリッドに位置する。第63号土壙と近接し平行している。平面形は隅丸長方形を基本とするが、中央付近で括れて東側が幅広になる。規模は長軸1.63m、短軸0.42m、深さ0.26mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第63号土壙 (第87図)

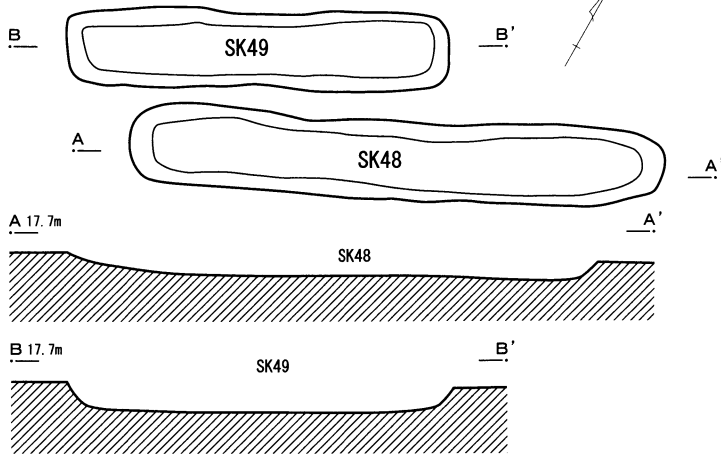
調査区南東側のJ・K-10グリッドに位置する。第62号土壙と近接し平行している。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.63m以上、短軸0.60m、深さ0.24mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

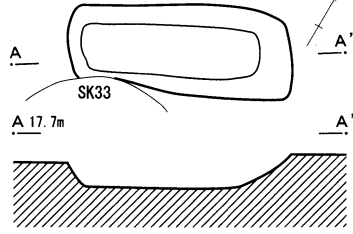
第64号土壙 (第87図)

調査区南東側のJ-9・10グリッドに位置する。第51号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明で

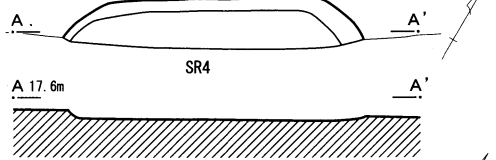
第48・49号土壌



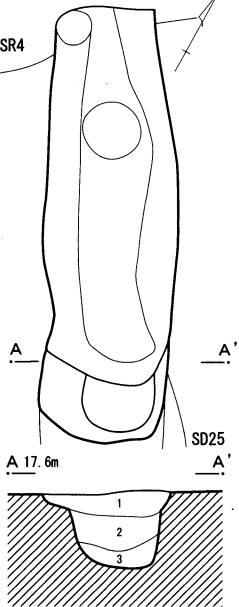
第53号土壌



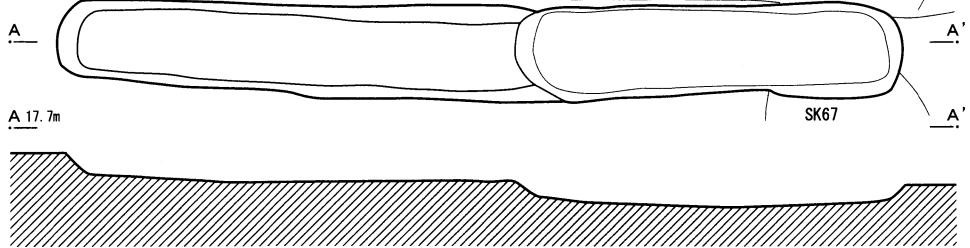
第54号土壌



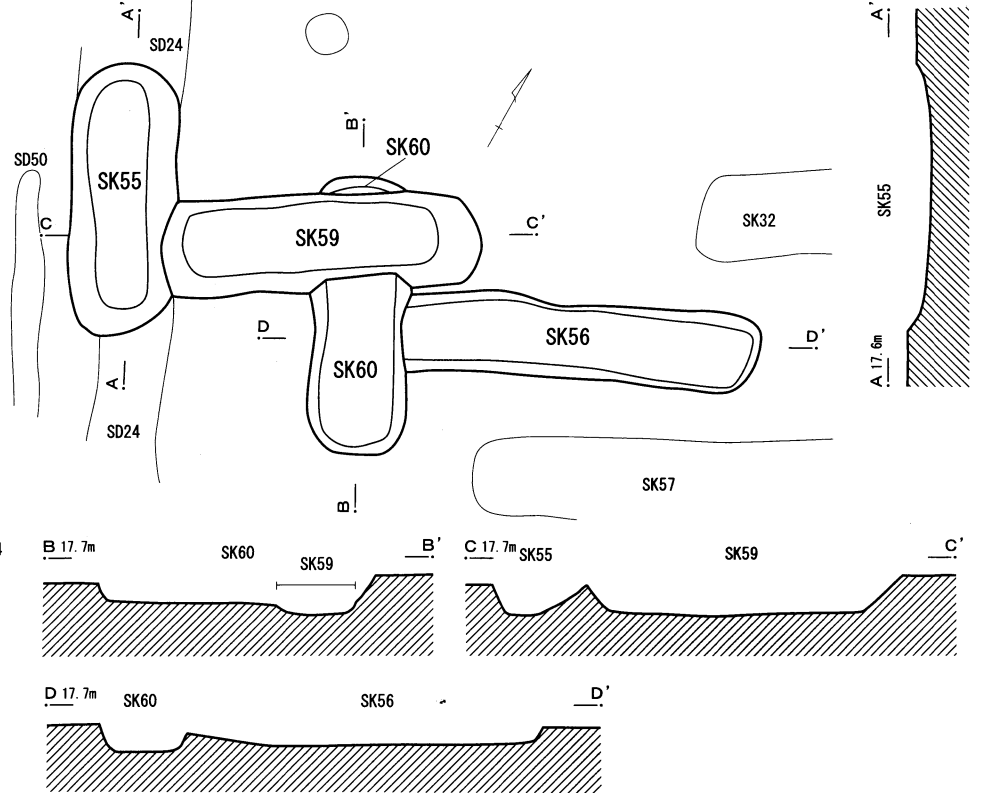
第50号土壌



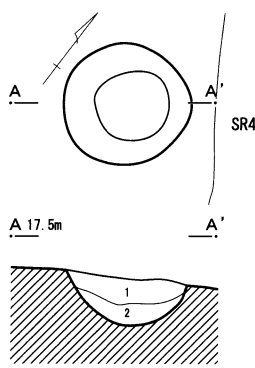
第57号土壌



第55・56・59・60土壌



第58号土壌

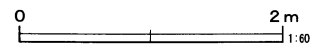


第50号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量
- 2 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1cm大)多量
- 3 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量

第58号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量
- 2 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(2~3cm大)少量



第86図 土壌(5)

ある。平面形は不整円形で、規模は長軸1.29m、短軸0.73m以上、深さ0.22mである。長軸方位はN-63°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第65号土壌 (第87図)

調査区南東側のJ-9グリッドに位置する。第61号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸台形で、規模は長軸1.59m、長辺0.97m、短辺0.52m、深さ0.25mである。長軸方位はN-58°-Eを指す。

出土遺物は中近世のかわらけ・土器片がある。

第66号土壌 (第87図)

調査区南東側のJ-9・10グリッドに位置する。第57号土壌と重複し、同土壌より新しい。また69・70号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.34m、短軸0.63m、深さ0.36mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第67号土壌 (第87図)

調査区南東側のJ-9・10グリッドに位置する。第57号土壌重複し、同土壌より新しい。また第51号溝跡、第71号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.16m以上、短軸0.52m、深さ0.22mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第68号土壌 (第87図)

調査区南東側のK-9グリッドに位置する。第26号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.06m、短軸0.67m、深さ0.12mである。長軸方位はN-71°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第69号土壌 (第87図)

調査区南東側のJ-9・10グリッドに位置する。第66・70号土壌と重複しているが、新旧関係は不

明である。また、第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、東側を記録できなかった。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸1.03m以上、短軸0.93m以上、深さ0.18mである。長軸方位はN-59°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第70号土壌 (第87図)

調査区南東側のJ-10グリッドに位置する。第66・69号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。また、第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、東側を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.99m以上、短軸0.82m、深さ0.32mである。長軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第71号土壌 (第87図)

調査区南東側のJ-10グリッドに位置する。第67号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。また、第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、東側を記録できなかった。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.45m以上、短軸0.73m、深さ0.24mである。長軸方位はN-71°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第72号土壌 (第87図)

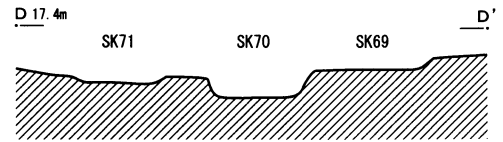
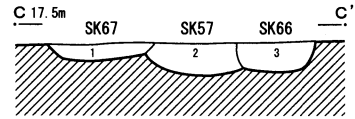
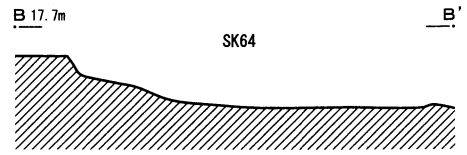
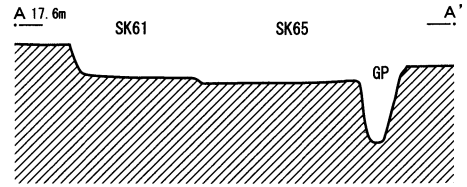
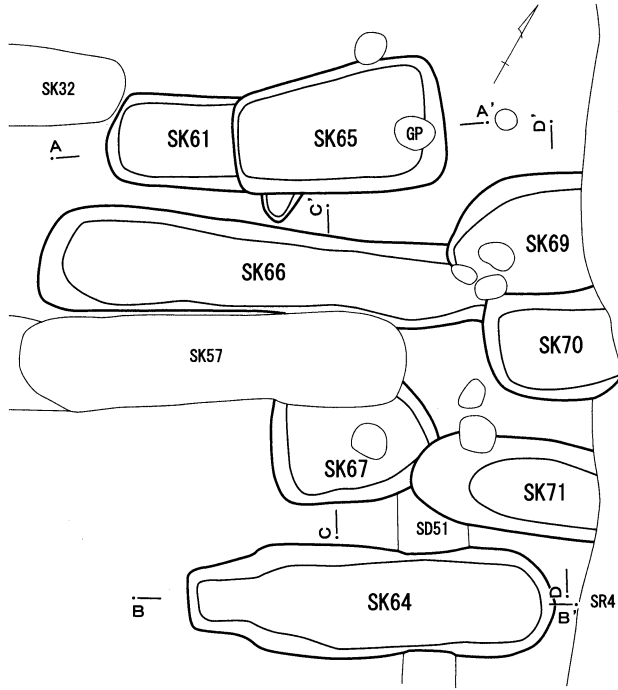
調査区中央南側のK-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.50m、短軸0.67m、深さ0.28mである。長軸方位はN-21°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

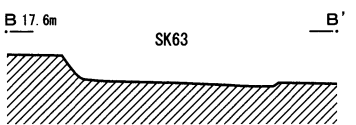
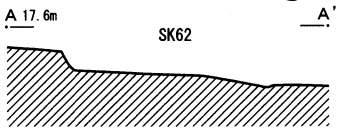
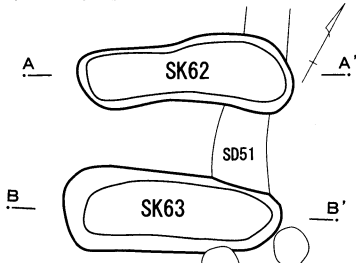
第73号土壌 (第87図)

調査区中央南側のK-8グリッドに位置する。第5号方形周溝墓と重複し、同方形周溝墓より新しい。平面形は長方形で、規模は長軸1.71m以上、短軸1.18m、深さ0.29mである。長軸方位はN-13°-Wを指す。

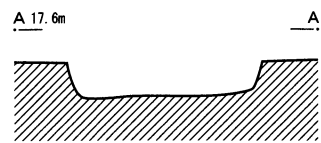
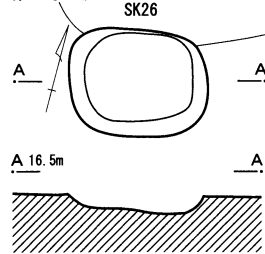
遺物は出土しなかった。



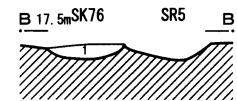
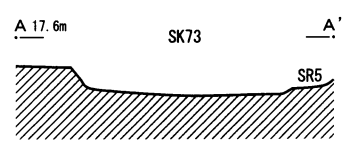
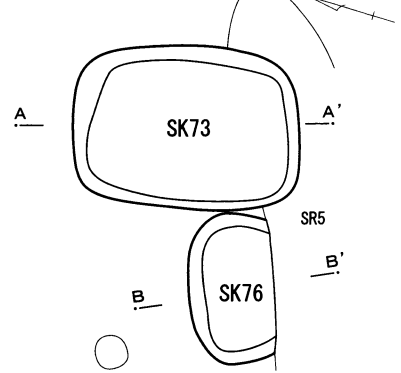
第62・63号土壌



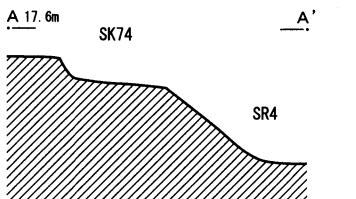
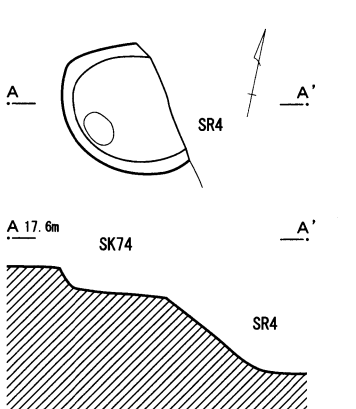
第68号土壌



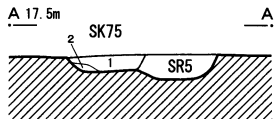
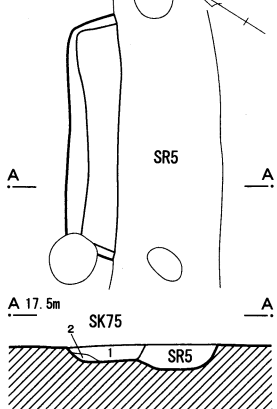
第73・76号土壌



第74号土壌



第75号土壌



第57・66・67号土壌

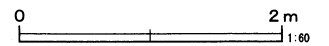
- 1 褐色土 ロームブロック少量 [SK67]
- 2 褐色土 ロームブロック多量 [SK57]
- 3 褐色土 ロームブロック微量 [SK66]

第75号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量
- 2 褐色土 ロームブロック(1~2cm大)多量

第76号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1cm大)少量



第87図 土壌 (6)

第74号土壌 (第87図)

調査区中央南側のK-8グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、東端を記録できなかった。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸0.90m以上、短軸0.91m、深さ0.22mである。長軸方位はN-83°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第75号土壌 (第87図)

調査区中央南側のJ・K-7グリッドに位置する。第5号方形周溝墓と重複し、同方形周溝墓より新しい。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸1.80m、短軸0.35m以上、深さ0.19mである。長軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第76号土壌 (第87図)

調査区中央南側のK-8グリッドに位置する。第5号方形周溝墓と重複し、同方形周溝墓より新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸1.12m、短軸0.63m以上、深さ0.10mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第77号土壌 (第88図)

調査区中央南側のK・L-8グリッドに位置する。第78号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.45m以上、短軸0.69m、深さ0.31mである。長軸方位はN-28°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の陶器片がある。遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第78号土壌 (第88図)

調査区中央南側のK-8グリッドに位置する。第77号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸3.13m以上、短軸0.81m、深さ0.35mである。長軸方位はN-23°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第79号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸2.14m、短軸0.46m、深さ0.23mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第80号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.48m、短軸1.03m、深さ0.22mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第81号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.44m、短軸0.91m、深さ0.23mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第82号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。第83号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。平面形は長方形で、規模は長軸3.52m、短軸0.57m、深さ0.41mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

出土遺物は、中近世のかわらけ・土器小片がある。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

第83号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。第82・84号土壌と重複し、両者より本土壌の方が古い。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.92m、短軸0.76m、深さ0.44mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第84号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。第83・85号土壌と重複し、第83号土壌より新しく、第85号土壌と新旧関係は不明である。平面形は長

方形で、規模は長軸3.42m以上、短軸0.61m、深さ0.42mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる縄文土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

第85号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。第84号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸0.79m、短軸0.37m以上、深さ0.24mである。長軸方位はN-12°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第86号土壌 (第88図)

調査区南東側のK-8・9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、北側を記録できなかった。平面形は長方形と推定され、規模は長軸0.75m以上、短軸0.58m以上、深さ0.10mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第87号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.14m、短軸0.94m、深さ0.16mである。長軸方位はN-17°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第88号土壌 (第88図)

調査区南側のL-8グリッドに位置する。平面形は径0.91mの円形で、深さは0.09mである。

遺物は出土しなかった。

第89号土壌 (第88図)

調査区南側のL-7グリッドに位置する。平面形は不定形で、西側が窪んでいる。規模は長軸1.12m、短軸0.96m、深さ0.58mである。長軸方位はN-2°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第90号土壌 (第88図)

調査区中央南側のK・L-7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸2.02m、短軸1.74m、深さ0.50mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第91号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.17m、短軸0.82m、深さ0.25mである。長軸方位はN-55°-Eを指す。覆土は褐色土で、近世期のものである。

遺物は鉄製品(第105図5)が出土した。

第91号土壌出土遺物 (第105図5)

5は刀で、切先と茎部が欠損している。

第92号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-8グリッドに位置する。第93・94号と重複し、第93号土壌より古く、第94号土壌より新しい。また第103号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形と推定されて、残存規模は長軸0.67m、短軸0.90m、深さ0.13mである。長軸方位はN-27°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

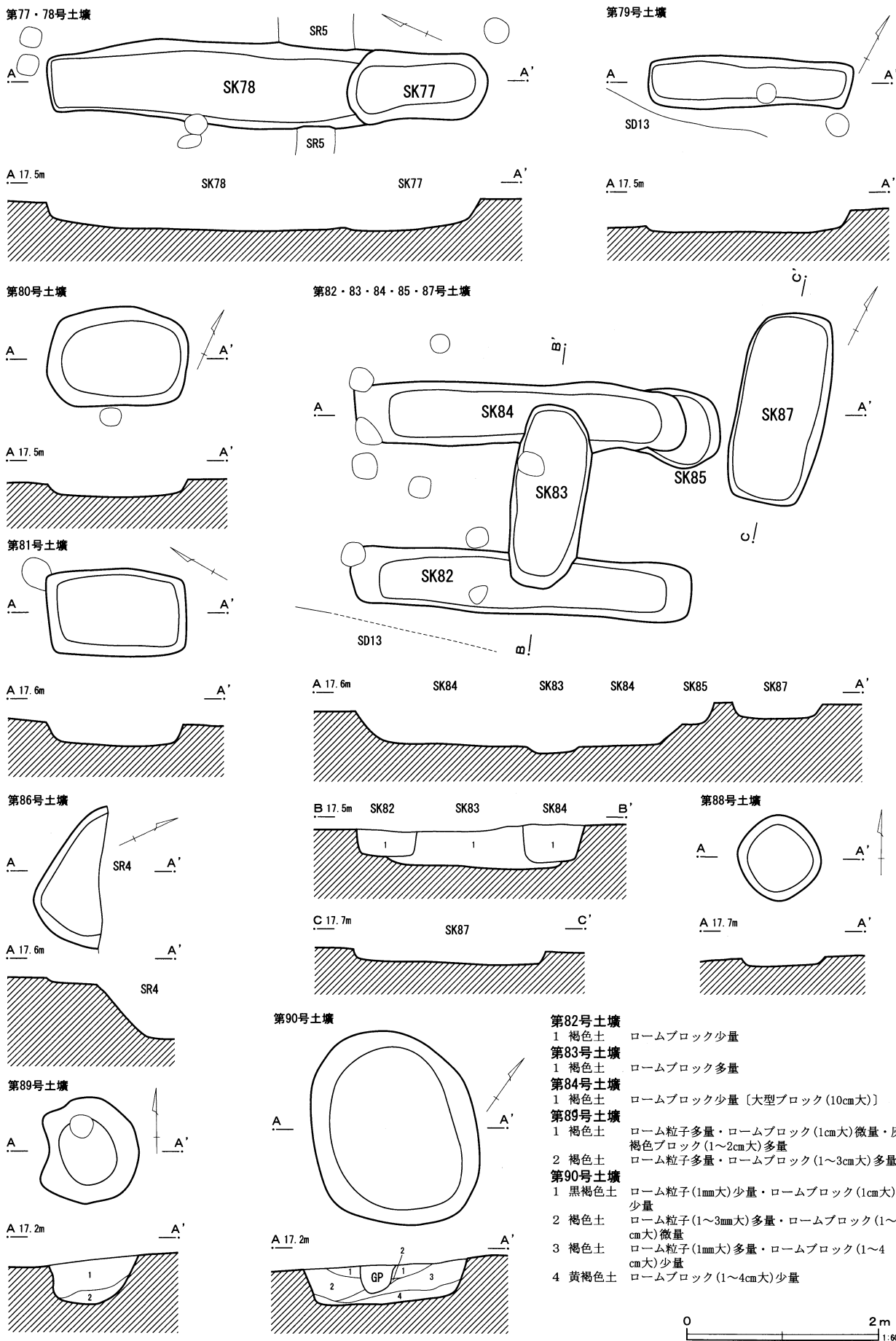
第93号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-7・8グリッドに位置する。第92号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。また第103号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.98m以上、短軸0.91m、深さ0.14mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

出土遺物は、中近世のかわらけ片である。また、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第94号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-8グリッドに位置する。第92号土壌と重複し、本土壌の方が古い。また第113号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。



第88図 土壌 (7)

平面形は楕円形で、規模は長軸2.52m以上、短軸1.00m以上、深さ0.07mである。長軸方位はN-33°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の焙烙片・土器片がある。

第95号土壌 (第91図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第96・102号土壌と重複し、本土壌の方が古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.30m以上、短軸0.81m以上、深さ0.16mである。長軸方位はN-28°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の焙烙片・陶器片がある。また、混入と思われる縄文土器小片が出土した。

第96号土壌 (第91図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第95号土壌と重複し、本土壌の方が新しいが、第95号土壌の方が深いために南西辺は記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.78m以上、短軸0.72m、深さ0.20mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第97号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第98号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形を基本として、南側がわずかに膨らむ。覆土はオリーブ褐色土で、近代の時期のものと考えられる。規模は長軸2.25m、短軸0.82m、深さ0.49mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第98号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第97号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土は第97号土壌と同様に、オリーブ褐色土で、近代の時期のものと考えられる。平面形は隅丸長方形であるが、中央東側で張り出し部をもつ可能性がある。規模は長軸3.81m、短軸0.76m、深さ0.19mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第99号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第100号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。また第27号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.31m、短軸1.78m、深さ0.29mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第100号土壌 (第90図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第99号土壌と重複し、本土壌の方が古い。また第27号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。第99号土壌を掘削しているうちに、隅丸長方形の土壌になってしまった。本土壌の性格は、底面が平坦で、落し穴を連想させる。しかし、単独で分布している上に、底面には逆茂木を設置するためのピットが存在していないことから、落し穴とは考えにくい。

覆土は縄文時代のもので、前期の土器が多いことから、同期に構築されたと考える。

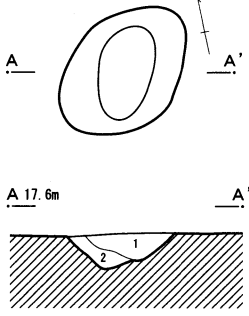
平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.40m、短軸0.84m、深さ0.62mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

出土遺物は縄文土器片があり、紙幅の都合上、第120図に掲載した。

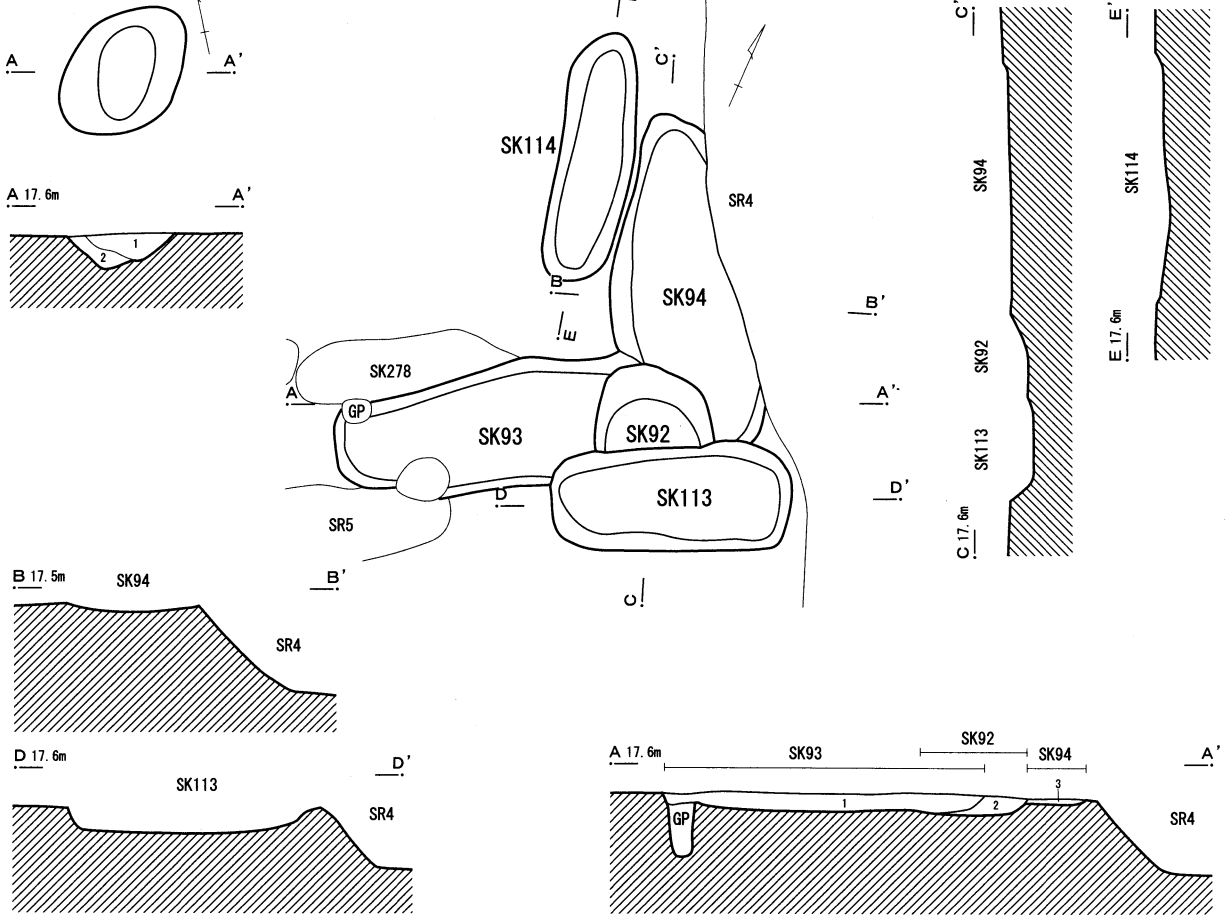
第100号土壌出土遺物 (第120図1~4)

出土遺物のうち図示できたのは第120図1~4の4点である。いずれも胎土に繊維を含む縄文時代前期関山式土器で、1は単方向単節斜縄文に加え、上位に櫛状工具によるコンパス文が見える。また、2は組紐の組み違い原体を回転施文している。さらに、3は、いわゆる正反の合の回転痕だが、正縄の圧痕が反縄をまたいで連続する気配も見えることから、附加条法によって製作された原体である可能性もある。そして、4は組紐の回転痕であるが、左上に竹管工具による鋸歯文らしき

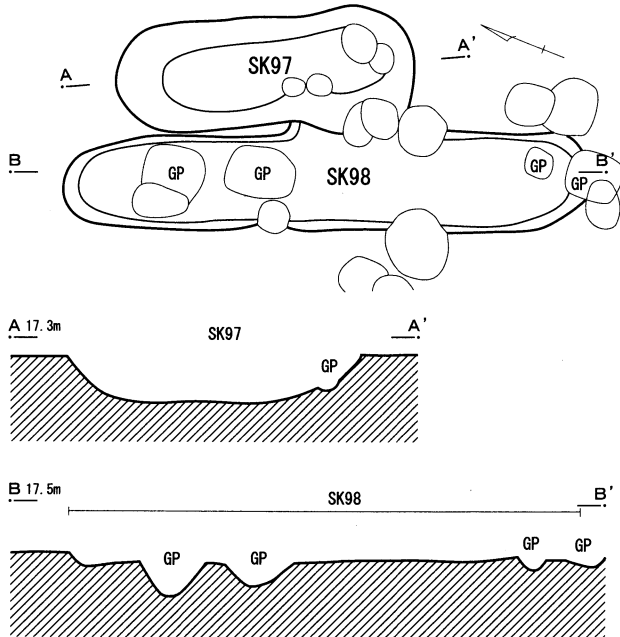
第91号土壌



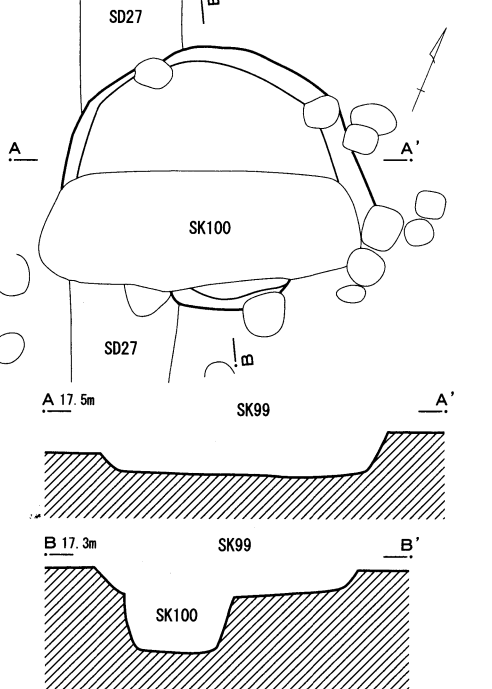
第92・93・94・113・114号土壌



第97・98号土壌



第99号土壌

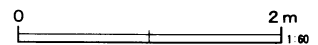


第91号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック微量
- 2 褐色土 ロームブロック多量

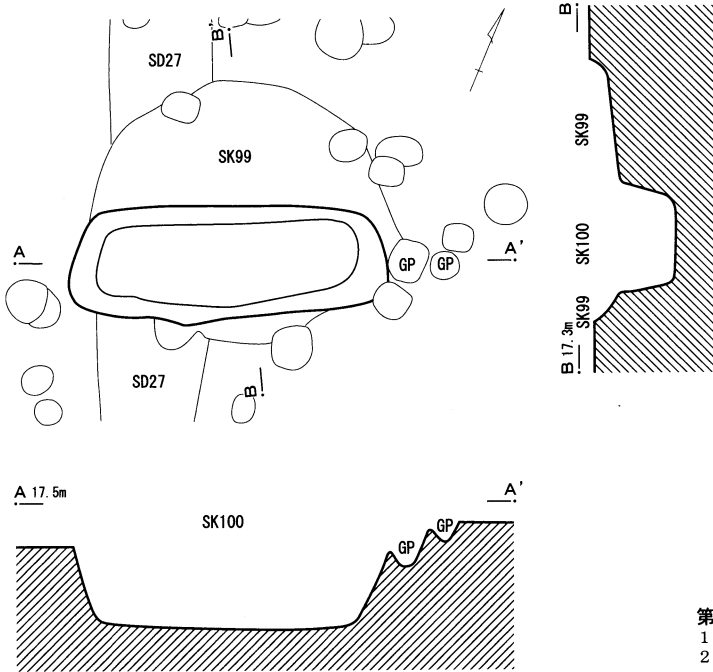
第92・93・94号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック少量 [SK93]
- 2 褐色土 ロームブロック多量 [SK92]
- 3 褐色土 ロームブロック少量 [SK94]

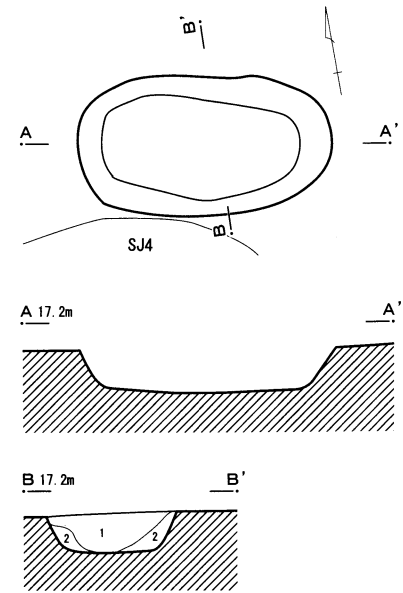


第89図 土壌 (8)

第100号土壇

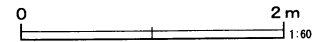


第110号土壇



第110号土壇

1 暗褐色土 ローム粒子(1~2mm大)少量
2 暗褐色土 ローム粒子(1~3mm大)少量・ロームブロック(1cm大)微量



第90図 第100・110号土壇

文様が残されている。

第101号土壇 欠番

第102号土壇 (第91図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第95号土壇と重複し、本土壇の方が新しい。第4号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、西端を記録できなかった。覆土はオリブ褐色土で、近代の時期のものと考えられる。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.17m以上、短軸0.40m、深さ0.26mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。なお、東端から0.63mのところ段差があり、土壇2基が重複している可能性もある。

遺物は、混入と思われる中近世の陶磁器片と弥生土器片が出土した。

第103号土壇 (第91図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。覆土はオリブ褐色土で、近代の時期のものと考えられる。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.26m、

短軸0.55m、深さ0.15mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第104号土壇 (第91図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第106号土壇と重複し、本土壇の方が古い。また、第106号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.72m、短軸1.14m、深さ0.62mである。長軸方位はN-36°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第105号土壇 (第91図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。第4号住居跡、第104・106号土壇と重複し、本土壇の方が新しい。しかし、調査は同住居跡を優先し、時間的制約から同時に土壇群を掘削したため、元々の形ではないが、あまり大差はない平面形と考えられる。覆土はオリブ褐色土で、近代の時

期のものと考えられる。平面形は残存部で隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.52m、短軸0.39m、深さ0.25mである。長軸方位はN-17°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片、中近世の焙烙片が出土した。

第106号土壙 (第91図)

調査区中央のJ-6・7グリッドに位置する。第104・105号土壙と重複し、第106土壙の方が新しく、第104号土壙とは新旧関係は不明である。また、第4号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、北辺をわずかに記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.89m、短軸0.96m以上、深さ0.08mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第107・108号土壙 (第91図)

調査区中央のJ・K-6・7グリッドに位置する。第108号土壙とほぼ重なっているが、新旧関係は不明である。第107号土壙の北西隅と第108号土壙の北辺は元々の形に由来するが、その他は切り合っている可能性があるために、両者の平面形を正確には把握できない。規模は最大のもので提示する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.89m、短軸0.69mである。北辺から北側の段差までは0.19mである。深さはそれぞれ、0.14、0.08mである。長軸方位はN-56°-Eを指す。

両土壙ともに、遺物は出土しなかった。

第109号土壙 (第91図)

調査区中央南側のK-7グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.41m、短軸1.17m、深さ0.20mである。長軸方位はN-57°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第110号土壙 (第90図)

調査区中央のJ-6・7グリッドに位置する。確認当初より、縄文時代の土壙として調査を行った。長楕円形を呈し、ややなだらかに底面に

至る。覆土中より早期後葉の条痕文系土器が主体的に出土しており、同期に構築されたものと考えられる。本土壙の性格は、覆土に焼土類があまり顕著ではなく、炉穴とは認めがたい。また規模や形態から、墓壙とも考えられるが、確定はできなかった。

平面形は長楕円形で、規模は長軸1.92m、短軸1.05m、深さ0.36mである。長軸方位はN-83°-Wを指す。

出土遺物は縄文土器片が少量あるが、紙幅の都合上、第120図に掲載した。

第110号土壙出土遺物 (第120図5~7)

出土遺物は3点を図示したが、いずれも縄文時代早期条痕文系の土器片である。工具や粘土貼付による文様は認められず、浅く粗い条痕が全面に残るのみである。裏面の条痕は、7では認められず、5・6でも表に比べて粗い。粘質感のある胎土の特徴や条痕の施文手法、表裏の密度差からすると、同系でも後半期に製作されたものと推定できる。

第111号土壙 (第91図)

調査区中央のI・J-7グリッドに位置する。第112号土壙と近接し平行している。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.19m、短軸0.54m、深さ0.08mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

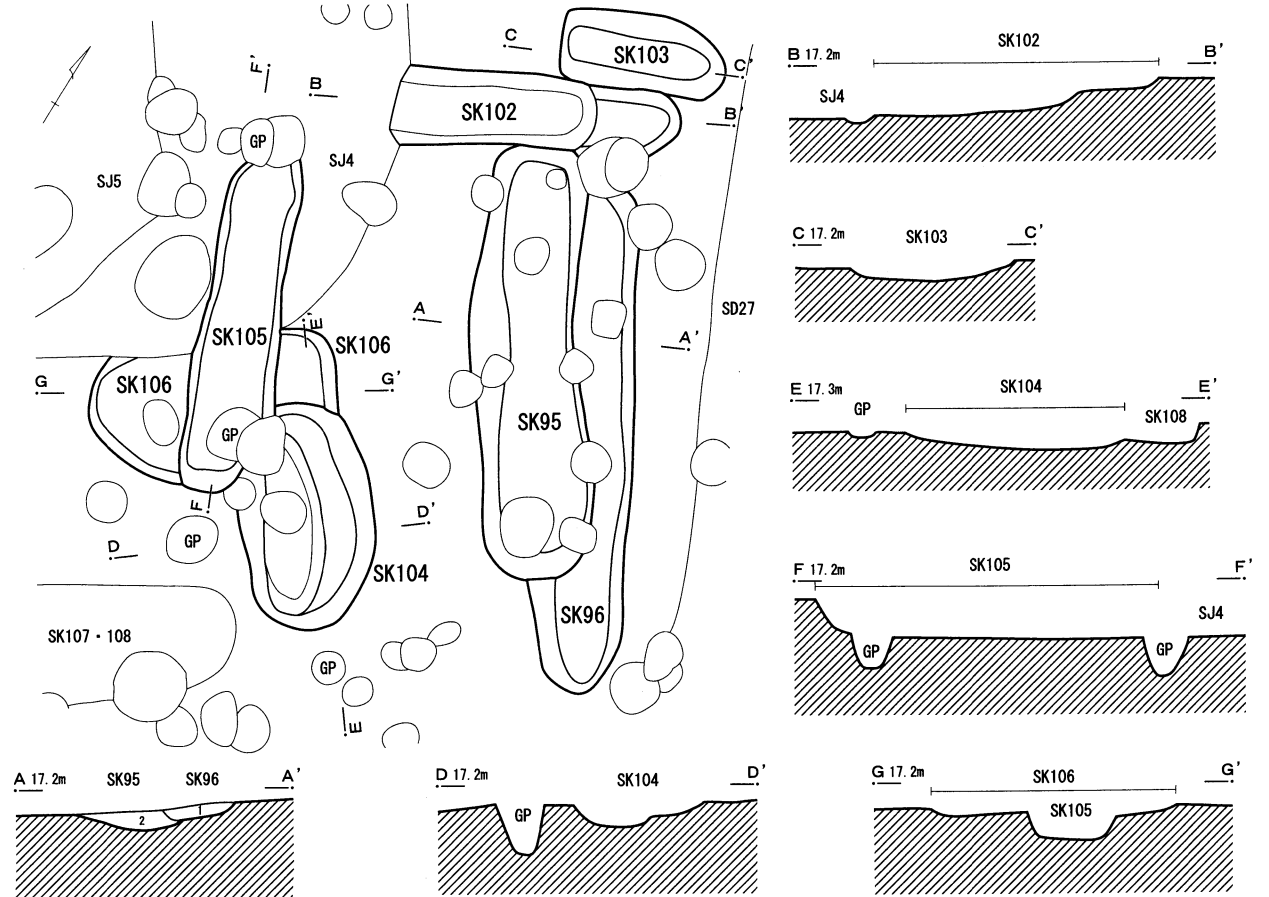
第112号土壙 (第91図)

調査区中央のI-7グリッドに位置する。第111号土壙と近接し平行している。第33号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸2.55m以上、短軸0.75m、深さ0.18mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。

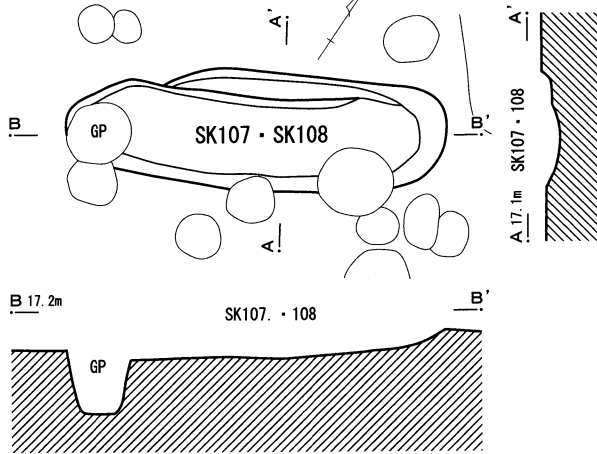
出土遺物は中近世の陶磁器片がある。また、混入と思われる縄文土器小片、弥生土器片が出土した。

第113号土壙 (第89図)

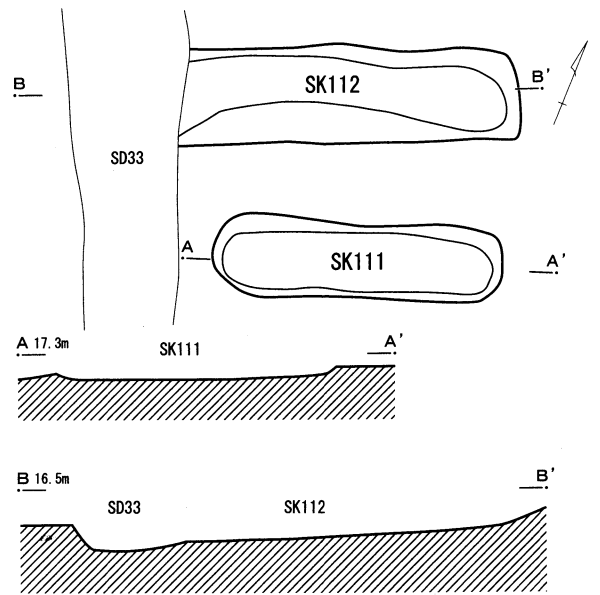
調査区中央のJ-8グリッドに位置する。第92~94号土壙と重複しているが、新旧関係は不明



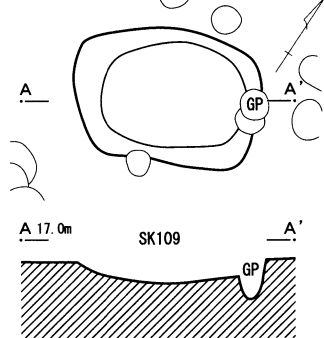
第107・108号土壌



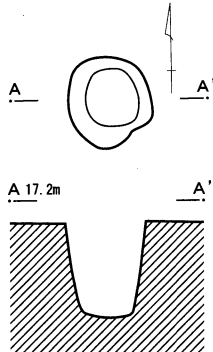
第111・112号土壌



第109号土壌

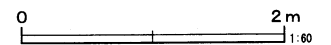


第115号土壌



第95・96号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子少量・灰褐色土ブロック(1cm大)少量 [SK96]
- 2 褐色土 ローム粒子多量・灰褐色土ブロック(1cm大)多量 [SK95]



第91図 土壌 (9)

である。平面形は長方形で、規模は長軸1.80m、短軸0.79m、深さ0.21mである。長軸方位はN-88°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第114号土壌 (第89図)

調査区中央のJ-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.92m、短軸0.57m、深さ0.62mである。長軸方位はN-13°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第115号土壌 (第91図)

調査区中央のJ-7グリッドに位置する。平面形は南東がわずかに凹む不整円形で、規模は長軸0.69m、短軸0.63m、深さ0.68mである。長軸方位はN-2°-Eを指す。

出土遺物は近世の陶磁器片がある。

第116号土壌 (第92図)

調査区南側のL-7グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.80m、短軸0.93m、深さ0.14mである。長軸方位はN-15°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第117号土壌 (第92図)

調査区中央のJ-7・8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.65m、短軸0.69m、深さ0.15mである。長軸方位はN-15°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第118号土壌 (第92図)

調査区中央のI・J-7グリッドに位置する。第22・27号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸4.68m以上、短軸0.66m、深さ0.12mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第119号土壌 (第92図)

調査区中央南側のK-6グリッドに位置する。

第30号溝跡とわずかに接している。覆土はオリーブ褐色土で、近代の時期のものと考えられる。平面形は長方形で、規模は長軸1.21m、短軸1.06m、深さ0.17mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第120号土壌 (第92図)

調査区中央南側のK-6グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.12m、短軸0.69m、深さ0.08mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片、奈良・平安時代の土師器片が出土した。

第121号土壌 (第92図)

調査区中央南側のK-6グリッドに位置する。平面形は方形で、規模は長軸0.90m、短軸0.69m、深さ0.05mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第122号土壌 (第92図)

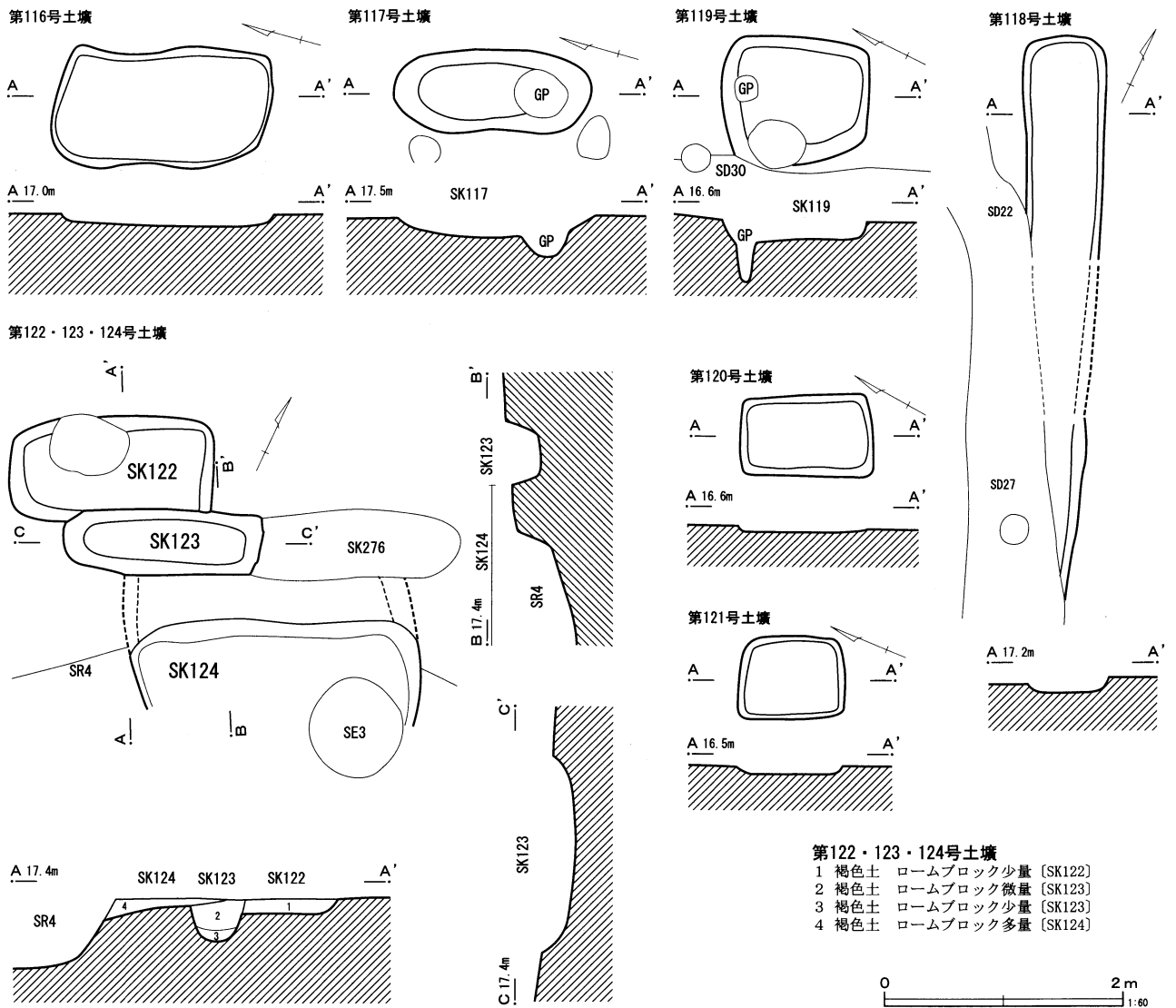
調査区東側のI-9グリッドに位置する。第123号土壌と重複し、本土壌の方が古い。平面形は長方形で、規模は長軸1.68m、短軸0.78m以上、深さ0.14mである。長軸方位はN-63°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の焙烙片である。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第123号土壌 (第92図)

調査区東側のI-9グリッドに位置する。第122・124号土壌と重複し、第122号土壌の方が古く、第124号土壌の方が新しい。また、第276号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.65m以上、短軸0.54m、深さ0.34mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片である。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。



第92図 土壌 (10)

第124号土壌 (第92図)

調査区東側の I-9 グリッドに位置する。第123号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南東側を記録できなかった。本土壌は北側が非常に浅く、第4号方形周溝墓の上端で急激に深くなるが、北側の浅い部分は別土壌が重複しているとも考えられる。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸2.10m、短軸0.63m以上、深さ0.44mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片である。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第125号土壌 (第93図)

調査区中央の I-8 グリッドに位置する。第126・202号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.56m、短軸0.73m、深さ0.14mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第126号土壌 (第93図)

調査区中央東側の I-8・9 グリッドに位置する。第125号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.34m、短軸0.72m、深さ0.18mである。長軸方位はN-54°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第127号土壌 (第93図)

調査区東側のH・I-9グリッドに位置する。第244号土壌と近接し平行している。第128・129号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.61m、短軸0.63m、深さ0.23mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第128号土壌 (第93図)

調査区東側のH-9グリッドに位置する。第151号土壌と近接し平行している。第127号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.25m以上、短軸0.73m、深さ0.25mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第129号土壌 (第93図)

調査区東側のH・I-9グリッドに位置する。第127号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.85m以上、短軸0.66m、深さ0.10mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第130号土壌 (第93図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第12号溝跡と重複し、本土壌の方が新しい。また、第135・273号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸2.58m、短軸0.72m、深さ0.39mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第131号土壌 (第93図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第132・133号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。

また、第135・138号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.77m以上、短軸0.49m、深さ0.42mで

ある。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第132号土壌 (第93図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第131号土壌と重複し、本土壌の方が古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.65m以上、短軸0.76m、深さ0.39mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第133号土壌 (第93図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第131号土壌と重複し、本土壌の方が古い。また、第269号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸2.68m、短軸1.30m、深さ0.15mである。長軸方位はN-15°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第134号土壌 (第94図)

調査区中央東側のI-7・8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.76m、短軸0.63m、深さ0.30mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

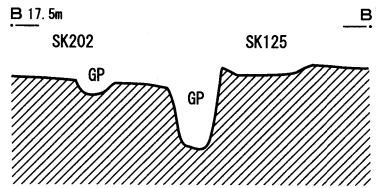
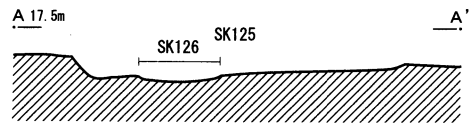
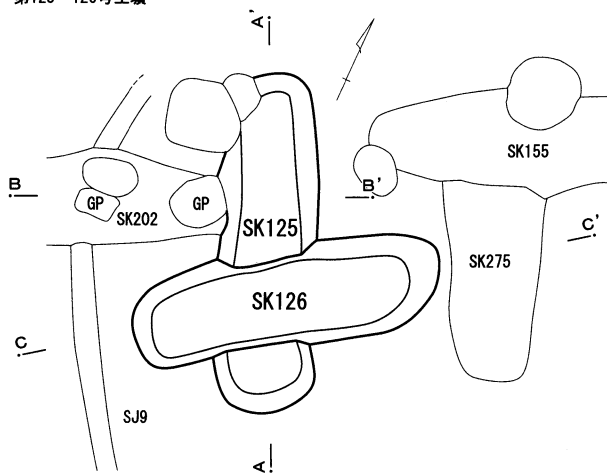
遺物は出土しなかった。

第135号土壌 (第94図)

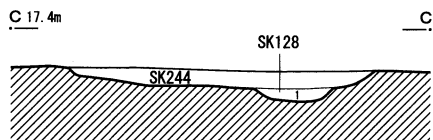
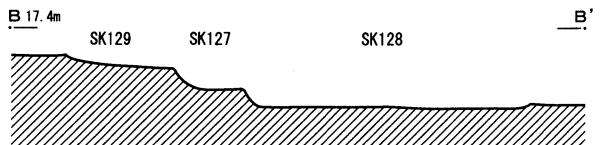
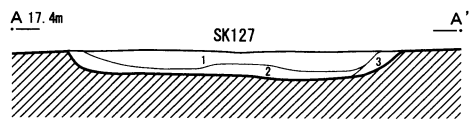
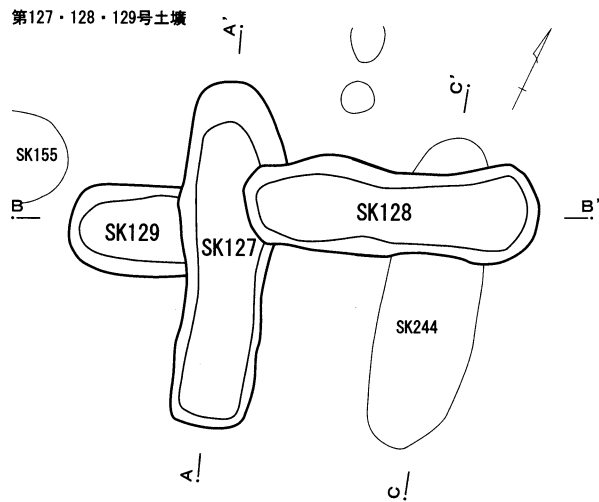
調査区中央東側のI-7・8グリッドに位置する。第136号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。第130・138・267号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は東西に長く、東側で少し南東へ弧を描いている。溝跡の様相を呈しているが、一連の土壌群の中で検出しており、発掘調査時の遺構名をそのまま使用した。規模は長軸5.11m以上、短軸0.90m、深さ0.26mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

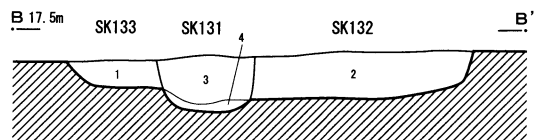
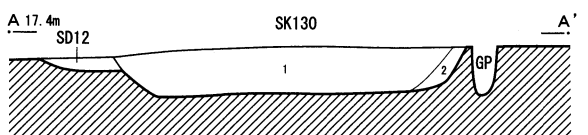
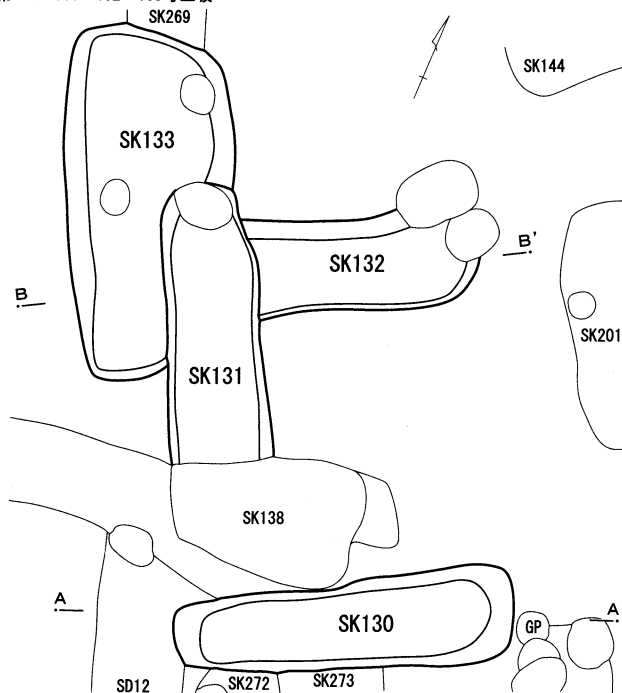
第125・126号土壌



第127・128・129号土壌



第130・131・132・133号土壌



第127号土壌

1 褐色土 ロームブロック微量

2 褐色土 ロームブロック少量・灰褐色土ブロック(1cm大)少量

第128号土壌

1 褐色土 ロームブロック少量

第130号土壌

1 褐色土 ロームブロック少量

2 褐色土 ロームブロック(3~5cm大)多量

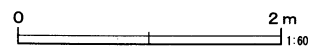
第131・132・133号土壌

1 褐色土 ロームブロック少量 [SK133]

2 褐色土 ロームブロック少量 [SK132]

3 褐色土 ロームブロック微量 [SK131]

4 褐色土 ロームブロック(2~3cm大)多量 [SK131]



第93図 土壌 (11)

第136号土壙 (第94図)

調査区中央東側のI-7・8グリッドに位置する。第135号土壙と重複し、本土壙の方が古い。また、第137号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。残存部分の平面形は台形状で、規模は長軸0.52m以上、短軸0.78m、深さ0.13mである。長軸方位はN-20°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第137号土壙 (第94図)

調査区中央東側のI-7・8グリッドに位置する。第136・270号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.92m以上、短軸0.63m、深さ0.18mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第138号土壙 (第94図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。平面形は東辺に張り出しをもつ台形で、規模は台形部の長軸1.32m、短軸0.96m、深さ0.53mである。張出部は長軸0.36m、深さ0.19mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第139号土壙 (第94図)

調査区中央のI-7グリッドに位置する。第33号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.48m、短軸0.73m、深さ0.12mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第140号土壙 (第94図)

調査区南側のL-6グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸0.78m、短軸0.45m、深さ0.07mである。長軸方位はN-40°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第141号土壙 (第94図)

調査区中央東側のI-7・8グリッドに位置す

る。攪乱によって北側の一部分を壊されている。北辺から0.47mのところから0.16mの段差があり、南東側が窄まっていることから、土壙2基が重複している可能性もある。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.36m、短軸1.32m、深さ0.23mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第142号土壙 (第94図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第143号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.50m、短軸1.11m、深さ0.38mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第143号土壙 (第94図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第146号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.47m以上、短軸0.75m、深さ0.48mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第144号土壙 (第95図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第145号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.47m、短軸0.81m、深さ0.27mである。長軸方位はN-54°-Eを指す。

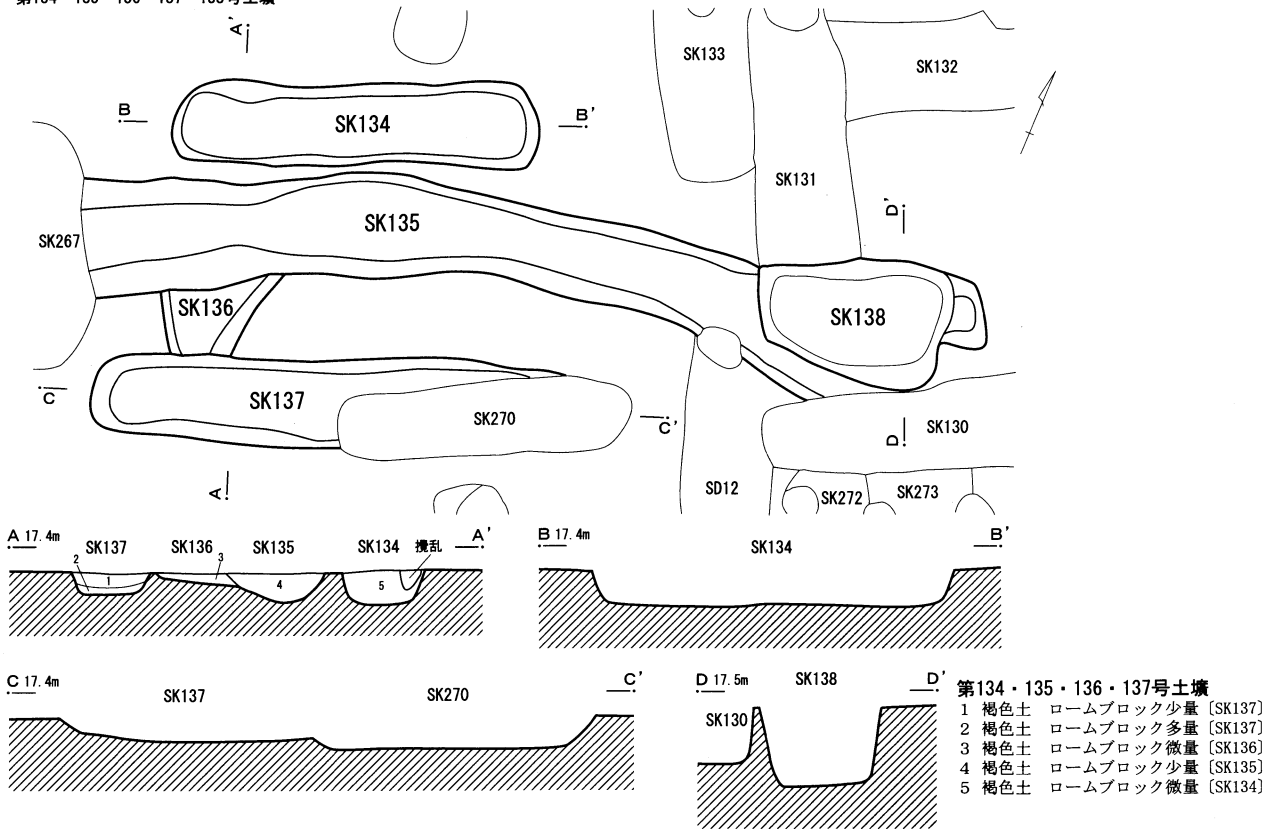
遺物は出土しなかった。

第145号土壙 (第95図)

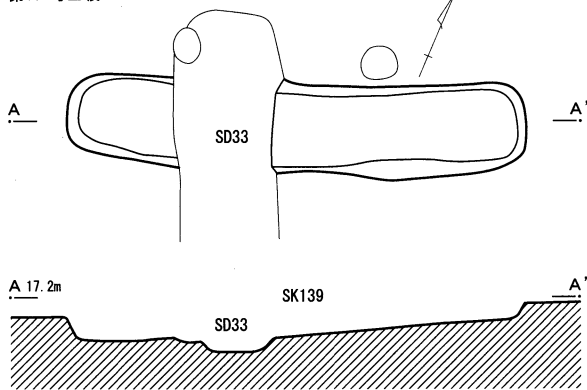
調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第34号溝跡・第144号土壙と重複し、本土壙の方が古い。平面形は不明で、規模は長軸0.61m以上、短軸0.63m、深さ0.23mである。長軸方位はN-28°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

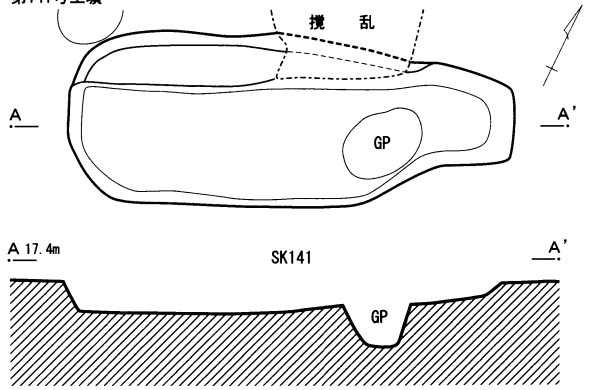
第134・135・136・137・138号土壌



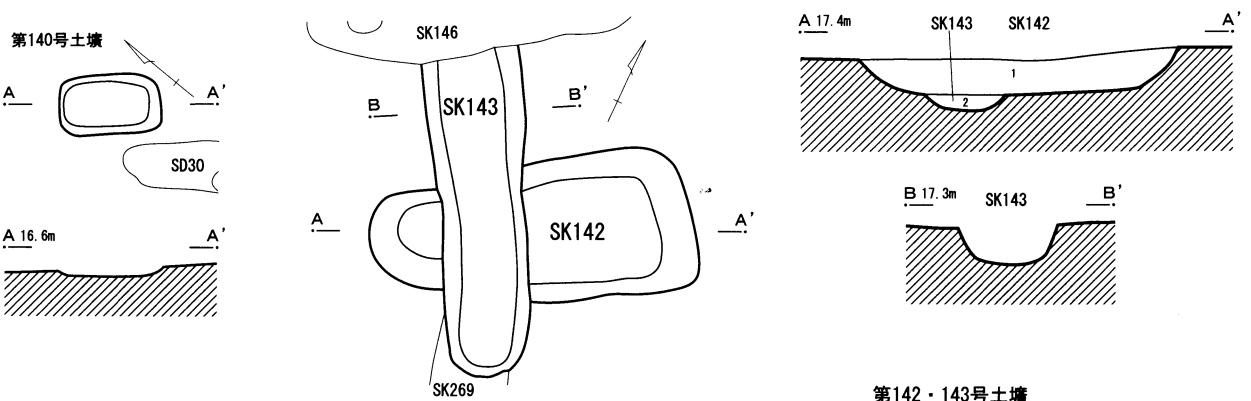
第139号土壌



第141号土壌

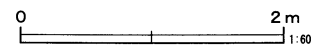


第142・143号土壌



第142・143号土壌

- | | | |
|-------|-----------|---------|
| 1 褐色土 | ロームブロック微量 | [SK142] |
| 2 褐色土 | ロームブロック少量 | [SK143] |



第94図 土壌 (12)

第146号土壙 (第95図)

調査区中央東側のH・I-8グリッドに位置する。第143・268号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.44m、短軸0.63m、深さ0.42mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の焙烙片2点がある。

第146号土壙出土遺物 (第105図1・2)

1・2は焙烙で、外面に煤が付着している。遺構に伴うかどうか判断が難しい。

第147号土壙 (第95図)

調査区中央西側のI-5グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.84m、短軸0.67m、深さ0.16mである。長軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第148号土壙 (第95図)

調査区中央のH・I-6グリッドに位置する。第8号住居跡、第32号溝跡、第149・150号土壙と重複し、本土壙の方が古い。

覆土は、第110号土壙(縄文時代早期)と類似しており、覆土中より早期後葉の条痕文系土器がわずかに出土している。第110号土壙同様、本土壙も規模や形態から墓壙と考えたが、副葬品などは出土せず、確定はできなかった。

平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.41m、短軸1.15m以上、深さ0.45mである。長軸方位はN-33°-Wを指す。

遺物は縄文土器が少量出土したが、図示可能なものはなかった。

第149号土壙 (第95図)

調査区中央のI-6グリッドに位置する。第8号住居跡を壊している。第148号土壙を切っているが、調査は同土壙を優先したため、西端を記録できなかった。また、第32号溝跡、第156号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸1.02m以上、短軸0.54m、

深さ0.16mである。長軸方位はN-78°-Eを指す。

遺物は石器が1点出土した(第105図6)。

第149号土壙出土遺物 (第105図6)

6は砥石で、表面1面がよく使用されている。

第150号土壙 (第95図)

調査区中央のH・I-6グリッドに位置する。第8号住居跡を壊している。第148号土壙を切っているが、調査は同土壙を優先したため、西端を記録できなかった。また、第32号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.68m以上、短軸0.64m、深さ0.35mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

出土遺物は、近世の灰釉陶器1点(第105図3)がある。

第150号土壙出土遺物 (第105図3)

3は、瀬戸美濃の皿で、ロクロ成形である。高台は削り出しで、砂粒が付着している。高台内には輪トチン跡が残る。また、見込み、高台脇に釉溜りがある。時期は17世紀中頃で、遺構に伴うものであろう。

第151号土壙 (第95図)

調査区東側のH-9グリッドに位置する。第128号土壙と近接し平行している。第152号土壙と重複し、本土壙の方が古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.67m、短軸0.67m、深さ0.22mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。

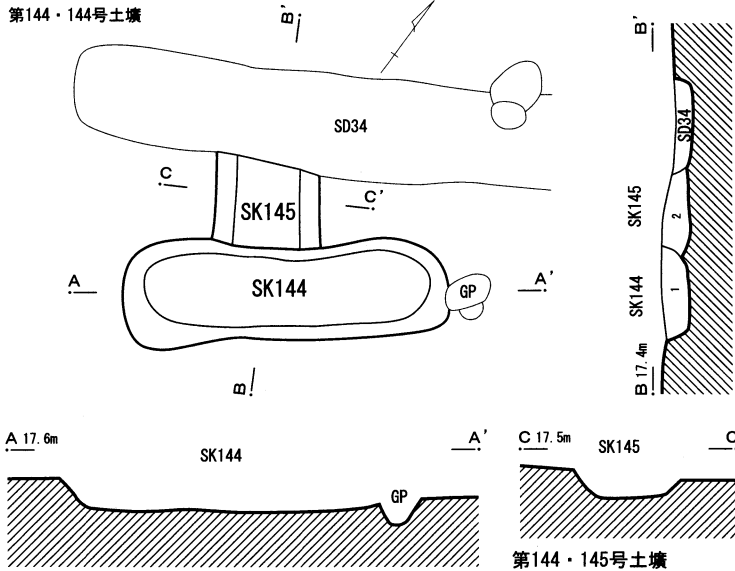
遺物は出土しなかった。

第152号土壙 (第95図)

調査区東側のH-9グリッドに位置する。第151・153号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。また、第259号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸2.94m、短軸0.73m、深さ0.61mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

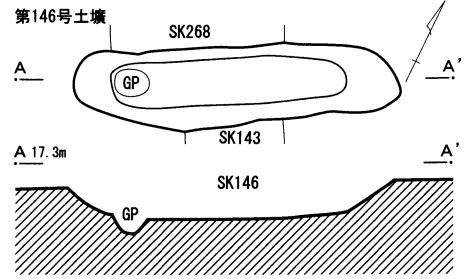
遺物は出土しなかった。

第144・144号土壌

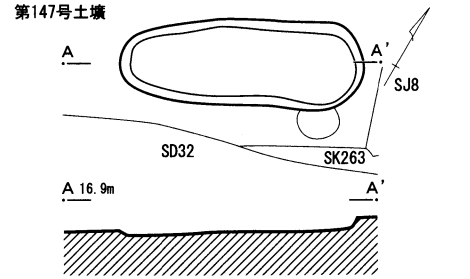


第144・145号土壌
 1 褐色土 ロームブロック微量 [SK144]
 2 褐色土 ロームブロック少量 [SK145]

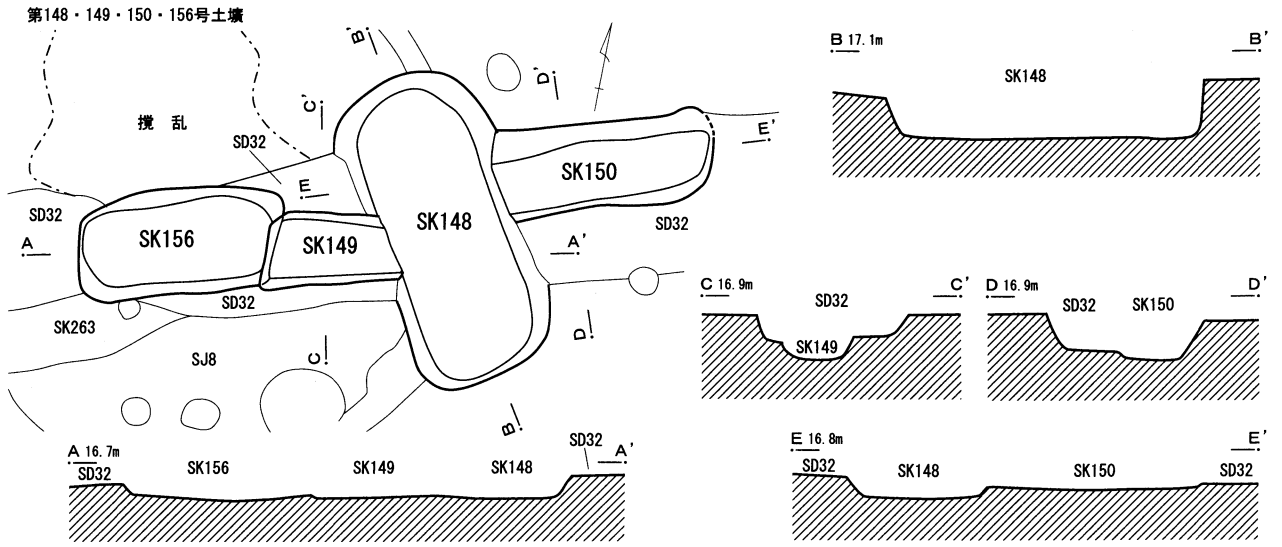
第146号土壌



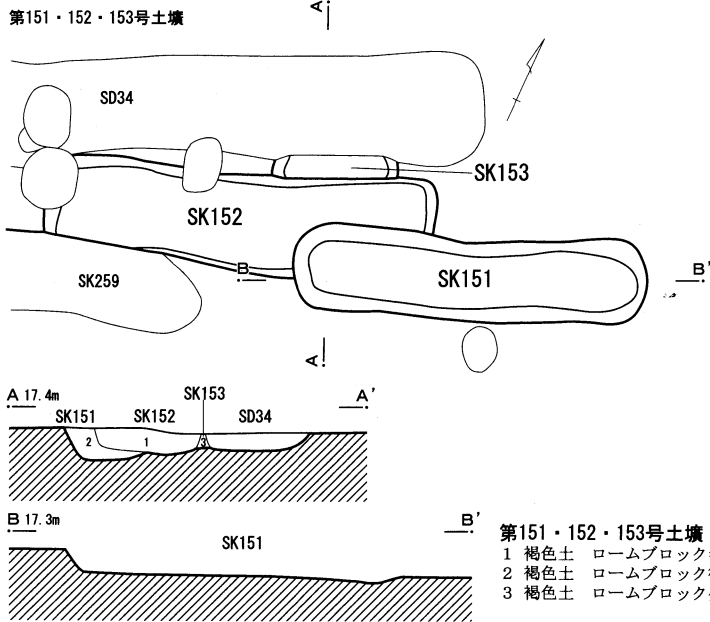
第147号土壌



第148・149・150・156号土壌

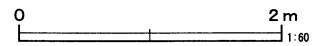
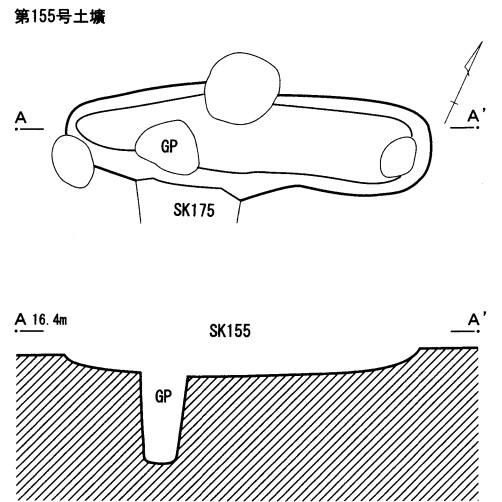


第151・152・153号土壌



第151・152・153号土壌
 1 褐色土 ロームブロック多量 [SK152]
 2 褐色土 ロームブロック微量 [SK151]
 3 褐色土 ロームブロック少量 [SK153]

第155号土壌



第95図 土壌 (13)

第153号土壙 (第95図)

調査区東側のH-9グリッドに位置する。第32号溝跡、第152号土壙と重複し、本土壙の方が古い。平面形は円形と推定され、規模は径0.96m、深さ0.06mである。

遺物は出土しなかった。

第154号土壙 欠番

第155号土壙 (第95図)

調査区中央東側のH・I-9、I-8グリッドに位置する。第259号土壙と近接し平行している。第175号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.73m、短軸0.70m、深さ0.29mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片である。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第156号土壙 (第95図)

調査区中央東側のI-5・6グリッドに位置する。第8号住居跡を壊している。第32号溝跡、第149号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.55m、短軸0.81m、深さ0.23mである。長軸方位はN-77°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第157号土壙 (第96図)

調査区西側のG-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.21m、短軸1.14m、深さ0.22mである。長軸方位はN-85°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第158号土壙 (第96図)

調査区中央のI-7グリッドに位置する。東側を攪乱に削られている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.37m、短軸0.78m、深さ0.25mである。長軸方位はN-55°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第159号土壙 (第96図)

調査区中央東側のH-8グリッドに位置する。第10号住居跡の中央にあり、同住居跡を壊している。また、第160号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。グリッドピットも重複しており、全形を把握しづらい。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸2.07m、短軸0.65m、深さ0.25mである。長軸方位はN-12°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第160号土壙 (第96図)

調査区中央東側のH-8・9グリッドに位置する。第10号住居跡の中央にあり、同住居跡を壊している。また、第159号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、南側西端がわずかに張り出す。規模は長軸2.31m、短軸0.67m、深さ0.33mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第161号土壙 (第96図)

調査区中央東側のH-8・9グリッドに位置する。第10号住居跡を壊している。また、第260~262号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.55m、短軸0.63m、深さ0.23mである。長軸方位はN-73°-Eを指す。

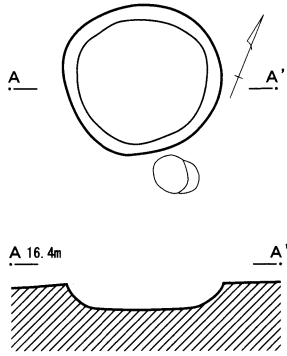
遺物は出土しなかった。

第162号土壙 (第96図)

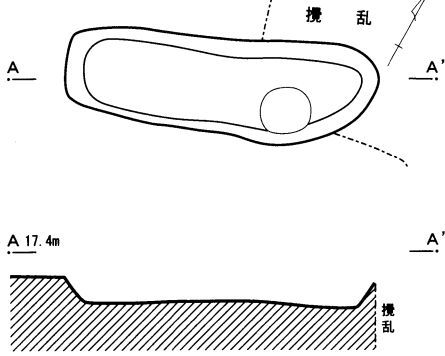
調査区中央東側のH-8グリッドに位置する。第10号住居跡を壊している。また、第168号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.89m、短軸0.75m、深さ0.20mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。

出土遺物は、中近世のかわらけ片がある。遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

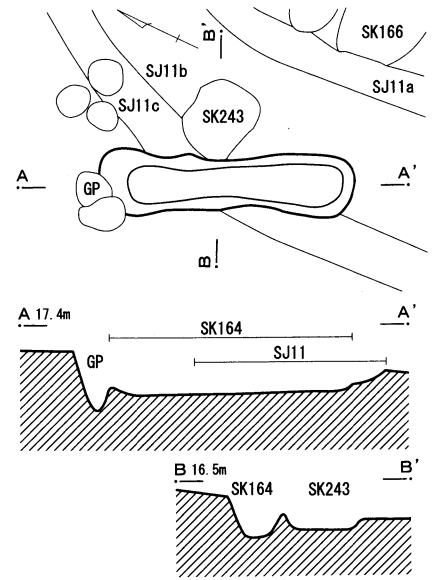
第157号土壩



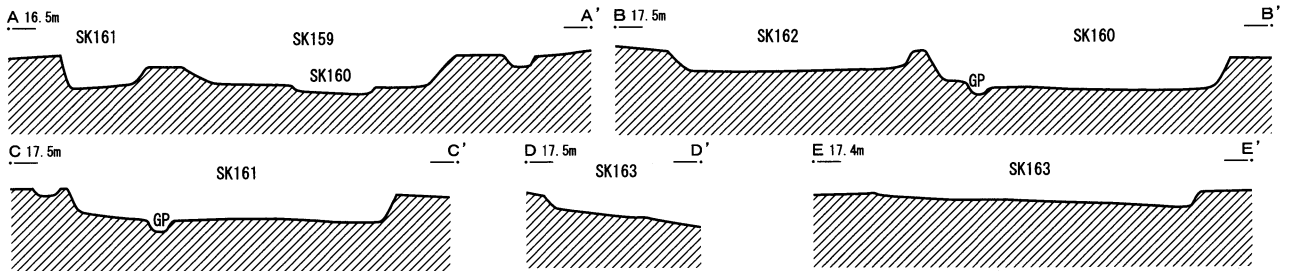
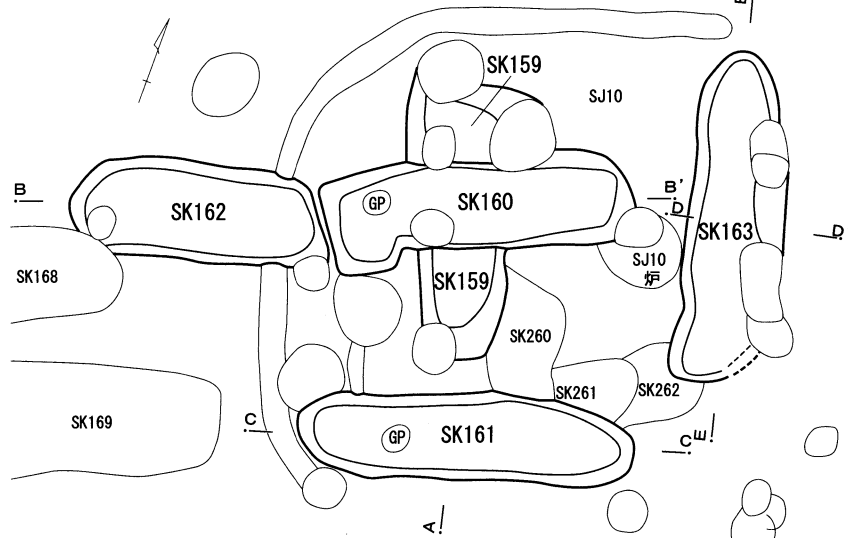
第158号土壩



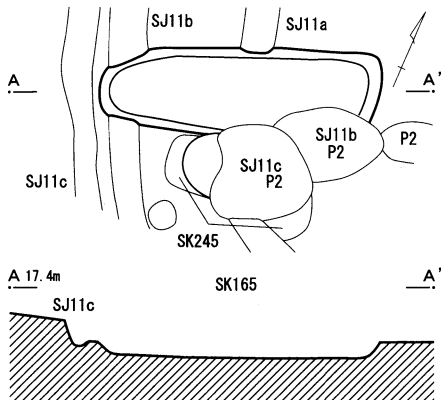
第164号土壩



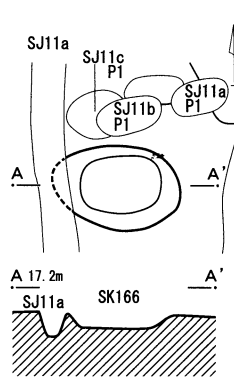
第159・160・161・162・163号土壩



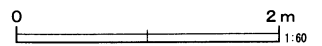
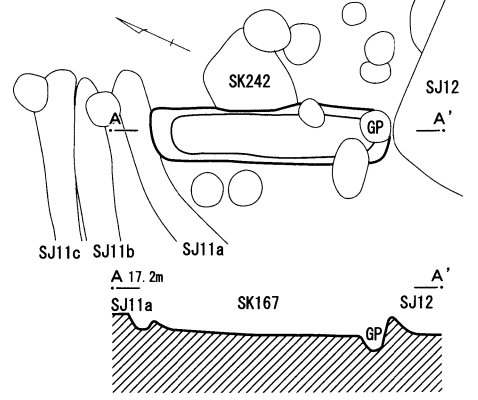
第165号土壩



第166号土壩



第167号土壩



第96图 土壩 (14)

第163号土壙 (第96図)

調査区東側のH-9グリッドに位置する。第10号住居跡を壊している。また、第262号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.52m、短軸0.76m、深さ0.22mである。長軸方位はN-14°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第164号土壙 (第96図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第11号住居跡と重複し、本土壙の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.84m、短軸0.51m、深さ0.32mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片、奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

第165号土壙 (第96図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第11号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、部分的に記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.14m、短軸0.67m、深さ0.15mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第166号土壙 (第96図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第11号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、西端を記録できなかった。平面形は楕円形で、規模は長軸0.81m以上、短軸0.64m、深さ0.11mである。長軸方位はN-89°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第167号土壙 (第96図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第11号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、部分的に記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.81m、短軸0.46m、深さ0.38mである。長軸方位はN-23°-Wを

指す。

遺物は出土しなかった。

第168号土壙 (第97図)

調査区中央東側のH-8グリッドに位置する。第162号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.35m、短軸0.73m、深さ0.17mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第169号土壙 (第97図)

調査区中央東側のH-8グリッドに位置する。第170号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、北西端が少し張り出す。規模は長軸4.65m、短軸0.91m、深さ0.33mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第170号土壙 (第97図)

調査区中央東側のH-8グリッドに位置する。第169号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.98m、短軸0.96m以上、深さ0.26mである。長軸方位はN-73°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第171号土壙 欠番

第172号土壙 (第97図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.45m、短軸0.43m、深さ0.13mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

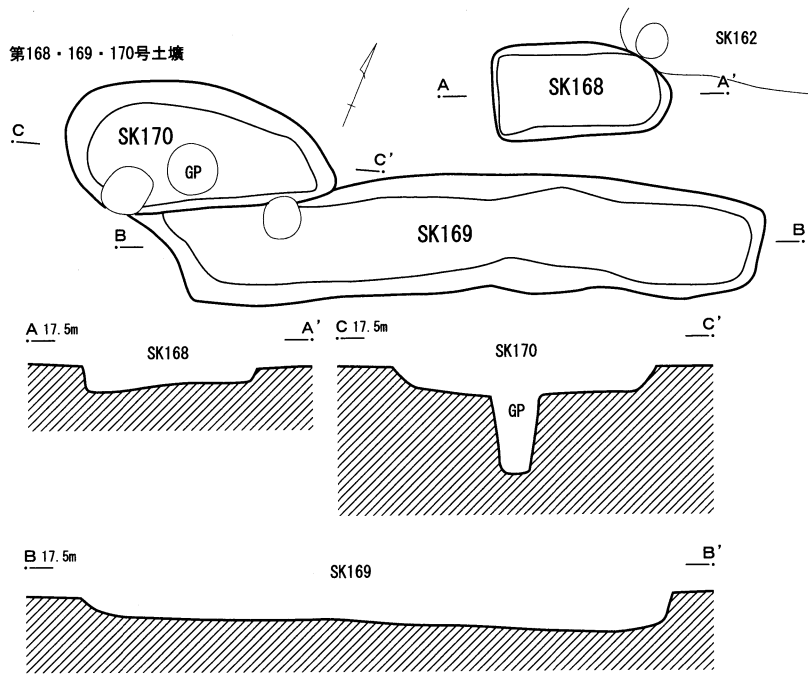
遺物は出土しなかった。

第173号土壙 (第97図)

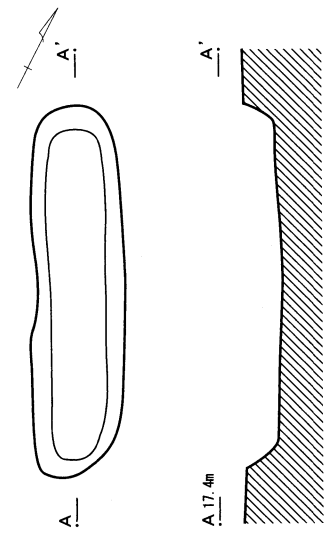
調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第177号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.38m以上、短軸0.73m、深さ0.18mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

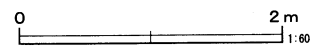
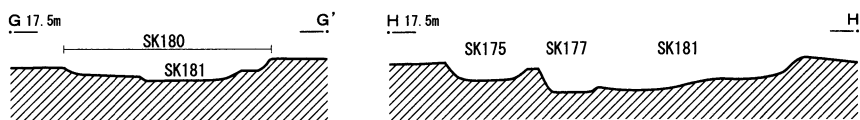
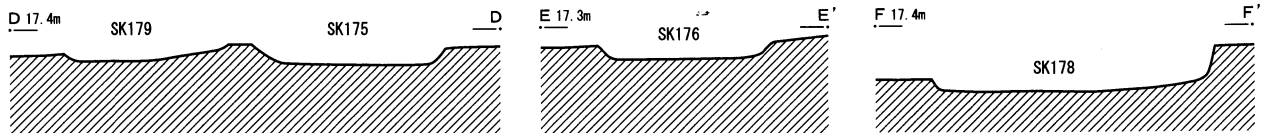
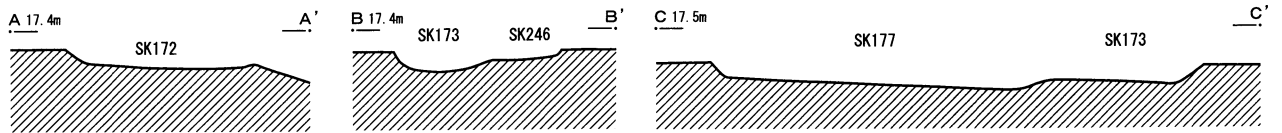
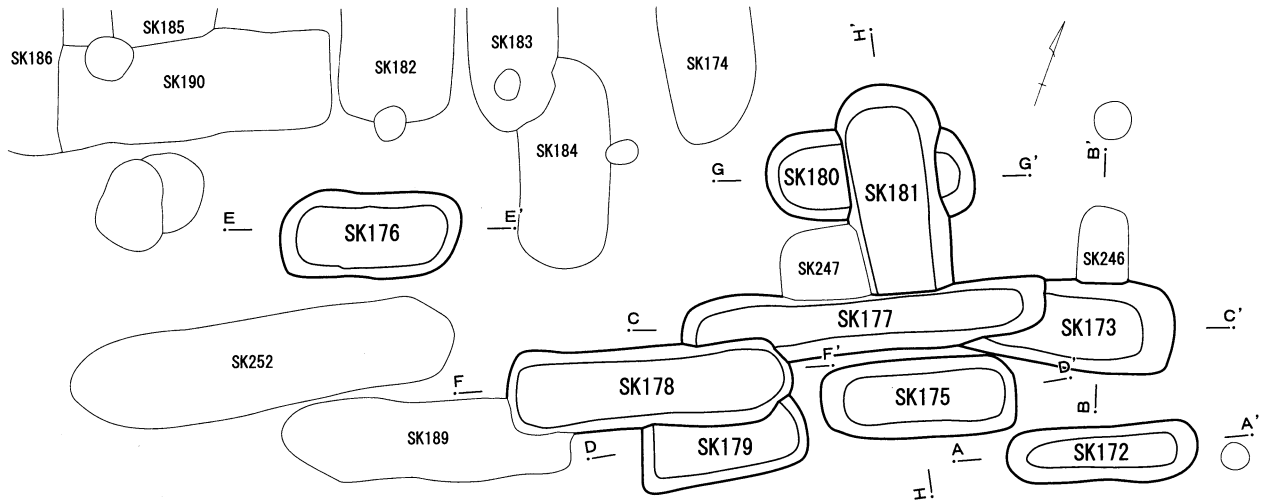
第168・169・170号土坑



第174号土坑



第172・173・175・176・177・178・179・180・181号土坑



第97图 土坑 (15)

第174号土壙 (第97図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.83m、短軸0.66m、深さ0.29mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第175号土壙 (第97図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.51m、短軸0.61m、深さ0.13mである。長軸方位はN-63°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第176号土壙 (第97図)

調査区中央東側のG-7・8、H-7グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.36m、短軸0.63m、深さ0.13mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第177号土壙 (第97図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第173・178・181・247号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.80m、短軸0.46m、深さ0.20mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。

第178号土壙 (第97図)

調査区中央北側のG・H-8グリッドに位置する。第177・179号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.16m、短軸0.61m、深さ0.25mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第179号土壙 (第97図)

調査区中央東側のG・H-8グリッドに位置する。第178号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.

27m、短軸0.47m、深さ0.15mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第180号土壙 (第97図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第181号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.56m、短軸0.68m、深さ0.20mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第181号土壙 (第97図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第177・180号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.54m以上、短軸0.70m、深さ0.23mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第182号土壙 (第98図)

調査区中央北側のG-7グリッドに位置する。第188号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.32m、短軸0.90m、深さ0.30mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の焙烙片がある。

第183号土壙 (第98図)

調査区中央北側のG-7・8グリッドに位置する。第184号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.04m、短軸0.71m、深さ0.31mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第184号土壙 (第98図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第183号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.60m、短軸0.69m、深さ0.10mである。長軸方位はN-18°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第185号土壌 (第98図)

調査区中央北側のG-7グリッドに位置する。第188・190号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.44m以上、短軸0.85m、深さ0.25mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第186号土壌 (第98図)

調査区中央北側のG・H-7グリッドに位置する。第187・190号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.43m、短軸0.64m、深さ0.34mである。長軸方位はN-19°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第187号土壌 (第98図)

調査区中央北側のG・H-7グリッドに位置する。第186号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.13m、短軸0.62m、深さ0.31mである。長軸方位はN-23°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第188号土壌 (第98図)

調査区中央北側のG-7グリッドに位置する。第182・185号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。残存部分の平面形は長方形で、規模は長軸0.82m以上、短軸0.79m、深さ0.21mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第189号土壌 (第98図)

調査区中央東側のH-7・8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.20m、短軸0.57m、深さ0.22mである。長軸方位はN-74°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第190号土壌 (第98図)

調査区中央北側のG-7グリッドに位置する。

第185・186号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸2.00m以上、短軸0.82m、深さ0.34mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第191号土壌 (第98図)

調査区中央のH-6グリッドに位置する。第18号溝跡と重複し、本土壌の方が新しい。また、第193・251号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。時間的制約から第18号溝跡との新旧関係を記録するのに留まり、北東隅を記録できなかった。平面形は長方形と推定され、規模は長軸1.59m以上、短軸0.58m以上、深さ0.34mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第192号土壌 (第98図)

調査区中央のH-6グリッドに位置する。第37号溝跡と重複し、本土壌の方が古い。また、第193・251号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.46m、短軸0.36m以上、深さ0.34mである。長軸方位はN-69°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第193号土壌 (第98図)

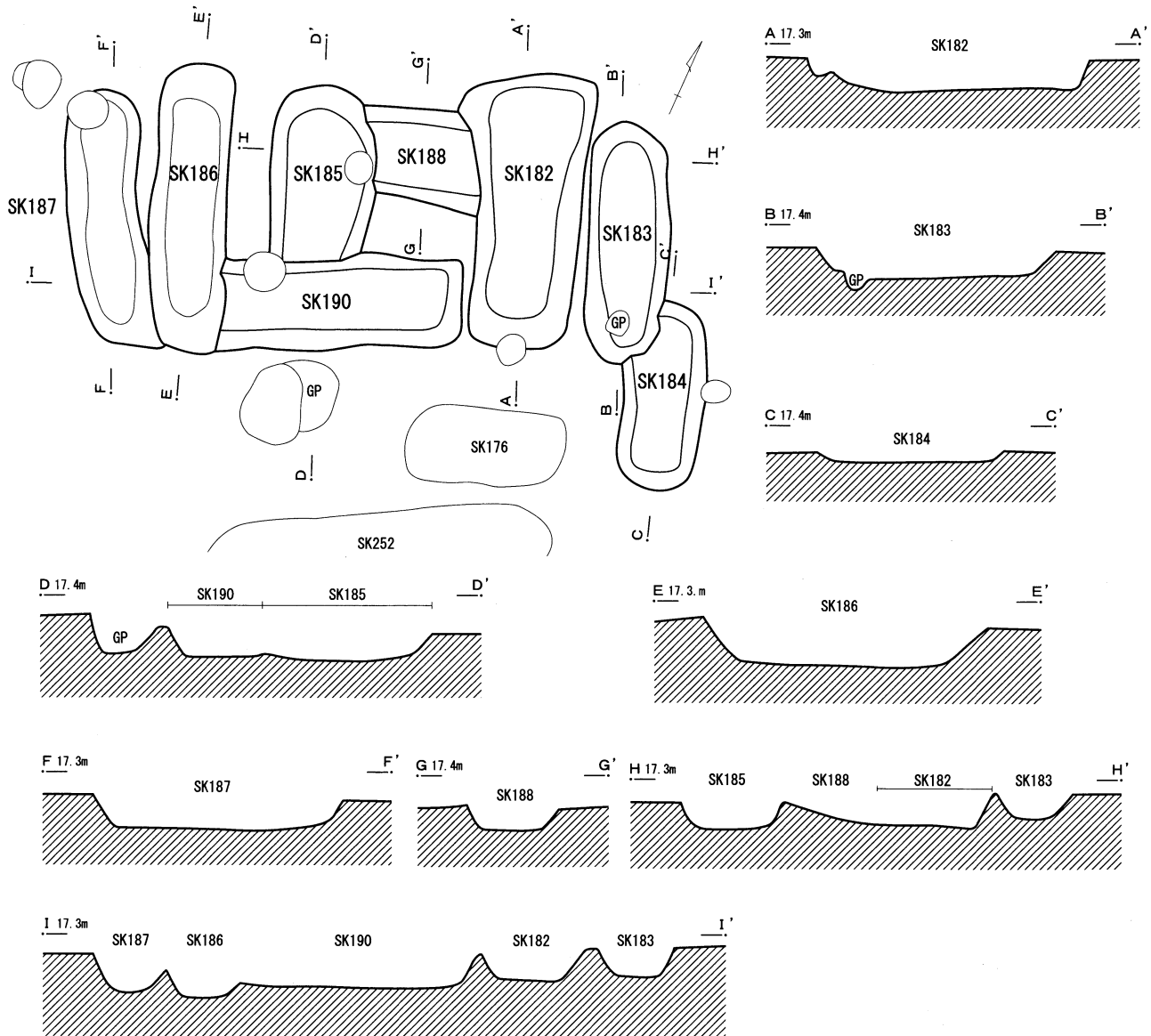
調査区中央のH-6グリッドに位置する。第191・192号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.78m以上、短軸0.46m以上、深さ0.13mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の陶器片・染付碗片がある。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

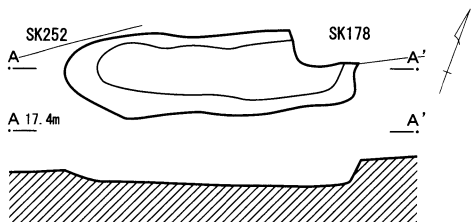
第194号土壌 (第99図)

調査区中央のH-6グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.45m、短軸0.49m、深さ0.12mである。長軸方位はN-83°-Eを指す。

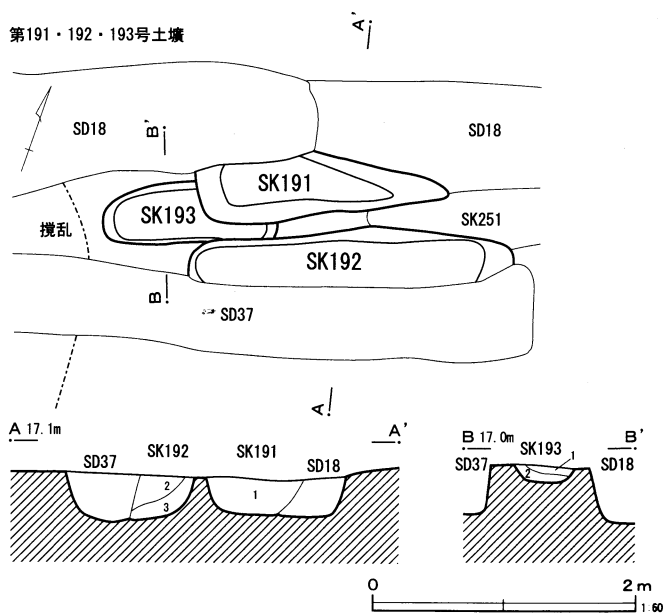
遺物は出土しなかった。



第189号土壌



第191・192・193号土壌



第191・192号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(1~2cm大)少量 [SK191]
- 2 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(2~4cm大)多量 [SK192]
- 3 褐色土 ローム粒子多量・ロームブロック(1~2cm大)少量 [SK192]

第193号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量
- 2 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1~3cm大)少量

第98図 土壌 (16)

第195号土壌 (第99図)

調査区中央北側のG・H-6グリッドに位置する。北西隅は浅くなっており、一部の壁を検出できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.54m、短軸0.52m、深さ0.19mである。長軸方位はN-81°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第196号土壌 (第99図)

調査区中央北側のG-6グリッドに位置する。第197号土壌と重複し、本土壌の方が古い。平面形は幅が狭い溝状で、規模は長軸0.97m以上、短軸0.20m以上、深さ0.12mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第197号土壌 (第99図)

調査区中央北側のG-5・6グリッドに位置する。第196号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.97m、短軸0.45m以上、深さ0.13mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第198号土壌 (第99図)

調査区中央北側のG-5・6グリッドに位置する。第197・199号土壌と重複し、第197号土壌の方が新しく、第199号土壌の方が古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.65m以上、短軸0.67m、深さ0.32mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。

第199号土壌 (第99図)

調査区中央北側のG-5・6グリッドに位置する。第197・198号土壌と重複し、本土壌の方が古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.52m、短軸0.30m以上、深さ0.26mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第200号土壌 (第99図)

調査区中央西側のH-5グリッドに位置する。第13号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、北西隅を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.75m、短軸0.76m、深さ0.17mである。長軸方位はN-19°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の染付埴がある。

第201号土壌 (第99図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.86m、短軸0.79m、深さ0.12mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第202号土壌 (第99図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第9号住居跡を壊している。第125号土壌、グリッドピットと重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.86m以上、短軸0.63m、深さ0.30mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第203号土壌 (第99図)

調査区中央東側のI・J-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.52m、短軸0.65m、深さ0.21mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第204号土壌 (第101図)

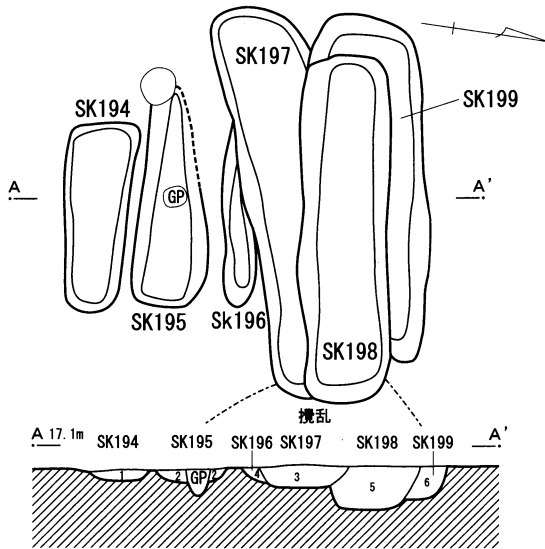
調査区中央のH-7グリッドに位置する。第254号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.24m以上、短軸0.84m、深さ0.27mである。長軸方位はN-80°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第205号土壌 (第101図)

調査区中央のH-7グリッドに位置する。攪乱

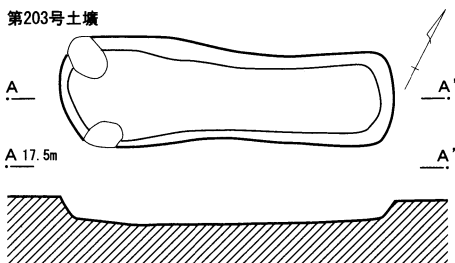
第194・195・196・197・198・199号土壌



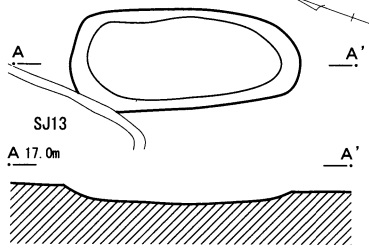
第194・195・196・197・198・199号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1cm大)多量 [SK194]
- 2 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1cm大)少量 [SK195]
- 3 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1cm大)少量 [SK197]
- 4 褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ロームブロック(1~3cm大)多量 [SK196]
- 5 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量 [SK198]
- 6 褐色土 ローム粒子(1mm大)多量・ロームブロック(1cm大)微量 [SK199]

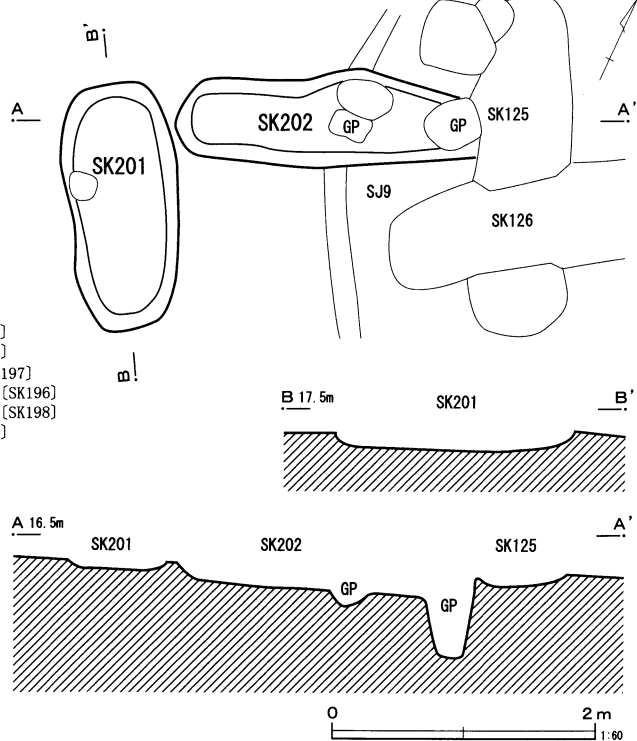
第203号土壌



第200号土壌



第201・202号土壌



第99図 土壌 (17)

によって、西端を削られている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.50m以上、短軸0.82m、深さ0.34mである。長軸方位はN-86°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第206・207号土壌 (第101図)

調査区中央のH-6グリッドに位置する。第206号土壌は、第207号土壌と重なっており、土層断面で確認できただけである。第206号土壌の方が新しい。第206号土壌の平面形は不明で、土層断面から、幅0.78m、深さ0.56mである。第207号土壌の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.34m、短軸1.06m、深さ0.56mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の土器片がある。また、混入と思われる縄文土器片、弥生土器片が出土した。

第208号土壌 (第101図)

調査区中央のH-6グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸2.11m、短軸0.64m、深さ0.52mである。長軸方位はN-16°-Wを指す。

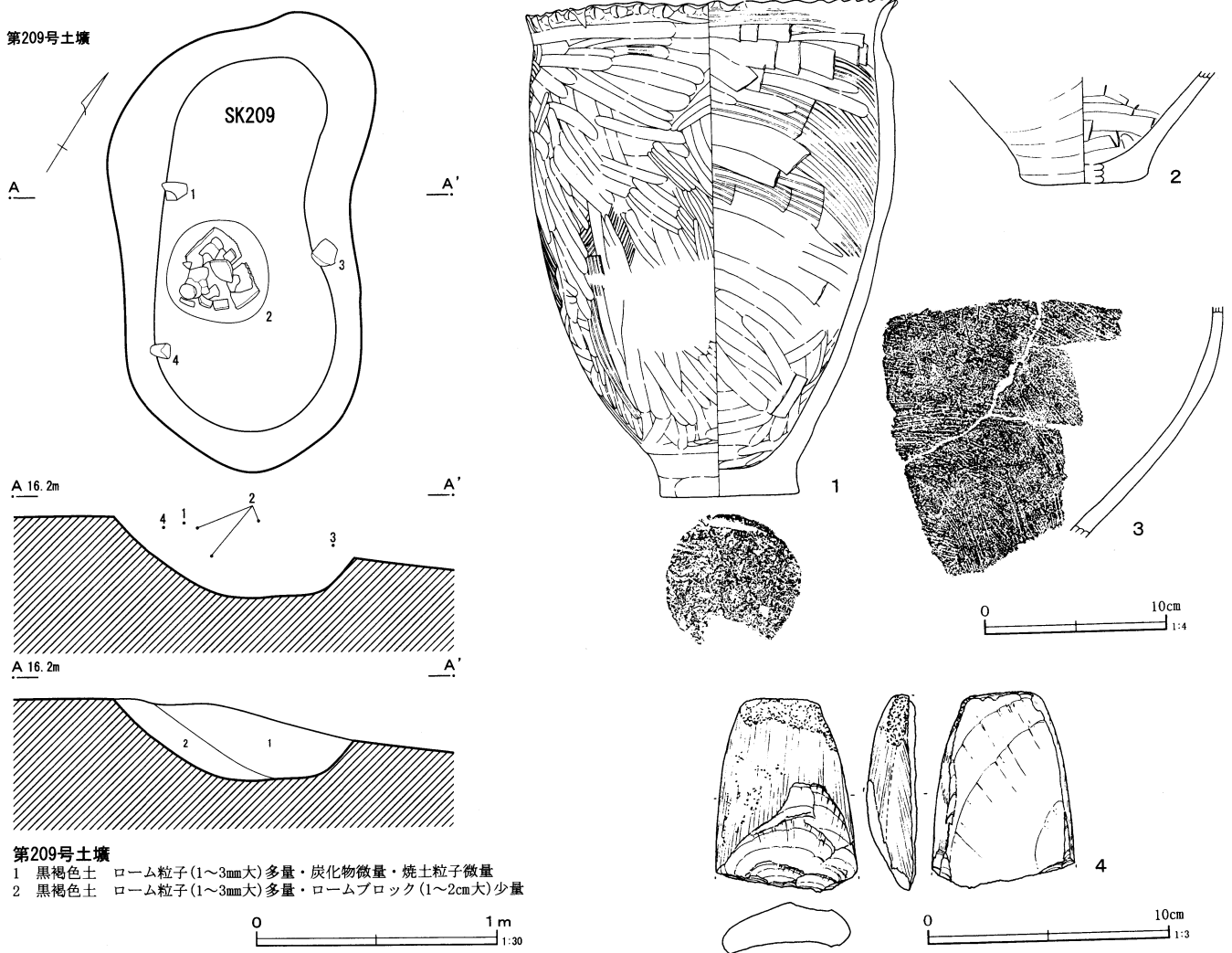
遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第209号土壌 (第100図)

調査区北側のD-8・9グリッドに位置する。第217号土壌の北側に近接している。

覆土はローム粒子を多く含む黒褐色を基調として、1層には炭化物・焼土粒子を含む。2層はロームブロックを含んでおり、壁の崩落土と考えられ、自然堆積を示す。

平面形は楕円形を基調とし、長辺がわずかに括れて、北隅が少し張り出している。規模は長軸1.



第209号土壌

1 黒褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・炭化物微量・焼土粒子微量
 2 黒褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量

第100図 第209号土壌・出土遺物

第22表 第209号土壌出土遺物観察表 (第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	甕	20.2	27.4	7.7	A B C F	普通	橙	90	外面上方に煤付着
2	弥生土器	不明		[6.0]	(7.0)	A B C	普通	にぶい黄橙	30	底部
3	弥生土器	壺	胴部			A B C	普通	にぶい黄橙	破片	
4	石器	磨製石斧	長さ8.1cm 幅5.9cm		厚さ2.3cm	重さ137.5g				砂岩

89m、短軸1.14m、深さ0.29mである。長軸方位はN-32°-Wを指す。

出土遺物は総数36点である。そのうち、弥生土器35点、石器1点である。完形に近い甕(第100図1)が、本土壌の中央付近で検出され、覆土上層よりまとまった状態で出土した。図示可能な遺物は4点のみで、他は無文の胴部小片が多数を占める。

第209号土壌出土遺物

1は、口縁部から底部まで残る甕である。口縁

部に指頭押捺を加えており、押捺した凹部に爪の痕が残っている。内外面ともに、粗いハケ調整を施した後、ナデを加えている。

2は底部で、内外面ともにヘラナデ調整を施す。

3は、壺の胴部下半である。外面はハケ調整で、内面はヘラナデである。

4は、磨製石斧である。刃部の先端を欠損し、裏面も薄く剥がれ落ちている。

遺構の時期は、覆土と出土遺物より弥生時代中期と考えられる。

第210号土壌 (第101図)

調査区中央のH-6グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.00m、短軸0.67m、深さ0.11mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第211号土壌 (第101図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第12号住居跡と重複し、本土壌の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.88m以上、短軸0.56m、深さ0.09mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第212号土壌 (第101図)

調査区北側のF-8グリッドに位置する。覆土は暗褐色土を基調とした縄文時代のものである。覆土中より縄文時代前期前半の土器が出土しており、同期に構築されたものと考えられる。平面形は径1.29mの円形である。断面形は箱形になり、深さ0.51mである。

遺物は縄文土器片が少量出土している。紙幅の都合上、第120図に掲載した。

第212号土壌出土遺物 (第120図 8~11)

出土遺物のうち4点を図示したが、すべて縄文時代前期前半の関山式土器である。このうち8は、口縁部文様帯の上位区画線が観察できる。また、9~11は単節斜縄文を施文するものであるが、9では多段ループ帯を設けている。8・9は成形接合部にあたり、上位の施文が下位の施文を覆っている。

第213号土壌 (第101図)

調査区北側のF-7グリッドに位置する。グリッドピットと重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸0.75m以上、短軸0.96m、深さ0.51mである。長軸方位はN-84°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第214号土壌 (第101図)

調査区中央東側のH-5グリッドに位置する。第13号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、上層部分をわずかに記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.18m、短軸0.68m、深さ0.25mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は、混入と思われる弥生土器片が出土した。

第215号土壌 (第104図)

調査区北側のE-8・9グリッドに位置する。平面形は不定形で、規模は長軸3.48m、短軸1.38m、深さ0.44mである。長軸方位はN-88°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第216号土壌 (第104図)

調査区中央西側のH-5・6グリッドに位置する。攪乱によって、北東隅の上層をわずかに削られている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.74m、短軸0.70m、深さ0.33mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

出土遺物は、中近世の灰釉陶器(第105図4)がある。

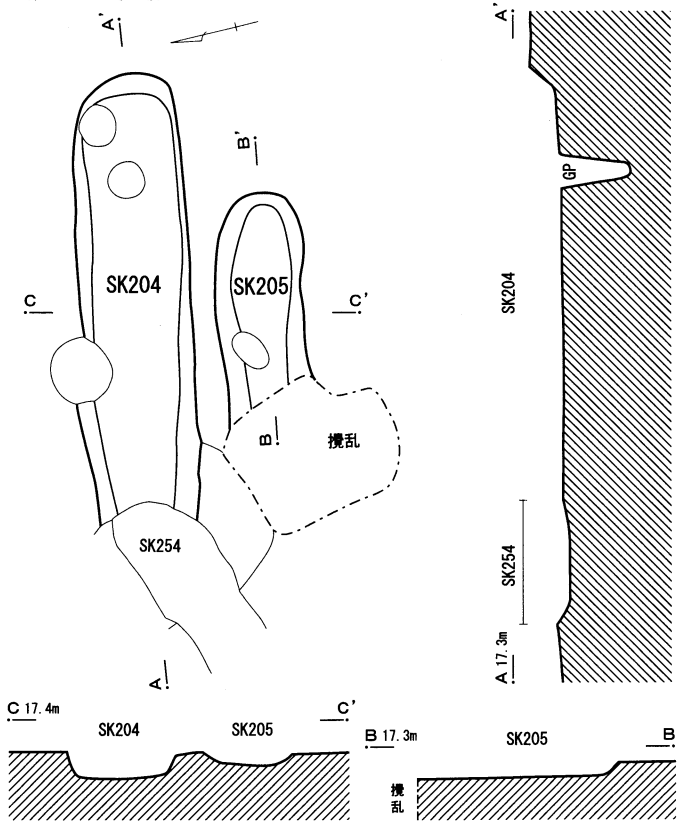
第216号土壌出土遺物 (第105図 4)

4は、瀬戸美濃の皿である。高台は削り出しで、高台内に胎土片が付着する。また、畳付きに釉が付着し、見込みに足付トチン跡が残る。時期は17世紀中~後葉で、遺構に伴うだろう。

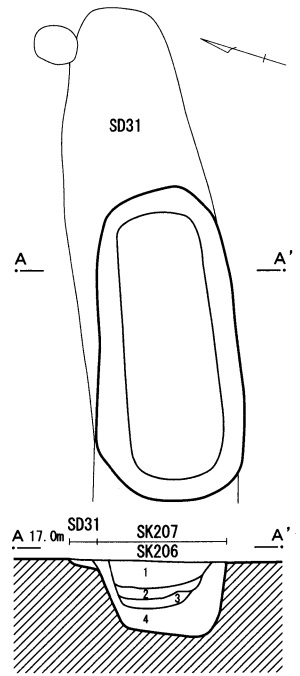
第217号土壌 (第102図)

調査区北側のD-8・9グリッドに位置する。北側に張り出している部分があり、北隅から1.25mいき、深さ0.47mのところ傾斜変換点がある。そこから傾斜を変えて、確認面から1.60m下でテラス部をもち、さらに一段深い掘り込みがある。その壁の途中には、焼土化している部分がある。それは、南側が確認面からの深さ0.93~1.15mのところ、北西側は確認面からの深さ1.28~1.96mところである。

第204・205号土壌



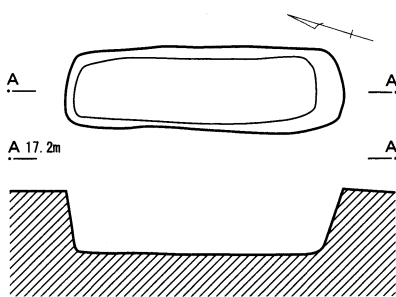
第206・207号土壌



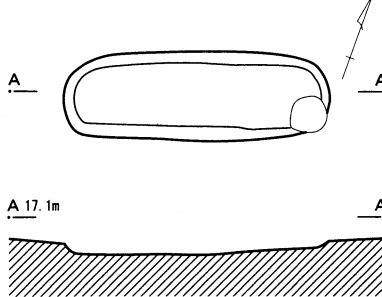
第206・207号土壌

- 1 褐色土 ローム粒子(1~2mm大)多量・ロームブロック(1~2cm大)少量 [SK206]
- 2 黒色土 ローム粒子(1~2mm大)多量 [SK206]
- 3 灰褐色土 灰褐色粒子多量・ロームブロック(2~3cm大)微量 [SK206]
- 4 褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・灰褐色粒子(3~5mm大)少量 [SK207]

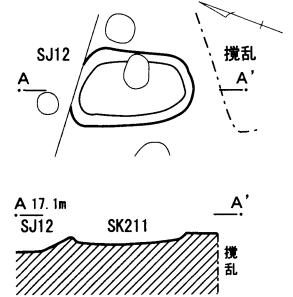
第208号土壌



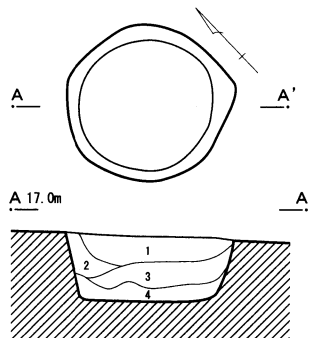
第210号土壌



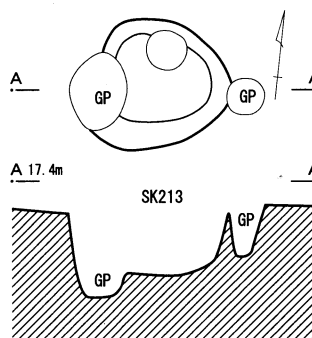
第211号土壌



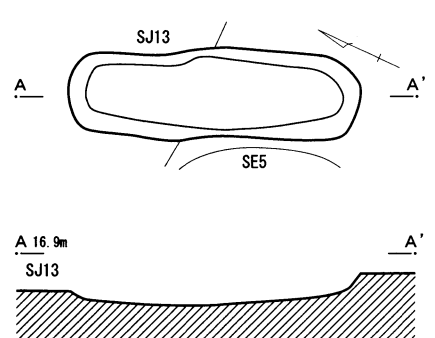
第212号土壌



第213号土壌

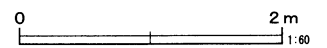


第214号土壌



第212号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・焼土粒子(1mm大)微量・炭化粒子(1mm大)少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック(1~4cm大)多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子(1~3mm大)多量・焼土粒子(1~2mm大)少量



第101図 土壌 (18)

覆土は、弥生時代の竪穴住居跡のものと近似しており、黒褐色を基調とする。

張出部を含めた平面形は楕円形で、規模は長軸4.21m、短軸3.91m、深さ1.95mである。長軸方位はN-37°-Eを指す。

出土遺物は、総数95点である。そのうち、弥生土器片92点、石器3点で、土器は小破片ばかりで、図示可能なものはなかった。無文の胴部片を中心として、文様があるものは少なかった。石器についてはすべて掲載した(第103図1~3)。また、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第217号土壌出土遺物(第103図1~3)

1・2は、打製石斧である。1は台形を呈し、非常に薄い。2は短冊形で、表面に自然面を大きく残す。3は台形を呈する削器である。

第218号土壌(第104図)

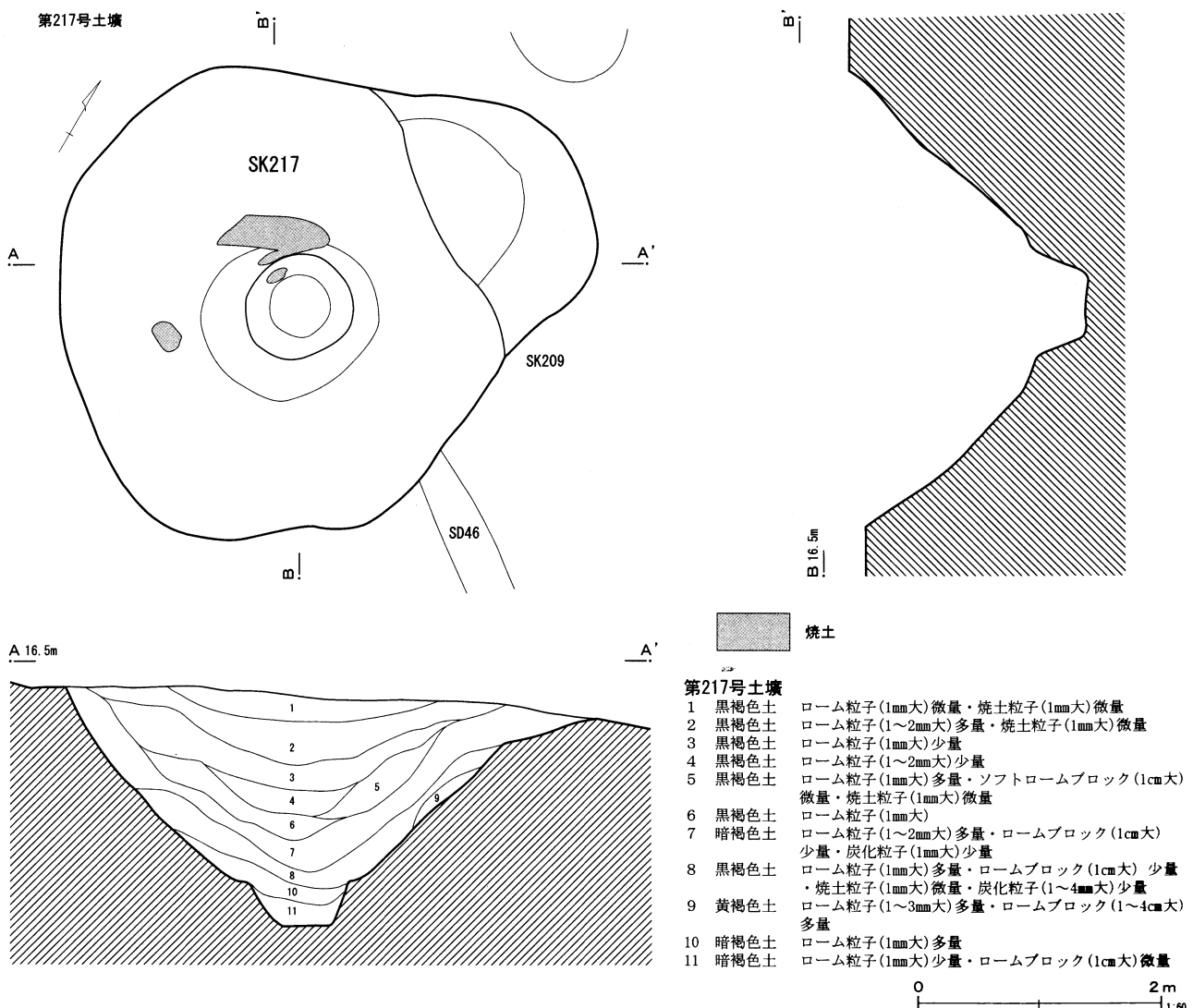
調査区北西側のE-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.78m、短軸0.65m、深さ0.29mである。長軸方位はN-10°-Wを指す。

出土遺物は、弥生土器片18点で、遺構に伴うものと判断した。すべて破片資料で、無文の胴部片が多数を占める。図示可能な遺物は、文様を施している胴部片4点のみである。

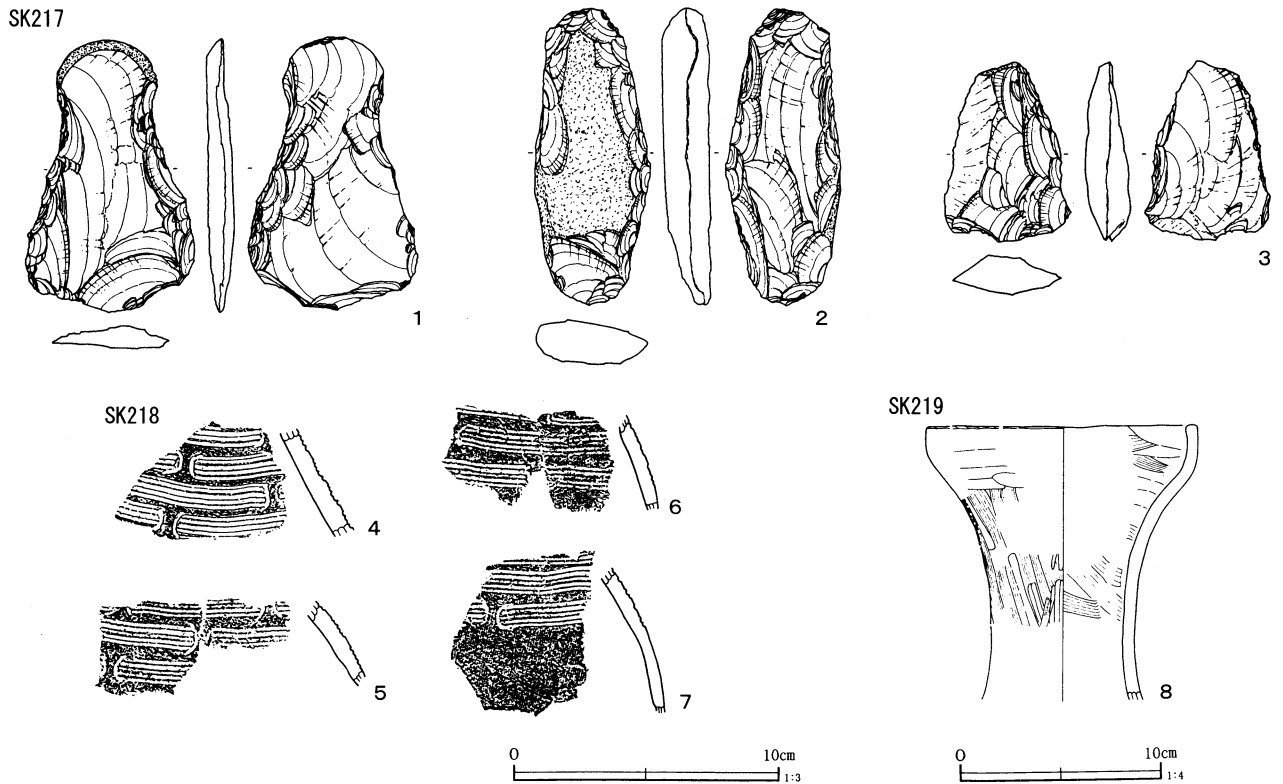
第218号土壌出土遺物(第103図4~7)

4~7は5本一単位の櫛歯状工具で擬似流水文を施文している胴部片で、同一個体と思われる。7は破片下半に無文部が見られ、胴部中盤付近の破片である。

遺構の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。



第102図 第217号土壌



第103図 第217～219号土壌出土遺物

第23表 第217～219号土壌出土遺物観察表 (第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	石器	打製石斧	長さ10.4cm	幅6.4cm	厚さ1.0cm	重さ68.5g				ホルンフェルス
2	石器	打製石斧	長さ11.2cm	幅4.4cm	厚さ1.3cm	重さ123.1g				緑泥片岩
3	石器	削器	長さ6.8cm	幅4.8cm	厚さ1.7cm	重さ51.9g				瑪瑙
4	弥生土器	壺		胴部		ABC	普通	にぶい褐	破片	5・6は同一個体 樽歯5本一単位
5	弥生土器	壺		胴部		ABC	普通	橙	破片	
6	弥生土器	壺		胴部		ABC	普通	橙	破片	
7	弥生土器	壺		胴部		ABC	普通	橙	破片	
8	弥生土器	壺	(12.5)	[13.8]		ABE	普通	にぶい黄橙	50	

第219号土壌 (第104図)

調査区北側のD-9・10グリッドに位置する。斜面部に構築されているため、東側が流失している。平面形は楕円形で、規模は長軸1.17m以上、短軸0.83m、深さ0.15mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。

出土遺物は、弥生土器1点である。数点の破片を検出し、すべて接合したが、残存状態はあまり良くない。

第219号土壌出土遺物 (第103図8)

8は壺の袋状口縁である。口唇部に原体無節R縄文を施文する。外面調整はタテハケ後、部分的にミガキを施す。内面はハケ調整後、ナデを加え

る。

遺構の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。また、本土壌を含めて、後述する第220～222号土壌が近在しており、一連の土壌群として弥生時代中期後半の所産と考える。

第220号土壌 (第104図)

調査区北側のD-9グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.71m、短軸0.53m、深さ0.13mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。

出土遺物は、弥生土器片5点であるが、図示可能なものはなかった。また、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第221号土壙 (第104図)

調査区北側のD-9グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.99m、短軸0.76m、深さ0.20mである。長軸方位はN-0°-Wを指す。

出土遺物は、弥生土器片2点であるが、図示可能なものはなかった。

第222号土壙 (第104図)

調査区北側のD-9グリッドに位置する。平面形は径0.51mの円形で、深さは0.15mである。長軸方位はN-15°-Wを指す。

出土遺物は、弥生土器片3点であるが、図示可能なものはなかった。

第223号土壙 (第104図)

調査区北側のD-7グリッドに位置する。第41号溝跡、第230号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、西端から0.29mのところ段差があり、深くなる。規模は長軸2.80m、短軸0.91m、深さ0.28mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。

遺物は、混入と思われる縄文土器片が出土した。

第224号土壙 (第104図)

調査区北側のE-5グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.20m、短軸0.82m、深さ0.22mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

出土遺物は、中近世の土器片と銭貨2枚(第105図7・8)がある。

第224号土壙出土遺物 (第105図7・8)

7は、銭種が「至道元寶」で、書体は行書である。8は、銭種が「永樂通寶」で、書体は真書である。遺物は遺構に伴うものと考えられ、「六道銭」の一種と思われ、墓壙の可能性はある。

遺構の時期は中世末以降であろう。

第225号土壙 (第104図)

調査区北側のE-5グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.38m、短軸0.88

m、深さ0.45mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

出土遺物は、銭貨2枚(第105図9・10)がある。

第225号土壙出土遺物 (第105図9・10)

9は、銭種が「咸平元寶」で、書体は真書である。10は、銭種が「永樂通寶」で、書体は真書である。第224号土壙と同様に、遺物は遺構に伴うものと考えられ、墓壙の可能性はある。

遺構の時期は中世末以降であろう。

第227号土壙 (第104図)

調査区北側のC-8グリッドに位置する。第228号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸0.53m以上、短軸0.54m以上、深さ0.17mである。長軸方位はN-63°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第228号土壙 (第104図)

調査区北側のC-8グリッドに位置する。グリッドピットと重複しているが、新旧関係は不明である。第227号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.46m、短軸1.03m、深さ1.09mである。長軸方位はN-53°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

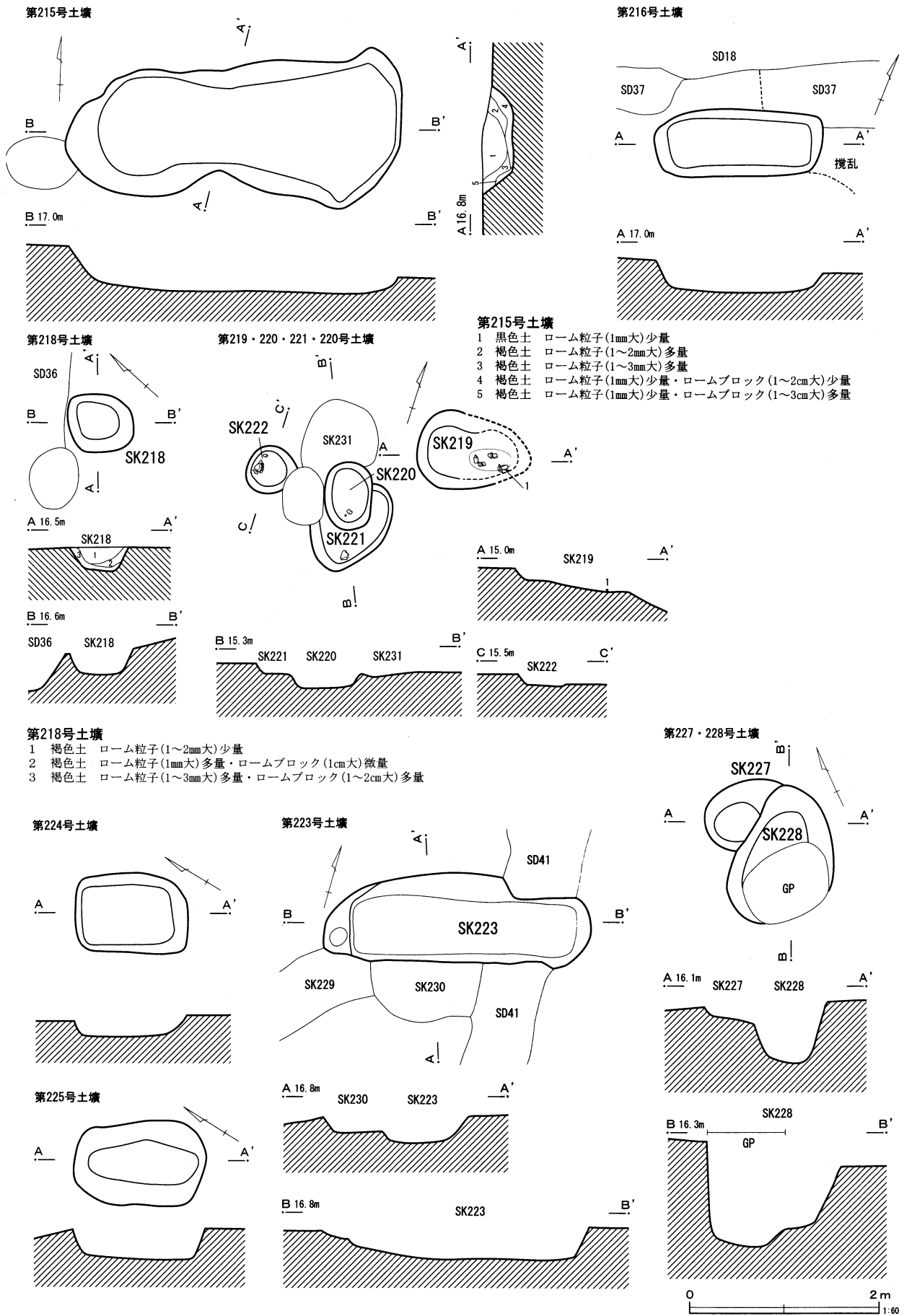
第229号土壙 (第106図)

調査区北側のD-7グリッドに位置する。第223・230号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸1.46m以上、短軸0.62m、深さ0.18mである。長軸方位はN-44°-Eを指す。

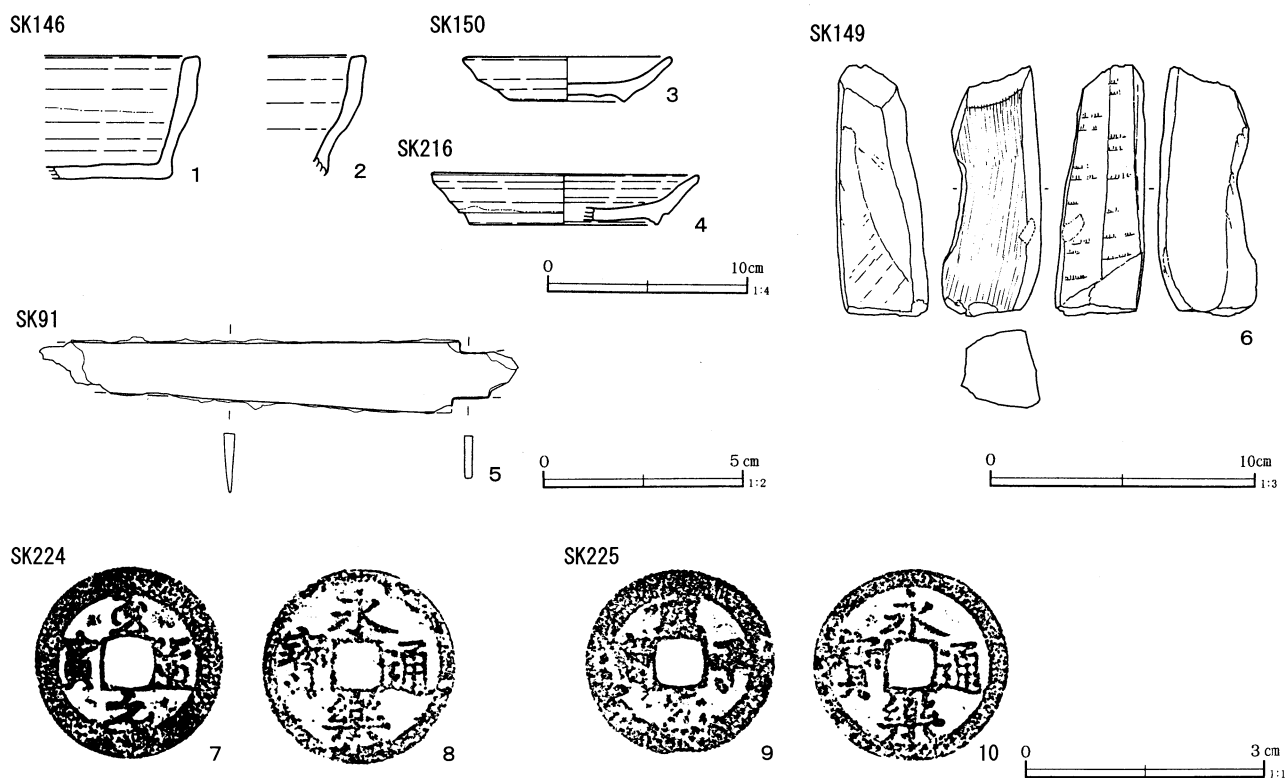
遺物は出土しなかった。

第230号土壙 (第106図)

調査区北側のD-7グリッドに位置する。第41号溝跡、第229・223号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸1.19m以上、短軸0.63m以上、深



第104図 土壤 (19)



第105図 土壌出土遺物

第24表 土壌出土遺物観察表 (第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土器	焙烙		6.2		E	普通	褐	破片	SK146 外面煤付着 輪積成形か
2	土器	焙烙		[6.1]		G	普通	褐	破片	SK146
3	灰釉陶器	(丸)皿	10.2	2.2	5.7	G	良好	オリーブ	90	SK150 瀬戸美濃 17C中頃
4	灰釉陶器	皿	(13.5)	2.6	9.5	G	良好	灰オリーブ	20	SK216 瀬戸美濃 胎土緻密 17C中～後
5	鉄製品	刀	長さ [18.0] cm 刃長 [15.9] cm 刃幅1.9～2.6cm 背幅0.4cm			SK91				
6	石器	砥石	長さ9.5cm 幅3.6cm 厚さ3.2cm 重さ135.6g			SK149 凝灰岩				
7	銭貨	至道元寶	縦2.28cm	横2.28cm	重さ3.0g	SK224 しどうげんぼう：北宋、995年				
8	銭貨	永樂通寶	縦2.31cm	横2.30cm	重さ3.0g	SK224 えいらくつうほう：明、1408年				
9	銭貨	咸平元寶	縦2.20cm	横2.20cm	重さ2.7g	SK225 かんべいげんぼう：北宋、998年				
10	銭貨	永樂通寶	縦2.31cm	横2.31cm	重さ3.7g	SK225 えいらくつうほう：明、1408年				

さ0.19mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第231号土壌 (第106図)

調査区北側のD-9グリッドに位置する。第220号土壌と重複し、本土壌の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸0.90m以上、短軸0.79m、深さ0.21mである。長軸方位はN-0°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第232号土壌 (第106図)

調査区北側のD-9グリッドに位置する。斜面部に構築されているために、東側は流失しており

検出できなかった。平面形は楕円形で、規模は長軸3.38m、短軸1.13m以上、深さ0.41mである。

長軸方位はN-1°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第233号土壌 (第106図)

調査区北西側のE-4グリッドに位置し、北西側は調査区外に延びている。グリッドピットと重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は方形を基調とし、北東壁に半円形状の張り出しをもつ。規模は長軸1.14m、短軸0.96m以上、深さ0.15mである。長軸方位はN-48°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第234号土壙 (第106図)

調査区北側のE-5グリッドに位置する。第224・225号土壙の間に挟まれている。平面形は長方形で、規模は長軸1.41m、短軸1.00m、深さ0.37mである。長軸方位はN-40°-Wを指す。第224・225号土壙のように銭貨の出土は見られないが、形態が非常に類似しており、同土壙と同様に、墓壙の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

第235号土壙 (第106図)

調査区北側のE-7グリッドに位置する。攪乱によって、一部削平されている。平面形は不整形で、断面形は箱形で深い。規模は長軸2.27m、短軸1.86m、深さ1.02mである。長軸方位はN-35°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第236号土壙 (第106図)

調査区北側のF-5グリッドに位置する。平面形は長方形だが、北辺が少し波打つ。規模は長軸1.13m、短軸0.67m、深さ0.41mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第237号土壙 (第106図)

調査区北側のF-5グリッドに位置する。平面形は長方形だが、西辺に段をもって南側が幅狭になる。規模は長軸1.20m、短軸0.56m、深さ0.41mである。長軸方位はN-14°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第238号土壙 (第106図)

調査区北側のF・G-5グリッドに位置する。平面形は長方形だが、北辺が少し波打つ。規模は長軸1.17m、短軸0.60m、深さ0.44mである。長軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第236～237号土壙は、3基密集して構築されており、同土壙群の北側に位置する第224・225・234号土壙と類似する。また、土壙の規模もほぼ同じ

であるために、第236～237号土壙も、中世末以降の墓壙の可能性を考えておく。

遺物は出土しなかった。

第239号土壙 (第106図)

調査区北側のF-6グリッドに位置する。第48号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸1.35m、短軸0.42m以上、深さ0.29mである。長軸方位はN-27°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第240号土壙 (第106図)

調査区北側のF-7グリッドに位置する。グリッドピットと重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.92m、短軸0.76m、深さ0.39mである。長軸方位はN-57°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第241号土壙 (第107図)

調査区北側のF-8グリッドに位置する。第38号溝跡、グリッドピットと重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.29m、短軸0.69m、深さ0.24mである。長軸方位はN-21°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第242号土壙 (第107図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第167号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸0.68m以上、短軸0.62m、深さ0.13mである。長軸方位はN-36°-Eを指す。

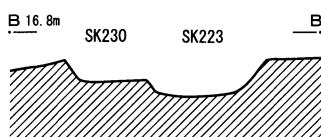
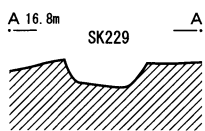
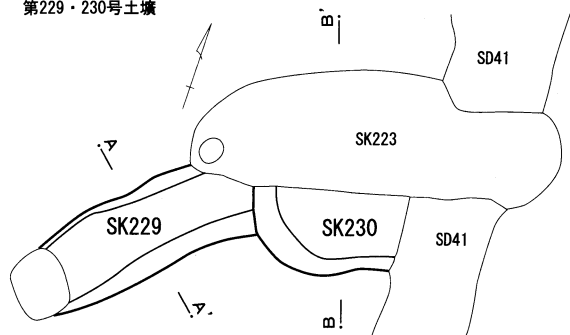
遺物は出土しなかった。

第243号土壙 (第107図)

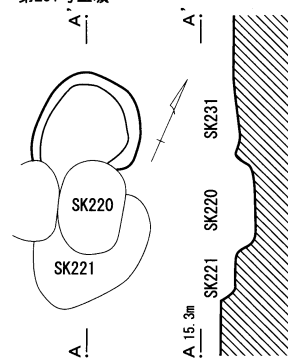
調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。平面形は方形で、規模は長軸0.61m、短軸0.56m、深さ0.08mである。長軸方位はN-90°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

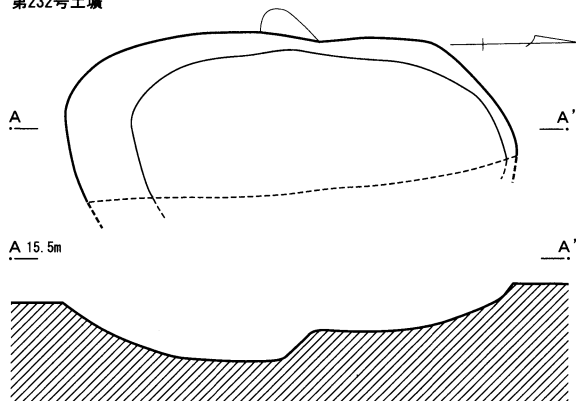
第229・230号土壙



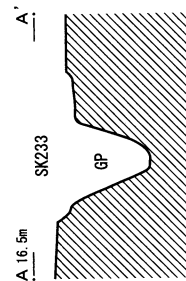
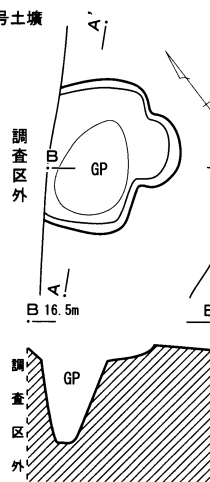
第231号土壙



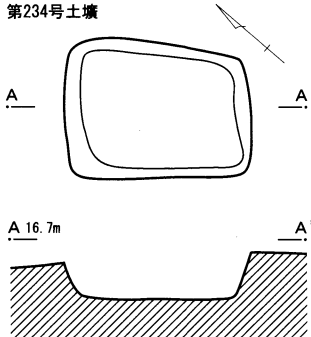
第232号土壙



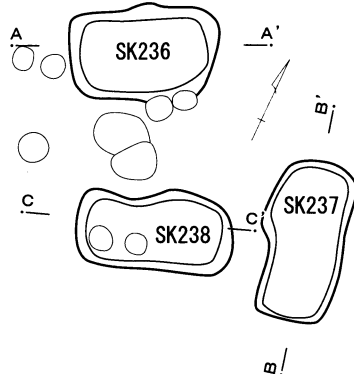
第233号土壙



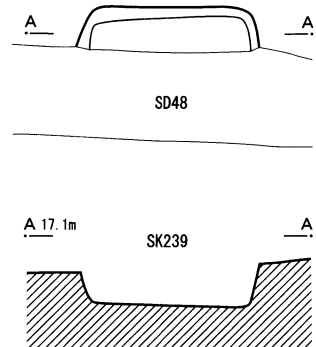
第234号土壙



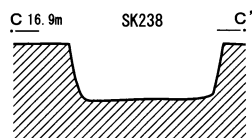
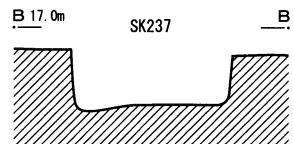
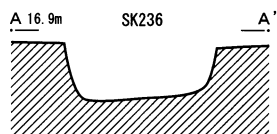
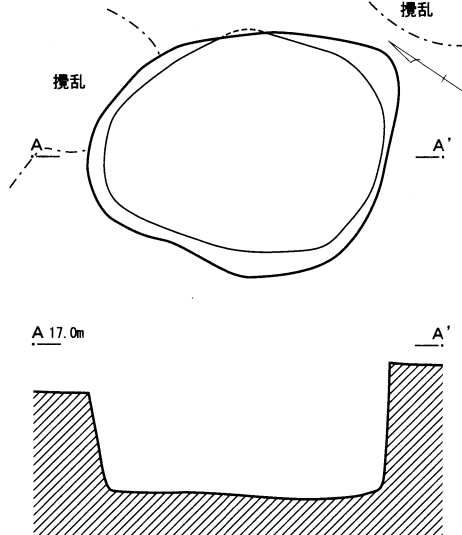
第236・237・238号土壙



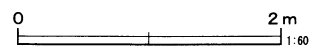
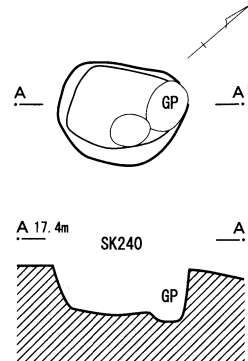
第239号土壙



第235号土壙



第240号土壙



第106図 土壙 (20)

第244号土壙 (第107図)

調査区東側のH・I-9グリッドに位置する。第127号土壙と近接し平行している。第128号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.38m、短軸0.69m、深さ0.77mである。長軸方位はN-15°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第245号土壙 (第107図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第11号住居跡を切っているが、調査は同住居跡を優先したため、部分的にしか記録できなかった。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸1.14m、短軸0.18m、深さ0.06mである。長軸方位はN-85°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第246号土壙 (第107図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第173号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.50m以上、短軸0.40m、深さ0.04mである。長軸方位はN-27°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第247号土壙 (第107図)

調査区中央北側のG-8グリッドに位置する。第177・181号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は方形と推定され、規模は長軸0.57m以上、短軸0.53m以上、深さ0.19mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第248号土壙 (第107図)

調査区西側のH-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.08m、短軸0.84m、深さ0.04mである。長軸方位はN-90°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第249号土壙 (第107図)

調査区西側のH-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.07m、短軸0.68m、

深さ0.55mである。長軸方位はN-52°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第250号土壙 (第107図)

調査区中央西側のH-5グリッドに位置する。第8号住居跡と重複し、本土壙の方が新しい。第37号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.86m、短軸0.62m、深さ0.10mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第251号土壙 (第107図)

調査区中央のH-6グリッドに位置する。第191・192号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸1.74m、短軸0.40m以上、深さ0.22mである。長軸方位はN-71°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第252号土壙 (第108図)

調査区中央のH-7・8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.94m、短軸0.67m、深さ0.36mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第253号土壙 (第108図)

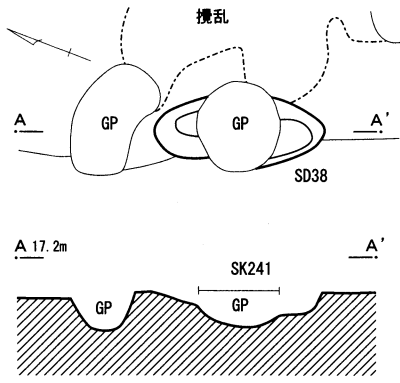
調査区中央のH-7グリッドに位置する。第204・254号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。北端は攪乱によって削平されている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.59m以上、短軸0.91m、深さ0.18mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

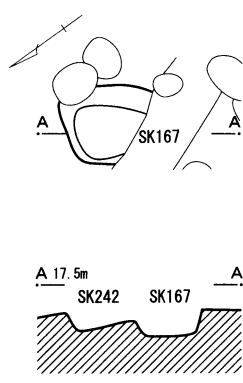
第254号土壙 (第108図)

調査区中央のH-7グリッドに位置する。第204・253・256・257号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.21m以上、短軸0.50m、深さ0.15mで

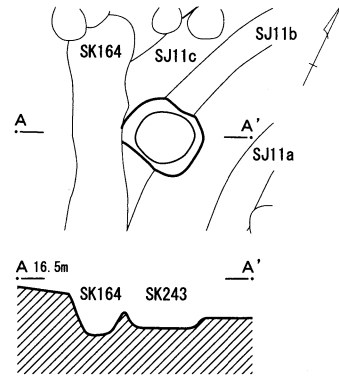
第241号土壤



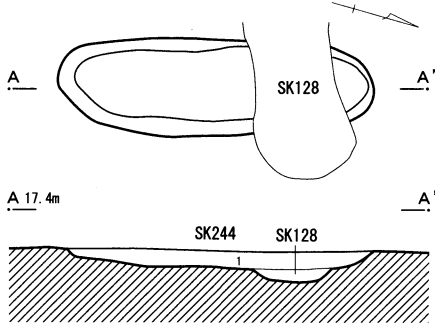
第242号土壤



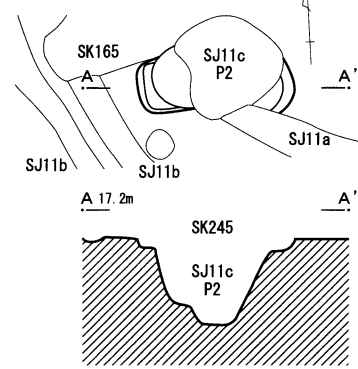
第243号土壤



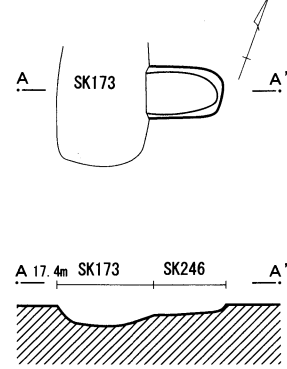
第244号土壤



第245号土壤



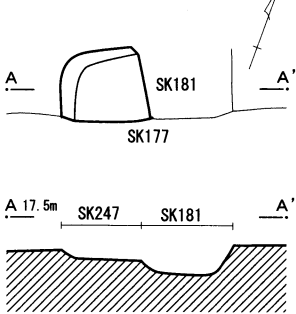
第246号具緒土壤



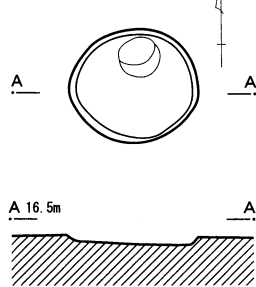
第244号土壤

1 褐色土 ロームブロック微量

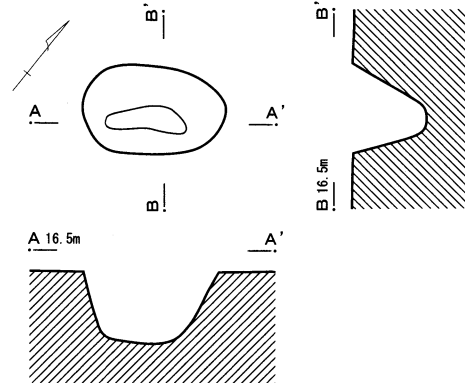
第247号土壤



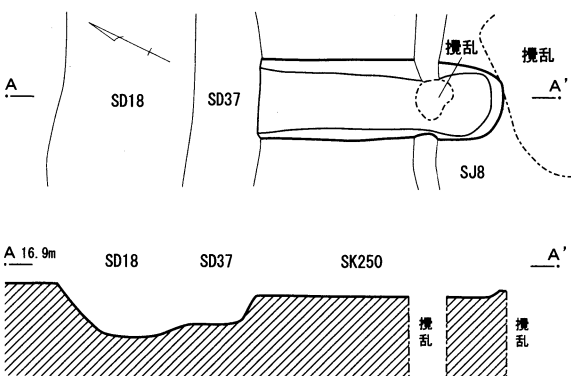
第248号土壤



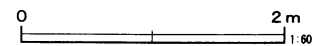
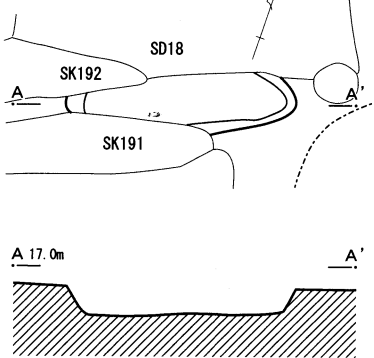
第249号土壤



第250号土壤



第251号土壤



第107図 土壤 (21)

ある。長軸方位はN-64°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第255号土壌 (第108図)

調査区中央北側のH・I-6・7グリッドに位置する。第256号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.58m以上、短軸0.55m、深さ0.31mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第256号土壌 (第108図)

調査区中央のH・I-7グリッドに位置する。第254・255・257号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.00m、短軸0.68m以上、深さ0.24mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第257号土壌 (第108図)

調査区中央のH・I-7グリッドに位置する。第254・256号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.68m以上、短軸0.46m以上、深さ0.11mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第258号土壌 (第108図)

調査区中央東側のH-8グリッドに位置する。第34号溝跡、第259号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸0.52m以上、短軸0.58m、深さ0.11mである。長軸方位はN-29°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第259号土壌 (第108図)

調査区中央東側のH-8・9、I-8グリッドに位置する。第155号土壌と近接し平行している。第152・258号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.90m、短軸0.79m、深さ0.27mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第260号土壌 (第108図)

調査区中央東側のH-8・9グリッドに位置する。第159・161・261号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は不定形で、規模は長軸0.84m以上、短軸0.50m以上、深さ0.20mである。長軸方位はN-17°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第261号土壌 (第108図)

調査区東側のH-9グリッドに位置する。第161・260号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸0.64m以上、短軸0.37m以上、深さ0.12mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第262号土壌 (第108図)

調査区東側のH-9グリッドに位置する。第163・261号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸0.58m以上、短軸0.58m、深さ0.10mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第263号土壌 (第109図)

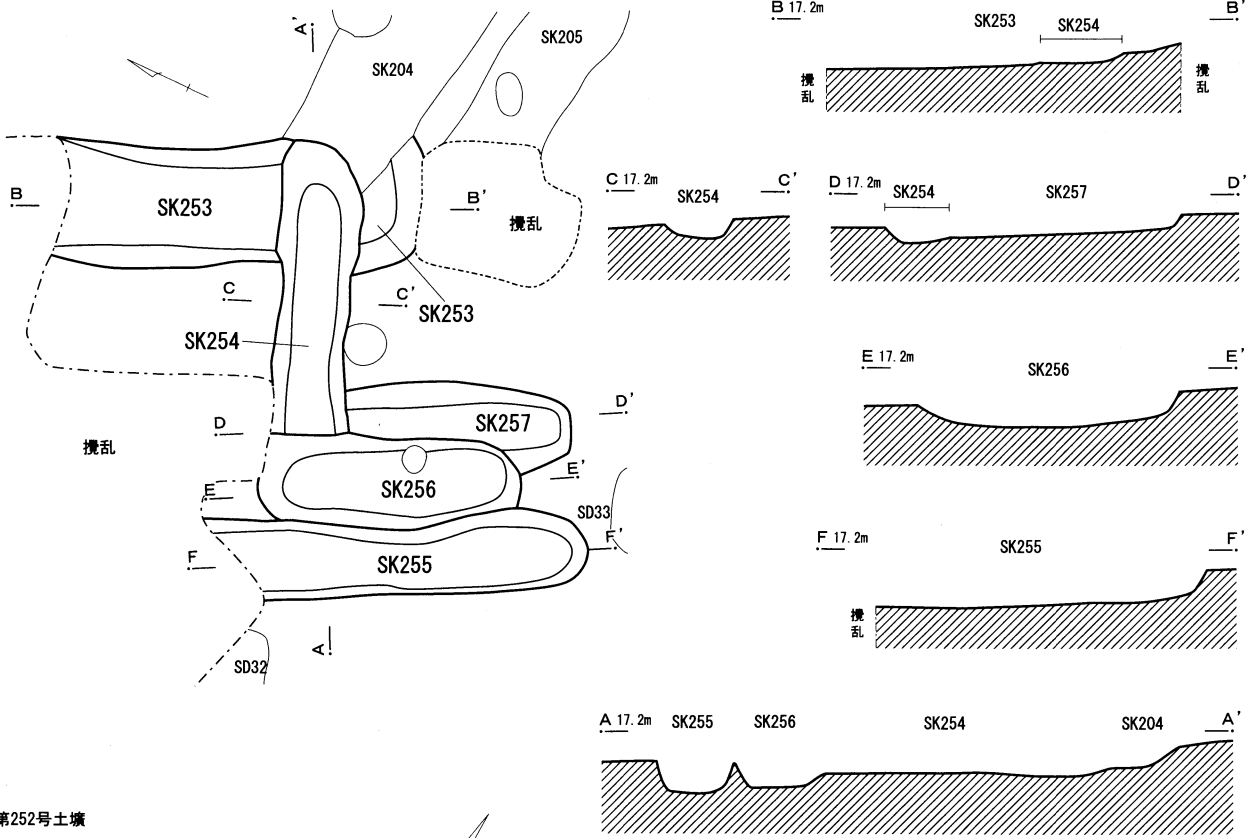
調査区中央西側のI-5・6グリッドに位置する。第8号住居跡と重複し、本土壌の方が新しい。また、第32号溝跡と多くの土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長楕円形と推定され、規模は長軸1.99m、短軸0.69m、深さ0.13mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

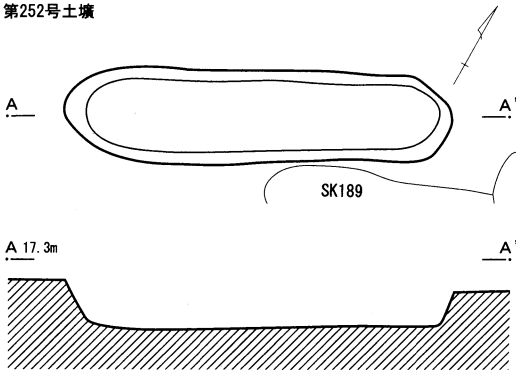
第264号土壌 (第109図)

調査区中央のI-6グリッドに位置する。第28号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸0.92m、短軸0.81m以上、深さ0.22mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。

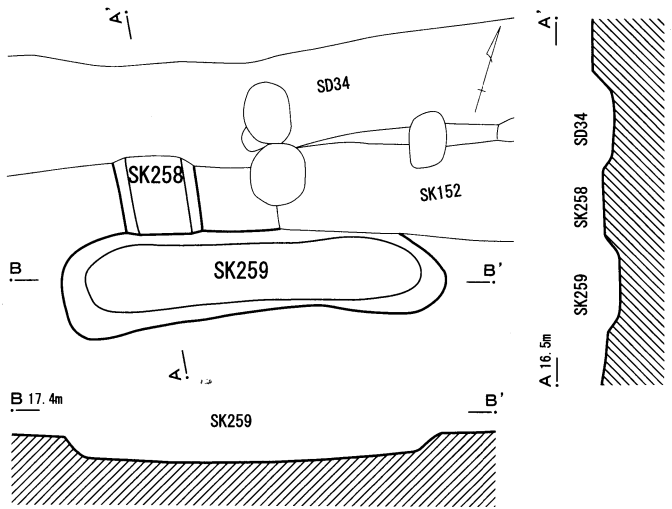
遺物は出土しなかった。



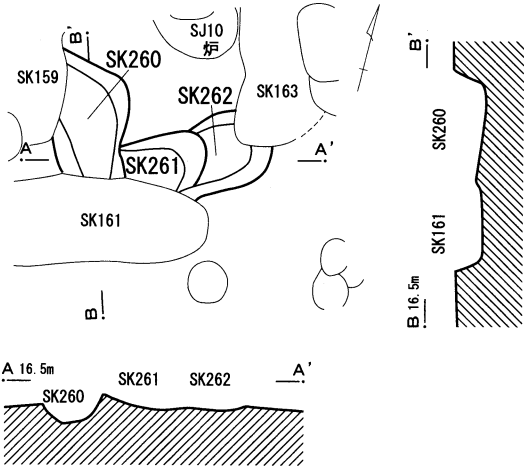
第252号土坑



第258・259号土坑



第260・261・262号土坑



第108图 土坑 (22)

第265号土壙 (第109図)

調査区中央のI-6グリッドに位置する。第28号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.80m以上、短軸0.68m、深さ0.23mである。長軸方位はN-86°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第266号土壙 (第109図)

調査区中央のI-7グリッドに位置する。攪乱によって、東側を削平されている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.95m以上、短軸0.69m、深さ0.14mである。長軸方位はN-55°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第267号土壙 (第109図)

調査区中央のI-7グリッドに位置する。第135号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.87m、短軸1.02m、深さ0.46mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第268号土壙 (第109図)

調査区中央東側のH・I-8グリッドに位置する。第146号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。北側は攪乱によって削平されている。平面形は長方形と推定され、規模は長軸1.32m、短軸0.61m以上、深さ0.24mである。長軸方位はN-60°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第269号土壙 (第109図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第133・143号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.58m以上、短軸0.18m、深さ0.30mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第270号土壙 (第109図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第137号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.16m、短軸0.62m、深さ0.24mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第271号土壙 (第109図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南側を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸0.91m以上、短軸0.73m、深さ0.42mである。長軸方位はN-23°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第272号土壙 (第109図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第130・273号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は不定形で、規模は長軸0.58m以上、短軸0.42m以上、深さ0.07mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

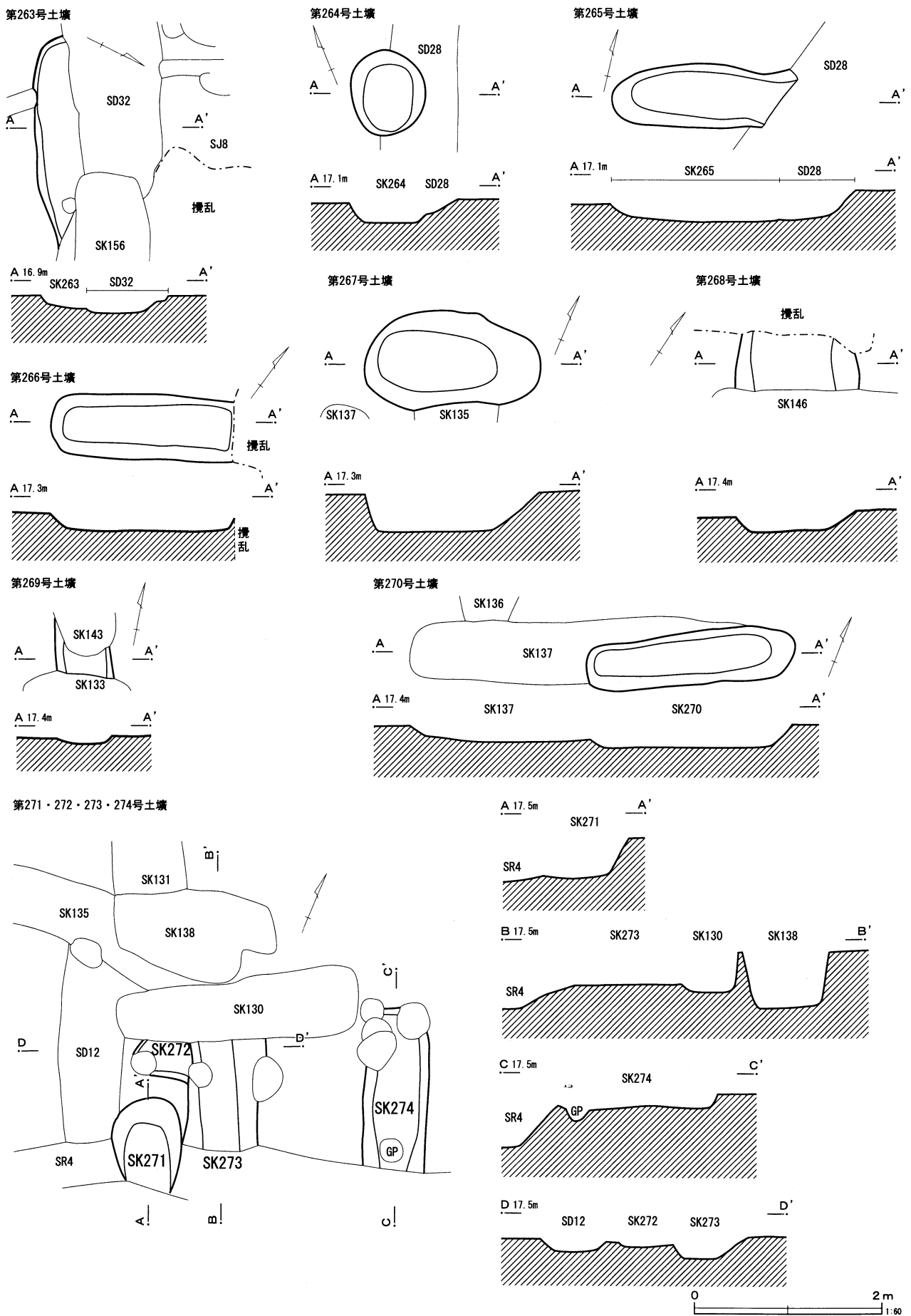
第273号土壙 (第109図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南側を記録できなかった。第130・272号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形と推定され、規模は長軸1.17m以上、短軸0.75m、深さ0.23mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第274号土壙 (第109図)

調査区中央東側のI-8グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、南側を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.73m以上、短軸0.69m、深さ0.13mである。長軸方位はN



—23°—Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第275号土壌 (第110図)

調査区中央東側のI—8・9グリッドに位置する。第155号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.29m以上、短軸0.73m、深さ0.19mである。長軸方位はN—26°—Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第276号土壌 (第110図)

調査区東側のI—9グリッドに位置する。第123号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.65m以上、短軸0.57m、深さ0.21mである。長軸方位はN—65°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第277号土壌 (第110図)

調査区中央東側のJ—8グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、東側を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.05m以上、短軸0.65m、深さ0.20mである。長軸方位はN—65°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第278号土壌 (第110図)

調査区中央東側のJ—7・8グリッドに位置する。第93号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.59m以上、短軸0.46m、深さ0.12mである。長軸方位はN—72°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第279号土壌 (第110図)

調査区中央南側のK—6グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸0.62m、短軸0.52m、深さ0.05mである。長軸方位はN—52°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第280号土壌 (第110図)

調査区中央南側のK—8グリッドに位置する。第4号方形周溝墓を切っているが、調査は同方形周溝墓を優先したため、東側を記録できなかった。平面形は長方形で、規模は長軸1.61m、短軸0.34m以上、深さ0.15mである。長軸方位はN—16°—Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第281号土壌 (第110図)

調査区南側のL—6グリッドに位置する。第13号溝跡を切っているが、調査は同溝跡を優先したため、西側を記録できなかった。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.38m、短軸0.34m、深さ0.04mである。長軸方位はN—56°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第282号土壌 (第110図)

調査区南側のL—7グリッドに位置する。平面形は径0.65mの円形で、深さは0.18mである。

遺物は出土しなかった。

第283号土壌 (第110図)

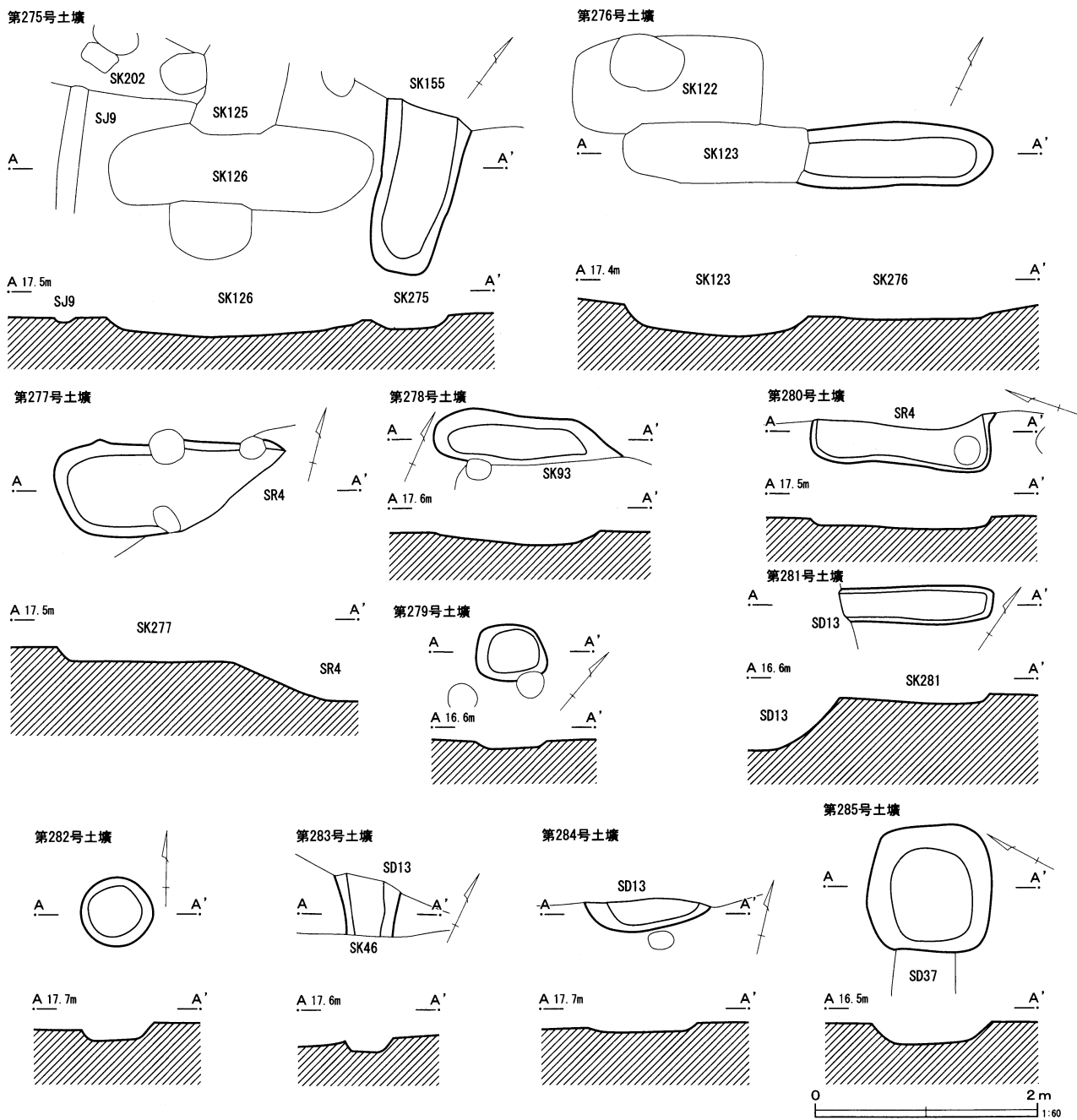
調査区南側のL—8グリッドに位置する。第13号溝跡を切っているが、調査は同溝跡を優先したため、北側を記録できなかった。平面形は長方形と推定され、規模は長軸0.53m以上、短軸0.70m、深さ0.13mである。長軸方位はN—26°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第284号土壌 (第110図)

調査区中央南東側のL—9グリッドに位置する。第13号溝跡を切っているが、調査は同溝跡を優先したため、北側を記録できなかった。平面形は楕円形で、規模は長軸1.11m、短軸0.29m以上、深さ0.07mである。長軸方位はN—76°—Eを指す。

遺物は出土しなかった。



第110図 土壌 (24)

第285号土壌 (第110図)

調査区西側の I-4・5 グリッドに位置する。第37号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は方形で、規模は長軸1.13m以上、短軸1.08m、深さ0.20mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

6. 掘立柱建物跡とピット群

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第111図)

調査区中央東側のI・J-8・9グリッドに位置する。第3号住居跡、第4号方形周溝墓を壊している。その他に多くの土壌や溝跡と重複しており、遺構確認時には認識できなかった。その土壌群を精査中、より深いピットに注意が向いて土壌完掘後に本掘立柱建物跡を確定した。そのため土壌との新旧関係を土層断面で確認することができなかった。しかし、本掘立柱建物跡認識後、一部の土壌掘削中に注意深く重複関係を確認したが、本掘立柱建物跡が後出する土層は見られなかった。

覆土は近世土壌と同じく褐色系土で、一部黒褐色系土が混じる。特に突き固めた様子もなく、径1cmほどのロームブロックを多く含んでいた。

建物の規模は5間×2間で、北側に庇が付く東西棟である。棟持柱の位置は東側が北寄りに、西側が南寄りに設置されている。ただし、桁行南側のP10・12は径も小さく浅いため、本掘立柱建物跡に伴うのか疑わしい。しかし、庇の相対する位置にP22・P20があることから、何か補助的に機能する柱と考えることもできるが桁行からは除外した。なおP10-P11間の長さは1.05m、P12-P13間の長さは1.11mである。

桁行寸法は10.20m、梁行寸法は3.78mで、底部を含めた寸法は4.53mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。桁行の柱間寸法は2.04m等間で揃う。梁行の柱間寸法は、P7-P8間は2.40m、P1-P16間は2.64mと等間で寄っているわけでない。

ピットは円形を基調としているが、P5のみ方形である。またP5・6では、柱抜きのための掘り崩しも確認した。P1~5・7~9・11・13・15は、径0.39~0.48mでまとまる。P16は径0.33mと小さく、P6・14は径0.63、0.54mと大きい。P5は一辺0.48mである。底部のP18~21・23・

24は径0.30~0.45mで、P17・22は径0.24、0.27mと小さい。おそらく他の遺構によって上面を削られているため、小さくなっていると思われる。P2~4・11~14の深さは0.79~1.04mと深く、西側のP1・15、東側のP5・6・8・9の深さは0.55~0.65mと少し浅めである。P7・16と庇部のP17~P24は、0.35~0.55mと浅い。

遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、遺物が出土していないため、確定できないが、前述の土層と覆土の所見から近世と考えられる。

第2号掘立柱建物跡 (第112図)

調査区南側のL-6・7グリッドに位置する。

第5・35号溝跡に縦断されて壊されている。P3が第13号溝跡を壊している。第6号住居跡が5m北に位置して、軸がほぼ同一方向を指している。建物の規模は2間×2間の東西棟である。

桁行寸法は3.57m、梁行寸法は2.98mである。主軸方位はN-73°-Eを指す。桁行の柱間寸法はP1-P2間が1.83m、P2-P3間が1.74m、P5-P6間が1.92m、P6-P7間が1.65mである。梁行の柱間寸法は1.49m等間で揃う。

ピットは円形を基調とし、断面は逆台形となる。P1~8は、径0.36~0.42mでまとまる。P1~8の深さは0.18~0.35mで、P2・5が若干浅い。

遺物は奈良・平安時代の須恵器坏の底部が1点出土した。

第2号掘立柱建物跡出土遺物

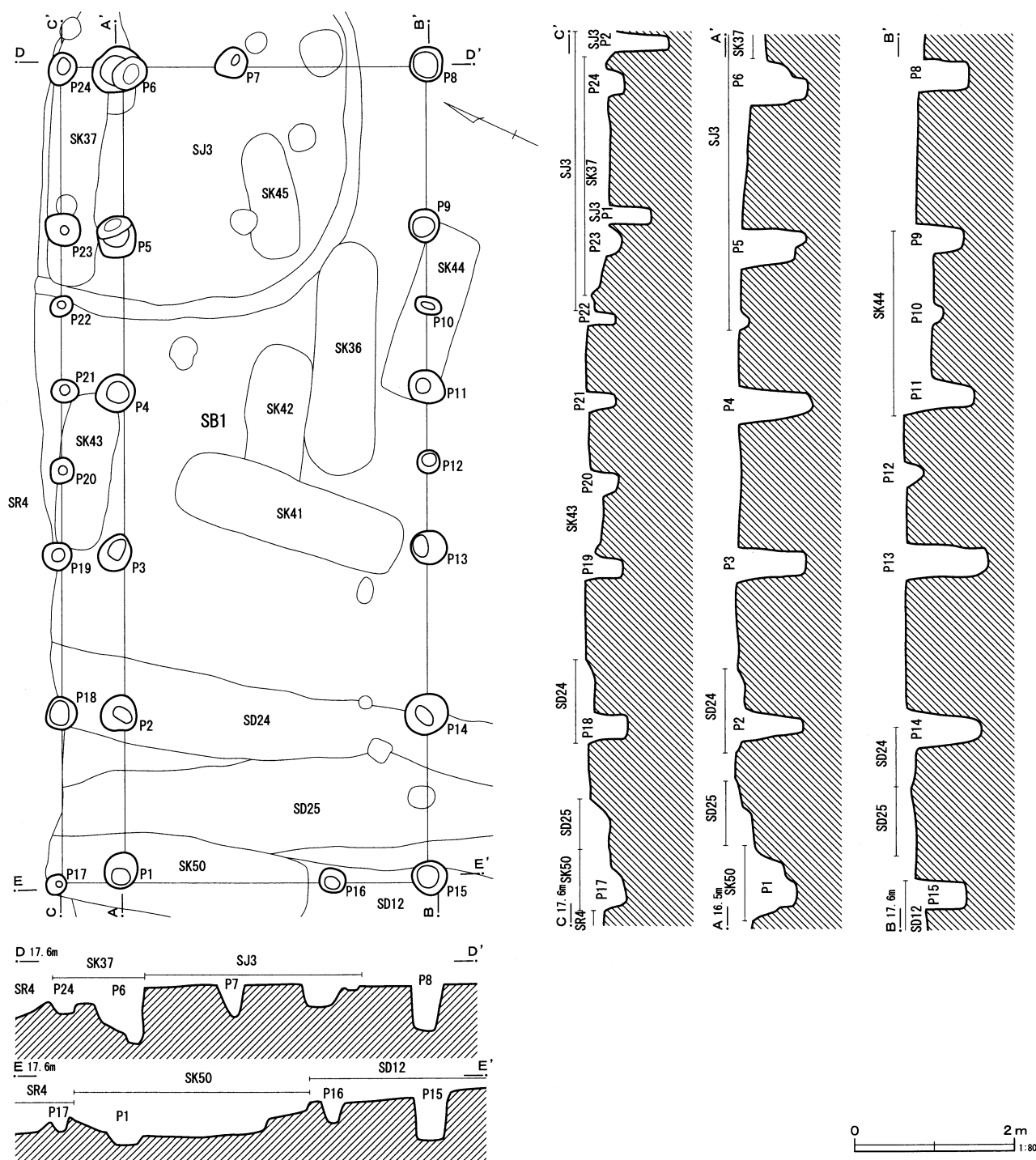
1の底面は、回転糸切りで無調整である。9世紀中葉~後葉と思われる。

遺構の時期は、出土遺物と第6号住居跡との関係性から奈良・平安時代の所産と考えられる。

第3号掘立柱建物跡 (第113図)

調査区中央南西側のM-5・6グリッドに位置する。

建物の規模は3間×1間で、南側に庇が付く東



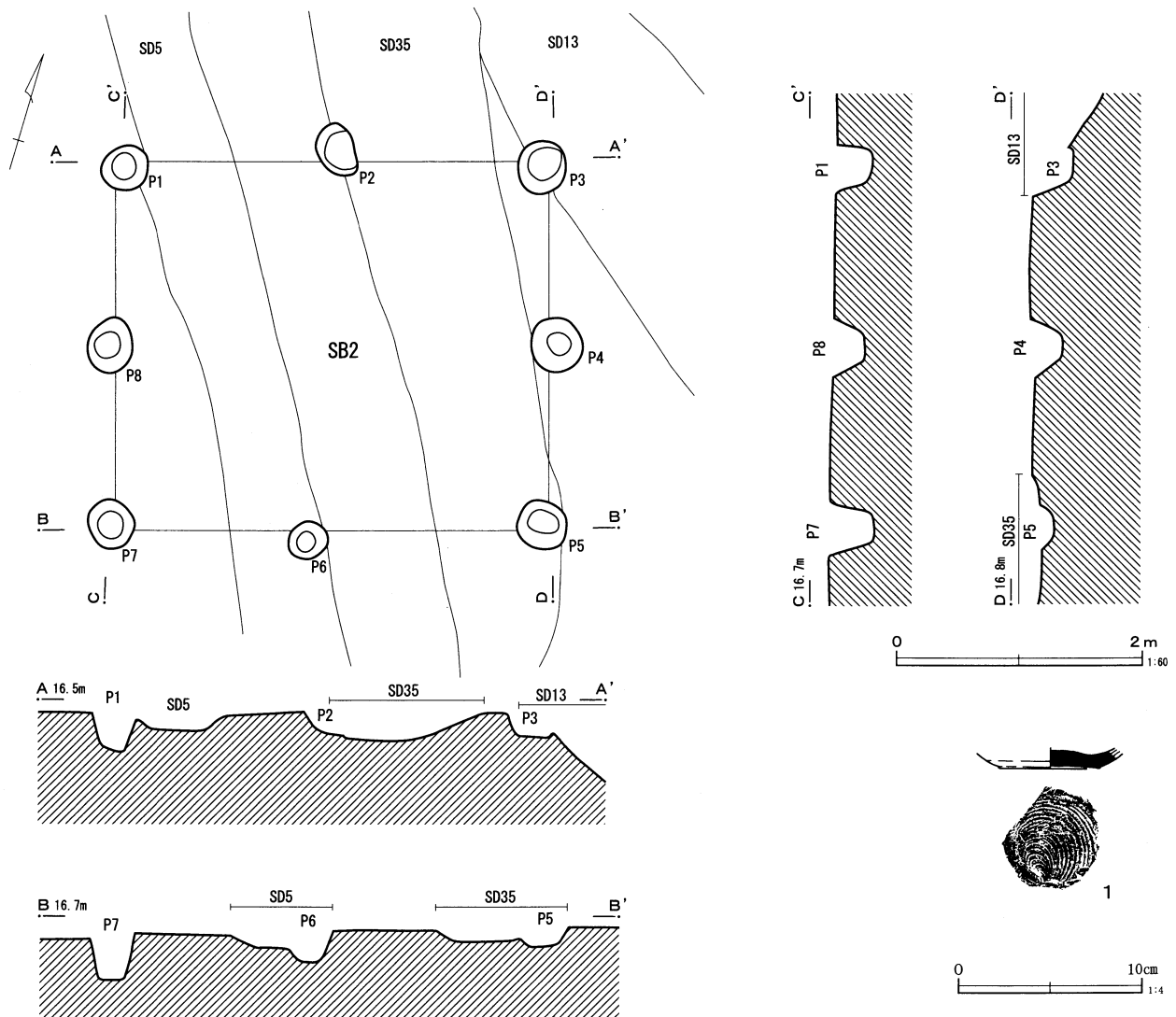
第111図 第1号掘立柱建物跡

西棟である。南側のP 6—P 7間の柱を欠く。庇も同じくP 8—P 9 a間の柱を欠いている。P 1～3・9・10 aには、それぞれ近接してピットがあり、柱筋から少し外れているきらいもあるが、建て替えの可能性が考えられる。

桁行寸法は5.76m、梁行寸法は3.60mで、庇部を含む梁行は4.44mである。主軸方位はN—60°

—Eを指す。桁行の柱間寸法はP 1 a—P 2 a間が1.77m、P 2 a—P 3 a間が2.25m、P 3 a—P 4間が1.74mで、中央が長く、左右の柱間はほぼ同じ距離である。P 5—P 6間は、2.01mで北側と異なる。庇部のP 9 a—P 10 a間は、桁行北側と同じく1.74mである。

ピットは円形を基調としている。P 1 a～3



第112図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物

a・4・6・7・9 aは径0.33~0.48mでまとまる。P5・8・10 aは0.27~0.30mで少し小さい。P1~3 a・5・7・8・9 aの深さは0.14~0.24m、P4・6は0.30mで少し深い。P10 aは深さ0.08mと非常に浅い。また、P1・2 bの径は、aより少し大きくなり、3・9・10 bは少し小さくなる。深さはaとほぼ同じである。

遺物は出土しなかった。

第4号掘立柱建物跡 (第114図)

調査区中央西側のJ-5グリッドに位置する。建物跡は2間×2間の東西棟である。西隅のピット一つを欠く。

桁行寸法は3.15m、梁行寸法は2.66mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。桁行の柱間寸法はP1-P2間は1.83m、P2-P3間は1.32mで

ある。ピットは円形を基調としている。P1~8は径0.36~0.42mでまとまる。P2・4・6の深さは0.29~0.42mで、P1・3・5・7は0.18~0.28mと浅い。

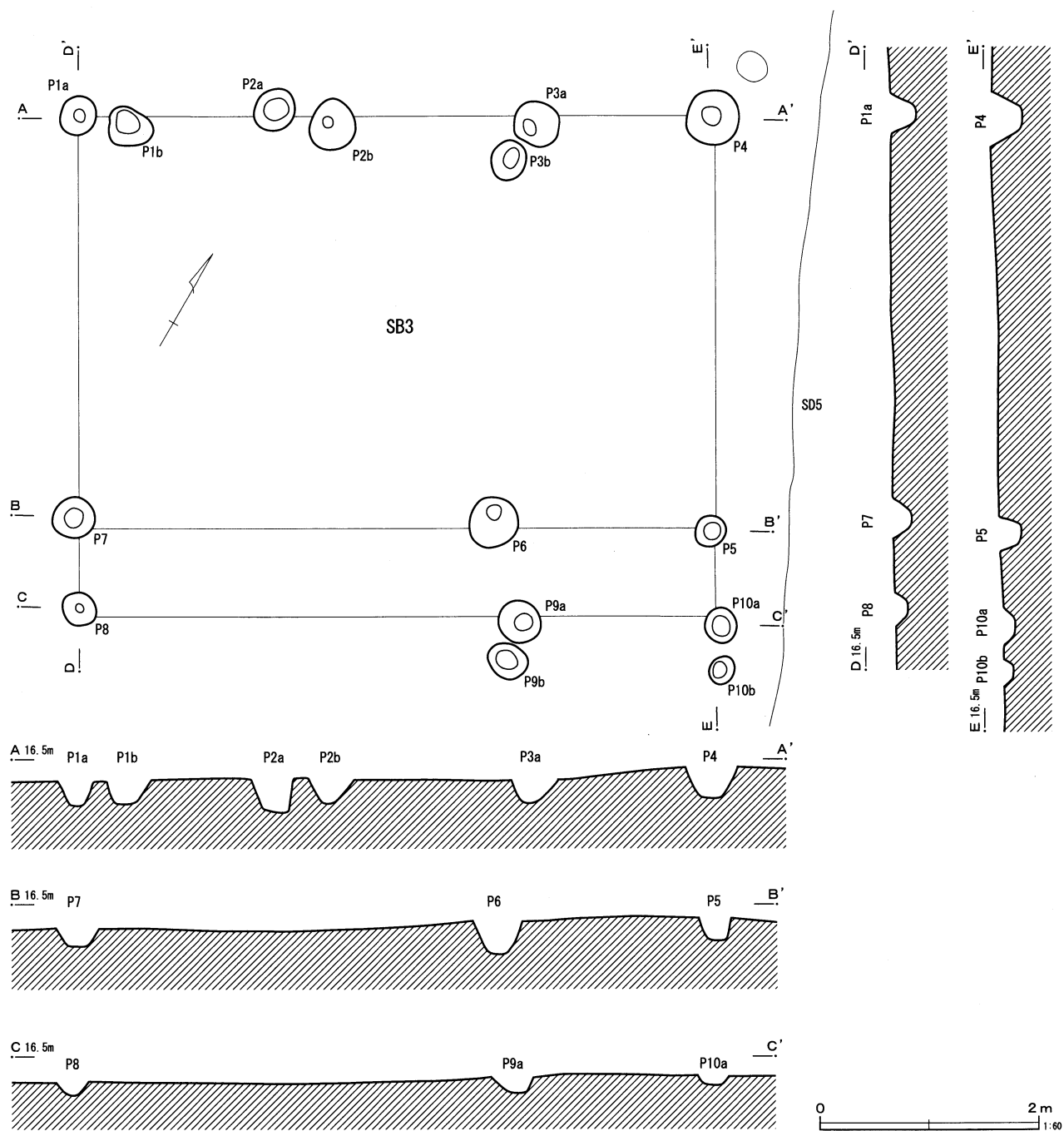
遺物は出土しなかった。

第5号掘立柱建物跡 (第115図)

調査区西側のH-2・3、I-3グリッドに位置する。第6号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

建物の規模は4間×2間の南北棟である。

桁行寸法は7.40m、梁行寸法は3.26mである。主軸方位はN-20°-Eを指す。桁行の柱間寸法はP3-P4間が1.73mで、他は1.89m等間で揃う。梁行の柱間寸法はP1-P2・P2-P3間が1.63m等間で揃うが、南側に行くに従って合わ



第113図 第3号掘立柱建物跡

なくなる。P11—P14・P14—5間はかろうじて1.63mで揃う。P7—P8間は1.76m、P8—P9間は1.50mとなる。

ピットは円形を基調としている。P1～11・13は径0.30～0.39mでまとも、P12・14は径0.48mと少し大きい。P2・5～7・9の深さは0.50～0.58mである。P3・13は0.33、0.44mと浅く、P1・4・8・10～12・14は0.65～0.83mと深い。

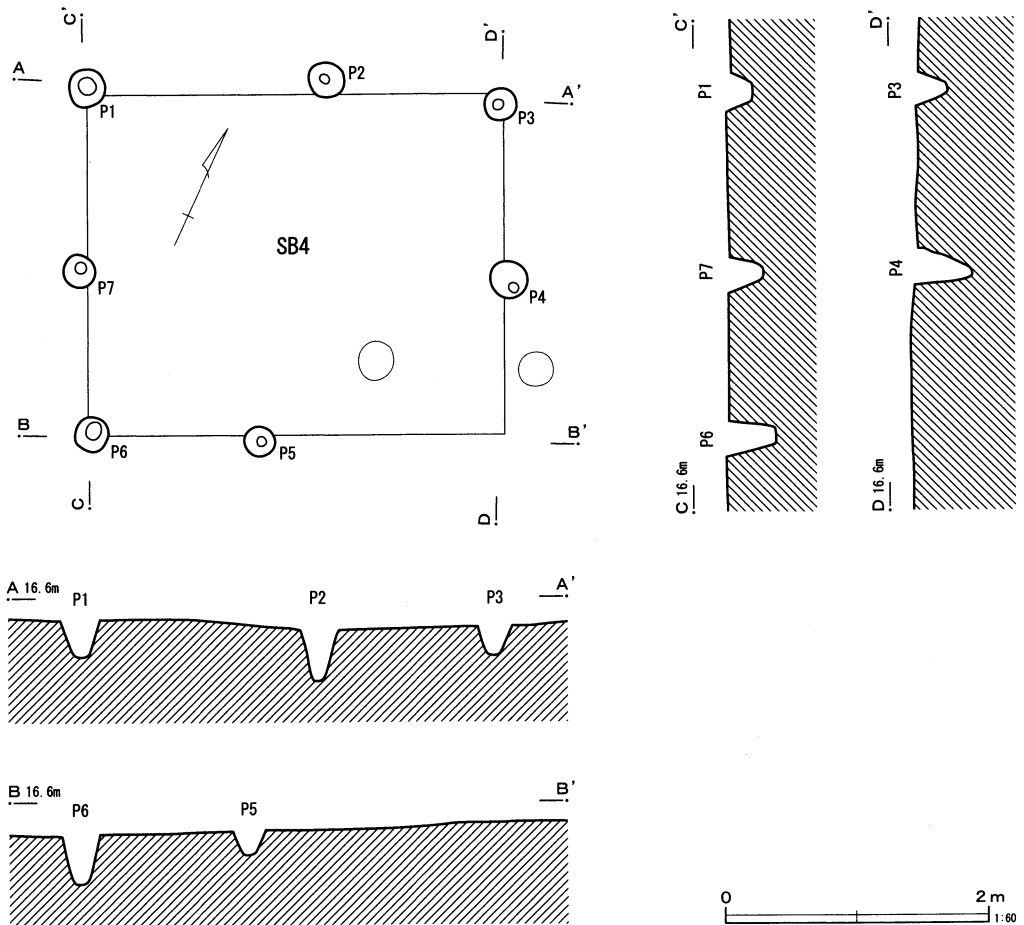
遺物は混入したと思われる弥生土器小片と須恵器大甕胴部片が出土した。

第6号掘立柱建物跡 (第116図)

調査区西側のH—2・3、I—3グリッドに位置する。第5号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。P2・7の棟持柱は、外側に出て亀甲形をしている。

建物跡は4間×2間の南北棟である。

桁行寸法は6.51m、梁行寸法は3.04mである。



第114図 第4号掘立柱建物跡

主軸方位はN-14°-Wを指す。桁行の柱間寸法はP3-P4間が2.13mで、P4-P5間とP5-P6間は2.19m等間で揃う。

ピットは円形を基調としている。P2・7は楕円形で、規模が0.30×0.13m、0.66×0.42mである。P4のみ径0.30mで小さく、それ以外は径0.39~0.51mでまとまる。P2は0.14mと非常に浅く、P1・3~7・10・11は深さ0.53~0.62mである。P8・9は0.69、0.88mと深い。

遺物は混入したと思われる弥生土器小片が少量出土した。

第7号掘立柱建物跡 (第117図)

調査区南側のH-3・4グリッドに位置する。

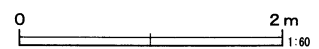
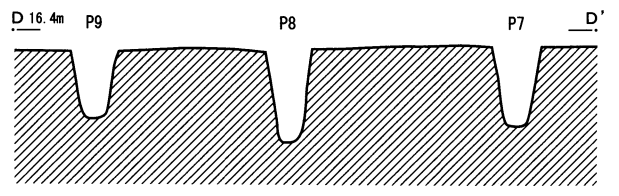
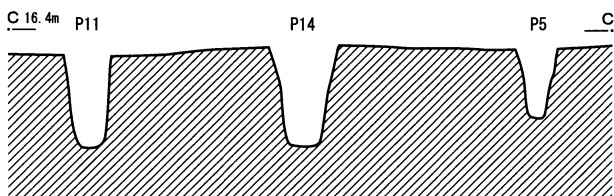
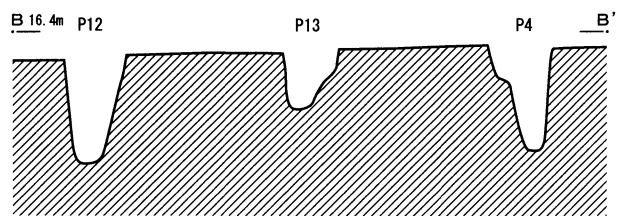
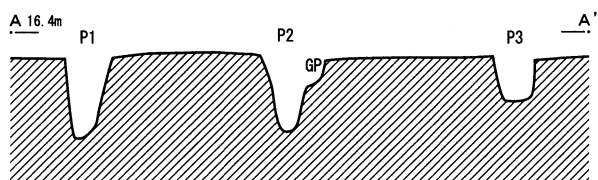
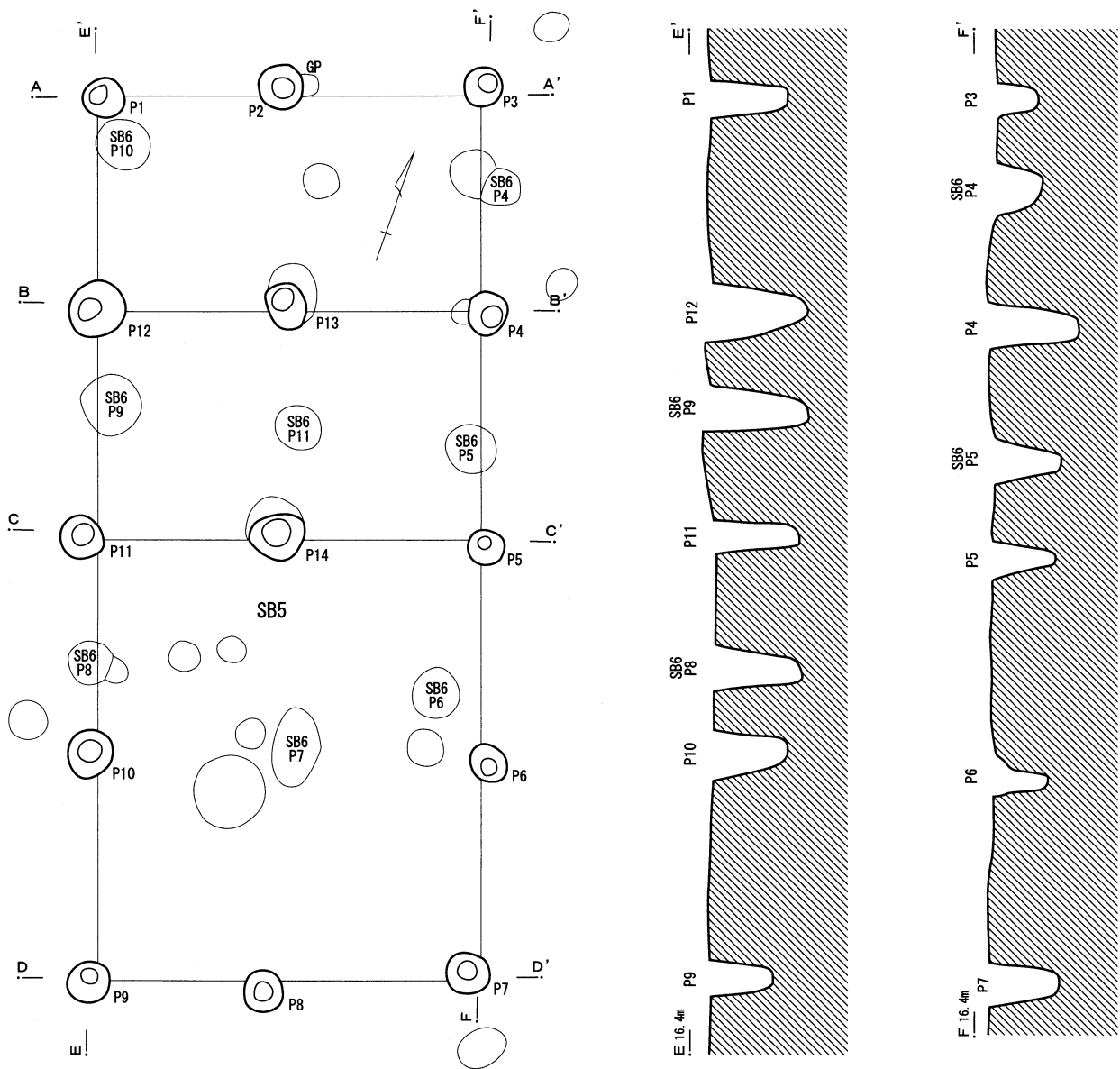
建物の規模は2間×2間で、南側に庇が付く東西棟ある。

桁行寸法は4.41m、梁行寸法は5.40mで、庇部を含めた梁行は5.16mである。主軸方位はN-16°-Eを指す。桁行の柱間寸法はP1-P2間が2.85m、P2-P3間が2.25mである。梁行の柱間寸法はP3-P4間が2.34m、P4-P5間が2.07mである。ピットは円形を基調としている。P1~3・4・7~10は径0.30~0.33mでまとまる。P2・5・6は径0.48~0.69mと大きい。P4・8の深さは0.05、0.27mと浅く、P5・10は0.59、0.68mと深い。それ以外は深さ0.41~0.52mである。

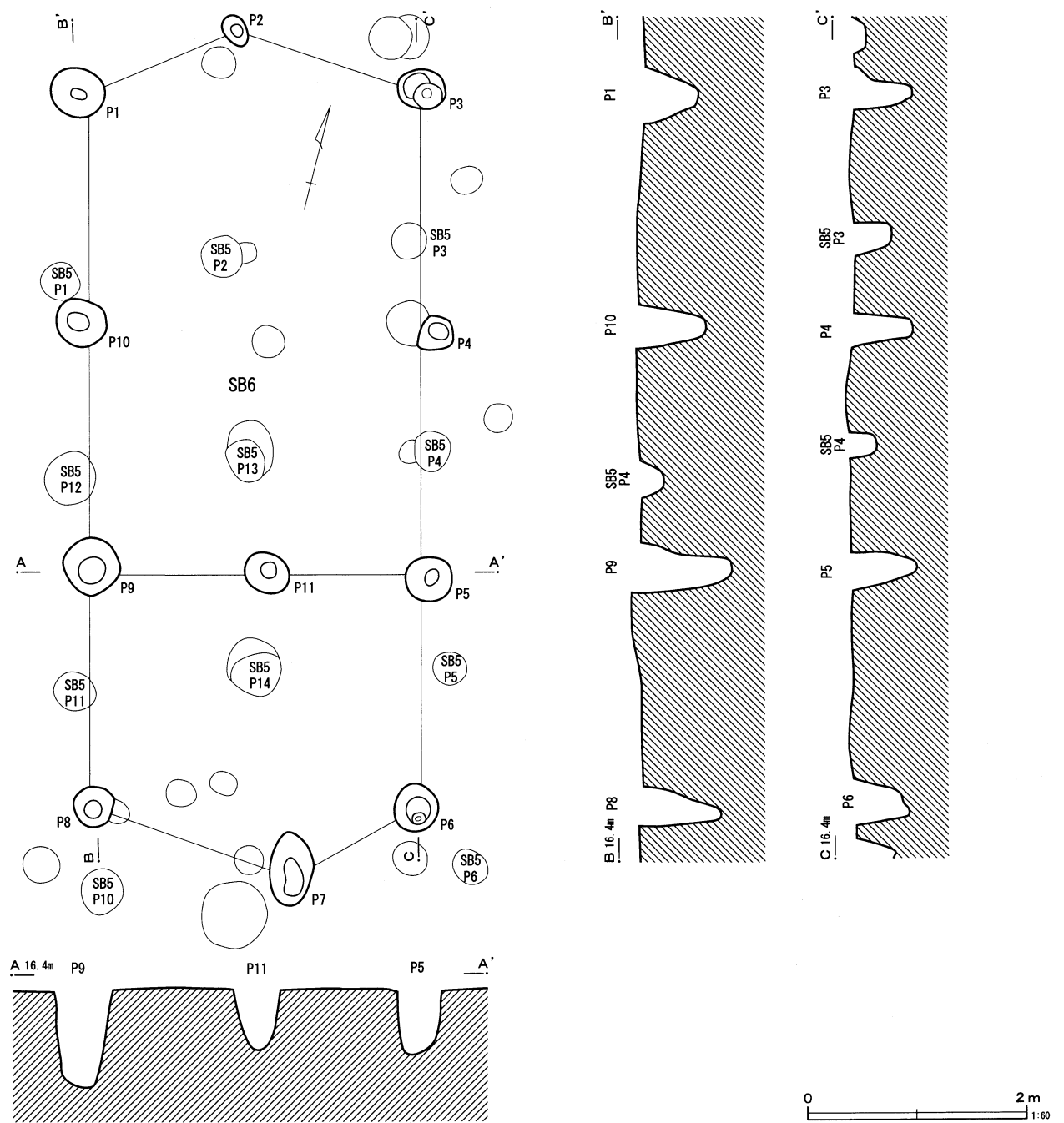
遺物は出土しなかった。

第8号掘立柱建物跡 (第118図)

調査区南側のH-3・4、I-4グリッドに位置する。



第115图 第5号掘立柱建物跡



第116図 第6号掘立柱建物跡

建物の規模は2間×2間の総柱風建物跡であるが、P3-P4間のピットを欠く。

桁行・梁行寸法は3.30mである。主軸方位はN-22°-Eを指す。東西面の柱間寸法は1.65m等間で揃う。南北面の柱間寸法はP4-P5間は1.56m、P5-P6間は1.74mである。

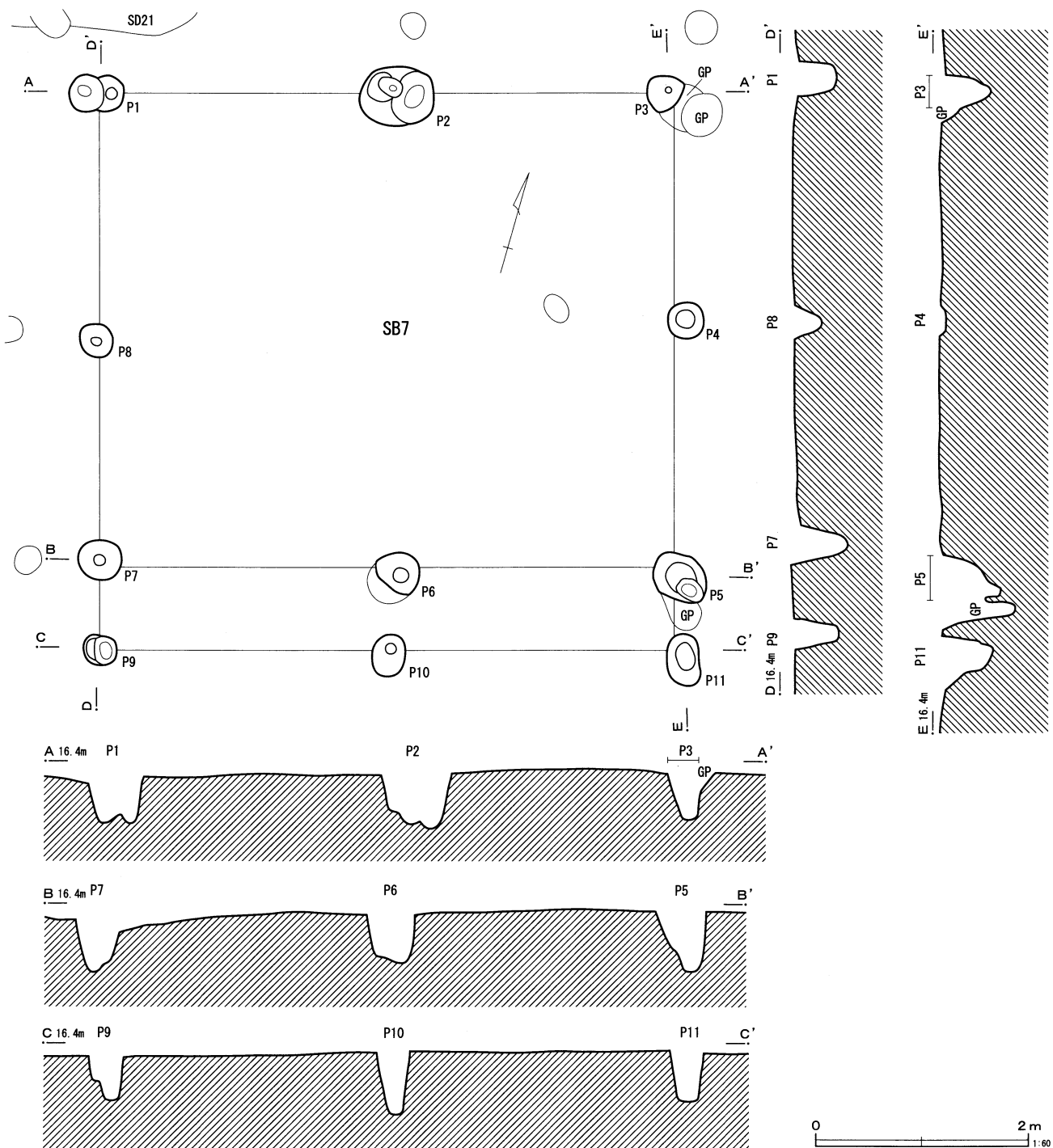
ピットは円形を基調としている。P1・4~7

は径0.36~0.42mで、P2・3・7は0.27~0.33mと少し小さい。P1~7は深さ0.52~0.74mでまとも、P8のみ0.28mと浅い。

遺物は混入したと思われる弥生土器小片、埴輪小片、奈良・平安時代の須恵器壺が出土した。

第8号掘立柱建物跡出土遺物

1は須恵器壺の肩部である。外面にはタタキ後



第117図 第7号掘立柱建物跡

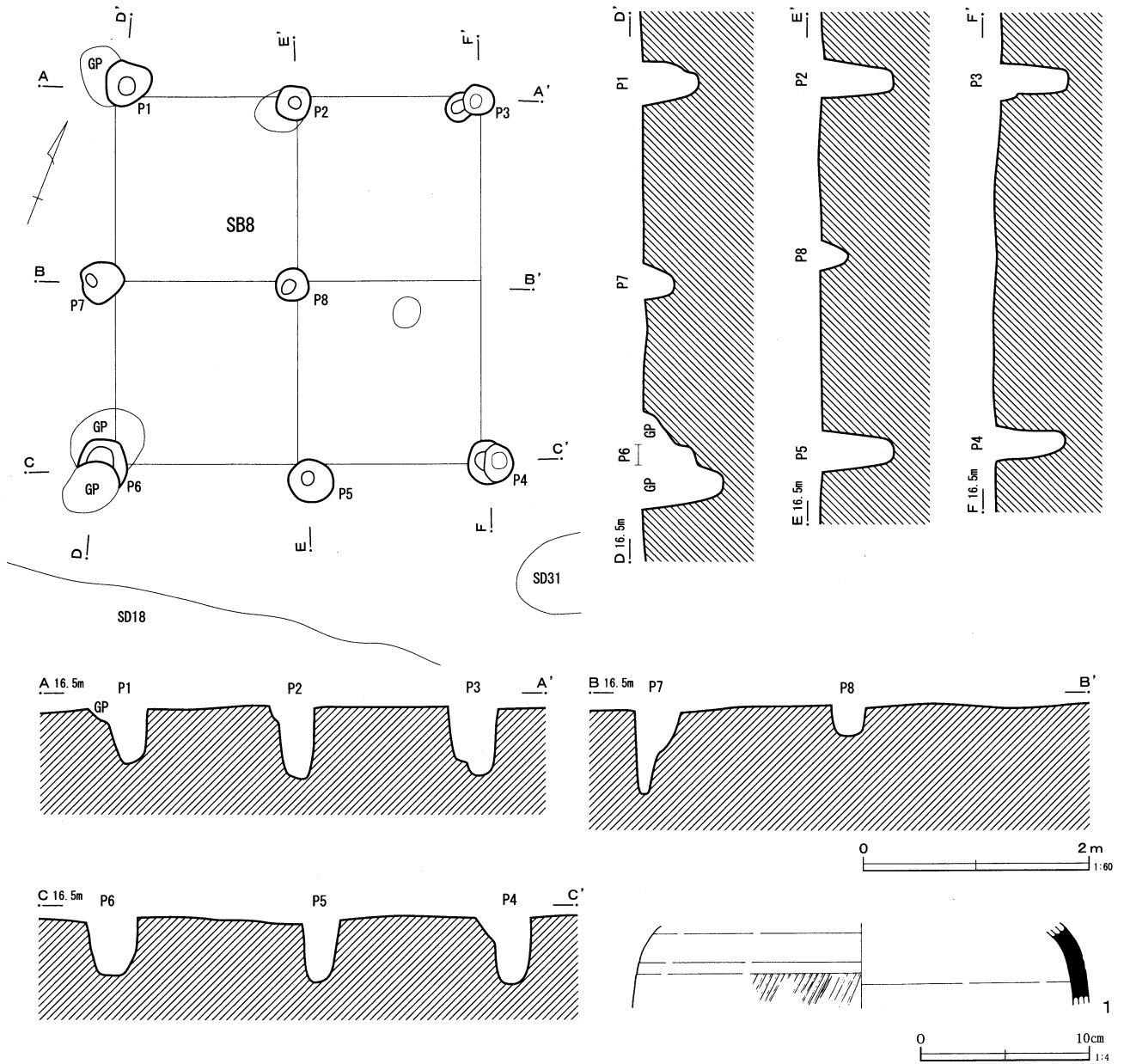
ロクロナデを施す。混入であろう。

第9号掘立柱建物跡 (第119図)

調査区南側のG・H-4グリッドに位置する。建物の規模は3間×2間の南北棟である。桁行寸法は6.93m、梁行寸法は4.02mである。主軸方位はN-14°-Eを指す。桁行の柱間寸法は2.31m等間で揃う。また梁行の柱間寸法も2.01m等間で揃っている。

ピットは円形を基調としている。P1・3・4・6・10は径0.38~0.45mで、P2・5・7~8は径0.26~0.33mと少し小さい。P2・7は0.20、0.27mと非常に浅く、P1も0.37mで浅い。それ以外は0.55~0.75mである。

出土遺物は中国から輸入した白磁の、いわゆる口ハゲ皿1点がある。また混入したと思われる縄文、弥生土器小片が出土している。



第118図 第8号掘立柱建物跡・出土遺物

第9号掘立柱建物跡出土遺物

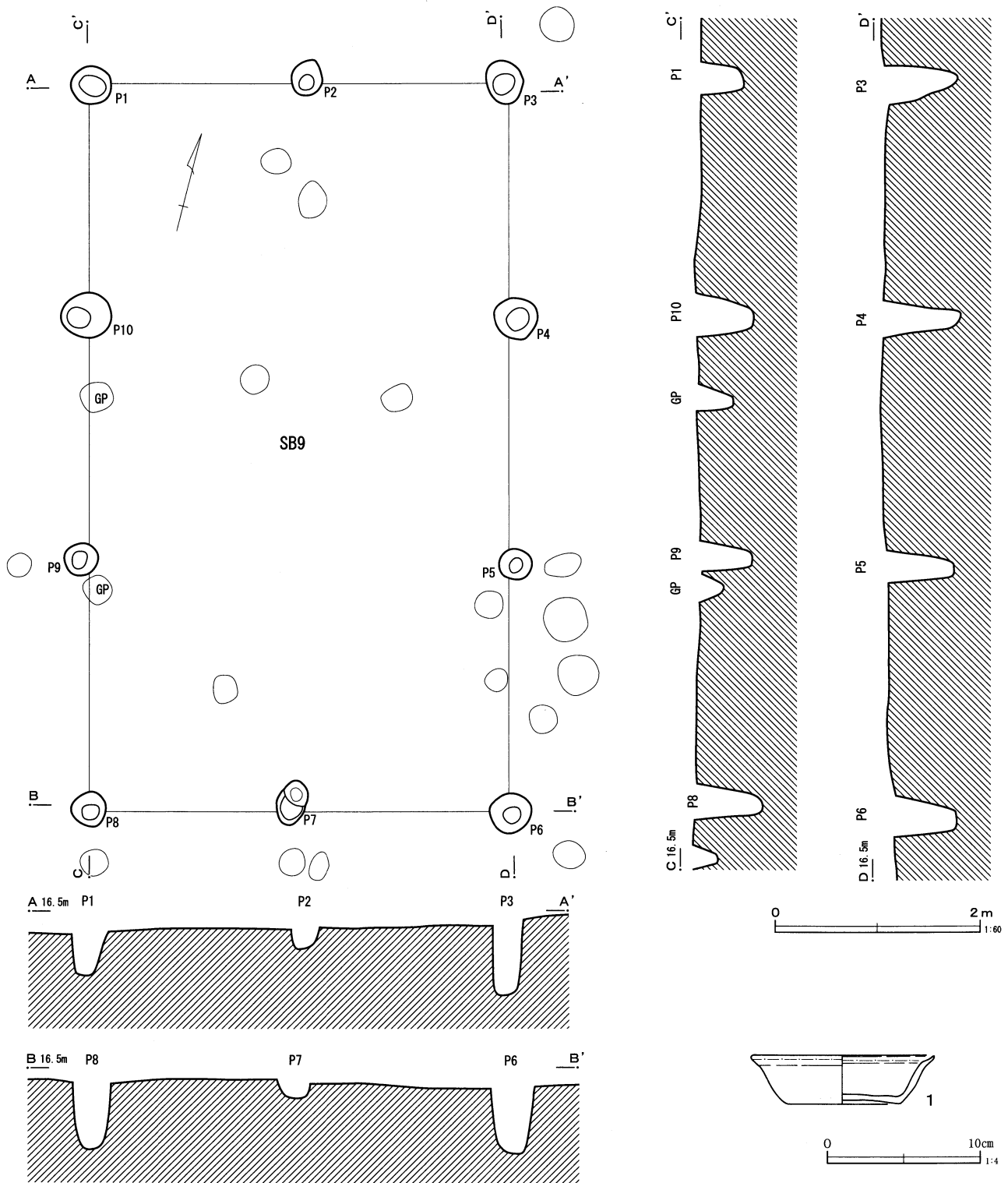
1はロクロ成形で、胎土は緻密である。時期は13世紀中葉～14世紀前半と思われる。

(2) ピット群 (第9・10図)

調査区中央南側J～L-6・7グリッドとJ～L-8グリッド西側に多数のピットが密集して

検出された。しかし、その中で掘立柱建物跡や柵列跡などとなる組み合わせは発見できなかった。

また、第5～9号掘立柱建物跡が位置するG～I-3・4グリッドには、まばらにピットが分布する。また、F-7・8、G-8グリッドにもまばらにピットが分布するが、掘立柱建物跡や柵列跡などとなる組み合わせは発見できなかった。



第119図 第9号掘立柱建物跡・出土遺物

第25表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	坏		[1.0]	(5.5)	G I	普通	明灰黄	80	P1出土 南比企産

第26表 第8号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第118図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	壺		(5.0)		G I	良好	灰	15	P5出土 南比企産

第27表 第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	白磁	皿	(11.8)	3.2	(7.2)		良好	灰白	40	P9出土 中国産 13C中葉~14C前半

7. 遺構外・グリッド・表採遺物

縄文土器 (第120・121図)

台地上の遺構外よりは、出土量は多くないものの、縄文時代早期前葉から後期前葉の各期の土器が出土している。ここでは便宜上これらを8つの群に分けて詳述する。

なお、今回の調査でもっとも多くが出土した第III群については、低地部包含層の項でさらに細かく分類している。あわせて参照されたい。

第I群土器 (第120図12・13)

早期前葉の撚糸文系土器をこの群とした。台地上での出土は少なく、図示できたのは12・13の2点のみである。いずれも胴部下位の無文片だが、低地部の包含層から出土した口縁部片を参照する限りでは、東山式期の所産と考えられる。

第II群土器 (第120図14~18)

早期後葉の条痕文系土器である。5点を示したが、いずれも粗く浅い条痕で器面整形が行われている。このうち、15は半截竹管によって破片下位の横位区画、さらに縦位文様が描かれており、充填文は観察できないが、茅山下層式期あるいは上層期に製作されたものと判断できる。また、他の破片も、条痕調整の手法や、やや粘質感のある胎土の特徴から、条痕文系後半期の所産とみて大過ないだろう。

第III群土器 (第120・121図19~66)

前期前半の羽状縄文系土器を対象とした。今回の調査でもっとも多く発見された。台地上での出土は、低地部の包含層に比してその量が大きく劣るものの、他時期のものに対しては、やはり抜きんでている。これらのほとんどが関山II式期の所産に集中している。

19~29は、口縁部文様帯、もしくは胴部特殊文様帯を設けるものである。基本的に、文様帯内は縄文を地文としている。工具文の施文は、三回一組の多截竹管状工具による平行沈線文が主流だが、櫛状工具(20)・爪形文(22・27)などもある。

構図は鋸歯を基調としており、21・23・25のような幅狭の鋸歯文帯を特別に設けるのが特徴的である。

30は、連続刺突文、31は貝殻背圧痕文、32~36は無節斜縄文が施文されている。前者の痕跡は一定しておらず、縄の先端が使用されたと推定できる。また、31の施文は殻頂近くを強く押しつけており、結果として生ずる波打つ器面も意識されているかも知れない。

37~46は、単節斜縄文を施文するもので、37~42はループ文を多段化して配することによって斜縄文帯と対置させ、文様効果をあげている。原体は、基本的に0段多条となるが、45・46は節の幅が広いことから、2条である可能性が高い。

47~51は、いわゆる正反の合の圧痕が見られる。図示した5点はいずれもA種に相当する原体が使用されている。また、48には42とおなじ支点を上下移動させた櫛状工具によるコンパス文が加えられている。

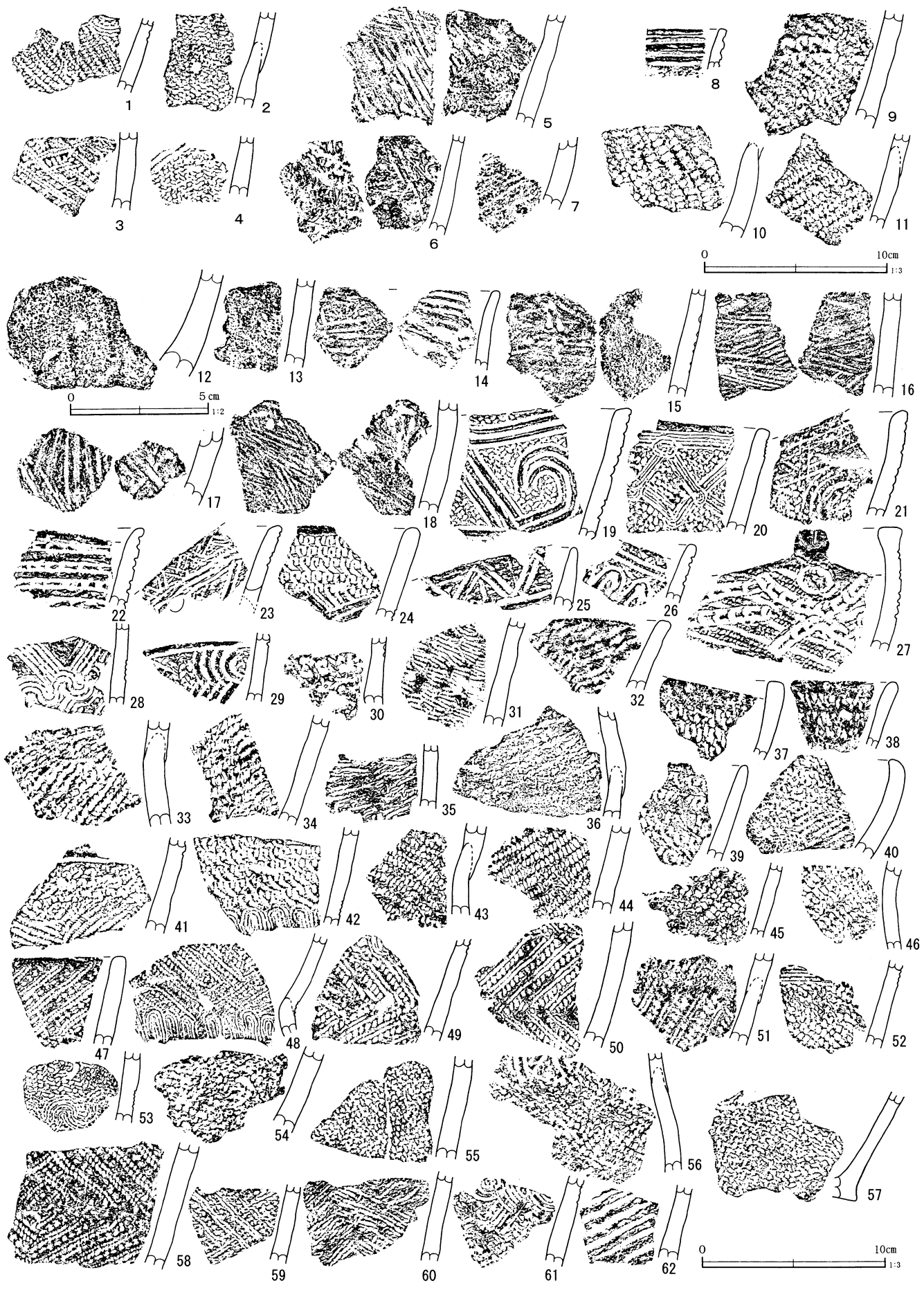
52~57では組紐の組み違い原体の回転痕が見られる。56の擬単節の他は、用意した原体が逆撚りの擬異節の圧痕が残されている。また、58~61は附加条縄文、62は撚糸文Rが施文されたもので、58は逆方向二本附加で正反の合Aと同等の文様効果を得、59は附加縄に反縄を用いたため正反の合Cと類似の圧痕が現れている。さらに、60・61は軸縄より一段前の附加縄を順方向に絡げた1段3条の無節原体を押捺している。

63~65は組紐の回転痕が見られるもので、63・64はLLRR、65はRLLL原体を施文している。また、脚台化した上げ底を作り出す66の器表には無節R・Lが施文されている。

第IV群土器 (第121図67~100)

前期後半の竹管文系土器をあてた。低地部の包含層や後世の流入土の中でも発見されたが、台地上での出土率が勝る。

67~73は爪形施文系列の土器で、上半が大きく



第120図 遺構外・グリッド・表採遺物(1)

開口し、幅広の文様帯を配置する器種と考えられる。また、74～81は平行沈線で横位区画帯や内部充填文を描くもので、74・75のように単純開口するものと、76のようにキャリパー形となるものがある。このなかで、74・75は、口縁下のスリット状文や双頭突起、管内痕残る深い竹管施文などから、東関東の系列器種にあたると思われる。

82～88・100は集合沈線が文様の基軸となる諸磯c式期のものだが、82・84では貼付文、83・100は浮線文が追加されている。さらに、89～92は、縄文地に浮線文が加えられる諸磯b期の浮線文土器、93は木の葉文系の有孔浅鉢である。この他、94～99は縄文のみが観察できるものだが、99を除き、単節RLが施文されている。

第V群土器 (第121図101)

前期末から中期初頭の諸系を念頭にしているが、出土量は極端に少ない。台地上では五領ヶ台式の101が示せるのみである。同番は、半截竹管による縦位垂下文とそれに絡む小三角印刻文、縦位の綾線文などが施文されている。

第VI群土器 (第121図102～105)

中期前半の勝坂・阿玉台系土器をこの群とした。102～104、そして粗い網代痕残る105は、口縁直下と胴上位の内面稜、あるいは雲母を含む胎土の特徴から、阿玉台系土器と判断できる。

第VII群土器 (第121図106～118)

中期後半主体の加曾利E系土器であるが、今回の調査で出土した資料は、もっぱらその終末から後期にかけてのEIV式であった。

106は波状口縁と一体化した橋状把手部であるが、一部に沈線が見られるものの、全体の器種・構成は判断できない。また、107以下の深鉢のうち、107～113は沈線、114・115は低隆帯、116・117は断面三角の微隆起線によって区画文を描き出す。107が下限解放の入り組み波状文、114・115が渦巻き基調の椀山類であることが察せられる他は、具体的な区画構成が想定できない。縄文の縦位施文

が安定して行われていることから、直線的な縦位大区画が主体であると考えられる。

第VIII群土器 (第121図119～123)

後期前葉の堀之内系土器が本群で、これ以降の縄文土器は出土していない。図示した資料は、およそ堀之内系後半のII式である。

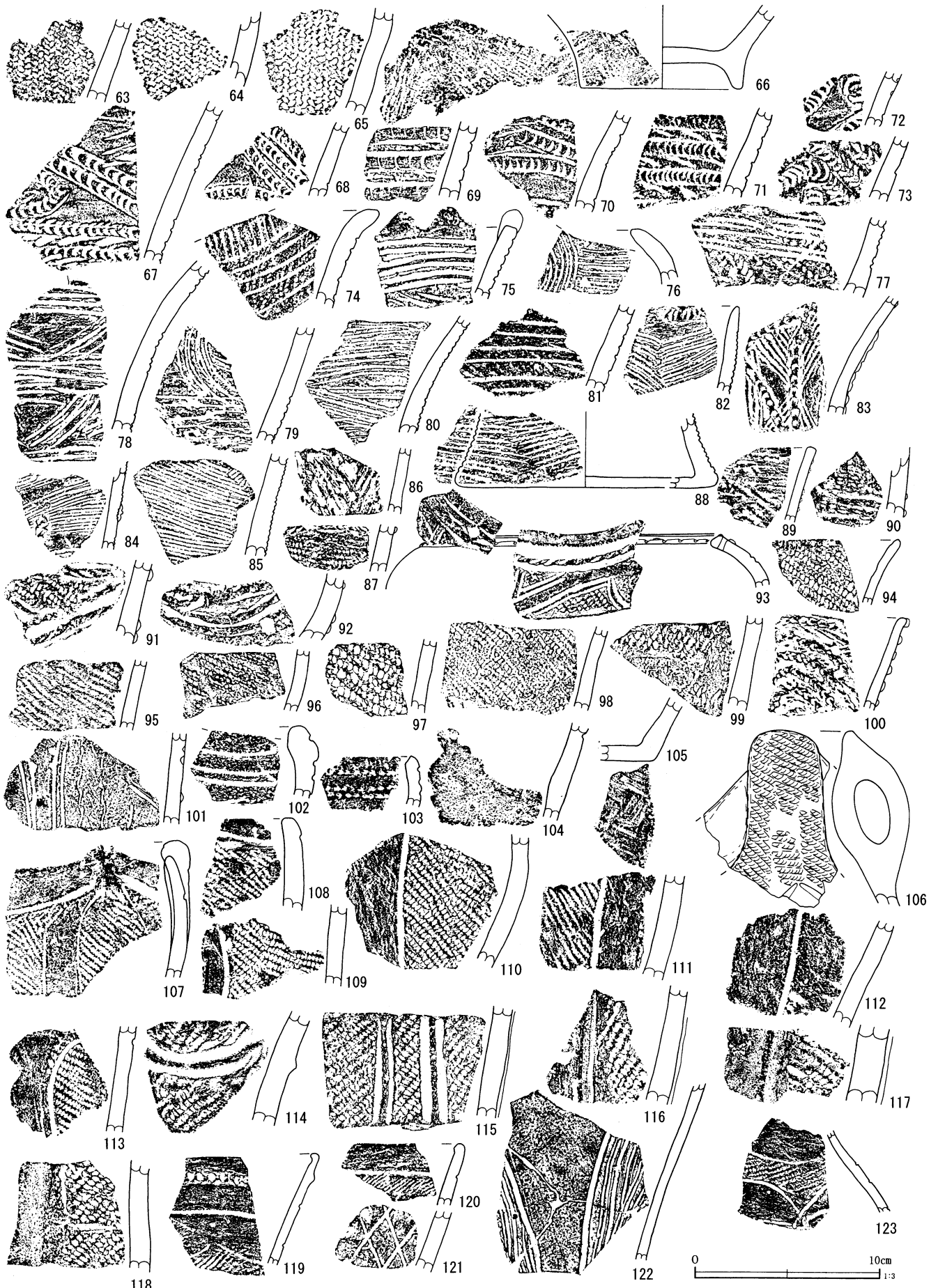
このうち、区画文を胴上半に配する精製系深鉢である119は、貼付帯の下に一線をめぐらすことで、連弧区画となる縄文帯の配置関係が逆転している。また、縦方向沈線による区画に単施文沈線を充填させる122は、器厚や器表の整形手法から同時期と判断できるが、どのような構図・構成になるのかは、想像ができない。さらに、注口土器と判断した123は、横方向の曲率がきつく、上下反転して鉢形土器の一部になることも想定できる。

弥生土器 (第122図)

124～126・134～162は、壺である。125は、頸部に6本一単位の櫛歯状工具による直線文を施した後、同一工具で山形文を反時計回りに加えている。126は頸部に、無区画のオオバコ系擬縄文帯を施文する。胴部上半には、1本描沈線2条によって弧状を描く。そのまま横走して波状文となるのか、2単位1対として、上部で繋がり、それぞれ渦巻文となるのかは推定する材料がない。また、154は、126と同一個体で、126より下の胴部下半の破片である。2条の沈線間にオオバコ系擬縄文を充填して、その下位に1本描沈線による山形文を描いている。

134～144は、櫛描文を施す破片である。134・135は、櫛描直線文を境に対称の文様構成をもつ破片と思われる。櫛描直線文の上・下位に櫛描波状文を施文し、その間隙に櫛による短斜線文を充填する。136は、5本一単位の櫛描波状文を施す。波状文下に沈線が1条見える。

137～139は、擬似流水文を描く破片で、外面に赤彩を施している。138は、4本一単位の櫛歯状工具によって、2条直線文を施す。下段は途中で切



第121図 遺構外・グリッド・表採遺物(2)

れ目を作り、その両端に弧状の沈線を施している。文様施文後に全面ミガキを加えている。139は、擬似流水文間によく施される斜格子文である。

140は、7本一単位の櫛歯状工具によって、波状文2条、その下に直線文2条を反時計回りに描く。141は、6本一単位の櫛歯状工具による波状文、直線文を交互に施す。直線文は、反時計回りである。142は、5本一単位の櫛歯状波状文を描き、外面に赤彩を施している。

143・144は、櫛歯状文を垂下させて、その左右に143は1本描沈線で、144は櫛歯状文で斜格子文を施す。143は3本一単位の、144は5本一単位の櫛歯状工具である。

145～154は、縄文を施した破片である。145は、原体LR単節縄文を施文後、1本描沈線2条によって縄文を区画する。下位には、複合鋸歯文を施している。

146は、原体LR単節縄文で山形文を描き、1本描沈線で囲んでいる。山形文下に接して横位の縄文帯を施文する。

147は、横位の沈線1条を引き、その上位に鋸歯文を描いて、中にオオバコ系擬縄文を充填する。

148～151は同一個体で、羽状縄文を帯状に施文する。149が頸部の上端で、羽状縄文の上位は無文部となっている。148は頸部から胴部にかけての部分で、150は、2本描沈線1条で縄文帯を区画しており、その下位が無文部となって胴下半に移行する。その胴下半が151の破片で、全面ミガキ調整である。

152はオオバコ系擬縄文を施文し、無区画の縄文帯を横位に作る。縄文帯の上下には赤彩を施している。

153は頸部片で、原体LR単節縄文を地文とし、1本描沈線3条を描いている。

155は、竹管状工具によって刺突6点を加えた円形浮文を貼り付けている。

156～161は頸部片で、1本描沈線によって1

～4条の文様を施している。156は刺突を、157は交互に短斜線文を、158は波状文をそれぞれ沈線間に加えている。

162は、横走する沈線下に、垂下させた4本一単位の櫛歯状文の幾条かを、1本描沈線で区画していると思われる。その区画の脇を押引き列点文が巡っている。

163～170は甕である。163は指頭押捺を施した口縁部である。

164～166は、受口状を呈する口縁部である。それぞれ口唇部には、原体LR単節縄文を施文する。164は、頸部に5本一単位の櫛歯状文が見られ、横羽状文の一部と思われる。165の口縁部外面には、口唇部と同様の縄文を地文に、1本描沈線2条による波状文を施している。166には、沈線3条による、間延びした連弧文を施しているのであろう。

167～169は頸部片で、167・168は櫛歯状波状文を、169は櫛刺突文を施している。

170は胴部に、4本一単位の櫛歯状工具による縦羽状文を施している。

172は底部片で、底面に網代痕が付く。

中近世の土器 (第122図127～133)

127は磁器、128～131・133は陶器、132は土器である。129の播鉢以外の磁器・陶器は、ロクロ成形である。127は染付碗で、外面に笹文、高台際には二重圈線を描く。削り出し高台で、高台内に砂粒が付着している。

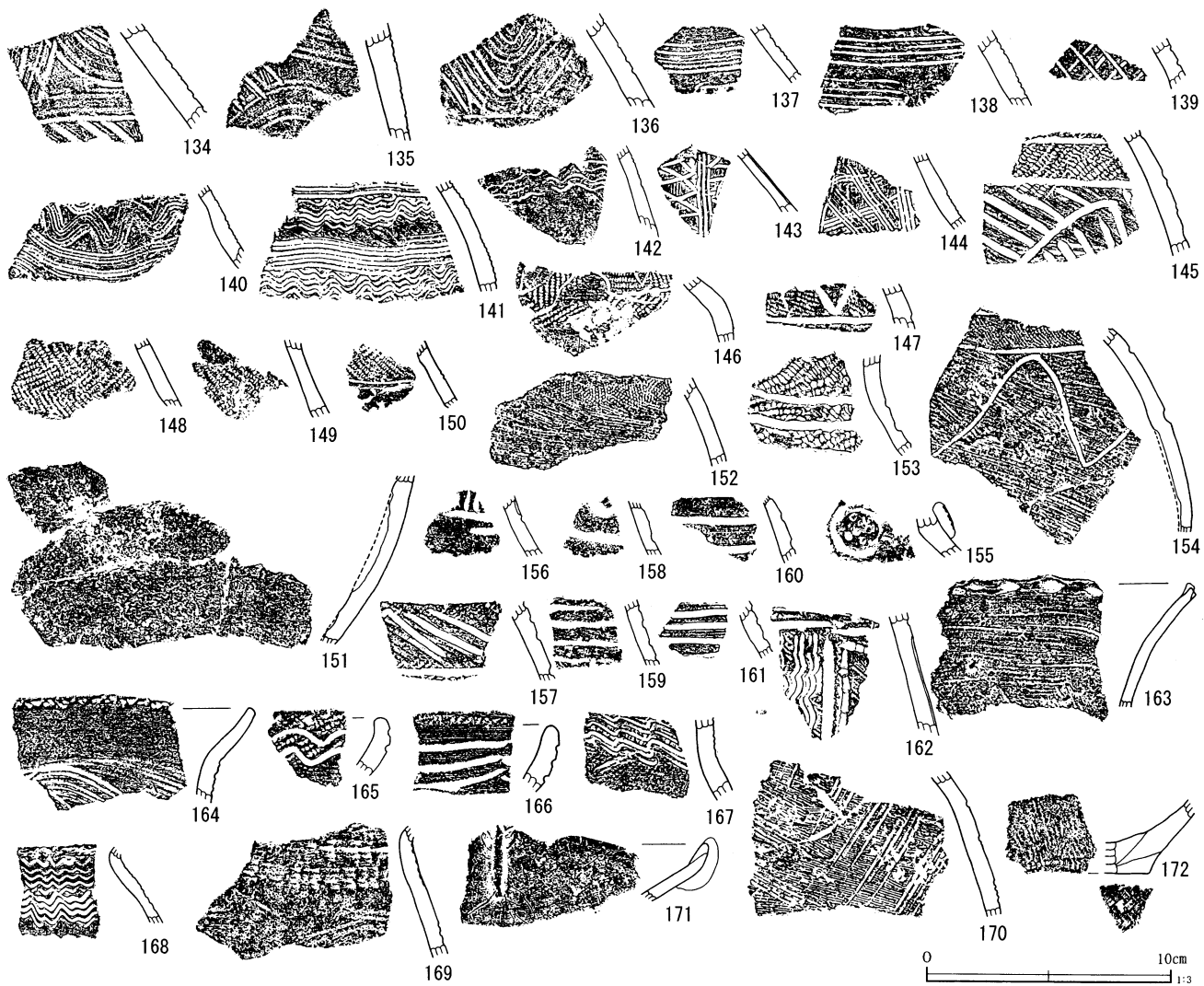
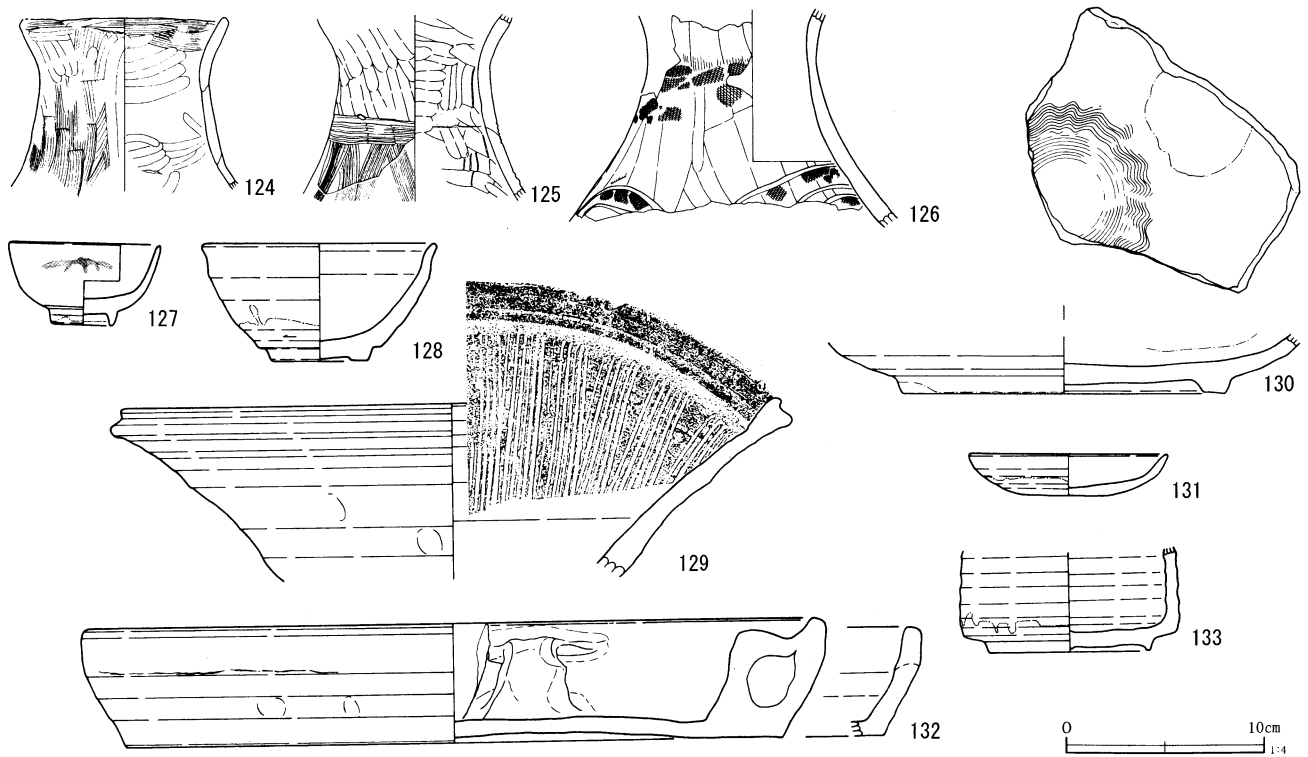
128は天目茶碗で、削り出し高台である。

129は播鉢で、6本一単位の卸目であるが、摩滅が見られない。

130は鉢の底部で、削り出し高台が付く。見込みに8本一単位の櫛歯状同心円文と波状文を描いており、トチン跡が1ヶ所残存している。また、畳付と高台内に釉が付着する。

131は志戸呂皿で、見込みに輪トチン跡が確認できる。

132は焙烙で、残存する内耳が内壁と底面に付



第122図 遺構外・グリッド・表採遺物(3)

いている。

133は香炉で、成形が粗雑である。

石器 (第123～126図)

石鏃 (第123図173～177)

173は基部の挟りが1.2cmと深く、身長約40%である。外形は長幅比が2対1と均整がとれ、両側縁は緩く外湾している。脚部が細く端部を若干欠損している。調整加工は丁寧で、正面は両側縁からの剥離が鏃身の中央で交わり稜線を作っている。基部の挟り部は下位方向からの剥離が規則的に施されている。裏面は両側縁からの剥離が2～3mm程度で周縁加工に近い。横断面は凸レンズ状になっている。

174は基部が丸くなる、厚手の石鏃である。調整加工は先端部に集中し、基端部は正面からの比較的急角度剥離によって整形している。

175は先端と右脚部を欠損する。基部は平基で両側縁からの比較的大きな剥離によって整形されている。基端部に比べ上半部は厚手である。

176・177は石鏃の未製品と思われる。176は先端が作られておらず、調整加工は右側縁のみである。177は上半部を欠損する。右側縁は上位からの剥離によって挟り取られており、調整加工は殆ど施されていないが、形状から石鏃又は石錐の未製品と考えた。

石錐 (第123図178～183)

178は形状から石鏃と考えたが、端部の磨耗が激しいことから、石錐と分類した。右摘部の一部を欠損する。

180～183は剥片の一部に先端の尖った突起が作られており、石錐とした。

削器 (第123図184～186)

184～186は刃部加工と考えられる、細かい剥離が施された剥片である。184・185は右側縁、186は下縁である。

槍先形尖頭器 (第123図187)

187は上下両端を欠損する。表裏面とも節理面

によって剥がされた薄い石片を素材としており、正面の一部に自然面を残している。調整加工は粗く、両面に周縁から細かい剥離が施されている。小型磨製石斧 (第123図188)

188は刃部に向かって窄まる、鑿状の磨製石斧である。刃部の幅は約8mmと狭く、刃縁は直刃の弱凸強凸片刃である。刃面は2mm程度で、正面は垂直方向、裏面は刃縁に対し横方向である。基部は全面に研磨が施されているが、側縁は明確には作っておらず、横断面は角が丸まった平行四辺形である。

剥片 (第123図189～191)

189～191は黒耀石とチャートの小形剥片である。189・191は側縁の一部に微細剥離がみられる。

石核 (第123図192～193)

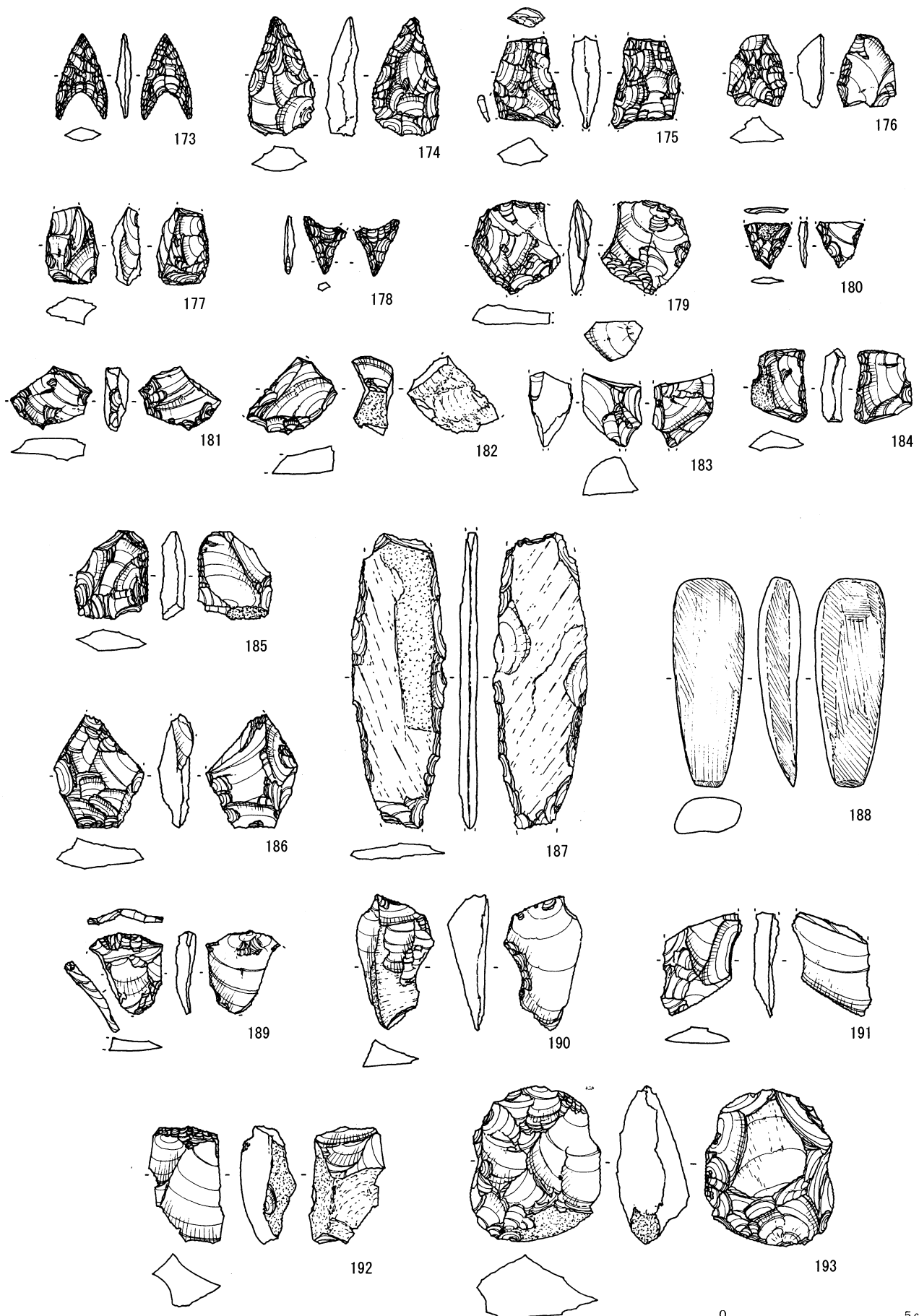
192は裏面の自然面の状況から、角礫に近い拳大の礫が用いられていると思われる。作業面は正面に固定されており、打面は正面方向からの単剥離面による。作業面に頭部調整が残っているが、これ以上の剥片作出は不可能と判断され廃棄されたと思われる。横断面は菱形状を呈している。

193は、下部に自然面を残した、厚手の剥片を素材とした石核である。正面の作業面は、上位からの剥離が施されているが形状の整った剥片を作出されていないようである。裏面は周縁からの剥離が施され、中央部に素材剥片の主要剥離面を残している。

打製石斧 (第124・125図194～210)

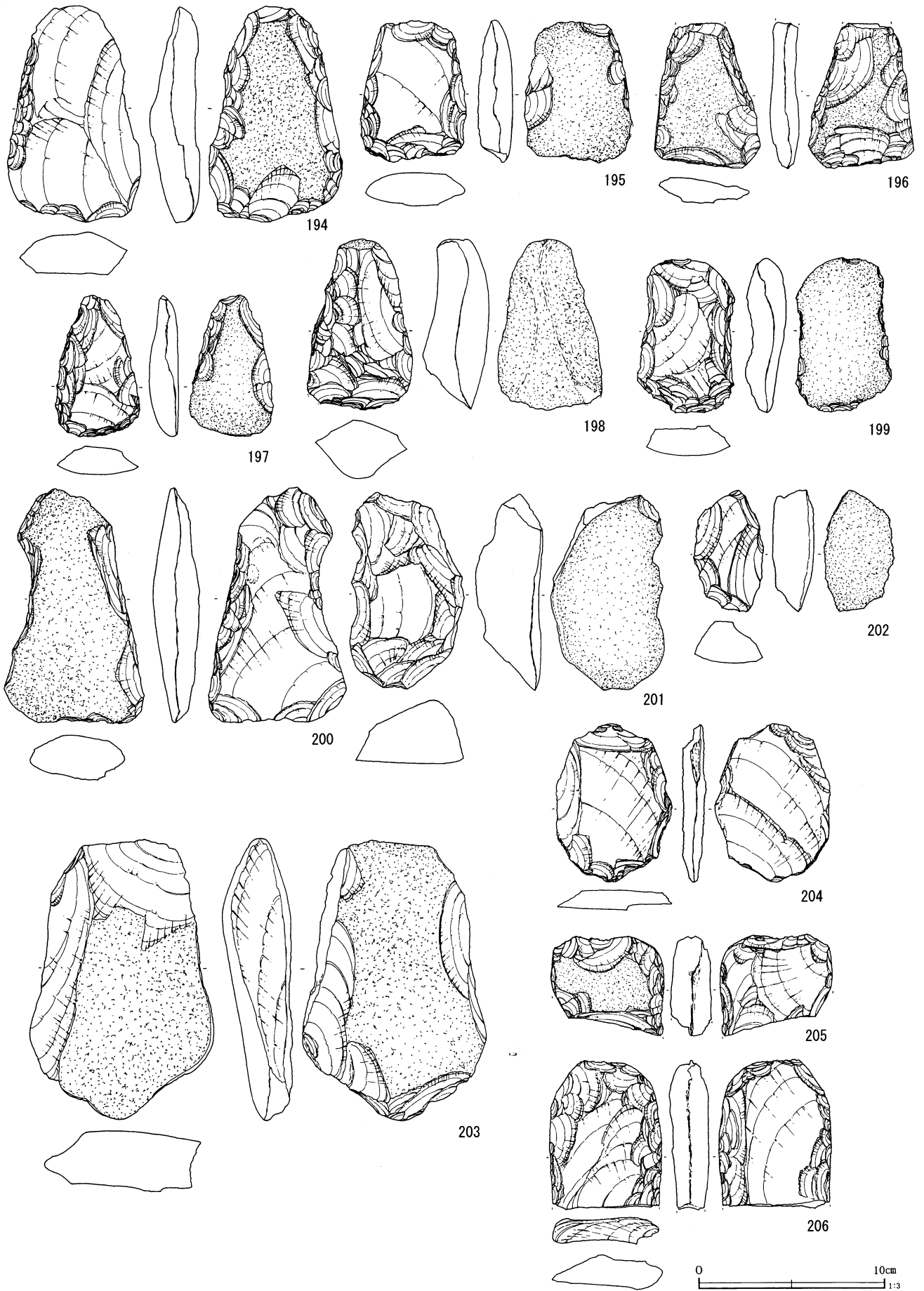
194～199・201・202・207は裏面側に自然面を大きく残し、正面は裏面側からの急角度の剥離面で整形される厚手の一群で、縄文時代早期に多くみられるいわゆる礫斧である。

196・203は両面に自然面を残している。196は薄手の礫を素材とし、周縁から剥離によって、外形が台形状を呈している。刃部は正面から裏面方向の剥離によって直刃に仕上げている。203は作りが粗く、明確な刃部加工がないことから未製品と

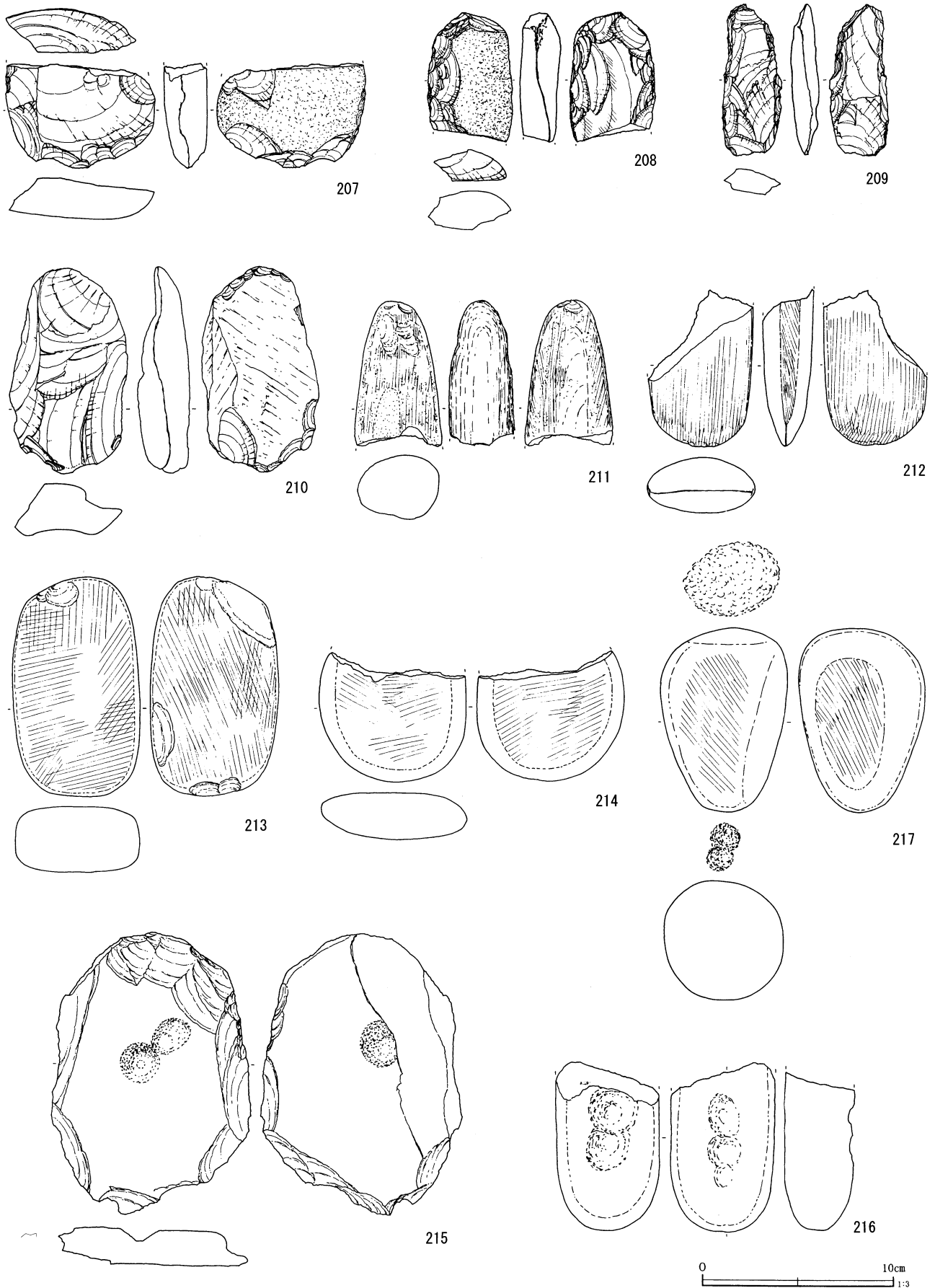


第123図 遺構外・グリッド・表採遺物(4)

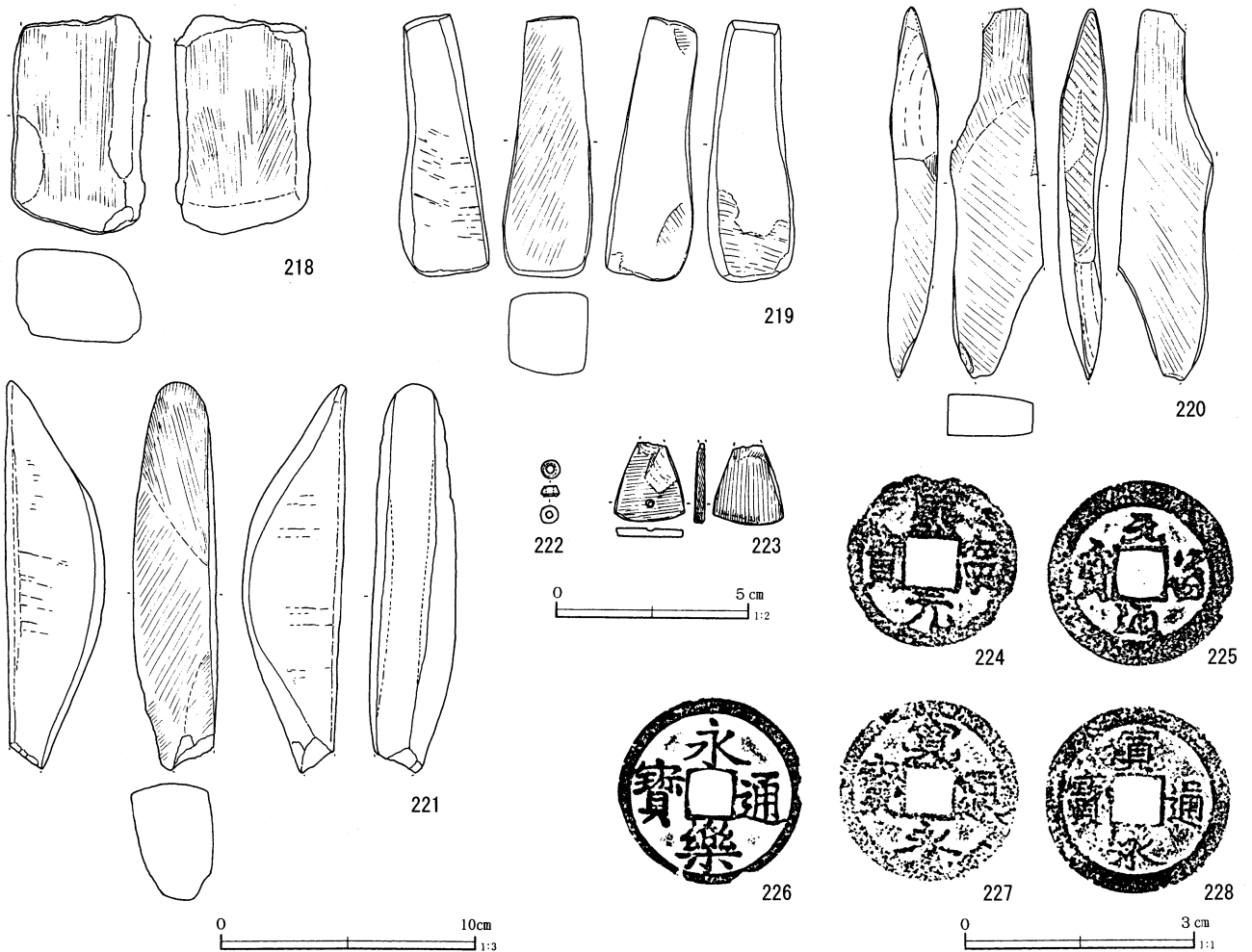
0 5 cm 2:3



第124図 遺構外・グリッド・表探遺物(5)



第125図 遺構外・グリッド・表採遺物(6)



第126図 遺構外・グリッド・表採遺物(7)

思われる。

200・205・208は正面に自然面を残している。200は裏面に分割面、正面に自然面を大きく残し、調整加工は周縁に施されている。刃部は分割面の縁辺をそのまま利用して直刃に近い。205・208は下半部を大きく欠損する。

204・206・209は表裏面とも剝離によって自然面を除去している。206は下半部を欠損している。209は小形の打製石斧である。

裏面に自然面を残すもの意外は、所属時期の絞込みは難しく、縄文前期から中期の何れかに伴うものと思われる。

磨製石斧 (第125図211・212)

211は基部の刃部側を大きく欠損する。横断面は円形に近く、研磨は全体に施されている。

212は基部上半部を欠損する。側面を有する定角式磨製石斧である。刃縁が円刃の両凸刃で、鑄は明確でない。

磨石 (第125図213・214)

213は隅丸長方形で、側面を有する。214は楕円形を呈し、横断面は凸レンズ状である。

凹石 (第125図215・216)

215は周囲を欠損している。正面の凹部は深く、裏面の凹部は浅い。216は上半部を欠損する。外形は長楕円形で横断面が方形に近い。凹部は正面が比較的深く、裏面は僅かに凹でいる。

敲石 (第125図217)

45は拳大の楕円礫の両端に敲打面がみられる。

砥石 (第126図218~221)

砥石は全て近世以降と思われる。

白玉 (第126図222)

側面の形状は、算盤玉状を呈する。

剣形石製模造品 (第126図223)

滑石製で、先端部が欠損している。

銭貨 (第126図224~228)

223の銭種は「熙寧元寶」で、書体は真書である。

224の銭種は「元祐通寶」と考えられ、書体は行書

である。225の銭種は「永樂通寶」で、書体は真書

である。226・227の銭種は「寛永通寶」で、銭種

は真書である。

第28表 遺構外・グリッド・表採遺物観察表 (第122~126図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
124	弥生土器	壺	(10.6)	[8.6]		A C F	良好	暗灰黄	15	SR4北溝
125	弥生土器	壺		[9.2]		B C I	普通	にぶい橙	20	表採
126	弥生土器	壺		[10.9]		A B	普通	橙	40	表採 オオバコ系擬縄文
127	灰釉磁器	碗	(7.6)	[4.1]	2.8		良好	明青灰	80	C-7g 肥前 胎土緻密 18C代
128	陶器	天目茶碗	(11.5)	5.9	4.8	G H	良好	灰黄	25	E-5g 瀬戸美濃 鉄釉(灰釉流しか) 17C後半
129	陶器	搦鉢	(33.0)	[9.0]		A C	普通	赤褐	25	F-6g 丹波か信楽 鉄釉 17C(後半)~18C(前半)か
130	陶器	鉢		[3.0]	(16.2)	B C G	良好	灰黄	20	F-4g 瀬戸美濃 灰釉緑釉流し 17C中頃
131	陶器	皿	10.1	2.1	4.2	G	良好	褐灰	95	F-4g 志戸呂 鉄釉 18C~19C
132	土器	焙烙	(37.0)	6.0	(33.4)	C G	普通	黄灰	25	E-5g 外面煤付着
133	陶器	香炉		[5.1]	8.1	C G	普通	浅黄	50	F-6g 瀬戸美濃 鉄釉 胎土緻密
134	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい黄橙	破片	SJ2 櫛歯 4本一単位
135	弥生土器	壺				A B C F	普通	橙	破片	SJ6 櫛歯 5本一単位
136	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	SJ2 櫛歯 5本一単位
137	弥生土器	壺				A B C E F	普通	橙	破片	SJ2 外面赤彩 櫛歯 6本一単位
138	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい赤褐	破片	SR4西溝 外面赤彩 櫛歯 5本一単位
139	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい赤褐	破片	SR4西溝
140	弥生土器	壺				A B C	普通	明黄褐	破片	SR4南溝 櫛歯 7本一単位
141	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	SR4西溝 砂粒少ない 櫛歯 6本一単位
142	弥生土器	壺				A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	SR4南溝 外面赤彩
143	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい褐	破片	SJ2 櫛歯 3本一単位
144	弥生土器	壺				A B C	良好	にぶい橙	破片	SR4北溝 櫛歯 5本一単位
145	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	C-6g
146	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	SR4北溝
147	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	SR4西溝 オオバコ系擬縄文
148	弥生土器	壺				A C G	普通	赤褐	破片	G-9g P1 149~151と同一個体
149	弥生土器	壺				A C G	普通	赤褐	破片	G-9g P1
150	弥生土器	壺				A C G	普通	赤褐	破片	G-9g P1
151	弥生土器	壺				A C G	普通	赤褐	破片	G-9g P1
152	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい橙	破片	SR4北溝 外面赤彩 オオバコ系擬縄文
153	弥生土器	壺				A B C F	普通	橙	破片	SR4西溝
154	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい褐	破片	表採 126と同一個体
155	弥生土器	壺				A B C	普通	黒褐	破片	SJ6
156	弥生土器	壺				A B C F	普通	橙	破片	SJ13
157	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	SR4西溝
158	弥生土器	壺				A B C E	普通	明赤褐	破片	SR4西溝
159	弥生土器	壺				A B C F	普通	浅黄橙	破片	SR4西溝
160	弥生土器	壺				A B C F	普通	にぶい褐	破片	SR4西溝
161	弥生土器	壺				A B C I	普通	橙	破片	SR4西溝
162	弥生土器	壺				A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	SR4南溝 櫛歯 4本一単位
163	弥生土器	甕				A B C I	普通	にぶい褐	破片	G-9g P1 外面煤付着
164	弥生土器	甕				A B C F	普通	灰褐	破片	SK166 外面煤付着 櫛歯 5本一単位
165	弥生土器	甕				F G	良好	明赤褐	破片	SR4北溝
166	弥生土器	甕				A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	J-6g
167	弥生土器	甕				A B F	普通	にぶい黄橙	破片	SR4西溝 櫛歯 6本一単位

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
168	弥生土器	甕	頸部			A B C F	普通	橙	破片	SJ2 櫛歯5本一単位
169	弥生土器	甕	頸部			A B C I	普通	にぶい橙	破片	SJ6 櫛歯4本一単位
170	弥生土器	甕	胴部			A B C	普通	橙	破片	SK176 櫛歯4本一単位
171	弥生土器	高坏	口縁部			A B C	普通	にぶい褐	破片	I-7g
172	弥生土器	不明	底部			A B C	普通	にぶい褐	破片	SJ6 網代痕
173	石器	石鏃	長さ2.2cm	幅1.3cm	厚さ0.4cm	重さ0.7g		SJ12 チャート		
174	石器	石鏃	長さ3.1cm	幅1.7cm	厚さ0.7cm	重さ4.3g		SR5北溝 チャート		
175	石器	石鏃	長さ[2.4]cm	幅1.8cm	厚さ0.7cm	重さ3.3g		表採 チャート		
176	石器	石鏃未製品?	長さ1.9cm	幅1.6cm	厚さ0.7cm	重さ1.8g		J-7g 黒耀石		
177	石器	石鏃未製品?	長さ[2.0]cm	幅1.9cm	厚さ0.7cm	重さ2.1g		C-7g 黒耀石		
178	石器	石錐	長さ1.5cm	幅1.2cm	厚さ0.3cm	重さ3.3g		SD37 チャート		
179	石器	石錐	長さ[2.5]cm	幅[2.3]cm	厚さ0.5cm	重さ3.0g		SR4東溝 チャート		
180	石器	石錐	長さ[1.2]cm	幅1.1cm	厚さ0.1cm	重さ0.2g		G-7g 黒耀石		
181	石器	石錐	長さ1.7cm	幅2.2cm	厚さ0.6cm	重さ1.9g		I-10g 黒耀石		
182	石器	石錐	長さ[2.0]cm	幅[2.4]cm	厚さ0.7cm	重さ3.2g		K-10g 黒耀石		
183	石器	石錐	長さ[2.0]cm	幅1.6cm	厚さ1.0cm	重さ2.9g		SJ14 P3 黒耀石		
184	石器	削器	長さ1.9cm	幅1.5cm	厚さ0.6cm	重さ2.0g		L-8g 黒耀石		
185	石器	削器	長さ2.3cm	幅2.0cm	厚さ0.6cm	重さ3.3g		I-8g チャート		
186	石器	削器	長さ[3.0]cm	幅2.4cm	厚さ0.8cm	重さ5.7g		SD38 チャート		
187	石器	槍先形 尖頭器	長さ[7.8]cm	幅2.5cm	厚さ0.5cm	重さ12.4g		SD37 緑泥片岩		
188	石器	小型 磨製石斧	長さ5.5cm	幅1.9cm	厚さ1.0cm	重さ16.9g		G-8g P2 砂岩		
189	石器	剝片	長さ2.2cm	幅2.0cm	厚さ0.4cm	重さ1.9g		SJ7 黒耀石		
190	石器	剝片	長さ3.5cm	幅2.1cm	厚さ0.7cm	重さ5.4g		G-10g チャート		
191	石器	剝片	長さ[2.2]cm	幅2.1cm	厚さ0.5cm	重さ3.1g		SD38 E-8g チャート		
192	石器	石核	長さ3.1cm	幅2.0cm	厚さ1.3cm	重さ6.4g		L-8g 黒耀石		
193	石器	石核	長さ4.1cm	幅3.4cm	厚さ1.6cm	重さ26.5g		SJ2 チャート		
194	石器	打製石斧	長さ[11.6]cm	幅[7.2]cm	厚さ2.5cm	重さ227.2g		SE4下層 砂岩		
195	石器	打製石斧	長さ[7.7]cm	幅[5.8]cm	厚さ1.9cm	重さ128.3g		SD54 砂岩		
196	石器	打製石斧	長さ7.8cm	幅5.7cm	厚さ1.6cm	重さ88.4g		D-9g ホルンフェルス		
197	石器	打製石斧	長さ[7.7]cm	幅[4.6]cm	厚さ1.5cm	重さ57.2g		SE1 ホルンフェルス		
198	石器	打製石斧	長さ[9.3]cm	幅[5.6]cm	厚さ3.6cm	重さ173.2g		SD54 ホルンフェルス		
199	石器	打製石斧	長さ[8.3]cm	幅[5.2]cm	厚さ1.9cm	重さ106.4g		SD43 ホルンフェルス		
200	石器	打製石斧	長さ12.7cm	幅7.4cm	厚さ2.5cm	重さ237.4g		C-8g ホルンフェルス		
201	石器	打製石斧	長さ[10.6]cm	幅[6.2]cm	厚さ3.5cm	重さ248.1g		SD54 ホルンフェルス		
202	石器	打製石斧	長さ6.5cm	幅3.7cm	厚さ2.3cm	重さ69.3g		SR4南溝 ホルンフェルス		
203	石器	打製石斧	長さ[15.1]cm	幅[10.0]cm	厚さ2.7cm	重さ660.6g		SE4下層 緑泥片岩		
204	石器	打製石斧	長さ6.3cm	幅8.2cm	厚さ1.3cm	重さ87.8g		SR4溝内土壌 緑泥片岩		
205	石器	打製石斧	長さ[5.5]cm	幅[6.3]cm	厚さ2.2cm	重さ85.1g		E-7g ホルンフェルス		
206	石器	打製石斧	長さ8.1cm	幅6.1cm	厚さ2.0cm	重さ133.2g		C-7g ホルンフェルス		
207	石器	打製石斧	長さ5.5cm	幅7.8cm	厚さ2.2cm	重さ124.2g		SR4西溝 ホルンフェルス		
208	石器	打製石斧	長さ[6.8]cm	幅4.5cm	厚さ2.3cm	重さ98.4g		SD38 砂岩		
209	石器	打製石斧	長さ[8.0]cm	幅[3.2]cm	厚さ1.4cm	重さ46.5g		SD8 蛇紋岩		
210	石器	打製石斧	長さ[10.9]cm	幅[6.2]cm	厚さ2.7cm	重さ212.7g		SE4下層 緑泥片岩		
211	石器	磨製石斧	長さ7.7cm	幅4.6cm	厚さ3.5cm	重さ172.6g		SR4南溝 緑泥片岩		
212	石器	磨製石斧	長さ[8.3]cm	幅[5.6]cm	厚さ2.6cm	重さ151.8g		C-8g 砂岩		
213	石器	磨石	長さ[11.6]cm	幅[6.8]cm	厚さ3.5cm	重さ462.2g		SE4下層 閃緑岩		
214	石器	磨石	長さ[6.9]cm	幅[7.8]cm	厚さ2.7cm	重さ188.9g		E-8g 閃緑岩		
215	石器	凹石	長さ[14.8]cm	幅[10.5]cm	厚さ2.4cm	重さ545.7g		G-6g 緑泥片岩		
216	石器	凹石	長さ[8.9]cm	幅[5.5]cm	厚さ3.9cm	重さ314.7g		C-8g 安山岩		
217	石器	敲石	長さ[9.7]cm	幅[6.7]cm	厚さ6.2cm	重さ599.4g		SE4下層 安山岩		
218	石器	砥石	長さ[8.6]cm	幅[5.4]cm	厚さ3.7cm	重さ310.3g		C-8g 安山岩		
219	石器	砥石	長さ[10.4]cm	幅[3.5]cm	厚さ3.1cm	重さ163.2g		Y層E-10g 凝灰岩		
220	石器	砥石	長さ14.5cm	幅3.5cm	厚さ1.9cm	重さ104.2g		SR4西溝 凝灰岩		
221	石器	砥石	長さ15.2cm	幅3.9cm	厚さ4.1cm	重さ221.3g		G-6g 凝灰岩		
222	石製品	白玉	長さ0.5cm	幅0.5cm	厚さ0.3cm	重さ0.1g		SD31 滑石		
223	石製品	剣形石製 模造品	長さ[2.1]cm	幅1.8cm	厚さ0.2cm	重さ1.6g		SJ11 滑石		
224	銭貨	熙寧元寶	縦2.10cm	横2.11cm	重さ2.60g		表採 きねいげんぼう：北宋、1068年			
225	銭貨	元祐通寶か	縦2.30cm	横2.30cm	重さ2.30g		H-7g げんゆうつうほう：北宋、1086年			
226	銭貨	永樂通寶	縦2.29cm	横2.29cm	重さ2.70g		F-4g えいらくつうほう：明、1408年			
227	銭貨	寛永通寶	縦2.45cm	横2.45cm	重さ2.40g		G-5g かんえいつうほう：1636年			
228	銭貨	寛永通寶	縦2.32cm	横2.32cm	重さ3.20g		表採 かんえいつうほう：1636年			

V 低地部の遺構と遺物

1. 環濠

第42号溝跡（低地部環濠）（第127図）

調査区東端のD～F-10、F～I-11グリッドに位置する。弥生時代集落を囲む低地部の環濠である。他の環濠集落と比較すると大分高低差があるが、台地上の第13号溝と同一の溝と考えられる。

斜面部の調査に着手した当初は、北側の数mを識別できただけであった。その覆土は礫混じりの褐色土で、第43号溝跡などの、粘土や礫層に掘り込まれた中世以降の溝と変わらない特徴であり、同期の溝だと思込んでいた。

ところが、I-11グリッド付近で、完形の遺物がまとまって発見され、これらが直線に並んでいたことから、弥生時代中期の溝の可能性を探るために再度の確認調査を行なった。この時点では、調査着手前より0.4～0.5mほど周囲の掘削が進んでおり、南側のローム層から茶褐色土にかけての斜面部で溝の確認が可能であった。

この部分は、焼土が散布することから、竪穴状の遺構ではないかと予測をたてていた箇所、勘違いが重なった。試しに、その部分の溝を掘ってみたところ、焼土は現代の攪乱で、環濠の特徴を備えた断面V字の溝が下位から発見できた。

これを受けて、北側の溝も一部を精査したところ、弥生時代の完形土器が続出し始めたことから、南北は直線的につながる可能性が有力となった。しかし、南北ははっきりしたものの、後述する包含層トレンチ周辺の斜面中央部では、その断面も含め、依然として確認が不可能であった。

溝断面のうち、台地側の落ち込みは、中央付近を除き、縄文期に堆積した茶褐色土の傾斜で、おおその目安がついた。だが、低地側は同質の暗褐色系土が広がっており、視認は不可能であった。繰り返し南北から確認を重ねるうちに、暗褐色のなかでもわずかに明るみを帯びた土が溝の覆土で

あることに確信を持ち、想定線を引いた。南端のロームから茶褐色土に掘り込まれていた既掘部分で遺物が低地側の上層に多く出土していたことも、中央低地側の確認の目安となった。

それでも、包含層中央トレンチ付近の平面的な確認は、相変わらず不可能であったが、この断面を徹底的に観察したところ、溝が想定できる部分の下層にヘドロ状の土が堆積していることが判明した。低地側の地山とほとんど見分けがつかないが、やわらかく、移植ゴテで土層断面を横に搔くと段差ができてしまう。また、下層では、自然形成層より覆土の方がわずかに黒味を帯びていた。これによって、南北の環濠がつながることがはっきりし、トレンチ付近から既掘部分に向かって下層の感触差によって掘削を進め、完掘を果たした。

調査した範囲での環濠は、中央付近でやや低地側に寄るが、おおよそ縄文時代に形成された急斜の段差をなぞるように道筋が選ばれている。その南北では深さ約0.20mと極端に浅くなり、断面形が箱型となる。これに対し、中央付近はトレンチに向かって標高12.150mまで深くなり、断面形はV字となる。南北の端部とは掘込みに段差があり、掘削の工程が異なっていたことをしのばせる。中央の掘削単位は、深くなるにつれ、V字の角度がゆるくなる。南北端を除いた深さは平均1.20～1.40mである。

調査区外の溝の行方は南北とも確定できていない。南側は、台地上の環濠と接続するには十分な方位を有し、その可能性が最も高いと思われるが、両者の間には産業廃棄物が埋まっており、調査は不可能であった。

また、北側は、第43号溝跡をまたいで台地の突端を迂回する気配もあるが、わずかな痕跡であり、

確定できない。また、中央のみが一段と深くなることから、低地側にしみ出た水を斜面下に解放する横溝などが付属するとも考えたが、その存在は確認できなかった。

ただし、低地側の壁面で掘り上がり形態に確信を持てるのは下層部のみであり、環濠の本筋より浅く横溝が掘られ、時としてオーバーフローするような形で余剰水を低地側に逃がしたとするならば、確認に及ばなかった可能性も考えられる。

さらに、南側の覆土上層には、粘質のロームが低地側から流入したような気配もあった。溝外の盛土も想定して念入りに観察したが、はっきりしない。また、他の箇所では溝の内外に盛土の痕跡は発見できなかった。

規模は長さ52.61m、幅0.81~2.07mである。

出土遺物は、完形および、それに準ずる遺物は31点である。さらに、弥生土器片2,570点、土製品1点、石器15点である。

大量の遺物は主として覆土の上層に分布していた。溝の確認にいたるまでも、その直上では大量の土器片が出土していたが、環濠から低地側は、遺物の散布は認められるものの、包含層と称するには躊躇する程度出土量でしかなかった。

一部の土器は、環濠上から低地側にはみ出しており、溝が埋没しきった後も台地側からの段差を目安に土器が廃棄されていたようである。また、溝の下層でも、台地上の環濠よりは出土量が多く、壺の頸部などが多く出土した。

第42号溝跡出土遺物 (第134~146図)

弥生土器 (第134~143図)

1~50は壺で、1~10は櫛描文を施す個体である。1は、頸部から底部までは完全に残存している。5本一単位の櫛歯状工具によって、文様を施文しているが、所々で個々の櫛の太さが変化している。それが、櫛歯状工具を器面に当てる角度の違いなのか、櫛歯状工具の施文方向を変えたためなのか、工具自体を代えたためなのかは判断でき

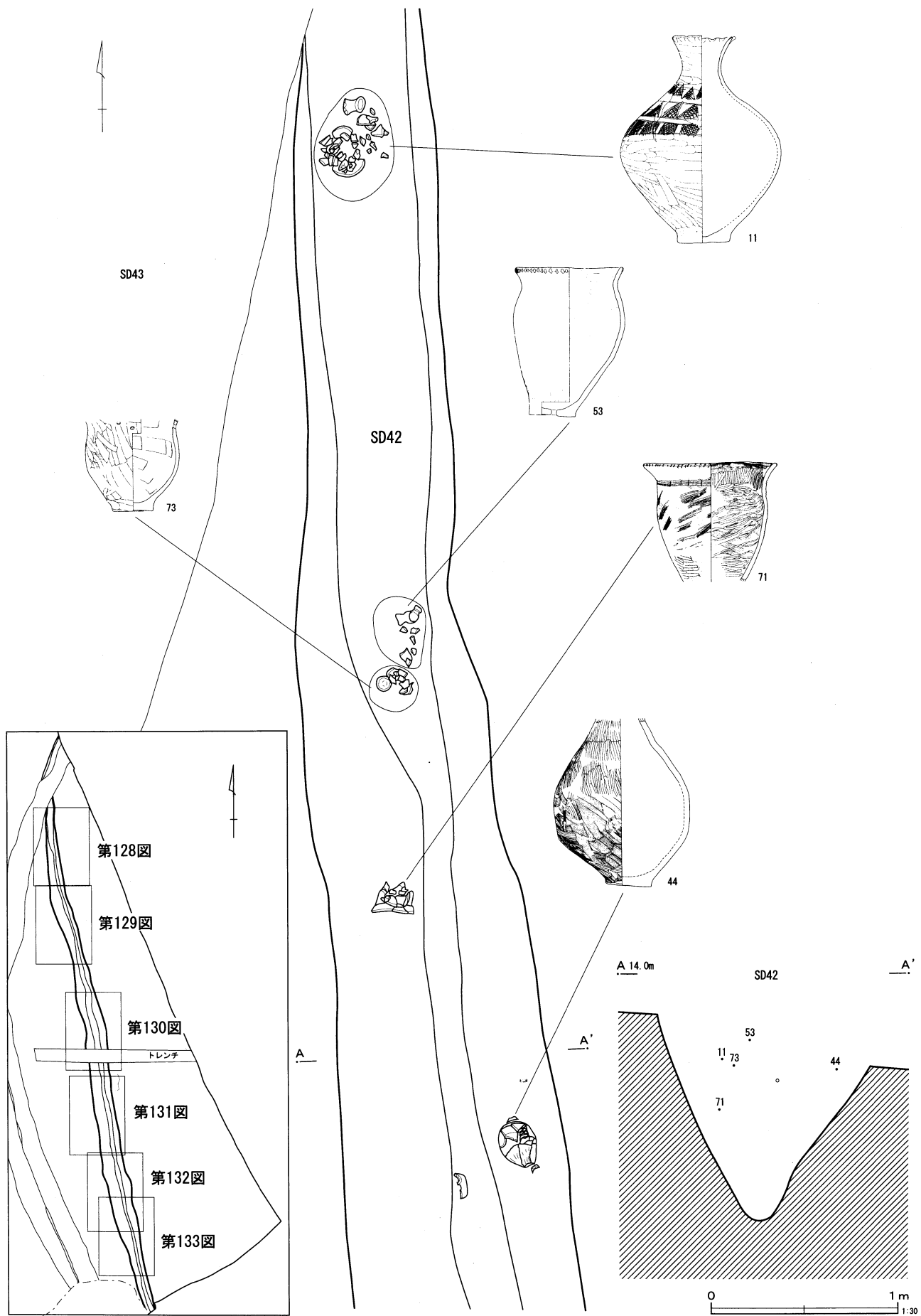
なかった。それでは、簡単に施文順序を説明する。

まずは、頸部に文様帯の上限を設ける目的で、直線文を施している。なお、剝落や波状文との切り合いのため、回転方向は不明である。そして、この土器の主文様である斜格子文を施文する。下位の波状文と切り合っている箇所があり、そこから、上から下に右下がり斜線文(①)を始める。反時計回りに施文をしていき、徐々に垂直方向に変わり、左下がり斜線文へと変化する。開始点で三角形に交差した時点で施文を止める。次に、垂直方向になった櫛描文を目安に、右下がり斜線文(②)を反時計回りに交差させていく。そうすると、始めの右下がりの斜線文(①)と重なってしまうために、重なる手前で終わらせる。次は、②の右下がり斜線文の開始線と終了線の間が、斜格子状になっていないために、その間のみ左下がりの斜線文を充填していくと、主文様の斜格子文は完成する。そして、反時計回りの櫛描直線文を斜格子文の下端に巡らせて区画する。最後に上下の櫛描直線文の下位に、櫛描波状文を反時計回りに描いている。外面調整はヨコハケ後、ミガキを散漫に施している。

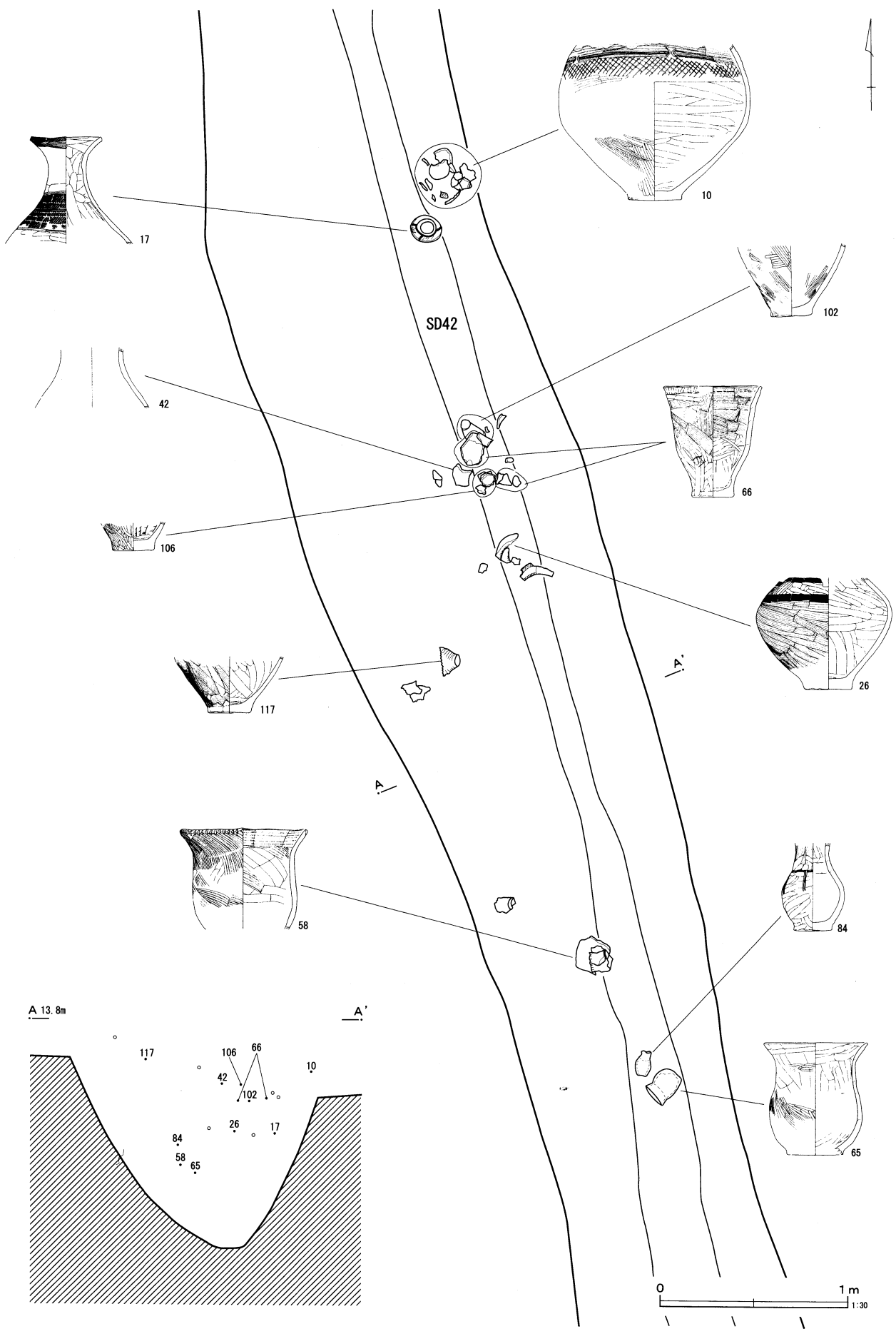
2の口唇部には、ヘラ状工具によって刻み目を施す。胴部は、4本一単位の櫛描直線文3条で区画を作り、その中に反時計回りの櫛描波状文を充填している。施文後、ミガキ調整を行なう。

3は、頸部を欠いた個体である。4本一単位の櫛歯状工具で櫛刺突文を施した上・下位に、3本一単位の櫛歯状工具によって、方向を変えて櫛描波状文を加えている。外面はミガキ調整である。

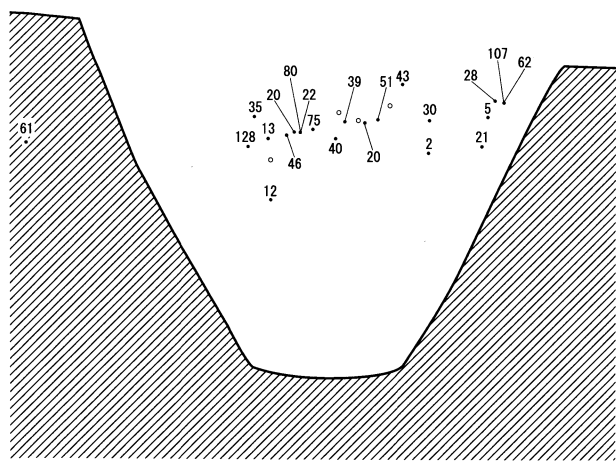
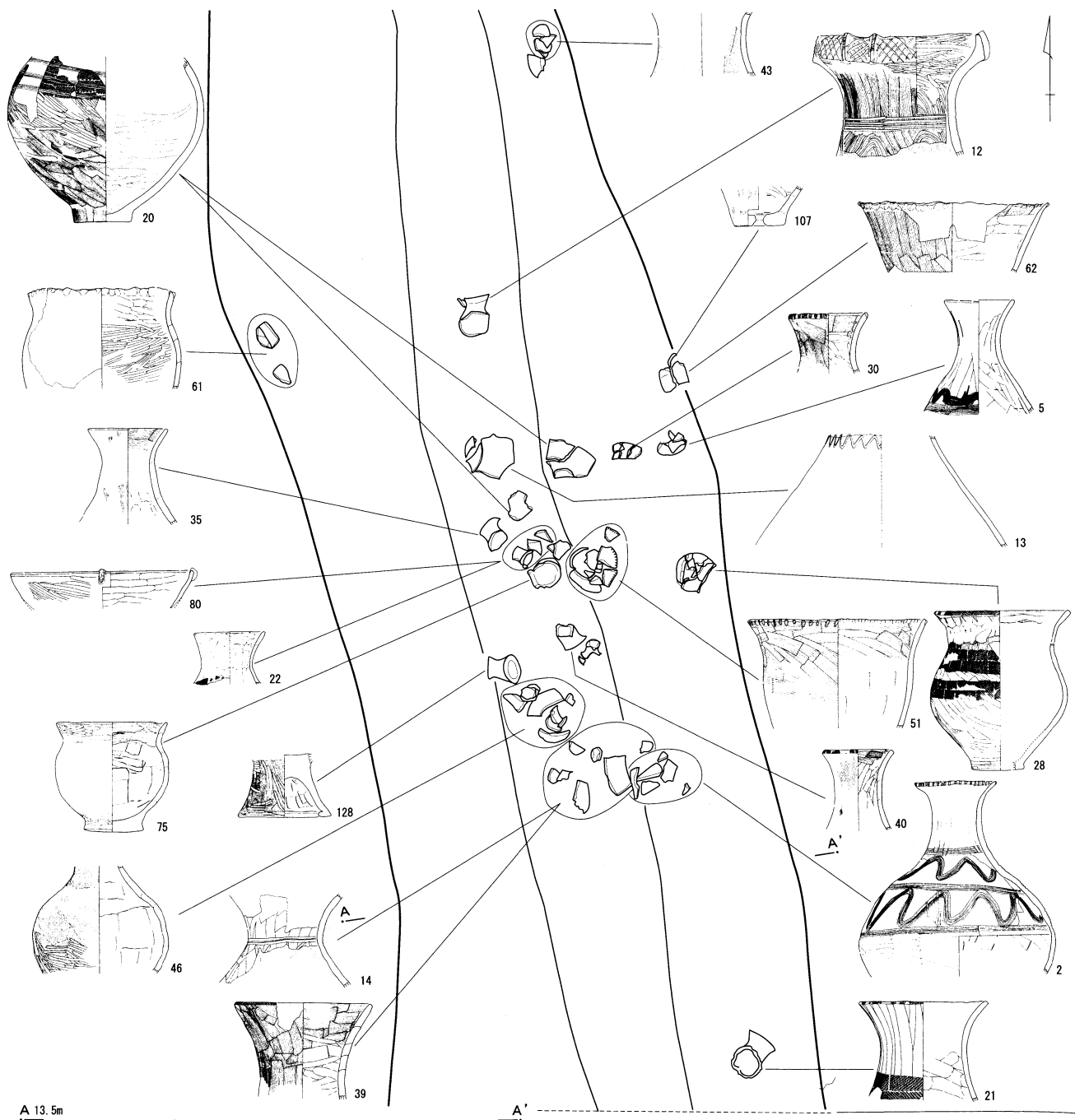
4~8は頸部のみ残存する個体である。4は7本一単位の櫛歯状工具で、直線文を巡らせた後、波状文を反時計回りに施文する。5は5本一単位の櫛描状工具で、頸部下端に直線文を施し、その下位に2条の波状文を時計回りに施している。6は、幾重にも櫛描直線文を巡らせている。内面には輪積み痕を明瞭に残し、ユビオサエも確認でき



第128図 第42号溝跡遺物出土状況 (1)



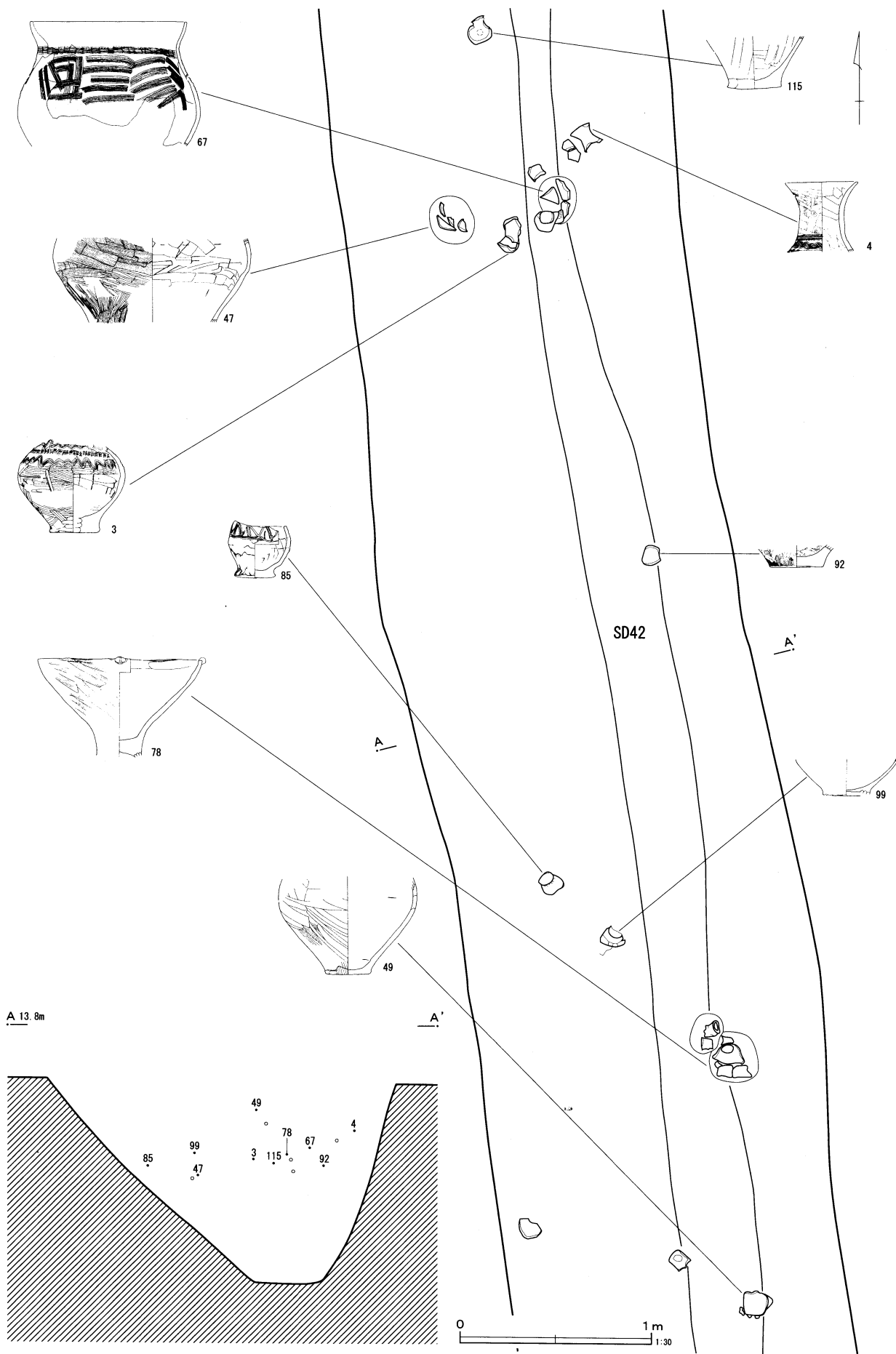
第129図 第42号溝跡遺物出土状況 (2)



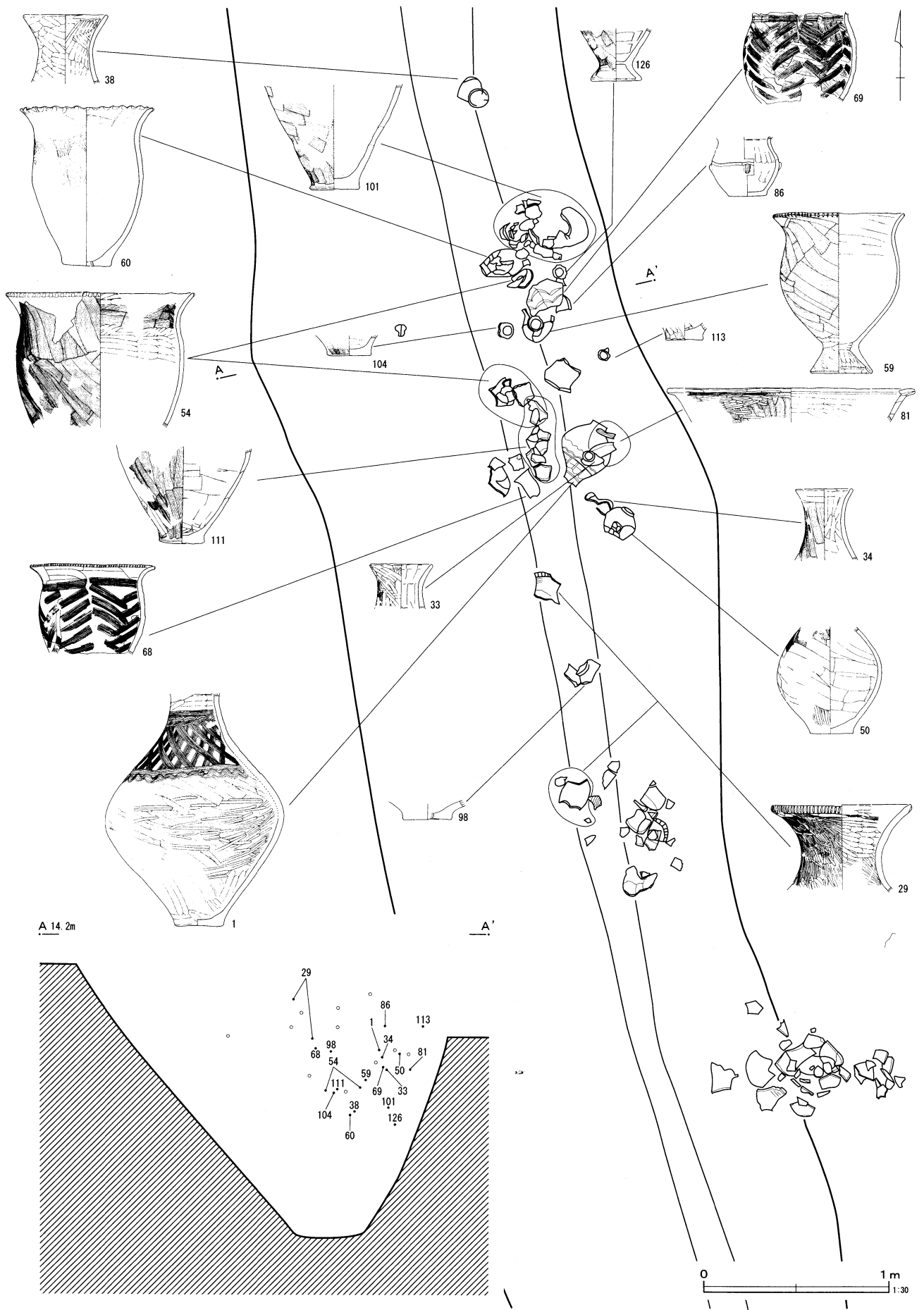
トレンチ



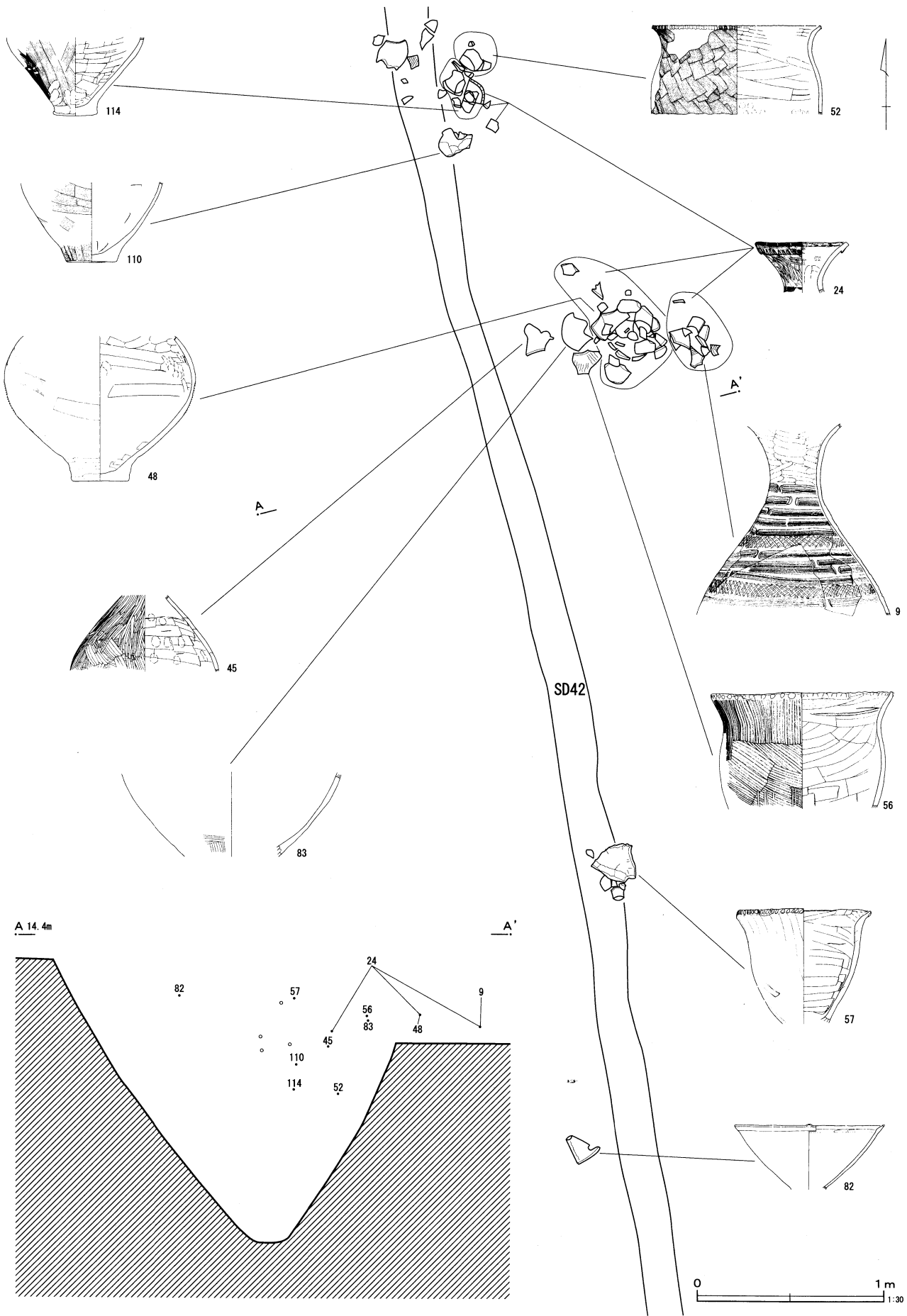
第130図 第42号溝跡遺物出土状況 (3)



第131图 第42号沟迹遗物出土状况(4)



第132图 第42号沟迹遗物出土状况(5)



第133图 第42号沟迹遗物出土状况 (6)

る。7の頸部には3本一単位の櫛歯状工具で、直線文を巡らせ、胴部に櫛描波状文を施す。8は口唇部に原体LR単節縄文を施文し、5本一単位の櫛描直線文を施している。

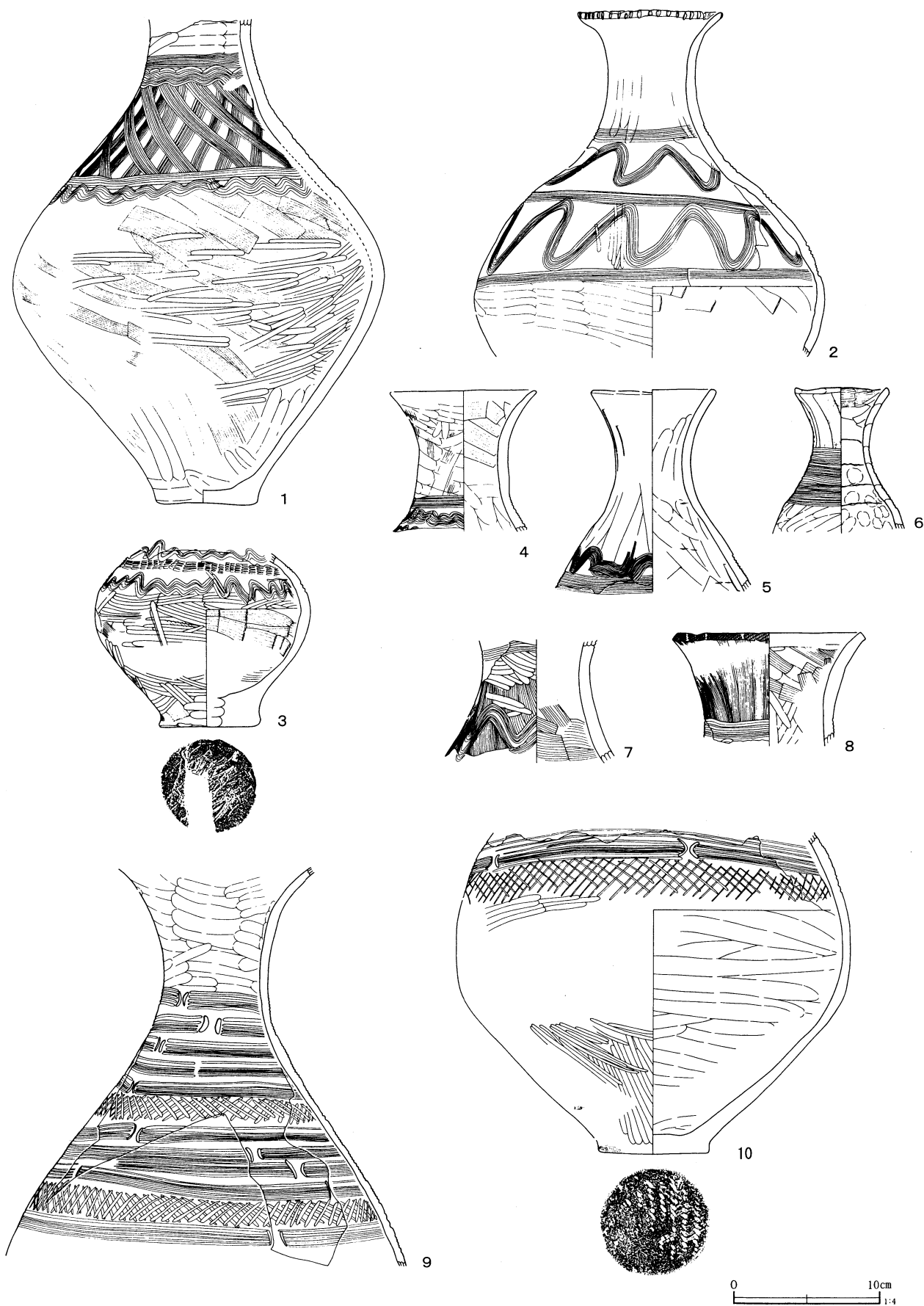
9・10は擬似流水文を施す個体である。9は頸部から胴部中盤まで残る。5本一単位の櫛歯状工具で5段の擬似流水文を施し、1本描沈線による斜格子文を施す。その下位には、4段の擬似流水文を描くが、途中で3段に減っている。下に斜格子文を施している。さらに、その下に1段の擬似流水文が確認できる。施文順序は不明である。10は胴下半部から底部まで残っている。2段の擬似流水文下に斜格子文を施している。外面調整はハケ後ミガキである。底面には網代痕が付く。

11～14は沈線文を主とする個体である。11は、口唇部に指頭押捺を加えている。胴部上端には1本描沈線の鋸歯文を施した後、中を斜格子文で充填する。その下位に、まず上段は、1本描沈線2条の直線文で区画して、斜格子を充填する鋸歯文を描いている。下段は、下位直線文、縦位沈線区画、上位直線文の順に施す。その中を斜格子文で充填している。なお、斜格子文を施す工具のみ、先の鋭利な工具である。また施文順序は、鋸歯文は右下がり、四角文は左下がりが先である。12は、受口状の口縁部をもち、非常に太い頸部である。口縁部外面には棒状浮文2本を貼り付け、その上に刻みを施している。そして、口縁外面に斜格子文を施文する。頸部には、5本一単位の櫛歯状工具で、反時計回りに直線文を巡らせる。その下位には、櫛描波状文と思われる文様を施文して、その間に斜線文を充填している。あるいは、鋸歯文状になるかもしれない。外面調整はハケで、内面はミガキである。13は、頸部下端に1本描沈線で山形文を施している。14は、2本描沈線による直線文を施した下位に、1本描沈線でV字状に描く文様が認められる。

15～20は、沈線区画を伴う縄文帯を施している

個体である。15は、原体LR単節縄文を施文後、2本描沈線3条による直線文で区画する。16は、原体LR単節縄文を施文後、上下を磨り消して、沈線文による区画を行ない、その区画内に山形文を施している。17は、口唇部に原体LR単節縄文を施す。胴部には同様の縄文を施文し、2本描沈線3条を時計回りに巡らせて区画する。20は、胴部上半から底部にかけての個体である。胴部上半に、原体LR単節縄文を施文後、3本描沈線3条によって区画する。外面調整はハケ後、ミガキである。18はオオバコ系擬縄文を左上から右下にかけて施文する。1本描沈線2条を巡らせた後、ナメナデによって磨り消している。19はオオバコ系擬縄文を施文後、2本描沈線2条による波状文を施して区画している。上位にも無区画の擬縄文が認められる。

21～28は、無区画の縄文帯を主とする個体である。21は、口唇部に原体LR単節縄文を施す。頸部下端には原体RL単節縄文を施文後、LR単節縄文を施して羽状縄文を描く。縄文施文後、ヘラナデ調整を行っており、縄文が薄くなっている。22は、原体LR単節縄文を施文後、軽くナデ調整を施している。23は、口唇部に原体LR単節縄文を施し、頸部下端にも同様の原体で縄文を施文する。24は、折り返し口縁で、折り返した端部にハケ状工具によって刻み目を入れる。口唇部と頸部に原体LR単節縄文を施している。外面はハケ調整を行なうが、縄文施文の方が新しい。口縁部外面にはミガキも施される。25は、原体LR単節縄文を施し、縄文間にナデを施して縄文帯を作っている。内面調整は器面が凹む強いナデを施している。26の胴部上半には、原体LR単節縄文を施して、2段の縄文帯を巡らせている。縄文施文後、外面ハケ調整を行なっている。27は、原体RL単節縄文によって2段の縄文帯を施し、その間を山形文状に施文している。施文後、胴部下半にはナデ調整を施す。28は、広口壺である。口唇部に原体LR単節縄文を施文す



第134图 第42号沟迹出土遗物 (1)

る。胴部には、原体LR単節縄文を施文後、RL単節縄文を施して羽状縄文を描いている。外面調整はハケ後、ミガキを施す。

29～41は、口縁部から頸部にかけての無文の個体である。29は、頸部が他に比べて太く、口唇部に幅1cm程度の粘土帯を付け足している。内外面にその痕跡が残る。また、その口唇部に先端の尖ったハケ状工具によって、刻み目を施している。外面調整は、ハケ後ミガキを加えている。30の口唇部には、ハケ状工具によって刻み目を施す。31は、口縁部内面に粘土帯を折り返している。

32・33・35は、頸部が直線的になり、屈曲部をもって口縁部に達するものである。32は、口径が小さく、外面はハケ調整のみである。33・35の外面調整は、ヘラナデである。

34・36～41は、頸部が緩やかな弧を描きながら、口縁部に移行するものである。39の口唇部には、反時計回りに無節R縄文を、40・41の口唇部には、原体LR単節縄文を施文する。

44・46～50は頸部以下の無文の個体である。44の外面はハケ調整後、全面にミガキを施しているが、胴部上半は部分的にハケメを残し、胴部下半では、ほぼハケメが確認できる。45は胴部上半、47は胴部下半で、両者ともに外面調整はハケ後、ミガキを加える。46の胴部下半では、ミガキ調整を確認できるが、胴部上半では摩滅が著しく、ハケ調整のみ見える。48～50は胴部上半から底部まで残存する個体で、文様を施していない。48は摩滅・剝落がひどく、調整を確認できない。

51～71は甕で、51～54・57～59は口唇部に刻み目を施す個体である。51には外面ハケ調整後、棒状工具で押し当てて、刻み目を施しているために、刻み目内にハケメが残る。52には、ハケ状工具を用いて、53・54には、棒状工具で刻み目を施している。53の底面には、焼成後の穿孔が認められる。57は、頸部をわずかに屈曲させて口縁部を作出している。また、口唇部には粘土帯を貼り付けて、

肥厚させた後に、ヘラ状工具によって刻み目を深く施している。内外面ともに、丁寧にヘラナデ調整を施している。58も同様に、口縁部内面にハケ調整を加えることで、頸部に屈曲部を作っている。また、口唇部に先端の尖った工具によって、深い刻み目を加えている。59は、台付甕である。口唇部に先端の尖った工具によって、刻み目を施す。脚部は、端部が折り返されている。

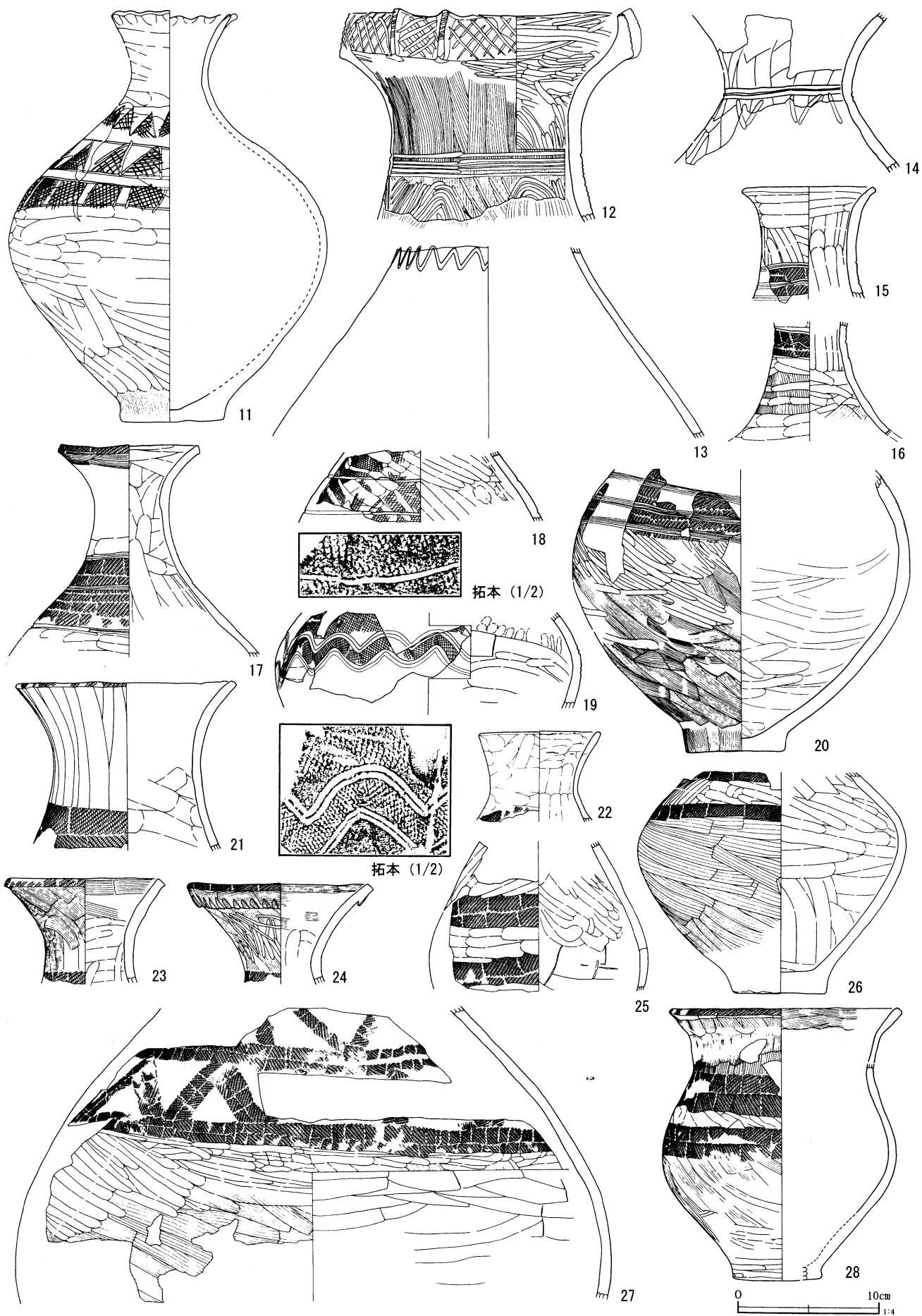
55・56・60～64は、口唇部に指頭押捺を施す個体である。55の内面に指の痕が残らず、外面のみを強く押捺する。外面には煤が付着している。56は指頭押捺を加える際、捻ることはせずに、内面に軽く指を当てていることで、少し凹ませている。61も同様に、捻ることはせず、内外面に指を押し当てている。成形が粗雑である。

60・62の口唇部には、軽く捻る指頭押捺を密に加えている。また、62は口縁部が外反せずに、胴部からそのまま直線的に口縁部へ至る。

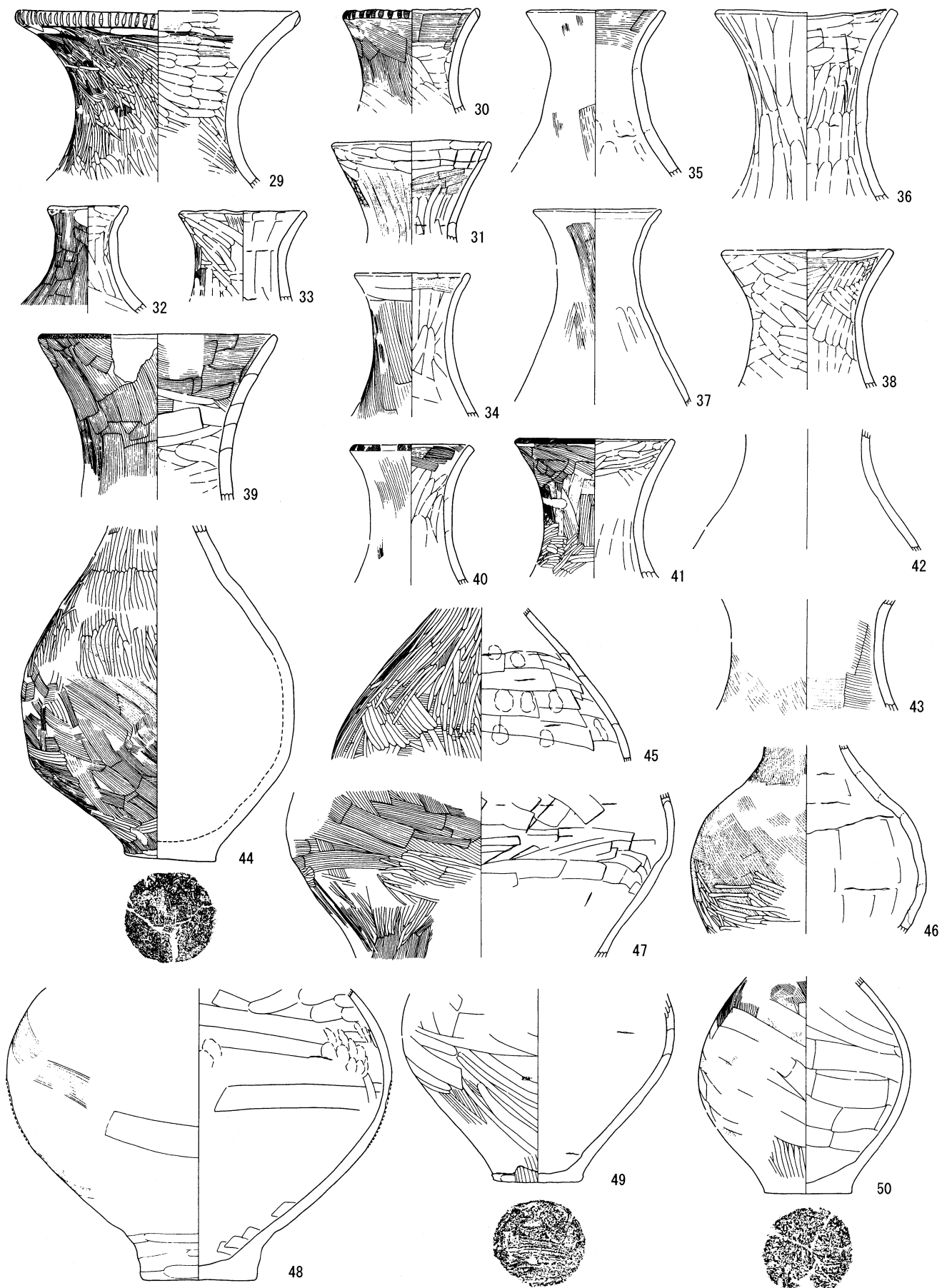
63・64は、強く捻りを加えた指頭押捺を口唇部に施す。63は、指頭押捺を密に行なっているため、外面の凸部が軽く尖っている。64の外面の凹部に、指頭押捺時の爪の痕が残されている。

65・66は、口縁部・胴部に装飾を施していない。65の胴部は下膨れの形を呈し、胴部上半は直線的になって、口縁部には屈曲して達する。外面調整はヘラナデ後、丁寧にミガキを施している。内面はハケ後、ヘラナデおよびミガキ調整である。66の口縁部は、幅1.5cm程度の粘土帯を足して成形されて、指頭圧痕と輪積み痕を明瞭に残している。

67～71は、櫛描文を施している個体である。67～69の胴部には、縦羽状文を施している。67は、器形も縦羽状文も形骸化している。頸部には、5本一単位の櫛歯状工具を用いて簾状文を時計回りに施している。胴部は、右から2単位目の5条重なる櫛描文が最も早く施文されて、時計回りに加えられていく。しかし、右から4単位目において、2条の垂下する櫛描文を、横位の櫛描文が切る一



第135图 第42号沟迹出土遗物 (2)



第136图 第42号沟迹出土遗物(3)

方で、その左側の斜めの櫛描文も切っている。

68の口唇部に、先端の尖った工具で刻み目を施している。頸部には、7本一単位の櫛歯状工具により、簾状文を反時計回りに巡らせる。同一方向で、胴部に縦羽状文を描いている。個々の施文順序は、すべて中央から始まり、左下がりの斜線文、右下がりの斜線文の順で加えていく。実測図左で、左下がりの斜線文が連続するが、それは余地がなかったために、左下がりの斜線文4条しか施文できなかつたと考えられる。現状では、2単位と半単位2つと余りが確認でき、総単位は4単位と余りと推定できる。内面調整はユビオサエ後ヘラナデを施すが、ユビオサエを残す。

69は、胴部のみが完全に残存する。頸部には、6本一単位の櫛歯状工具によって、簾状文を反時計回りに施している。同一方向で、胴部に6単位の縦羽状文を描いている。個々の施文順序は、68と同じである。外面調整はハケ後ヘラナデで、内面は胴部がヘラナデ、頸部にはハケを施す。

70は、口縁部から胴部上半の破片である。口唇部には原体RL単節縄文を時計回りに施文する。頸部には、6本一単位の櫛歯状工具で、簾状文を反時計回りに巡らせる。胴部は、現存する部分で左下がりの斜線文を確認できるのみで、横羽状文か、縦羽状文か、斜線文かは判断できない。

71は底部以外、残存している。口唇部には、先の尖った工具によって、斜めに刻みを入れる。頸部には、4本一単位の櫛歯状工具で簾状文を時計回りに施している。胴部には、同一工具によって左下がりの斜線文を描いている。器面全体に鉄分が多く付着しているため、施文順序は確認できない。内外面にミガキ調整を施す。

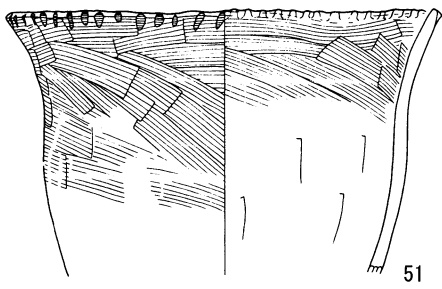
72～74は、有孔鉢である。72は口縁部片で、口唇部に原体LR単節縄文を、反時計回りに施文する。口縁部外面には、1本描沈線による2条の波状文が施される。また、頸部に2孔を内側から穿孔する。73は、口縁部を欠損している。頸部に2

孔一对の孔を2ヶ所穿孔している。74は頸部から胴部上半の破片で、頸部に2つの孔を確認できる。

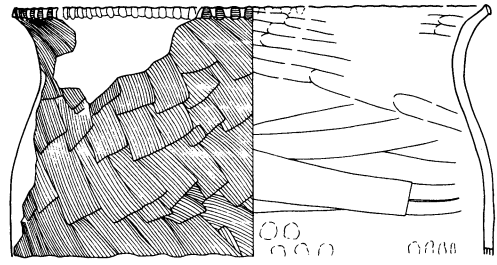
75～77は、鉢である。75は頸部で屈曲した口縁部をもち、胴部は丸味を帯びている。外面調整は、ミガキである。底面には条線を5本残すが、ミガキ調整が加えられている。76は、底部から外側に広がっていき、少し屈曲させて口縁部を作る。外面調整はハケ後ヘラナデである。77の外面と底面には、丁寧にミガキ調整を加えている。

78～83は高坏で、78の口唇部に、突起を1つ貼り付けている。突起は、粘土粒を指でつまんで作られており、三角形状をなす。79は口縁部が楕円形となり、歪んでいる。口縁部は屈曲させて直立している。内外面ともに、ミガキ調整を施す。80は口縁部片で、突起を1つ貼り付けている。外面に赤彩がわずかに残っている。81の口縁部は、粘土を継ぎ足して作出され、外側に突出する。外面調整はハケ後ミガキで、内面はヘラナデ調整である。82は口縁部片で、口縁部内面に強くナデを加えて、段を付けている。口唇部に、小さい半円形の突起を付けている。83は坏部片で、摩滅が著しいが、外面にミガキ調整が認められる。

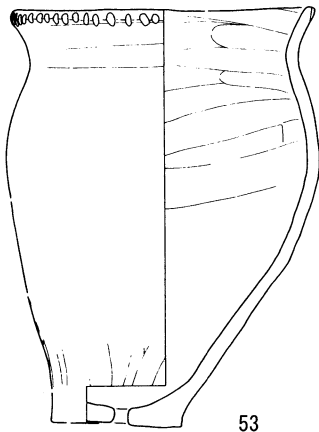
84～87は小型の土器類である。84は小型壺で、胴部上半に2本描沈線1条を反時計回りに巡らせて、そこから、縦位に7単位垂下させる。85は小型壺で、非常に粗雑な作りである。内外面に、輪積み痕を明瞭に残している。胴部には、基本2本描沈線による波状文を施し、その中に縦位の直線文を充填している。また、その下位に同一工具で、断続的に横線文を加えている。破片の上部は、輪積みの単位で欠損している。86は、小型の壺である。胴部中盤に、1本描沈線1条を反時計回りに描いて、その下位に粘土粒を4単位貼り付ける。現状で、3単位が残存している。器面の摩滅・風化が著しく、調整は確認できないが、外面に赤彩がわずかに残る。87は、小型鉢とする。胴部がくの字状に突出したところで、成形の単位が変わり、



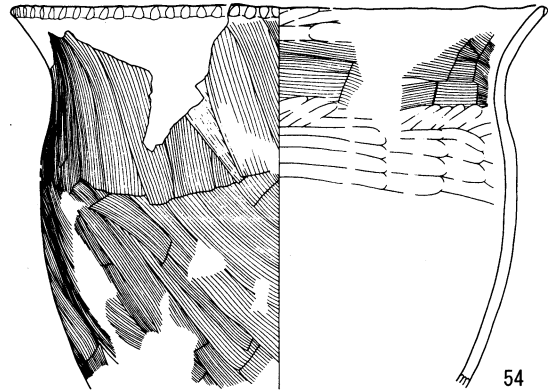
51



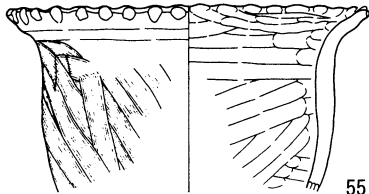
52



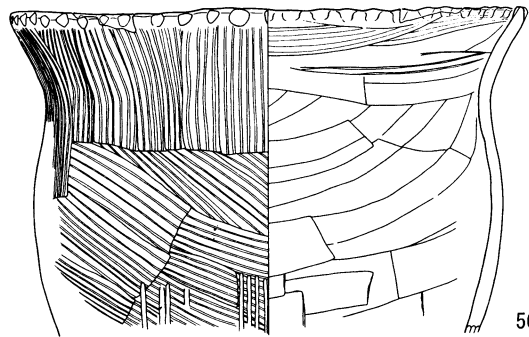
53



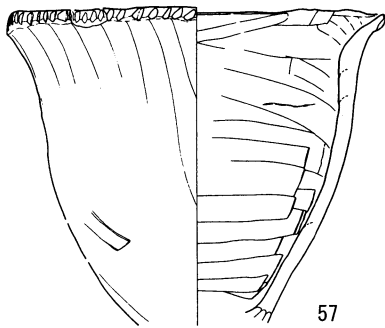
54



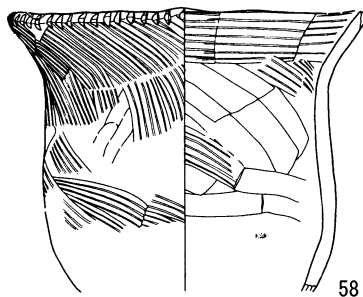
55



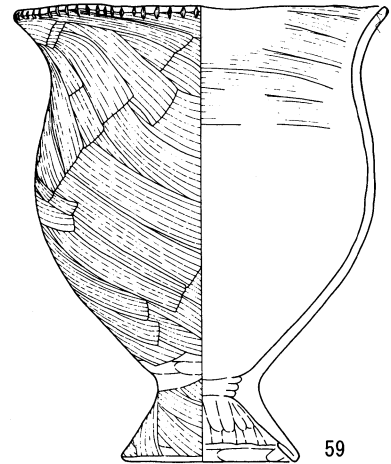
56



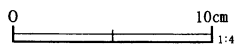
57



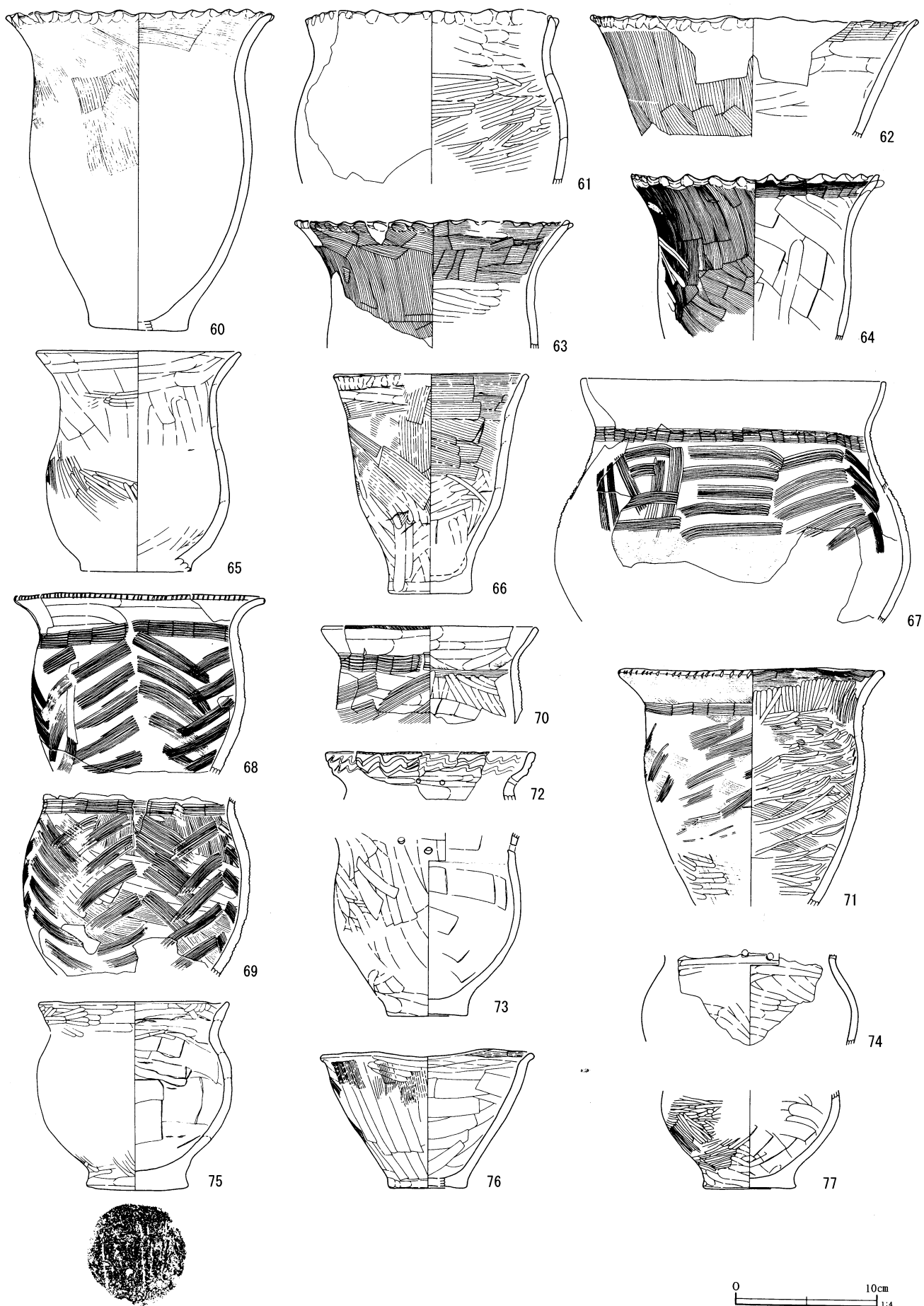
58



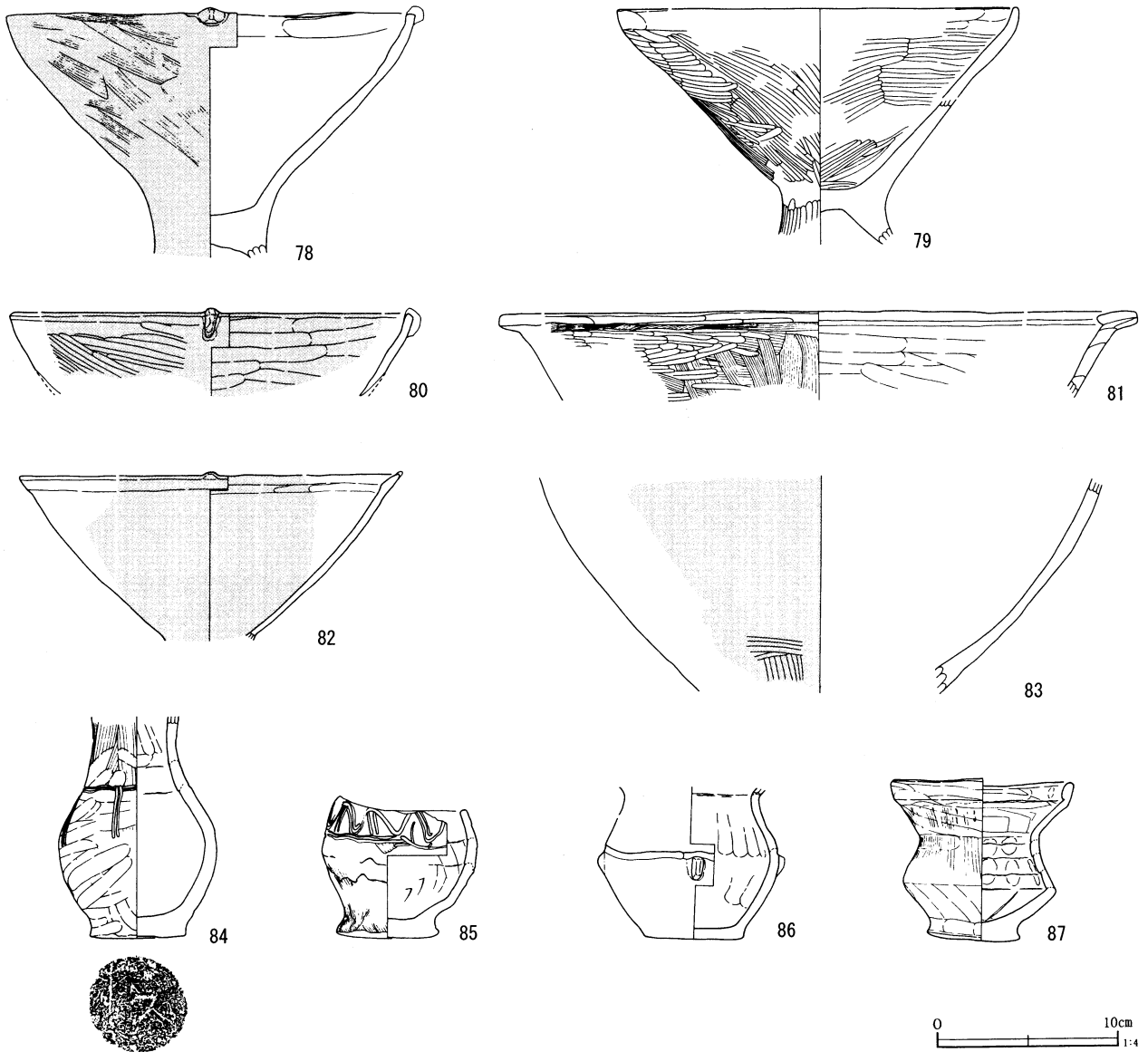
59



第137图 第42号沟迹出土遗物(4)



第138图 第42号沟跡出土遺物 (5)



第139図 第42号溝跡出土遺物（6）

内面に明瞭な輪積み痕が残る。内面の下位はヘラナデ調整、上位はユビオサエとナデ調整である。口縁部は内側に粘土を折り返している。外面はハケ後、ナデ調整である。

88～125は底部で、126～129は脚部である。

88～99は、胴部に至る器壁が、外に開いて緩やかに立ち上がるものである。そのうち、88～90は、内面において、底面と器壁の接点部分が角張り、台形状を呈するものである。また、91～99は、その接点部分が丸味を帯びて、U字状になるものである。90には、砂粒が動くほどのケズリ調整が確認できる。97は、右側に粘土帯を付け足している。

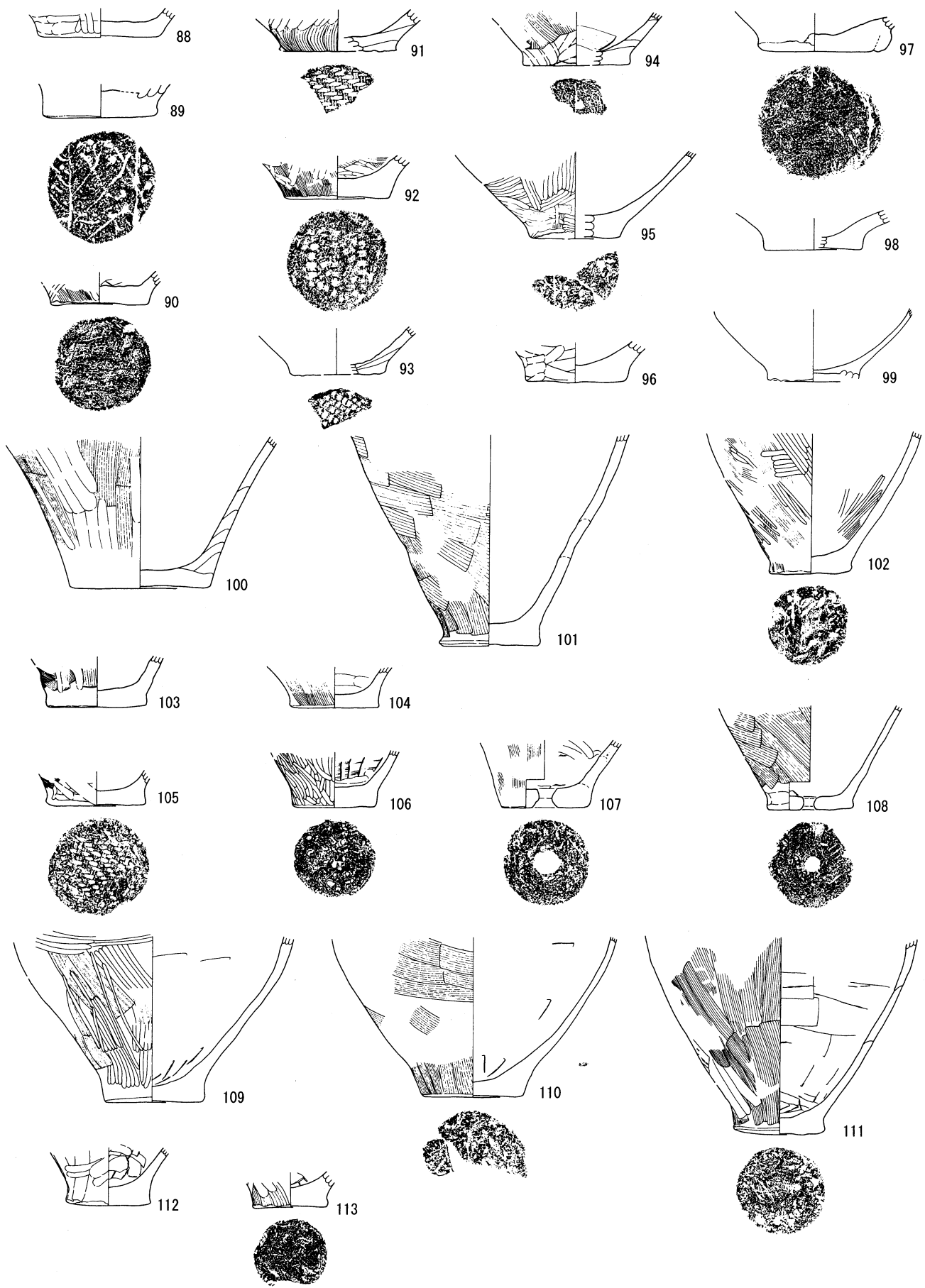
100～122は、胴部に至る器壁が、外に開かず

立ち上がるものである。さらに分けて、100～108は前述と同様に、内面の接点部分が角張り、台形状を呈するもので、109～122は接点部分が丸味を帯びて、U字状になるものである。

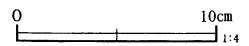
107・108は、底面に焼成後穿孔を施している。107の穿孔方法は、鋭利な工具で内外面から時計回りに工具を回転させて穿つものである。

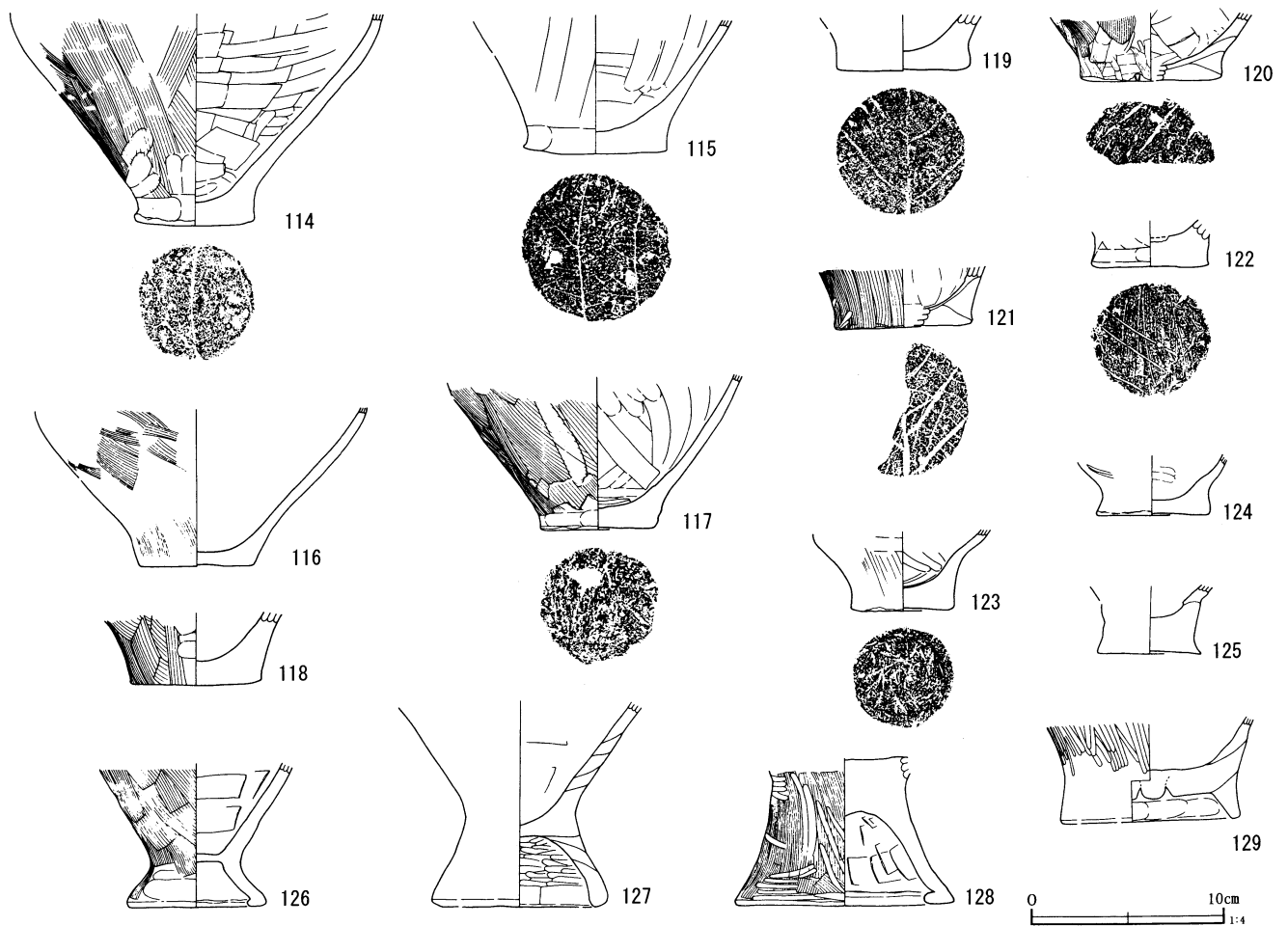
123～125は、器壁が歪んでいるものや底部が厚いものである。

126～129は、台付甕の脚部になると考えられる。126は、脚部から胴部の器壁へと連続的に成形していると思われる。一方、127～129は、脚部上面をホゾ穴状に開けておき、胴部下半を差し込む



第140图 第42号沟迹出土遗物 (7)





第141図 第42号溝跡出土遺物（8）

形をとっている。127の脚部内面はミガキ調整が加えられて消されているが、129には、ホゾ状の突起部が明瞭に残っている。

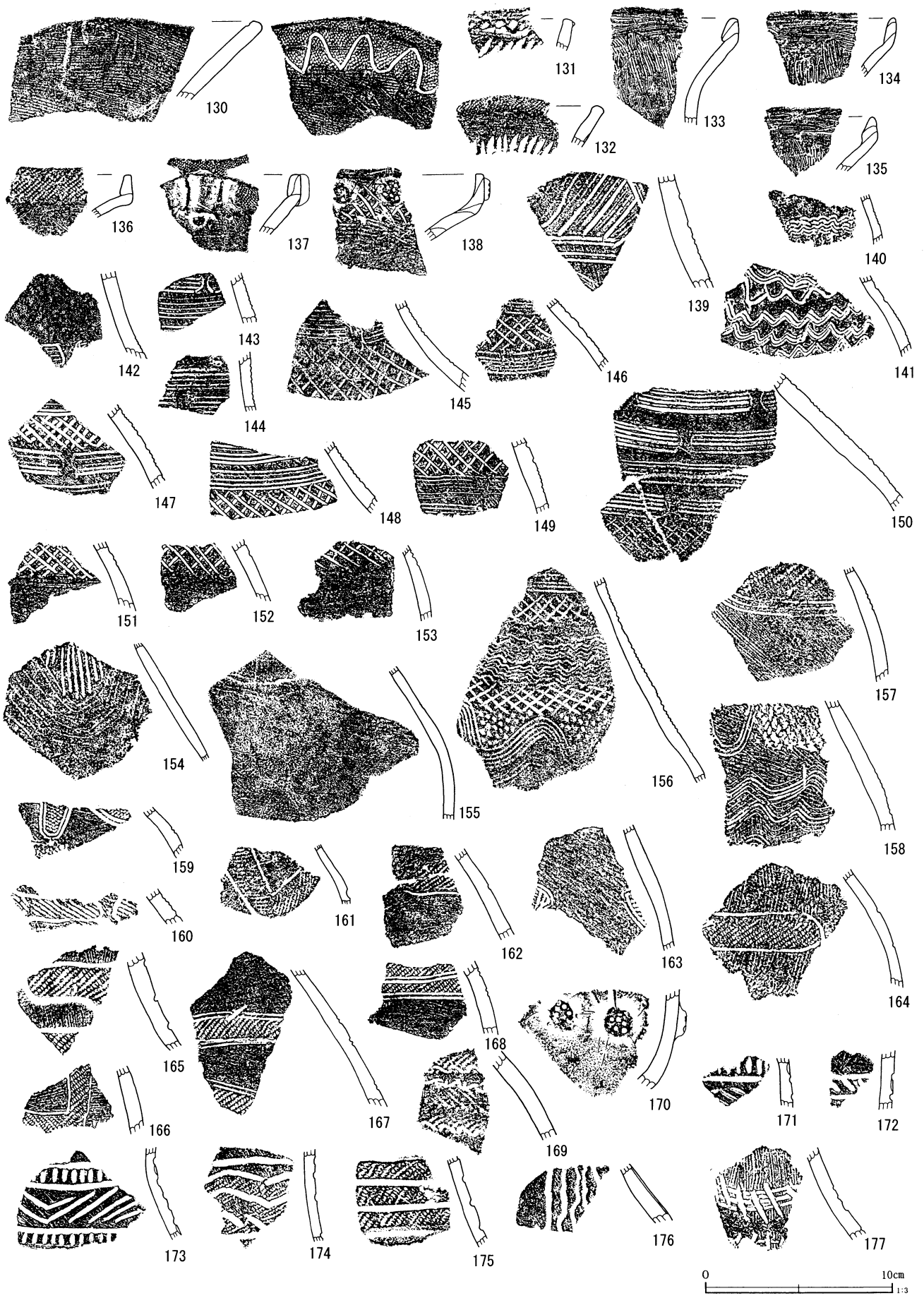
130～177は壺で、130～138は口縁部片である。130の口縁内面縁部および口唇部にオオバコ系擬縄文を施文後、1本描沈線1条による波状文を描いている。131の口唇部に、わずかな粘土を貼り付け、その上に棒状工具によって斜めに刻み目を施す。その下位には、原体LR単節縄文を施文する。132は、口唇部に原体LR単節縄文を施文し、外面には棒状工具を用いて、連続的に刺突を巡らせる。

133～138は、受口状の口縁部である。133～135は同一個体である。136の口唇部・口縁外面に原体LR単節縄文を施文する。137には、オオバコ系擬縄文を施文し、棒状浮文2本を貼り付けている。138は、1本描沈線の斜格子文を地文に、円形浮文を貼り付ける。

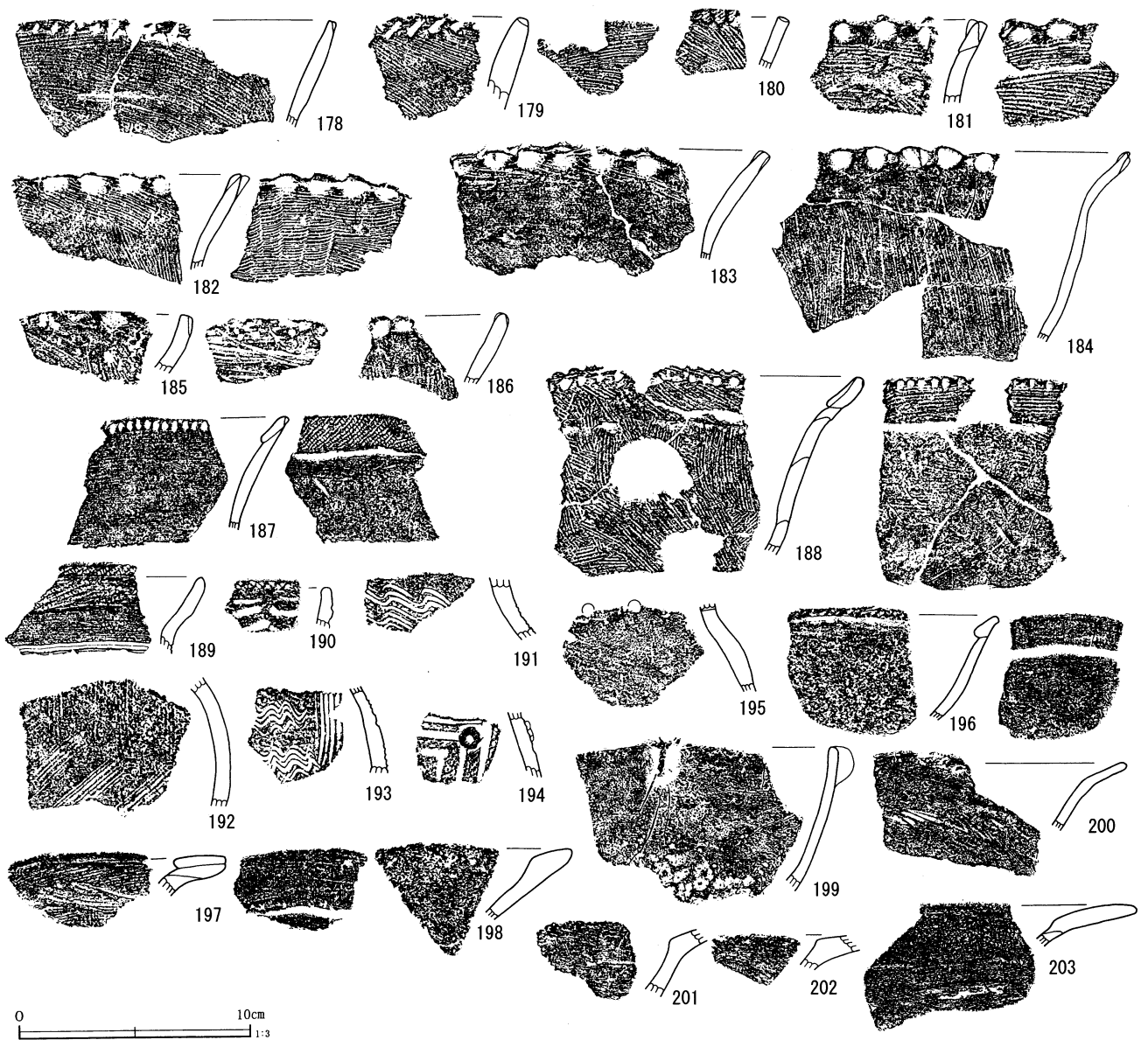
139～158は、櫛描文を主に施すものである。139～141は、波状文を施す胴部片である。139には、直線文を引き、その上位に波状文を描いて、その中に短斜線文を充填している。

142～153は、擬似流水文を施す破片である。142は頸部片で、上位は無文となる。143・144は、直線文を重ねている破片で、145～149は、数段重ねた間に1本描沈線による斜格子文を施している破片である。151～153は、胴部中盤の破片で、斜格子文より下は無文となっている。

154は胴部片で、間隔が広い7本一単位の櫛歯状工具によって、右上から下まで弧状を描き、改めて右上がりに施して、波状文をなすと思われる。その中に縦位の直線文を充填している。155は摩滅が著しい破片で、上部に櫛3本が確認できるのみである。156は1本描沈線による斜格子文2段のそれぞれの上位に、直線文・2条の振幅が小さ



第142图 第42号沟迹出土遗物(9)



第143図 第42号溝跡出土遺物 (10)

い波状文を施す。さらに、下段の斜格子文の下に振幅が大きい波状文を施して、その中に円形刺突を充填している。157は原体LR単節縄文を直線文で区画する胴部片である。158には、振幅が大きい波状文内に原体RLR複節縄文を充填し、その下に振幅が小さい波状文を3条施している。

159~168は、縄文を施す胴部片である。159・163・167・168は2本描沈線で、160~162・164~166は1本描沈線で縄文を区画している。また、162・163・167・168の無文部に赤彩を施している。159・161は結紐文で、159はオオバコ系擬縄文を施文するもので、161は逆位のものである。

160・162~164は楕円文で、161のみ無節Rを施文する。165は王子文である。

169には、端末S字状結節縄文を横位に施文しており、他よりも新しい様相を示す。170は円形浮文を2つ貼り付ける破片である。

171~173は同一個体で、1本描沈線2条による区画内に連続刺突を充填したものを2段配し、その間にV字状と短斜線文を描く。

174・175には、地文に原体LR単節縄文を施文し、1本描沈線2条の区画内に山形文と直線文を充填する。176は、垂下する直線文の区画内に波状沈線文3条を充填したものである。177は胴部片

で、1本描沈線3条の上に短斜線文を重ねる。

178～194は甕で、178～190は口縁部、191は櫛描波状文を施す頸部、192～194は胴部である。

178～180・187・188の口唇部には、工具による刻み目を施し、181～186には、指頭押捺を加えている。187・188は折り返し口縁で、内面の折り返し面に原体LR単節縄文を施文する。188は内面にも刻み目を付ける。189・190は受口状の口縁で、口唇部に原体LR単節縄文を施文する。189の外面にも同様の縄文を施し、190には3条の沈線文を加える。

192は横羽状文、193は垂下する櫛描文と横位の波状文、194はコの字重ね文である。

195は有孔鉢、196～203は高坏の口縁部片である。196の口唇部にLR単節縄文が確認できる。

縄文土器 (第144・145図)

環濠からは、弥生時代の土器だけでなく、多くの縄文土器も出土した。もちろんこれらは埋没時の流入土とともにもたらされたものであるが、後述する縄文時代の良好な遺物包含層を急角度で断ち切って掘削された溝であるだけに、その混入度は通常の遺構の比ではない。縄文土器の出土は、発達した包含層を分断する形となった溝の北半でとくに多く、なかには当該期の遺構に比肩しうる大きな破片も多く見られた。

ここでは縄文土器を一括して報告するが、時期別の分類は台地上の遺構外出土遺物を紹介した第IV章7節、また、今回の調査でもっとも多くが出土した関山II式土器の分類については、次節を参照されたい。

本溝出土縄文土器の主体は関山II式土器が占めており、縄文遺物包含層の構成比をそのままに反映した形となっている。しかし、包含層には含まれていなかった中期土器が出土しており、埋没期の時間差を象徴している。

204～206は早期後葉条痕文系の資料で、浅く粗い器面調整が共通している。やや尖り、外反する

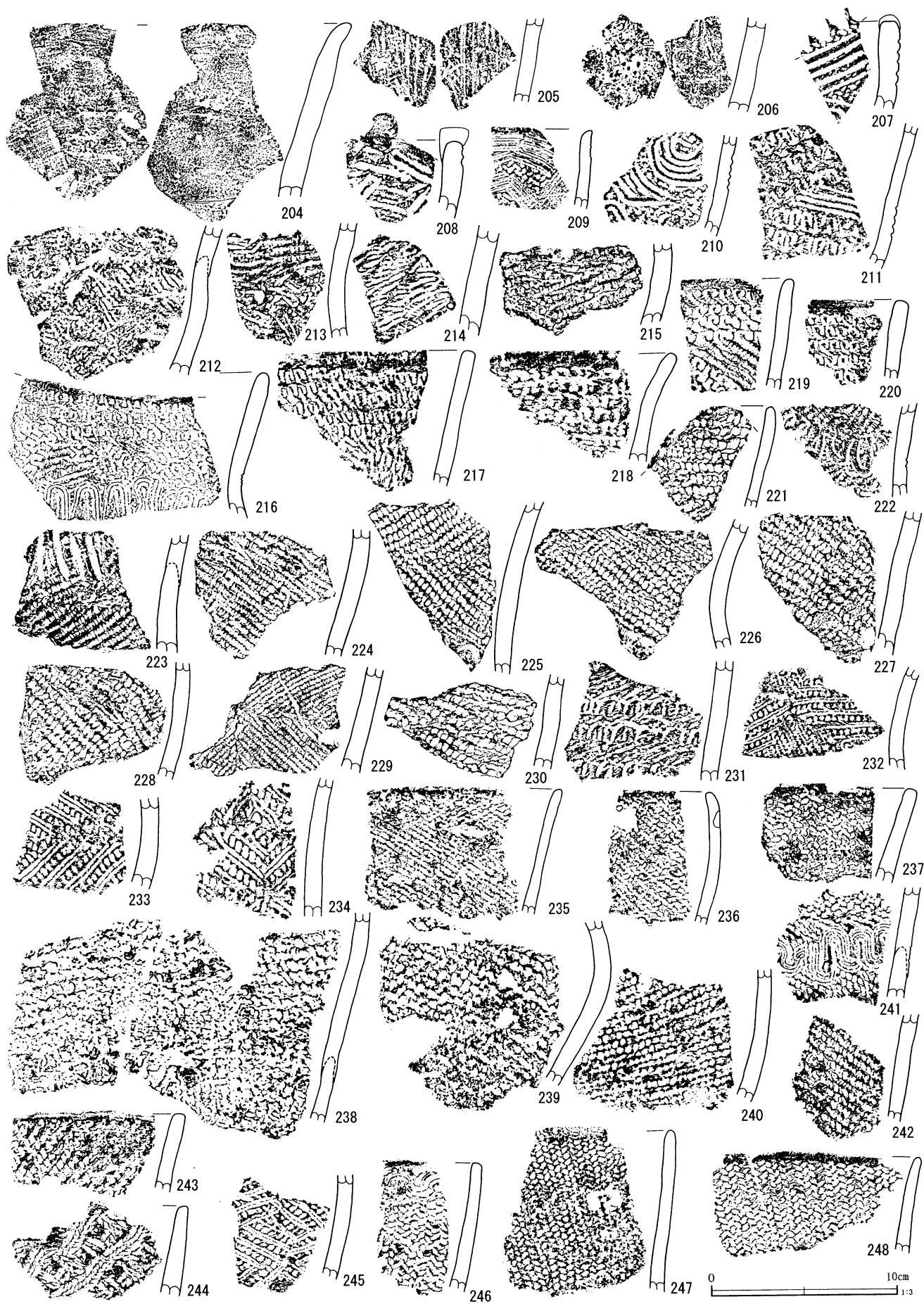
口唇部形態や擦痕に近い器面調整、軟質な胎土の特徴からすると、製作期は茅山下層から前期初頭の間と見込まれる。

207～262は前期前半の関山式土器である。このうち207～211は口縁部や胴部に工具文による文様帯を設けるもので、三回一組の多截竹管施文による鋸歯や渦巻の描出が多い。また、211は多段ループ文による菱形文を掘り所にその余白を工具鋸歯文で埋めている。

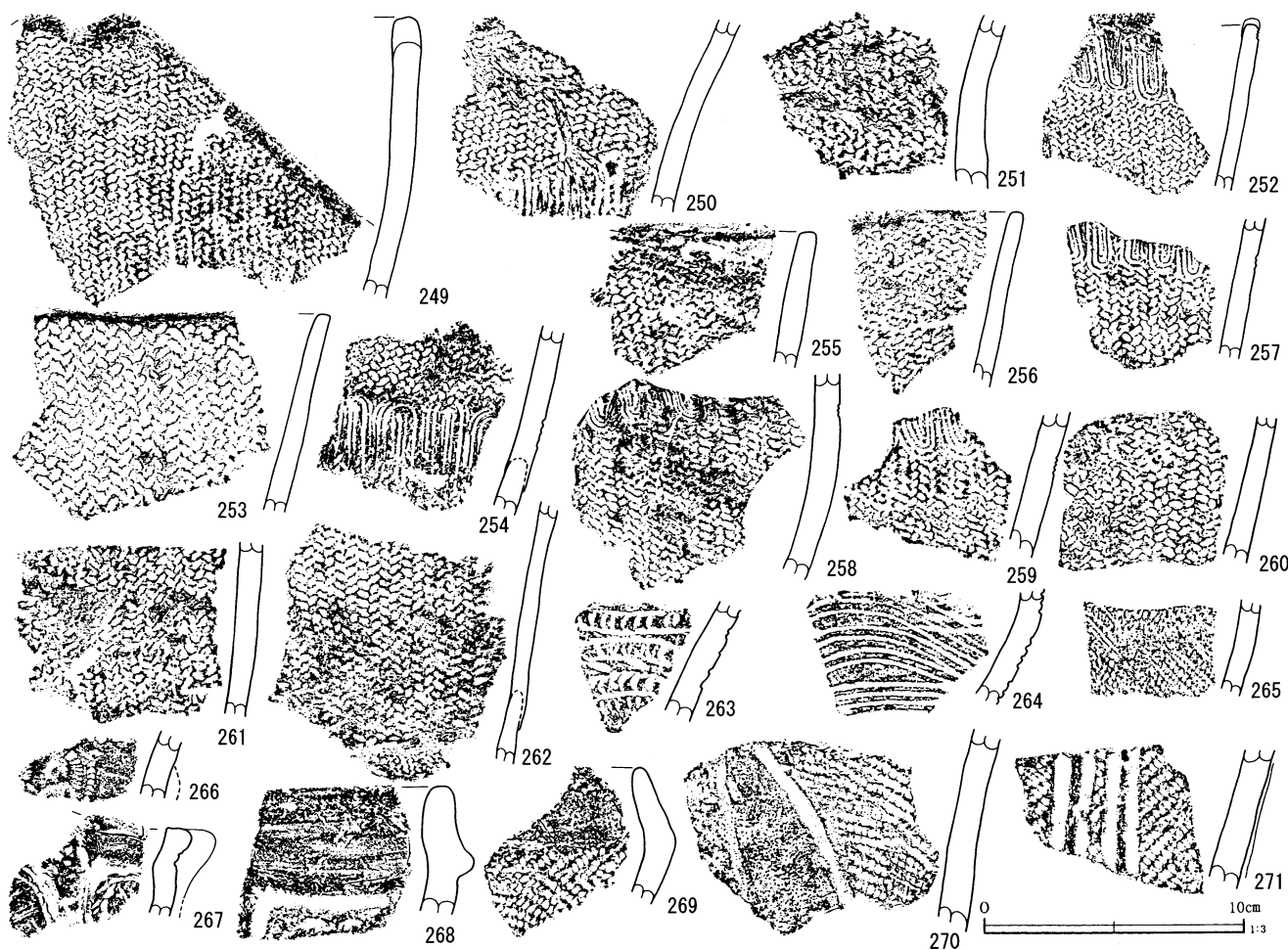
212～214は貝殻背圧痕文、215は無節斜縄文だが、前者は腹縁に近い部位を押圧することにより放射肋のばらつきを加減し、1回あたりの施文面積を確保している。

216～230は単節斜縄文を押捺するもので、216～220は多段ループ帯を作出し、斜縄文帯と対置させている。216・217・219はループ帯が鋸歯または菱形に展開する南東北系の構成をとるが、その比率は他の出土地に比してかなり高い。また、1点のみであるが、埼玉県北部に多い単沈線による刺切文が223に認められる。縄文原体は、多くが0段多条のようだが、230のみは節の幅が広いことから2条と考えられる。231は緩い環状末端を作成した後に撚り戻しLLとする原体を回転施文しているが、末端を縛しており、その圧痕がループ施文でも隠しきれずに残されている。また、232～234は異条斜縄文が施文されている。原体は、いわゆる正反の合Aで、羽状構成の基本は堅持されている。

235～243は組紐の組み違い原体を回転押捺したものである。235～240は擬異節、241・242は擬単節、243では擬複節の圧痕が観察できる。また、244・245は附加条縄文が施文されている破片である。前者はR2本L1本の計3本を附加縄とし、順逆双方に絡げているが、その多さから、軸縄の圧痕がほとんど見えない。さらに、245は正反の合Aを附加条手法で作出したもので、疑似正縄の節が反縄をまたいで一直線に通っているのが観察で



第144图 第42号沟迹出土遗物 (11)



第145図 第42号溝跡出土遺物 (12)

きる。

246～262は組紐文が施されたもので、246～251がRRL、252～254がLLR、255以下が詳しい原体が見分けられないものである。ここで見られるコンパス文はすべて櫛状工具で施文されており、252・254・257などのように支点を上下移動させて縦長に描出するものが主流である。

263～265は前期後半竹管文系の土器である。爪形文(263)、沈線文(264)はいずれも大きく開口する朝顔形の深鉢となるだろう。265は1段3条の単節LRを施文している。

266・267は中期前半の勝坂・阿玉台系土器で、266の勝坂系では爪形文で隆帯脇の圧着を処理しているが、267の阿玉台系口縁部は竹管による連続刺突でこれを行っている。また、268～271は加曾利E系土器で、微隆起(268)、沈線(270)、低隆帯(271)などで区画文を作出している。

石器 (第146図)

272は表面の風化が進んでいるため、調整加工の詳細は不明である。正面は粗い面的剥離が、裏面は両側縁から周縁的剥離が施されている。

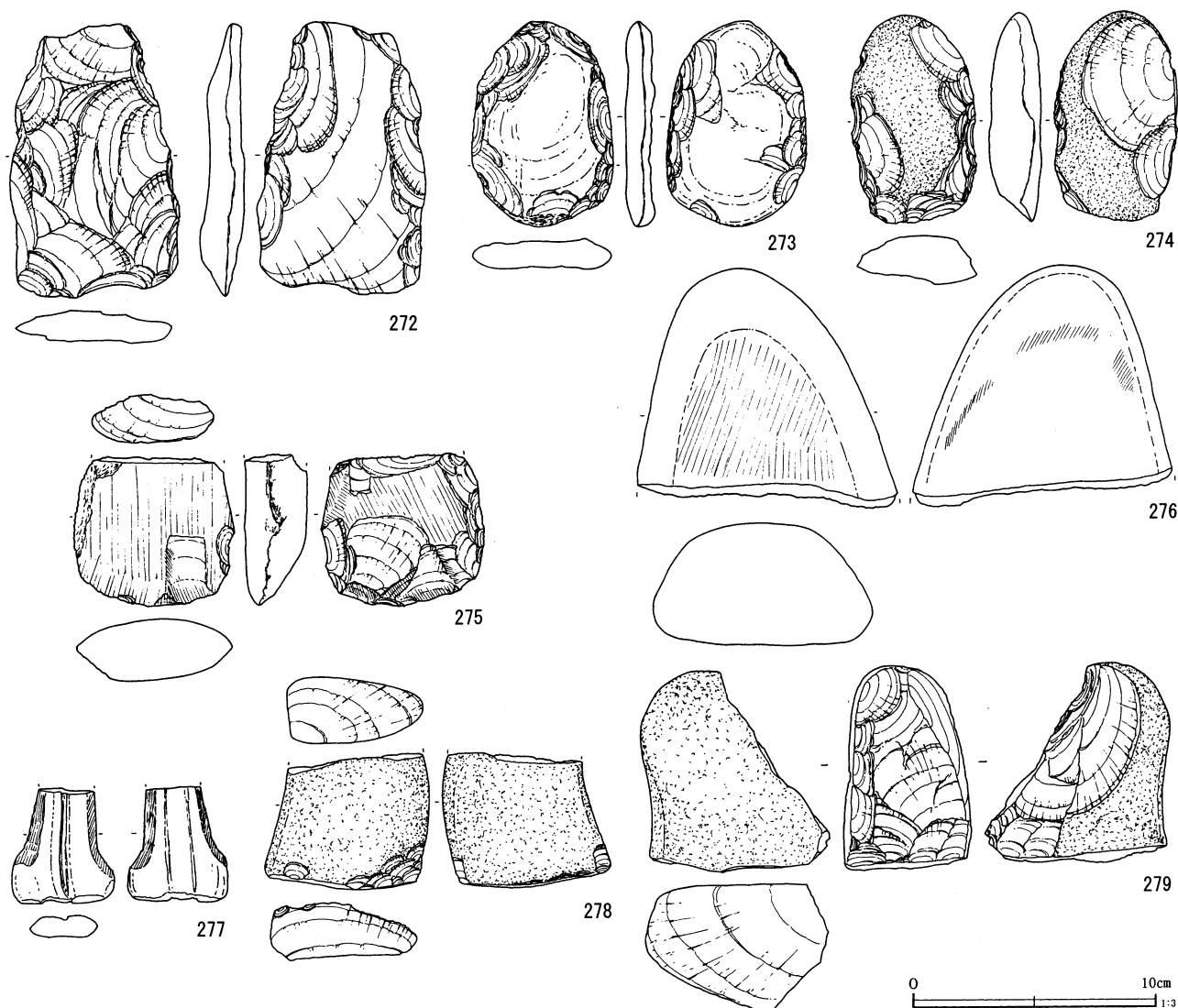
273・274は扁平の楕円礫を素材に、刃部を中心に周縁加工が施されている。

275は上半部を欠損する。横断面はレンズ状を呈する厚手幅広の磨製石斧である。刃縁は円刃で弱凸強凸片である。

276は大形の礫が用いられており、正面に磨痕がみられ、磨石又は台石に用いられてと思われる。

277は上半部を欠損する。正面に幅狭の溝、裏面に幅広の凹線、側縁に磨耗面がある有溝砥石である。

278・279は礫を分断し底面を作っている。底面に磨耗痕は観察されなかった。



第146図 第42号溝跡出土遺物 (13)

第29表 第42号溝跡出土遺物観察表 (第134~143・146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	弥生土器	壺		[33.5]	7.0	ABC	普通	にぶい黄褐	95	櫛歯 5本一単位
2	弥生土器	壺	10.0	[23.9]		ABC F	普通	橙	50	櫛歯 4本一単位
3	弥生土器	壺		[12.2]	6.9	ABC F	良好	浅黄橙	85	櫛歯 4/3本一単位
4	弥生土器	壺	(10.0)	[9.7]		ABCE	普通	橙	80	櫛歯 7本一単位
5	弥生土器	壺	8.1	[13.8]		BCE F	普通	橙	80	櫛歯 5本一単位
6	弥生土器	壺	6.3	[10.1]		ABC	良好	にぶい黄橙	80	下層 櫛歯一単位不明
7	弥生土器	壺		[8.6]		AC	普通	にぶい黄褐	85	櫛歯 3本一単位
8	弥生土器	壺	(12.6)	[7.8]		ABC	普通	にぶい橙	25	櫛歯 5本一単位
9	弥生土器	壺		[27.3]		ABC F	普通	橙	60	櫛歯 5本一単位
10	弥生土器	壺		[22.0]	7.6	ABC	普通	にぶい褐	25	櫛歯 6本一単位
11	弥生土器	壺	8.4	29.6	7.4	ABC	普通	橙	80	
12	弥生土器	壺	(19.3)	[15.3]		ABC	普通	にぶい橙	40	櫛歯 5本一単位
13	弥生土器	壺		[13.8]		BCE	普通	にぶい黄橙	25	
14	弥生土器	壺		[11.1]		ABC	普通	にぶい黄橙	20	
15	弥生土器	壺	(9.7)	[8.0]		ABC	普通	橙	20	
16	弥生土器	壺		[8.5]		ABEF	普通	にぶい橙	80	
17	弥生土器	壺	9.6	[15.1]		ABC I	普通	橙	80	F-10g
18	弥生土器	壺		[5.2]		AC	普通	橙	25	オオバコ系擬縄文
19	弥生土器	壺		[7.3]		BEFI	普通	にぶい黄橙	15	Y層出土と接合 第158図145~150と同一個体
20	弥生土器	壺		[20.4]	(6.1)	ABC	良好	にぶい褐	45	
21	弥生土器	壺	15.5	[11.9]		ABC F	普通	橙	95	
22	弥生土器	壺	8.2	[6.4]		AC F	普通	橙	80	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
23	弥生土器	壺	10.9	[7.6]		A B C F I	普通	にぶい橙	75	
24	弥生土器	壺	12.6	[7.2]		A C	普通	橙	90	
25	弥生土器	壺		[10.6]		A B C	普通	橙	20	
26	弥生土器	壺		[15.7]	6.7	A B C	普通	にぶい橙	85	
27	弥生土器	壺		[21.0]		A B C	普通	にぶい黄橙	20	
28	弥生土器	壺	(16.2)	19.3	6.5	A B C	普通	橙	65	
29	弥生土器	壺	19.8	[12.1]		A C F	良好	にぶい赤褐	90	胎土は緻密
30	弥生土器	壺	9.1	[7.5]		A B C E F	普通	にぶい橙	60	
31	弥生土器	壺	(10.8)	[7.1]		A B F	普通	褐灰	25	下層
32	弥生土器	壺	5.2	[7.5]		C F	普通	橙	80	
33	弥生土器	壺	8.6	[6.4]		A C F G	普通	橙	100	
34	弥生土器	壺	7.8	[10.3]		A E F G H I	普通	橙	70	
35	弥生土器	壺	9.1	[11.8]		A B C E F	普通	明褐	75	
36	弥生土器	壺	12.3	[13.6]		A C E F G I	普通	にぶい黄橙	95	下層
37	弥生土器	壺	(8.8)	[14.0]		A B C	普通	橙	50	
38	弥生土器	壺	11.6	[9.8]		A F	普通	浅黄橙	95	
39	弥生土器	壺	(16.5)	[11.7]		A C E G I	普通	にぶい褐	40	
40	弥生土器	壺	8.2	[10.0]		C F I	普通	橙	85	
41	弥生土器	壺	10.7	[9.8]		A B C E F	普通	にぶい黄橙	90	
42	弥生土器	壺		[8.6]		A B C	普通	橙	25	
43	弥生土器	壺		[7.8]		A B C	普通	にぶい黄橙	20	
44	弥生土器	壺		[23.7]	6.6	A B C	普通	にぶい褐	75	
45	弥生土器	壺		[10.9]		A B C E F I	普通	にぶい褐	20	
46	弥生土器	壺		[13.3]		A B C E F	普通	橙	70	砂粒多い
47	弥生土器	壺		[11.7]		A B F	普通	にぶい褐	35	
48	弥生土器	壺		[20.7]	8.0	A C	普通	にぶい黄橙	75	
49	弥生土器	壺		[13.3]	6.2	A C D	普通	橙	30	
50	弥生土器	壺		[15.2]	6.2	A B C	普通	にぶい橙	80	
51	弥生土器	甕	21.3	[13.3]		A C F	普通	にぶい黄褐	80	
52	弥生土器	甕	(23.8)	[12.5]		A B C F	普通	褐	25	胎土精選
53	弥生土器	甕	14.7	20.2	6.4	A C	普通	にぶい橙	70	焼成後底部穿孔
54	弥生土器	甕	(26.7)	(19.4)		A B C	普通	黒褐	25	外面に多く鉄分付着
55	弥生土器	甕	(18.2)	[9.4]		A B I	普通	にぶい褐	20	下層
56	弥生土器	甕	(25.5)	[16.4]		A B C F	普通	橙	20	粗いハケメ
57	弥生土器	甕	18.6	[16.0]		A B	普通	褐灰	80	
58	弥生土器	甕	17.7	[14.3]		B C	普通	黒褐	75	粗いハケメ
59	弥生土器	台付甕	18.4	22.8	(9.0)	A B F	普通	橙	90	
60	弥生土器	甕	19.2	22.6	6.9	A B C	普通	橙	90	
61	弥生土器	甕	(18.0)	[12.1]		A B C	普通	灰黄褐	20	
62	弥生土器	甕	23.2	[8.7]		A B C	普通	橙	40	
63	弥生土器	甕	(19.4)	[9.0]		A B C F I	普通	黒褐	40	
64	弥生土器	甕	(17.4)	[11.8]		A B C	普通	にぶい褐	25	
65	弥生土器	甕	14.4	15.7	(7.9)	A B E F	普通	灰黄褐	80	
66	弥生土器	甕	(13.5)	15.7	6.0	A B E	普通	黒褐	30	
67	弥生土器	甕	(21.8)			A B C F	普通	明褐	30	縦羽状文 櫛歯5本一単位 内面ミガキ
68	弥生土器	甕	(17.7)	[12.9]		B C E	普通	橙	70	櫛歯7本一単位
69	弥生土器	甕		[12.7]		A B C	良好	橙	90	縦羽状文 櫛歯6本一単位
70	弥生土器	甕	(15.2)	[6.9]		A B	普通	橙	25	櫛歯6本一単位 緻密な胎土
71	弥生土器	甕	18.4	[16.9]		A B C	普通	にぶい褐	80	斜線文 櫛歯4本一単位
72	弥生土器	有孔鉢	(14.0)	[3.4]		A B C	普通	にぶい橙	15	
73	弥生土器	有孔鉢		[13.0]	5.6	A B E F I	普通	にぶい橙	90	
74	弥生土器	有孔鉢		[6.4]		A B C	良好	にぶい橙	15	
75	弥生土器	広口壺	(13.4)	13.4	7.2	A B C F	普通	にぶい橙	70	磨いているが作りは粗雑
76	弥生土器	小型鉢	(14.7)	9.9	(5.5)	A B C E F	普通	にぶい橙	50	
77	弥生土器	鉢か		[7.0]	6.6	A B C F	普通	橙	60	
78	弥生土器	高坏	(22.4)	[14.0]		A C	普通	暗赤褐	25	内外面赤彩
79	弥生土器	高坏	(22.1)	[13.2]		B C F	普通	にぶい褐	50	下層 内面わずかに赤彩あり
80	弥生土器	高坏	(22.0)	[4.9]		A B C I	普通	にぶい橙	20	内外面赤彩
81	弥生土器	高坏	(35.4)	[4.9]		A B C	普通	にぶい黄褐	20	
82	弥生土器	高坏	(21.0)	[9.4]		A B E F	普通	橙	20	内外面赤彩
83	弥生土器	高坏		[12.2]		A B C	普通	橙・赤褐	20	内外面赤彩
84	弥生土器	小型壺		[12.3]	5.3	A B E F	良好	にぶい黄橙	95	
85	弥生土器	小型壺	(7.1)	9.0	5.6	A B C F	普通	にぶい黄橙	85	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
86	弥生土器	小型壺	9.8	[8.5]	5.5	A B C E	不良	黒褐	90	
87	弥生土器	小型鉢		9.0	5.1	A F G H I	普通	橙	90	
88	弥生土器	不明		[2.1]	8.6	A B C	普通	にぶい褐	100	底部 黒斑有り
89	弥生土器	不明		[2.4]	8.0	A B C	普通	明赤褐	100	底部 木葉痕
90	弥生土器	不明		[2.4]	7.0	A B C F	普通	橙	95	底部 底面ケズリ
91	弥生土器	不明		[3.0]	(8.4)	A B C F	普通	灰黄褐	20	底部 網代痕
92	弥生土器	不明		[3.0]	7.6	A B C	普通	橙	90	底部 網代痕
93	弥生土器	不明		[3.3]	(7.0)	A C D	普通	橙	20	底部 網代痕
94	弥生土器	不明		[3.8]	(7.4)	A B C	普通	にぶい赤褐	20	底部 木葉痕
95	弥生土器	不明		[6.2]	(6.4)	A B C	普通	暗褐	50	底部 木葉痕
96	弥生土器	不明		[2.9]	7.2	A B C	普通	にぶい褐	95	底部
97	弥生土器	不明		[2.8]	9.0	A B C	普通	にぶい黄橙	100	底部
98	弥生土器	不明		[2.8]	7.1	A C	普通	にぶい黄橙	65	底部
99	弥生土器	不明		[4.3]	(6.5)	A B C F	普通	橙	60	底部
100	弥生土器	不明		[10.7]	(10.0)	A B C	普通	にぶい黄橙	30	底部
101	弥生土器	不明		[14.9]	7.1	B C F	普通	明褐	60	底部
102	弥生土器	不明		[10.1]	5.9	B C E	普通	にぶい橙	70	底部 木葉痕ナデ消し
103	弥生土器	不明		[3.6]	7.0	B C	普通	にぶい黄褐	90	底部
104	弥生土器	不明		[2.9]	6.3	A B C	普通	黒褐	95	底部
105	弥生土器	不明		[2.5]	7.1	A B C	普通	褐灰	80	底部 網代痕
106	弥生土器	不明		[4.0]	5.8	A B C	普通	にぶい黄褐	80	底部 底面ナデ 靱痕か
107	弥生土器	甕		[4.8]	6.0	A C F	普通	にぶい橙	85	焼成後底部穿孔 わずかに木葉痕あり
108	弥生土器	甕		[7.4]	6.0	A C E G I	普通	橙	30	下層 焼成後底部穿孔 底部
109	弥生土器	不明		[11.7]	6.8	A B C F	普通	にぶい黄橙	85	下層
110	弥生土器	不明	[11.4]	7.2	A B C F	普通	橙	35	底部	
111	弥生土器	不明	[14.0]	6.5	A B C F	普通	黒褐	20	底部 木葉痕	
112	弥生土器	不明	[4.1]	6.0	A B C	普通	黒	90	底部	
113	弥生土器	不明	[2.5]	5.4	A B C	普通	明赤褐	90	底部 底面ミガキ	
114	弥生土器	不明	[11.0]	6.2	A B C	普通	橙	40	底部 木葉痕	
115	弥生土器	不明	[7.0]	7.5	A C	普通	橙	70	底部 木葉痕	
116	弥生土器	不明	[8.2]	6.0	A B C	普通	にぶい黄橙	80	底部	
117	弥生土器	不明	[7.9]	6.0	A B C	普通	浅黄橙	85	底部 木葉痕ナデ消し	
118	弥生土器	不明	[3.8]	6.8	A B C	普通	にぶい黄褐	100	底部	
119	弥生土器	不明	[2.9]	7.0	A B C F	普通	にぶい黄橙	95	底部 木葉痕	
120	弥生土器	不明	[3.6]	(7.4)	A B C F	普通	にぶい赤褐	45	底部 木葉痕	
121	弥生土器	不明	[3.0]	(7.0)	A B C	普通	にぶい褐	45	底部 木葉痕	
122	弥生土器	不明	[2.5]	(6.2)	A B C	普通	にぶい赤褐	95	底部 斜格子状に沈線残る	
123	弥生土器	不明	[4.2]	5.4	A B C	普通	にぶい黄橙	80	底部	
124	弥生土器	不明	[3.1]	6.0	A B C	普通	橙	80	底部	
125	弥生土器	不明	[3.6]	5.4	A B C	普通	浅黄橙	80	底部	
126	弥生土器	台付甕	[7.6]	7.2	A B C I	普通	浅黄橙	75	脚部	
127	弥生土器	台付甕	[10.8]	9.2	A B C E F I J	普通	にぶい褐	45	下層 脚部	
128	弥生土器	台付甕	[7.8]	11.4	A B C F	普通	にぶい黄橙	95	脚部	
129	弥生土器	台付甕	[4.2]	9.5	A B E F	普通	にぶい橙	90	脚部	
130	弥生土器	壺	口縁部		A B C E I	普通	橙	破片	オオバコ系擬縄文	
131	弥生土器	壺	口縁部		A B C	普通	黒褐	破片		
132	弥生土器	壺	口縁部		A B C	普通	黒	破片		
133	弥生土器	壺	口縁部		A B C E	普通	にぶい黄褐	破片		
134	弥生土器	壺	口縁部		A B C E	普通	にぶい黄褐	破片		
135	弥生土器	壺	口縁部		A B C E	普通	黒褐	破片		
136	弥生土器	壺	口縁部		A B C I	普通	橙	破片	内外面赤彩	
137	弥生土器	壺	口縁部		A B C	普通	橙	破片	オオバコ系擬縄文	
138	弥生土器	壺	口縁部		A B C	普通	橙	破片	内外面赤彩	
139	弥生土器	壺	頸部		A B C	普通	橙	破片	櫛歯 4 本一単位	
140	弥生土器	壺	頸部		A B C	普通	明黄褐	破片	櫛歯 5 本一単位	
141	弥生土器	壺	胴部		A B C E	普通	褐灰	破片	櫛歯 3 本一単位	
142	弥生土器	壺	頸部		A B C	普通	にぶい橙	破片	櫛歯 6 本一単位	
143	弥生土器	壺	頸部		A B C	普通	褐灰	破片	外面赤彩 櫛歯 5 本一単位	
144	弥生土器	壺	頸部		A B C F	普通	橙	破片	櫛歯 5 本一単位	
145	弥生土器	壺	胴部		A B C D	普通	橙	破片	櫛歯 4 本一単位	
146	弥生土器	壺	胴部		A B C	普通	橙	破片	櫛歯 6 本一単位	
147	弥生土器	壺	胴部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 5 本一単位	
148	弥生土器	壺	胴部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 5 本一単位	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
149	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 5 本一単位
150	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	櫛歯 5 本一単位
151	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	黒	破片	
152	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	外面赤彩
153	弥生土器	壺		胴部		A B C F	普通	橙	破片	
154	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 7 本一単位
155	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	
156	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	櫛歯 5 本一単位
157	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	櫛歯 4 本一単位
158	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 3 / 6 本一単位
159	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	明黄褐	破片	オオバコ系擬縄文
160	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	
161	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	灰黄褐	破片	
162	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	外面赤彩
163	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	灰黄褐	破片	外面赤彩
164	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	灰黄褐	破片	
165	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	
166	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	黒	破片	
167	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	外面赤彩
168	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	外面赤彩
169	弥生土器	壺		胴部		A B C E	普通	褐灰	破片	
170	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	
171	弥生土器	壺		頸部		A B C	普通	橙	破片	
172	弥生土器	壺		頸部		A B C	普通	橙	破片	
173	弥生土器	壺		頸部		A B C	普通	橙	破片	
174	弥生土器	壺		頸部		A B C E	普通	にぶい橙	破片	
175	弥生土器	壺		頸部		A B C I	普通	にぶい橙	破片	
176	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	橙	破片	
177	弥生土器	壺		胴部		A B C	普通	にぶい橙	破片	
178	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	褐灰	破片	
179	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	褐灰	破片	
180	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	
181	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	
182	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	にぶい橙	破片	
183	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	褐灰	破片	
184	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	黒褐	破片	
185	弥生土器	甕		口縁部		A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	
186	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	黒	破片	
187	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	褐灰	破片	
188	弥生土器	甕		口縁部		A B C	普通	褐灰	破片	
189	弥生土器	甕		口縁部		A B C E F	普通	橙	破片	
190	弥生土器	甕		口縁部		A B C I	普通	にぶい橙	破片	
191	弥生土器	甕		頸部		A B C E	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯 3 本一単位
192	弥生土器	甕		胴部		A B C	普通	橙	破片	櫛歯 7 本一単位
193	弥生土器	甕		胴部		A B C	普通	にぶい橙	破片	櫛歯 6 本一単位
194	弥生土器	甕		胴部		A B C	普通	褐灰	破片	
195	弥生土器	有孔鉢		胴部		A B C E	普通	にぶい橙	破片	
196	弥生土器	高坏		口縁部		A B C F	普通	橙	破片	内外面赤彩
197	弥生土器	高坏		口縁部		A B C	普通	にぶい橙	破片	
198	弥生土器	高坏		口縁部		A B C	普通	橙	破片	
199	弥生土器	高坏		口縁部		A B C E I	普通	橙	破片	内外面赤彩
200	弥生土器	高坏		口縁部		A B C	普通	にぶい黄橙	破片	
201	弥生土器	高坏		口縁部		A B C	普通	灰黄褐	破片	内外面赤彩
202	弥生土器	高坏		口縁部		A C	普通	橙	破片	内外面赤彩
203	弥生土器	高坏		口縁部		A B C	普通	灰黄褐	破片	内外面赤彩
272	石器	打製石斧	長さ[11.3]cm	幅[7.0]cm	厚さ1.8cm	重さ154.8g				F-10bg ホルンフェルス
273	石器	打製石斧か	長さ[8.5]cm	幅[5.9]cm	厚さ1.2cm	重さ65.1g				H-11cg チャート 敲石の可能性もあり
274	石器	磨製石斧	長さ[8.7]cm	幅[5.1]cm	厚さ2.1cm	重さ120.2g				H-11cg チャート
275	石器	磨製石斧	長さ[6.3]cm	幅[6.8]cm	厚さ2.5cm	重さ175.9g				安山岩
276	石器	磨石	長さ[9.9]cm	幅[10.8]cm	厚さ5.1cm	重さ656.5g				閃緑岩
277	石器	有溝砥石	長さ[4.8]cm	幅[4.2]cm	厚さ1.0cm	重さ19.6g				安山岩
278	石器	スタンプ	長さ[5.6]cm	幅[6.9]cm	厚さ2.9cm	重さ151.5g				砂岩
279	石器	スタンプ	長さ[8.3]cm	幅[7.8]cm	厚さ5.3cm	重さ352.3g				ホルンフェルス

2. 遺物包含層

低地部遺物包含層 (第147図)

木曾免遺跡第5次調査に先立つ平成16年度、当時の県教育局文化財課が行った試掘において、台地東側の斜面から大量の弥生土器が発見された。限られた箇所のみ出土であったが、その密度は遺構の覆土以上で、今調査の範囲に含まれる台地端の斜面部には、弥生土器が投棄された良好な遺物包含層が遺存するとされた。

本調査に着手するにあたり、担当者はこの斜面部にあらためて3本のトレンチを掘削し、状況把握を行ったが、試掘時の出土密度を彷彿とさせるような箇所は見つからなかった。そのため、弥生時代の遺物包含層は局所的に形成されたものと推定しつつ、湯水期を待った。

結果として、試掘時における遺物の集中出土は、前述した包含層中央の環濠上層を掘り抜いたためだったことを知るのには、包含層の調査を始めて一月を経過したころだった。このように、包含層の認識と環濠の発見・調査までには、さまざまな予測の紆余曲折があった。

斜面部の調査は台地部の調査を完了した後、掘削した表土を台地上に移動する形で行った。その範囲は、おおよそ南の第54号溝跡付近からE-10グリッド杭を結ぶ線から東側である。ところが、第43号溝跡までの斜面上位は、近現代の整地によってかなり削平されており、表土下が直接ハードロームや粘土層となっていた。遺物を含む沖積土の堆積は、さらに下った第43号溝跡の東脇、標高14.25m以下で認められた。

調査は、0.5mほどの層厚であった表土を掘削し、もっとも低い斜面下で13.5m付近から開始した。だが、包含層の南部では病死した家畜がここに埋められており、これを除去するために13.0m付近まで機械により掘削した部分も多い。また、北端の第42・43号溝跡が重複し合うあたりでは、すでに沖積土が流出し、表土下に直接ロー

ム、あるいは粘土が堆積していた。

ちなみに、水路と幅3mほどの市道をはさんだ現水田面は標高12.9m内外で、その耕作土は12.6m、さらに浸透層は12.4m以下にも及んでおり、遺物の包含や、後述する古代水田は確認できなかった。

全体の掘り下げに先立ち、排水を兼ね、包含層のほぼ中央でグリッド線に沿う幅1mのトレンチを掘削し、沖積土の堆積状況の把握に努めた。その断面は、前述した環濠の覆土も含め、23種に分層した。

なお、地山ローム層は環濠を境に急激に落ち、これより東では確認できなかった。また、この部分では標高12.0m以下までトレンチ調査を実施した。その時点で縄文土器が散在する18層が東方の下層に潜り込むことを認識していたが、掘削開始面より2mを超えたため、危険回避のために以下の調査を断念した。

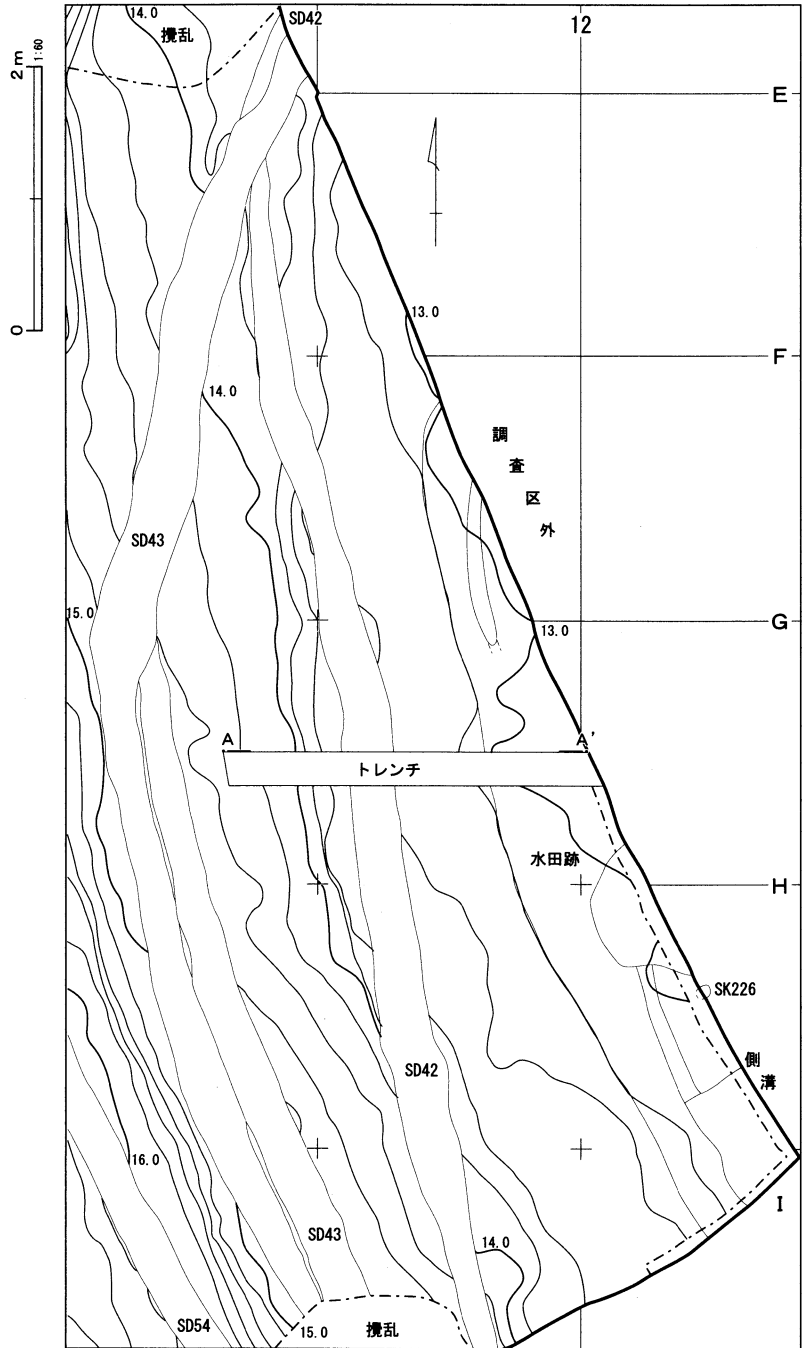
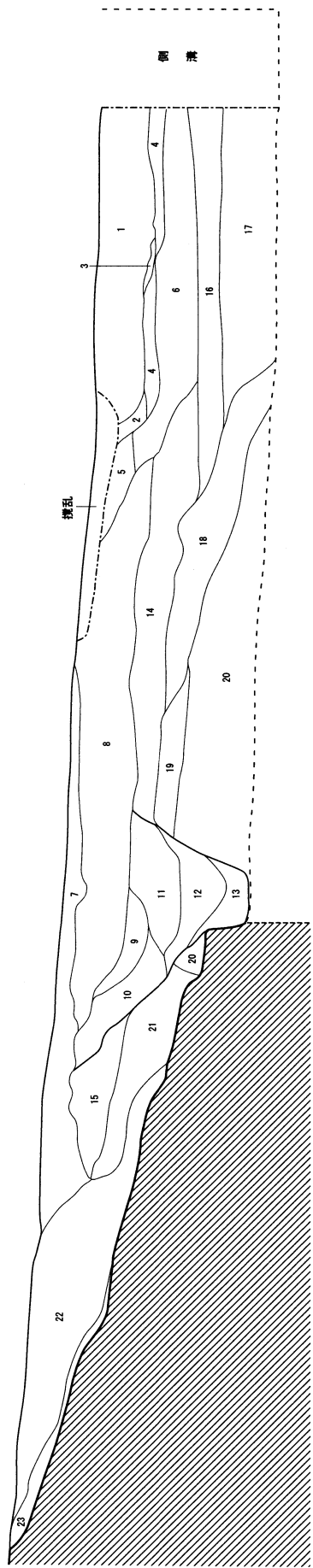
各層を通覧すると、1層は中世に自然堆積した層と考えられる。後述する中世水田跡の直下には明確な鉄分沈着層があるので、こちらは水田化されてはなかったと思われる。また、2層から6層は、次節で詳述する古代水田跡とその関連土で、4層が耕作面、3層が畦の残骸、層厚が大きいきらいがあるが、6層が浸透層などの後変質層と解釈できる。

これに対し、8層が主として弥生土器を含む層で、上位の7層は、粘性が弱いことから、8層と近い時期に台地側より急激に流入した崩落土と判断できる。環濠の低地側は層中より掘り込まれているだろうが、見分けがつかず、表現できなかった。また、14・15層も8層と同質だが、弥生遺物は含まれていない。比較的近い縄文後半から弥生初頭に形成されたものだろう。

一方、16層以下は縄文期に形成されたもので、

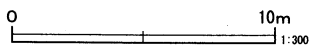
A'

A 14.5m



遺物包含層中央断面

- 1 暗褐色土 稀に赤褐色粒子を含む・鉄分の沈着はない〔M層〕
- 2 黒褐色土 同質の4層より暗褐色・段差の崩落か
- 3 黒褐色土 4層土と暗褐色土混じる・6層の段差と呼応・直下は4層が浸透〔古代畦畔〕
- 4 黒褐色土 下位に白色沈殿物の互層あり・帯水性・浅間B軽石はみられない〔古代水田〕
- 5 暗褐色土 1層より暗い・6層と同質
- 6 暗褐色土 5層と同質だがより明るい
- 7 暗褐色土 8層より粘性弱い・8、15層との間に鉄分が沈着・22層との接点では水性変質による土層の巻き込みあり
- 8 暗褐色土 弥生遺物包含層の主体だが遺物は環濠近くに集中〔Y層〕
- 9 暗褐色土 8層より明るい・茶褐色土ブロック混じる・遺物多い〔環濠覆土〕
- 10 暗褐色土 9層より暗い・遺物は少ない〔環濠覆土〕
- 11 暗褐色土 8層より暗い・9層より明るい・遺物大量に含む〔環濠覆土〕
- 12 黒褐色土 20層に比べやわらかくやや砂質〔環濠覆土〕
- 13 黒褐色土 12層より環濠初期流入土・12層と同質〔環濠覆土〕
- 14 暗褐色土 8層より明るいが他の性状は類似・弥生遺物はない
- 15 暗褐色土 14層と対になるがより黒い・上位の鉄分沈着は8層上位に続く
- 16 黒褐色土 有機物大量に含む・同質の17層より明るい・湖沼帯水性
- 17 黒褐色土 有機物大量に含む・上層の16層より暗い・湖沼帯水性
- 18 黒褐色土 有機物含む・縄文遺物含む
- 19 黒褐色土 有機物含む・18層と同質だがより明るい
- 20 暗褐色土 有機物含む・19層と同質・21層との間に鉄分沈着あり
- 21 暗褐色土 半水性の性状で21層を巻き込む・20層と23層の中間相
- 22 茶褐色土 台地崩落土・上位で関山式土器が多く出土〔J層〕
- 23 黄褐色土 ローム直上層



第147図 遺物包含層中央トレンチ土層断面

台地直上漸移層の上に堆積する22層には、縄文早期から前期の土器が大量に含まれていた。その盛期は前期前半関山II式期にあり、後半の竹管文系土器は、わずかに含まれているにすぎない。18～21層がその流出層と考えられるが、遺物を含むのは18層にほぼ限定される。また、21層の環濠近くは、7層の西端下位と同じく、帯水による水性変質で隣接土にまで同質土が浸透し、土層堆積順の見目の逆転が生じている。

低地側の18～20層には若干の有機物が含まれ、これらが準帯水の環境のもとに形成されたことが察せられる。さらに、16・17層は有機物を大量に含んでおり、明度など、両層の変質経過を加味すると、湖沼性の連続した堆積土と認めることができる。

断面東部の分層線を見ると、縄文における流出土と帯水土の浸食・堆積関係は、上位の古代水田部分にも共通することがわかる。低地の土中でよく見かける高師小僧は、8・11・14層など、断面の中央部に大量に形成され、15・22にも多く認められる。

土中の帯水状況に応じて形成される高師小僧は、水平に分布するのが常である。現に形成時期が異なる8・22層にも共通しており、これが8層堆積以降に沈着したことは明白である。にもかかわらず、より低地側の5・6層では少なく、その水平分布が途切れている。このことから、8層堆積後に東側に浸食作用が及んだことが証明できる。

以上、包含層の堆積を順にたどると以下のようなになるだろう。

ローム形成後しばらくを経て(23層)、縄文時代早前期に至り遺物が投棄される(22層)。同時に、河川作用にさらされながら流出土が堆積する(18～21層)。さらに、取り残された流路跡も徐々に埋もれ(16・17層)、平坦地ができあがる。

縄文の後半から弥生時代にかけて、再び台地からの土砂流出で平坦地は徐々に高くなり(14・15

層)、弥生時代中期には再び遺物が投棄される。

(7・8層) その間に環濠も掘削され、集落の衰退とともに埋没する(9～13層)。

弥生集落が放棄されて以降、この地は高師小僧が成長するような軽い帯水環境にあったが、おそらく古墳時代に河川作用で沖積土の東側上位が浸食され、再び段差が形成される(5・6層)。この段差と泥濘を利用し古代に簡単な水田が営まれる(2～4層)ものの、浅間B軽石降下以前(後述)にこれも廃棄され、中世には現況に近い地形となった(1層)と考えられる。これら包含層の調査は、古代水田確認までの主として中世形成層(M層)と、有機質土までの主として弥生形成層(Y層)を5×5mの小グリッドごとに平面的に掘り下げ、遺物を採集した。途中、環濠の発見と調査によって、下位の純粋な縄文包含層(J層)は、北東側にやや広がるものの、標高約13.5mの等高線もしくは環濠より東側に分布しないことが判明した。そのため、J層の調査はこの範囲についてのみ行った。なお、M層の出土遺物はごく少量であったため、Y層とともに報告している。

包含層J層出土遺物

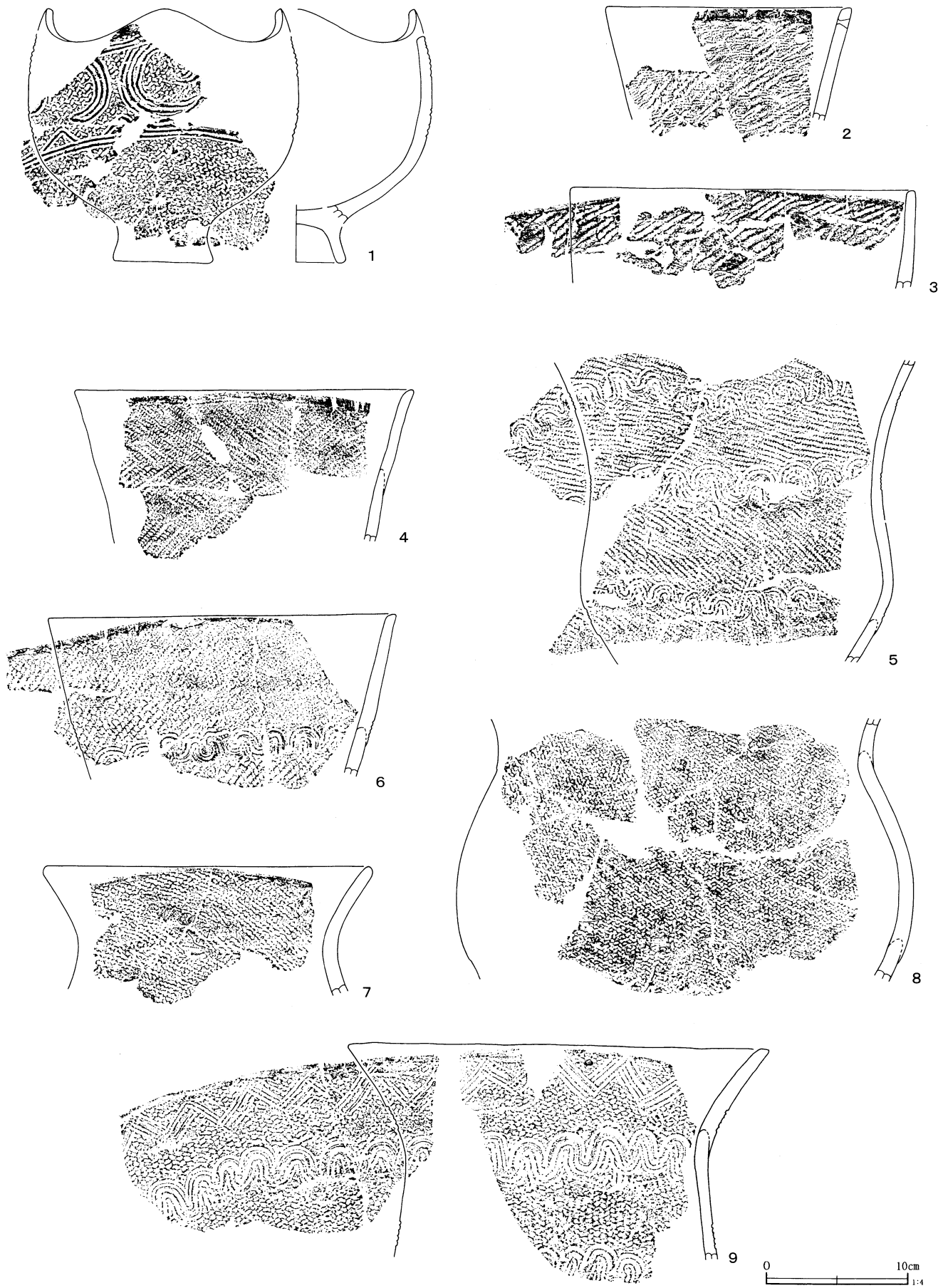
縄文土器(第148～155図)

前述したとおり、包含層J層では前期後半までの土器が出土した。主体を占めるのは前期前半関山式で、図示した270点の80%強を占める。

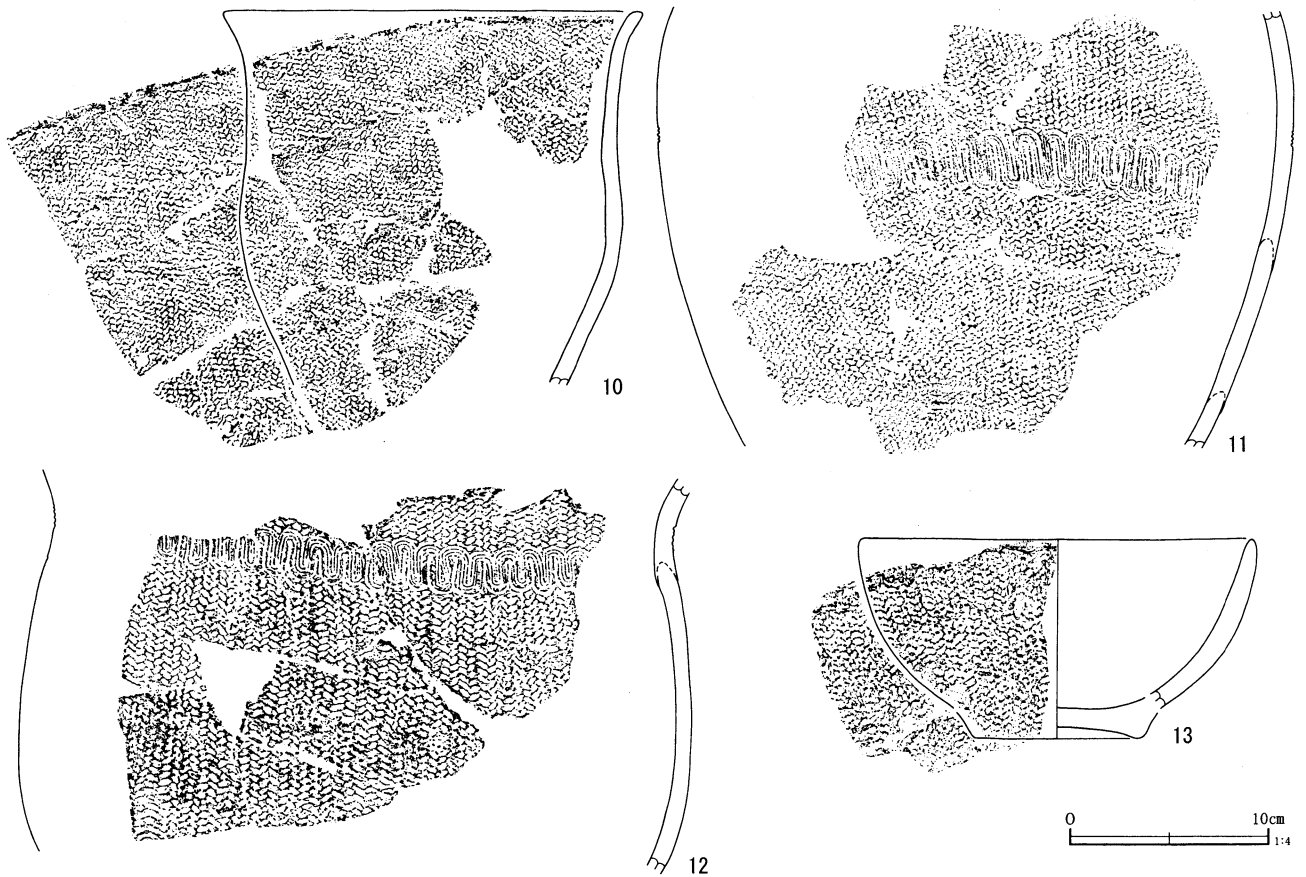
資料数が多いため、ここでは出土土器を群類ごとに分類した上で報告する。J層で見られなかった前期末以降の土器に対する群別は、第IV章7節台地上遺構外の項を参照していただきたい。また、主体を占め、第III群とした関山式土器に関しては、当事業団が調査報告した馬場裏遺跡(松本2007)における広義関山式土器を包括する分類にならない、さらに種類まで細分して詳述する。

第I群土器(第150図14～27)

早期前葉の撚糸文系土器で、14点を示したが、すべて無文土器である。口縁部片は、直下に沈線



第148図 包含層J層出土遺物(1)



第149図 包含層J層出土遺物(2)

がめぐらされるもの(14~17)、器形変化で口縁下に凹状部を作り出すもの(18)、口縁下に変化ないもの(19~22)の大きく3種に分類できる。

このうち前者は、直立した器形に沈線を加えるのみで、上下に器形曲線の変化は見られない。また、18は、やや丸みを帯びた胴部から一旦すぼまる口縁直下へと移行し、凹状帯を形成した後に外反して口縁頂部に至る。これに対し、器形線に変化ない後者は、口縁部が外反するものが多い。

23~27は胴部片であるが、胎土や器面調整の特徴は口縁部片と共通している。

無文土器の比率や口縁部周辺の特徴から、これらは撚糸文系末期の東山式が大半を占めると考えられる。

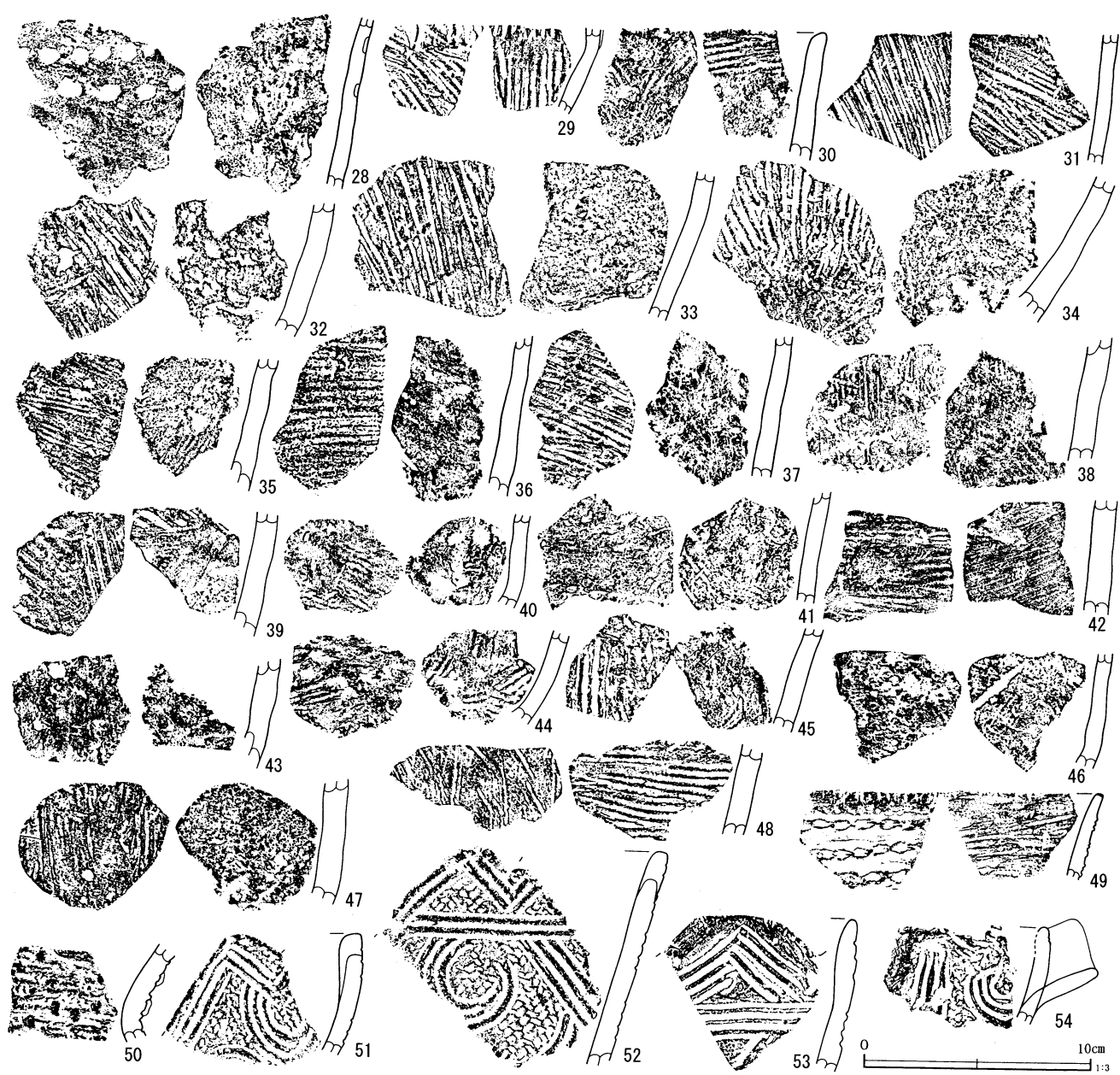
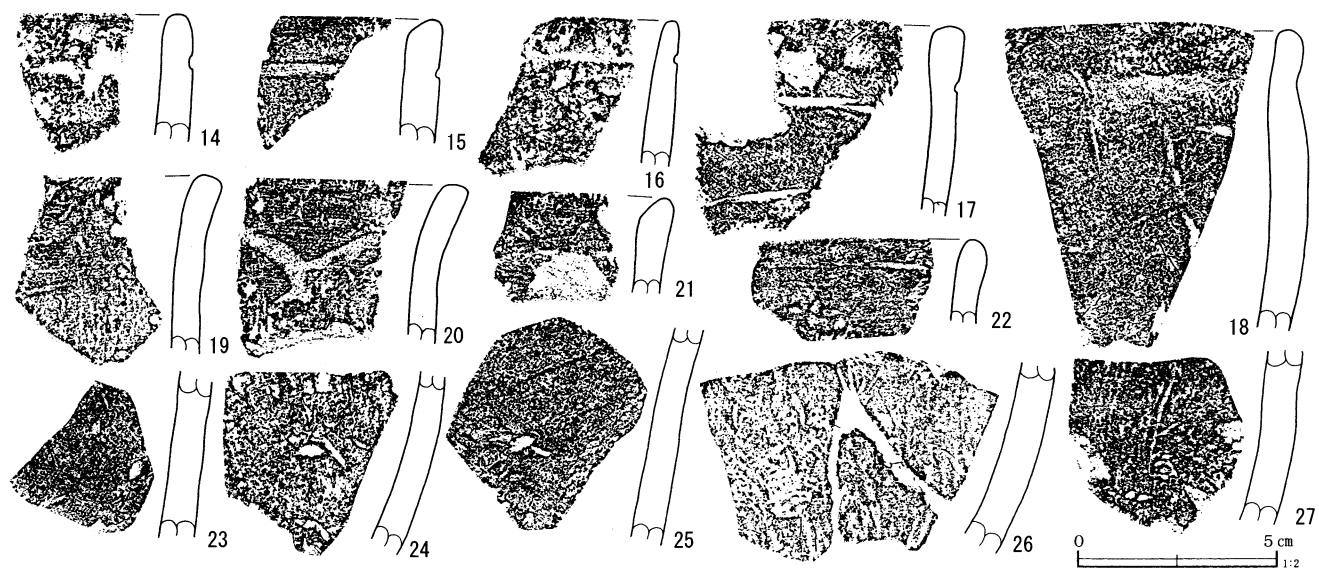
第II群土器(第150図28~49)

早期後葉の条痕文系土器である。大半が条痕のみの破片で文様が追加されているものは3点しかない。28は円形竹管の点列が複数めぐるものである。表裏とも条痕はほとんど見ることができず、器表は擦痕状に整えられている。条痕文系末期に相当する破片と考えられる。

また、29は微妙な器形屈曲を境に微隆起で文様が区画される文様帯が配されている。微隆起は縦位線のみしか観察できないが、表裏に印されたはっきりとした条痕から、野島式に相当するものと判定できる。

29に共通するような条痕は31に認められ、これも同期にあたると思われるが、その他の条痕のみの破片は表裏の差や条痕が浅いなど、後半期の特徴を備えている。

さらに、46は併走する細隆起線を竹管で突き、



第150图 包含層J層出土遺物 (3)

口唇部に刻みを加える口縁部片である。繊維をほとんど含まない薄い器壁からすると、関東の条痕文系後半に並行する東海地方の入海Ⅰ式土器と考えられる。

第Ⅲ群土器（第148～155図1～13・50～262）

今調査では抜きで出土量となった前期前半関山式土器をこの群としている。以下、文様構成と部位により7類に大別し、さらに、縄文を施文した5類を10種に細分した。ただし、この分類は広義関山式全般を想定したものであり、本遺跡で出土しなかった分類項も含む。未出土の分類項については、その都度これを示す。

第1類（1・50～88）

口縁部文様帯または胴部に特殊文様帯を設け、器面を飾るものである。口縁部文様帯については地文がないもの（1種）と地文をもつもの（2種）とに分けられるが、今回の調査で得られた関山Ⅱ式後半期の土器は、基本的には後者が主体である。

50は唯一この1種に含まれるもので、併走する竹管文上にやたらと貼付文が加えられている。台付の鉢形土器になると考えられる1、および51以下は、地文上に竹管文が描かれるもので、一方をだぶらせた三回施文多截竹管沈線が主描線の主流である。管内を引きずることにより地文縄文を消し去り、渦巻きまたは鋸歯を描いている。口縁部文様帯内の地文は、節の縦列が地文としての安定感を与える組紐や、その組み違えの圧痕が多いが、61のように異条斜縄文を添えている例もある。

一方、73～87は鋸歯あるいは菱形構成の多段ループ文に沿うようにV状の工具文を書き入れる。環状末端の特殊な施文により不揃いとなる斜縄文部の不足を覆い隠す効果もある。

第2類（89・90）

刺切・刺突文などの点列文様を施すもので、89は櫛状工具による刺突が器面に残るが、並びの規則性が把握できない。また、90は爪形文のように見えるが、内部に細節が認められることから、擦

縄の末端を曲げて個別に押圧しているとわかる。

第3類

沈線や条線文で全体の構成を賄うものがこの分類となるが、今回の調査ではこれに当てはまる破片は出土していない。

第4類（2・91～95）

貝殻文が観察できるもので、今回出土したものはすべて背圧痕文である。このうち2は、無節斜縄文Lを地文として殻頂近くの背面を転々と押圧し枝垂れるような圧痕を残している。他の破片は肋脈が平行に近い腹縁付近を押圧しており、擬縄文的な効果を意図している。

第5類（3～13・96～251）

主に縄文で器面を飾るもので、第Ⅲ群の主体を占める類であるため、施文原体により、さらに10細別した。

第1種（3・96～100）

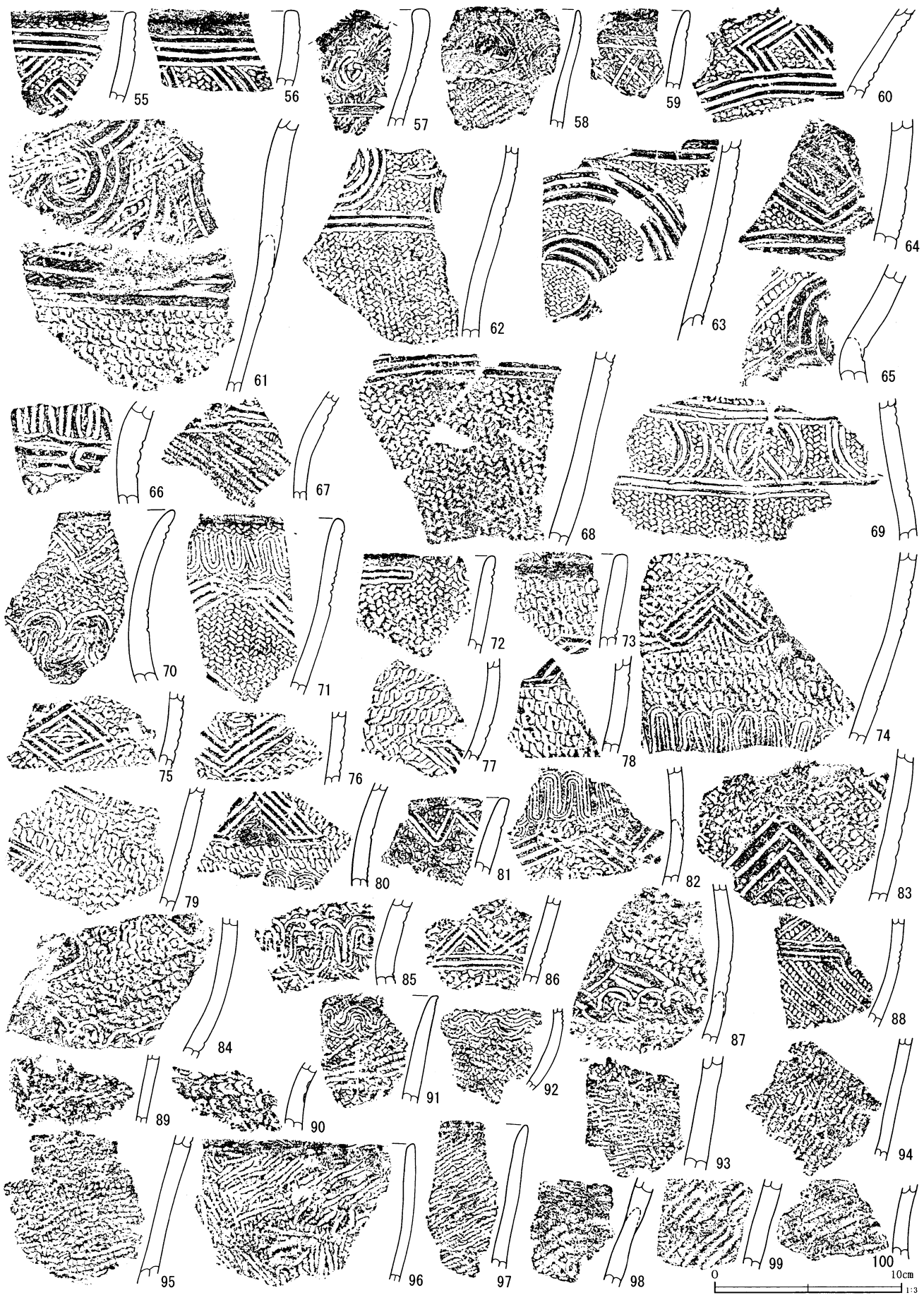
無節斜縄文が施文されているものであるが、その圧痕は一様に浅い。その基準は定かではないが、施文原体はすべてLを使用している。これは、第4類に分類した2にも共通しており、一部羽状構成のように見える96も、条が縦走あるいは右下がりになる部分は同一原体の縦斜位施文で作出している。

第2種（4・5・101～138）

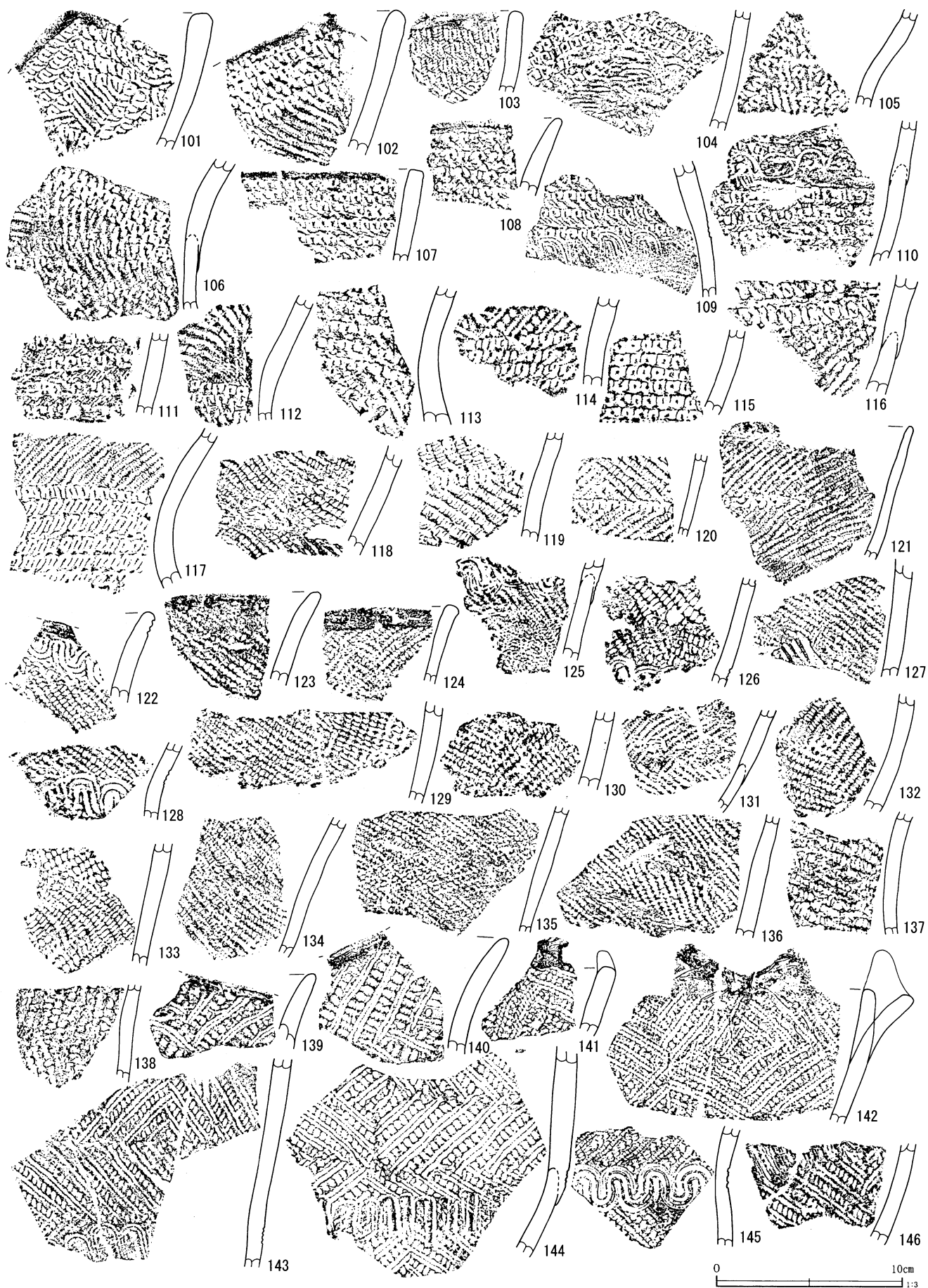
単節斜縄文で器面を飾るもので、さらに多段ループ帯を設けるもの（D-101～117）、単段ループを介し幅広の横帯を作出するもの（E-118～121）、環状末端を介さないもの（F-122～138）に三分できる。

Dと分類できる破片のうち、南東北の影響下で波及した鋸歯や菱形文構図は、101～106など、半数近くにおよび、工具文を優先して第1類と分類したものとあわせると、これが有口縁部文様帯土器と並ぶほどに一般的な加飾構図であったことがうかがえる。

原体の0段条数は、E・Fなども含め、多条が



第151图 包含層J層出土遺物(4)



第152図 包含層J層出土遺物 (5)

大勢だが、138だけは2条の可能性がある。また、137は節が不揃いで擬単節原体の圧痕かとも思えるが、条が揃っており、この種に含めた。

第3種

複節斜縄文が施文されたものがこの分類項であるが、今回の調査では出土していない。

第4種

反の縄の圧痕が残るものである。環濠に混入したり、後述するY層ではこれが出土しているものの、J層では出土しなかった。

第5種 (139~157)

いわゆる正反の合原体で施文したもので、両方向燃りの原体を用意して幅広の羽状~菱形構成を作出するのが絶対条件となっている。末端を環状化したものは見あたらないが、コンパス文は普遍的に用いられている。また、144はめずらしく、多截竹管でコンパス文が描かれている。

原体種は、大半がいわゆる正反の合Aであるが、同一個体と考えられる139・140・149・150・152、加えて141や156も正反の合Cを用いている。ただし、同一個体の5点は、反縄の条方向が揺らいでおり、完全な燃り合わせ法ではなく、附加条法で作成した可能性もある。

第6種 (6~8・158~184)

組紐の組み違い原体を回転施文する種で、第10種の組紐に次ぎ、第2種の単節をしのぐ出土比を占める。原体種は、6~8・158~178の擬異節、179~187の擬単節という二種がある。絡げ方の加減によって微妙な圧痕の違いが生ずるが、多くが緩く絡げているため、組紐圧痕との識別が難しい破片も多い。

このようななかで6は、原体の末端か先端のいずれかはわからないが、明らかにRとLの2本をLに絡げた端で組紐を組んでいる。結果としてその部分の圧痕はRRLとして現れている。

第7種

第二種結束縄文を施文するものであるが、今回

の調査では出土していない。

第8種

結節縄文を施文するものであるが、今回の調査では出土していない。

第9種 (188~202)

附加条縄文をもつばら施文する種で、188~197のように、大半が正反の合を模した2本逆方向附加条である。これらは、軸縄の条が附加縄をまたいで直線的になるので、よくよく見れば、合燃りの正反の合と分離できる。

これに対し、軸縄の燃り方向に従って附加縄を巻き付けたのが198~202である。こちらも附加縄は2本が多く、1本は202の1点しかない。200のように同種の原体で左右燃りを取り揃えることから、この附加条種が突発的な誤りではないことが推察できる。

第10種 (9~13・203~251)

縄文施文の第5類のなかでもっとも出土比が多く、同じ手法の6類をあわせると、この期の縄文施文の7割以上を占めている。原体種は、9・11・12・203~219がRRL、10・13・220~227がLLR、228~230がLLL、231以下が風化により細かい節の観察が不能なものである。

口縁直下や胴部接合帯上には櫛状工具によるコンパス文がめぐらされているが、大半が支点を上下移動させている。また、242は同工具で刺切文を描くものである。

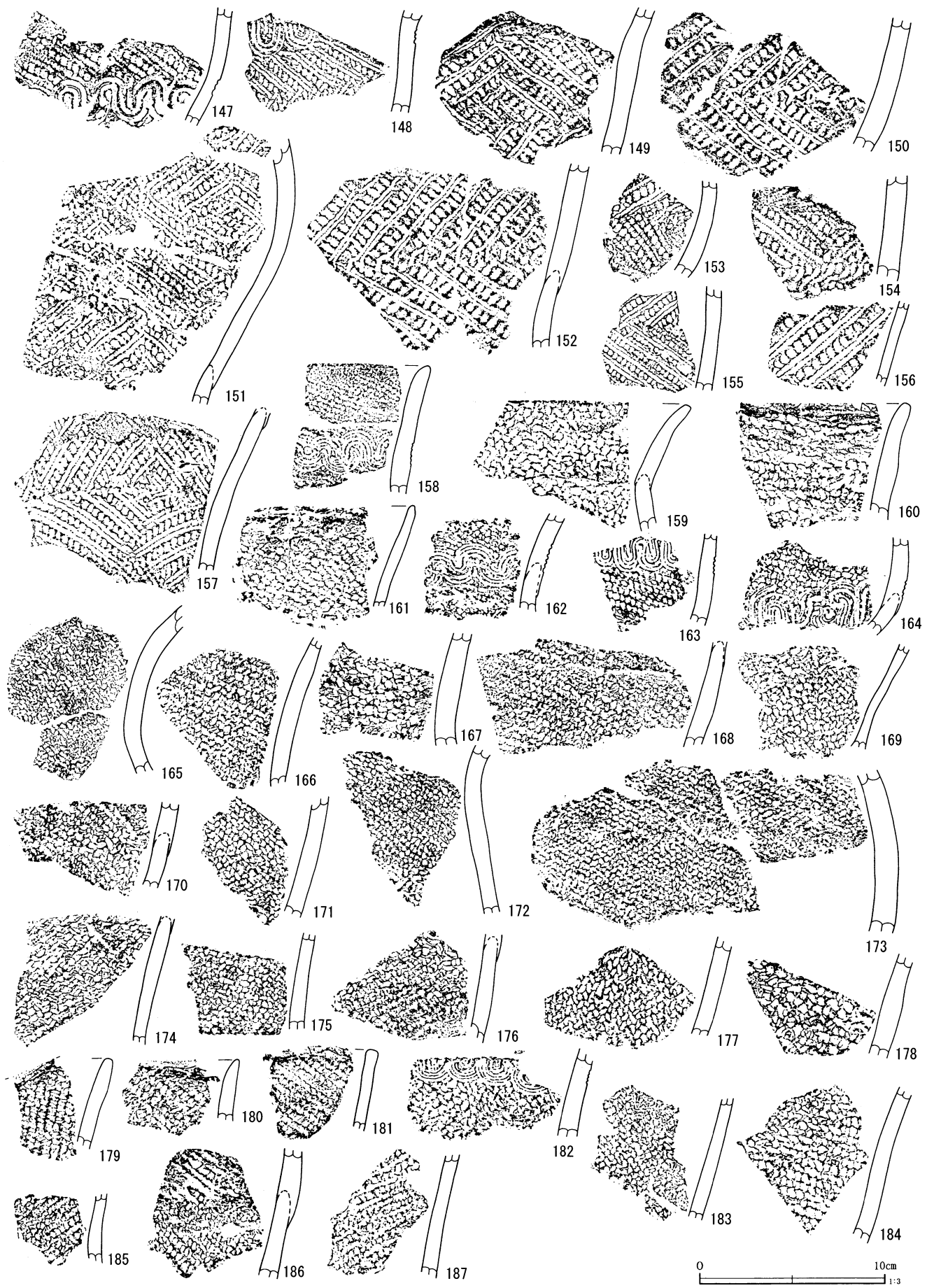
さらに、13は浅鉢だが、この期の同種器形に一般的な薄い器壁ではなく、重量感のある造りとなっている。

第6類 (252)

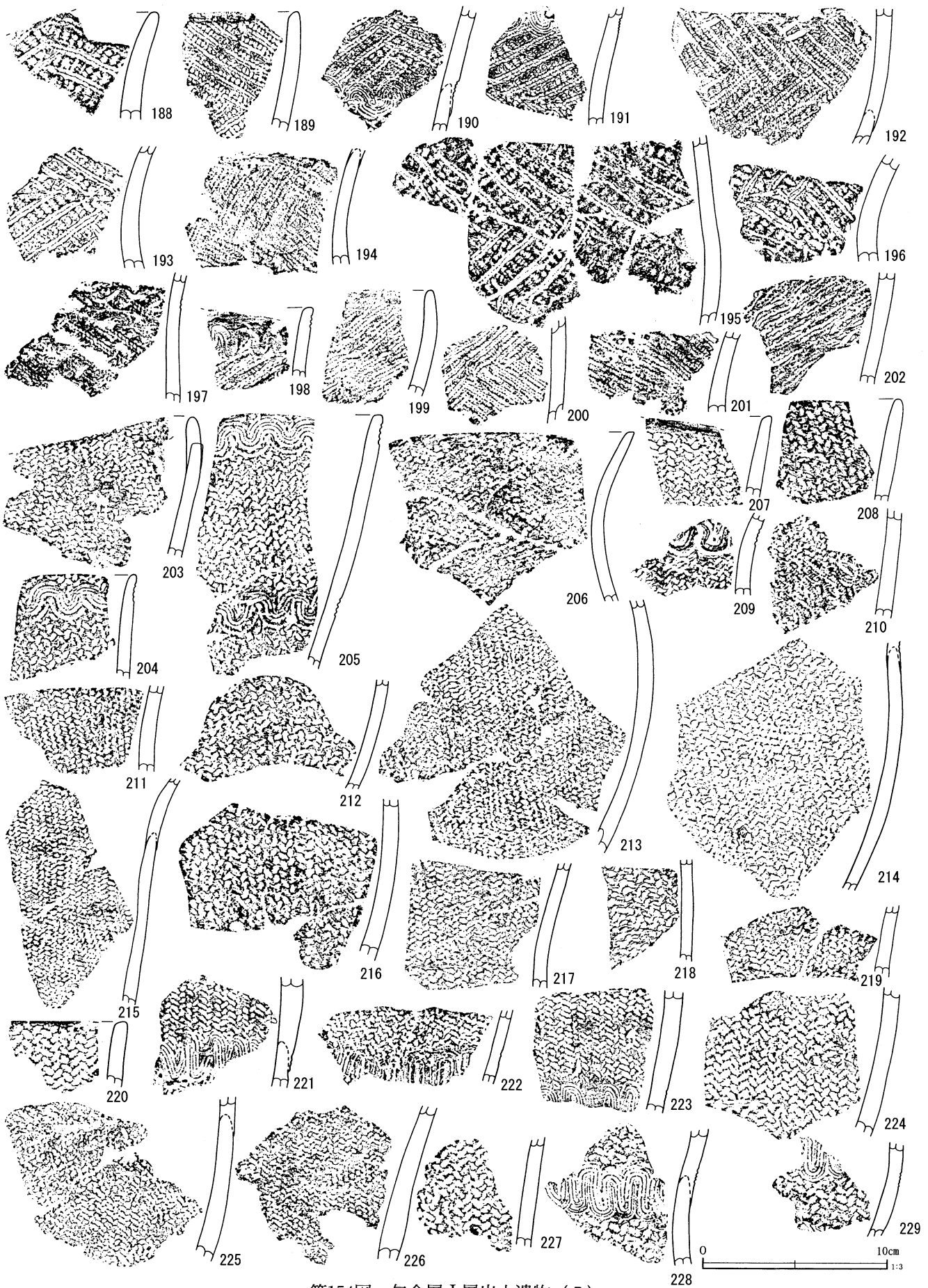
無文のものである。252はその器形曲線から浅鉢の一部と考えられる。口縁下の横位線は連続しておらず、意識的な平行沈線か、繊維の脱痕かはつきりしない。

第7類 (253~262)

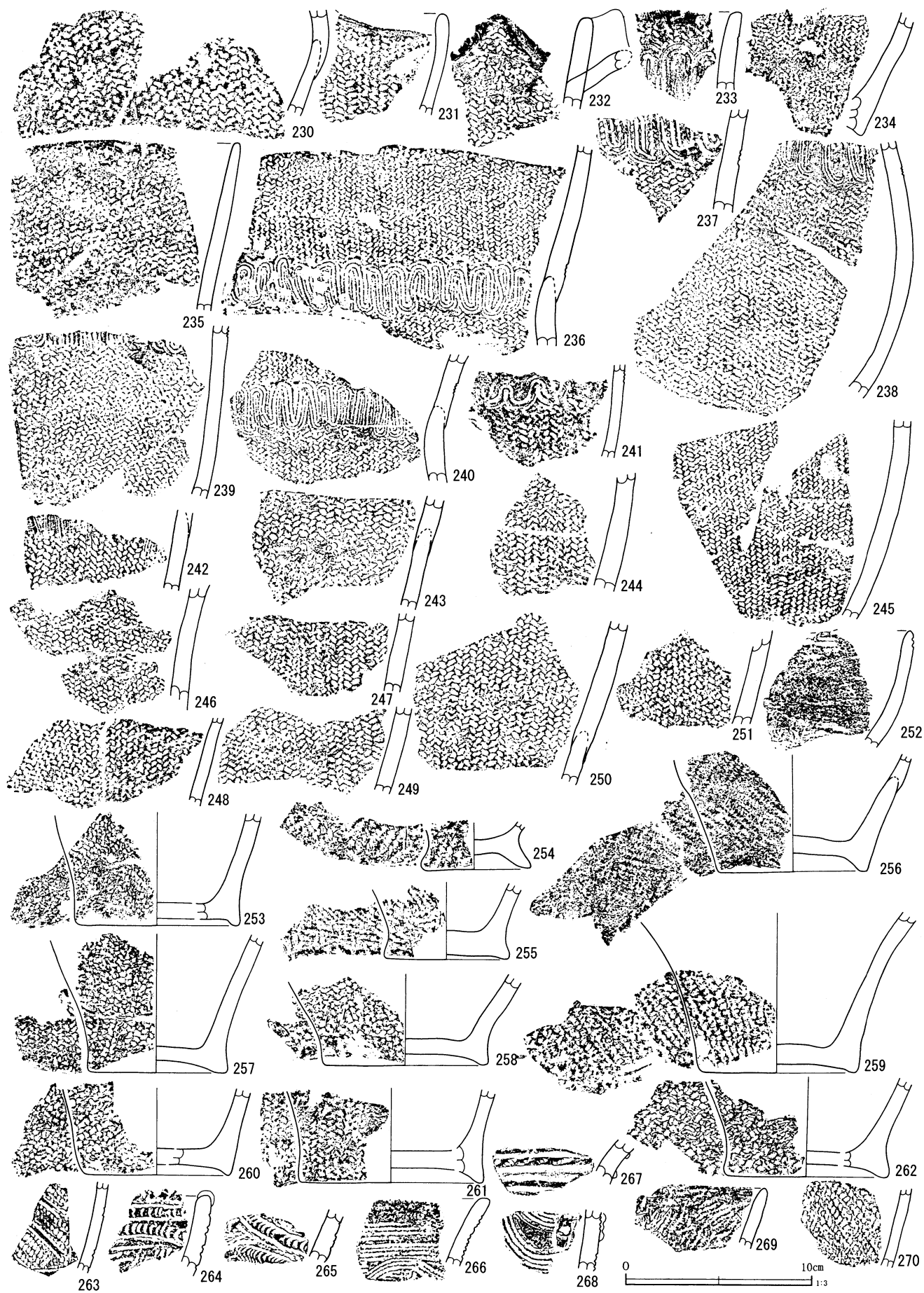
底部を一括した類である。底裏面への施文は見



第153图 包含層J層出土遺物(6)



第154图 包含層J層出土遺物 (7)



第155圖 包含層J層出土遺物(8)

られず、明確な底面曲線の変化があり脚付底と特定できるのは254の1点のみで、緩やかな上げ底が主流である。

第IV群土器 (第155図263～270)

前期後半竹管文系の土器を一括した群であるが、第III群とは異なり、時期幅が広い。諸磯a前半期からc式並行期までの資料を図示したが、263はa式米字区画文系統の破片である。また、270の縄文のみの破片も、その原体の特徴から同期の所産と思われる。

b式にあたるもののうち、264・265は爪形文系、266は集合平行沈線、267は浮線文系の破片である。また、269もぬめりのある質感と無節縄文の特徴から、同期であると考えられる。

さらに、268はc式の集合沈線文土器で、渦巻文が描かれ、刻みある貼付文が要所に追加されている。

包含層Y層出土遺物

縄文土器 (第156～157図)

縄文時代に形成された前述のJ層のみならず、弥生時代に流入・堆積したY層でも縄文土器が大量に出土した。もちろん、これらは斜面上位からの自然営力や、環濠を掘削した際に破壊したJ層の堆積土とともに上層に移動したものである。

J層の分布を反映し、その出土量は低地部の北半に集中しており、前期関山式土器が大半を占める。これらは遺存状況が良好で、なかにはその期の竪穴住居跡の覆土から出土するような大きな破片も見受けられる。おそらくは、ほとんどが環濠の掘削時に掘りあげられたものであろう。これに対し、J層では見られなかった中期の土器は、斜面部堆積土の流出とともにこの低地部にもたらされたものと考えられる。

1～5は早期条痕文系土器である。このうち1は微隆起線による縦位の区画と沈線充填帯が観察できる。その構成から、野島式期に製作されたものと推定できる。だが、他の条痕のみが残る破片

は、台地上など、他の出土地と同様、器面調整は浅く粗いのが特徴で、条痕文系期でも後半の所産だろう。

6～80は、前期関山式土器である。このうち6～23が工具による口縁部文様帯や胴部特殊文様帯を設けるものである。三回施文が一体となった多載竹管工具による鋸歯文や渦巻文が主構図として描かれているが、18・19は多段ループ文帯による鋸歯あるいは菱形文の余白を補填する形で工具文が差し入れられている。

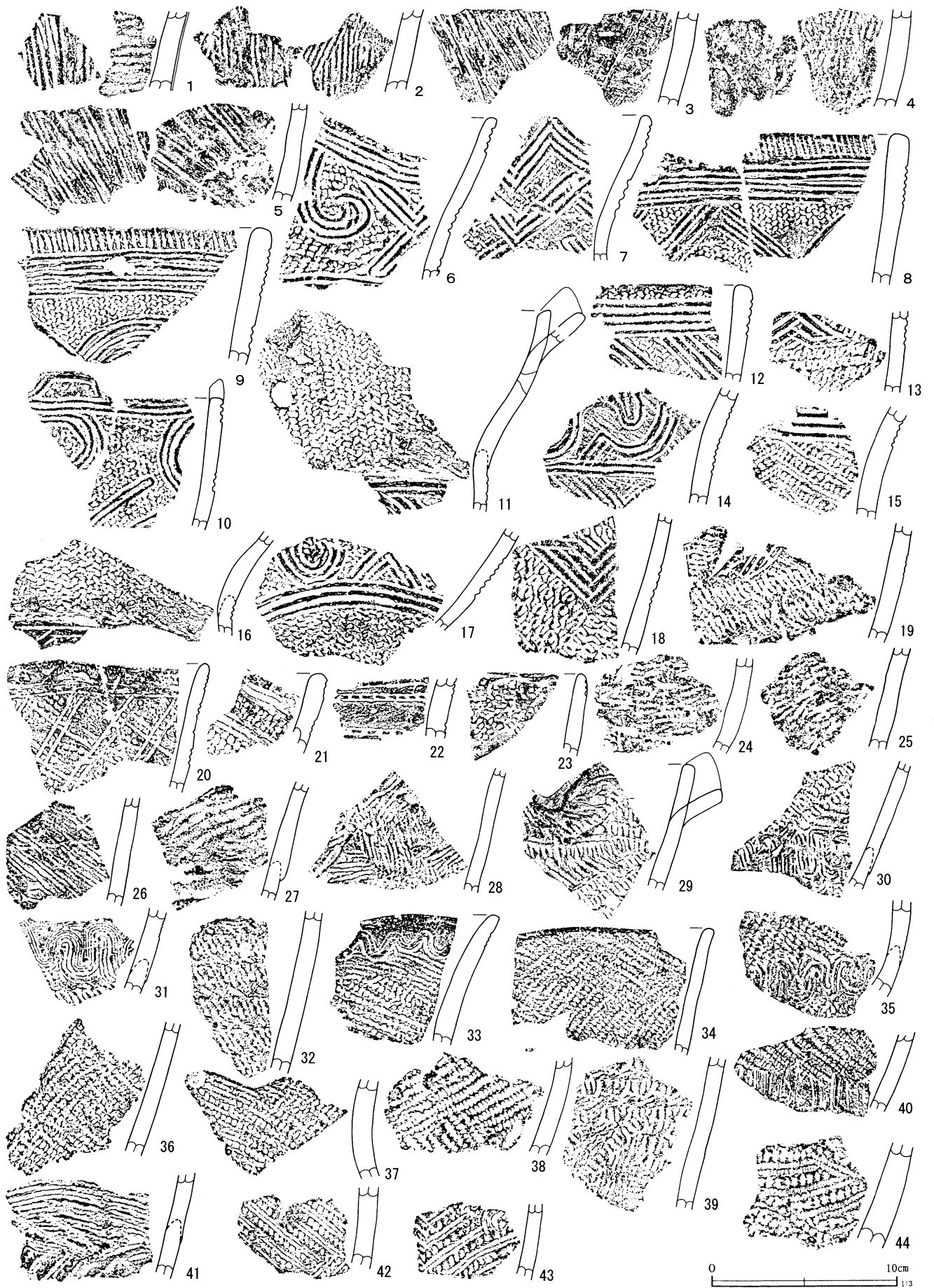
口縁部片のうち、7は双頂波状縁、11は一端に片口が取り付けられている。また、10には帯状突起が加えられ、8・9の同一個体片の口縁直下にはスリット状の縦位線文帯が追加されている。

これに対し、20～23は例外的な文様帯構成をもつもので、20は単施文竹管平行沈線による格子目文が器面全体に及ぶ。21は口縁下に特別帯を設け、22は爪形施文で胴部を区画する繊維含む破片である。後者は黒浜期後半の文様とも類似するが、製作手法について、他の破片と大きな違いは認められない。さらに、23は櫛状工具による刺突列で文様を描く。刺突帯は櫛幅を反映しており、関山II式土器と並行する信州神ノ木式の手法にあたるが、文様の結節点にあたっているため、詳しい構成がわからない。

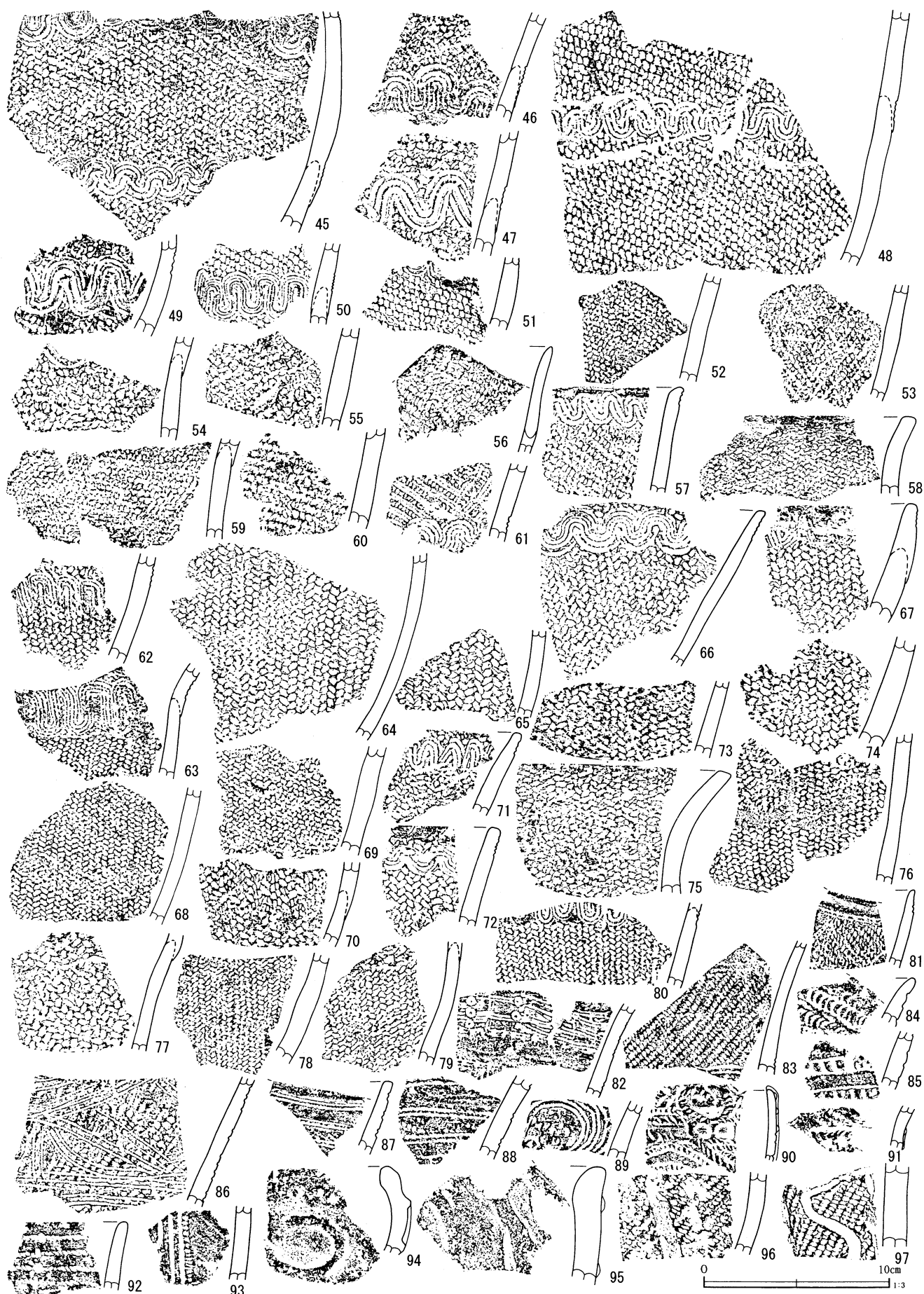
24・25は貝殻背圧痕文、26～28は無節斜縄文が認められるものである。このうち26は12本とr1本をまとめてRに撚り合わせたものである。1段Rへの順方向附加ともとれるが、圧痕の深さが逆転している。

29～38・40は単節斜縄文を施文する破片である。29～32は多段ループ帯が印されるが、29・30ではこれが鋸歯化している。口縁下や胴部接合部コンパス文はすべて櫛状工具で描かれているが、40は同じ工具ながらも刺切文をめぐるさせている。

39・41は反の縄を施文するもの、また、42～44はいわゆる正反の合Aが押捺されているものであ



第156图 包含層Y層出土遺物 (1)



第157图 包含層Y層出土遺物(2)

る。このうち39は環付末端を正撚りで作成した後、脚部の撚りを反転している。細い繊維束でその間を括っているようだが、見分けられない。また、41の下方は附加条縄文が認められ、これを加味すると、条間が密であるものの、上位の施文は撚糸文の可能性もある。

45～60は組紐の組み違い原体を回転押捺した破片である。原体種は、45～55の擬異節、56～60の擬単節の二種がある。半数の破片にコンパス文が加えられるが、すべて櫛状工具で施文され、手法は真性から上下移動の中間相を示すものが多い。56の単頭波状縁下には径2cmほどの穴があいていたようで、下方でのみ流体を支える形の注口部が追加されていたと考えられる。

61は2本の逆方向附加により正反の合A種と同等の文様効果をもくろんだものである。しかし、絡げ方が不完全で、肉眼では軸縄の圧痕がほとんど見えない。

62～80は組紐を回転施文したものである。原体は、62～67・73・74がRRLL、68～70がLLRR、71・72・75～80が不明のものである。口縁下と胴部成形部には櫛状工具によるコンパス文がめぐらされるが、描出手法は真性と上下移動が拮抗している。

81～91は前期後半の竹管文系土器と、これに並行する他地方の土器である。81～83は諸磯a式に属するもので、81・83は米字区画文系統、82は肋骨文系統の構成が印されている。また、84～88は同b式にあたるもので、84・85は爪形文、86～88は竹管平行沈線で描画されている。また、89は東関東的な竹管施文手法で渦巻文を描く諸磯c期の土器である。

さらに、90・91は、諸磯b式に並行する段階の西日本北白川下層系土器である。90は浮線基調の区画文に細い爪形文を添えるもので、おそらく4単位で口唇上に渦巻き浮線が加えられるのだろう。また、91は、90のように器壁が薄くないもの

の、類似する横位浮線間の連結が見られることより、同系に位置づけた。

92は、今回の調査で唯一検出した前期末の東関東系の資料である。撚縄Rの側面圧痕で口縁下に平行線をめぐらせており、要所に同縄の末端を押圧し、アクセントとしている。また、93は中期初頭五領ヶ台式土器の破片で、縦位区画沈線の脇に刺突列を添えている。

94～97は中期の所産で、94は単隆帯で渦巻きを表現する阿玉台式土器である。また、95～97は加曾利E系土器で、3点ともおおよそEⅢ式にあたると考えられる。

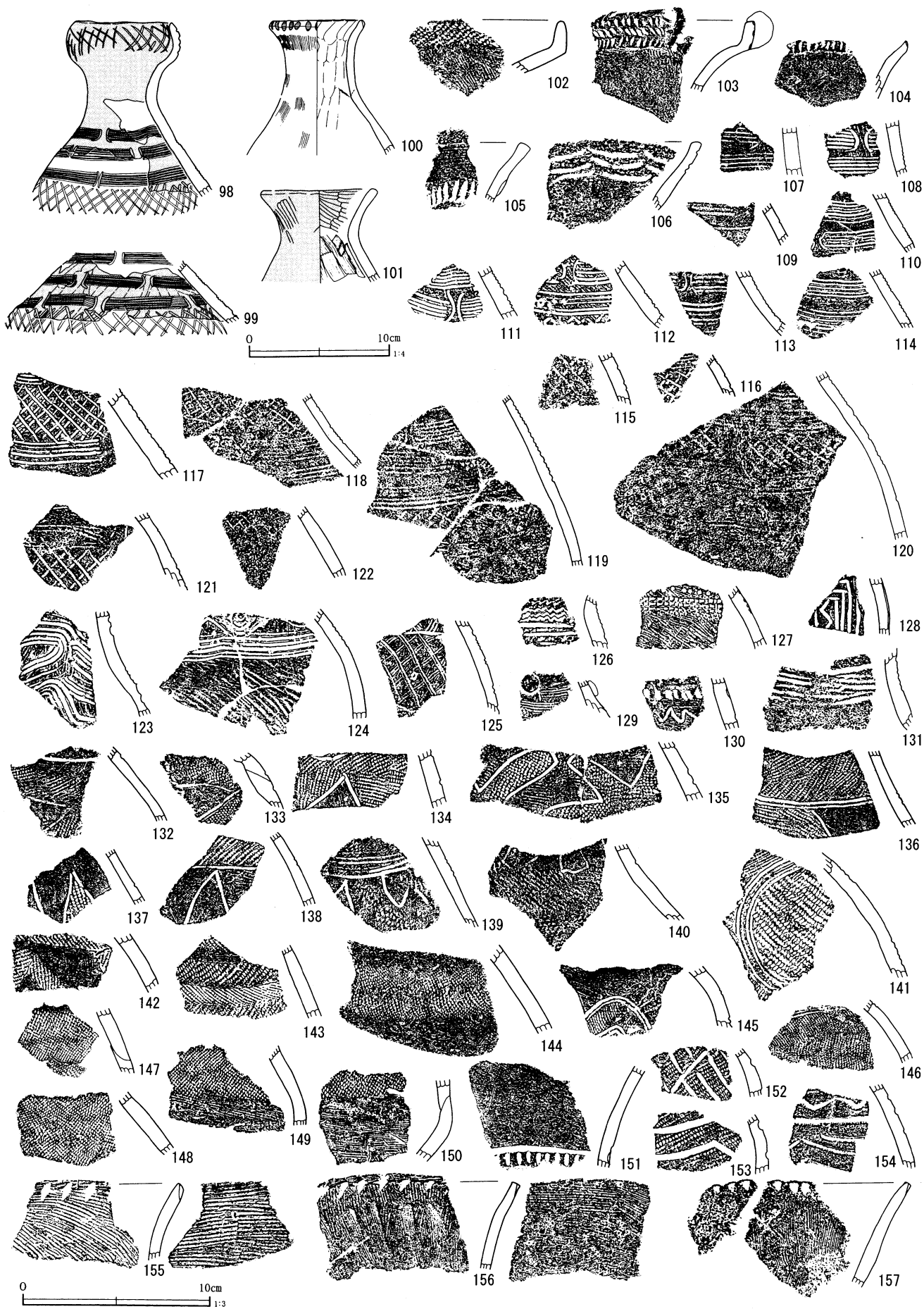
弥生土器（第158～159図）

第42号溝跡（弥生環濠）が掘削される以前から包含層Y層は形成されているが、Y層の遺物は、第42号溝跡とあまり時期に隔たりは感じられない。包含層Y層と第42号溝跡と接合する個体もいくつか確認できた。出土した破片数は、2,796点であったが、無文の破片や小破片がかなり多く、抽出できた破片はあまり多くはない。残りが良い遺物はほとんど見られなかった。

98・100・101は、壺の口縁部から頸部にかけて個体である。98は袋状口縁で、外面には、胴部と同様の斜格子文を描く。98と99は同一個体と思われる、6本1単位の櫛歯状工具を用いて、胴部上半に擬似流水文を施している。櫛描文の端には、1本描沈線による弧線を施して区画する。さらに、その下位には1本描沈線による斜格子文を加えている。両者ともに外面全面に赤彩をする。100も、98と同様に頸部が短い。口唇部には、ハケ状工具によって刻み目を付けている。外面は風化が著しく、ハケ調整のみ確認できる。101も同様に頸部が短く、外面はミガキ調整で、全面に赤彩を施す。

102～154は壺で、102～106は口縁部片、107～154は頸部から胴部片である。

102～104は受口状の口縁で、102の外面に原体LR単節縄文を施文する。103・104は同一個体とみ



第158图 包含層Y層出土遺物 (3)

られる。外面に薄い円形の突起を貼り付け、ヘラ状工具で矢羽状に刻み、上位にも刻みを入れる。

107～126は櫛描文を施すものである。107～122は、頸部から胴部下半までの破片で、擬似流水文を施している。また、115～120は擬似流水文とともに描かれる斜格子文の破片である。118～120が同一個体の可能性があり、その他は考えられない。

123には、左上は弧状に描き、その端から横位に2条の櫛描文を加えている。下方では、波状文を描くようである。124には、直線文の上に波状文を施す。125の破片上部に、3本一単位の櫛歯状工具で山形文状に描くのが確認できる。その下には1本描沈線2条による区画内に、半截竹管状の工具で斜格子文を充填する。126は頸部片で、櫛描波状文の下位に、平行沈線文3条を加える。

127は頸部片で、4本一単位の櫛歯状工具による櫛刺突文を短い間隔で時計回りに巡らせる。その上位に、直径2mmほどの円形刺突を加えている。

128は、1本描沈線で施したコの字重ね文の中央に山形文を加えている。甕の可能性もある。

129は頸部片下端で、幅狭の櫛描文を施し、直径9mmの円形浮文を貼り付ける。

130には、半截竹管状の工具で連続刺突文を加え、その下に1本描沈線による山形文を描く。

131は1本描沈線2条で区画し、その中に櫛描文を充填すると思われる。破片中央の文様は磨消しているのか、摩滅・風化によって消えているだけなのかは確認できない。

132～141は縄文帯を区画する破片で、142～150は無区画の縄文帯を有するものである。

132～136は、1本描沈線で区画する結紐文の一部と考えられ、133・135はオオバコ系擬縄文で、他は原体LR単節縄文である。136は、2本描沈線で区画した縄文帯の下位に、結紐文がある破片と思われる。

138は、原体LR単節縄文を1本描沈線による鋸歯文で区画して周りを磨り消すものである。134

には、原体LR単節縄文を1本描沈線で区画して、下位に山形文を施している。139・140は同一個体と思われる破片である。139は頸部片で、5本一単位の櫛歯状工具で直線文を巡らせて、その下位オオバコ系擬縄文を1本描沈線で区画する。140には、台形状の沈線の下位に、オオバコ系擬縄文を帯状に巡らせている。141は原体LR単節縄文を、4本一単位の櫛歯状工具による円形状の櫛描文で区画している。

142には、原体RL単節縄文で横位に縄文帯を施し、その下位に結紐文を描く。143は、原体RL単節縄文とLR単節縄文を交互に上から施文して、羽状縄文の縄文帯を描く破片である。144には、オオバコ系擬縄文を2段巡らせている。

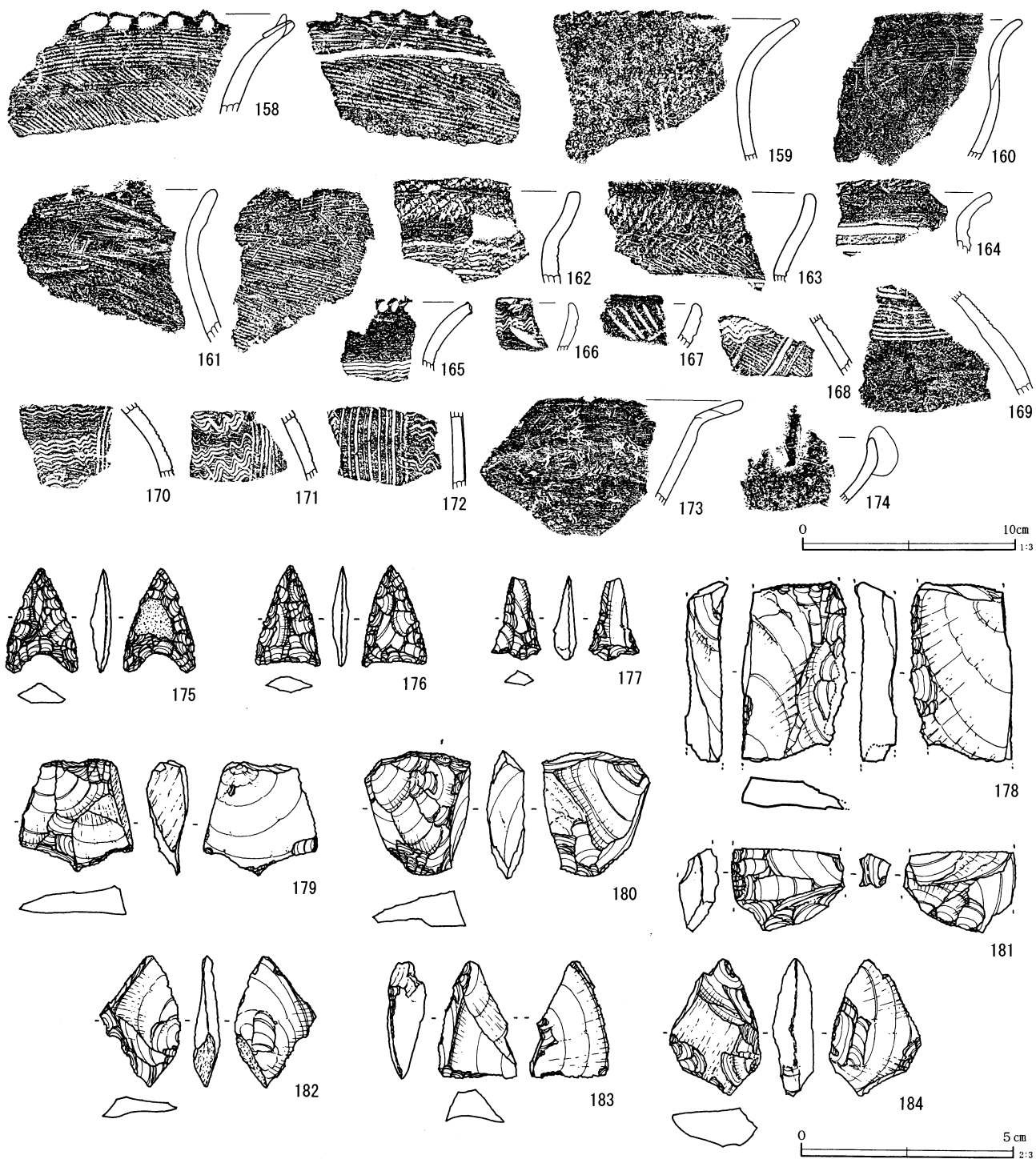
145～150は同一個体の破片であり、第42号溝跡の第135図19と同一個体でもある。145に2本描沈線による波状文2条で、オオバコ系擬縄文を区画している。149・150は、第135図19や145より下位の破片で、胴部下半に無文部が見える。

151は頸部片で、1本描沈線2条間に列点文を施している。

152は、原体LR単節縄文を地文とし、複合鋸歯文を施すものである。153は、連弧文内に原体LR単節縄文を充填するものである。154は、1本描沈線2条の区画内に山形文を施し、下位には数条短斜線文を交互に連続させるとと思われる。

155～172は甕で、155～167は口縁部片、168・169は頸部片、以下胴部片である。155・156は、先の尖った工具で刻み目を施す破片である。157・158は、指頭押捺を施す破片である。158は折り返し口縁で、押捺に捻りを加えている。159の口唇部に棒状工具で押捺を加え、波状口縁となっている。160・161は単口縁で、新しい時期の可能性もある。

162・163・166・167は受口状口縁で、162の口唇部と外面には、1段2条のLR単節縄文を施す。原体は、太・中・細の縄を中中と太細の組合せで擦ったものである。163には無節Lを施す。166の



第159図 包含層Y層出土遺物(4)

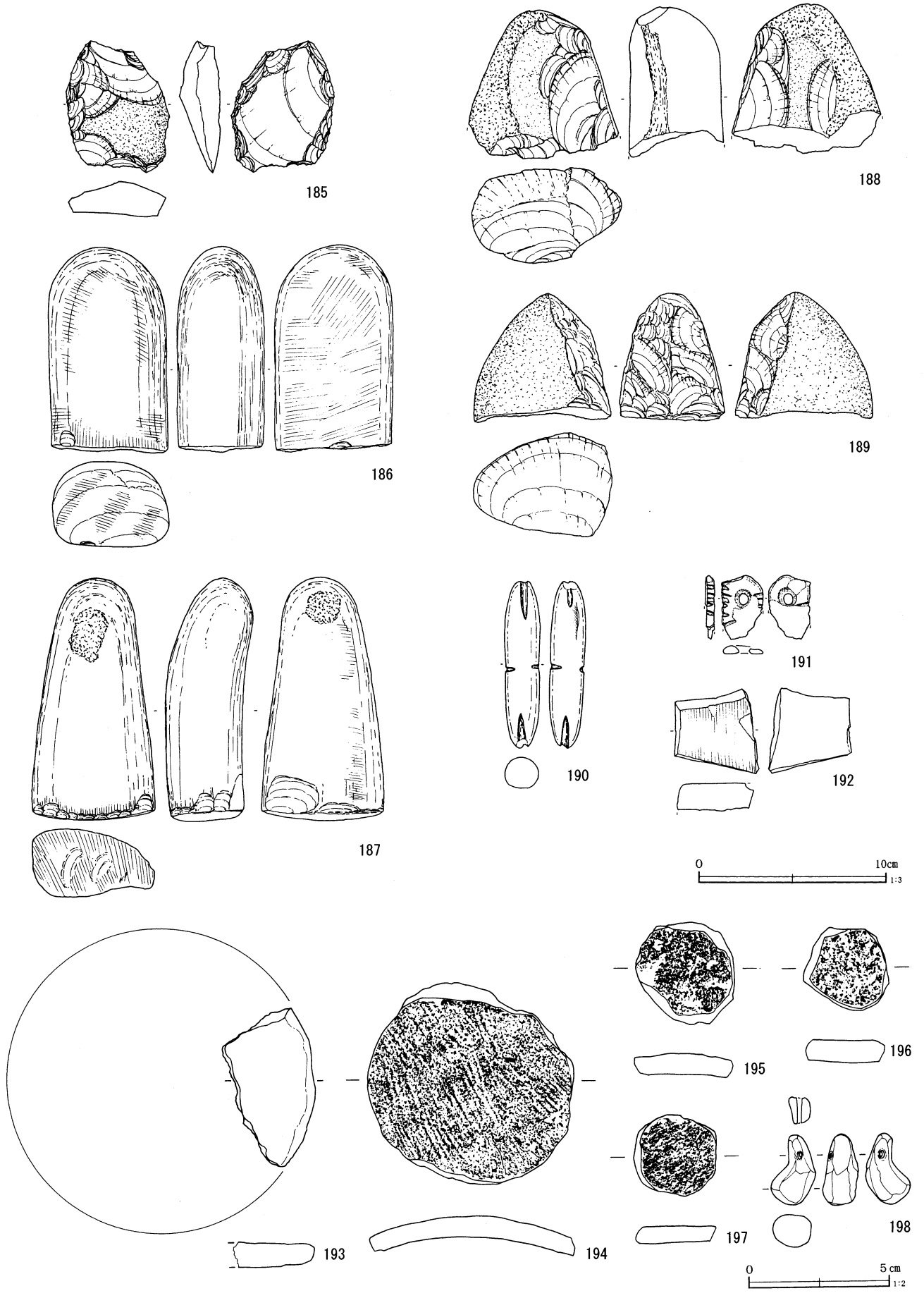
外面には櫛描文波状文を施し、167には複合鋸歯文を施す。164・165は単口縁で、口唇にはそれぞれ、原体LR単節縄文、刻み目を加えている。

168の頸部片には、櫛描波状文を巡らせて、その下位には櫛描文の文様が見える。169には、櫛描直線文の間に櫛刺突文を施している。

170~172は、垂下させた直線文の脇に櫛描波状文を加えている破片である。

173・174は高坏の口縁部片で、174には楕円形の突起が付く。

175は基部に抉りの入る凹基、176は平基である。177は加工が粗く石鏃の未製品と思われる。



第160图 包含层Y层出土遗物(5)

178・182～184は縁辺に一部に刃部加工と思われる、細かい剥離が施されている。

179は端部の中央に錐部を考えられる小さな突起を作り出している。

180は両端の稜線が潰れており、楔形石器として用いられたと思われる。

181は両端を欠損するため器種判断は不能である。左側縁に規則的な剥離が施されている。

185は、楕円形を呈する打製石斧で刃部を欠損している。

186と187は、棒状の礫の一端を打割して平坦面としている。底面に磨耗痕が観察できる。

188・189はスタンプ形石器の破損品と思われる。右側面に剥離加工が集中する。188は敲打が施されている。

190は端部と側面に切目を入れた石錘である。

191は下半部を欠損している。上半部に大きな穿孔と両側縁に切目を入れた垂飾である。

192は砥石の破損品である。

193は紡錘車と思われる。外縁部を指で押さえて形作った後、ミガキ調整を加える。194～197は土製円盤で、特徴的な加工を施していない。198は土製勾玉で、通常の勾玉とは穿孔の位置が異なっている。入念なナデ調整を施す。

第30表 包含層Y層出土遺物観察表(第158～160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
98	弥生土器	壺	6.8	[12.5]		A C	普通	にぶい黄橙	50	H-11a・cg 櫛歯6本一単位
99	弥生土器	壺		[4.5]		A C	普通	橙	20	H-11g 98と同一個体か 櫛歯6本一単位
100	弥生土器	壺	6.3	[9.7]		A B C E F	普通	橙	80	G-11g
101	弥生土器	壺	(8.4)	[6.4]		A B C	良好	赤褐色	20	H-11ag 内外面赤彩
102	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	G-11-dg
103	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい橙	破片	F-10g 内外面赤彩
104	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい黄橙	破片	F-11cg 内外面赤彩
105	弥生土器	壺				A B C F	普通	黒褐	破片	H-11ag
106	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	H-11ag
107	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい橙	破片	H-11ag 外面赤彩 櫛歯4本以上一単位
108	弥生土器	壺				A C	普通	にぶい黄橙	破片	H-11ag 櫛歯6本一単位
109	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	H-11ag
110	弥生土器	壺				A B C F	普通	橙	破片	F-11ag 外面赤彩 櫛歯7本一単位
111	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	I-11bg 櫛歯6本以上一単位
112	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	H-11cg 外面赤彩 櫛歯5本一単位
113	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	G-11cg 外面赤彩 櫛歯5本一単位
114	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	I-11ag 外面赤彩 櫛歯5本一単位
115	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい黄橙	破片	G-11ag 外面赤彩
116	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	G-12cg 外面赤彩
117	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい橙	破片	G-11g 櫛歯5本一単位
118	弥生土器	壺				A B C F I	普通	橙	破片	H-11cg・I-11bg 櫛歯5本一単位
119	弥生土器	壺				A B C F I	普通	橙	破片	I-11ag 櫛歯5本一単位
120	弥生土器	壺				A B C I	普通	橙	破片	H-12cg 櫛歯5本一単位
121	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい黄橙	破片	G-11cg 外面赤彩 櫛歯5本一単位
122	弥生土器	壺				A B C I	普通	橙	破片	H-11cg
123	弥生土器	壺				A B C	普通	灰黄褐	破片	H-11ag 櫛歯5本一単位
124	弥生土器	壺				A B C E F	普通	にぶい橙	破片	I-11ag 櫛歯6本一単位
125	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	I-11ag 櫛歯3本一単位
126	弥生土器	壺				A B C E F	普通	褐	破片	H-11cg 櫛歯4本一単位
127	弥生土器	壺				A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	I-11bg 櫛歯4本一単位
128	弥生土器	壺				A B C I	普通	灰褐	破片	H-11ag
129	弥生土器	壺				A C F	普通	にぶい黄橙	破片	櫛歯5本一単位
130	弥生土器	壺				A B C F	普通	にぶい黄橙	破片	G-12ag
131	弥生土器	壺				A B C	普通	橙	破片	H-12cg 櫛歯4本一単位
132	弥生土器	壺				A B C F	普通	橙	破片	G-11ag
133	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい褐	破片	H-11ag オオバコ系擬縄文
134	弥生土器	壺				A B C I	普通	橙	破片	H-11cg
135	弥生土器	壺				A B C F I	普通	にぶい褐	破片	G-11bg・H-11cg オオバコ系擬縄文
136	弥生土器	壺				A B C I	普通	橙	破片	F-10bg
137	弥生土器	壺				A B C	普通	にぶい橙	破片	F-11cg

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
138	弥生土器	壺	胴部			ABC I	普通	にぶい橙	破片	F-11cg
139	弥生土器	壺	胴部			ABCE F	普通	褐灰	破片	I-11ag 櫛歯5本一単位 オオバコ系擬縄文
140	弥生土器	壺	胴部			ABCE F	普通	褐灰	破片	I-11ag 砂粒多い オオバコ系擬縄文
141	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい黄橙	破片	I-11ag 櫛歯4本一単位
142	弥生土器	壺	胴部			ABCE F	普通	灰黄褐	破片	G-11ag
143	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	黒褐	破片	H-11ag
144	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	橙	破片	オオバコ系擬縄文
145	弥生土器	壺	胴部			ABC I	普通	黒褐	破片	G-11cg 146~150同一個体 オオバコ系擬縄文
146	弥生土器	壺	胴部			ABC I	普通	黒褐	破片	H-11ag オオバコ系擬縄文
147	弥生土器	壺	胴部			ABC F	普通	にぶい赤褐	破片	H-11ag オオバコ系擬縄文
148	弥生土器	壺	胴部			ABC F	普通	灰褐	破片	G-11dg オオバコ系擬縄文
149	弥生土器	壺	胴部			ABC F	普通	にぶい赤褐	破片	H-11ag オオバコ系擬縄文
150	弥生土器	壺	胴部			ABC F	普通	にぶい赤褐	破片	H-11ag オオバコ系擬縄文
151	弥生土器	壺	胴部			ABC F I	普通	にぶい橙	破片	E-10dg
152	弥生土器	壺	胴部			ABC F	普通	橙	破片	H-11ag
153	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい褐	破片	H-11dg
154	弥生土器	壺	胴部			ABC	普通	にぶい褐	破片	I-11ag
155	弥生土器	甕	口縁部			ABCE	普通	橙	破片	G-11ag
156	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	にぶい褐	破片	F-11cg
157	弥生土器	甕	口縁部			ABCE	普通	にぶい褐	破片	H-11cg
158	弥生土器	甕	口縁部			ABC F	普通	橙	破片	H-11cg
159	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	暗灰黄	破片	H-11ag
160	弥生土器	甕	口縁部			ABCE I	普通	黒褐	破片	E-10dg
161	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	明赤褐	破片	H-11cg
162	弥生土器	甕	口縁部			ABC I	普通	灰褐	破片	H-12cg 外面煤付着 櫛歯4本一単位
163	弥生土器	甕	口縁部			ABC	普通	褐灰	破片	G-11cg
164	弥生土器	甕	口縁部			ABCE	普通	にぶい橙	破片	H-11cg 外面煤付着
165	弥生土器	甕	口縁部			ABC F	普通	褐灰	破片	G-11cg 櫛歯5本一単位
166	弥生土器	甕	口縁部			ABC F	普通	にぶい橙	破片	H-11ag 櫛歯5本一単位
167	弥生土器	甕	口縁部			ABC F	普通	褐灰	破片	H-11ag 外面口唇に赤彩あり
168	弥生土器	甕	頸部			ABC F	普通	にぶい褐	破片	I-11ag 櫛歯3本一単位
169	弥生土器	甕	頸部			ABC	普通	にぶい黄橙	破片	H-11cg 櫛歯4本一単位
170	弥生土器	甕	胴部			ABC	普通	にぶい褐	破片	E-10bg 櫛歯6本一単位
171	弥生土器	甕	胴部			AB I	普通	灰褐	破片	G-11ag 櫛歯4本一単位
172	弥生土器	甕	胴部			ABCE	普通	褐灰	破片	H-11ag 櫛歯5本一単位
173	弥生土器	高坏	口縁部			ABCD	普通	橙	破片	H-12cg 内外面赤彩
174	弥生土器	高坏	口縁部			ABC	普通	にぶい橙	破片	E-11ag 砂粒多い
175	石器	石鏃	長さ2.5cm	幅1.7cm	厚さ0.5cm	重さ1.4g				M層H-12cg 黒耀石
176	石器	石鏃	長さ2.4cm	幅1.6cm	厚さ0.4cm	重さ1.2g				G-12cg チャート
177	石器	石鏃未製品	長さ1.9cm	幅1.2cm	厚さ0.4cm	重さ0.7g				F-11cg 黒曜石
178	石器	削器	長さ[4.2]cm	幅2.4cm	厚さ0.7cm	重さ12.5g				G-11g 珪質頁岩
179	石器	石錐	長さ2.6cm	幅2.7cm	厚さ0.7cm	重さ5.9cm				I-12dg チャート
180	石器	楔	長さ3.0cm	幅2.5cm	厚さ0.8cm	重さ7.0g				J層F-10g チャート
181	石器	尖頭器	長さ[2.0]cm	幅2.7cm	厚さ0.9cm	重さ4.6g				H-11cg チャート
182	石器	削器	長さ3.2cm	幅1.9cm	厚さ0.4cm	重さ2.8g				H-11cg 珪質頁岩
183	石器	削器	長さ2.8cm	幅1.9cm	厚さ0.8cm	重さ3.6g				G-11bg チャート
184	石器	剝片	長さ3.2cm	幅2.2cm	厚さ1.0cm	重さ6.3g				G-11dg チャート
185	石器	打製石斧	長さ7.1cm	幅5.5cm	厚さ2.2cm	重さ89.1g				J層G-10bg ホルンフェルス
186	石器	スタンプ	長さ11.0cm	幅6.6cm	厚さ4.8cm	重さ624.5g				J層G-10bg 閃緑岩
187	石器	スタンプ	長さ13.3cm	幅6.7cm	厚さ4.6cm	重さ551.0g				J層E-11ag 砂岩
188	石器	スタンプ	長さ[8.1]cm	幅[8.0]cm	厚さ5.2cm	重さ385.6g				F-11cg 安山岩
189	石器	スタンプ	長さ[7.2]cm	幅[7.3]cm	厚さ5.1cm	重さ297.0g				G-11g包ltr 安山岩
190	石器	石錘	長さ9.0cm	幅2.0cm	厚さ1.6cm	重さ46.1g				G-11g
191	石製品	垂飾	長さ[3.7]cm	幅2.7cm	厚さ0.6cm	重さ4.5g				H-12cg 砂岩
192	石器	砥石	長さ[4.6]cm	幅[4.6]cm	厚さ1.5cm	重さ35.7g				F-11g 安山岩
193	土製品	紡錘車	径[15.5]cm	高さ0.9cm	重さ17.9g					I-11ag
194	土製品	土製円盤	幅7.4cm	厚さ0.7cm	重さ50.3g					SD42出土
195	土製品	土製円盤	幅3.5cm	厚さ7.5cm	重さ13.0g					M層H-12bg
196	土製品	土製円盤	幅2.9cm	厚さ0.8cm	重さ8.7g					M層H-11bg
197	土製品	土製円盤	幅3.0cm	厚さ5.5cm	重さ6.0g					G-11g包ltr
198	土製品	勾玉	長さ2.5cm	幅1.6cm	厚さ1.3cm	孔径0.15cm	重さ4.1g			G-11g

3. 水田跡

(1) 中世の水田跡 (第161図)

前節で紹介した斜面部遺物包含層の表土を掘削した直後、調査区南東の標高13.5m付近で平面的な土層の変化を確認した。周囲の暗褐色土に比べてより茶色味が強い土は、二箇所認識でき、それぞれ台形・方形に広がっていた。調査区壁の排水溝に沿って堆積層の観察をしたところ、この土層のみ、鉄分やマンガン斑の沈着が認められたため、中世以降の水田跡と判断した。

第161図下段断面図の1層がこれにあたり、下位ほどに鉄分やマンガン斑が濃くなる。だが、その変化は漸移的で、当時の耕作面や床土などの仕分けはできなかった。

また、確認できた平面形からは田面区画を想定できないが、にじみ出る台地側の地下水などの関係で台地際に設けられた例外的な区画と考えられる。両区画には含まれた3層の上位が当時の地表面と想定でき、斜面を掘削して水平な田面を整えた結果、このような段差が生まれたものと考えられる。

この付近に注意を払いながら遺物包含層の調査を兼ねて平面的に掘り下げたものの、遺存状況が悪く、畦畔や諸施設を検出できなかった。また、この水田跡に伴う遺物として特定できるものはなかったが、周辺の同層内からは中世期の遺物が出土している。

(2) 古代の水田跡と土壌 (第161・162図) 水田跡 (第161図)

中世水田と包含層M層の平面的な掘削が完了するころ、やや砂質感をもつ黒味の強い土が東側の調査区壁にかかる広い範囲で分布することが判明した。この土は、埼玉県北部などで発見されている、浅間B軽石降下古代水田跡の土と酷似していた。

黒褐色土は南北32.5m、東西4.5mの約115m²ほ

どの面積で確認できた。西側の限界は、13.2m近くの等高線に沿うような形で東に開く緩い弧を描いている。また、南と北でそれぞれ1.5~2.0mの間をあけてこれと平行する0.5~0.6m幅の帯状土層変化が認められた。

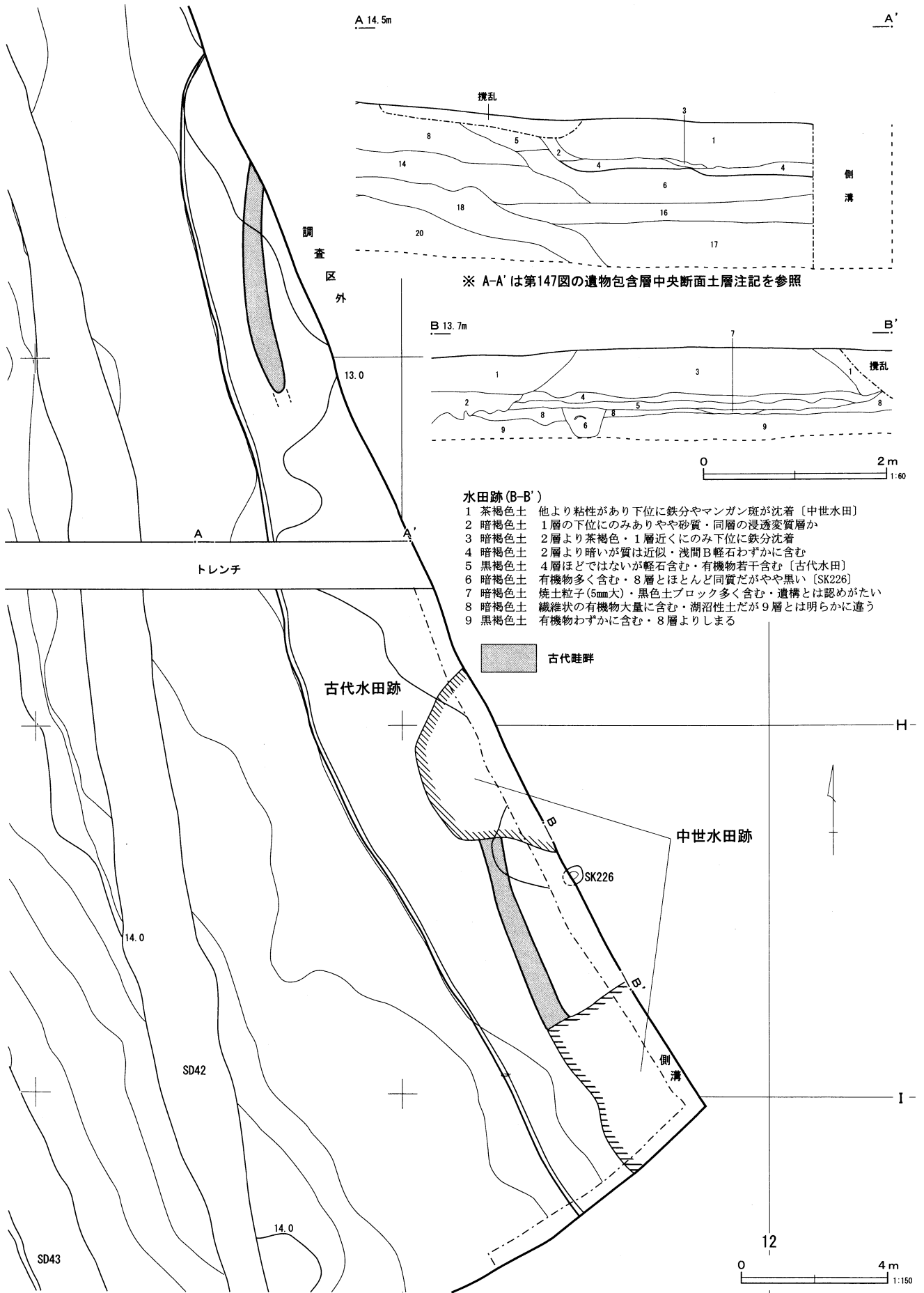
さらに、包含層中央トレンチの土層断面(第161図上段に一部を再録)において、この黒褐色土の下限が平坦で帯水環境下にあったこと、また、帯状の土色変化を境に黒褐色土の下限に段差があることが判明するにおよび、この範囲が地形に沿って棚田状に整えられた水田跡であると確信するに至った。

第161図上段4層と下段5層がその黒褐色土に相当するが、下段断面図を作成した調査区東南部では、浅間B軽石と考えられる微小な白色軽石も確認している。これが含まれるのは下段4層で、5層にもわずかに含まれているが、こちらは上位の粒子が混入したものと思われる。

つまり、軽石の降下は下段4層形成時に特定することができる。また、5層下では、後述する第226号土壌が掘り込まれており、水田の耕作期は、同土壌構築期の9世紀第2四半期以降、浅間B軽石が降下した1108年以前の間限定できる。

耕作面5層の直下にあたる8層には繊維状の有機物が大量に含まれており、少ないが、上段断面図6層に相当する下段9層にも及んでいる。前節でふれたように、調査区の東端は、古墳時代あたりに河川作用の攻撃にさらされたようである。その名残である湿地を利用して可耕地の拡大が図られたのだろう。

水田の存続期間を示唆する鉄分やマンガン斑は形成されていなかった。これが、台地を起源とする8・9層の土質によるものか、はたまた耕作期間が短かったためなのかは判断ができない。また、耕作土の5層を取り除く過程で、地形の制約から



第161図 古代、中世の水田跡・土層断面

優先された南北の区画をさらに細かく仕切った東西方向の畦や、水回しに関わる施設などを探したが、発見できなかった。

なお、下段断面図4・5層に含まれていた軽石の観察は、あくまで調査担当者の主観に基づいている。この観察を検証するため、低地部の埋戻し時に使う重機を使用して軽石や周辺土をサンプリングし、噴出源などを特定しようと考えていたが、悪天候が重なり埋戻しを急ぐあまり、この作業を失念したまま現況復帰を行ってしまった。

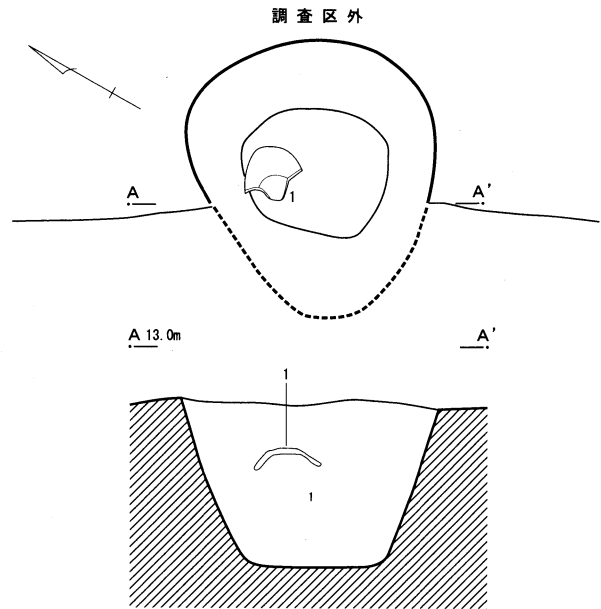
第226号土壌 (第162図)

Y層および環濠の調査を終えた後、縄文包含層(J層)の調査に着手するに際し、周囲の排水機能をさらに強化する必要が生じ、南東側の調査区壁下の排水溝をスコップなどで0.5mほど掘り下げた。その途上、平安時代の坏片が数点同一地点から出土した。

前述した古代水田の田面に投棄されたものにしては割れ口が切り立っており、掘削具で傷つけたわけではないのにいくつかの破片が接合した。この時点で土壌の存在を想定し、排水溝の掘削を中断して調査を開始したが、結果として既掘部分はすでに残骸と化していた。仕方なく、断面観察の後、調査区を拡張し、東側半面の調査を実施した。

推定される土壌の形状は、0.5m規模のほぼ円形から楕円形で、断面は、確認できた範囲で深さ0.3mほどの箱状となる。覆土は暗褐色系土で8層と近似するが、繊維状有機物の混入は同層より少なく、5層よりは多い。掘り込みは、8・9層を抜いていることが確認できたが、さらに上位の5層中には達していない。これは、土色や有機物の混入率から明白である。

遺物は須恵器坏5個体が出土した。復元率は高く、このうち2個体には「玉」・「大」などの吉祥句が墨書されていた。破壊を免れた半分での傾向であるが、これらの出土状況は、中層より下層で密度が高かった。同個体が土圧でつぶれたのではな



第226号土壌
1 暗褐色土 有機物多く含む・第161図B-B'の8層とほとんど同質だがやや黒い

0 1m 1:30

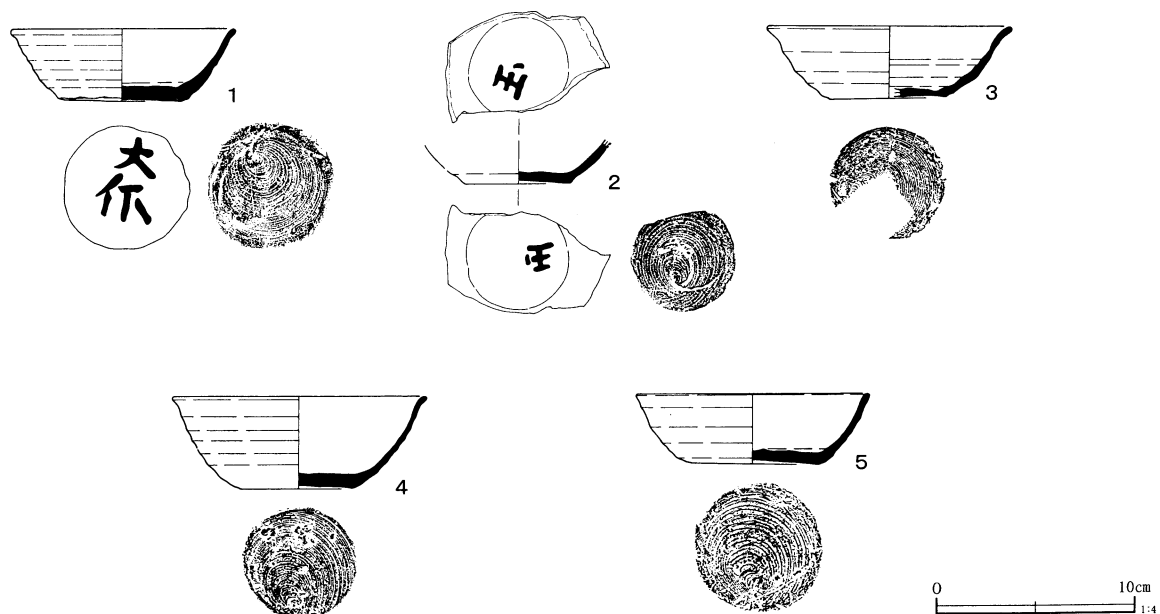
第162図 第226号土壌

く、それぞれの個体片が入り混じって出土しており、別の箇所でも打割した破片をとりまとめて埋めたような状況であった。

掘削が水田経営途上の耕作面から行われ、さらにその後の耕作によって上位の掘り込み壁が消失したことも想定できる。だが、現状での断面観察結果、および出土した遺物の量や墨書土器などの様相を考え合わせると、この土壌は、田地造成に際しての祭事に使用した墨書坏などを意図的に打ち欠き、埋納した施設と考えるのが妥当だろう。また、7層で観察できた焼土の形成もこれと関連する行為の名残かも知れない。

第226号土壌出土遺物 (第163図)

遺存度の高い須恵器坏が5点出土した。第163図1は完形品。底部が厚くやや砂っぽい胎土から東金子窯跡群産と考えられる。底径は口径の1/2を超える。底部調整は回転糸切り後無調整である。底部外面に墨書「大□」と読める。二字目は「尔」にも見えるが不明とした方が良からう。



第163図 第226号土壌出土遺物

第31表 第226号土壌出土遺物観察表 (第163図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	坏	11.2	3.7	6.2	B G	良好	灰	100	東金子産 底部墨書「大口」(→大尔)
2	須恵器	坏		[2.2]	5.3	G I	普通	暗褐	60	南比企産 底部内外面に墨書「玉」
3	須恵器	坏	12.2	3.7	[5.9]	A G I	普通	青灰	70	南比企産
4	須恵器	坏	(12.6)	4.7	5.6	G I	不良	灰	65	南比企産
5	須恵器	坏	11.6	3.6	6.2	G I	普通	暗灰	75	南比企産

2の坏は口縁部を欠く。底部の内外面に「玉」の墨書が記されている。2～5は南比企産の須恵器坏で、いずれも底部は回転糸切り後無調整である。3・4は深身で口唇部は外反するのに対し、5はやや浅身(底径が口径の1/2よりも大きい)で、口縁の外反はない。

時期に関しては、坏の底部が糸切り後無調整で、深身の器形が主体を占めることから、HVII期後半

～HVIII期に掛かる時期(9世紀中頃～後半)と考えられる。1の東金子産須恵器坏が「未調整深身」(渡辺1990)であることなどの特徴から、武蔵国分寺再建瓦を焼いた窯跡A地点1号窯跡(坂詰他1984)段階から谷久保遺跡(斉藤1984)段階に平行すると考えられる。南比企窯跡群産須恵器の編年観(渡辺1990)とも矛盾しない。

VI. 調査のまとめ

1. 旧石器時代

木曾免遺跡における今回の調査では、石器集中2ヶ所と礫群1基、炭化物集中2ヶ所を検出した。だが、石器集中のうち台地奥の1箇所は、平安の住居に破壊された上に、近世・近代の整地により大部分が消滅し、これを彷彿させる住居跡混入品でその内容を類推するしかない。また、台地縁辺の集中は、出土高や内容に不足や隔たりが多く、加えて、越辺川の大谷に面した立地による不安定なロームの堆積状況のため、層位から帰属時期を一律に特定するのは困難な状況であった。

入間台地における旧石器時代遺跡の発見例は、台地を南西から北東に貫いて新設される圏央道に関わる近年の調査で急激にその数を増した。既開通の鶴ヶ島ジャンクションまででは、入間・高麗川により形成された古扇状地の扇端湧水を抛り所に、鶴ヶ島市横田遺跡(田中1995)や柳戸遺跡・新山遺跡(西井1995)などで細石刃を指標とする石器群が展開していた。

2. 縄文時代

今回の調査で検出した縄文時代の遺構は、土壌が4基のみであった。このうち1基からは早期条痕文系、さらに、2基からは前期羽状縄文系の土器片が出土しているものの、具体的な構築期を確定しがたいものばかりであった。しかし、越辺川低地を望む東の斜面部では、良好な遺物包含層を発見することができた。

これについては第V章2節で詳しく説明した。第147図の22層がこれに相当するが、往時の人々は調査区の北東に張り出す台地の湾入部を抛り所にしたようで、もっぱら断面観察用のトレンチから北に遺物が出土し、南方では、同層の分布が続くにもかかわらず、遺物の出土量が急激に減っていく。さらに、北側でも、縄文時代のうちに河川

また、同ジャンクション以東では、台地に貫入する小谷に面し、川越市在家遺跡でIV層上・下位相当の複数の石器群が(亀田・青木2004、村端2007)、坂戸市御新田遺跡では槌状剝離のある尖頭器を指標とする石器群が(西井2008)、さらに、圏央道脇の鶴ヶ島市富士見一丁目遺跡よりは砂川期のナイフ形石器と上ヶ屋型彫器を含む特徴的な石器群が発見されている(黒坂1998)。

一連の調査では、木曾免遺跡の単独出土品を含め、槍先形尖頭器を伴う遺跡が多く、後期旧石器時代後半から終末にかけての遺跡が大勢を占めている。そのなかでも、4から5種の構成をもつ石器群が検出されたことになり、立地や年代差による詳しい比較検討の機が熟しつつある。

往時の詳しい内容は判断つきかねるものの、台地の東端に位置する木曾免遺跡での発見は、これまでの立地とは異なる、大谷に面した遺跡展開の例としてこの俎上にのることになるだろう。

作用で低地側が浸食された上に、弥生時代中期に掘削された環濠によって一部が分断されている。発見できた包含層の奥行きは、最大で4m程度であったが、層の最大厚や地山の傾斜から推定すると、往時はより東に2~4mほど広がっていたものと考えられる。

包含層から出土した土器類は、早期燃糸文系の東山式から前期竹管文系諸磯c式までであるが、包含層を断ち切った第42号溝跡や弥生時代の堆積層から中期加曾利E系、さらに台地上からは後期堀之内系土器も出土している。このことは、包含層となる22層は、縄文時代の前半に堆積を終えた純層であることを示している。

出土土器の主体は関山式土器で、10を超える器

形復元可能個体が採集できたことは、集約的な廃棄が継続していたことを証明している。台地上に集落はないものの、同じ木曾免遺跡の南半で行なった坂戸市教育委員会による調査では住居跡が発見されている(加藤1987a)。このことから、包含層のある斜面地は、至近集落の住民が頻繁に行き来した何らかの作業場であったと考えられる。だが、その作業対象や素材の獲得地が越辺川低地にあるのか台地奥にあるのか、はたまた粘土などの堆積土が容易に採取できる斜面地そのものが目的であったのか、これを特定する根拠を見いだすことはできなかった。

近隣で関山式期の遺構が発見された遺跡には、木曾免遺跡から700m北西の附島遺跡(加藤1985)と1500m南の景台遺跡(加藤1997)で住居跡が、また、900m南西方の番匠・下道遺跡(黒坂2008)で土壙が見ついている。また、坂戸市域では他に、土壙を発見した長岡遺跡(加藤1987a)、塚の越遺跡(昼間1991)などもあげられる。

さらに、これらは、関山I・IIの端境期にあたる景台例を除き、その全てで関山II式土器が主体となっている。この程度の発見例で分布を決めつけるのは性急にすぎるとも知れないが、少なくとも現状では、入間台地・東松山台地で最も同期の遺跡が集中する地域となる。

関東南部における関山式期の遺跡は、古東京湾域の貝塚地帯に集中している。県内の奥東京湾域では、さいたま市から蓮田市、古入間湾域では東京都北区から川越市までに遺跡が多く分布している。後者の古入間湾域でみると、それらの多くは古入間川の大谷が形成した広大な低地帯に面した台地の縁辺ではなく、そこからわずかに湾入した小谷に面して営まれている。

ところが、木曾免遺跡の集落と包含層は、並びの附島遺跡とともに、同じ流域系でありながら、越辺川が形成した広大な谷に面しており、貝塚地帯とは異なる集落占地の傾向が見てとれる。また、

貝塚形成を含めた関山期の廃棄行動は、廃屋となった竪穴に限られるのが通例であり、斜面への大量廃棄は、既往調査の大勢とは異なる例外的ものである。複数の器形復元が可能となるような遺物を出土する独立した包含層が発見されたのは、埼玉県では、これがはじめてである。

大宮台地および武蔵野台地の関山II式期は、貝塚の形成が減少するのに対し、土壙の構築が普遍化し始める。黒浜初期における石器の定型化にも通じる沿岸型から内陸型生業形態への変質過程のなかで、それまであまり振り返られることがなかった準内陸域の坂戸東部が認知され、遺跡群が形成されたのだろう。関山期の古東京湾域では稀な斜面包含層も、そのような生業形態変質の副産物として残された遺址とも理解できる。

ちなみに、東京都八王子市の神谷原遺跡、神奈川県秦野市の草山遺跡では大破片を交えた大量の関山式土器が遺構外より出土している(小野塚1982、柳川1976)。さらに、小田原市羽根尾貝塚では斜面に貝塚が形成されていた(坪田2003)。これら3遺跡も関山II式期に主体が形成されたもので、共通した現象の背景には、時期的な趨勢が潜んでいるのかも知れない。

さて、前述のとおり、縄文時代の包含層では関山II式土器が数多く出土した。弥生時代の堆積層や第42号溝跡への流出、さらに、その過程での消失なども加味すると、往時はその数倍の量が斜面に廃棄されたと推定できる。だが、出土土器の文様要素や構成の偏差は限られており、関山式でも最終とされる井沼方段階(岩井・小倉1980)のうちに包括される。

大宮台地南部のさいたま市井沼方遺跡を示標とするこの段階は、組紐や、その意図的な組み違い原体圧痕の高い出現率に判定の目安がおかれている。これに加えて、大宮台地北端の行田市馬場裏遺跡(松本2007)、さらに北西方の本庄台地に立地する宮西遺跡(木戸2005)などの内陸部では、多

段ループ文による鋸歯や菱形構成が多出し、胴部コンパス文に代えて刺切単沈線をめぐらす井沼方にはない手法が普遍的に用いられている。

二つの構成・要素は、木曾免遺跡の出土土器にも見られるものの、その量比は少ない。多段ループ文による鋸歯・菱形は、同時期の南東北で隆盛しており、タガ状刺切文は信州神ノ木式が多用した櫛状工具による縦位刺突列を多截竹管で模倣し

3. 弥生時代

今回の調査で検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居跡13軒(建て替え含む、註1)、方形周溝墓3基、環濠2条、土器棺墓1基、土壇7基、遺物包含層1ヶ所である。該期の遺構は台地平坦面に主として分布し、先端部には土壇が存在するに留まる。一方、低地部は、遺物包含層と環濠が検出された。遺構・遺物の所属時期は、弥生時代中期後半から終末の範疇にほぼ収まるものと考えられる。遺物は、南関東に広く分布する宮ノ台式土器を主体としており、一部、中部高地の栗林式系統(以下、中部高地系と呼ぶ)などの異系統の土器を含む。

また、坂戸市教育委員会が過去に実施した調査範囲は、本調査区の南西側にあたる(第164図)。台地中央から住居跡2軒、南東縁辺から方形周溝墓が1基発見されている(坂戸市教委1992、註2)。また、正確な位置は不明だが、本調査区南側約50m付近から方形周溝墓1基が確認されている(坂戸市教委2003・2004)。

本稿では、遺構から出土した壺形土器、甕形土器(以下、壺・甕など略する場合もある)を中心として器種分類を行ない、木曾免遺跡出土土器の編年的位置を確認したい。あわせて遺構配置を検討することでまとめに代えたい。

1. 環濠集落の構成

第13号溝跡(環濠)南辺は南北に長い台地を東西方向に切るように掘削され、北西方向に弧を描

たものである。

したがって、沿岸・内陸の中間帯ともいえる木曾免遺跡での出土相は、地理的な傾斜を順当に反映していることになる。また逆に、木曾免遺跡例を差しはさむことにより、馬場裏・宮西での事例を二つの奔流が出会う北西関東内陸域の一般的な様相として一般化することができる。

いて延びる。北端は、第6号住居跡(古代)と重複しているが、それ以北に第13号溝跡(環濠)が延びることはなく、同住居跡付近で終わっている。集落域西側、すなわち、後背湿地を形成している真土部分(第165図網掛け)へ向けて環濠が開いていることになる。

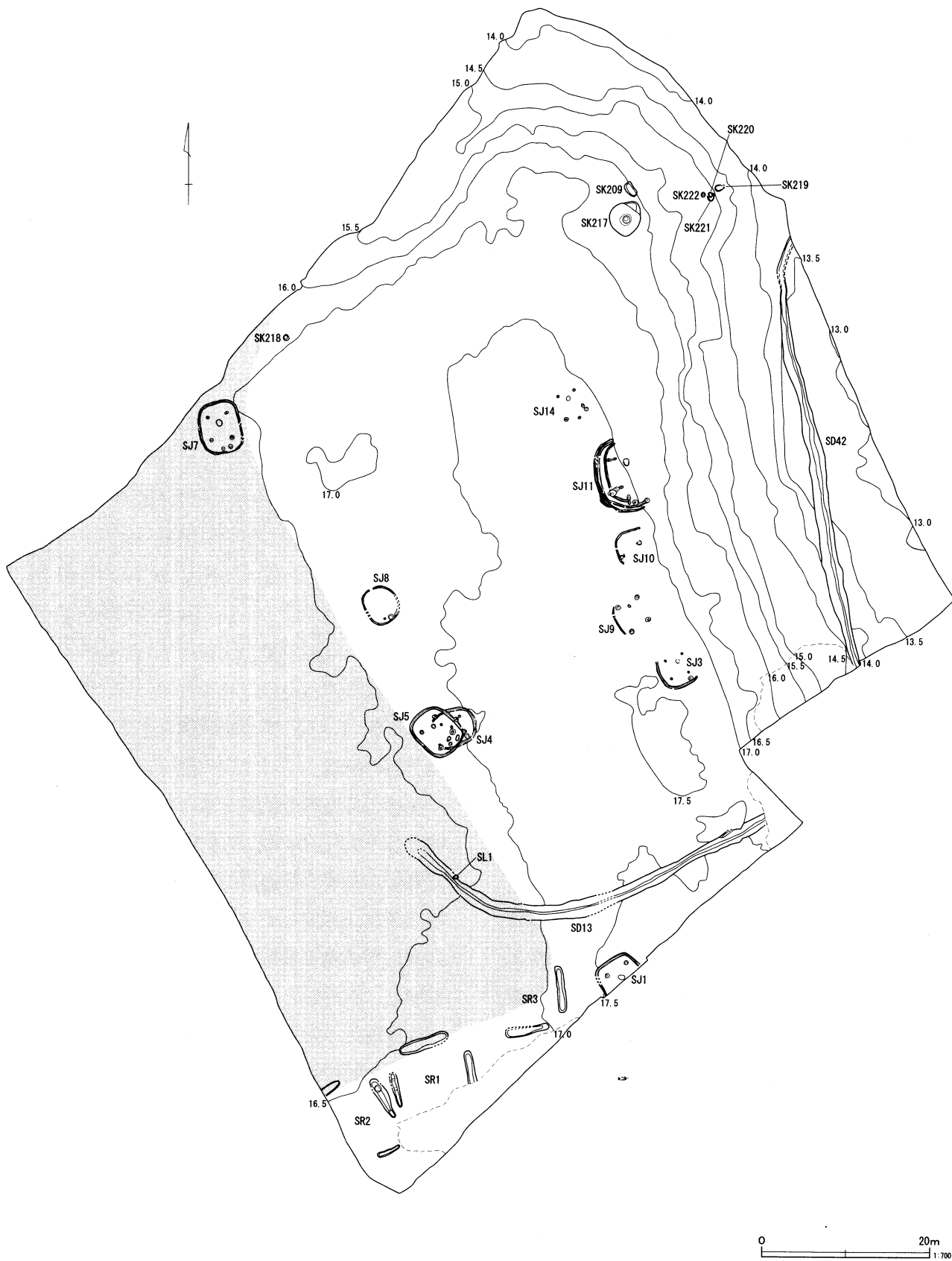
東側の低地部、台地からの比高差約3m下で検出された第42号溝跡が環濠東辺に相当し南北方向に認められる。環濠北辺は検出されなかったが、調査区北側に入り込む谷に沿って存在すると考えられる。

環濠内には、12軒の住居跡が構築されているが、北側には谷が入り込んでいることを考慮すれば、環濠集落全体がほぼ調査区内に取り、南側の第1号住居跡のみ環濠外に位置することになる。環濠内の住居跡は各々、馬の背状台地の縁辺に沿って、南北方向に展開する。第4・5・7・8号住居跡を西群とし、第3・9・10・11・14号住居跡を東群として分けると、西群と東群の間に、約20mの空閑地が存在する。

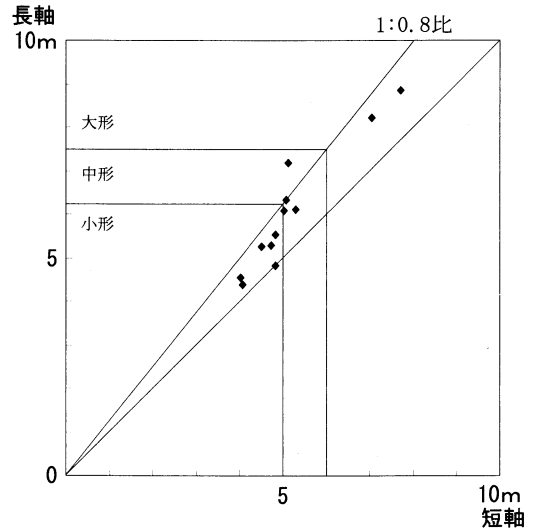
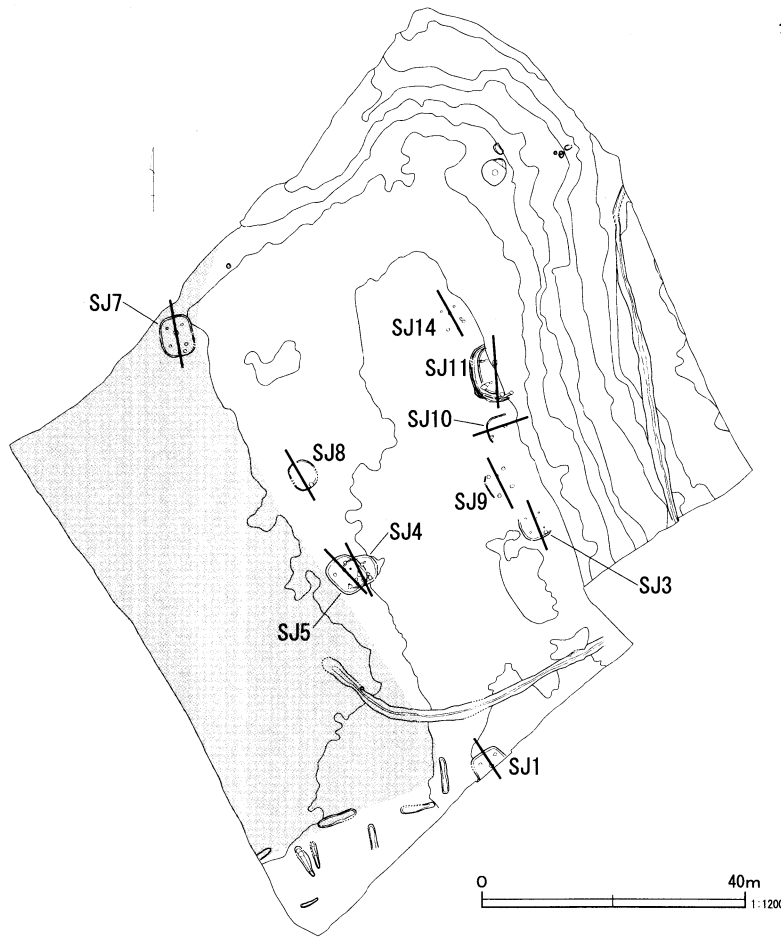
環濠内南西隅には、環濠が埋没した段階で、第1号土器棺墓が構築されていた。また、台地の先端部には、大形の第217号土壇が設けられ、北側に第209号土壇、東側に第219～221号土壇が群在していた。第217号土壇は長軸約4mと大形で、断面形は挿鉢状を呈し、最下部は一段深く掘り込まれている。その壁面には焼土化した部分が認められ、



第164図 周辺地形と坂戸市調査区



第165図 弥生時代の遺構



遺構名	形態	長軸	短軸	主軸方位
SJ1	長方形	6.10	5.30	N-34°-W
SJ3	円形	(4.83)	(4.83)	N-21°-W
SJ4	隅丸長方形	5.25	4.50	N-25°-W
SJ5	隅丸長方形	6.09	5.03	N-45°-W
SJ7	隅丸長方形	6.33	5.08	N-9°-W
SJ8	円形	4.55	4.01	N-25°-W
SJ9	小判形	(5.54)	(4.82)	N-28°-W
SJ10	隅丸方形	(4.39)	(4.07)	N-71°-E
SJ11a	小判形	(7.18)	(5.12)	N-5°-W
SJ11b	小判形	(8.23)	(7.04)	N-5°-W
SJ11c	小判形	(8.86)	(7.70)	N-5°-W
SJ14	隅丸長方形	(5.28)	(4.74)	N-29°-W

※()は復元、(())は推定

第166図 住居跡の構造

土壌の性格を考える上で、形状とともに重要な要素である。遺物は土器片が多く、残存度の高い土器は出土していない。良好な類例を見出せず、資料の増加を待って再検討したい(註3)。

環濠外には、3基の方形周溝墓を配し、集落域と墓域が明確に区分される典型的な構成を示す。

環濠北辺は不明であるが、規模は南北100m、東西60mを超えることは確実である。通常環濠集落は「ムラ」の周囲、外側に土塁を設けることにより、外部からの攻撃に備えた、防禦機能が意識されている。しかし、木曾免遺跡は環濠西辺が湿地に向かって開く(途切れる)ことからみても、西側に対する防禦性は欠落するといわざるをえない。敢えて言えば東側(沖積地側)を意識した防禦性ということもできるが、そこに強い政治的緊張関係を読み取るのは難しいであろう。

住居跡の構造

住居の各施設の配置をみると、ほとんどの住居跡では、支柱穴4本、入口部のピット1本、貯蔵穴・炉1基ずつと通常の形態である。貯蔵穴の位置は入口から入ってすぐ右側に、炉は4本の支柱穴間のやや奥まった位置に設けられている。炉の形態は、楕円形となるものが多く、その長軸方向が住居跡の主軸方向とほぼ一致している。

その中で特異なものは、第4・10号住居跡である。入口部のピットが発見されなかった第4号住居跡は、同住居跡における貯蔵穴の位置と、楕円形を呈する炉の長軸方向と位置を考慮に入れると、主軸方位は、N-25°-Wになると考えられる。他の住居跡とは異なり、棟に直交して出入口が取り付くことになるが、入口の方向性としては類似する。また、第10号住居跡のみ、出入口方向が西

側に向き他と約90°ずれる。

第166図では、各住居跡の出入口方向を示し、規模についてはグラフを用いて表した。住居の規模は、大形・中形・小形の3つに区分できる。平面形に関して、中形は各辺がやや丸みを帯びる隅丸長方形で、宮ノ台式に通有の小判形に近い形である。また、大形・小形は小判形や円形を呈している。その中で、第1号住居跡のみ、各辺とも直線的であり、敢えて言えば中部高地系に近いタイプということもできる。

2. 出土遺物について

まず、遺物の出土状況については、住居跡の残存状況が悪く、出土土器は多く検出されているわけではない。床面直上から検出された土器は少なく、ほとんどが覆土中層から下層より出土した。

また、台地上の環濠(第13号溝跡)からは、小破片がまとまって出土したが、接合率が低く、異なる個体の可能性が高い。一方、低地の環濠(第42号溝跡)からは、多数の遺物が出土し、復元率の高い土器がその中に含まれている。木曾免遺跡における遺物の大半は環濠出土で、加えて、第209号土壇から完形に近い甕が出土した。

以下、木曾免遺跡出土土器を概観する。宮ノ台式と異系統の土器にひとまず大きく二分しておく。宮ノ台式については、壺・甕を中心に形態分類を行ない、説明を加えていく。なお、遺物の点数については、非掲載遺物の点数も含んでいることを承知して頂きたい。

壺形土器(宮ノ台式)

壺の口縁部形態は、5種類確認できる(第167図)。A類は単純口縁、B類は受口状口縁、C類は袋状口縁、D類は外面折返口縁、E類は内面折返口縁である。このうち、最も多く出土しているのは、単純口縁である。

受口状口縁は、すべて輪積み成形で、粘土を折り返しているものは見られなかった。

袋状口縁は、第4号住居跡(第29図1)と包含

層Y層(第158図98)の2例だけである。第4号住居跡出土土器は無文で、包含層出土土器は擬似流水文の間帯である斜格子文が口縁部外面にも施されている。

折返口縁は、外面と内面に折り返すものがそれぞれ1例ずつ、第42号溝跡(第135図24・31)に見られた。

頸部形態は、緩やかに弧を描く弓形状になるもの(a類)が最も多く存在する。また、頸部が直線的になり、屈曲して口縁部に至るもの(b類)がわずかに確認できる。頸部のほとんどが細頸壺であるが、第42号溝跡第135図12・第136図29だけは太頸壺である。

胴部形態は3種類に分けた(第167図)。I類は胴部中央に最大径をもつ算盤状を呈し、肩部がなで肩になるもの、II類は胴部中央に最大径をもつ球胴形を呈し、肩部が少し張るもの、III類は胴部下方に最大径をもち、緩やかに屈曲し、そのまま頸部に至るものである。

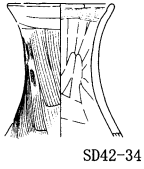
底部は、壺か甕かを判断することができず、すべての底部をここで取り上げる。形態は、胴部に至る器壁が外に開いて緩やかに立ち上がるものと、胴部に至る器壁が外に開かずそのままの角度で立ち上がるものに大きく分けることができる。

底面圧痕の有無については、全体で無文のものが90%を占めており、底面圧痕が確認できるものは少ない(第168図4)。そのうち、木葉痕と網代痕があり、木葉痕が多く見られる。網代痕は、第7号住居跡に1点(第37図22)、第42号溝跡に5点(第134・140図10・91~93・105)、包含層Y層では1点確認できた。加えて、甕に限定されるが、焼成後穿孔を行なっている底部を3点確認した(第137図53、第140図106・107)。

続いて、各部位の文様帯について記述していく。

口縁部については、外面に文様帯をもつものは、B類以外になく、口唇部に何らかの文様を施すものが少し存在している。

A類



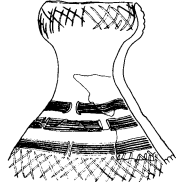
SD42-34

B類



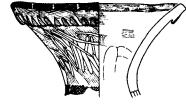
SJ4-2

C類



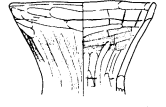
SD42-98

D類



SD42-24

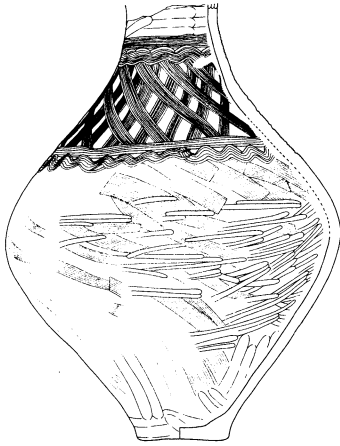
E類



SD42-31

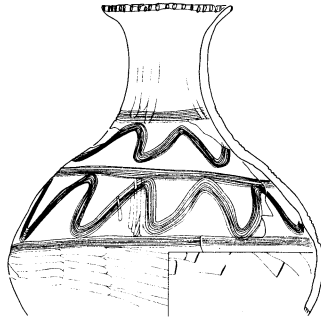
壺口緣部形態分類

I類



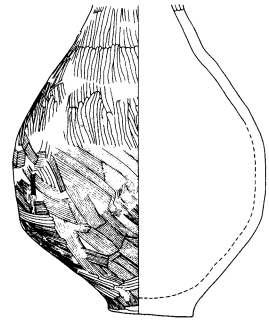
SD42-1

II類



SD42-2

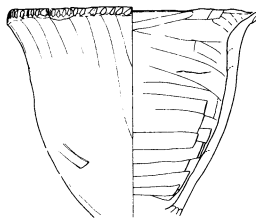
III類



SD42-44

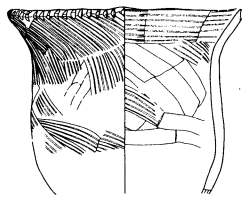
壺胴部形態分類

i類



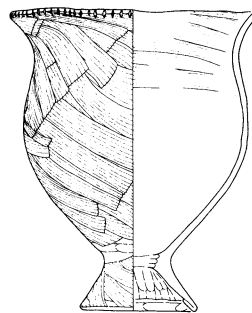
SD42-57

ii類



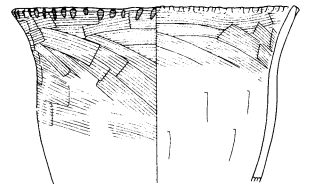
SD42-58

iii類



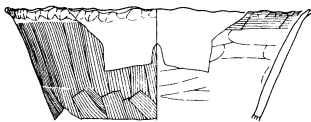
SD42-49

iv類



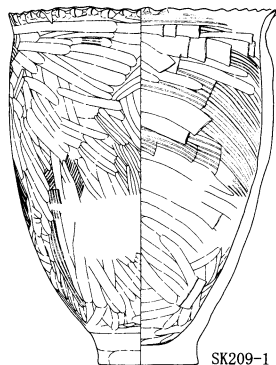
SD42-51

v類



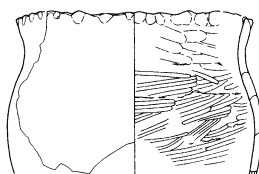
SD42-62

vi類



SK209-1

vii類



SD42-61

壺形態分類

第167図 土器分類

A・B・D類の口唇部に文様を施す例は若干確認でき、縄文を施文するものが最も多い。また、指で押捺するもの(第135図11)、ヘラ状工具やハケ状工具による刻み目を加えるものなどが散見される。B類の外表面には、縄文や沈線による斜格子文が多く確認できる。また、それを地文に棒状浮文、円形浮文などを貼り付けている例もある。

壺の胴部文様帯は複雑で多様性があることが指摘されており(安藤1990、黒沢1997)、過去の分類例や時間差を表す指標をもとに、分けて記述を進めていく。

まずは、櫛描文を施す一群である。木曾免遺跡では、文様をもつ土器の中で、最も多く施されている文様が櫛描文である(第168図3)。

擬似流水文を施文するものと、横位直線文、縦位直線文、波状文、斜格子文、短斜線文、擬似簾状文などを組み合わせるものがある。

擬似流水文は、沈線による弧状の()で櫛描文を括い、その部分を半単位ずらして施文している。また段間には、必ず1本描沈線による斜格子文が施されている。したがって同様の斜格子文施文の土器は擬似流水文に含むことにする。管見による限り、擬似流水文+斜格子文の文様構成は他の遺跡において類例を見出すことができず、木曾免遺跡における独自の文様構成となる可能性が高い。

横位直線文や波状文は、単独で施されることは少なく、幾種類かの文様要素を組み合わせられて描かれている場合が多い。

次に沈線文は、直線文、山形文、斜格子文が確認できる。実測図に示した土器点数は少ないが、第168図3のグラフを見ると、住居跡からは定量で出土することが読み取れる。

この中には、沈線のみで文様を構成する重四角文がある。重四角文は、第13号溝跡で2点出土しており(第64図24・34)、同一個体の可能性もある。類例としては、千葉県大崎台遺跡第163・169号住居跡出土土器(佐倉市大崎台B地区遺跡調査会編

1985)に見られるが、重四角文の下端部と中央部のみの破片で、文様構成は不明である。

また、第42号溝跡には1本描沈線によって、上向きの鋸歯文2段と四角文1段を描き、その中に斜格子文を充填する土器(第135図11)がある。

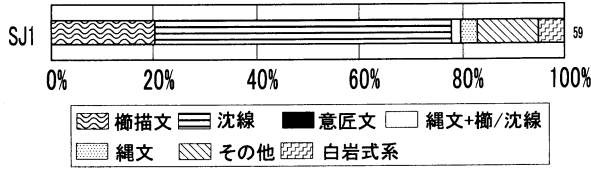
縄文施文の一群には、王子文・楕円文・結紐文を含む意匠文、櫛描文や沈線で区画されるもの、無区画の縄文帯を構成するものが挙げられる。

個々の文様を説明する前に、擬縄文について述べる。木曾免遺跡において、擬縄文施文に用いられた原体は、すべて植物のオオバコで、回転施文されていた。擬縄文施文の破片は、総数34点を数える(同一個体を含む)。各遺構の内訳を記述する際、点数の後のカッコ内に個体数を示した。各遺構の内訳は、第5号住居跡1点(1個体)、第7号住居跡10点(1個体)、第3号方形周溝墓1点(1個体)、第42号溝跡6点(3個体)、包含層Y層12点(5個体)、遺構外4点(3個体)である。擬縄文を施文した同一個体の総数は14個体となる。その文様構成は、縄文施文のものと類似するため、擬縄文を含めて、文様構成の説明を行なう。

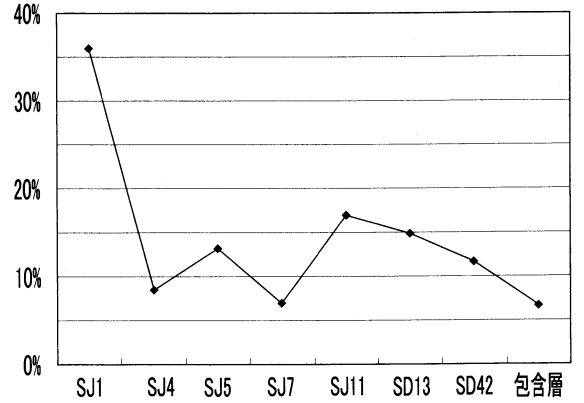
王子文や楕円文は、第42号溝跡出土土器(第142図160・162~165)に見られ、住居跡からは第5号住居跡(第30図21)に楕円文と思われる破片が出土している。また、結紐文は、第5号住居跡(第30図19・20)、第7号住居跡(第37図35~37)、第11号住居跡(第45図8・9)、第42号溝跡(第142図159・161)、包含層Y層(第158図132~136)に見られる。無区画の結紐文が、包含層Y層に1点確認できる(第158図142)。すべて破片であるため全体的な構成は不明である。縄文施文の大きい個体を出土した遺構は、第42号溝跡にほぼ限られる。

櫛描文や沈線で縄文を区画する土器は、意匠文を除くとあまり多くはない。櫛描文区画は、円形で区画する破片がある(第158図141)。2本描沈線による横位直線文で縄文帯を区画するもの(第

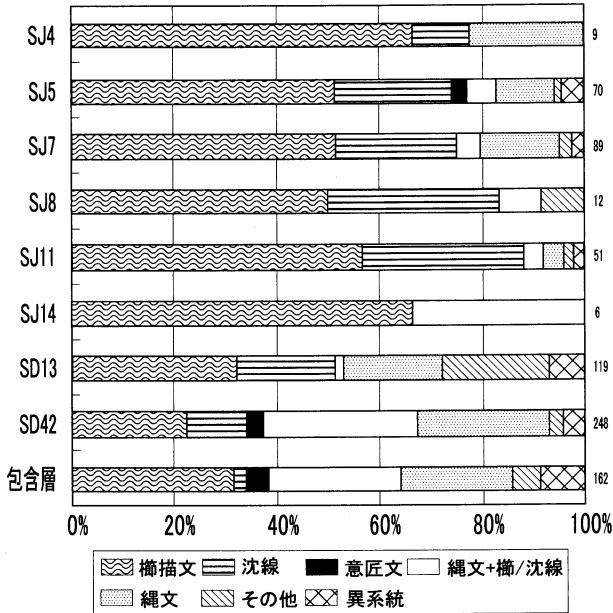
1. 第1号住居跡の壺文様構成比



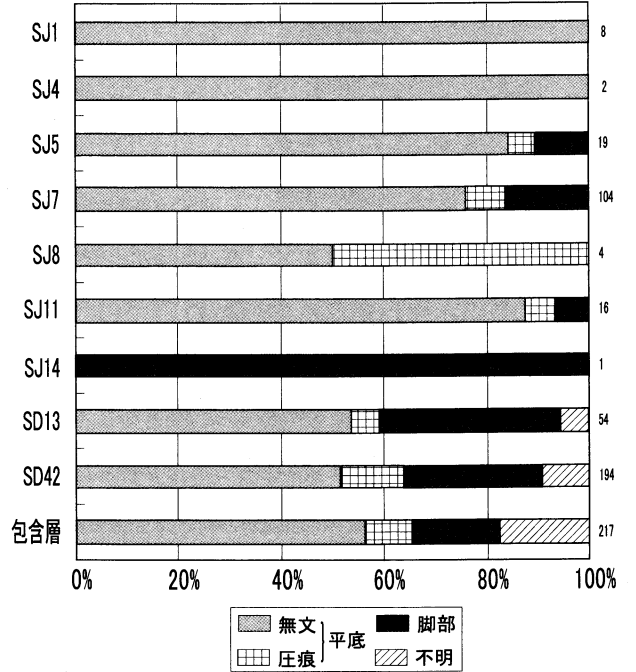
2. 各遺構の文様施文率 (文様施文破片/無文総破片 (壺含む))



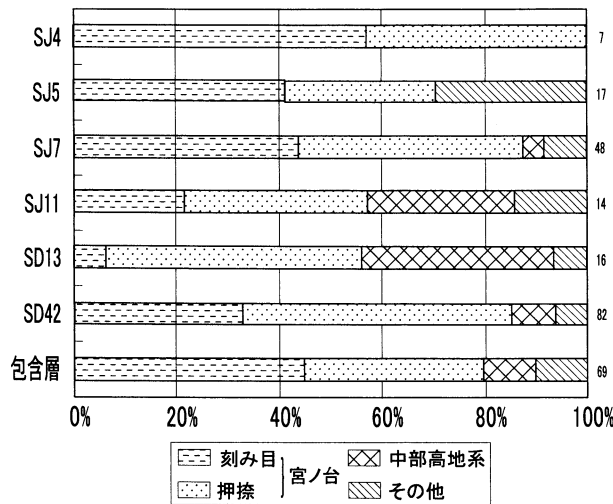
3. 各遺構の壺文様構成比



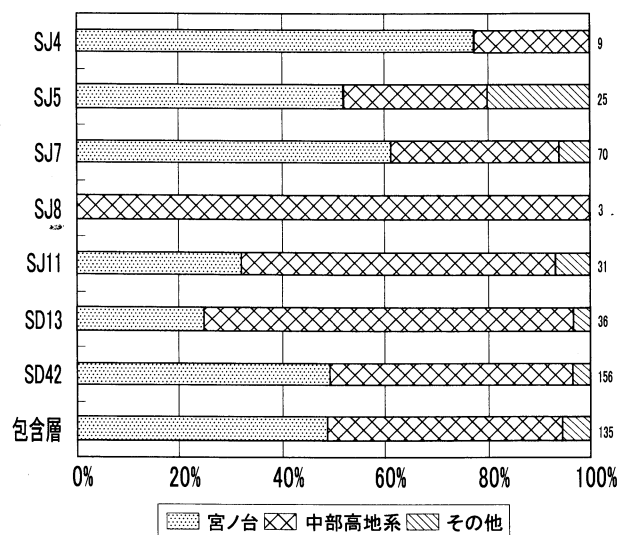
4. 各遺構の底部構成比



5. 各遺構の甕構成比 (口縁部のみ)



6. 各遺構の甕構成比 (全ての部位)



第168図 土器構成比

135図15・17・19・20・168・169)が、木曾免遺跡の主体で1本描沈線の例は非常に少ない。

無区画の帯縄文は、第4号住居跡(第29図5)、第42号溝跡(第135図22・23・25～27)にある。第42号溝跡27は、帯縄文間に山形文を加えている。

無区画の縄文帯の中には、羽状縄文を施文する土器が散見される。羽状縄文の一群は、第42号溝跡(第135図21・28)、包含層Y層(第158図143)、遺構外(第122図148～150)に確認できる。また、図示していないが、第11号住居跡・第13号溝跡から1、2点の小破片を確認している。なお、第42号溝跡28は、木曾免遺跡で唯一確認できた広口壺である。

概ね宮ノ台式の範疇に収まると思われるが、白岩式系統の文様がわずかに見られる。第1号住居跡(第21図39・40)、第42号溝跡(第142図177)がそれである。第21図39・40は同一個体で、1本描沈線による直線文で縦位に区画し、矢羽状に沈線を加えている。第142図177は横位の櫛描文上に、1本描沈線による短斜線文を連続させている。また、第135図12は東海系の影響と思われる口縁部片である。

甕形土器(宮ノ台式)

甕はそのほとんどが底部を欠損しており、平底か脚部を有するものかを特定することは叶わなかった。台付甕の脚部は全体で2～4割程度出土している(第168図4)。確実に台付甕とわかるものは、第137図59の1点のみである。台付甕を含めて、口縁部から胴部下半付近までの形態から8類に分類した。その中で口径に最大径があるもの(i～v類)と胴部に最大径があるもの(vi・vii類)に大きく分けた(第167図)。

i類は逆ハの字状に広がる胴部が、頸部で屈曲して口縁部が大きく外反するもの。ii類は直線的な胴部から頸部が屈曲して、口縁部が大きく外反するもの。iii類は胴部が丸味をもって大きく膨ら

み、頸部で湾曲して口縁部が外反するもの。iv類は胴部が逆ハの字状に開きつつわずかに膨らみ、頸部で緩く湾曲して口縁部が外反するもの。v類は胴部が逆ハの字状に広がり、そのまま口縁部に至るものである。vi類は胴部がわずかに膨らみ、そのまま口縁部に至り少し外反するもの。vii類は胴部が丸味をもって膨らみ、頸部で緩く湾曲して口縁部が直立気味になるものである。

i類は第42号溝跡(第137図57)のみ該当する。口唇部に刻み目を有し、外面調整はヘラナデである。ii類は小型の甕に見られる傾向がある(第137・138図55・58・63・64)。口唇部装飾は刻み目と押捺があり、外面はハケ調整のみ認められる。iii類は最も多く出土した。第42号溝跡(第137図52)のように、わずかに胴部径が口縁部径を上回るものも形態を重視してこの類型に含めた。口唇部には刻み目と押捺両者が存在し、外面はハケ調整される。iv類は第42号溝跡(第137図51)と第4号住居跡(第29図6・7)に認められる。口唇部装飾はすべて刻み目である。v類は第42号溝跡(第138図62)のみ当てはまるものである。vi類は第209号土壇(第100図1)が該当する。外面はハケ後ナデ調整を施す。vii類は、第42号溝跡(第138図61)があり、外面調整は摩滅が著しく不明瞭であるが、ヘラナデを施していると思われる。

続いて、各遺構に占める宮ノ台式と中部高地系甕の出土比率及び前者の刻み目・押捺の構成比について検討する(第169図5・6)。

甕の口縁部のみをグラフ5、甕の破片総数をグラフ6に示した。グラフ5は、宮ノ台式の口唇部加飾である刻み目と押捺、さらに中部高地系に分けて比率を掲載した。その他には、無文様の単純口縁や特異な形態のものを加えた。

このグラフの提示には2つの目的がある。1つ目は、甕における宮ノ台式と中部高地系の出土比を表し、2つ目は、グラフ5で宮ノ台式における甕の口唇部装飾の比率を示すことである。ただし、

各遺構共通して、出土数が少なく、一つの傾向を示すものと考えておきたい。

宮ノ台式と中部高地系の出土比は、基本的にグラフ5を用いて、それを補完する形でグラフ6を参考にする。中部高地系の甕には、口縁部・頸部・胴部に対して文様が施されているため、破片を観察した際、全部位に対して数量を数えることが可能であった。一方、宮ノ台式の甕は、口縁部のみに装飾が施されるため、調整しか施されない頸部、胴部は無文と判断し、甕として数えていない。グラフ5は純粋に両者の対比として扱えるが、グラフ6は中部高地系を多く含む傾向は否めない。

そこで、グラフ5を見ると、第4・5号住居跡には全く中部高地系の甕が認められないが、グラフ6では両者とも2割程度中部高地系で占められている。よって、第4・5号住居跡は宮ノ台式の甕が主体をなし、わずかに中部高地系が出土する程度と判断できる。また、第7号住居跡でも8割強の宮ノ台式を出土し、中部高地系は少量しか認められない。グラフ6では、第4・5号住居跡と同様の状況がうかがえる。なお、第5号住居跡のその他には、第30図24・25を含むために3割程度を占めた。24・25は、口縁部内外面に文様を施す破片であるが、類例を見出せなかった。

第11号住居跡と第13号溝跡では、宮ノ台式を6割弱、中部高地系を3割弱含んでおり、中部高地系の甕が他の遺構よりも多く出土している。グラフ6では、その傾向がより強く表れている。

第42号溝跡と包含層Y層では宮ノ台式の甕が8割を占めており、中部高地系は1割程度しか認められない。

全体をまとめると、宮ノ台式の甕が8割程度占める第4・5・7号住居跡、第42号溝跡、包含層Y層は、口唇部装飾である刻み目と押捺の割合がほぼ半々になっていることがわかる。一方、より多く中部高地系の甕を出土した第11号住居跡と第13号溝跡は、押捺施文の割合が大きい。

中部高地系の甕は、各遺構ともに同系の壺よりも出土比が高い。また、宮ノ台式甕の口唇部装飾である刻み目と押捺は、ほぼ同じ頻度で出土している。

壺形土器（異系統）

次に、中部高地系を中心に異系統の土器群を概観していくことにする。中部高地系以外には、妻沼低地の北島式系統（以下、妻沼低地系と呼ぶ）がある。なお、妻沼低地系に関しては、北島遺跡出土土器がその代表である（吉田2003a）。中部高地系は出土数が少ないため、文様構成を中心に述べていく。

まず注目したいのは第1号住居跡である。第1号住居跡出土土器は宮ノ台式がほとんど確認できない。中部高地系が大半を占めており、妻沼低地系と白岩式系統が若干混じる（第168図1）。中部高地系壺の出土比（第168図3）は、第13号溝跡と包含層Y層が約7～8%で高い。他遺構は4%を下回り、第4・8・14号住居跡からは出土していない。

第1号住居跡出土土器を中心に説明する。第168図1は第1号住居跡の文様構成比である。文様の大半を沈線手法によって施し、櫛描文を主体とする宮ノ台式とは大きく異なることがわかる。

口縁部は単口縁と受口状口縁が見られ、口唇部には縄文施文が通有である。受口状の外面には、1本描沈線による連弧文（第21図23、第158図106）、短斜線文（第21図24）を施している。また、第1号住居跡（第20図6）は、口縁部外面の下方から連弧文を施すものである。

頸部も同様に沈線文による文様が施文され、直線文間に山形文を施す例が多く見られる（第20図4・6、第30図23、第37図38、第64図19、第135図16）。第13号溝跡（第64図20）では、2本描沈線による波状文に近い山形文が施され、2段構成になる点も注意を引く。地文には縄文が施文される例が多い。

この山形文の下位や胴部上半には、直線文区画内に短斜線文を交互に描く文様帯がある。手法的には、3～5条の短斜線文を1単位として、単位ごとに傾きを変えながら交互に施文する。傾斜変換時には正逆位のV字状になる。第42号溝跡(第142図173)のように、V字状沈線が重なる例があるため、重山形文が崩れた形と思われる。また、この文様帯の上・下位には、連続刺突文を施すものが認められる(第64図19、第142図173)、包含層Y層には、連弧文を描くものがある(第158図154)。

この他、胴部の文様構成は、複合鋸歯文(第122図145図、第158図152)、縄文帯の連弧文(第158図153)、胴下半の重三角文(第20図8)、横位の直線文も多く見受けられる。第1号住居跡(第21図)に1点のみではあるが多段の横位櫛描直線文と押引き列点文の下位に連弧文状の文様を施すものがある。文様が胴下半まで達する点で古い様相を示す資料である。

以上は横位施文の文様であるが、縦位施文の破片資料は住居跡や環濠から8点出土しており、櫛描文や沈線文などで施文される(第21図25～27、第30図22、第37図39、第64図21、第142図196、第122図162)。

妻沼低地系土器は第1号住居跡と包含層Y層に存在する。第1号住居跡(第20図9・10)は胴部最大径まで文様が施されており、文様は縄文地に、2本描沈線による3条の横線文と山形文である。包含層Y層(第158図137)は、上向きの鋸歯文で縄文が充填されている。妻沼低地系の可能性がある土器として第5号住居跡(第30図17)が挙げられる。弱い突帯上に刺突文を施し、その上位に上向きの鋸歯文が描出されている。鋸歯文内は無文となるが、その脇には赤彩が施されており、おそらく口縁部から連続して塗布されていると思われる。

甕形土器(異系統)

異系統の甕は中部高地系のみが確認された。以下、壺と同様部位ごとに形態・文様をみていく。

口縁部は、外反口縁と受口状口縁が見られる。口唇部文様には指頭押捺(後述)や縄文、刺突文(第138図68・71、第159図165)がある。また、受口状口縁の外面には縄文施文、櫛描波状文(第159図166)や沈線による連弧文(第122図166、第143図190)・波状文(第122図165)・複合鋸歯文(第159図167)を施す。なかには、地文に縄文を用いるものがある。

頸部には櫛歯状工具による簾状文や刺突文、直線文が多く出土している。

胴部には櫛歯状工具による横・縦羽状文を施す例が多く見られる。また、1本描沈線によるコの字重ね文、縦位櫛描文で区画された横位波状文が5点ある(第64図37、第143図193、第159図170～172)。第64図37、第159図170・171は、櫛描波状文が先に施文されていた。

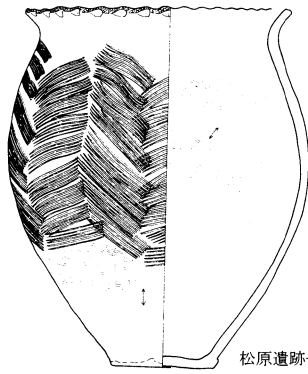
ここで、第1号住居跡第20図14～16と17、第21図18～22の横・縦羽状文の施文順序について検討する(第169図)。14～16と18～22は、それぞれ同一個体であるが接合しないため図上で合成した。14～16と18～22の口唇部には指頭押捺が加えられている。

第20図14～16の胴部は7～8本一単位の櫛歯状工具によって横羽状文を施す。施文順序は、始めに上段斜線文を右上から描き下ろして、時計回りに進んでいく。続いて、下段斜線文を右下から跳ね上げて、反時計回りに施文する。

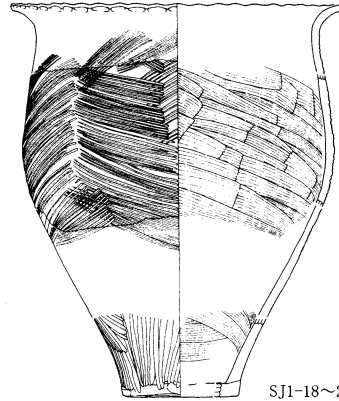
17の口唇部には、原体LR単節縄文が認められる。胴部には6本一単位の櫛歯状工具による横羽状文を施している。14～16と同様の施文順序であるが、上位斜線文が斜めというより縦方向になっている。

第21図18～22の胴部は6本一単位の櫛歯状工具で、縦羽状文を施文する。左下がりの斜線文は、

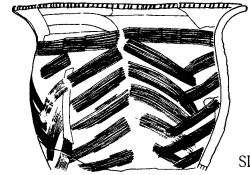
参考資料「右起点型」



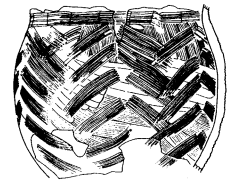
松原遺跡-1379



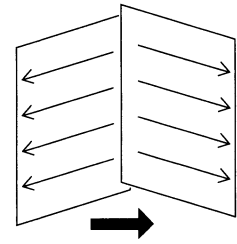
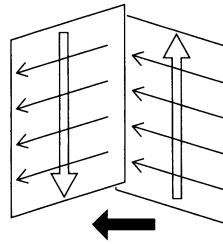
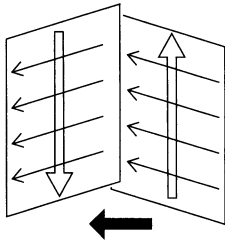
SJ1-18~21



SD42-68



SD42-69



第169図 中部高地系甕の施文方法

右上から描き下ろして施し、上から下に向かって重ねていく。そして、左上がりの斜線文は、右下から跳ね上げて描き、下から上に向かって重ねていることがわかる。残存部分の観察によるが、斜線文の縦位ブロックは、時計回りに施されている。

以上、第1号住居跡出土の中部高地系甕の文様施文について詳述したが、第42号溝跡でも良好な中部高地系甕が出土している(第138図67~71)。このうち、68・69は、施文方法がわかる縦羽状文である。施文方法については、IV章で触れた。簡単に説明すると、斜線文はすべて右・左上から描き下ろされているが、上下方向は間隔が空き過ぎているために不明である。施文の回転方向は、反時計回りであった(第169図)。

さて、中部高地系甕について観察した施文方法を、中部高地の栗林式土器と比較したい。長野市松原遺跡では、甕の文様の横位施文方向は、「右回りの施文原理」が基本であると結論づけている(青木2000)。

松原遺跡例によると、横羽状文の場合上位斜線が時計回りで下位が反時計回りという施文方法が最も高い頻度で見られるという。木曾免遺跡第1号住居跡の2例とも同様の施文方法をとっていた。縦羽状文では、斜線文を常に右側から描き始める「右起点型」が主体を占め、第1号住居跡例が中部高地系と同一の施文方法によっていたことが判明した。右斜め下方、左斜め下方へ描き分ける「中央起点型」という施文方法があり、第42号溝跡出土土器が類似するが、施文回転方向は一般的なものと逆である(第169図)。

つまり、第1号住居跡出土の中部高地系甕は中部高地の施文原理を忠実に守っており、器形も類似する。しかし、肉眼観察によって、胎土に白色針状物質が混入しており、在地の粘土を使用していることは明らかである。中部高地の製作技法で作られた模倣品と考えられる。

以上のことを踏まえると、中部高地型に近い第1号住居跡出土甕は、在地化した第42号溝跡

出土甕より古い段階に位置づけることができる。

その他の遺物

その他の器種について、高坏、鉢、有孔鉢、小型土器類があり、高坏については後述するが、その他のものは、第42号溝跡を中心にわずかに確認できる程度である。

高坏は第1・4・7・11号住居跡から1、2点出土した。また、第42号溝跡や包含層Y層(第139図78～83)を含めて20数点しかない。

土製品は、土製円盤や土製勾玉などが出土しており、特に注目すべきものは、第13号溝跡出土の台盤状土製品である(第65図42)。台盤状土製品とは、平底の甕を持ち上げるための支脚的役割をもつもので、台付甕出現に深く関連があることが指摘されている。これは、東海地方の弥生時代中期に見られて、台付甕出現の前段階に最も多く確認されている。また、関東地方では、神奈川県折本西原遺跡、加瀬台9号墳(註4)の2遺跡から発見されている(森1996)。

3. 集落の変遷および他遺跡との併行関係

本項では、過去の編年案と周辺遺跡を参考に、集落の変遷及び木曾免遺跡出土土器の編年的位置を考えていく。

宮ノ台式土器の編年案については、下末吉台地(安藤1990)、房総地域(黒沢1997・1998)、大宮台地芝川流域(柿沼2003)などの小地域において検討されてきた。また、安藤広道氏は南関東の4小地域をまとめて広域編年試案を掲げている(安藤1996)。木曾免遺跡が位置する荒川右岸地域では、松本完氏により木曾免遺跡に近在する附島遺跡と、東松山市代正寺遺跡出土土器の様相が検討されている(松本2003)。また、妻沼低地では熊谷市北島遺跡の土器変遷を基軸に、荒川右岸地域などと比較検討している(吉田2003b・2007)。

その中で黒沢浩氏や柿沼幹夫氏は、波状文や直線文などの一般的な櫛描文とは別に、櫛描文である擬似流水文・丁字文などを、「有東一宮ノ台型櫛

描文」と呼び分けて、時期区分における一つの指標とした(黒沢1997・柿沼2003)。ここでは擬似流水文と松本氏、柿沼氏の編年に準拠しながら検討を加える。

環濠集落の変遷

はじめに、環濠の掘削時期について検討する。低地部の環濠である第42号溝跡掘削以前から、包含層Y層の形成は始まっているが、程なくして8層中より第42号溝跡が掘削されていることが土層観察からわかっている(第147図)。包含層Y層では、数点確認できた第1号住居跡と類似する中部高地系や、妻沼低地系の破片類が出土している。つまり、第42号溝跡掘削以前の包含層Y層形成時に、第1号住居跡を含む集落が本調査区をはずれた隣接地で営まれた可能性がある。包含層Y層形成直後に、第42号溝跡が掘削されていることから、環濠内の住居構築と同時期に環濠が掘削されたと考えられる。

次に、遺構から住居跡の時期差を検討する。各住居相互の重複関係は第4・5号住居跡間にしか確認できないため、重複関係から順序を確定することはできない。また、住居跡出土土器にはあまり時期差が認められず、住居の新旧関係を特定することは難しい。しかし、以下の理由から、すべての住居跡が同時に存在したとは考えにくい。すなわち、2度建て替えがある第4・5号住居跡と第11号住居跡および環濠外にある方形周溝墓3基を考慮に入れると、集落が3、4小期にわたって営まれたと想定することが可能なのである。そこで、遺構間の関係性ととも、出土土器の相対的な時期を基にして、環濠集落の変遷を考えていく。

まず、第1号住居跡は前述の通り、第42号溝跡掘削以前の包含層Y層形成時には存在していたと考えた。中部高地系甕を主とする、中部高地系の土器群は他の土器群より古い傾向がある。また、柿沼編年によると、妻沼低地系の土器を含む一群

は宮ノ台式の前半期に位置づけられている(柿沼2003)。同住居跡に妻沼低地系の土器を含む点も古相に位置づける論拠となろうか。第1号住居跡は墓域と考えられる空間に構築されていることも、環濠内の住居跡より先んじて営まれたことの傍証となろう。

第4・5号住居跡、第11号住居跡では、2回の建て替えを行っており、第4a号住居跡、第11a号住居跡が環濠集落内では最も早く構築されていたことが予想される。しかし、この様相を出土土器からは証明しがたい状況である。

第7号住居跡では、擬似流水文の破片が1点(第37図33)出土しているのみで、他は櫛描波状文や直線文などの文様しか見られない。また、残存度の高い土器(第36図1~14)を観察すると、無文のものが多く出土している。また第168図2から文様施文率も低いことがわかる。さらに、住居跡の位置関係をみると他の住居群より外れたところに構築されており、何らかの「差」を感じさせる。以上のことから、総合的に判断し、第7号住居跡は環濠集落内では、最も新しい段階に所属するものと考えた。

その他の住居跡に関しては、相対的な時期差を見出すのも難しく推測の域をでない。

出土土器からでは明確な時期差を見出せないということは、短期間に住居を建て替えて、居住を繰り返していたと考えることもできる。3、4小期にわたる変遷の中では、1小期には3~4軒が同時存在していたと考えられる。時期差を捉えられた住居跡では、新しい段階に第5号住居跡、第7号住居跡、第11c号住居跡の大・中形住居が同時に営まれた可能性がある。第11号住居跡(大形)を中心にして、中・小の住居が中央に空地(広場)をもち、東西に分かれて集落が形成された景観が想像される。

出土土器の編年的位置

木曾免遺跡の出土土器を大きく分けることは難

しく、一括して出土土器の様相をまとめるが、第42号溝跡・包含層Y層には若干新しい様相のものも見られる。

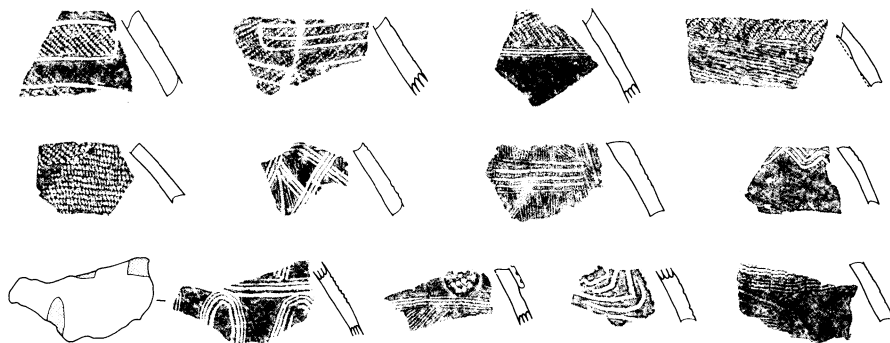
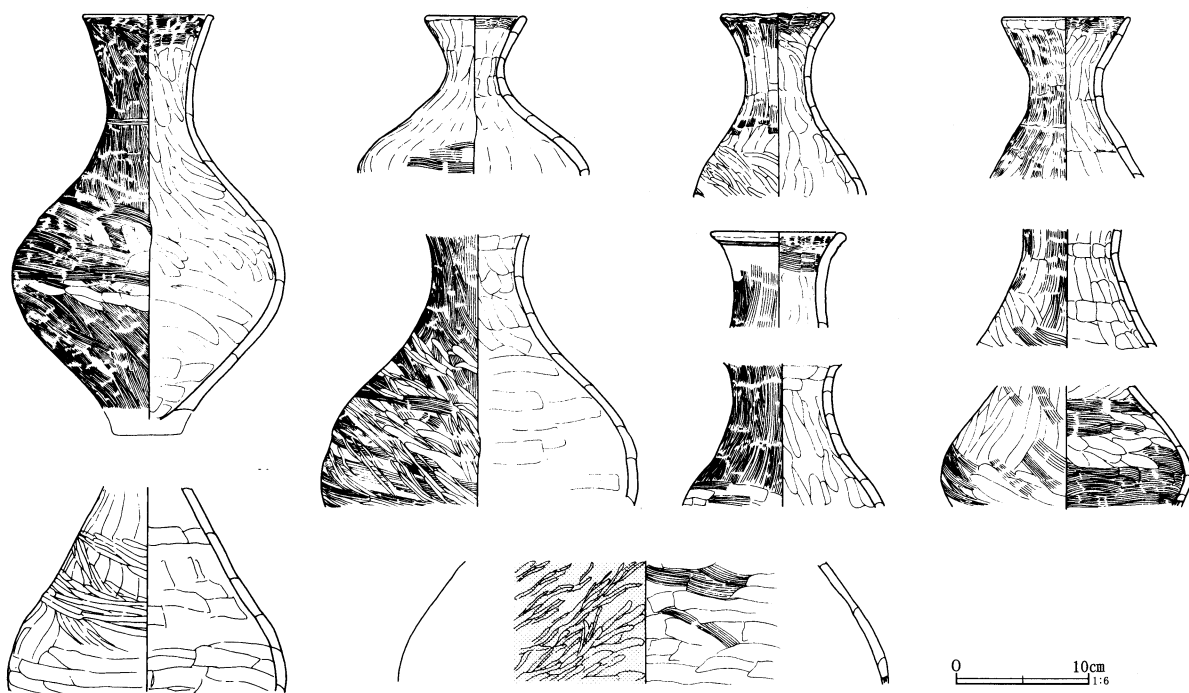
「有東一宮ノ台型櫛描文」と定義された擬似流水文が、各遺構から一定量確認できる。また、文様施文率が低いことから(第168図2)、無文化が進んでいることがうかがえる。その中で、住居跡出土土器では、縄文施文よりも櫛描文施文の方が卓越することが指摘できる(第168図3)。第42号溝跡(環濠)や包含層Y層には、多少の時期幅を想定することができ、各文様構成が匹敵している。第42号溝跡(環濠)では、文様帯が頸部下位から胴部上半に最も多く施されており、頸部に集約される土器は稀である。また、王子文や楕円文などの意匠文(第142図159~165)が見られ古い様相を示す一方で、新相を示す羽状縄文を施文した広口壺(第135図28)が出土している。

木曾免遺跡の様相を振り返ったところで、近在する遺跡と比較を行なう。最も近隣に位置する宮ノ台式の集落は、木曾免遺跡から約600m北側に所在する附島遺跡である。低地に囲まれた東西に長い島状の台地に立地しているが、集落の全容は不明である。

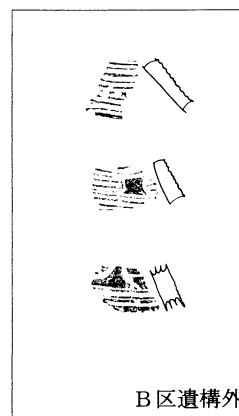
附島遺跡の第9号住居跡出土土器(第170図、加藤1985・1988)は、松本氏、吉田稔氏らが言及しているように(松本2003、吉田2007)、無文化が著しく進んでいると考えられる。しかし、各調査区の遺構外資料には擬似流水文を含む櫛描文、沈線文、縄文を施した土器片が多く認められ、中部高地系の土器も散見される。現時点では調査範囲が狭く、全体像が見えていないが、遺構外資料に伴う住居群が台地中央に存在する可能性がある。

さらに、松本氏が詳細な分析を行なった東松山市代正寺遺跡出土土器を取り上げる(松本2003)。中期後半1期とする土器群は、文様が頸部を中心とする部位に集中すると指摘されている。また、代正寺遺跡第79号住居跡出土の妻沼低地系の土

附島遺跡

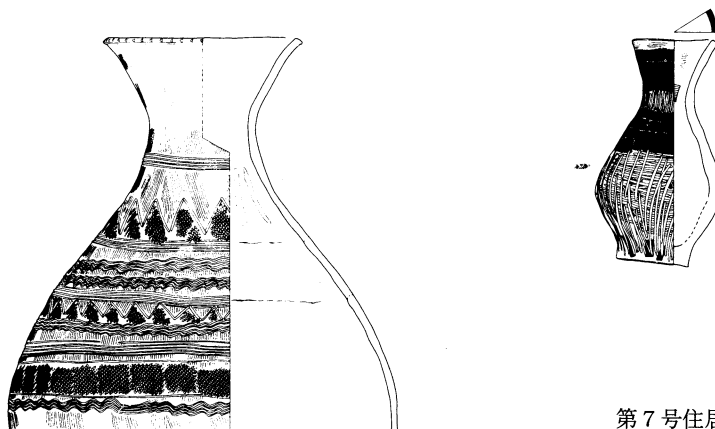


Y-9号住居跡



B区遺構外

代正寺遺跡



第7号住居跡

第170図 近隣遺跡の参考資料

器は、注目に値する（第170図、鈴木1991）。

両遺跡ともに文様の減少が特徴的であり、部分的ではあるが、木曾免遺跡の様相と一致している。しかしながら、木曾免遺跡では、擬似流水文が卓越していることを考えると、附島遺跡の第9号住居跡より古相を示す未検出の住居群と併行関係をもつことが想定できる。また、代正寺遺跡よりも、木曾免遺跡が若干先行すると思われるが、第79号住居跡とは同時期に位置づけることも可能であろう。木曾免遺跡出土土器は松本氏の中期後半1期より先行するものと考えておきたい。

さらに、柿沼編年との対応を考えると、I—3期相当、安藤編年SiIII期後半に位置づけられると考える。

木曾免遺跡は、この地域において、附島遺跡に比肩しうる、弥生時代中期後半の遺跡である。本調査では、木曾免遺跡における部分集落を発見したにすぎない。本調査区外南側に台地が広がっており、木曾免遺跡は南側へと続いている。坂戸市調査でも、方形周溝墓が台地南東端で検出されているため（第164図）、広大な台地中央には未知の集落が存在しているだろう。

本調査では、環濠集落の全貌をほぼ明らかにし、良好な資料群を提示してきた。その土器群を概観することで、環濠集落の変遷過程を検討し、編年の位置を定めたことでまとめとしたい。

最後に、当面の課題を述べて終わりにしたい。木曾免遺跡の土器群は、宮ノ台式を主体として、中部高地系や妻沼低地系といった土器群を含んでいた。また、宮ノ台式の中でも、東海地方の影響を色濃く残すものが、垣間見られることも木曾免遺跡の特徴である。しかし、筆者の力不足から東海方面にまで目を向けることができずに、類例を抽出する作業を怠った。さらに、中部高地系土器に関して十分な検討とは言えず、地域間交流を把握するために、中部高地も含めて妻沼低地や大宮台地と比較する必要があると考えている。また、

その他の特筆すべき遺物・遺構についても検討の余地を残してしまった。再び木曾免遺跡について考える機会をもつことを誓い、ひとまず稿を閉じたいと思う。

註

- 1 第4号住居跡は1回、第11号住居跡は2回、建て替えが行なわれている。
- 2 第164図の坂戸市調査区は、弥生時代中期後半の遺構を抽出したものである。なお、住居跡1軒と溝跡の正確な位置が不明なため、第164図には図示しなかった。
- 3 弥生時代中期後半の大形土壇の類例としては、東京都永田町二丁目遺跡のSK63が挙げられる（武笠2003）。平面形は一辺2.6mの隅丸正方形で、深さ2.4mである。土壇は短期間に、人為的な埋め戻しが繰り返され、その埋土中には動物の骨や人骨を含んでおり、最終的に一括廃棄された貝層で埋没している。その埋没過程の途中で、出土した小型壺4個体を埋置したとされている。その性格については、「儀礼行為を伴ったであろう廃棄過程」と述べ、祭祀的性格を示唆している。しかし、焼土化した壁をもたない点などで、木曾免遺跡の第217号土壇とは異なっていることは否めない。
- 加えて、西日本の高地性集落を中心に検出されている「焼土坑」が関連するものであろう。その性格的位置づけには、多くの議論がされているようで、のろし施設、野外炊飯の場、土器焼成窯など様々な意見が提出されている（森岡1986、前田1999）。
- 4 加瀬台9号墳の調査時、弥生時代の住居跡4軒と溝跡2条が発見されている。その第1号溝跡から台盤状土製品が出土している（浜田1997）。

4. 古墳時代

古墳時代の遺構は方形周溝墓2基、住居跡とした竪穴状遺構1軒(第12号住居跡)である。約20mの第4号方形周溝墓は、坂戸台地において最大規模を誇る。第4・5号方形周溝墓に伴う集落跡は、坂戸市教育委員会が調査した範囲(第164図)に、前期の竪穴住居跡が13軒検出されており(坂戸市教委1992)、本調査区南側に展開することが推定できる。

本稿にて第4号方形周溝墓出土土器の位置づけと土器配置の様相を検討し、まとめに代えたい。

1. 第4号方形周溝墓出土土器について(註1)

出土土器における最大の特徴は大形壺、中形壺、中・小形埴、器台の色調、胎土など「見た目」が非常に類似している点にある(第60図1～6・第61図7・8・10～13)。さらに、それぞれ器種間で同形同大のものを製作している。

大形壺は1個体認められ、吉ヶ谷系の折返口縁壺である(第60図1)。頸部はくの字状を呈し胴部上半の縄文が消失する。最大径がおおよそ胴部中盤に位置し、球胴形となる。

中形壺はすべて畿内系の二重口縁で、焼成前底部穿孔壺である(第60・61図2～8)。3～5は下膨れの、2・6～8は球胴形の胴部を呈する。また、口径・器高・胴部最大径が20cm前後でまとまる。柿沼幹夫氏が指摘する「焼成前底部穿孔壺特有の形態」を有しており(柿沼1996)、その類例としては春日部市権現山遺跡(横川1969)、深谷市東川端遺跡第1号方形周溝墓(中村1990)、坂戸市広面遺跡SZ9(村田1990)、本庄市生野山78号墳(菅谷・駒宮1973)などが挙げられる。ただし、2のみ若干小さく色調が異なる。

中形埴(第61図12・13)、小形埴(第61図10・11)は個々の調整手法は異なるが、それぞれ同形同大に製作される。すべて焼成前底部穿孔で、最大径は中盤辺りで扁平球形を呈する。

壺、埴、器台を含めて外面調整はハケ調整後、

部分的にヘラナデを施すのみで、ミガキ調整や赤彩は全く確認できず粗製土器といえようか。

その他の埴(第61図14～19)は扁平球形や球胴形になる胴部をもち、丁寧にミガキ調整を加えるため、対比して精製土器といえる。

その粗製土器に対して底部穿孔が行なわれ、一方、精製土器に対しては全く穿孔されていない。底部穿孔する土器としない土器とを作り分けていたと考える。さらに「見た目」が似る土器群はすべて底部穿孔壺であり、周溝墓専用として同時期に製作したと考えられる。

編年的位置づけを柿沼編年荒川中流域右岸(柿沼1996)に基づいて検討する。吉ヶ谷系壺、畿内系の二重口縁壺、埴などの形態とともに、球胴形を呈する壺(第61図9)や、くの字状口縁をもち長胴傾向のある甕(第61図26)から判断して、柿沼編年のV期古段階後半(柿沼1996)に相当すると考える。なお、V期中段階に比定される広面遺跡SZ12・21・22の二重口縁壺が、長胴化が進んでいると思われ、第4号方形周溝墓出土土器を前段階に位置づけた。

2. 土器配置について

土器は出土状況より方台部から転落したと考えられる。土器配置は墳丘裾か墳丘上で行なわれたと推定される。

ほとんどの土器が溝底近くから出土し、非常に完形率が高い。出土土器は各周溝から確認できるが、とくに北側で出土量が多く、壺・埴が列をなして検出されたことから北側を意識していたことが明確に分かる(第171図)。また、東・西溝にも焼成前底部穿孔壺を含む土器群が出土しており、低地側に向けて周囲に威厳を示すかのように、土器を配置していたことがうかがえる。

東・西側では底部穿孔壺とともに、焼成後底部穿孔の吉ヶ谷系壺や精製の埴が確認できる。特筆すべき北側は東西に2個体の底部穿孔壺を置

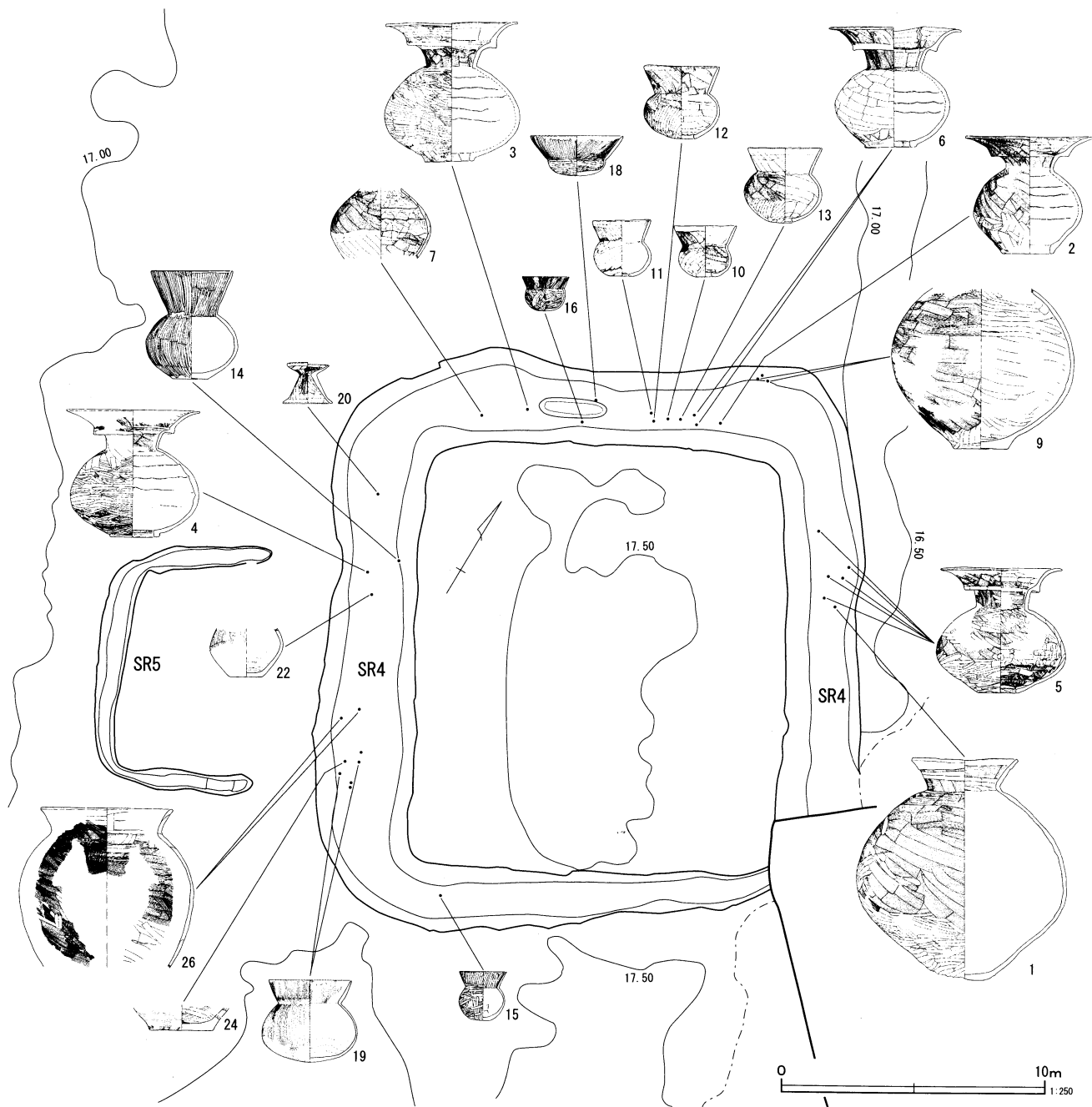
き、その間に粗製・精製の中・小形埴を配置する。

第4号方形周溝墓の土器配置は、ある一方向(北側)に集中的に並べて配する方法をとり、畿内系の二重口縁壺が伴う。木曾免遺跡より前段階の類例ではあるが、東松山市下道添遺跡2・13号墓(坂野1993)、広面遺跡SZ9がある。また東川端遺跡第1号方形周溝墓は単口縁壺だけであるが、南溝に一列に並んで出土している。先述の「焼成前底部穿孔壺特有の形態」の類例と変わらず、該期の様相として指摘できるだろうか。

以上、木曾免遺跡の出土土器と土器配置について検討した。第12号住居跡について、第4号方形周溝墓と関連させて性格的位置づけができる遺構と考えられるが今回は検討しえなかった。第4号方形周溝墓の検討も十分とは言えず、あわせて今後の課題としておきたい。

註

- 1 壺形土器などの「形土器」は、省略して記述を進める。また遺構名については各報告書、文献の記載に従う。



第171図 第4号方形周溝墓の土器配置

5. 古代

古代の遺構は竪穴住居跡が2軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、水田跡とそれに伴う第226号土壌がある。遺物の時期については後に詳述するように概ね9世紀中頃～後半を中心とし、集落（住居跡と掘立柱建物跡、井戸跡）と水田がほぼ同時期に位置づけることが可能である。調査区の制約から集落の全容は不明であるが、出土土器の様相からみる限りほぼ単一時期で、時間的な広がりには乏しい点も特徴といえる。遺構相互の建て替えや重複が認められないこともそうした想定を支持する材料ともなろう。それはともあれ、集落とその経済的なバックボーンともなる生産域（水田）がセットで発見されたという意味でも大きな成果である。本稿では、出土土器の年代観を基に遺構変遷を明らかにする。水田下の祭祀土壌のあり方と、おそらく県内初見となる明瞭な階段を掘り込んだ井戸跡に関して若干の検討、最後に集落の性格について触れてまとめに代えたい。

1. 出土遺物について

集落構成を復元するために、各遺構の所属時期の検討は不可欠の作業である。ここではまず出土土器様相を整理し、既往の編年観と対比しながら編年的な位置づけを確認しておきたい。該期の土器編年、なかんずく須恵器の分析に主眼を置いた編年研究は酒井清治氏（酒井1987他）・鳩山窯跡群の報告をまとめた渡辺 一氏（渡辺1990a・1990b他）によって精力的に進められてきた。特に南比企窯跡群産須恵器は南関東を中心に広域に供給されており、渡辺氏によるいわゆる「鳩山編年」は大きな影響を与えてきたところである。

木曾免遺跡出土の須恵器を肉眼観察によって産地同定すると、南比企窯跡群が主体的に供給され、東金子窯跡群産須恵器が若干混在することが確認された。平安時代における東金子産須恵器、特に坏類の変遷は南比企産須恵器と同一歩調で変化する（渡辺1990b）ことから、南比企窯跡群産須恵

器を中心に相互比較を行ないたい。対象は第2号住居跡・第6号住居跡・第226号土壌・第1号井戸跡出土の主に坏類となる。第172・173図に関連資料と法量分布図を掲載した。

第173図1-1、1-2には木曾免遺跡出土坏の法量分布を示した。第2号住居跡坏の法量は口径11.5～12.7cm、底径5.7～7.8cm、器高3.5～4.2cmの範囲に収まる。平均口径12.2cm、平均底径6.5cm、平均器高3.9cm、口底指数（底径／口径×100）53.4、底高指数（器高／底径×100）61.4を示す。

第6号住居跡の坏は1点のみであるが、口径12.2cm、底径5.7cm、器高4.0cmである。口底指数46.7、底高指数70.2を示す。

第226号土壌出土の坏は口径11.2～12.6cm、底径5.3～6.2cm、器高3.6～4.6cmに分布する。平均口径11.9cm、平均底径5.8cm、平均器高3.9cm、口底指数50.4、底高指数66.2を示す。

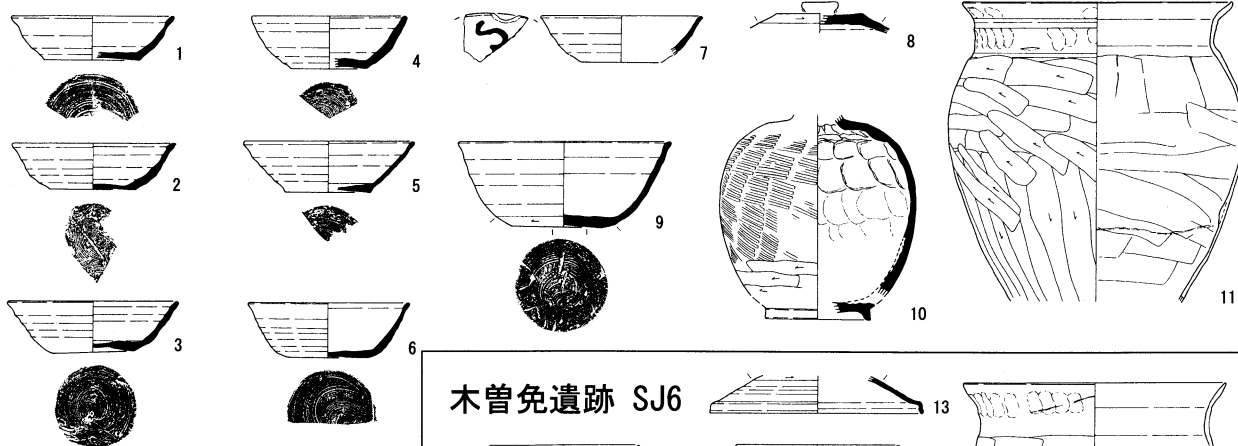
底部調整はいずれも回転糸切り後無調整であり、大きな時期差は存在しないことは一見して明らかである。口底指数は第2号住居跡53.4→第226号土壌50.4→第6号住居跡46.7となり、この順に口径に対する底径が縮小傾向にある点を確認できる。

一方、底高指数の分析からは、第2号住居跡61.4→第226号土壌66.2→第6号住居跡70.2の順に数値が高くなる。換言すれば深身の器形に推移することがわかる。

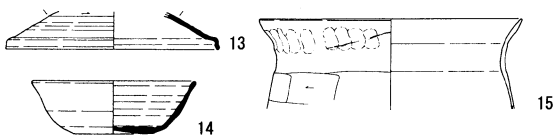
該期の土器編年においては、口径に対する底径の縮小化と、浅身から深身の器形変化がメルクマールに設定されており（酒井・渡辺前掲書など）、口底指数・底高指数の変化からみると第2号住居跡→第226号土壌→第6号住居跡の順に新しい様相が観取される。

次に鳩山窯跡群出土資料と比較すると、まず、第2号住居跡からはやや浅身の（扁平な）坏が3点（第172図1～3）、やや深身の坏が3点（第172

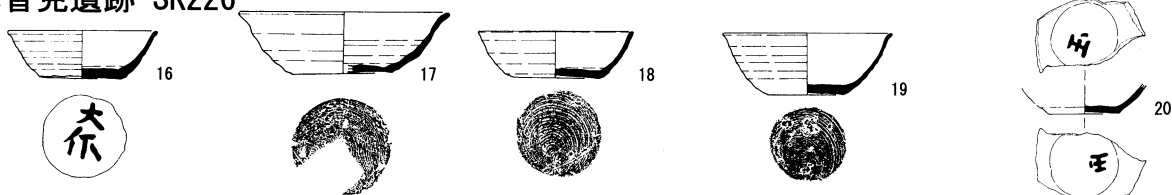
木曾免遺跡 SJ2



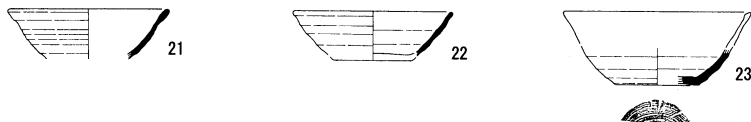
木曾免遺跡 SJ6



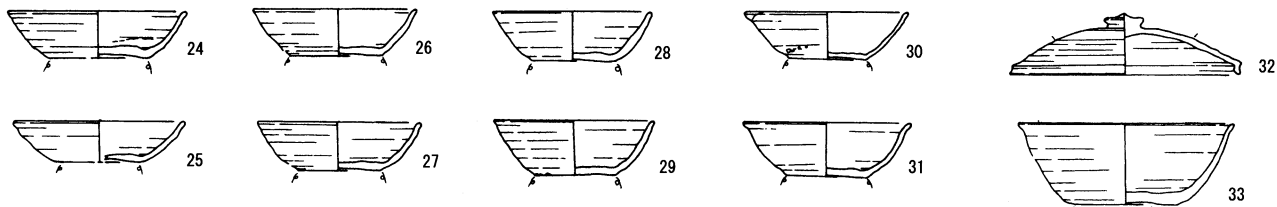
木曾免遺跡 SK226



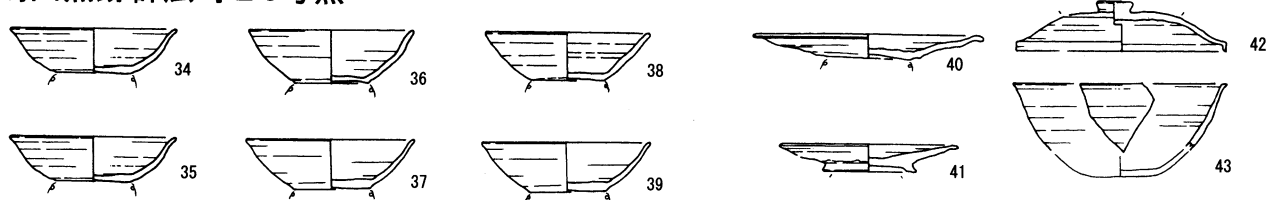
木曾免遺跡 SE1



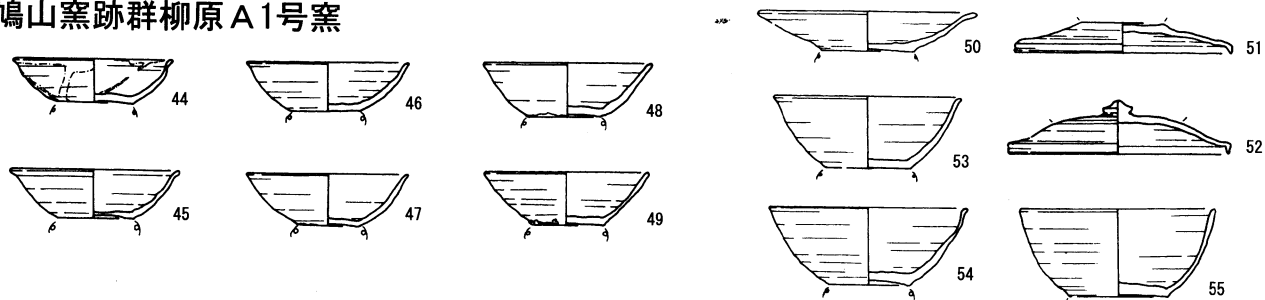
鳩山窯跡群広町B6A号窯



鳩山窯跡群広町B5号窯



鳩山窯跡群柳原A1号窯



第172図 古代の出土土器と参考資料

図4～6)、無台碗と蓋がある。坏は底部回転糸切り後無調整、碗は底部及び体部下端に再調整を施す。鳩山窯跡群では広町B 6 A号窯が参考になる。HB 6 A号窯では扁平な坏(第172図24～26)とやや深身の坏(28～31)があり、無台碗(33)には底部再調整が施される点で類似した様相を呈している。口径底径分布と底径器高分布を比較しても概ね分布域が重なる(第173図2-1、2-2)。因みに口底指数は51.0、底高指数は58.4を示し、木曾免遺跡第2号住居跡の口底指数53.4、底高指数61.4と類似することが分かる。

第6号住居跡の坏(第172図14)は深身で底径が5.7cmと縮小していることから、第2号住居跡出土坏よりも新出の様相ともいえるが、資料数が少ないこと、伴出する土師器武蔵型甕の口縁部形態は類似することから時期差を抽出することは難しいかもしれない。

第226号土壌は東金子産が1点混じる(第172図16)他は南比企産で占められる。坏は口径11.2～12.2cmの一群(16～18)と、口径12.6cmと一回り大きく、無台碗をスケールダウンしたような深碗(身)タイプが1点存在する(19)。前者の坏は、やや扁平な器形で口縁の外反がないもの(18)は鳩山窯跡群広町B 6 A号窯に類例がある(第172図26～28など)。体部中位に膨らみをもち、口縁部が外反する第172図17は木曾免遺跡では第2号住居跡(第172図2)、鳩山窯跡群広町B 6 A号窯(第172図31)、広町B 5号窯(第172図34・35)に類例が存在する。深碗タイプ(19)の類例は拾えず、明確な位置づけは難しい。

法量分布から検討すると深碗タイプを除いた口底指数は52.4、底高指数60.2となる。広町B 6 A号窯はそれぞれ51.0、58.8、広町B 5号窯は47.3、63.5で、底部の縮小化と深身の進行度は平均数値から判断すると広町B 5号窯までは達しておらず、概ね広町B 6 A号窯段階と考えられる。ただし、器形的には類似し、法量分布域においても当

然重なる部分があるため、広町B 6 A号窯段階から広町B 5号窯にかかる時期と捉えておきたい。

第1号井戸跡は器形全体の判明する資料がないため不明確であるが、坏口縁部が肥厚する(第172図21)、体部が直線的に伸びる(22)、無台碗は底部に再調整はなく、底径が縮小する(23)などの特徴が見られる。23の無台碗は鳩山窯跡群柳原A 1号窯の中に良く似た例が存在する(第172図54)。坏口縁の肥厚、体部直線化も広町B 5号窯から柳原A 1号窯段階で顕在化する特徴である。従って、第1号井戸跡は広町B 5号窯から柳原A 1号窯(渡辺編年HVIII期)に存続時期の一端があると推定される。

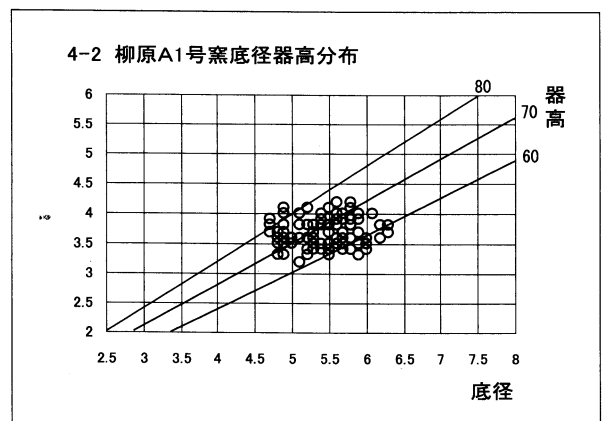
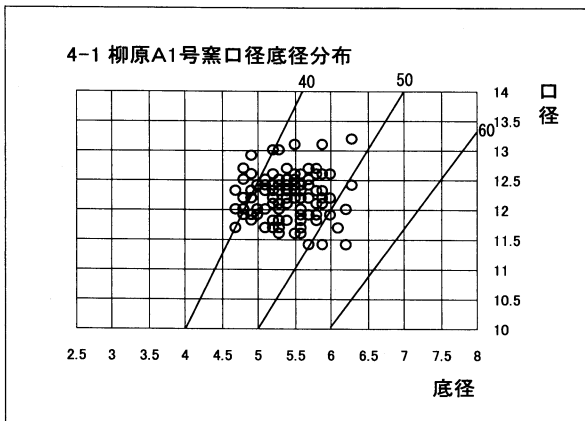
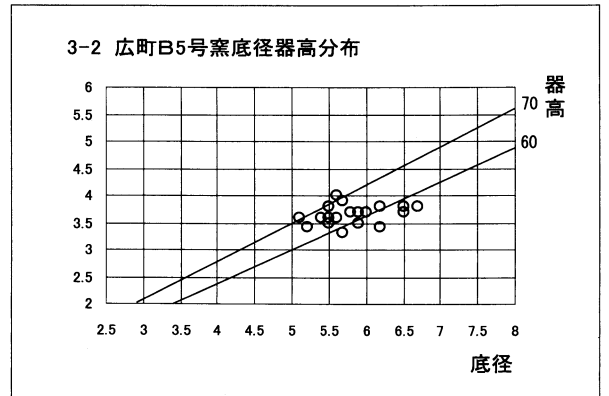
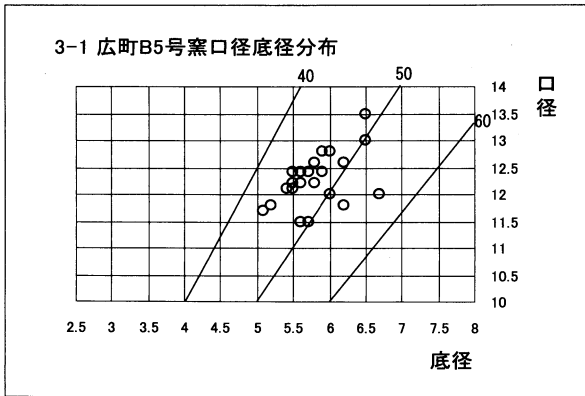
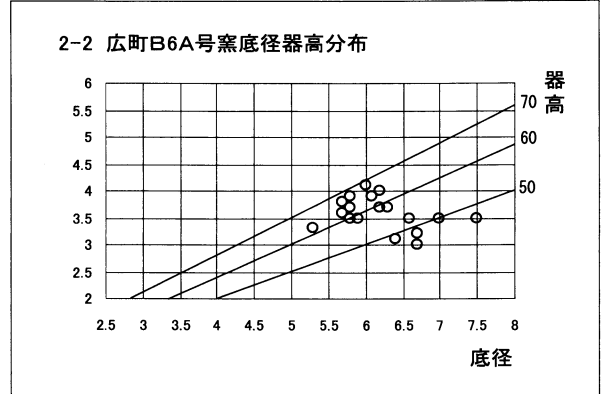
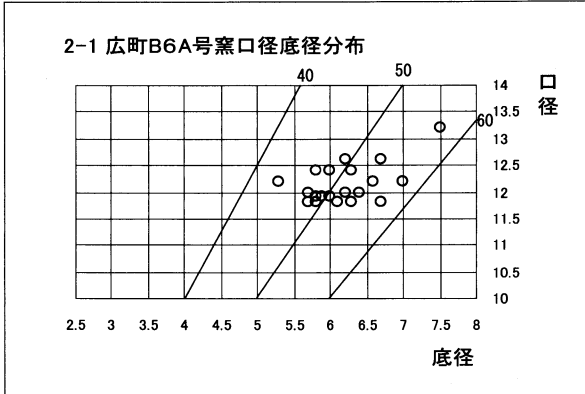
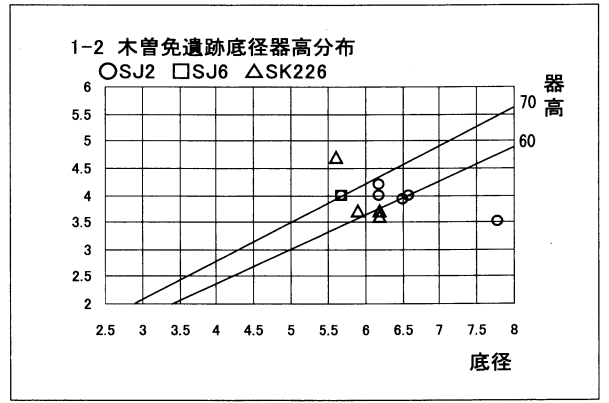
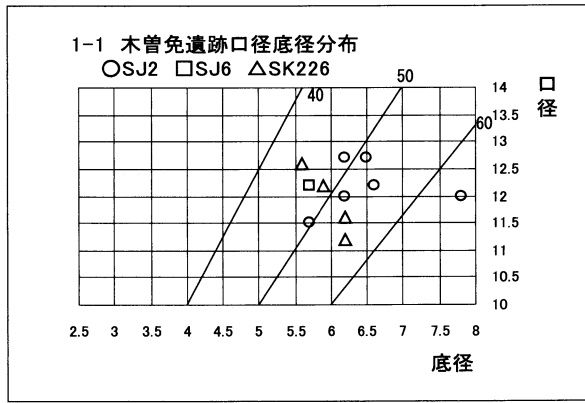
第2号掘立柱建物跡からは須恵器坏の底部小片(第112図1)が出土したのみで時期は推定の域を出ないが、概ね住居跡と井戸跡に併行する時期と考えられる。

渡辺編年HVII期は武蔵国分寺再建期を含むとされ、9世紀第2四半期～第3四半期、広町B 5号窯・柳原A 1号窯は同VIII期(9世紀第3四半期～第4四半期)に位置づけられている。

木曾免遺跡の古代の遺構変遷をまとめると、第2・6号住居跡がHVII期、第2号掘立柱建物跡と第226号土壌がHVII期～HVIII期、第1号井戸跡がHVIII期に存続期間の一端が含まれることになる。第1号井戸跡に関してはおそらく第2・6号住居跡使用時には存在したと考えるのが妥当であろう。また、第226号土壌が水田開発に伴う祭祀跡と考えれば、水田開発の時期は2軒の住居跡使用時に併行するか、わずかに遅れる段階と思われる。

2. 集落構成について

具体的な古代集落の景観は明らかにはできないが、竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟、それに井戸跡が伴う。各遺構は6m～14mほどの間隔を置いて配置されており、住居跡と掘立柱建物跡の軸は概ね揃っている。遺構配置から第6号住居跡と第2号掘立柱建物跡、第2号住居跡の2群に分



第173図 須恵器の法量分布図



第174図 古代の遺構

けて考えることができ、共用の第1号井戸跡が付属するという構造が想定される。集落の広がり是不明とせざるを得ないが、井戸跡に降りる階段状施設が西側に向いていることから類推すれば、集落本体は調査区の西側に更に展開していた可能性は十分に想定されよう。ただし、遺構相互の重複

や建て替えの痕跡は見られないこと、出土遺物の時期が概ね9世紀中頃から後半段階にまとまることから、長く見積もっても2世代程度の存続期間と予想され、長期に亘って集落が維持された可能性は低いと考えている。遺構は調査区の南西部にまとまり、崖線までの間には20m～50m幅の無遺

構地帯（空閑地）が広がっている（第174図）。崖線下には水田が営まれたことが判明しており、この空閑地には畑地あるいは屋敷林といった土地利用が想定できようか。

3. 第226号土壌をめぐる

第226号土壌は古代の水田土壌直下から掘り込まれたことが調査の結果判明している。土壌内からは須恵器坏が5個体検出された。内2点には墨書があり、他の場所で割った破片をまとめて埋納したような状況が観察され、調査所見によっても田地造成に関わる祭祀遺構という可能性が想定されている。

類例としては、大阪府池島・万福寺遺跡からは条里水田下から多数の「土器埋納遺構」が検出されている。土器埋納遺構は7世紀中葉～13世紀代にかけてのもので、多くは土壌に埋納されているという。大半は土師器または須恵器の坏類完形品を1点正位の状態で底面に埋納するというが、奈良時代のものには非完形の複数個体を埋納する例も確認されている。性格としては水田開発に伴う地鎮め祭祀が想定されている（江浦1996）。また、大阪府長原遺跡からも同様な土器埋納遺構が発見されており（桜井1993）、江浦氏は池島・万福寺遺跡と同様な地鎮め遺構と捉えている。深澤敦仁氏は群馬県内の古墳時代（5～6世紀）における水田祭祀跡を検討する中で、石製模造品等の祭祀具が畦畔の中から出土する場合と水田面から出土する場合があると述べている（深澤1999）が、水田面下に掘り込まれた「土器埋納土壌」の存在には触れられていない。また、律令期の水田祭祀に関しては不明である。

県内においては良好な例を抽出できないが、本庄市（旧児玉町）児玉条里遺跡では、条里型地割の坪交点から溝内から完形の土師器坏が2枚重なった状態で出土し、条里水田施工期を示す資料とされている（鈴木他1991）。「溝」内ではあるが、故意に据え置かれたことは疑いなく、類似した土

器埋納行為と見做すこともできよう。

東松山市には「高坂条里」の存在が指摘されているが、高坂条里想定地内に位置する反町遺跡では、旧河川脇の自然堤防上（非集落域→水田域の可能性もある）に掘り込まれたピットから平安時代（9世紀）の須恵器坏完形品が正位の状態で出土している（註1）。同様な土器埋納遺構の一例となる可能性を想定する必要がある。

さて、木曾免遺跡第226号土壌例に関して、江浦氏と同様な解釈を採れば、水田開発に関わる祭祀が想定される。墨書土器の意味や祭祀形態は不明であるが、遺物の時期的な検討により、台地上の集落と水田開発は9世紀中頃から後半にかけてさほどのタイムラグを想定しなくとも良いことが判明した。すなわち、集落そのものが水田開発に直接関わったと考えたほうが自然であろう。

調査段階で水田土壌に鉄分やマンガン斑の形成が認められないことから、耕作期間が短かったと想定されているが、台地上の集落が直接水田開発に関与した集落であれば、集落の存続期間が短期間で終息することと連動する現象といえる。水田開発には、用排水路の整備、水利権の調整、田地そのものの開墾等、在地首長層と集落構成員を含めた様々な共同労働が不可欠である。敢えて推測を重ねれば、新たな墾田確保を試行したものの、何らかの要因で短期間のうちに荒地化したのではなかったか。

4. 階段状施設を有する井戸跡について

木曾免遺跡から発見された第1号井戸跡には直径約1mの井筒の西側に長さ3.7mの階段状施設が付設されていた。平面形は階段を含めると長楕円形で、長軸長は5.31m、短軸長は2.07mである。階段は8段確認され、高さ0.04m～0.19mの段差をもつ。井筒部に取り付く段差は0.55mと高い。

底面は湧水のため人力掘削を断念したが、重機による掘削を実施したところ約3.5mの深さがあることが判明した。したがって階段の最下段から

井筒底面までは約1.75mあることになる。おそらくある程度の高さまで嵩上げした井戸枠が設置され、人が階段を井筒中段まで下りて使用したと考えられる。

律令期においては素掘りの井戸跡が主流で、昇降施設を有する木曾免遺跡のような井戸跡は少数例に属する。

富元久美子氏は川越市八幡前・若宮遺跡から検出された所謂マイマイズ型式の第1号井戸跡を報告するなかで、①素掘りの井戸ではなく、大規模な掘削工事を行なう②井筒中段まで人が降りることのできる装置を持つ点に注目した。このタイプの井戸に対し「降り井戸」という名称を与え類例の集成と性格の検討を行なった(富元2005)。富元氏によれば、有段の「降り井戸」は「武蔵国府において7世紀末～8世紀初頭段階の国府成立段階に集中して構築された巨大かつ企画の整った井戸」で、I類…明確な方形平場に1段降りる形態、II類…隅丸方形或いは円形に近いプランで、井筒の周囲をスロープ・ステップ等で順々に廻り降りる形態(所謂“マイマイズ”)の2種あることを指摘した。さらに、大型降り井戸の性格に関して「武蔵国府からの影響を受けた形態で、交通路に因んだ遺跡に存在する」と結論付けた。八幡前・若宮遺跡は「駅長」の墨書土器等の出土から東山道武蔵路の駅家との説が有力であることから、井戸跡は駅家付属の「公的な井戸」と判断された。

木曾免遺跡例は外部から井筒に連なる直線的な階段状施設(ステップ)が特徴で、井筒周囲の方形平場は存在しない。これらの要素は富元分類にそのまま当て嵌めることはできない。明確な平場を持たない「降り井戸」という意味ではII類に近いが、「直線的な階段」という要素はII類に該当しない。当面方形平場の存在は等閑に付して、井戸跡中断に下りる階段状施設を有する井戸跡として一括りにして検討することとしたい。

直線的な階段状施設を付設する例としては、

1. 東京都北区御殿前遺跡SE001(田中1988)
2. 東京都府中市武蔵国府関連遺跡第301次M39—SE1(荒井他2003)
3. 東京都調布市下石原遺跡4次SE02(生田1988)
4. 神奈川県平塚市中原上宿遺跡IV区SE01・VII区SE01(小島他1981)
5. 神奈川県平塚市構之内遺跡第3地点3号井戸址(大野2000)
6. 埼玉県鶴ヶ島市若葉台遺跡E地点1号井筒(玉利他1983)

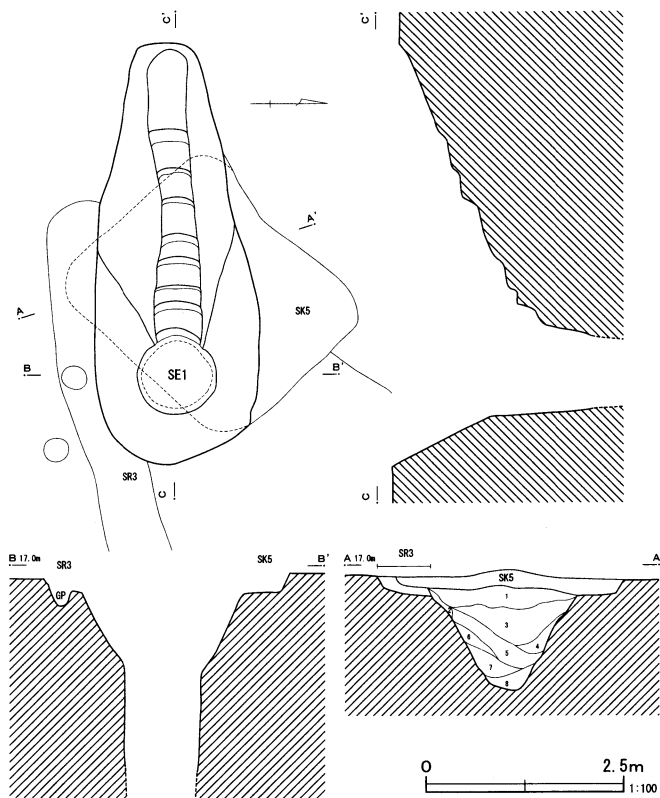
の6遺跡7例を抽出できた(註2)。御殿前遺跡例(第175図2)は直線的な階段状施設を有し木曾免遺跡例に類似するが、井筒周囲の平場をつくる点で異なる。時期的には8世紀後半～9世紀後半とされている。いうまでもなく、御殿前遺跡は武蔵国豊島郡家に比定され、豊島駅家も併設された可能性が指摘されている。

府中市武蔵国府関連遺跡M39—SE1(第175図4)は一辺約6.5mの大型井戸で、南東側から平場に降りる階段状施設が設置されている。遺物は8世紀初頭から9世紀後半までのものが含まれ、「8世紀の早い段階に埋め始められ、平場近くまではそれほど時間をおかず埋められた」と理解されている。武蔵国府成立段階の井戸跡と考えられ、階段状施設を有する井戸跡としても最古段階に属するであろう。

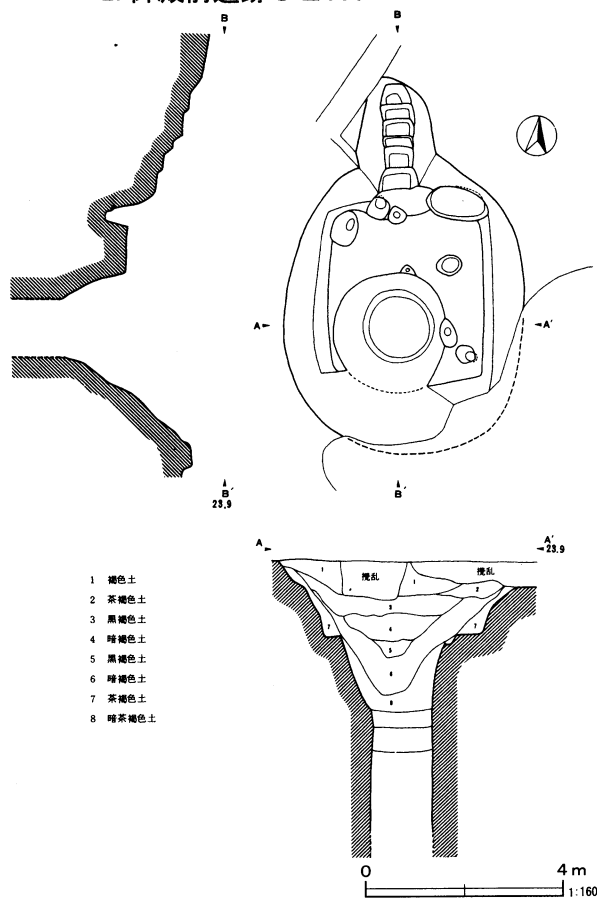
調布市下石原遺跡SE02は一辺6.20mの方形掘り方で中段に平場を持つ。隅から平場に降りる階段状施設が付設されている。出土遺物から9世紀中葉には廃絶したとされている。平場を持つ点で木曾免遺跡例とはやや異なる。

平塚市中原上宿遺跡IV区SE01は掘り方最大径11.10mの大型井戸である。直線的な階段が2本直接井筒に取り付くタイプで、木曾免遺跡例に最も近い形態ということができよう(第175図3)。階段状施設は東側から降りるものが、長さ6.55

1. 木曾免遺跡第1号井戸跡

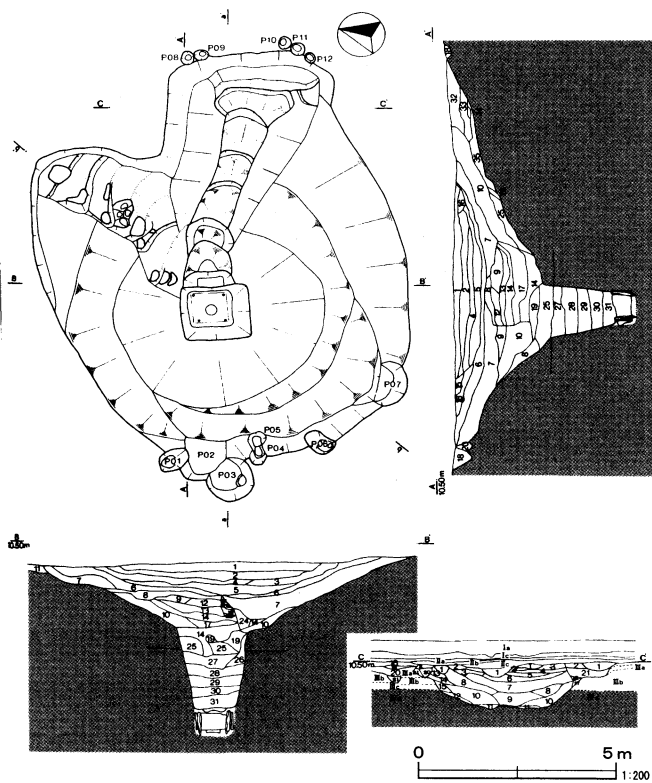


2. 御殿前遺跡 S E 001

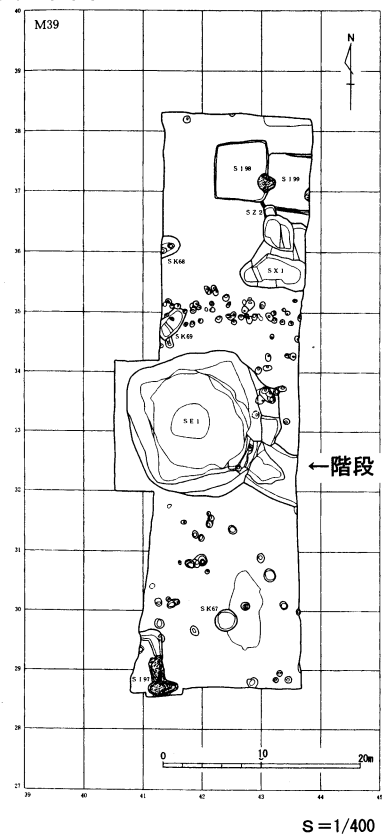


- 1 褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 茶褐色土
- 8 暗茶褐色土

3. 中原上宿遺跡 IV区 S E 01 (一部改変)



4. 武蔵国府関連301次



第175図 階段付き井戸跡の類例

m、8段、北側から降りるものが長さ5.50m、9段敷設されていた。平場は存在しない。2本の階段状施設は同時に存在したものではなく作り替えた可能性もあろうか。時期的には8世紀末から9世紀初頭に構築され、9世紀中葉に廃棄された。VII区SE01は10.4×6.3mの楕円形大型井戸跡で、長軸方向の一端に硬化面を伴う階段が付く。調査区外にもものびることが予想されているが、図上で6段が確認できる。IV区のそれと同様平場は存在しない。時期的には9世紀後半以降と考えられる。中原上宿遺跡は相模国府域周辺に位置する集落である。

平塚市構之内遺跡は上記中原上宿遺跡に隣接する。相模国府域を貫く官道に面して大型井戸跡が検出された。一辺7.3×7.6mの隅丸方形の掘り方をもつ。中段に方形平場が付くが、階段は井筒に直接取り付くように掘り込まれる。井筒は1.0~1.1mの方形で井戸側が設けられていた。時期は10世紀後半頃とされている。因みに壁面際の掘り方から「王」の焼印が出土している。

鶴ヶ島市若葉台遺跡E地点1号井筒は「マイマイ型井筒」と報告されている。4.20×3.60mの卵形の平面プランで、図上でみると、2乃至3段の階段状施設を持つようにも見えるが、不確実である。時期は9世紀中葉頃と推定される。因みに先述の構之内遺跡からは「王」の焼印が出土しているが、本井戸跡からは「王」の焼印を押印した木製木皿が検出された。

まだ類例の検索が十分でない中で結論めいたことはいえないが、今のところ階段状施設を伴う井戸は武蔵国府例から8世紀初頭段階には出現するようである。しかし8世紀後半以降の検出例がほとんどで、確実なところでは9世紀以降一般化するように見える。

平場を伴わず、井筒に直接取り付く木曾免遺跡例や中原上宿例と御殿前遺跡例のように平場を持つタイプとの相違が何に起因するのか、まだはっ

きりしない。I類あるいはII類から派生する形で出現するのか、別系譜で存在するのか時期及び系譜的な検討は今後委ねるべき点が多い。また、富元氏は大型の降り井戸と交通路との強い相関性を論じている(富元前掲書)。非常に興味深い説であり、ここで取り上げた平塚市構之内遺跡は道路(官道)に面して位置している。武蔵国府関連遺跡は勿論、中原上宿遺跡・構之内遺跡は官衙に関連する遺跡であるし、若葉台遺跡も高麗郡家説(宮瀧2002)、豪族居宅説(渡辺2006a)があるように地域の拠点的な遺跡であることは疑いない。但し、翻って木曾免遺跡自体は東山道武蔵路の推定ルートから東に外れるうえ、井戸跡の使用時期は東海道への所属替以降になる。また、官衙に関連する機能を想定するのも無理がある。伝路その他の道路を想定するのか、周辺遺跡の様相と地理的条件を含めて更に検討する必要がある。

5. 集落の性格について

最後に古代集落の性格に関して若干触れておきたい。坂戸台地の律令期集落は、台地内陸部に進出した若葉台遺跡群と台地を開析した小河川や谷部沿いに営まれた中小遺跡群の大きく2者が存在する。若葉台遺跡に関しては古くから官衙(入間郡家・高麗郡家)説、豪族居宅説がある有力集落である。他の遺跡群の多くは比較的開発しやすい狭小な谷部や河川沿いに開発した水田経営を経済的背景として成立している。「三世一身法」や「墾田永世私財法」を契機とした新たな新田開発が行なわれ、続日本紀宝亀8年(777)条には「武蔵国入間郡人大伴部直赤男、以神護景雲三年、献西大寺商布一千五百段、稻七万四千束、墾田卅町、林六十町、至是其身已亡、追贈外従五位下」とあり、在地豪族大伴部直赤男が西大寺に商布や墾田などを献じたことが記されている。建久二年(1191)の西大寺文書(西大寺所領荘園注文案)によれば、「武蔵国入間郡安堵郷栗生村 田四十町 林六十町」とある。坂戸市北西部には「栗生田」という

地名が残ることから、金井塚良一氏はこの地域を大伴部直氏の本拠地と考えている（金井塚他1985）。渡辺氏も若葉台遺跡を大伴部直氏の居宅集落と考え、南比企窯跡群の経営と交易を手中に収め、越辺川流域を主要支配地域としたと考えた（渡辺2006b）。

木曾免遺跡は坂戸台地突端に位置すること、眼前の沖積低地の一角に形成された水田跡及び祭祀土壌の存在は、広大な荒川低地の新田開発に乗り出した集落であることを明確に示している。新田開発、特に広大な荒川低地を対象とするには用排水系統の整備や、水利権の調整、大規模な共同労役が必要で、一集落のみでないうるものではないだろう。大伴部直赤男の記事よりも時期的に更に

降ることになり、大伴部直氏の主導によるものか、新興富豪層によるものかはわからないが、いずれにせよ在地豪族が関与して新たな墾田確保を意図した集落という位置づけができる。但し、調査結果によれば集落の継続期間が50年にも満たず、新田開発は順調に進展したとは必ずしもいえない。その具体相を知るうえでも周辺地域における遺跡動向の検討が欠かせない。今後の課題としておきたい。

註

- 1 当事業団で調査を実施し、現在整理報告書作業実施中である。来年度刊行の報告書に掲載予定。
- 2 階段を敷設する井戸跡の類例の検索、性格に関して富元久美子氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

- 青木一男 2000『松原遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内 その3—（財）長野市埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式の細分（上・下）—遺跡群研究のためのタイムスケールの整理—」『古代文化』第42巻第6・7号
- 安藤広道 1996「南関東地方（中期後半・後期）」『YAY！（やいっ！）』弥生土器を語る会20回到達記念論文集
- 天ヶ嶋 岳 2003『川越城跡（第11次調査）』川越市遺跡調査会発掘調査報告書第27集
- 荒井健治他 2003「7.レジデンスオーク地区（301次調査）」『武蔵国府の調査—昭和61年度府中市内発掘調査概報24—』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 生田周治 1988「調布市下石原遺跡で発見された古代の井戸跡について」『東京考古』6 東京考古談話会
- 大野 悟 2000『構之内遺跡発掘調査報告書—三共株式会社平塚工場建設に伴う発掘調査II—』平塚市遺跡調査会
- 石井 寛 1980「第9章 調査の成果と課題」『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』第99・100号
- 石川日出志 2007「弥生時代中期後半の関東地方西部域」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 石川日出志・伊丹 徹・黒沢 浩・小倉淳一編 2005『南関東の弥生土器』考古学リーダー5 六一書房
- 岩井重雄・小倉 均 1980『大間木内谷・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第13集
- 井上尚明 1986『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 井上尚明 1994『光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
- 江浦 洋 1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
- 岡田威夫・水澤裕子 1988『折本西原遺跡—I—』折本西原遺跡調査団
- 小野塚恵子 1982『神谷原II』八王子市栲田遺跡調査会
- 柿沼幹夫 1996『方形周溝墓』出土の土器 北関東①埼玉『関東の方形周溝墓』同成社
- 柿沼幹夫 2003「芝川流域の宮ノ台式土器」『埼玉考古』第38号弥生特集号
- 加藤恭朗 1985『附島遺跡』I 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1987a『古代のさかど』坂戸市遺跡発掘調査概報I

- 加藤恭朗 1987b『古代のさかど』坂戸市遺跡発掘調査概報II
- 加藤恭朗 1987c『附島遺跡』II 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1988『附島遺跡』III 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1999『景台遺跡』II 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 1997『景台遺跡』III 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 2001『柊遺跡』I(第1分冊) 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 2002『柊遺跡』I(第2分冊) 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 2005『若葉台遺跡』VI 坂戸市教育委員会
- 金井塚良一他 1985『東松山の歴史』上巻 東松山市
- 加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の様式と編年—東海編—』木耳社
- 亀田直美・青木美千子 2004『戸宮前／在家／宮廻』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第297集
- 北島シンポ準備委員会編 2003『北島式土器とその時代—弥生時代の新展開—』埼玉考古学会
- 木戸春夫 2005『宮西遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第310集
- 黒坂禎二 1998『富士見一丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第189集
- 黒坂禎二 2005『宮西遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第310集
- 黒坂禎二 2008『牛原／御新田／番匠・下道／横沼新田／北谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第353集
- 黒坂禎二・宅間清公 2007「埼玉県木曾免遺跡と御新田遺跡」『月刊考古学ジャーナル』No553 ニューサイエンス社
- 黒沢 浩 1997「房総宮ノ台式土器考—房総における宮ノ台式土器の枠組み—」『史館』第29号
- 黒沢 浩 1998「続・房総宮ノ台式土器考—房総最古の宮ノ台式土器—」『史館』第30号
- 劔持和夫 1990「荒川流域における中期後半の弥生集落」『埼玉考古』第27号
- 劔持和夫 1991「関東地方の環濠集落(覚書)」『埼玉考古学論集』設立10周年記念論文集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小島弘義他 1981『中原上宿』平塚海岸・伊勢原線新設工事に伴う発掘調査報告書
- 埼玉県 1987『新編埼玉県史 通史編1』
- 埼玉弥生土器観会編 2007『埼玉の弥生時代』六一書房
- 斉藤祐司 1984『谷久保遺跡』入間市埋蔵文化財調査報告第4集
- 酒井清治 1987「第2節 埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館
- 坂戸市遺跡発掘調査団編 1989『若葉台遺跡』I
- 坂戸市教育委員会 1978『坂戸市史』原始古代編
- 坂戸市教育委員会 1988『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第I集』
- 坂戸市教育委員会 1990『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第II集』
- 坂戸市教育委員会 1992『坂戸市史』古代史料編
- 坂戸市教育委員会 2003「木曾免遺跡4区・5区」『埋文さかど年報(平成13年度)』
- 坂戸市教育委員会 2004「木曾免遺跡4区」『埋文さかど年報(平成14年度)』
- 桜井久之 1993「長原遺跡の土器埋納遺構—飛鳥～平安時代—」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告VI』(財)大阪市文化財協会
- 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会編 1985『大崎台遺跡発掘調査報告』I
- 笹森紀己子 1992「稲作文化の到来—大宮台地における弥生時代中期後半の様相—」『大宮市立博物館研究紀要』第4号
- 新宿区内藤町遺跡調査会編 1992『東京都新宿区内藤町—放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』第II分冊<遺物編>
- 菅谷浩之・駒宮史朗 1973「児玉町美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会』埼玉考古学会
- 菅谷浩之他 1991『万吉下原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第18集
- 杉崎茂樹 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集

- 鈴木孝之 1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集
- 鈴木徳雄他 1991『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第15集
- 武笠多恵子 2003『永田町二丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第139集
- 宅間清公 2006「坂戸市木曾免遺跡の調査」『第39回遺跡発掘調査報告会』埼玉考古学会
- 田中一郎 1973『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告第18集
- 田中一郎 1976『上谷遺跡』坂戸市教育委員会・東坂戸団地遺跡調査団
- 田中英司 1995『横田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第163集
- 田中弘幸 1988『御殿前遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第4集 東京都北区教育委員会
- 玉利秀雄他 1983『若葉台遺跡群C～I 地点発掘調査報告書』鶴ヶ島町教育委員会
- 富元久美子 2005『八幡前・若宮遺跡(第1次調査)』川越市遺跡調査会調査報告書第31集
- 坪田弘子 2003『羽根尾貝塚』玉川文化財研究所
- 永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 永井宏幸 2004「内傾口縁土器から厚口鉢へ～伊勢湾沿岸域から持ち運ばれた容器～」『考古学フォーラム16』
- 中村倉司 1990『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
- 西井幸雄 1995『柳戸／新山／向山／青棚／光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第154集
- 西井幸雄 2008『牛原／御新田／番匠・下道／横沼新田／北谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第353集
- 浜田晋介 1997『加瀬台古墳群の研究II—加瀬台9号墳の発掘調査報告書—』川崎市民ミュージアム
- 坂野和信 1993『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
- 昼間孝志 1991『塚の越遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第101集
- 深澤敦仁 1999「水田祭祀跡に関する覚書」『同志社大学考古学シリーズVII 考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 福田 聖 2000『方形周溝墓の再発見』同成社
- 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本における古墳時代の開始—」『駿台史学』第104号
- 古屋紀之 2007『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
- 前田義人 1999「北部九州における高地性集落—研究の現状と課題—」『古代文化』第51巻第7号
- 松本 完 1988「折本西原遺跡の弥生集落—第I次調査の成果と問題点—」『折本西原遺跡—I—』折本西原遺跡調査団
- 松本 完 2003「後期弥生土器形成過程の—様相—埼玉県中央・北西部の事例から—」『埼玉考古』第38号弥生特集号
- 松本美佐子 2007『馬場裏遺跡III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第341集
- 宮瀧交二 2002「埼玉県における郡家研究の現状と課題」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会シンポジウム
- 村田健二 1990『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集
- 森 泰通 1996「台盤状土製品から台付甕へ—その変化と背景—」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- 森岡秀人 1986「高地性集落」『弥生時代の研究』第7巻 弥生集落
- 村端和樹 2007『戸宮前II／在家II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第342集
- 吉田 稔 2003a『北島遺跡VI』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団第286集
- 吉田 稔 2003b「北島式の提唱」『北島式土器とその時代—弥生時代の新展開—』埼玉考古学会
- 吉田 稔 2007「中期中葉から後半の土器」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 柳川靖彦他 1976『草山遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告11
- 山岸良二編 1996『関東の方形周溝墓』同成社
- 横川好富 1969「庄和町権現山遺跡」『埼玉考古』第7号
- 渡辺 一 1990a『鳩山窯跡群II』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990b「南比企窯跡群の須恵器の年代 ～鳩山窯跡の年代を中心に～」『埼玉考古』第27号
- 渡辺 一 2006a「須恵器の流通をめぐる諸問題—生産地の立場から—」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会
- 渡辺 一 2006b「生産地から見た須恵器流通の諸問題」『埼玉の考古学II』埼玉考古学会